厨川白村全集第五卷

戀愛觀及雜纂

改造社版



晩年の著者

第五巻　目次

近代の戀愛觀

「まことの戀愛は、社會の自由に於てのみ可能だ。そして自由は、戀愛が實在であるときにのみ可能である。性的關係が法的因襲に服從することは、堪ふべからざる束縛ではあるが、しかしまた、人々が單なる性慾の奴隷である間は、それは逃れる事の出來ない束縛である。法的因襲と性慾とは、事實上お互に對衡をなしてゐる。だから戀愛が眞に實在となり、性慾を御してその有力な奉仕者となすまでに至れば、法の不合理は終を告げるであらう。」

――エドワアド・カアペンタア『戀愛の成熟期』一四八頁――

卷頭に

昨年の秋、新聞紙上に公にしました『近代の戀愛觀』と、之に對する世の批評に答ふべく、さらに數月ののち起草した『再び戀愛を說く』、『三たび戀愛に就いて言ふ』の二篇に加ふるに最近わたくしが此題目に聯關して書いた他の數篇の文をも集めて此一卷としました。言ふまでもなく此拙い小著は、私の自己表現の一つではありますが、上梓するに就いては私も充分に考へました。卽ちわづかなりとも世道人心を益し、新生活の建設に何等かの貢獻をなし得る確信あるが故に、わたくしは此書を世に公にするのです。

京都岡崎の書樓に於て

大正十一年十月

著者

『近代の戀愛觀』目次

近代の戀愛觀

一 "Love is best"

よろづにいみじくとも、色好まざらむ男は、いとさうざうしく、玉のさかづきそこなき心地ぞすべき。

――兼好法師『徒然草』――

夏のゆふべ、羅馬の郊外カンパニャの大野のはて。

蒼然たる暮色に包まれた野も丘も、すべては靜かで寂しかつた。羊の群は、なかば夢心地で牧草を食みながら、寢舍(ねや)をさして辿つて行く。おもへばこれが羅馬大帝國の都城のあとだ。そのむかし堂々たる王者が三軍を叱咤し生殺與奪の權を握つて世界を睥睨した頃の王城の地ではないか。いまは一樹の誇るべきなく、草のみが生ひ茂つてゐる。

皇帝オオガスタスの大業、そんなものが何だ、天に聳える圓屋根(キユウポラ)を頂いた大理石造の王宮、そんなものが今何處に在る。蔓草荒蓁を踏みわけて、旅の人は今わづかにその礎の跡を見るに過ぎない。

ただ一つ、むかうに小さな塔が殘つてゐる。八重葎の蔽へるに任せた此ささやかな櫓のあと、それは昔王侯が嬖臣寵妃をあつめて、戰車競走(チャリオットレイス)をながめた宏大な演技場(スティディアム)の跡でもあらうか。

その塔のなかに身を潜め、こよひ男との逢瀨を待ちわびる金髪白面の少女がある。男の來るを今や遲しと胸轟かしながら、息をこらし目を見張つて佇んでゐる。戀人が來れば、つと步み寄つて二人は忽ち無言にして相抱くであらう。

黃金の戰車(チャリオット)、百萬の大軍、今は影をも留めて居ない、殘れるものは僅かに此廢墟ではないか。しかし男と女との戀、そこには今も昔も變りない永遠性があり恆久性がある。千歲を隔てて猶滅びざるものは兩性の戀だ。幾世紀間の馬鹿騷ぎ無駄骨折り、その勝利をも光榮をも黃金をも、すべてを皆葬り去れ。戀のみが至上である(Love is best)。

『廢墟の戀』と云ふ美しい歌に、詩聖ブラウニングはかう歌つた。その歌のこころを、バアン・ジョオンズがまた畫にもかいた。

人類發達の史上、空前にしてまた絕後ともいふべき莊麗な羅馬文明のあとは、今わづかに廢墟となつて行人の步を止むるに過ぎない。しかも人間の燃ゆるが如き情熱と感激と憧憬と欲望との白熱化した結晶とも見るべき戀愛には、悠久永遠の生命の力がこもる。トロイのヘレンの昔からして、こよひ盆踊のはてた夜半(よは)、鎭守の森かげに戀を囁く村乙女に至るまで、東西古今を通じて男女の性愛には永

久不滅の力が動いてゐる。靈と肉との最も强烈な欲求が、ここにのみは長へに美しい詩として長へに花咲いてゐる。市場の有價證券、領土擴張騷ぎ、私有財産の爭奪戰、博徒の繩張あらそひ見たやうな國際競爭、賄賂收賄の法律裁判、脫稅を目當ての社會奉仕の財團、すべてそんなものが何になる、千年にして百年にして、否な僅か十年にして皆悉く廢墟ではないか。墳墓ではないか。世の利巧の愚物よ、俗漢よ。いゝしごととか事業とか政權とか利益とかがそれほどまでに有難いか。すべてが葬り去られて、草葉のかげに廢墟といふ墓標を殘す悲しき日を思へ。

『永久の都城（イタアナル・シティ）』は羅馬ではなく、戀である。荒れ果てた古塔のかげに男を待つ女の日にのみは、靈性の永遠不滅の光が輝く。罪深き穢れた吾等の生活が淨められ高められ償はれて、無限悠久の生命を得るのは女性の愛によつてだ。ゲエテは『ファウスト』の末章に『久遠の女性われらを導く（ダス・エエギヒ・ヴイブリツヘ）』と歌ひ、ダンテの『神曲』に於てはベアトリイチェこそ救の女神であつた。かういふ中世風のロマンティシズムを、更に派手やかに近代に花咲かせたワグネルの樂劇では、『タンホイザア』のエリイザベトや『デア・フリイゲンデ・ホレンデル』のゼンタにも現はれてゐる。最も現實的なイブセンに於てさへ、『ヘエア・ギント』の最後の一節に此思想がほのめかされて居るのも面白い。もとよりかういふ舊いロマンティシズムは、幻滅時代に入つてストリンドベルヒの極端な女性憎惡（ミソジニイ）や、バアナアド・ショオの痛罵などによつて、一たびは破壞し去られたとはいへ、それが更に現實化せられ人間化（ヒユウマナイズ）せられて、今日

の文化と生活との根柢を流れてゐる事だけは、否定すべからざる事實だ。

二　日本人の戀愛觀

戀愛讃美、女性讃仰はおろか、女を『人』として考へる事さへ知らないで、自ら國粹を説き文化を口にし、五大國民の一などと獨りよがりで自惚れる人種がある。此人種は不思議にも男女關係を常に僻み根性で見る事のみに慣らされてゐる。何でもない男と女とが、ちよつと立ち話をして居ても、忽ち猜疑のまなこを光らす。況んや兩性の戀愛關係と見れば、それを愚弄したり嘲弄したり、面白半分にからかつたり、それでもまだ氣が濟まなければ、今度は戀愛を罪惡視し、背徳亂倫呼ばはりまでしようといふ恐ろしい人たちである。

記紀萬葉の如き古代の文献に徴しても、また平安朝の文學に現はれた所を考へて見ても、日本人は本來もつと自由に、もつと解放的に、もつと正しく兩性關係を見る事の出來た聰明な人種であつたのだ。それが、鎌倉時代ごろからの戰國殺伐と氣分と、儒佛の外來思想とを捏ねまぜて出來た武士道といふものに誤られ、人が『人』としての生活の最も重要な部分である兩性關係に對して、奇怪至極な偏見と僻み根性を抱くに至つたのだ。徳川時代までは、例の男女七歳にして何とかせずの流儀で、當時の識者であり知識階級であつた漢學者たちの兩性觀と云ふものは、如何にも馬鹿々々しいものであ

つた。しかし因襲の久しき既に七八百年に及んで、この偏見迷妄より來れる惡風潮は、明治大正の新時代に入つても、他の多くの舊思想と同じく、依然として邦人の腦裡にこびり附いて離れない。先づ日清戰爭ごろまでは、內亂と外戰とで、すべてが幼稚な亂脈時代にあつたのだから、これは問題外とする。吾々の生活が漸く新路を拓かうとするに至つた明治三十年頃からのロマンティシズム時代には、靑春の戀を歌ふ詩人を星菫黨などと云つて冷かしたものだ。更に四十年前後からは世人は自然主義といふ文字を變に曲解して、また再びすべての性的關係を侮蔑した。次いでは享樂主義の文字　勝手放題な異樣の意味を寓し、最近には性慾と戀愛と、みそとくそとをごつちやにして、また新しい愚弄を始めようとした。つまり手を變へ品をかへて頑强固陋な舊思想の迷妄を繰返してゐるに過ぎない。

然らば、かくまで性的關係を蔑視せる日本人は、その性的生活に於て淸教徒（ピユウリタン）のごとく潔癖なりやといふに、それは言ふまでもなく正反對だ。今も昔も、女でなければ夜の明けぬ國である。田舍に行くと、全村一人の處女なしといふ村落も珍らしくないさうだ。またこの厄介な現象に煩はされて、今なほ靑年男女の共學（コエヂユケイシヨン）が行はれないといふ國だ。嘗て明治時代の文敎の要路に立つてゐた男が、ある時その友人の藝者買ひを責めた。それに對して、其友人が『然らば貴公が下婢の袖を引くのはどうしたものだ』とやつたので、明治の大敎育家は一言も無かつたといふ。これなぞが舊式な四角八面の道

學屋の好標本であつた。

一面に於て性的關係を甚だしく擯斥し侮蔑しながら、他の半面に於て男女の風紀が他の文明國に類ひなき程に亂れてゐるのは、武士道の如き舊道德のうちには、戀愛の貴さに對する正當なる理解が全然缺如してゐたからだ。兩性關係を單に生殖作用だと考へたり、性慾の遊戲だと見たりする固陋の謬見に基づくのだ。動物よりも進化した人間生活に於ては、兩性關係は簡單なる性慾作用よりも、更に進轉し昇華（サブリメイ）して、既に至高の道德となり信念となり藝術となつてゐることに氣附かないからだ。『人』としての生活の中樞に横たはる至高至大の力であることをも考ふるに至らないからだ。

近ごろ日本で頻りに性的生活に對する著述や飜譯が行はれるのを、わたくしは必ずしも惡い事だとは思はない。しかし單に性慾學の知識のみが普及されて、戀愛といふ人格關係の全的意義が明らかにせられないならば、それによつて古來日本人の有する偏見迷妄が一層甚だしくなりはしないかを憂ふるのである。西洋には昔から戀愛の心理を論究して、その靈肉兩方面に於ける種々相を闡明しようと試みた書物は甚だ多い。かの小說に批評に暢達流麗の筆を揮うて、世を驚かし、テエヌやゾラやニイチェの如き近代の文豪をして讃嘆措く能はざらしめた前世紀の才人スタンダアル（即ちアンリ・ベイル）には、『戀愛論』の名著がある。又歷史家ではあるが、詩才縱横の情熱家ジュウル・ミシュレエの筆に成る『戀愛篇（ラムウル）』も、此種の書中最も廣く世に行はれたものだ。若し夫れ文學者や歷史家の書いた

ものでは承知が出來ないといふ人があるならば、去つて伊太利の病理學者パオロ・マンテガツザの名著『戀愛の生理』（フイジオロジ・オヴ・ラヴ）を繙け。そこには極めて系統的な科學者らしい心理論を讀むことが出來るだらう。また戀愛と人體美との關係を詳說し、歷史的に戀愛の諸相を敍述したものには、ヘンリ・フインクの著『浪漫的戀愛と人體美』（ロマンテイク・ラヴ・アンド・パアスナル・ビユウテイ）や、エドガァ・サルタスの『戀愛史』（ヒストリア・アモリス）などがある。今なほ戀愛を劣情だと見てゐるやうな偏見から脫けられない人たちに、わたくしは此等の名著の一讀を勸めたい。

日本語には英語の『ラヴ』に相當する言葉が全く無い。『戀』とか『愛』とか云ふ字では感じがひどくちがふ。"I love you"や"Je t'aime"に至つては、何としても之を日本語に譯すことが出來ない。さういふ英語や佛蘭西語にある言語感情（ヂルトゲフユウル）が、全く日本語では出ないのである。『あたしあなたを愛してよ』、『わたしや、あなたにいろはにほの字よ』では、まるで成つて居ない。言葉が無いのは、それによつて現はさるべき思想が無いからだ。

今でも私は想ひ起す、子供の時英語の手紙の稽古をするのに、『書翰文範』（レタア・ライタア）と云ふ物を色々見た。開卷第一、先づ奇異の思をなしたのは、どれを開けて見ても『戀ぶみ』（ラブレタアズ）の一章が必ずある。親子兄弟友人間の贈答の文範と相並べて、『はじめて會つて戀しと思ふ女へ送る手紙』とか、『女へ愛を誓ふ男の手紙』とか、『色よき返事』とかいふのが澤山に出てゐる。わたくしは其頃の子供ごころにも、東西に於ける兩性觀の相異を深く考へさせられた。日本でいへば、こんな文範は花柳界のほかには恐らく用の

無いものだらう。之を學校の作文科にとでも言つたら、今の教育家先生はそれこそ目を廻はすだらう。これを目して單に外面的な風俗の相異などと言ふべきだらうか。

三　戀愛觀の今昔

人生は欲求の無限の連續だ。言を換へていへば、生きると云ふ事その事が既に何者かを求めることである。その求める所のものが、異性であるか眞理であるか淨土であるか神であるか知識であるか黄金であるか名譽であるかは問ふ所ではない。ひとしく皆その物に對する熱愛に根柢を置いてゐる。愛しないものを求めるといふことは不可能であるからだ。從つて何者をも心から愛することが出來ないといふ事は、人間としての最大の不幸であり悲哀であらねばならぬ。

かくの如き生の欲求は、やがて人間の色々な創造生活となつて現はれる。そのなかで最も大きな最も自然な、そして最も强い欲求は新しい生命の創造である。人間が新しい生命を創造し、子孫といふ形で自己を永久に保存する事は異性との結合によつてのみ成される。そこに戀愛は生ずる。戀愛なくして行はれる生殖作用は、野獸の喜劇にあらずんば、人間の悲劇である。

廣い意味での愛を至上至高の道德と見なし、人間生活の中樞なりとする思想は、他の多くの近世思想と同じく、その源流を希臘に發してゐる。哲人プラトオンの著作中最も詩的であり藝術的である

『シンポジアム』の對話篇は、即ち森羅萬象に普遍なる愛の力を說いたものであつた。地水火風の間にも天と地との間にも、そこには互に相求むる神祕の戀があり結婚があつて、萬物は決して單獨にして存在しない。またこの愛の力は常に美を求め善を求めて絕對無限の世界に連なり、至高至大の靈に向つて憧れる。人が人を愛するのは、かくの如き靈的生活に到達するための階段であると考へられた。プラトオン時代を距ること二千三百年、流風遺韻ながく後代に傳はつて、この思想は多くの哲人に影響し、シェリイやワアヅワスやブラウニングの如き近世の詩人にまでも、その響を傳へてゐる。

しかしプラトオンの時代にはまだ、近代のやうな戀愛觀は考へられて居なかつた。墺太利のエミイル・ルツカが數年前に公にして、學界と文壇の注目を惹いた名著『戀の三階段』(デイ・ドライ・ストウフエン・デア・エロオテイク)に從へば、文化の發達と共に兩性關係は古來三つの階段を經て今日に及んだ。第一は先づ性的本能にのみ動かされた肉慾の時代で、これは古代に屬する。いつまで經つても兩性關係に、性慾や生殖より以上の意義を認め得なかつた東洋の道學者流は、つまり此階段の所に低迷して居た者である。第二は、戀愛觀が基督敎の禁慾主義の思想と結び附いた中世期である。即ち女性を目して人間性を超越した神格あるものと考へ、それがやがて聖母マリアの崇拜となつた。今までは罪業のかたまりのやうに思はれてゐた女性は、ここに至つて一躍して男子に君臨する女王となり女神となつた。この思想は先づ佛蘭西南方のプロヴンスに起つて、その頃の騎士(ナイト)の城下から城下へと、琴を抱いて歌ひ歩くトルウバドウルの詩人

たちによつて傳へられた。靈的の戀愛觀はここに濃厚な宗教的色彩を帶び所謂『ミンネ』の浪漫的戀愛觀となつて、歐洲文藝の思潮に此上もない派手やかな色彩を加へた。ダンテが『新生（ヰイタ・ヌオオヴァ）』に、女人を目して『諸惡の消滅者、一切の善の女王』と言つたやうな女人讃仰の思想は、中世はもとより十九世紀に至るまでも、歐洲の文學には色々の姿になつて現はれてゐる。

しかし中世の『愛の宗教』の他の半面には、また驚くばかりの肉慾耽溺の生活があつた。靈的女性が救の女神と見られると同時に、肉的女性は惡魔の手先だと考へられた。ワグネルが『タンホイザア』に描いたやうに、靈肉二元の生活の間に彷徨して惑ひ悶ふるものが中世の人であつたのだ。

そこで古代の肉的本能時代と、中世の靈的宗教的女人崇拜時代とに次いで來れるものは靈肉合一の一元的戀愛觀の時代であらねばならぬ。それは卽ち近代だ。卽ち一方から言へば、古代のやうに婦人を男子の性慾滿足と生殖とのための道具のやうに見たのは、男尊女卑の動物扱ひであつた。また中世の如くに女人崇拜の極、これを九天の高きに祭り上げたのは、女に神格を認めて人格を認めなかつたからであつた。婦人を一個の『人』として認め、個人の人格を確認すると共に、また完全な靈肉合一の戀愛觀を見るに至つたのは、ルツカの所謂第三階段である十九世紀以後に屬する。近代婦人の自覺に基づく個人主義の思想は、舊時の戀愛觀を破壞すると共に、また新しい戀愛觀を生ずるに至つた。卽ち男も女も單獨にしては不完全なものである。そして兩性は互に補足の作用を爲すが故に、二つの

個人が相求め相牽く事によつてお互に自己を新にし、全からしめ充實せしめる事が戀愛であるといふやうに考ふるに至つた。生殖作用の如きは單に兩性關係の一部分に過ぎないので、戀愛は卽ち性を異にせる二つの個人の結合によつて、お互に『人』としての自己を充實し完成する兩性の交響樂(シンフオニイ)に外ならぬと見られて居る。エレン・カイ(ケイと發音するのは正しくない)や、エドワアド・カアペンタアなどの所說は、先づかういふ今日の戀愛觀の代表的なものであらう。

戀愛を精神的の愛と肉的の愛との二つに分けて、愛の女神ヸイナスには二つある、卽ち前者は天上の戀で VENUS URANIA と云ひ、後者をただ肉感的な VENUS PANDEMOS と呼ぶといふ見かたは、古くプラトオン以來の戀愛觀の根本であつた。それが二十世紀に至つて、はじめてかかる差別を撤した一元的の靈肉一致の戀愛觀に到達したのであつた。

十九世紀に於ける一部の戀愛觀を代表したものとしては、ショオペンハウエルの所說が最も名高い。彼の見る所に據れば、戀愛は要するに宇宙の大きな意志の現はれに過ぎない。卽ち人間がその子孫を造らうといふ意志に動かされて、そこに戀愛といふ一つの幻影を追ふので、その根本は畢竟ずるに『次の代の者を作り、更にまたそれから出る幾多の子孫をつくる者』*Meditatio compositionis generationis futurae e qua iterum pendent innumerae generationis* が要するに戀愛であると見た。從つて此哲人は、戀愛そのものよりも生殖を重く見、相愛するといふ事よりも相手の『所有(ベジッツ)』といふことに、より

深い意義を認めたのであつた。これは彼の『意志の哲學』からは當然來るべき結論であり、また後にハルトマンによつて祖述せられ、ニイチェによつて同意せられたにも拘はらず、戀愛の精神的人格的意義を認めなかつた點に於て、二十世紀の現在に於ては、過去の一說として見られる外に意義の無いものとなつた。ヱデキントの戲曲なども矢張り此系線に屬するものである。

四　愛の進化

何だかまた學校の先生の講釋見たやうになりさうだから、この邊で一つ出直す。

エリスやフォレル以來、近頃學者の性慾に對する研究は著しく進んだ。そしてそれが日本に於けるやうに、一時的な薄つぺらなふざけ氣分の流行物で無いだけに、一般の思想界や學界に及ぼしたその影響は非常に大きいものであつた。中でも精神分析學（サイコアナリシス）一派の學徒の研究の如き、一切の道德その他の精神現象の根本を性的渴望(libido)に在りと主張するに至つたのは、たしかに在來の幽顯道德の信者に向つて、冷水三斗を浴びせるだけの痛快なものであつた。

人間の道德生活の根本である愛を、性慾に基づくと考へる事は、さまで難事ではない。人間は呱々の聲を擧ぐると共に既に性慾を有つてゐるので、赤ん坊が母親の乳房に吸ひ附く時から既に性慾は發動してゐる。稍長じてそれが親兄弟に對する愛情に變つて行くのだと、精神分析學者は多くの例證を

擧げて說明してゐる。さういふ學說の當否は姑く別問題として、兩性間の戀愛が性慾に根ざしてゐる事は、今人の誰しも疑はない所であるが、ただそれが動物とちがつて、人間への進化と共に淨化せられ醇化せられて、最高至上の道德となり藝術となつてゐる事は考へて見ねばならぬ　かの男女間の事とし言へば、直ちに之を色情とか劣情とか痴情とか云ふ言葉で貶し去らうとする古風な道學者の如き、彼等自らの頭腦が此點に於て、まだ畜生の域から一歩も進んで居ない事を示してゐるに過ぎない。

　愛情が一つの狀態から他の狀態へと轉移し淨化されて行く事實は、何も小難（こむづ）かしい學說などを擔ぎ出さずとも、吾々が日常生活に於てしば／＼見るところである。たとへば黃金慾の如き、最初は其黃金を交換して得られる物が欲しさに、黃金を求めたのであつた。ところが後にはその慾情は轉移して、ただ黃金その物のために黃金を求めて他を顧みざる、今日の資本家の心理狀態の如きを現出するに至つた。又、も少し上品な例を取れば、最初は食用に供するための魚が欲しさに魚を釣つたのであつた。然るにその慾情は後に進化し轉移して、魚は釣れても釣れなくても、ただ林間の流に纖綸を垂るる事それ自らに興味を持つ釣魚の樂しみ――むかしアイザック・ヲルトンが『釣魚大全（コンプリイト・アングラア）』に書いたやうな極めて詩人的な、のどかな餘裕低徊趣味の心的狀態にまで純化せられ淨化せられるに至つた。また世には愛書家（ビブリオファイル）と云ふものが多い。書物は讀んでも讀まなくても、ただ多く蒐集し愛玩して

その古版を喜び、裝幀印刷などの外觀、古色掬すべきを樂しんでゐる人たちだ。最初は書籍の內容に興味を持つて、已れの知識慾や讀書慾を滿足せしめんがために書を求めたのが、後には書籍の內容とは沒交渉なところへ、その慾情は移つて了つたのだ。

すべてかういふ淨化轉移の心理は、動物に於けるよりも、進化した人間に於て最も著しく現はれてゐるので、此域に進めば最初に求めた目的そのものは、旣に無意識心理の底に影を潛めて了つてゐる。學者は之に名を附けて昇華作用（サブリメイション）とでも云ふだらうが、名前なぞは何だつて可い。

人間が最初その動物時代に於て異性との結合を求めたのは、明らかに性慾滿足と生殖欲望とのために相違なかつた。しかし進化と共にやがてその欲望は淨化せられ純化せられ詩化せられて、そこに戀愛といふ至上至高の精神現象を生ずるに至つたのだ。ここに至つて旣に最初の所謂『劣情』や欲望は、全然無意識心理の底に沈んで了ふ。戀は果敢ない浮草でもなく根無草でもない。飽くまでも深く強く性慾と云ふ泥田の中に根ざしてはゐるが、やがてそれが戀愛となつて高く美しく花咲き、母性愛や近親愛となつて實を結ぶとき、根柢は旣に泥土のなかに姿を沒してゐる事を思はねばならぬ。

全く肉的接觸の經驗を有たない若い男女の初戀などには、性慾とか生殖とかいふ問題は、殆ど意識の上に上つて居ないと言つても可い。さういふ時にかれらは始めて本當の人生を味はふのであるが、

先づ最初に現はれるものは自己犠牲の精神であらう。戀人のためには身をも心をも捧げて惜しまないと云ふ奉仕の心である。今まで幾年の間學校の先生などから、忠だの孝だの社會奉仕だのと色々の他の形で說教せられながら、而もなほ十分に自分の體驗の內容とまでは成つて居なかつた自己犠牲といふ事が、しみ〴〵と感得せられるのは、はじめて戀を知つた時であらう。一切の道德の根柢に橫たはれる自己犠牲といふ事は、燃ゆるやうな戀をする男女によつて最も痛烈に體驗せられるのが常である。單に『人間の道』であるなぞと言つて、仁義を口にし忠孝を說ける徒輩の、未だ曾て想ひ到らざる程に熱烈な自己犠牲の至高の道德性が、戀愛には最も花やかに現はれるのである。かういふ戀愛は、だから單に色を漁り性慾の滿足を求め、又自分の子孫を設けて私有財產を讓り渡さうなどといふ了簡の不良老年輩や、或は單に靑年時代の盛な性慾を滿足せしむべく、女學生や給仕女の尻を次から次へと追ひ廻はしてゐるにきび滿面の不良少年輩の夢想だも及ばざる心境である事は言ふまでもない。戀愛は心の純なる者にして始めて之を成し得べき氣高さと貴さとを有つてゐる。否なこれを逆にして、人の心は戀を知るに至つて始めて淨められ高められる、と言つても過言ではあるまい。理窟によつて硬ばつたり、黃金慾によつて荒み果てた心でさへ、ふと戀を知つた時から柔らげられる不可思議をすら、吾等は往々にして見るのである。

次いで結婚關係に入るに及んで、この愛は更に物的基礎の上に固められ强められ深められるのであ

る。しかし最初の花やかなロマンティシズムは決して永くその儘では持續しない。派手やかな戀愛關係が地味になり、浮ついたものが引締り、外面的なものが更に內部的となり、花は去つて實を結ぶのである。詳しく言へば結婚によつて物的基礎が確立すると共に、愛の內容はここに再び進化し轉移して複雜性を增し、更に一新境を開拓する。卽ち最初の戀愛はやがて夫婦間の相互扶助の精神となり、至高至大の情誼と變じ、更に進んで親としての兒女に對する愛情に向つても轉化して行く。殊に婦人の有する最も貴き母性愛が、性慾に根ざせる性的戀愛の延長であり變形に外ならぬと見るのは、至當の見であらう。そは又やがて、子が親に對する愛情となつて報いられる。更に進化と共にかくの如き愛の精神が擴大せられるに及んで、家族よりして更に隣人に及び、おのが民族の全部に及び、社會に及び世界人類に及ぶとき、吾々人間の完全なる道德生活は玆に成る。愛のない所に道德はない。

　或人は言ふだらう、昔の君臣主從の關係だつてその自己犧牲の精神に於ては、命を棄ててかかる程に熱狂的なのがあると。然し兩性關係以外の場合に於ては、單に心の結合に過ぎない。精神と肉體と兩方からの完全な全的な人格的結合を個人と個人との間に見ることとは、戀愛生活の外には斷じて有り得べからざる事だ。兩性の肉體的結合（ユニオン）には、他の何者とも比すべからざる絕大なる精神的意義の存することを知らねばならぬ。文字通りに同心一體といふ言葉は、他の如何なる生活に於ても適用し得べからざる語である。

世には極めて稀に、靈肉ともに全く異性との接觸を斷つてゐる人がある。さういふ場合には、此性慾から出てゐる愛の力が、更にまた驚嘆すべき轉移昇華の作用をなしてゐる。卽ち時にそれは眞理や知識に對する愛慾となり、或は藝術に對する熱烈なる愛慕と變じ、芭蕉や西行のやうな自然美に對する陶醉耽溺となり、殊にまた敬虔なる宗教生活に入つては、神を希求し淨土を欣求する信仰ともなつてゐる。自己の全生命をそこに集注して白熱點に到達し得た三昧法悅の心境は、科學だつて藝術だつて宗教だつて、それは皆戀をする男女が相抱くエクスタシイと多く異なるところは無いのである。之を全く別物のやうに考へて、一方を貴しとし一方を卑しとするがごときは、畢竟淺薄なる俗流の俗見に過ぎない。

五　ノラはもう古い

人間の性的生活、殊にその最も進化した純正な形に現はれたる戀愛を上述のやうな風に考へるとき、それは特に結婚問題に於て至高至大の意義を有することに氣附くであらう。又かの主としてエレン・カイによつて唱へられた戀愛至上主義の結婚說に、動かすべからざる眞理の存することをも考へさせられるのである。

雙方ともに自由な個人である男と女との結合、そして此結合によつて自己を完成し、また更に新し

き生命を創造し得る生活は、ただ相互間の戀愛によつてのみ成立し得るのである。戀愛なき結婚は人としての自己の存在を無意味ならしむるばかりか、民族の發達人類の進化のためにも大なる障礙を與ふるものである。だから法律とか財産とか家名とか、そのやうな外的條件を如何に完全に具備した結婚であつても、そこに兩性間の戀愛を缺いてゐるといふことは、最高の道德から見て三文の價値なきものだ。カイは『戀愛と道德』、『戀愛と結婚』等の諸著に於て、極めて大膽に極めて率直に、此戀愛至上主義を唱へた。若し最初は男女相愛して、しかも後に戀愛が消滅したならば、直ちにその結婚關係を斷絕して可なりとする彼女の自由離婚說の如きも、この論の當然の歸結として喝破せらる可き說だ。愛を失つた虛僞の結婚生活は、批判と自省とを有する近代人にとつて、確かにストリンドベルヒが所謂『地獄』の生活に他ならない。この地獄の悲劇が日常吾々の見聞する所に多いばかりでなく、近代文藝の最も主要な題材の一つであることは、今更說くまでも無く讀者の知らるる通りだ。

法律上の手續は如何にあらうとも、單に財產のために家名のために、或は他の何等かの必要のために、相愛しない者が結婚するといふことは、個人としての人格を有し自覺を有する者の斷じて忍ぶ能はざる所であらう。特に經濟上の獨立を有しない人――殊に婦人が、愛なき結婚關係によつて自己の物質生活の安固を得るが如きは、何と考へても一種の奴隷的賣淫生活であり、野蠻時代の賣買結婚の遺風に過ぎない。又たとひ一夜の契と雖も、そこに戀愛が存在して居たならば、それは確かに一種の

結婚であつて賣淫ではない　愛なき夫婦關係は、たとひ共白髮の四十年五十年の長きに亘らうとも、そして人間の拵へた制度が如何に之を認めようとも、神の最後の審判廷に於て、それは明らかに一種の强姦生活であり、賣淫生活である。一夜の賣淫、一度の强姦は之を罪惡として咎めながら、銀婚式金婚式に及べる長き賣淫關係と强姦生活とは立派に許されてゐる。さういふ賣淫や强姦は、お祝をする程までに芽出度いものであらうか。

結婚と戀愛との問題に就いて誰しも氣附くことは、自我にめざめた近代人の個人主義思想と戀愛との關係である。卽ち戀愛は飽くまでも對者のために身をも心をも捧ぐる自己犧牲の精神であるが、之に反して個人主義の方は、また飽くまでも强く自己を主張し肯定して、おのれの欲求の儘に自由に動からとする思想だ。結婚によつて成立した家庭生活と、醒めたる新人の自我の要求とは、是に於てか嘗ていくたびか悲慘な衝突を繰返した。イブセンが描いたヘッダ・ガブレルやノラのやうな女は、此衝突から起る戀愛の破滅と家庭崩壞の悲劇を代表するものであつた。

然らば個人として覺醒した女（或は男）に取つて、戀愛は遂に空疎な理想主義に過ぎないだらうか、一種のセンティメンタリズムであるだらうか。力强い個人主義の前には、戀愛結婚は果して無意味な空想夢幻に終るのだらうか。嘗ては如何にもさうだと考へられた。しかしもう其見方は今では古い、前世紀の事だ。二十世紀の今人は更に、も一つ深いところにある自我を發見することによつて、戀愛

を肯定し、戀愛を基礎とせる結婚生活の眞意義をも發見するに至つた。
イブセンが『人形の家』を書いて歐洲の思想界を驚かしてから、もうかれこれ四五十年にもなるだらう。目まぐるしきばかり急速に變遷する思潮の流は、今日はやくも既にその方向を轉じてゐる。一たび失はれたものが見出され、否定せられたものが肯定せられると共に、かの亭主の家を飛び出した『新しい女』のノラが、今では淺薄な古い女になつて了つた。
手短に言へば、それは戀愛が本當の自己を肯定し完成するものであることに氣附いたからだ。人が――殊に女が、今まで自分を見つめてこれが自分の眞の生活だと思つて居つたものが、更にも一つ深い所に、もつと大きい自我の生活の在る事を發見したからである。戀愛に依つて自己を放棄してゐると見えたのは、實は表面的外面的な自己をのみ見て居たので、人間が性的にも靈的にも、すべて全我的に自我を滿足させることは、ただ戀愛によつてのみ可能である。眞に愛し眞に自己を捧ぐることによつてのみ、人は自己を滿足し充實せしめ得ることを知るに至つたのだ。ノラ式の自我を棄てる事そのことが、實は本當の自我を充實し實現してゐるのである。新しい女は更に新しい妻として、また新しい母として現はれ、そこに母性擁護の主張も起り、人生に於ける性的生活の眞義をも覺るに至つたのだ。また男子の方から言つても、戀し懷かしとおもふ女に身をも心をも捧げることが出來るならば、それは實は本當の自我を滿足させる唯一の道なのである。かの愛せんとして愛し得ざる者の苦し

み、愛の無くなつた生活の淋しさ、それらは皆この本當の深い自我が滿足せられないところから起つてゐるのである。

ここに明言しておくが、かういふ戀愛觀を基礎とした結婚生活は、かの最初から無自覺な、或はおのれの意向に反した虛僞の結婚生活や、また因襲的な賢母良妻主義とは、その本質に於て、否なその出發の第一歩からして、すでに全然異なれるものであることを十分に考へて貰ひたい。かくの如き戀愛の心境は、つよく自我に目ざめた者にして初めて味到し味識し得べく、また眞の結婚を賣淫や家庭奴隷の生活と峻別し得べき、新しき至高の道德であることをも注意しておきたい。

六　ビェルンソンの作品

戀愛に於ては、自我を否定する事が更により大いなる自我の肯定である、とかう言へば何だかそれは變挺なパラドックスのやうに聞えるが、これは讀者が宗教生活の場合などをも倂せ考へられるならば解し易からうと思ふ。今はこの極めて簡單な一篇のエッセイに於て、そこまで論及する餘暇は無いが、わたくしは以上述べた事を、更に二三の文藝上の作物に就いて考へて見よう。

イブセンの『人形の家』が出てから後、あんな型の新しい女といふものの思想が、イブセンみづからによつて、また他の多くの作家や批評家によつて、著しく訂正を加へられた。ノラ式の女（或は男

も）が、更に深く靈的にも肉的にも孤獨の悲愁を味はひ盡くしてのちに發見したものは、やはり性的戀愛による自我の充實であり生活の更新に他ならなかつた。わたくしは今その例をビェルンソンの作品に求めよう。

同じ時代に生き同じ環境の中に在つて、全く正反對の態度を取る藝術上の二大天才の併立は、各國の文學史上に屢見られる面白い現象だ。沙翁とベン・ジョンソンとの如く、テニソンとブラウニングとの如く、また自然派全盛期の作家と夏目漱石氏との如く、イブセンに對してビェルンソンは全く反應の傾向の作家であつた。前者の文學が暗い行詰つたものであつたに對して、後者のはいつも明るい詩的な肯定的樂天的の性質を帶びてゐた。このビェルンソンが『人形の家』の出てのち六年目に『戀愛と地理學』（一八八八年）を作り、またその死ぬ前の年の千九百〇九年に、彼の戯曲としては最後の作である『わかき葡萄の花時に』を書いて、イブセンのノラ式の思想に補正を加へた。

イブセンの『ヘッダ・ガブレル』のテスマンのやうに、『戀愛と地理學』の主人公も亦學究先生で、しかも地理學の教授（プロフエッサア）、人生の事も世間の事も一切お構ひなしにその專門の研究に沒頭してゐる。家庭は五月蠅いものと定めて了つて、快く家人とは口も利かない。自分の勉强の邪魔になるからと言つては、娘を學校の寄宿舍に追ひやつて了ふ。細君が家の世話をしてゐるのは當然だと言つて、その方には見向きもしない。何か話しかけると研究の邪魔をすると言つては小言をいふ。凡てがさういふ流

儀だから、この枯淡な學究先生の結婚生活は、名ばかりの極めて寂寞荒凉たるものであつた。妻なる人は之に堪へ切れないでゐると、その矢先に自分の心を惹く男があつたので、遂にそれと一緒に家出をする。ここに至つて始めて翻然として學究先生の夢は覺めた。自分ひとりだけが研究に沒頭して他を顧みなかつた事の非を悔い、人生は學業よりも更に大きい問題だといふ事に今さら氣が附いたのである。一たび去つた細君も亦家に歸つて來たので、彼は喜んでそれを迎へた。家庭はかくしてはじめて愛の靈光に輝く。筋はただそれだけである。

全く狹い自己本位で他を顧みる遑のない個人主義者に向つて、ビェルンソンが、もつと力強い非難を加へたのは『わかき葡萄の花時に』の喜劇である。今度のは女の側の方から描かれてゐる。

アルギクの三人の娘はみなもう年頃になつた。世間なみに自由解放を求める新思想をはき違へた女たちで、皆それ〴〵好きな男と好きな眞似をして、父親などは素より眼中にない。一番末のヘレナさへ五十歳に近い叔父と婚約してゐるといふ有樣、母親アルギク夫人はまたこの三人の娘の熱心な味方で、亭主の事などは少しも構はないばかりか、自分勝手に始めた金儲の仕事に奔走して、いつも家を外にしてゐる。この寂しい名ばかりの家庭に獨りぽつちにされた主人公アルギクは、一方また所謂中年の人の物淋しさに堪へず、遂に思ひ切つて遠く濠洲あたりへ出掛けようかなどと考へてゐる。

諺にいふ『わかい葡萄の花どきに、古い葡萄も醱酵する』。アルギク夫人の姪に當るアルギルデと云

ふ女があつたが、その若姿に新しい葡萄の花咲くのを見ると、年甲斐もなうアルギクの寂しい胸には、古い葡萄が醱酵した。例の中年の戀といふのであらう、アルギクは遂に此女と手に手を取つて家出して了つた。自我主義の女房に見放された男は、今度は自分の娘よりも若い女と驅落したのである。

良人たり父たる人の家出で、あとに殘つた個人主義の細君の娘たちも急に大騷ぎをする。殊に細君は今まで寢室をさへ娘たちと一緒にして、亭主を相手にしなかつたのだが、良人の家出した晩にはじめて眞の自己に復つた。あまりの懷しさに、今は居りもしない亭主の床に寢る。むかし婚約の頃に良人から送つて呉れた戀歌を出して讀むやら、良人の枕を抱いて新婚當時の夢を想ひ出したりして、獨り深くも己れの非い悔いる。今は本當の我に歸つたのだ。娘たちも今さら父親に濟まないと言つては泣く。

そこへ突然ひよつこり亭主のアルギクが歸つて來る。遠い外國に行つてゐたのではなく、田舍の方をぶら〳〵して居たのであつた。

思ひがけなく歸つて來た亭主をつかまへて、細君は殆どヒステリのやうに狂喜する。昔なつかしさに繰返してゐた例の戀歌の手帳を、きまり惡げにそつと隱すあたり、ビェルンソンの喜劇は巧いものである。夫人は泣くやら笑ふやら、そして亭主の首に抱き附いてキスするやらの大騷ぎで、めでたく

此劇は了つてゐる。
近代劇の荒筋だけを聞く事は、美人の人相書を讀むよりも詰らない。ただ作家ビェルンソンが極めて優れた技巧を以て、かういふ場面を喜劇化し、前世紀の淺薄な個人主義に向つて、如何に痛烈な皮肉を浴びせてゐるかは、聰明なる讀者の想像にまかす外はない。

七　戀愛と自我解放

このこつの作の地理學者もアルギク夫人も、はじめに夫婦別れするまで『自我』だと思つてゐたものは、實は極めて表面的な自我であつたのだ。一たびはさういふ試錬を經、家庭崩壞の悲劇時代を通過して、最後に妻が良人の手に、良人が妻の手に歸つて來た時、彼等はここにはじめて眞の深い第二の自我を發見したのであつた。前世紀のノラ時代を通過したのちに、今世紀の戀愛肯定の時代はかくの如くにして來つた。淺いものが深くなり、外面的なものが內面的となつたのである。前よりも深くなり強くなつた自己省察によつて、本當の自分の生活を見出すと共に、戀愛生活に於て眞の『自我の解放』をも見出し得たのである。
嘗て個人主義のために戀愛を否定してゐたのは、まだ眞の自我に目ざめて居なかつたからだ。生活が淺薄であつたのだ。

だから現代の最も進んだ考へ方から言ふと、戀愛の心境は卽ち『自己放棄に於ける自己主張』self-assertion in self-surrenderだと見られてゐる。おのれの愛する者のためにおのれの全部を捧げることは、つまり最も強く自己を主張し肯定してゐるのである。戀人のうちに自己を發見し、自己のうちに戀人を見出したのだ。この自我と非我とのぴつたり一致するところに、同心一體と云ふ人格結合の意義がある。それは卽ち一方から言へば、自我の擴大であり解放である。此境地に到つてはじめて眞の自由は得られる。小我を離れて大我に目ざめるからだ。わたくしが曩に宗教の法悅も戀愛の三昧境も同じだと言つた意味は卽ち玆にあるので、宗教家が求める解脫とか、大悟徹底とか、或は神の國、彌陀の淨土に達すると云ふ心境は、完全なる自我の解放、眞の自由生活に外ならぬ。それは唯一つ全き自己犧牲自己放棄によつてのみ到達し得られる絕對境である。かの歐洲中世の浪漫的な詩的戀愛觀が、羅馬敎會の宗教信仰と結び附き、ゲエテが所謂『久遠の女性』となり、ダンテが地上の戀人ベアトリイチェを、救の女神と見たのは、少し深く考へて見ると、戀愛と宗教との心境にかくの如き共通性があるからだと私は信じてゐる。

しかし全く『我』の自覺の無かつた中世の人は、わづかに羅馬敎會の信仰に縋つて、此宗教的戀愛といふ自我解放の三昧境に到達し得たのであつた。けれども既に一たび前世紀のノラ時代の個人主義を通過して來た後の現代人の戀愛觀は、最初の差別觀から出た平等觀であり、自己批判を土臺にした

自己否定である。従つて同じく戀愛の肯定ではあるが、現代のは、それだけ批判的な深さと確かさのある充實性を有する點に於て相異があるのだ。戀愛の心境そのものには今も昔も變りはない。唯その出發點が『我』の自覺と無自覺との差である事を知らねばならぬ。

マアテルリンクのある作中の人物がその戀人に向つて言ふ言葉、『わたくしは自己を知る前に、あなたと云ふものを知らなければならぬやうになつた。そして自分の心よりも、あなたの心の方が一層よくわかる。あなたはわたし自らの全部よりも私に近い者となつた。あなたがそこに居るといふ事がなければ、わたしは自己その物を意識する事も出來ないのです』。これは自我にめざめた者が自我そのものを戀人のうちに見出すといふ近代人の戀愛の心境を、最も美しく語つたものである。

決して他の何人のためでもない、因襲のためでもなく家名のためでもなく財産のためでもない、自己みづからのために、自己みづから愛する人の前に自己の全部を投げ出す。この生活よりもより多く自由な生活がまたとあらうか。これよりもより大いなる滿足がまたとあらうか。自己その者にもすら囚はれて居ない所に、最も大いなる自由があり解放が有る。それが戀愛だ。

またこれとは正反對に、自己以外の何者かのために、卽ち因襲のために、利益のために、或は家名のために、自己みづからを棄て心身を捧ぐる者があるならば、それは明らかに僞善である。若し僞善でなければ、賣淫であり、奴隷であり、畜生道である。斷じて人間的ではなく、文化的ではない。苟

も前世紀に於て一たび自我にめざめた現代人の爲すに忍びざる所である。新時代の新道德から考へて、戀愛なき結婚を、人間としての大いなる罪惡なりと見る思想上の根據は、此點に在るのだ。

今日にして思へば、ノラ式の所謂『新しい女』は、覺醒の途上の第一步に在つたのだ。だからしてあのやうな狹い個人主義から、いつまで經つても踏み出し進み出ることの出來ない人たち、及びあのやうな自覺の徑路さへも踏むことを知らない全然無自覺の人たちは、これは兩方ともに、眞の『自己放棄に於ける自己主張』と云ふ至上至高の愛の生活には到達し得られない人たちである。ただ個人主義者の方は、いま一息といふ所で救はれるのであるが、全然無自覺な無批判なる者に至つては、それこそ未來永劫奴隸の苦しみと畜生道の嘆きとから解脫する事の出來ない者である。愛の天國の扉は、永久に此人たちのために固く鎖されてゐる。

わたくしは曩に、ノラは既う古いと言つた。しかしそのノラの所までさへ行かない日本婦人の如きは、永遠に呪はれたる者ではないか。嗚呼『ノラは既う古い。』これはまだ／＼日本で言ふべき言葉ではなかつたかも知れない。

八　無批判より肯定まで

茲にエレン・カイの言葉を借らう、曰く――

『かういふ完全な相思の愛は、ふたりの戀人が全く一人となつて了ひ、各が自由となつて、最大の完全といふ所まで、お互に開展したいといふ願望を含んでゐる。もし戀愛がかうして共同生活によつて完成せられるならば、それはただ一人に、そして一生の中にただ一度だけ、與へられる事が出來る。ビェルンソンは此事を如何にも詩人らしい簡單な言葉で言ひ現はしてゐる。戀人と云ふ者に於て「自分が二倍になつてゐると感ずる事」それが愛だ、それ以外のものは愛ではないと。また此感情は人格を解放し、保持せしめ、深からしむるもので、天才の貴き事業を鼓吹するもの。かの人格を下劣にし放漫ならしめ減損せしむる一時的な肉感的の愛とは正反對のものである。』(カイの論文『婦人の道徳』)

瑞典のこの婦人思想家は、またわづか二行の文句に、結婚と戀愛との關係を斷定した。曰く——

『成規の結婚なしにですらも、戀愛は道徳的である。しかし戀愛なしには結婚は不道德である。』(同前)

わたくしは大膽なるこれらの斷言を引用するほかに、この點に就いては蛇足を添へたくないと思ふ。

結婚は戀愛の墳墓だと言ふ。それは前にも述べた通り、戀の花やかさ美しさだけが結婚後に於て消滅するといふ意味に於て、確かに半面の眞理を語つてゐる。しかし墳墓だと見えるのは、實は死滅の墳墓ではなくして、外面的であつたものが內面的となり、その深さを增すと共に潜在的性質のものと

なつたのである。結婚によつて消滅するやうな戀は、それは單に肉感的な一時の遊戲か洒落かであつたに過ぎない。眞の魂の生活にまで喰ひ入つた人格的結合の欲求ではなかつたのである。もとより每日々々朝にゆふべに二人が鼻突きあはしてゐる結婚生活に於て、最初の浪漫的戀愛時代のやうに、相見るごとに胸とどろかして居ては第一いのちが續かない。その戀愛はおのづから變じて潛在的內面的とならざるを得ないわけだ。外國に居て久し振で食ふ米の飯は山海の珍味より美味(うま)いが、日本で每日喰つて居れば何とも思はない。それは決して米に飽いたのでもなければ嫌つてゐるのでもない。否な米に對する愛着はます〳〵深く內在的となつて居るのである。夫婦間の愛にも確かにさういふところがある。

しかし危機は往々にして此際に結婚生活を脅かす。ちやうど米の飯を棄てて鹽からや雲丹に箸を附けるやうに、よその男や女に關係の出來る例の三角關係『三人の經濟(メナアジュ・ア・トロア)』は、かかる際に生ずるのである。さきに擧げたビェルンソンの戲曲の如きが卽ちそれだ。もしその結婚が眞の戀愛で出來て居たものであつたらば、雲丹や鹽からは決して永續はしないので、また元の米の飯に歸る日が必ずあらねばならぬ。唯最初から眞の戀愛の無かつた結婚に於ては、かくの如き際に戰慄すべき永久の不祥事を見る事を覺悟せねばならぬ。眞の戀愛でなく精神的人格的結合が鞏固でない場合に、若しこの虛に乘ずる第三者があるならば、かかる結婚生活は、たやすく破壞せられて覆水また盆に返らず、永久に恢復

せられないだらう。否な甚だしきに至つては、今までの結婚關係は單なる便宜上の形式虚僞のものか、或は若い時代の一時的な遊戯氣分のものであつた場合、後に出來た三角關係に於て、初めて眞に人としての充實した戀愛生活を見るやうな例さへ尠くない。故人島村抱月氏の場合の如き或は此類のものでなかつたらうか。

眞の相思に成れる戀愛結婚に於ても、その二人の內的生活はおのづから三つの階段を經るであらう。最初の派手やかな美しい浪漫的盲目戀愛は、同棲生活に入つてのち一度は變形し、お互に自省し自覺する事によつて、そこに一種のノラ時代を現出する。それからのち更に一步進んで、眞の內在的戀愛關係となつて、本當の自我解放の自由生活が成立つのである。かのビェルンソンの戲曲二篇は、この轉化の徑路を、異常なる外的事件を借りて誇張し喜劇化した物だとも見られ得る。それはちやうど思想史の上に於て、中世の無自覺無批判な宗敎的戀愛觀が、一たびは前世紀の個人主義によつて破壞せられ、それがまた更に進んで、現代に至つて自覺の上に築かれた新しき理想主義となり、戀愛肯定となつた變遷の徑路に等しい。

かくの如く浪漫的よりして覺醒批判に遷り、更にまた最後の肯定に達するまでの三階段は、人間がすべての思想生活に於て踏むべき必然の經過である。例へば勞資問題、階級鬪爭の如きに於ても、同様の事が考へられる。むかし封建時代の主從關係溫情主義は、全然無自覺な盲目的ロマンティシズム

で出來てゐた。それが前世紀に於て一たびマルクス一派の所說に促されてからは、勞働者無產階級の自覺運動となり、世界を擧げて今現にそのために騷いでゐる。これはまさに兩性關係に於けるノラ時代に比せらるべきものであらう。吾々の社會生活が今後さらに進化し變遷して、今日の批判的改造時代よりも、またもう一步前に踏み出す時期が必ず來らねばならぬ。それはかの詩人ヰリアム・モリスが考へたやうな中世的色彩の濃いギルド・ソオシャリズムの新社會であるか否かは別問題として、さういふ新生の曙光が、今や漸く地上に現はれようとしてゐるのではなからうか。

いまだ覺醒の第一步をさへも踏まうとしないのは、盲目無批判の幼稚な生活だ。全く目かくしをしたキュウピッドの矢に胸を射られた盲目戀愛である。美しいには美しいが、其花はやがて幻滅の嵐に散らねばならぬ。さて次に來るべき自覺批判の時代に於て、自由解放を求めて苦しみ悶へてゐる事も、決して幸福ではなからう。ただ此階段に於ては、暫く步をとどめて自己を凝視し、生活を反省する徹底的な眞劍の努力があらねばならぬ。その眞劍の努力によつて、一たびは過去の美しい夢として搔き消されたものが、また新しい生命を得て更生し復活する。眞の自我の解放を得る戀愛生活も、すべての民衆が不合理なしに生活し得る新社會も、これらの光榮ある『第三帝國』は、みなかくの如くにして地上に建設せられるに至る。

九　結婚と戀愛

結婚と戀愛との事に關聯して私の念頭に想ひ浮ぶのは、さきに世上の注意を惹いたHといふわかき婦人の悲慘な最後だ。內部に如何なる紛糾錯綜したる事情の伏在したかをも知らず、單に新聞記事をのみ材料として、猥りに他家の私事を是非するが如きは紳士として愼むべきだと思ふ。はじめて此報道が傳へられた頃、卑見を求められた新聞記者に對して、私は口を緘して語らなかつた。今もなほ多くを語らうとは思つて居ない。唯H婦人が殘した一片の遺書には、獻身的熱愛に燃ゆる胸の血と涙とが、あの飾なき文字の行間に滲み出てゐるのを見た。人間は死に臨んで決して嘘をつくものではない。あの遺書に現はれた言々句々には、彼女の僞らざる愛の最後の告白があつた。そこに半點の疑は無い。唯それだけで十分であつた。財產だの家名だの手續だの、色々の問題に聯關して、周圍の人々が言へる千言萬語と雖も、『愛』と『死』とによつて裏書された彼女の一片の遺書に比しては、眞に力なきものであつた。

　全生命力を白熱點にまで高めた戀愛の前に、遺產とかいふ三十萬や五十萬の端金（はしたがね）が何であらうぞ。それは今では人類の幸福のために頻りに問題とせられてゐる私有財產に過ぎないではないか。その他、法律上の手續だの何だの彼だの爾餘の凡ての些事は、結婚問題に於て決して重きを爲すべきもの

ではなかつたのだ。『戀は至上である（ラヴ・イズ・ベスト）』。ブラウニングの此一句を詩人の寢言のやうに思ひ、法則と因襲と形式とに周圍の人たちが囚はれて居たればこそ、あの悲劇は生じたのであつた。否な周圍の人たちばかりではない、H婦人みづからも亦之を知らなかつたのだ。少くとも周圍の人たちと共に、かかる事は詩や物語にのみありと、知識としては百も承知して居りながら、それを眞に自分の生活內容にまでは取入れて居なかつたからだ。一生の些事を擲つて、戀人の抱擁に最後の安住の地を求め、新生の歡喜を得ようとする確信がなかつたからだ。最初戀人のもとに奔る家出の折にも、位牌なぞといふ愚にも附かぬ物を持出して見たりしたところを見ると、彼女みづからもまた世間並の因襲や形式に引掛つて居た女らしい。此不徹底さがあつたばかりに彼女は、樂しかるべき戀人との三年四年の生活を岐路に彷徨して、われとわが手にそれを臺無しにした揚句、遂に行き詰つてあの自殺の悲劇を演じたのであつた。

否な私はこんな批評がましい文句をさへも愼みたいと思ふ。實際身をその境遇に置いてゐた彼女當人にとつては、外部から批評するやうに、さう簡單には解決し得なかつたであらう。たとへば二十萬や五十萬の私有財產のごとき、われら無產者の目から見れば、いづれ馬鹿々々しいものである。しかし今日のやうな不合理な經濟生活をしなければならぬ社會組織のもとにあつて、見す／＼そこに得らるべき四五十萬の財產が轉がつて居たとすれば、弱きが常なる女の身として、たとひ無意識心理のう

ちにでも、之に對して食指が動いた事は、まことに無理からぬ事であつた。そのほか母とか兄とかの關係、形式上の手續、世間體、そんなものにも恐らく心を惹かれたであらう。よくわかつて居ながらそれが思ひ切れない、出來ないといふのが、人の子の弱さであり、果敢なさであり、また人間の悲哀である。そこにまた味はへども盡きざる人間生活の複雜味があり、情趣があるのだ。『戀』と『死』と、殆ど絶對性を有すとも見るべき森嚴なるこの人生の二大事實に面して、生學問や法律論や道德論や、そんなものが果して何にならうぞ。『愛』は人生の至上至高の道德であり、『死』は一切をジャスティファイする。私たちはこの二つのものの前にただ首をうな垂れて、驚嘆し禮讃するの外は無い。したり顏に、また賢しらに、批判がほする人たちの可笑しさよ。神の最後の審判廷に非ずして何が判るものか。

　戀の山路は嶮しいといふ。英語の passion は、語源に於て受難であり苦患を意味してゐる。戀は確かに人生の難行であり苦行である。遊冶郎の洒落でもなければ、不良少年の惡戲でもなく、眞劍の努力であり必死の奮鬪である。猿智慧で利害の打算をしたり、價の廉い既成品の因襲道德で納まり返つてゐる連中に、どうして此心境が解るものぞ。自殺といふ行爲は、たとひそれが如何なる美名のもとに、或は如何なる理由のために行はれたにもせよ、人生の肯定者の目から見れば確かに一種の罪惡である。人生の難行苦行の途上に自殺する者、それは明らかに卑怯であるに相違ない。しかしながら

其卑怯すらも敢へてし得ないで、胡魔化しの其日々々を送つてゐる者は世に決して尠くはない。心ならずも奴隷の生活に甘んじ、ただ生れて來た惰性だけで、生ける屍となつて生きてゐる者に比すれば、毒を仰いで命を絶つた彼女の如きは寧ろ優れた者であらう。少くともブルジョアの娘としては上出來の方だつたかも知れない。喘ぎながらも鬪へながらも轉びては起ち、行詰つてはまた新路を拓きつつ、嶮峻なる向上の一路を辿り行く者こそ、眞の强者であり達人であらねばならぬ。

一〇 人生の問題

H家の事件に關して、或大新聞は社說に於て下のやうな事を言つた『一纖弱なる少年婦女の死が端なく社會の問題となつて、舊道德が何うの、新思想が何うのと、宛かも社會に於ける大問題なるかの如くに評判されたのは、如何に現代の我が社會の人心が、淺膚で浮調子で不健全であるかを立證するに足る。……こんな事件は人間の世界が決して珍らしとせぬ。殊に新舊思想の過渡期に於て、その例に乏しくない』と。而も其新聞が逸早く此事件を、一號見出しの三段抜きか何かで特筆大書した事はいふまでもない。色々の點から見てかういふ事がすべて、今の日本の社會人心の反映である新聞といふ物の常態を示してゐるから面白い。

わたくしが玆に之を引用したのは、それが大新聞の社說であつたからではない。今の世になほ自ら

先覺者を以て居り、識者を以て任ずる者――換言すれば操觚者、教育家、學者、政治家などと云ふ者のうちに、此社說の文字と同じ意見を抱く者の意外に多い事を見たからである。

わかい女の戀と死とが社會の注意を惹いたからとて、なぜそれが不健全であり浮調子であるのか。政治とか軍事とかに關する事でなければ、詰らないと言ふのか。國務大臣とか陸軍大將とかの事でなければ、騷ぐに足らないとでも言ふのか。おもふに論者の如きは、かの『女こども』とか、或は支那流に『女子と小人』（小人とは小兒の意）とかの語を口にして、人間の最も貴き感情生活の問題を事もなげに片附けようとする東洋豪傑の亞流か、さもなくば、いつまでも政治屋と洋劍（サアベル）とを有難がつてゐる田舍者のお仲間でもあらうか。

政治そのものは、藝術や宗教や學藝や經濟と共に、吾々人間生活の極めて重要な一部分である事は言ふまでもない。しかし近頃の日本の政界の出來事のやうに何等思想上の根柢なく、唯眼前の利益爭奪のために動いてゐる者の驅引の如き、それが吾々の最も眞劍な內面的の生活と、果してどれ程の交涉を持つてゐるだらうか。近い一例を言へば、ある政黨の幹事長とかいふものが、反對黨の首領に與へた公開狀と云ふ珍品が出た。世間はそれを見て、さながら天下國家の大事件なるかの如くに騷ぎ立てて居たが、さういふ事に興味を持つ者こそ、眞に不健全であり浮調子なのではないか。それは唯政權と云ふ一つの餌を爭ふ猿と狸との喧嘩に過ぎないからである。戀に悶へて毒を仰いだ『一少女の

死』には、決して猿や狸に見られない貴い深い人間性が現はれてゐた。一切の動物のうち、自殺といふ事を敢へてする者は人間だけである。

近頃の政治家と云ふ者のしごとなぞ、あとから考へて見れば皆極めて詰らないものである。嘗て前後八九年間にわたつて政權を握り、權謀と術數とによつて政治界實業界の有象無象を御するに極めて巧みな男があつた。それが公爵であつたか陸軍大將であつたかは覺えても居ないが、沒後わづかに數年、彼の名は現代の新生活と全然沒交渉なものとして、今の新人は恐らく此舊式政治屋の名をさへも記憶して居ないだらう。夏のゆふべ、八重葎しげる古塔のかげに、戀を囁く名も無き少女は、詩聖ブラウニングの藝術と共に永遠に生きてゐる。またしても『ラヴ・イズ・ベスト』の句が想ひ出される。

H家の事件の如きは、決して珍らしくないといふ。いかにも御尤もだ。しかし珍らしくないから注目するのは詰らないといふ結論がどこから出るのであるか。珍らしくないからこそ、否な人生の最も普通な現象なればこそ、眞に人生を觀照し感味しようとする者の深く考へねばならぬ事柄である。Hといふ一少女の自殺事件の中には、現代に生きる何人と雖も無關心であり得ない多くの問題が含まれて居た。そこには近代人の何人にも味はゝるべき社會苦と人間苦と、そして懊惱と苦悶とが暗い影を投じて居たのである。さういふ事を輕視しようとする者こそ『淺膚で』あり『浮調子』であり『不健全である』のではないか。考へても見よ、富士山の爆發とか大帝國の滅亡とか云ふ千載一遇の珍事件

でなければ、騷ぐ必要が無いと云ふ理窟がどこに在るのか。

うら若い一少女の死だから言ふに足らぬ、王侯將相の言動だから注目すべしといふが如きは、極めて不徹底なる馬鹿々々しい俗見だ。まじめに自然と人生を凝視して、そこに眞善美の姿を見ようとする者の前に、そんな外面的な薄つぺらな差別は何の意義をも有しない。眞理の探究者である科學者の眼中には、英雄の心臟も兎の睪丸も、そこに價値の差別は無い。人間性の眞を摑まうとする藝術家にとつては、裏店の夫婦喧嘩も二大强國の爭も、その間に輕重の差は毫も無い筈である。輕重の差を置くのは、まだ眞に本質的徹底的に物を考へて居ないからだ。

しかしこれは私の餘計な心配であらう。今の日本の『聰明なる新人(ジユネス・インテレクテユエル)』は、男子でも、女子でも、最早政界のいきさつだの、政權の動搖などと云ふ詰らない事には、さまで興味を持つて居ない。も少し徹底した深い人間生活、社會生活の問題を考へてゐるらしい。さればこそH事件は世の注目を惹いたのであつた。わたくしはそれを『浮調子』でもなく『不健全』でもない最も喜ぶべき現象だと考へてゐる。もしこれが淺膚であり、浮調子であると言ふならば、トルストイもイブセンもショオも、さういふ事を人生の大問題として考へて居た近世の大思想家は、みな淺膚であり浮調子であると云ふ奇怪至極な結論に到達しなければならぬ。

それにしても、あのH婦人の事件に際して、私が微笑を禁じ得なかつた一事がある。卽ち彼女が平

素深く文學書を耽讀して居たといふ事實の無かつた事だ。例の憂國慨世の士とか云ふ大先生たちが、いつもの通り文學中毒だとか、不健全文學の罪だとか言つて、口を尖らして騷ぐ絶好の機會が無かつた事を、大先生たちのために今度は甚だお氣の毒に思つた。

一 斷 片 語

天高く氣清し。夏の間だらけて居た體が引き締り、濁つて居た頭腦が秋の水と共に澄み渡る嬉しい季節が來た。讀書生にとつては、これが一年中で一番大事な書入れ時である。わたくしも秋のこの夜長を、さう何時までも世間話をしてゐる譯には行かない。書きかけた此題目に就いても、なほ言ひたいと思ふ事は甚だ多いが、それを茲に順序だてて論じてゐる餘暇は無い。いま念頭に浮ぶ事柄に就いて思ふところをただ斷片のまま書き附けて置かう。

男も女も、お互に個人としての人格を基礎として結合する。一方が他を奴隷扱するのでもなく、物品視するのでもなく、さりとてまた歐洲中世の女人讃仰のやうに、神の如く尊崇するのでもない。雙方ともに平等な人格と人格との結合（ユニオン）が、戀愛であり結婚である。もしさうでない場合には、その性的關係は主人と奴隷との如く、顧客と商品とのごとく或は牝馬を種馬との如く、個人として既に一たび覺醒した近代人の目からは、それは甚だしく非人間的な非倫理的な性的關係である。だから今日の日

本に於けるが如く、『可愛がる』『面倒を見てやる』『やさしくする』などの語に對して、『旦那様のお氣に入る』『可愛がられる』などの言葉が存立し得る如き性的關係（殊に夫婦關係）は、そこにたとひ如何なる愛情が存在しようとも、それは飼主が愛犬（ペットドッグ）に對する愛情、或は資本家が賃銀奴隷に對する溫情と異なるところなきもので、眞の人と人との間の道德的な關係ではない。かの女性に向つて、唯溫良貞淑をのみ說かんとする者の如き、多くは奴隷の道德を異性に强ふるの結果に了る。多年の此惡弊は今日の多くの婦人の間に、『媚びる』とか『甘へる』とか、『じやれる』とかいふ飼犬や飼猫と共通な性情をさへ、具有せしむるに至つた悲しむべき事實を見るではないか。

　近頃は性的教育といふ事が、一部の人々によつて高唱される。いかにも結構であらう。しかしそれは單に生理上の知識を授けるといふが如き事のみではなくして、右のごとき性的倫理に關する教育をも必要とはしないか。殊に日本のやうに、處女の貞操が男子の不良性放埓性によつて容易く蹂躙せられることの多い國では、人格的結合といふやうな思想の注入は、何よりも急務であらうと思ふ。わたくしは一代の風紀肅正のためにこれを言ふ。

　戀愛は奴隷にあらざる者の自發的な、自由意志による自己犧牲ではあるが、同時にそれは相手を獨占しようとする所有慾に驅られて動く。身をも心をも捧げて自己を犧牲にしてゐる他の半面には、最も强く自我の欲求といふことが働いてゐる。一切の道德は結局みな自己のためにするものだといふ古

くからの學說があるが、戀愛に於ても著しくこの感がある。それは要するに相手を『所有』しようとする熱望から來るのだ。當然の結果として一夫一婦の制は性的道德から見て永久に正しい形として存在する。この點はエレン・カイの如き、自由な考へ方をする人でも認めてゐるところである。男女いづれか一方がその愛を更に他に割く場合、卽ちかの所謂『三人の芝居（ドラアム・ア・トロア）』或は『永久の三角形（イタアナル・トライアングル）』に於ては、その一方は必ず駄洒落か遊戲的氣分のものか、しからずんば單に形式と因襲とのために、或は他の利害關係のためにせる虛僞の性的關係として斷絕せらるべきものだ。極めて稀に戲曲や小說に見られる（近代のものではないが）やうに、眞の愛が二つに割かれて、完全な三角形をなしてゐる場合の如きは、それは恰も一人の兒を產むのが常態である筈の人間に、雙生兒が生れると同じく、むしろ運命の恐るべき惡戲と見るの外はあるまい。

しかし人間が進化し社會が進化すると共に、戀愛も結婚も亦進化する。それがこの上、如何なる方向にむかつて進化するか又進化すべきかは、今日に於て私たちの豫言し得ざるところである。たとへば今日の戀愛觀の背後に在るのと似た『所有の欲望』が、財產の事に關して非常な變化を受くべき共產社會などに於ては、性的關係もまた一夫一婦の原則を變ずるであらうか。かの英國文壇最大の作家で、近頃はまた頻りに論壇の人として活躍してゐるヱルズの如きは、共產社會に於ける一夫多妻、多夫一妻、或は離婚の如き形をも認めてゐるやうだが、私としてはなほそこに色々な疑問があり、全

く反對の見解を持してゐる。唯飽くまでも一夫一婦を原則としながら、性的關係の離合が今よりももつと自由なものに變化するだけではないかと思ふ。少くとも現代の性的道徳から考へれば、さうとしきや考へられないのである。人格的結合に於ける對者の所有と、單に物質上の意味の所有とは、その本質に於て甚だしく異なるものがあるからだ。

近代劇でこの戀愛と結婚との關係を主題としたものは、先づイブセンを第一人者として、北歐の諸作家に甚だ多いのみならず、最も家族主義の色彩の濃い佛蘭西に於ても、エルヸユウやブリユウや、その他多くの劇作家の題材となつてゐる。しかしこの問題に就いて最も深く突込んで、心ゆくばかり辛辣な皮肉味を見せてゐる者は、何といつても矢張り英吉利のG・B・Sであると思ふ。彼の大作と言はれてゐる『人と超人』（マン・アンド・スウパアマン）はいふまでもないが、『戀を漁る人』（ザ・フイランダラア）などは、イブセン式の個人主義の、も一つ裏を搔いた物で、極めて突飛な浪漫的人物チヤアタズを中心とした戀の縺れが面白い。また『結婚』（ゲテイング・マリド）に至つては、筋もなければ主人公もない極めて變挺な一幕物、何の事はない、大勢の男女が集まつて結婚問題討論會をやつてゐるやうな物だ。一夫多妻を主張する者もあれば、一妻多夫を望む者もある。殊に一定の期間だけの結婚關係を主張する說なぞも隨分奇拔なものである。作者はこれらの問答を通じて、さながら怪猫が鼠を弄ぶが如くに、今日の制度としての結婚を皮肉つてゐる。ふざけてゐるのか茶化してゐるのか、また攻撃してゐるのか見當の附かないやうな中に、現社會の一切

の制度に對する作者その人の痛烈なる諷罵があるのだから偉い。しかしショオは、とにかく結婚を當事者の意思によつて決する事を常例とせる英國の社會を見てすら、あんな苛烈な痛撃を加へた。婚嫁をさながら犬猫の遣り取り同樣にしてゐる日本の結婚を見たならば、彼は果して何と言ふだらうか。

嫁にやる、養子を貰ふ、婿をとる。さういふ言葉は明らかに封建時代の遺物として、今日も猶盛んに行はれてゐる。ひどいのになると、婚嫁の事を『片づく』とか『かたづける』とか言ふ。まるで女を古道具かがらくたとでも心得てゐるらしい。苟も人格ある人間を、家名とか財産とかのために、犬猫や玩弄物や古道具と同じく、やつたり取つたり貰つたり片づけたりすることは、何と考へても野蠻だ。人が人として生きる可き新生活に於て、斷じて許すべからざる野蠻である。さういふ野蠻な言葉を現代語から取り去る前に、さういふ風な考へ方をも先づわれわれの生活から除去しなければならぬ。(何もそれは日本の封建時代ばかりでない。西洋だつて昔は同じ樣な考へ方をしてゐた。現にモオゼの十戒のなかの文句にも『汝の隣人の妻及びその僕、婢、牛、驢馬ならびに凡て汝の隣人の所有物を貪る勿れ』と一口に言つて了つたところを見ると、女房も家畜も道具も皆同列にあつたのだ。)

親のため家のためとあらば、身をうき河竹の流に沈める事をも『孝』なりとしたのが封建時代であつた。今日でも、西洋の娼婦が自分自身の墮落から身を沈めた女の多いのに反して、日本の賣笑婦には、親の酒代や藥代のために或は『家』の窮乏のために、身を賣つた『孝女』が多數を占めてゐると

いふ驚くべき事實は何と見る可きだらうか。わづか一度の『見合ひ』をしただけで、戀しとも思はず、惚れたとも思はぬ男に終生を託すべく、父兄によつて或は周圍によつて餘儀なくさるる憐れむべき女性と、かくの如き賣春婦の『孝女』との間に如何なる距離があるか、如何なる本質的差異があると思ふのか。若しかくの如くにして女が終生生活の安固の道を知るのだとすれば、さういふ結婚は明らかに終生の賣淫生活ではないか。

親の讎、主君の仇を討つとあらば、家宅侵入罪をも殺人罪をも罪なりとせず、却つて之を美談として賞揚したのが、封建時代の道德觀であつた。今は法律がそれを禁じてゐても、猶さういふ事が一種の感情（センティメント）として日本人の胸奥に殘存し、それが色々の場合に累を爲してゐる事は、憂ふべき現象である。

何か變つた事があると、直ぐに文學中毒だ、新思想感染だと騷ぐ。文學とか思想とかを、まるで病毒か黴菌とでも心得てゐるらしい。しかしながら再び思へ、今日の日本には、如何に多くの舊道德中毒、因襲中毒の患者の存するかを。また更に見よ、舊式愛國心中毒、形式中毒、法律中毒の患者が、文學中毒者などよりも遥かに多數なりといふ事實を。そしてこれら無數の患者が、今や新しき人文生活の領域に向つて驀進せんとしつつある日本をして、悲しむべき半身不隨の半病人狀態に陷れてゐることに氣附かないのであるか。現にかのH事件のごとき、明らかに當人とその周圍の者との因襲中

毒、法律中毒が、一人のわかき女性をして自殺せしめたのであつた。

簡單なる見合ひ結婚からでも、後にはおのづから愛情を生ずると言ふ。如何にも御尤もだ。しかし忘れてはならない、その愛情は、最初何等の人格的精神的結合によらずして、純然たる肉體の性交から發足してゐるといふ恥づべき事實を。牝馬と種馬との交尾と同じく、性慾滿足と子孫繁殖の要求とが、かかる性的關係の主要部を占めてゐる。もとより異性の接觸であるから、よほど甚たしい性格の相異でも無いかぎり、二十年も三十年も無理やりにくつ附けて置けば、さう毎日喧嘩ばかりをしてゐる譯にも行くまい、自然そこからは多少の人間らしい愛の湧き出でることも無いではなからう。然しさういふ結婚者は、後に至つてその初夜の事を回顧せよ。その刹那のおのれの心的狀態が、如何に獸的な非人間的なものであつたかを顧みて、赧然として自ら恥ぢざる者が果して幾人あるだらうか。殊に女にとつては天地にもかへ難き處女の誇が、心ならずも此獸的要求のために、其夜無慚にも奪ひ去られたのであつた。『もう仕方がないわ』といふ所から、引きずり引つぱられて十年二十年いつとはなし同棲してゐるうちに、多少は人間らしい愛も生ずるのであらう。犬猫ですら每日座右に置いて、長く飼つて置けば可愛くなるのが人情だ。しかしそれが果して自覺ある人間と人間との眞の戀愛生活と同一視せらるべきものだらうか。夫婦の愛の生活の第一夜——その第一步を先づ畜生道から踏み出したものを、私は名づけて强姦結婚、和姦生活、賣淫結婚なりと云ふのである。わらぢ千足で事を巧く

運んだといふ得意顔の月下氷人なるものは、實に憎むべき pander ではないか。親類縁者が集まつて果して何が芽出度いのか知らないが、興じ騒ぐその夜半、命にも代へ難い處女の貞操を、心にもあらず蹂躙られる可憐の女性の涙を何と見るのであるか。それは祝ふ可き結婚式ではなくして、呪ふ可き強姦式である。ハイカラに新婚旅行をする程の人たちにはこの憂もあるまいが、それでも若し戀愛が無ければ立派な強姦旅行である。これを口にするだに筆にするだにショッキングだとは感じないのか。

もとより私は見合ひ結婚の全部を否定してゐるのではない。戀は神祕である。ロオミオとジュリエットのやうに、ペレアスとメリサンドのやうに、一目見て戀の成立つ場合は極めて多い。否な、沙翁やマアロオの言葉を借りて言へば、『戀せしもの誰か初めて見し時に戀せざりしぞ』(『御意のまま』第三幕五齣)。見あひの時に此たふとき戀を得た人は、それこそまぐれ當りの仕合せ者である、惠まれたる少數者であらう。何となれば其男と女とは初夜の畜生道なしに、立派な人間らしい戀愛生活を以て終始し得るからである。

『除外例の無い法則は無い』。世にまぐれ當りの果報者の多いと同じく、まぐれ當らざる不幸な人が、戀愛結婚をしながら破鏡の嘆を見た例も無論尠くはない。しかし人間として人間らしい、そして畜生らしからざる正道を歩みながら、而も失敗つたらば、そは天なり命なり、また如何ともすべから

ざるものである。結婚は確かに人生の大きな冒険だ。正直に働いても貧乏し、養生しても病氣するからとて、最初から怠けても不養生しても可いといふ法はあるまい。今の見合ひ結婚を謳歌する者の如きは、石をつめた罐詰を賣つて暴富を致した富豪の仲間が多かつたからとて、それを謳歌する者と同じく、まさに畜生道の讃美者である。私の言葉に一言半句の言ひ過ぎはない。

戀愛結婚が必ずしも幸福に終るものでないといふ反證として、ある人は一度情死を企てた者同志の結婚生活が、結局終を全うした例が無いといふ事實を指摘してゐる。馬鹿々々しい論法だ。巣林子の心中物以來、どの例を見ても情死しようといふ程の者には、その性格や環境の上にいつも尋常ならざる大きい缺陷がある。さういふ缺陷は情死未遂の後と雖も決して無くなつては居ない。殊にまた一たび心中といふが如き危機を通過した事によつて、さういふ戀愛關係は一種異樣な衝撃を受けた後である事をも考へて見ねばならぬ。情死未遂者の如き、そんな苦しい特異な例をまで引つぱり出して、因襲的盲目的結婚、非文化的非人間的結婚を辯護し、戀愛至上主義の結婚に反對しなければならないといふ理由が果して何處にあるのか、必要が何處に在るのか。それ程までに苦勞をして、愚にもつかぬ形式と因襲にこびり附いて居たいのか。

結婚は當事者の意志によつて決せられねばならぬと、これは少し物の解つた人の言ふ事だが、やはり駄目だ。意志は戀愛ではない。動もすれば家名や財産や因襲のためにも、その意志は左右せられて

ゐる。たとひ自分が求めてした結婚であつても、その人の動機が全く純正な戀愛以外のものであるならば、道德論はしばらく別としても、さういふ結婚生活は決して、夫婦の人格を完成し生活內容を充實せしむるものではあり得ない。ジョオヂ・メレディスの小說には屢次（しばしば）さういふ結婚の不幸が描かれてゐる。女の英雄崇拜熱とか誇とか富とか或は交際社會の體面とか、凡て純なる戀愛以外のある動機から成立つた夫婦生活の慘狀を、此作家はその獨得の驚くべき情緻深刻な心理解剖の筆を以て、『オオモント卿とアミンタ』や『驚くべき結婚（アメイジング・マリッヂ）』などの作の女主人公の身の上として寫し出した。最初その動機となつて居たものが、結婚後、時を經て變化し或は消滅したとき、全人格的精神的結合のない夫婦關係が、根本から破壞せられ顚覆せられるのは當然の結果である。

純なる戀は至上至高の美であり善である。父兄の前に師友の前に公言し得られないやうな穢れた道ならぬ戀をする女、或は公言し得べきだけの正しい戀をして居りながら、封建時代のお姫樣のやうに、頸筋から眞赤にして口をもぐ〳〵させながら、それを父兄の前に立派に公言し得るだけの勇氣のないやうな意氣地なしの女は、共に皆新時代の新生活に於て劣敗者たるべき事を覺悟せねばならぬ。さういふ女は自分で自分の生活を建設するだけの能力を缺ける低能者であるか、然らずんば今もなほ戀愛を『不義』とか『劣情』とかの同意語（シノニム）なりと解せる時勢後れの奴隸婦人であるからだ。

日本は世界の文明國中最も離婚數の多い國である。それには色々の原因があらう。しかし戀愛を無

視した因襲的結婚法が、その最も重大な原因の一つでないと誰が言ひ得るだらう。

自分が好いて自分が選んだ結婚關係ならば、それがうまく行かない場合、自分自身にその全責任がある。出來るだけの努力をして、現在の結婚生活をより良きものにしなければならぬといふ熱意も、亦おのづから生ずるであらう。最初から自己以外のものが取計らつた結合なればこそ、いづれ合はせものは離れものだといふ流儀で、離婚の不祥事は踵を接して起り來らざるを得ない。

ある若い小學教師が同僚の女教員と戀に落ちた。それは眞面目な清い戀であつた。ふたりは遂に立派な結婚をした。しかしそれと同時に辭職して、他に轉職しなければならなかつた。それは苟も人の師表たるべき者のすべき事でないといふのださうだ。見あひで出來た凌辱結婚、和姦結婚ほどに正當なものでないと認められたからであつた。

こんな風に、正しいものが不正と認められ、不正なものの方が正しいと認められてゐる。それが今の多數者の生活だ。認める者の目玉の方が正しくないことに氣附かないのである。

さういふ逆とんぼりの目玉を持つた者が、教育を論じ風紀を說いてゐる。滑稽どころの騷ぎでない。もう悲劇だ。

これは戀愛といふ問題に關係のない話だが、序に言はう。教育家の事をいふとき、世人――ことに教育者の行政監督の任に當つてゐる俗吏輩などが、動もすれば『苟も人の師表たるべき者が』と言つ

て教師を責める。さうだ、如何にも教育家は世の師表たるべき者であらう。しかし今の世間は如何に高徳の教育家ありとも、貧乏で正直で馬鹿で勤勉な教育家などを斷じて師表とはしないのである。今日でも中江藤樹や吉田松陰ぐらゐな男は、隱れた村夫子の中にはいくらもある。否な、すべての學校の先生は、今の政治屋とか實業家とかいふ下等な人物に比するならば、皆立派に藤樹的であり松陰的であることは斷言せられ得るのだ。しかもこの多くの藤樹的松陰的人物は、何もわからない法學士の知事とか郡長とかいふ俗吏によつて、或は學務委員とかいふものによつて、土芥の如くに蔑視せられ、そのとんちんかんなる命令にさへも屈從を餘儀なくせられてゐるのではないか。それで『世の師表』も何もあつたものか。『師表たるべき者』を師表としない日本なればこそ、知事の收賄事件や、議員瀆職沙汰で、國を擧げて百鬼夜行の道德的無政府狀態を現出してゐるのではないか。世間は決して貧乏で正直で善良な學校の先生などを師表とはしないで、十分に之を輕蔑し虐待し無視してゐる。學校の先生の爪の垢でも煎じて飲む程の殊勝さがあらば、今の日本は道德的にもつと進歩し改善せられてゐる筈である。泥棒、詐欺師の眞似をしてまで私有財産を蓄積せる資本家、自らの非を百も承知で居ながら、づう〳〵しくも議會で、答辯になつて居ない答辯をして平氣な顏の國務大臣……ならべ立てれば際限もないが、そんな者どもをこそ、いま世間はまたとなき師表と仰ぎ奉つてゐるのだ。『師表たるべき者』を毫も師表とはせずに居りながら『師表たるべき者が』と言つて責め立てたつて、それ

が果して何の役に立つと思ふのか。

ながい秋の夜も更けた。しづかに蟲の音を聽きつつ戀を語らうと思つて書きかけた話が、妙な所へ飛んでいつた。ここでまた思ひ浮んだ事をも、二つ三つ書き加へてこの長談議を了らう。

一二　えぴろぐ

ある羅馬人が細君を離別した。友人がそれを責めて言ふには、『女が操を守らなかつたのか、美人でなかつたからか、子供が出來なかつたからか』と。その羅馬人が之に答ふるに、自分の穿いてゐる靴を差出して『どうだ、新しくて好く出來てゐるだらう。』さう言つて更に言葉を足した。『しかしね、どこが痛いのか君たちには分るまい。』

これはプルタアクの英雄傳にある名高い話だが、よそから見て、容貌健康血統品行財力家柄、そんな條件がいくら揃つて居たつて、男女間がうまく行くとは限らない。わきから考へて申分のないのが、どうかすると、破鏡の嘆を見たりする。戀は思案のほかだ。相愛する魂と魂とが相觸れて、神祕の調を奏でる幽玄の一境がそこに在る。この玄妙不可思議の一境に入つては、あばたも靨であり、醜婦も美人だ。手鍋提げてもと言ひ、戀に上下はないと言ふ。理窟と評價とを超絕した世界だ。みながうまが合ふからだと言ふが、然らば其うまとは何ぞや。外のものには分らない生の神祕だ。唯戀する

ふたりのみがそれを知つてゐる。

修道の高士にも劣るまじき浄い純な心を持つた者でなければ、本當の戀は出來ない。酒と女に身を持ち崩した成金が或時、一度でも可い、心から女に惚れて見たいと言つたさうだ。物慾にのみ驅使せられ猿智慧のみ働いてゐるやうな賤しい心に、美しい戀の花が咲くと思ふのか。

ひとりの女との戀を遂げてから、また次の女へ行く人がある、花から花へと移つて行つて、甘い蜜を吸ふ蜂のやうに。

佛蘭西人の書いた物に面白い句があつた、世間で一番女を知らない人は道樂者だと。次から次へと多くの異性を愛する人は、一人の異性の戀をさへも十分に噛みしめ味はひ盡くさずに終る不幸な人ではないか。一夫一婦の制は人間が勝手に拵へたものではあるが、人生の享樂といふ立場から見ても、戀を味はふといふ立派な意義があると思ふ。(殊に男女が共に平等の人格であると見るならば、一夫に對して一婦と云ふ事が、不合理なしに必然の原則となり得るのだ。)

あわびの貝の片おもひ、振られて熱くなるといふ『火事場のまとひ』、さういふ片戀もまた悲しい戀ではあるが、たふとい戀である。又たとひ片戀ではなくとも、周圍の事情に妨げられて添ひ遂げなかつた戀も、また更に貴き戀であらう。さういふ不レ遂戀を、過去の美しいなつかしい夢のやうに、死ぬまで自分の胸の奥に祕め、それを心の聖殿にゆらめく御燈(みあかし)のやうにして、かたく終生の童貞を守ると

いふことは、人として決して不幸な生活ではない。心にもあらぬ賣淫結婚を強ひられて、身をも魂をも穢す愚（おろか）なものの一生よりは遙かに美しい。

『愛して愛を失つたのは、全く愛しなかつたよりも、すぐれてゐる』とは詩人テニソンが『イン・メモオリアム』に言つた有名な句である。

初戀は純の醇なるものだ。それ切りで終る人は誰よりも幸福な人だ。しかし人はいくたびでも戀をすることがある。後の戀をする時に、前の戀人は棄てられる、或は破鏡の嘆を見るであらう。その時、棄てられた者の方を皆が氣の毒だといふ。果してさうであらうか。棄てられた者がなほ棄てた異性を愛する心を失はないならば、棄てた者こそ損をしてゐるのだ。ブラウニングが歌つた女王クリスティイナは、曾て戀した男を棄てた。それでも男はなほ女王（クヰイン）を愛して居て、かう言つた。

Such am I: The secret's mine now!
　　She has lost me, I have gained her;
Her soul's mine: and thus, grown perfect,
　　I shall pass my life's remainder.
　　　　　　Browning. *Christina*, viii

われ斯くの如し、いまわれ秘奥を得たり。

彼女われを失ひ、われ彼女を得たるなり。
彼女の魂はわがもの。かくて全きものとなりて、
われは餘生を送らむ

彼女の肉體を如何にも男は失つたらう。しかし女王(クオイン)の魂だけは、目と目を見かはした刹那に、既に男のものであつたのだ。男は既にこの戀によつて自己を擴大し完成したのであつた。その儘でその戀を自分の胸から離さずに一生を送り得るならば、棄てられた男の方は幸である。失つて儲け、負けて勝つた方の人である。幸不幸を單なる『所有』や外觀や物質で批判するのは俗流の見、言ふに足りない。人は靈性の悠久、永遠の生命を思うて禍福を判ぜねばならぬ。また棄てられたとて棄てた者を呪つたり、わめいたりする者に至つては裏店(うらだな)の女房の亞流で、それは沙汰の限りである。

わたくしは嘗て文藝が苦悶の象徵であることを說いた。生の欲求が內外から色々な抑壓を受けて、それが心的傷害(サイキック・トラウマ)となり、共傷害からして夢幻が象徵的に構成せられる。內部生活に於ける心の傷手(いたで)が聲となり形となり色となつて象徵的に表現せられるとき、そこに文藝が出來る。殊に生の欲求のうちで何よりも力強い性的關係に於て、この現象は最も著しく現はれ、生きとし生ける一切の物には、性慾に根ざした藝術的表現が見られる。春の野に歌ふ鳥も咲く花も、その聲とその色とは生殖欲望の象徵に外ならぬ。奥山に紅葉ふみわけ鳴く鹿も、自分の生命の燃燒そのものに身を焦がして發光する螢

火も、絢爛の翼を誇りがほに舞へる孔雀も、それはみな凡て強烈なる性的要求の美的表現であると見られる。

動物と違つて、進化した人間の場合に於ては、生の要求は單に性慾ばかりでなく、非常に複雑な種の精神現象となつて開展（ディヴェロプ）してゐる事は、曩に述べた通りだが、特に文藝に於て戀愛が最も主要な題目となつてゐるのは、全くこれがためである。詩人や藝術家の閲歴に於て、たとひ戀愛が何等の外的事實として現はれて居ない様な場合でも、その人の內部生活の底を、深く更にまた深く探つて行くと、そこには此性的要求が根本に伏在してゐる事を見逃す譯には行かない。否な詩人や作家に於ては多くの場合、戀愛問題に關する苦悶懊惱が、その閲歴の上にもまた作品の上にも、際（きは）だつて顯著な例が極めて多い。ダンテの如きゲエテの如きは、此點に於て世界文學の史上に名高い例であるが、これは特に多くの抒情詩人の閲歴に於て最も重要視せらるべきものだ。たとひ失戀ではなくとも、女性との關係に於て最も深い人間苦を味はつたことは、バアンズもシェリイもキイツもバイロンも、みな同様であつた。また普通に世人がそれとは氣附かないやうな場合ですらも、少し深く研究して行くと、その作物の背後には、作家みづからの失戀の痛ましい經驗が發見せられるやうな場合さへ尠くはない。たとへばスヰンバアンの如き、最近にゴッスが公にした著書によつて、彼が二十五歳の時の失戀の事實が明らかにせられた。想と調と、共に熱烈壯麗の限りを盡くした彼の詩篇、たとへば『時の勝

利』、『アナクトオリア』或は劇詩『アタランタ・イン・カリドン』中の一番長い合唱(コオラス)などに、女を呪ひ戀を呪つたあの激越の調が、この失戀の事實を知るに至つて始めて私共に成程と肯かれるのである。まことに戀の苦酒(にがさけ)は多くの詩人に取つて、詩神(ミュウズ)の泉ヒポクリイニイの水よりも、なほ更にたふとき靈藥であつたのだ。

十七世紀の哲人パスカルが書いた『思想錄(パンセエ)』は非常に面白い本だ。そのなかに女王クレオパトラの鼻が、も少し短かかつたら、世界の歴史はすつかり變つて居たらうといふ句があつた。なるほど故佐佐醒雪博士の遺著『日本情史』や、エドガア・サルタスの『戀の歴史(ヒトリア・アモリス)』などを繙いて見ると、單に詩人の場合のみでなく、古來人間生活の全面にわたつて、その背後に戀愛問題が如何に重大な地位を占めて居たかが、今更のやうに感じられる。

絕代の奇書として名高いその『行狀錄(メモアル)』に、數奇放浪の閱歷を書きしるしたヴェネチアの才人カサノヷや、また光源氏、業平、バイロン、ドオン・ホワアン、世之助、丹次郎等の戀はしばらく措く。浮氣でないのには、東の項羽と虞美人に比するに、西のユリシイズとペネロオピがよからう。千載に名を殘して世に知らぬ人の無いのはイイニアスとダイドオ、玄宗皇帝と楊貴妃、アントニイとクレオパトラ、ロオミオとジュリエット、パオロとフランチェスカ、ランスロットとエレイン、ポオルとギルジニイ、トロイラスとクレシダ、トリスタンとイゾルデ、ヒイロとレアンダア、お夏清十郎、おさん茂

兵衛、お七吉三、お駒才三、梅川忠兵衛、小春治兵衛、……ならべて見ると、なるほど餘り多いので驚かれるが、詩文のうちに藝術化されたそれらの美しい戀の名は千古萬古に朽ちないで、とこしへに人の胸に響く。桂太郎、寺内正毅、そんな名は十年ならずして旣う忘れられた。詩人は歌うて言ふ、『ラヴ・イズ・ベスト』と。

『人生の至上善(サンマム・ボオナム)は何ぞや』、むかしの哲人はかう訊いた。それは人間の永久の疑問であらう。或者は信仰だと答へ、或者は知識だと答へた。ベンザム一流の功利主義者に言はせれば、それは最大多數の最大幸福だと答へ、成金に問へばそれは黃金なりと言下に應ふるであらう。八十歲に近かつた老詩人ブラウニングは答へた、人生の至上善(サンマム・ボオナム)は一少女の接吻にあると。

SUMMUM BONUM

All the breath and the bloom of the year in the bag of one bee:
All the wonder and wealth of the mine in the heart of one gem.
In the core of one pearl all the shade and the shine of the sea:
Breath and bloom, shade and shine.—wonder, wealth, and—how far above them—
Truth that's brighter than gem

Trust that's purer than pearl,—
Brightest truth, purest trust in the universe—all were for me
In the kiss of one girl.

蜜蜂の嚢にみてる一とせの香も花も、
寶玉の底に光れる鑛山の富も不思議も、
阿古屋貝うつし藏せるわたつみの陰も光も、
香、花、陰、光、富、不思議、及ぶべしやは、
　玉よりも輝く眞、
　珠よりも澄みたる信義、
天地にこよなき眞、澄みわたる一の信義は。
　をとめごの清き口づけ。

（上田敏氏譯）

ひととせの花の色香を集めたものは蜜蜂の嚢に在る。また大きな鑛山の富は燦として輝く寶玉に、わたつみの陰も光も一個の眞珠の玉に、みな集注せられ凝結せられてゐる。しかもその寶玉よりも眞珠よりも、なほたふとき『眞』と『まこと』、それをこの近世の大詩人は、少女の接吻に於て見た。

わたくしはこのエッセイを、ブラウニングに書き始めてブラウニングで終つておく。
筆を擱く時もう夜は更けた。靜かに庭前の蟲の音に耳を澄ますと、あれも戀にやせて行く雄の聲かとあはれだ。南歐月明の夜、これも同じ戀になやむ男が、かすかなマンドリンの絲に胸の思を託して、窓の外に女を呼ぶセレナアドの歌さへ思ひ合はされる。

再び戀愛を説く

一　緒言として

私には本業としての劇務がある。しかし夏冬の休みや日曜日など、學業の餘暇を偷んでは、時に拙惡の文を草し、また需めらるるが儘に公開講演の論壇に駄辯を弄する事も稀ではない。それは、私の惡文と吶辯とが、たとひ微力なりとも今日の世道人心を益し、文化發達のために、生活改造のために、何等かの貢獻をなし得るの確信あるがためだ。また自ら信じて高遠の理想となし永久の眞理なりとする思想に對する熱意と憧憬とあるがためだ。若し萬一にも私の言説と文章とが世道人心を毒し、人の子を誤るものであるならば、――或はまた自ら自己の思想に根本的誤謬あるを發見するならば、私は之を世に公にはしない。再び象牙の塔に歸り學窓のかげに身をかくし、自ら鞭うつて研鑽と省察とを續けるであらう。しばらく筆を折つて文を草せず、口を緘して語らないであらう。

筆者が猥りに自己に就いて語る事は不遜である。それは成るべく避けねばならぬ事を私は知つてゐる。ただ緒言や自序に於て、やみ難き場合にのみ時にそれが許されるであらう。私が再び戀愛論を書

からうとする首に當つて、その動機や感懷を述ぶべく、少しく私みづからに就いて語るの自由を與へられたい。自己を語るの無禮を許さるべく、先づ最初に私は讀者の諒恕を乞うておく。

昨年の秋、わたくしは東西兩都の新聞紙上に『近代の戀愛觀』と題した一篇のエッセイを連載した。それは一方に於て、性慾をのみ喋々する一代の惡風潮あるに激し、他方に於ては、戀愛を劣情なり遊戲なりと見る迷妄が、事實上今日なほ人心を去らざるに憤激して筆を執つたのであつた。性慾をのみ說く者と、戀愛を劣情視する者との二つの極端は、一見全く背馳した思想の如くに見えるに拘はらず、それが兩方とも戀愛の人生に於ける意義を正しく觀て居ないといふ點に於て、時運の流に棹さす生活の進展を阻害する事に於て、全く結果を一にしてゐるからだ。

わたくしはこの二つの傾向に對して反抗の聲をあげた。然るに豈はからんや、かの『近代の戀愛觀』を目して、世の流行を追うて文名を賣らんとする者の業なり、と蔭口を叩いた者のある事を知つた。私も流行を追ふ程の利巧者と見られたかと思つて、獨り苦笑を禁じ得なかつた。

今にして言へば既う二十年の昔を語るのだ。その頃わたくしは東京帝國大學の學生であつた。はじめてハヴロック・エリスの著『新精神』を繙いて、卷中のイブセン論ホヰットマン論などに深き興味をそそられ、同じ著者の他の述作をも見たいと思つた。小石川の下宿屋からは、日暮になるといつも出掛けて行つて、今もなほ色々な思ひ出の附き纏ふ赤煉瓦のあの大學圖書館の藏書をあさり、その中

に同じ著者の名著『性的心理』、『男女論』などを見出した。そしてノオトを取つたりして、一時そんな種類の書物を渉獵したのであつた。まだ二十四五の青年であつた頃の私は、自分の體驗に於ても戀のために悶へた。親が貧乏で學資を與れず衣食に苦しんで居た煩悶時代のことだ。まもなく學校を出てから大學院に入るとき、私がその研究題目として取つたのは『詩文に現はれたる戀愛の研究』であつたのだ。その題目が當時の官報に出たとき、先輩や友人からは隨分色々な事を言はれた。

その研究の指導教授であつたのは、まだ留學から歸られたばかりで文科大學に講義をして居られた頃の夏目漱石先生である。私は時々先生の私邸を訪ねて、此問題に就いて教を乞うた。いつも先生とは見解が違ふので、夜を更かして激論をした事も一再ではなかつた。いつかも『ロオミオとジュリエット』の事か何かで戀愛を論じたとき、先生は反對せられた。青春時代の客氣に驅られて熱するの餘り、私はよく先生に喰つて掛つた。師弟の關係をも打忘れ、黄口の乳臭兒である私が唇を尖らし、自分の身の程をも辨へずに辯じ立てると、先生もしまひには激して『今の少年、封建の道德を知らず』といふやうな事も言はれた。そんな所が今も『漱石全集』を繙くと、あちこちに出てゐるのを見て、今は世になき先師を憶うて追憶の涙なきを得ない。青年客氣の語、遂に先輩に對するの禮を失した罪を、わたくしは今でも不都合であつたと思つてゐる。また藝術的表現としての冷罵や皮肉は如何にして言ふべきものか、批評や議論は如何にして爲すべきものか、また文章の書き方、物の考へ方は如何

にすべきものか、それらに就いては、單に先生の著書ばかりでなく、その巧妙なる座談によつて暗示せられ啓示せられた事の如何に多かつたかを追懐する時、今もなほ感謝のおもひを禁じ得ない。

二十年前、大學院の研究題目としてゐた私の戀愛研究は、其後二三年間その方面の諸書を渉獵し、幾百頁かのノオトを造つただけで、いつの間にか全く放棄して了つた。文藝の研究者としての自分の興味は、更に全く異なれる他の方面に移つたがため、戀愛に就いては遂に一篇の論文をさへ草せず、今はその時分のノオトさへ散逸して見當らない。またたとひノオトがあつたところで、思潮の變遷目まぐるしき現代に於て、二十年前の古ノオトが何の役に立つものでもない。いま私にその散逸を惜しむ心さへ無いのである。

歐洲の思想界に於ける戀愛觀もまた、この二十年間には著しい變遷を見た。その頃はまだエレン・カイの名著の英譯も出でず、もとより今日ほどその說の勢力も無かつた。私が初めて其頃カアペンタアの大膽なる著書に接し、頁をめくりつつ驚異のまなこを見張つたのは、その出版後まだ間もなき位のことであつた。また性的生活の科學的研究に至つては、二十年前でもさきに言つたエリスやヱスタマアクの著書は既に出てゐたが、輓近の精神分析學派の研究はもとよりのこと、またヒルシュフェルトの『戀愛の本質（フォム・ヱーゼン・デア・リイベ）』、『戀愛の自然法（ナトウルゲゼツツエ・デア・リイベ）』、ニイストレムの『性的生活（ラ・ボイ・セクシュエル）』の如き、此問題の新しい考察に資すべき好著はまだ世に行はれなかつた。最近に有名なストオプス女史や、故エリス夫人や或はハア

パアトの性的道德に關する諸者の論旨のごとき、これを二十年前の歐洲學界のそれに比するならば隔世の感があると言つて可い。その當時一般にはまだショオペンハウエルの戀愛論などが行はれてゐた位であつた。或人は私の戀愛觀を目して、西洋では三四十年前の舊思想だと言つて嘲つたさうだが、何を根據として公會の席上で、さういふ妄語を敢へてしたのか。私は其人の人格をばかりでなく、知識の程度をさへも疑はざるを得ない。前世紀の唯物論や個人主義のために一たびは破壞せられた戀愛が、二十世紀に於ける新理想主義的傾向の復活と共に、新しく肯定せられてゐる事實をも、私はあのエッセイに於て繰返し指摘して置いたのだ。

また單に私一個に就いて言ふならば、研究としては、此問題に就いて今なほ何等の纏まつた成果もなく、學校卒業後わづか二三年の白面の一書生の研究の如き、寔にお恥かしいものであつた。しかし文藝の研究者としては、それ以後も種々の戲曲小說類を繙くに際して、勢ひ性的生活と戀愛との問題は、いつも私の腦裡を往來せざるを得ない。また單に讀書のみではなく、實生活の貧しい體驗から言つても『エロス』の神は、私に向つて色々の苦酒(にがざけ)と美酒(うまざけ)とを强ひて味はゝしめた。この二十年間に於て、私みづからの戀愛觀さへまた從つて變遷なきを得なかつた。

ここに再び私は讀者の寬容を乞ふ。往事を追懷するの情禁ずる能はずして、私は餘りに多く自己に就いて語つたからである。

今より二十年前、はやくも現今の『流行』とかいふものを豫知して、學生時代の研究題目とするが如きは、神ならぬ身にしては有り得べからざる事ではないか。世間に流行すると、せざるとに拘はらず、私が文藝の研究者である限り、この問題に對する興味は永く私の腦裡を去らないであらう。

さきにも言つた如く、私が『近代の戀愛觀』を草したのは、明らかに、一世の傾向に反抗せんがためであつた。卽ち無闇に性慾をのみ喋々する者のみ多くして、その藝術的精神的意義を度外視し、更にまた一方には個人主義と唯物論と功利主義とが一代の人心を支配せるに慊らずして、之にも一撃を加へんがためであつた。特に戀愛と個人主義との關係に就いて、及び因習的形式結婚の蠻風に就いて、長たらしく書いて置いたのはそのためであつた。

ところが昨年夏休みの終る頃に稿を起して、新聞紙上におほかた掲載が濟まうとする時、偶然世間には色々な戀愛事件があつた。そこで私の戀愛論に對する種々の批評をも聞くの機會を得た。その批評のなかには隨分出鱈目なのもあつた。賞讃もあつたと同時に非難もあつた。靑年學生からは最も有益な參考に資すべき質問を聞く事を得た。また多くの世評のなかには、例によつて一顧に値せざる頑冥無智の徒の反對說もあつた。新聞紙上連載の拙稿の數行はおろか、一回分二回分位を讀み落し、甚だしきに至つては『戀愛至上(ラヴ・イズ・ベスト)』といふ詩的標語だけを耳にしただけで、一かどの批評家氣取りで陳腐平凡のプラティテュウドをならべて攻擊して居た者もあつた。或者は、皮肉やヒュウモアや誇張を要

する藝術的表現としてのエッセイの體を全く理解し得ないために、私が筆には上さずに言外に託して置いたのと同じ論旨を、叮嚀に註釋して居りながら、それでひとかど私に反對してゐる氣取りの人などもあつた。

私が玆に再び禿筆を呵して戀愛を說かうとするのは、徒らに漫罵を加へたる者どもにお相手をするがためではない。また今日なほ婦人の自由解放の何たるやを解せざる如き、迂愚の徒に誨へんがためでもない。それは單に、私の戀愛論に對する批評と眞面目な質疑とだけに答へんがためである。從つて此一篇中に述ぶべき論點が、質問や批評に答ふる範圍の外に出でないといふ事を、豫めおことわりして置く。卽ち今まで批評もなく質問も出てゐない點に關しては、全く之に言及する事をしない積りだ。またさきに『近代の戀愛觀』の一篇に於て述べた所と重複するが如き部分は、省略する事にした。だから單に此方の一篇だけに就いて見れば、或は論旨に連絡順序を缺くの嫌ひがあるかも知れない。それは個々別々の質疑や批評を一緒に集めて置いて、一時に應へる事にした結果、避く可からざるものである。

前の『近代の戀愛觀』は、單に戀愛の天堂界をのみ說いてその理想極致を示したのであつた。之をダンテの『神曲』で言へば、詩聖がベアトリイチェに會ふ詩美と情念と信仰との最高境地を說いたのだ。忙しかつた爲に、私が大急ぎで筆を絕つたからのみではない。聰明な讀者のためには、あれだけ

で充分な理解が得られることだらうと思つてゐたのだ。くだらない殺風景な理窟くさい文句なぞ、ならべて見たくないからである。ところが、さうも行かないらしい。世の識者顔をする者のなかには、意外な『罪の人』の居ることをも後に知つた。『正しい道を踏みはづして、浮世の暗い森かげに迷ひ入つた者』の餘りに多いのにも驚かされた。そこで今度は私も村學究の地金を出して、省筆法なぞを用ゐずに、一から十まで說教し談議する必要のある事を知つた。なるほど罪の深い邪婬の人々や、固陋の見になづむやからは、やはり地獄界（インフェルノ）から淨罪界（プルガトリオ）を通らねば天堂界には達し得られないのが尤もだ。そして地獄淨罪の二界に於て導者たるものは、信念でもなく詩美でもなく、それは道理を代表するヴルギリウスであらねばならぬ。そこで今度は私も自らの不本意を忍びつつ、多少理窟じみた議論をしながら、さきに公にした戀愛觀を、更に別の方面から語らねばならない。即ち前のは唯物的な性慾過重說に對して特に詩の戀を語つたのだが、今度はずつと卑近に、社會とか道德とか實際生活とかから戀愛を觀ようとするのである。

二　革新の理想を見よ

わたくしの『近代の戀愛觀』を讀んで、あれは理想說だと批評した人がある。勿論だ、如何にもだ。いま多くの犧牲を捧げつつ新文化建設の途上に急げる世界の人心に、赫奕として輝ける新理想主

義の光彩を見よ、と私は言ふ。

自然の必然的な法則に支配せられて、人生は動きのとれないもの、永久に呪はれたもの、又人間がいくらじたばたしても吾等の自由意志は否定せられてゐる、とさういふ風にばかり考へて居たのは、前世紀科學萬能時代の決定論(ディタアミニズム)であり機械觀であつた。それは悲痛な現實の前にひたすら首(かうべ)を垂れて、人々が諦め主義の暗い宿命論の道を辿つてゐた時代に於てであつた。一たび此現實のどん底を見極めた者が、『仕方が無いわ』と言つて居たその諦めを棄て、更に猛然として蹶起し勇躍した時、そこに動き出でる新しい強い力は理想主義である。さながら惡夢から醒めた巨人のやうに、その眼は輝きその歩みは速い。さきに旣に現實を凝視して不合理と缺陷とをみとめた。それを出發點として、更に高遠雄大の理想標識をかかげつつ、燃ゆるがごとき熱意と憧憬とを以て進まうとする者が、二十世紀新人の理想主義ではないか。嘗て唯物功利の科學萬能思想時代に於て一たび否定せられ破壞せられた人生の色々の理想は、ここに再び現實主義の根柢の上に築かれた新しい力を以て動き出でる。人間が人間の力を信じて努力する事である。それは理想の再建であると共に人生の肯定である。生活の藝術である。信念としては生命の宗教である。現實主義科學的精神によつて堅固に裏づけられたる後の新しいロマンティシズムだ。百年以前の、ただ夢みるが如き雲を摑むが如き美しいロマンティシズムとは、根本に於て本質に於て異なれるものだ。

私は今この新理想主義を思想上文藝上の問題として說かうとするのではない。たださきに私が公にした『近代の戀愛觀』の一篇に關聯して、この理想主義の立場から兩性關係に就いて述べようとするのである。換言すれば生活革新の實際問題として、此理想說を語らうとするのである。

近頃の急速な人心の覺醒に伴うて、不安動搖は益々甚だしい。これは人類の文化の異常な發達のために喜ぶべき現象だ。新しきものを創造せんとする生みの苦痛であり、また進化の道程に橫たはる荊棘を拓き障礙を排して進まんとする努力であるからだ。今日では、人間生活のあらゆる方面に革新を求むる聲そのものが既に陳腐に聞える程までになつたのは、日本も西洋も同じだ。ただ玆に深く考へねばならぬことは、いくら聲を大にして改造革新を叫んだところで、その最後の高遠な目標たる理想が明らかに注視せられて居ねば駄目だといふ點だ。卽ちどちらの方角に向つて、何を目標として改造して行くべきかが、人々の頭に明瞭に的確に知られて居なければ、動搖不安は單に無意味な動搖不安として終る。すべての進步は動搖であるが、すべての動搖が進步ではないからだ。高遠にしてまた雄大なる理想極致を目標として、之に向つて一步は一步より高く精進し努力して行くところに、眞の人類の向上は望み得べきだ。これは今さら言を要しない程に明瞭であるにも拘はらず、眼前當面の事にのみ忙殺せられてゐる多くの人々には、理想の確立と云ふ事が全く考へられて居ない。彼等は『その通りに行くものなら固より結構だが』と言つて嘲ける。『そんな事が出來るものか』と鼻のさきであ

しらふ。嘲りながらも冷かしながらも、現在の缺陷と不合理とには堪へ得ずして、彼等も亦不安である。そこで改造革新に手を着けては見るが、理想を否定しての改造では、ただ蹣跚たる醉人の醉歩と異ならない。どの目標に向つて進むかといふあてが無いのだから、ただ眼前の一歩づつを、どちらへか好い加減に踏み出してゐる千鳥足の動搖だ。それでは進轉もなく向上も無い。二十世紀に入つてから、時代の先驅者の思想傾向が著しく理想主義の色彩を帶びるに至つたのは、現實生活の彼岸に、大なる生活目標たる理想を望み、之に向つて熱意と憧憬とを以て進む不退轉の努力をしてゐるからだ。理想は遂に永遠の理想であつて、その完全なる實現は不可能なのかも知れない。たとひ不可能ではあらうとも、その最高目標に向つて尺寸たりとも一歩たりとも近づけ得ると云ふ事、それ自らに理想主義の價値はあるのだ。その一歩、その尺寸が既にそれだけ吾々の生活をより良くし、より高くしてゐるからである。一歩の向上、尺寸の進轉それ自らに意義があるのだ。

生活革新の理想に就いて考ふるとき、今の世界人心の動搖は要するに三つの反爭(アンタゴニズム)に基づくと見るべきだ。即ち第一、民族(或は人種)の反爭、第二、階級の反爭、第三、男女兩性の反爭。

もし科學萬能思想の當然の歸結たる宿命論や決定論の人生觀からいふならば、もと〳〵差別から生ずるこれらの反爭は人類の存する限り如何ともすべからざるものかも知れない。例の諦めで『仕方がないわ』と言つて了へばそれまでだ。仕方が無いと思ふから、仕方のある事までが仕方が無くなる

のである。そこで世界改造の運動の第一線に立てる人々は、この三つの反爭に對して三つの理想を最高標識としてかかげた。卽ち第一の民族間の抗爭が戰爭の慘禍を生じて人類を災することを防止すべく、先づ永久平和（イタアナル・ピイス）を理想としてかかげた。そして現に軍備縮小とか國際協定とかいふ極めて果敢ない、そして最も卑近な第一歩から踏み出さうとしてゐる。第二のものは、階級の差別撤廢のためにデモクラシイの新社會といふ遠大の理想を目標として、先づ勞働問題や經濟問題の方面から努力してゐることは、人の知る通りだ。卽ち强者と弱者、有産階級と無産階級との間の差別に基づく抗爭を解決すべく新社會の建設を理想とする。第三の男女兩性の反爭。これは世俗が普通に婦人問題と名づけてゐるもので、完全に婦人を解放してその人格を認め、すべての種類の賣淫關係奴隷生活を斥けて、そこに生活革新の最高目標を置かうとするものである。以上三つの理想は、いづれも皆その根柢を自由平等、人道正義の觀念におき、『協同愛』を根本の精神としてゐる。また今日の誤れる金錢といふ道具或は利害打算などの考察を第二義的と見なし、また古來の誤れる法則慣習に反抗する點に於ても、三つの理想は共通のものである。人間がみなすべて本當に人間らしく生きたいといふ欲求がその根本であることは、また言ふまでもない。

　ところがよく考へて見ると、

A、第一の民族反爭と第二の階級鬪爭とは、共に權利義務とか經濟關係とか法律制度とかを土臺と

して解決し、理想の實現を期する事を得るのであるが、第三の兩性關係に至つては、全然第一、第二の場合と趣を異にしたものである。卽ち昔の言葉で言へば陰陽和合といふ神祕的な人格關係、卽ち戀愛（男女の性的生活を基礎とした愛）を最後の一境とした精神生活の問題であらねばならぬ。男女間の事は、いくら道德や法則や權利義務ばかりを考へて見たつて、最後の解決は決して得られるものではない。世に云ふ婦人參政權とか婦人の經濟的獨立とか女子教育とかは、單に兩性の此人格的結合を完成するまでの、或はそのための外部的な從屬的な問題に過ぎない。人類生命の存續の根本である可き母性擁護も、また明らかにこの戀愛の問題に必然的に附隨して考へられるのだ。更にまた、

B、民族、階級、兩性、三つ共に各みな差別から生ずる爭である。そこで今かりに理想境が實現せられたと想像する。卽ち第一の民族間の――及び民族が形づくれる國家間の――鬪爭が無くなり、恒久平和の理想が實現せられるか、或は一歩は一歩よりその實現に向つて近づくと假定する。卽ち國際協定とか或はヱルズの所謂『世界國家』とか、色々の方法から始まつて、遂に民族間の戰爭が無くなり、（武器を用ゐない資本主義の國際的經濟戰爭さへも無くなり）、軍備全廢が出來たと假定する。また第二の階級鬪爭の方も、デモクラシイの新社會といふ大理想が實現せられて、無產者と有產者、勞働者と資本家とが抗爭を再びせぬ日が出來ると假想する。そこで、かくの如くにしていくら人種差別を撤去しても、又いくら階級の別を撤去しても、なほ第三の男女兩性の差別だけは、人類が地上に存

續する限り、永遠にわたつて絶對に撤去する事を得ない究極の差別である。人間が再び下等動物に歸つて單性生殖を行ひ得ない限りは、陰陽の差別だけは斷じて取り去る事を得ない。そしてこの兩性間の差別が今までの反爭（アンタゴニズム）の狀態にある限り、たとひ第一の世界平和、第二のデモクラシイの二大理想が如何に完全に實現せられようとも、なほ最後まで男女兩性の對立反爭は續くわけである。この兩性對立の反爭は究極に於て、兩性間の愛（卽ち戀愛）といふ完全なる人格的結合を極力重視する事によつてのみ解決せられ得るのだ。それ以外に斷じて道はあり得ない。男と女といふ永遠の差別の上に存在せるすべての人類が、その男と女との愛卽ち戀愛によつてのみ結合せられる事、これが兩性關係の究極の理想である。換言すれば、そこまで性的關係を淨化し純化し、また强大ならしむるに非ずんば、婦人問題は解決せられないのだ。人類は最後に於て幸福ではあり得ないのだ。

　人間の性慾苦の難問を解決し、更にまた生殖、育兒、家事勞働など、永久に婦人の手によつて處理せられざる可からざる事柄が、そこに何等の賣淫關係なく、奴隷狀態なくして行はれ、平和と秩序を完全に維持しつつ婦人も亦男子と同じく、自由平等正義人道に基礎を置ける生活にまで自己を解放する事は、ただ一つ戀愛生活に於てのみ之を求め得べきだ。戀愛を第二義的なりとしてゐる婦人の性的生活には、必ずそこに賣淫奴隷の分子が明らかに存在する。婦人の失はれたる自由を奪還すべく、何よりも先きに目を着けるべき點はこの戀愛問題だらうと思ふ。生活革新の問題としては、戀愛は男子

にとつてよりも今の婦人にとつて更に重大な問題だ。

もとより一部の宗教家のやうな見方からすれば、第一の民族反爭も、第二の階級反爭も、皆『愛』を高唱する事によつて解決し得べしと言ふであらう。私に於ても贊成だ、固より異論はない。しかし人類進化の今日の程度に於て之を說くのは、寧ろ言ふに足らざる一片の空想ではないかと思ふ。だから今日では、少くとも男女の問題を解決する上に於てのみ、私は特にこの『愛』に重きを置くのである。愛といふ言葉を男女關係に用ゐるとき、日本の普通語ではそれは『戀愛』といふより外に用語は無い。語を換へて言へば、夫婦であらうが未婚者であらうが何であらうが、男女が、性的關係に於て精神的に人格的に結合される事が卽ち戀愛である。日本語に於て『戀』といふいやな文字と一緒に、いつも聯想せられる駄洒落の遊戲的な性的關係と混同せられないために、便宜上わたくしは『近代の戀愛觀』の劈頭に於て、英語のラヴと云ふ言葉をかかげたのであつた。戀愛といふ文字には、嚴肅な內容が無いかのやうにさへ思つてる人が多いからだ。

男女の戀愛を藝術的宗教的に觀て、その法悅(エクスタシイ)の一境を詩的に表現すべく、『近代の戀愛觀』に於て私は"Love is best"といふ詩人の語を借りた。更に之と同じ思想を、實際の社會生活改造の最高目標の一として見るとき、私の所論は以上の理想主義から出發してゐるのである。おもへば儒教輸入以前の日本固有の古代思想、或はプラトオンの『フェドラス』、『シンポジアム』の昔より、二十世紀

のエレン・カイに至るまでの戀愛觀には、現代の生活革新の理想としても、そこに牢乎たる動かすべからざる眞理の存在を私は認めてゐる。

以上言ふところの永久平和、完全なるデモクラティクの新社會、戀愛至上の性的生活の三つの理想が、現在眼前の社會に於て實現が不可能であるのは、それは現在の社會が間違つてゐるからである。否な缺陷があり間違ひがあるといふ事その事は、即ちこれらの理想が行はれないといふ事を指して言ふのである。吾等が勇猛の努力を以て、これらの理想の實現に向つて一歩たりとも進む事が、即ち生活の革新であり向上であるのだ。

そこで若しこれらの理想說が今日の社會に於ては實現し得べからずといふ理由を以て、これらの大理想それ自らをも否定し去るならば、二十世紀現代の文化の向上は立ちどころに停止するの外はない。すべて理想といふものは、明確なる合理的基礎の上に立ちながら、しかも猶それはいつでも眼前に於ては不可能なものである。否な眼前に於て不可能なるが故にこそ、理想は重大なる文化的使命を有するのだ。不可能を可能の世界に持來さうと努力するところに、人生の意義は存するのだ。前にも言つて置いたやうに、仕樣がない、仕樣がないと言つてゐるから、いよいよ仕樣がなくなるのだ。人生とはいづれこんなものだとは決してきまつてゐるのではない。きまつてゐると考へたのは畢竟、決定論（デイタアミニズム）に煩はされた謬見であつたのだ。

だから、誤謬と缺陷に滿てる過去現在の思想、或は時代錯誤の偏見、及びそれから產み出された現在の組織や制度や法則や習慣を、唯一最上のもののやうに承認し肯定して之に安んじ、生活革新の必要なしと觀るならば、軍備全廢、社會改造と共に、戀愛を至上至高の道德とせる性的生活も、すべてみな空想か夢想に過ぎない痴人の囈語となるであらう。しかもそれは人生に於ける努力を惜しむ精神的安價生活者の諦めから出る言葉である。

改造革新の理想が、理想として重大なる價値を有するのは、何も遠い未來のためでも何でもない。その遠大な理想の力によつて、現在當面の生活が少しでも整理せられ改善せられ向上するからである。換言すれば、現在目前の生活をより良きものとするための最高目標を提示するからである。宗教上にいふ天國や淨土の理想境は、何も遠い未來や來世のために之を信ずるのではあるまい。それは、現在の人生そのものをして一步たりとも一尺たりとも、天國や淨土に近からしめんがためではないか。地上に樂園を建設せんがためではないか。

言ふまでもなく理想には絕對性がある。それは常に至上であり至高であり終極であり極致である。永久平和の世界、階級鬪爭なき社會、すべての男女が戀愛によつてのみ結合せる性的生活、これら三つの理想は、現在に於ては明かに宗教でありまた『詩』である。新時代の文化生活とは、臺所の改良や道路の改修ばかりではなくして、人々が銘々かくの如き『詩』最高の標識として、それに向つて情

熱と憧憬と感激とを以て進んで行く生活を言ふのである。科學萬能論者が仕方が無いと諦めて居た、かの三つの反爭（アンタゴニズム）を破壊する事である。手短に言へば理想に向つての生活『詩』に向つて進む生活であらねばならぬ。一たびこの『詩』を否定するならば、人生には宗教もなく道徳もなく藝術も無い。中世の人が聖杯（ホリ・グレイル）を求めて遍歴したやうに、人生は理想に向つての永遠の追求（クエスト）である。それでなければ人間には生き甲斐は無い。昔の人が『四海波靜』と歌つてゐた『詩』を實際生活に持來すべく、先づその手近かな一歩として華盛頓會議にも日本は參加したのだ。

　私の戀愛觀を評して、詩と實際とを一緒にしてゐると言つて攻撃した者がある。近世思想の核心たる自由平等正義人道を根基とせる前述の三大理想は、現在に於ては勿論みな『詩』の世界のものである。そして『詩』と實際生活とは決して截然として分たるべきものではない。一つの人生の兩端に存在すべきものだ。詩のみの世界に身を置いては、吾々は現在一日も生存し得ないと同じく、『詩』と全く切り離された無理想の生活も、亦明らかに墮落した下等動物の生活である。向上進轉を想はざる無努力の安價生活だ。眼前當面の實際生活が常に理想にむかつて進み『詩』によつて力づけられて居なければ、それは人間の人間らしい生活態度ではない。私は數年前『平和の勝利』（本全集第四卷に收む）を書いて永久平和を讃美したのと同じ熱意と確信とを以て、戀愛の理想生活を語るべく、あの『近代の戀愛觀』を書いた。之に對して或人は言ふ、そんな理想說を無闇に說くのは人を誤るから危險だ

と。飛んでもない事を聞くものかな。假に、永久平和軍備撤廢の理想説を聞いて、徴兵忌避をする馬鹿者があつたからとて、カント以來の永久平和説や、基督からトルストイまでの無抵抗主義をも非なりとすべきだらうか。デモクラシイの論議のために一部の青年が誤られたといふ事實があつたからとて、民本主義の社會的理想をも拒否すべきであらうか。或は學者や思想家や文筆の人は、平和論、民本思想を大聲疾呼する事によつて輕からざる罪を犯す者だと言へるだらうか。現在の誤れる社會生活に於て實行不可能なりとの理由を以て、カントをもトルストイをも狂人なりと罵るべきだらうか。先づ罵る者の愚を笑へ。

世には至上の戀を弄ぶ者がある。ただ肉慾衝動にのみ頤使せられ左右せられる結果、おのれ自らの人格の自由を棄てて平氣な者もある。戀愛以外の要素をのみ過重して結婚し、賣淫奴隷、育兒奴隷の夫婦生活を送れる婦人がある。また一たび得た貴き戀を培はうともせず育てようともしないで、至高の愛の滅び行くをすら顧みず、遂には敝履の如くに之を棄てて離婚する者さへある。全く愛せんとする努力を吝む人さへも亦多い。風紀の頽廢、家庭崩解の悲劇、その他、背後には常に女が潜むといふ種々の罪悪、それらは皆今日の人が戀愛の貴さを考へないから生ずる事なのである。好いた同志が連れ添ふのは固より結構だ。しかし戀愛なくとも結婚といふ性的關係は他の理由から見て正しいなぞと、まるで戀愛を快樂的贅澤物か何かのやうに考へるからして、個人としては自己の人格の破壞とな

り、社會としては綱紀の頽廢を見るのだ。奴隷婦人や賣笑婦や、子供を生むはたけなどの存在となつて、婦人の自由解放、その人格の尊重は永久に實現せられない事となる。

軍備全廢永久平和も、勞資反爭なき新社會も、また戀愛以外の理由や動機にのみよる賣淫的和姦的强姦的の性的結合の絶對拒否も、それら理想の實現はみな今日現在に於て不可能である事は、白痴狂人にあらざる限り、誰しも承知だ。平凡語（プラティテュウド）をならべて得意がる批評者のさし出ぐちなぞを待たずして明らかな事だ。賣淫和姦凌辱が幾多の美名のもとに行はれる事は、今日の生活に於て如何にも避け難い。それは恰も一朝事あるに際して、吾等は戰場に赴いて殺人の罪惡をさへ行ふ義務があると全く同樣だ。しかしそれは人間として間違つた事だ。蒙昧なる古人が考へたやうに美德として賞讃すべき事でも何でもない。戰爭は出來得べきだけ避くべきものである事を知ると同じく、戀愛を無視せる野蠻な性的關係は、婦人の人格を傷け自由を奪ふ一種の罪惡なりとして、力のかぎり避けざる可からざるものなる事を十分に考へるべきだ。世界平和といふ究極の大理想をかかげて、先づ軍備縮小といふが如き姑息な手段から始めて行くと同じく、見合ひ結婚の廢止や、男女七歳にして席を同じうせずの形式の廢棄や、その他實用結婚財産結婚の排斥の如き、極めて手近かな行ひ易い第一歩から着手せねばならぬ。西洋でも日本でも今の世界の多數者のやうに、最初から全然戀愛を度外視して結婚し性交を結ぶ事を、平氣に正當だなぞと思つてゐる事は、明らかに人格の蹂躙であり冒瀆であり、生活と文

化との破壊である事を知らねばならぬ。それは恰も戰爭が文化破壞の蠻行であり、罪惡であると室も異なる所なきを心に銘記すべきである。そしてあの三つの理想に向つて躍進するの努力を、一日たりとも怠つてはならない。

先づ現實を凝視して之を批判せよ。そしてその缺陷と醜穢と暗黑面とを見ると共に、情熱と感激を以て更に高き理想に向つてあこがれよ。足はしかと大地を踏みしめつつ、頭は常に高く天に向はねばならぬ。古い浪漫主義の人々のやうに、果敢ない理想の幻影をのみ追うて足が大地を離れる事の誤れると同じく、また理想を否定してひたすら現實にのみ沒頭する事は、四つ匐ひの泥龜のやうな生活だ。それは進化向上なき、永久に呪はれたる生活だ。

私は更に、日本人として特にこの理想戀愛論に就いて附言して置きたい事がある。

いつも目先きの事にのみ忙殺せられてゐる近代の日本人には、殆ど理想主義が無い。その理想といふものは多くは、支那や西洋から植ゑつけられ押し寄せられて仕方なしに、汲々乎としていつも尻から尾いて行くといふ有様だ。議會では軍備縮小を立派に三十幾票かの少數で否決し、國難來なぞと叫んだ揚句のはて、遂には世界思潮の大勢に餘儀なくせられ引きずられて、永久平和の理想主義に動かされ華盛頓會議に加はつた。一事が萬事、理想主義のない者はいつもこの有樣だ。第二の階級鬪爭から來る社會改造の理想主義に於ても、吾等日本人は明らかに西人の所說の後塵を拜したのだ。ところ

が獨り第三の戀愛至上の理想主義に至つては、これだけは決して外國から植ゑつけられたものではなく、立派な誇る可き日本の國産だ。吾々日本人の祖先の時代からして持つてゐる固有の思想である。

先づ歐洲思想の二大源流たる希臘と基督教とを見よ。毫も禁慾的でなかつた現世肯定の希臘思想でさへ、その神話には明らかに女を罪の源だと見た人生觀がある。卽ち主神がプロミイシュウスに妻として與へた美女パンドオラの箱の中には、すべての罪が祕められてあつたといふ。また古代の基督教は、保羅（パオロ）の教のやうに性的關係を罪だと見てゐた。殊に基督教神話のアダムとエヴの話にある智慧の木の實は、最近の研究では性的知識を意味すと解されてゐる。また歐洲以外を見てもマホメット教にせよ儒教にせよ佛教にせよ、性的關係を正しく率直に見ては居ない。そのほか古代の諸民族は、之を罪なりとして見るか、然らずんば原始宗教のあるものの如くに、無闇矢鱈に性的關係を神聖視するのであつた。神わざだと見るか或は罪惡視するかの、いづれかの謬見と僻みを脱し得なかつた。然るに獨り吾等日本人の祖先だけはこれらと全く異なつて、素直（なほ）に自然の儘に正しく人間らしく、人性に於ける性的關係の意義を觀てゐた。記紀萬葉にあらはれた戀愛觀は、他の外國民族の場合に見る『原始的』とは甚だしく趣を異にしてゐた。儒佛の外來思想輸入前の日本人の戀愛觀は、全人格的なる靈肉一致のものであつた。性的戀愛に於てはじめて人生の意義を味識し、大膽に戀愛至上の思想を歌つたものは、日本上代の歌謠に最も多いのである。之を天地創造神話に見るもその戀愛觀は、基督教マ

ホメツト教儒教佛教などの凡てと異なつて居た。事あたらしく言ふまでもなく誰しも知つてゐる話だが、祖宗二はしらの神が『あなにやし愛乙女（えをとめ）を』『あなにやし愛男（えをとこ）を』と互に呼ばれたとき、それは絕對至上の戀、卽ち性を異にした二つの魂の渾融冥合を語れるに外ならないではないか。

この神話によつて代表せられた我が國固有の生活理想は、有史時代卽ち萬葉詩人時代に入つても異なるところは無かつた。然るに平安朝あたりから支那の儒教思想——卽ち女と子供を極度に侮蔑し無視した孔子教の思想に誤られ歪められて、そこに王朝文學に現はれた頹廢的傾向を生じ、更に佛教から來た禁慾主義が、恰も淸教徒（ピユウリタン）の嚴格主義（リゴリズム）のやうに、再び日本人固有の生活理想を歪めて今日に及んだ。いつも國粹々々など言つて騷ぐものどもが、何故この點を考へないのか。現に德川時代に於ても、儒者の徒が性的關係に就いて全く僞善的な無批判無理解に陷つてゐた間に、國學者の方は日本固有の文化にあらはれた戀愛觀を高唱して、屢漢學者たちに痛棒をくらはした。現に本居宣長の文集などを見ても、國學者の方がよほど物のわかつた自由な戀愛觀を抱持して居た事が知られると思ふ。

西洋では今まで戀愛結婚が行はれて居たなぞと思ふのは大間違ひだ。また私の說いたやうな戀愛觀が世界平和、デモクラシイの理想說と共に、外來思想だなぞと言ふのは無知の徒の偏見に過ぎない。先づ事實を見よ、歐洲の古代中世は、財婚や政略婚や、家族のためにする奴隷結婚が甚だ多かつた。今日に於ても婦人の自由の最も尊重せられるといふ米國でさへ、財婚は極めて普通だ。米國富豪の子

女と、伊太利に多い貧乏華族との財産結婚は、いつも交際界の笑柄になつてゐるではないか。戀愛結婚でなければ人間としての完全な結婚ではないと言ふ私の所説を、西洋かぶれだなぞと言ふのは少しく可笑しいと思ふ。自由平等、正義人道が飽くまでも吾々の生活理想だ。新しからうが古からうが、外來思想だらうが、內來思想だらうが、そんな事は最初から問題ではない。

評者の或者は言ふ、もとより戀愛を劣情だとは言はない、戀愛は結婚の要素ではあるが、戀愛は無くても結婚は正しいと。なるほど、頭腦が無くても人間は人間だらう。頭腦以外の要素が備はつてゐれば、それは如何にも人間には相違なからう。しかしそれを立派な人間らしい人間だとは言はれない、と私は主張するのだ。戀愛なくとも、法律上の『婚姻』は形式として立派に成立する。しかしそれは眞に婦人の人格と自由を尊重した精神的意義ある道德的な結婚だ、とは私は斷じて信じないのである。

三　質問第一

新刊書の讀者には、あたまの進んだ高級の人たちが多いであらう。その人たちには私が玆に書かうとする一節は、餘りに平凡で低級であるかも知れない。こんな解り切つた事は、私と雖も筆に上したくはないのである。いつものエッセイを書く時ならば之を省略して、讀者の考察に任せるのが本當

だ、しかしもと／＼質疑批評に應ふる事が此稿の目的であるから、先づ最初にこの解り切つた平凡談から始めてゆく。一言のことわり無しには私が筆を下し得ない程までに、この一節が平俗である事を見のがして戴きたい。

或者は言ふ、『もし戀愛至上なりとするならば、戀のためには親孝行を棄てても可いか。忠義は構はなくても可いか。例へば學問や知識は貴い。しかし學問研究のために學者が人殺しをしても構はぬといふ法はあるまい。親孝行のため、事業のため、世間への體面のため、……その他色々の事のために、戀愛を犧牲に供しなければならぬ場合があるではないか』と。（文學博士某の言）

或人は此質問を聞いて愚問なりとして一笑に附した。なるほど物事を本質的に率直に冷靜に考へることに慣らされてゐる人から見れば、この問は或は取るにも足らざる愚問に過ぎないだらう。しかし私は之をも愚問なりとして一蹴し去らずに、叮嚀に答へて置く事を自分の責務だと思つてゐる。何となれば今日の普通人としては誰しも懐きさうな疑問であるからだ。

如何にも、今日吾々は事業のために、親孝行のために、戀愛を犧牲に供してゐる。犧牲に供する事を義務だとも考へてゐる。またその通り實行してゐる事も止むを得ない。それはちやうど戰爭が行はれた時に、國民の一員として吾々は他國人を殺戮し、殺人罪を一種の義務なりとして行はざるを得ないと全く同様である。しかしそれは人間としては避けたい事だ。殺人罪を犯さずに濟む方が人間とし

では正しいのである。その正しい事がなぜ行はれないのか。そこを考へる事が何よりも大切だ。

それは即ち現代の生活に大きい缺陷があるからだ。詳しく言へば、人間の頭が幼稚であり不道德であり蒙昧であり、またその幼稚な不道德な頭から拵へ上げた色々の組織や制度や習慣に、幾多の誤謬があるからだ、缺點があるからだ。もし第一義的に根本的に考へるならば、親孝行のために戀を犧牲とす可きやうな場合は斷じて生じ得ない筈である。

しばらく戀愛問題を離れて考へても、現代の生活は吾々をして色々の不合理と不道德とを强ひて行はしめてゐる。その不合理不道德を行ふ事が、今日の生活に於ては明らかに吾々の立派な義務なのである。世界永久平和の大理想が實現せられざる限り、吾々は戰時に於て殺人と云ふ罪惡を義務として行はねばならぬ。また金錢は人間が便宜のために勝手に拵へた道具である。然し其道具に煩はされて、今日は親孝行のために、生活難のために學業を中途にして放棄しなければならぬ學生がある。人間の本來から言へば學業を續ける事が、やがてまた同時に親孝行にもなるのが、本當の正しい人間生活なのだ。それが兩立しないのは、金錢といふものの制度の方に何等かの大きい間違があるからだ。知識慾の燃ゆるやうな、そして優秀な頭腦を持つた學生が、みす〳〵親のために金錢のために中途退學する者を見ると、私は現代生活の悲慘を見て泣かざるを得ない。其時私は涙をふるつて、それでは仕方がないから家に歸つて親に孝を盡くし給へと勸める。私みづからも學生の時に此憂目を見て苦し

んだからである。親は構はないから學問を續け給へ、と私は決して言はない。言はないと同時に、今日金錢の制度や資本主義の害惡が如何に烈しく人を禍し毒して居るかを、胸のうちに一層痛切に感じさせられつつ聲を忍んで泣くのである。金錢のために、財產のために、その貴き戀をも犧牲とする女があるのを見ると、私の血と淚とがまたしても現代生活の不合理と缺陷とに觸れて湧き立たざるを得ないのだ。

私は經濟學に就いて何等の知識をも有しない。しかし一方には遊食の民にして豪奢を誇れる者があるのに、他方には額に汗して働きながら、飯が喰へないといつて人間としての生存權をも危くされてゐる者の存するを見て、そこにもまた何等かの誤謬と缺陷がある事を見る。現代の社會生活經濟生活に、何等かの不合理が潛むのだらうとも考へる。それはちやうど今日に於て戰爭殺人の避く可からざる原因のうちに、吾々の政治生活國際生活の缺陷と不合理との存在をみとめると同じく。歸するところは、今日の人間の物の考へ方、及びその考へ方から出來た組織や法則や道具が間違つてゐるからだ。さう見るより外に斷じて道は無い。

人間が自己完成のために、生活充實のために、戀愛は至上至高至大のものである（此事は更に後段に述べる）。然るにその至上至大の戀愛が、他の忠孝や金錢や食物や事業や、その他色々のものと衝突するのは、今日に於ては已むを得ない事だ。戀愛を犧牲に供する事は、戰爭殺人と共に今日に於ては

明らかに吾々の義務である。ただ然しこんな不合理の生活が人間としての唯一最上の生活だ、これこそ人間の道だ、毫も改造を要しないものだなぞと思ふ者あらば、それは糞土の中に慣れて糞土の悪臭に氣附かざる者の類である。

人間とその生活とを先づ本質的に根本的に第一義的に凝視せよ。何等の偏見なしに、囚はるる所なしに人生を見よ。沙翁の如くに、イブセンの如くに、トルストイの如くに人生を正視せよ。そして缺陷と不備とを見て、避け得べき限りの害悪は之を除去しようと努めよ。この努力を惜しむ者は怯である。怯にあらずんば惰、惰に非ずんば卽ち痴である。怯者と惰者と痴漢とによつて、世界は一歩たりとも進み得ない。改造の無い所に向上進歩は無く、天國の門戸は永久に開かれない。眞善美の光は遂に地上を輝かさないであらう。

手短に解り易く言へばかうだ。戀を全うする事が卽ち親孝行でもあり、事業のためでもあり、また學問のためでもあるのが、人間生活の本來としては正しいのである。それが衝突の場合を生ずるのは、思想上の誤謬と、其誤謬ある思想から出來た今日の法則や道具や色々の物の缺陷や不完全から生ずるのである。親孝行のために戀しい良人と添ひ遂げられなかつたり、自分の事業のために生木を割かれて女を離別したりする事は、人間として斷じて眞直な正しい生活とは言はれない。確かに根本的に誤れる生活だ。人間が拵へた金錢といふ道具が邪魔をしたり、家族制度に缺點があつたり、法律が

不備であつたり、或は周圍の人々の物の考へ方に時代錯誤があつたり、或はそこに野卑な私慾が働いたり、種々雜多な理由によつて眞の人間的な生活は破壞せられてゐるので、純正の戀愛そのものは、忠孝友情博愛のいづれのためにも、斷じて犧牲とせらるべき性質のものではない。忠信孝悌いづれの美德を取つて見ても、その根柢には皆必ず大きい愛（ラヴ）の力が動いてゐる。その愛（ラヴ）の力のうちで最も全人格的な最も力強い靈肉合致の戀愛が、これらと衝突するといふ事は、本質的に第一義的に考へて斷じて有り得べからざる事である。讀者よ、今日起る多くの戀愛悲劇の各に就いて深く省察せられよ、そこには必ず舅姑の不當な跋扈とか、或は金錢の煩ひとか、法律の不完全とか、結婚當事者の無思慮とか、階級制の誤謬とか、何とか彼とかいふ、眞に人間としては正しく本質的でない事柄が、その禍根をなしてゐる事を發見せられるであらう。その禍根を除かんがためにこそ、今日多くの思想家は改造のために力の限りを盡くして絶叫し呼號し、大聲叱呼してゐるのではないか。世界平和を唱へ、デモクラティクの新社會を翹望する者と共に、私は一つの生活目標たる大理想として戀愛至上を語つたのであつた。

　茲に例を以て言へば、娘が死に身になつて慕つてゐる男に添はせてやるのは、親が子に對する本當の愛ではないか。それをしないのは、金錢とか名利とかいふ下らないものが邪魔をしてゐるからだ。卽ち子に對する愛が純正でないからだ。また子の方から言つても、親が正しい考へ方をしてゐるのに

その親に對して不孝となるやうな戀をしてゐるならば、其戀には必ず何か不純な不眞面目な、門地金錢名利邪淫なぞの分子が附纏つてゐるのだ。卽ち何等かの意味に於て純正でない戀愛であるのだ。親が子に對する愛、子が親に對する愛、また子がその愛人に對する愛、それらは皆一つの love であつて、根本に於て同一物であるのが人間の本性だ。それがさうは行かないのは、思想や制度に不備があり缺陷があるからだ。しかしこの不備や缺陷でさへも、ある人々の場合にはそれを乘り越えて、巧みに生活が調節せられ統一せられてゐる事は決して稀ではない。たとへば故原首相は至孝の人であつたさうだ。しかしその夫人との結婚に際して母君が強く反對せられたとき、こればかりは頑としてその言を用ゐなかつたといふ。そして死に至るまで他人の及ばない程孝養を全うし得たと傳へられてゐる。かう云ふ例は、今日のやうに思想や制度に誤謬の多い時代に於てさへも、決して稀な事ではないのである。

親孝行のために泥棒をするのは可くない。君に忠ならんがために殺人仇討の罪惡を犯す事も、正しい事ではあるまい。それと同じく忠孝『義理人情』のために、愛なき性的關係を結んで强姦和姦賣淫をなす事も、決して褒めた話ではないのである。之を褒めた話だとする習慣や思想や法則には、必ずやそこに大なる誤謬が潛んでゐる。

昔は平重盛といふ男があつた。君に忠ならんとすれば親淸盛に孝ならず、孝ならんとすれば君に忠

ならずと言つて彼は藻掻いた。忠のために孝を、孝のために忠を犧牲としなければならなかつたと思つたのは、重盛といふ男の頭が幼稚であつたからだ。まだ源平時代の社會組織や政治思想や法則や、色々のものに多くの誤謬や缺陷があつたからだ。源平時代よりして幾百年、いくたびか改造を經て遙かに進んで來た今日の世界に於て、忠と孝との間に衝突を感じて苦しむ者がゐるのだらうか。若しありとするならば、今もなほ頭だけは源平時代に棲息してゐる氣の毒な人たちである。

ここに至つて私は肅然として先づ襟を正しうして語らねばならぬ。卽ち先帝陛下が吾々に下し給うた勅語に於ても『父母に孝に兄弟に友に夫婦相和し』と仰せられた。親孝行のために愛妻を苦しめたり離別しなければならぬ事がありと考ふるやうな人が、今日若し在りとするならば、そは聖旨のある所を解せざる愚人である。或はまた現在の制度や組織に何等かの大なる缺陷あるを知らざる者だ。

思へば思ふほど、考へれば考へる程、今日の吾々の生活は多くの不正や不合理に滿ち滿ちてゐる。それは日本ばかりではない、世界中がさうなのである。俗な言葉で言へば、人間生活として成つて居ないのである。若しただ現在にのみ安んじて全く此點に思ひ到らないならば、私の戀愛論は、かの世界平和やデモクラシイの理想說と共に、痴人の囈語となり了るであらう。

四　人生の問題として

道德……それは形式道德や因襲道德をいふのではない、眞の人間性に根ざし人間味を失はない純眞な人間生活の根柢となるべき道德と、戀愛とが衝突したり、或は一方のために他の一方が犧牲に供せらるべきものでないといふ事を、私は前節に於て述べた。さてそれならば、何が故に戀愛至上なりといふか。戀愛もまた他の諸德と共に兩立し併立すべき貴きものだ、唯それだけで充分ではないか。至上なりといふは何故か。これが次に來る疑問であつた。

私はこの問に答ふるに先だつて、一つ言つて置きたい事がある。至上であるとか至上でないとかいふ事は、個性の要求、創造の生活に屬する問題である。かのニイチェ以來近代思想界の一大特徵である價値顚倒といふ事も、此點を外にしては無意味となるのである。常に生命の燃燒を白熱の高度に昂めて、寶玉の如き焰に燃えつつ、第一義的に、全我的に本質的に生きようと努力するある個人にとつて、戀愛の心境は、生活內容を更新せしめる程までに强大な感激と法悅とに導く。そこまで行けば、それは詩と藝術との世界に屬する問題となる。虛僞でも構はない、胡麻化しでも可い、ただ世の中を都合よく無事に渡つて行かうといふやうな人の目から見れば、戀愛讃美の如きは蓋し無用の辯であらう。卑近な例を取つて言へば、故安田善次郎翁の黃金崇拜のごとき、金錢萬能の思想は、いふまでもなく私たちの蛇蝎視するところのものである。しかし翁の生活態度としての徹底味だけに就いて見るならば、そこに一つの個性としての崇嚴さを認めざるを得ない。金錢そのものは、例へば修道の高士

や眞理の探究者などにとつては、『猫に小判』のやうに無價値なものである。それと同じく、また形式萬能の信者や功利唯物と屁理窟の徒に向つて、舌を爛らし筆をちびらして、いくたび戀愛を說かうとも、それは豚に眞珠を與ふると同じ無用の勞である事を、私は百も承知してゐる。それは畢竟ずるに立場の相違といふ事に歸着するからだ。異なれる立場にあつて百年二百年の論爭を續けようとも、何等の效果は得られない。わたくしが若し前の『近代の戀愛觀』と同一の立場に立つて更に再び戀愛を論じようとするならば、東西の文藝作品には、ブラウニングのあの抒情詩以上の名作は山ほどある。それらを引證し品隲するだけでも、優に浩瀚なる數卷の書を成すであらう。しかし私には今さういふ無用の勞を執る暇は無い。また豚に與ふべき物が最初から眞珠ではなくして、豚の營養分たるべき芋であらねばならぬ事をも私は知つてゐる。（本卷『宣傳と創作』參照）

事新しく言ふまでもなく、愛は人間生活の根本要件であり、一切の道德宗教の源泉であらねばならぬ。殊に現代の理想主義は　格の尊重といふ事を基礎として、人と人との關係を、すべて人間的な根柢の上に据ゑようとするが故に、人間愛は生活の根本義となる。さきに述べた新文化建設のための三つの理想は、それがいづれも皆自由平等正義人道を基礎とせる點に於て共通のものであるが、それらを更に深く更に遠く源に溯つて尋ぬれば、要するに愛の問題に歸着する外ないのである。おもふに現代の人心を支配して、正しく之を導き得る所のものは、勿論禁慾主義の宗教ではない、また自己否定

の道德でもなく形式でもない。私たちは、人間らしい欲求を否定し去る事によつて、地上樂園建設の理想を考へる事は出來ない。むしろ人間本然の欲求を肯定し强調して、而もそれがまた同時に自己否定、自己犠牲の精神とぴつたり合一して、我と非我との間に不調和なきものであらしめねばならぬ。かくの如き心境は之を愛の世界に見出すより外に道なきもので、私が曩に近代の戀愛觀を論じて『自己放棄に於ける自己主張』なりと言つた意味は、今更ここに繰返す必要もあるまいと思ふ。また兩性の愛が、人と人との間の靈妙な親和力（アフィニティ）のうち、最も强烈であり偉大であり、またそれが靈と肉との兩方面から發動し來る唯一の愛であるが故に、常に全我的、全人格的であることをも繰返すの煩を避ける。殊にこれらの事を外にしても、最近科學者の性研究の結果は吾等に向つて、一切の人間愛の源泉が性慾に在るといふ事實をさへ指摘してゐるではないか。性慾なくんば戀愛はない、戀愛なくんば一切の愛はないといふのが、近頃これら一部の科學者の到達した驚くべき結論であつた。

私は科學の硏究者ではない。從つて性慾と戀愛と道德宗教との關係などに就いて、科學的學說として之を言はうとするならば、たとへばフロイド一派の學徒の所說などを受賣するに過ぎない事となる。受賣は無用の勞である。また座右の書を取つてその一節を引證しようといふならば、わざわざ歐文の物を譯して揭げるよりは、日本文のをその儘引用する方が便利である。そこで平素多く思想上の問題に就いて論議せず、從つて何等先入の偏見なき純科學者のうちで、特に學界の耆宿として知られ

た大澤謙二博士の下の語を引用して、讀者の參照に供するにとどめよう。

『今諸君が本書を閲するならば、恐らく大に愕かれるであらう。人間には乳兒時代に既に性慾あり、加之この天使の如き淸き愛らしき兒が好んで手淫を行ふといふ條下を見られたならば、益々愕然として口を閉ぢることが出來ないであらう。而して兒童が稍發育すれば近親愛なるものに到達するが、これまた純然たる性慾であつて、しかも孝や悌といふやうな吾人に最も緊要な道德の根源をなして居り、無論基督敎にいふ所の愛そのものの根柢を爲して居るといふことを讀まれたならば、如何なる感を起されるであらうか。神の外に愛なしとは基督敎徒の言であるが、吾人は寧ろ性慾に深き根柢を有するもの以外に愛なしと言ふべきではなからうか。』（榊博士著『性慾研究と精神分析學』序）

この意味の事は昔から多くの詩人によつて歌はれて居た。文藝の作品に就いて之を見るならば、性的戀愛を以てすべての美德の根柢となし源泉となす思想は、古代中世を經て近代に至るまで毫も珍らしくはない。それがただ二十世紀に至つて新しく科學の方面からの確認（ベステイグング）を見るに至つたといふに過ぎないのである。

しかしこれが科學上の定說として學界の公認を得るまでには、なほ多くの時日を要するであらう。ただ、科學に關しては單に Layman に過ぎざる私たちから考へても、又フロイド一派の精神分析學派の說に信をおかずとも、下の事實だけは明らかに確認し得べきだと思ふ。卽ち人間の生命力が自己

の發育のためにその全部を捧げてゐる子供の時代に於ては、自己犧牲をなすだけの餘力がない。從つてまだ戀を知るの時期に達して居ない。それは自己を棄てて他を愛するだけの餘裕が無いからである。然るに生體がその個體自らの標準以上に發育作用を續けるならば、その發育は今度は生殖作用となるのだ。だから子供が成長して青春期に入つて、心身の力に自己の發育と生存より以上の過剩を得る時、はじめて生殖の慾を生ずると共に戀愛の心境をも解するのだ。子供時代の利己一點張りの者が變じて、自己犧牲の精神を解し、異性を愛慕するに至るのだ。それはまた更に轉じて、性慾と直接關係なきかの如くに見ゆる近親愛、人類愛となり、愛鄉の情ともなれば知識慾ともなり、宗教信念ともなるのである。このサブリメイションに就いても、私は既に『近代の戀愛觀』に於て之を述べて置いたのであつた。

性慾は單なる動物慾だ。しかしそれが人間の場合に於ては進化し純化し淨化せられて戀愛となつた。そして一切の道德生活の根源となり、人生に於ける至上至高の意義を有するに至つたのだ。

戀愛の心境に於てのみ、人は最も完全に人であり得る。單に生殖といふ問題を外にして考へても、男は男一人では完全な者でなく、女は女一人では決して完全な者ではあり得ない。卑近な場合を取つて見ても、一生の間、一たびも戀を味はつたことのないやうな人、或は終生全く異性に接しないやうな人には、『人』として必ずどこかに大きな缺陷がある。此事實に向つて古代の希臘人はプラトオン一

派の詩的な神話的解釋を下した。卽ち人間はもと一つであつたのが、後に男と女と云ふ二つの性に分れたのだ。分れた男女は各不完全なものであるが故に、その分裂のために惱み、お互に地上生活に於て再び相合して同心一體とならうとする。だから運命的に定められた或一人の異性と相合し得るまでは、男はその女を、女はその男を求めてやまない。それは單に性慾滿足や生殖のための結合ではない。眞の人間的戀愛はここに生ずるのだと言ふ。この點に於てプレイトニズムの所說は、人生の實際現象の眞を單に詩化して說いたものに他ならないと思ふ。

人間は孤獨ではあり得ない。個性の發達したものほど、この孤獨寂寥を感ずる事もまた甚だしい。そしてこの『心の寂しさ』が何ものによつても癒やされ得ない時、そこに戀を思ふ心は芽ぐむ。かれは異性の靈と肉とによつて此寂寞から救はれようとするからだ。異性によつて救はれようとする熱烈なるあこがれ、それが卽ち戀愛ではないか。

わたくしは今個性といふ言葉を使つた。卽ち個性の發達した人が、ある一人の異性に於てまたその獨立の凋性を認めて、それに强く牽かれあこがれる事が近代戀愛の特色である。どんな男でもどんな女でも、顏さへ美しければとか敎育財產さへあればとかいふのではない。對者の個性を認めることによつて——換言すれば對者の人格そのものを思慕する所に、近代戀愛の意義がある。それは昔からでも或程度に於てはさうであつたが、個性に目ざむること最も强き現代人に於て、また特に近代に至つ

てはじめて個性の自覺に到達した新時代の婦人に於て、戀愛に於ける個性の要素は著しく重大なものとなつたので、それが性的選擇の土臺となつた。また戀愛が生活の中心となる所以も、畢竟この個性の結合といふ點に存するのである。他我のうちに自我を見出し、他の個性のうちに自らの個性を溶かし込むこと、それが人格的結合である。

或人はいふ、戀愛は人間愛のうちで最も狹隘なものだ利己的なものだ。ただ相手の戀人だけを想うて他を顧みず、眼中博愛なく近親愛なく、遂には情死を見るに至つてその徹底的完成に達するではないかと。いかにもその通りだ。凡て愛は自己を放棄することによつて自己を主張してゐるのだから、その愛が遂に强烈の極度に達すれば、自己の生命をも投げ出すに至るのである。昔も今も『國家』を愛するがために、主君を愛するがために、金錢を愛するがために、全く他を顧みずして命を投げ出す者の珍らしくないのはこれがためだ。殊に燃ゆるが如き宗教信念のために、神の愛の祭壇に生命を捧げて悔いざる殉教者の如き、之を目して狹隘なる利己的行爲なりとは言ふを得ないではないか。愛はそれが强烈であるに比例して益々集注的となることを免れない。從つて戀愛に於てそれが最も狹隘であると見えるのは、たま〳〵戀愛が他の如何なる愛よりも强く烈しく集注的であり、熾熱の最高度に達するものなるを證するに他ならぬのである。戀をする者の心は殉教者の心であらねばならぬ。

しかし私がさきの『近代の戀愛觀』に於て述べたやうに、かくの如き熾熱の高度は決して長くその

儘で持續せられるものでない。四十年五十年の長きに及べる夫婦間の戀愛のごとき、それが深化せられて內在的となり、所謂『米の飯』となるに從つて、最初の浪漫的情熱は變じて持久的な、底力のある神聖愛となつて行く。淺薄なる觀察者には殆ど愛が冷却し消滅し去つたかの如くに見ゆるまでに、潜在的な深みを增して行くのである。卽ち一方に於ては男女の戀愛關係は、生殖といふ結果によつて直ちに親子の愛に向つて轉化する。親子があつて後に夫婦關係が生ずるのではなく、夫婦關係あつて後に、そこに生殖の事實あるがために親子の關係と愛情とが生ずるのだから、この分り切つた順序から考へても、戀愛あつて後に親子の愛は生ずるのである。男女の結合なければ人間そのものが生れ出でないのだから、兩性の愛があらゆる人間愛に超越した高度を有することは、何も今更怪しむ程の事でも何でもないのである。天地自然の動かすべからざる簡單明瞭な事實なのではないか。夫婦あつて後に親子があり、更に近親愛より博愛萬衆に及ぶに至つて、人間の社會生活、道德生活が完成せられる事は言ふまでもない。

更に、も一つ他の點から言ふならば、單なる生殖のために在る肉慾は動物的のものであつて、人間的でなく人格的のものではない。それが人間的であり人格的であるための唯一最大の要件としては、眞の戀愛といふものにまでそれが醇化せられ精神化せられて居らねばならぬ。だから凡ての人間的道德の源泉である戀愛を無視し或は賤潔視して、他の金錢とか『家』とか形式とか肉慾とか何とかの必

要の爲に性的關係を結ぶことは、自己を畜生の域にまで墮落せしむる大いなる罪惡である。自己を汚し他を汚す所の强姦であり和姦であり賣淫であつて、人間としては絕對に拒否せざる可からざる醜關係である。たとひ之に向つて如何なる美名を附し形式を胡麻化さうとも、それが動物的であり、非人格的であり、靈肉合一の人間生活を破壞するものなる事は、否み難き事實である。社會の風紀を紊亂する事これより甚だしきはあるまい。戰爭殺人が人類の汚辱であると同じ意味に於て、戀愛なき一切の性的關係は、人類の汚辱であり人格の冒瀆である。而も現在の不完全な人間社會に於ては、戰爭殺人と共に愛なき結婚生活もまた、ある場合に於て吾々の義務となつてゐることは悲しむべき事である。

戀愛なき一切の性的關係を非人間的、非人格的なりと見る私の持論からして、當然引き出さるべき結論は、分り切つた話だが、下の一點に歸着する。卽ち戀愛あつてはじめて人間が人間らしき生殖行爲を營むことを得るので、これなくんば今後百年を出でずして地上には人間の隻影を止めざるに至るのだ。戀愛なくして人間らしき生殖なく、生殖なくして人間の存在は絕ゆ。

私は言ふ、放蕩亂淫は性慾の遊戲化である。又戀愛以外の要素をのみ過重視したる性的結合(結婚)は、性慾の形式化に過ぎない。前者は言ふまでもなく畜生道であり、後者はしめ繩を張つて和姦凌辱を敢へてする者の虛僞である。共に不可。性慾を淨化して眞に人間らしき性的結合となすものは、

性慾の人格化であらねばならぬ。そこに貴き戀愛關係は成る。

或人は私に向つて『戀愛至上』といふ言葉が不穩當なのではないかといふ注意を與へられた。謹んでその厚意を謝する。私みづからは穩當だとも適切だとも考へてゐない。さしあたり以上の如き私の見解にちかき戀愛觀の藝術的表現として、私はかの拙文の劈頭に於て、ブラウニングの名作『廢墟の戀』を紹介し、その最後の一句 "Love is best" の飜譯なる事を明示して、誤解なからんことを期して置いたのだ。一つの思想に名づけらるべき名の如きは、如何なる場合に於ても單に約束的なる便宜上の稱呼に過ぎない。例へば自然主義と言つても感情移入と言つても理想主義と言つても、それらの文字は毫もその內容たる思想を明示しては居ないではないか。そしてそれは單に語呂のよい符號に過ぎないではないか。

わたくしは宣傳者(プロパガンディスト)ではない。宣傳なぞといふ事は最初から廣告屋かペンキ屋に任せて置けばよいものだと思つて居る。もし私に宣傳なぞをしようといふ意志が少しでもあるならば、『戀愛至上』だの『ラヴ・イズ・ベスト』だのといふ文句を借る事の拙なるは、百も承知してゐる。又ことさらに反對者の感情を刺戟し、好んでその反感をそそるやうな表現法を用ゐる事をもしないであらう。一つの皮肉を書くために半日も苦しんで句を練つたりする愚かさをも敢へてしないであらう。私が文を草する時それは私の自己表現である。換言すれば私の所信の告白であり藝術的表現である事を期してゐる。白

髮二寸九分とか三寸八分とかいふよりは、『白髮三千丈』と言ふ方が遙かに多く『表現としての眞』であることを私はかたく信じてゐる（第三卷のうち『藝術の表現』の條下にこの理由を述べておいた。また本卷の『宣傳と創作』の一項をも參照せられたい）。私は世人がただ唯物的なる慾をのみ喋々し、或は一世の風紀紊亂して至上の戀を弄ぶ者の多きを慨し、或は道學說教の徒の口吻を學んで戀愛の人生に於ける意義を輕んじ去らんとする者多きに憤激して、ことさらに『戀愛至上』といふ言葉を用ゐた。今書いてゐる此一文は最初から心ならずも藝術的表現法を棄てて、世の批評家に答へんがために特に殺風景な散文的文字を羅列してゐるのだから、外の名目を用ゐたつて少しも差支ない、私が自分の所思を單に實用的にさへ書き現はせば足るのである。ある人は私の所說に名づけて戀愛過重說とか言つたさうだから、私みづからも亦以下この一篇に於て、戀愛過重說といふ言葉を借用する事を辭しないであらう。

序にいふ。わたくしが戀愛觀の劈頭に引用した兼好の『徒然草』の句に、『色好まざらむ男は』とあるのは、古文に多い用語例に徴しても、『戀をしない男は』の意である事は明らかだ。無節制の荒淫亂淫を讃美したのでないことは勿論で、兼好法師は同じ文集の他の條に於て、いくたびか性慾を戒めてゐるの見ても知られる。こんな解り切つた事にさへ疑義を抱いた人があつたやうだから、附言しておく。

五　戀愛と結婚と經濟關係

『結婚の經濟的關係が、戀愛のわかわかしい夢を破つて押掛ける。性的關係のすべての美と眞とを離れて、先づ經濟的方面に於て婦人は、結婚すると男子の婢僕か或は少くとも家政管理者になる。』

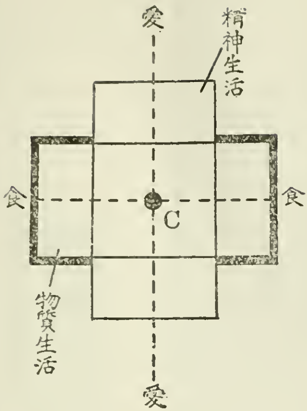
――ギルマン女史『婦人と經濟』二一九頁――

さきに述べた生活革新の三つの理想のいづれにも、パンの問題が絡み附く。第一の民族鬪爭がその根本に於て食物の爭奪戰である事は、唯物史觀の論者を俟たずして明らかだ。たとひ軍備を撤廢しても、パンの爭奪はまた平和の經濟戰の形に於て更に烈しく行はれるだらう。今の資本主義を共儘で行けば、軍備撤廢は單に流血の慘劇をやめるだけで、資本主義の害毒を一層大ならしむる經濟戰を以て之に代ふるに過ぎまい。第二の階級鬪爭が直接に食物の問題であることは無論だが、第三の兩性問題に於ても固より之を考察の外に置くことは出來ない。特に今日の如き社會組織のもとに於て。

すべての生物に於て、食慾と性慾との二つが最も强く最も大きい本能であり欲望である事は今さら言ふまでもないが、それが動物とちがつて、進化した高等な人間生活に於ては、非常に複雜な意義を持つやうになつた。しかしいくら進化しても、この二つが依然として人間生活の二大中心である事に

は變りがない。むかしマルサスはこの二つの本能を根本として物質生活の問題を論じ、性慾による人口增殖と、食慾のための食物との關係を考察してその『人口論』を書いたのであつた。私もまた食色の二つの欲望の相關的意義を尋ねて、茲に戀愛の問題を考へて見ねばならぬ。

自己保存（セルフ・プレザヴェイション）と民族保存（レイス・プレザヴェイション）とは、個人としても社會としても、人間の生命活動の二つの眼目だ。卽ち現在の自己生存のために食慾が必要であり、未來に自己の生命を存續する種（スピイシイズ）の保存のために性慾がある。食慾のために人間は勞働し、性慾あるが故に人は愛する。前者は外的な物質生活の中心となり、後者は進化して内的な一切の精神生活の中樞となる、だから食物の問題が經濟生活の根基であると同じく、愛の生活はまた道德となり宗教となり藝術となつて開展する事は、上來いくたびか私が述べた通りだ。



人間の最も完全な生活は、精神と物質と、卽ち靈と肉と、内的生活と外的生活とが完全に調和融一した生活であらねばならぬ。かくの如き生活に於ては『食』と『愛』との二つの中心が、決して楕圓の中心の如くに對立した離れたものであつてはならない。横の『食』卽ち勞働を中心とした物質生活と、縱の

『愛』を中心とした精神生活とが相合して、二つの中心はこの圖に於けるが如くにCの一點に相會し、全生活がそこに統一を得て居なければならぬ（かかる問題を圖示する事は固より不可能だ。拙劣にして不完全な此ダイアグラムは、單に私の文辭の足らざるを補ふ一方便に過ぎない）。幾千年幾萬年にわたる人類の生活は、つまり此圖を縱にいくつも重ねた場合と同じい。卽ち縱に貫く愛の線は、生殖によつて生命を存續すると共に、またプレイトニズムの口吻を以てすれば、靈的にも無限悠久に向つて連續する。たとひ自分一人の物質的生命は滅びても、愛を中心とした精神生活は無限に連なり永劫に輝く。殊に宗教の如き、藝術の如き、また道德の如き、すべてこの愛の生活の第一線に立つものだ。人の心が永遠を見るのはこの愛に目醒めた時にはじまる。

また他の方面から言へば、愛の生活は創造創作の生活だ。無限なる未來に向つての自我の擴大であり展開である。植物が枯れた後に種子を殘すやうに、自我の肉體は死しても、人は生殖によつてまた創造によつて、その生命を永遠無終の世界に殘す。音樂家の作曲、詩人の作品が、その人の歿後なほ永久に作者の生命のリズムを世界に傳ふると異なる所はない。男女兩性の愛は、卽ち血を以て肉を以て描かれたる生命の藝術であらねばならぬ。戀の歡喜は創造創作の歡喜だ。それは有限の生命をして無限ならしめんとする人間のたふとき努力である。

そこで本來から言へば、卽ち根本的に考へるならば、 love と labour とが純眞なる人間生活の二

大中心であらねばならぬ。これら二つのためには、それらと關係の遠い他の考察、たとへば習慣、名義、形式、功名などを第二段に置く事が出來る。だから自己の生命力の限りを盡くして、自由にまた歡喜のうちに『愛』し、そして『働く』事が出來たならば、それが卽ち本當に人間の人間的な生活であらねばならぬ。それでなければ自由、正義、人道の近世的大理想は實現せられ得ないのである。

歐洲中世のベネディクト派の僧院では『勞働と祈禱』 Laborare et orare といふことを標語として居た。修道の僧は禁慾の生活を送つてゐたから戀愛を知らない。その愛を轉換して、ことごとく神の祭壇に捧げ盡くす事によつて『祈禱』となした。かれらはその信仰をも道德をも藝術をも、すべてこの祈禱のうちに見出したばかりか、勞働をも亦祈禱の心もちで、敬虔なる奉仕の心を以て一生懸命にやつた。祭壇に跪くと同じ心もちで修道の僧は野に耕し羊を牧し、その勞働奉仕によつて物質生活を支へた。かくして愛と食物と、精神と物質と、二つのものが渾然として融和するとき、靈肉の間に分裂乖離する所なき統一ある理想生活を建設しようとしたのであつた。

ところが現代に於ては、個人生活にも社會生活にも、組織の上に幾多の缺陷があり不合理があるために、二つの中心は動もすれば喰ひちがつて分裂乖離を免れない。自由は奪はれ生の歡喜は失はれて、近代人の生活に多くの暗影が投ぜられた。換言すれば、人が皆純眞な人間として、人間らしく生きようとするのには、極めて都合の悪い生活が出來あがつた、生活革新のための三つの新理想は、か

くの如くにして起らねばならないのであつた。色々の美名や事情のもとに殺人が行はれ、賣淫や强姦や和姦が行はれ、自由を奪はれたる多くの奴隷の存在する事から、人類が永久に免れたいといふ熱烈な憧憬と勇猛の努力とは、茲に起らざるを得ないではないか。

『食』を中心とする物質生活と、『愛』を中心とする精神生活との關係に於て、愛のために食を棄てるならば、その人は生存を失つて餓死する外はない。また食のために愛を犧牲にするならば、精神生活は破壞せられて道德もなく自由もなく、人間の人間らしさは失はれる。それは人面の禽獸か、然らずんば『生ける屍』だ。『食』中心の形式的物質的生活の問題のために『愛』の生活が烈しい脅威を受ける時、人は往々にして自殺や情死をすらも敢へてするに至る。『食』と『愛』と兩者は、とこしへに二にして一、一にして二であらねばならぬ。いづれの一方を棄てても、或は二つの間に衝突矛盾を生じても、人格生活破產の悲劇を見るのである。然らば今日の如き唯物的な、生き苦しいコンマアシャリズムの世界に於て、この兩者のいづれを棄ていづれを輕んじてゐる者の方が實際上に多いか。それは言ふまでもなく、食のために愛中心の生活を犧牲にする者の方が遙かに多い事は言を俟たない。否な誰しも程度の差こそあれ、現代に生きる凡ての人々は愛と食との二つの中心の衝突に惱んでゐるのだ。その衝突の惱みとその苦悶とは、歷史上いまだ曾て前例の無いほどに痛烈深刻を極めたもので、現代生活の最大缺陷は根本に於て、要するに此一點に歸着する『食』のために『愛』を犧牲に

する事は、人格尊重、人間崇拜を原理とせる新理想主義から見れば、それは凡て罪惡だ。たとへば黄金といふ食物のために正義の愛を棄てるとき、そこに貢節があり變節があり收賄がある。賃銀卽ち『食』のためには、おのれの自由愛を賣つて強制勞働に從事させられるならば、そこに從順なる奴隸が出來る。民族間に於ける『食』の爭奪のために人類愛といふものを犧牲にするならば、そこに戰爭殺人の悲劇は起るのだ。今日の一切の罪惡は、『食』のために『愛』の棄てられる場合が餘りに多いからこそ生ずるのである。勢ひ此現狀に對する私たちの憤激は、愛を中心とした生活の極端なる讃美渴仰となつて現はれざるを得ない。しかも今の世に風敎を說き道德を言ふ人たちが、依然として强者、男子、資本家の方にとつてのみ都合のよい弱者の道德、奴隸の道德をのみ說くものが多い。その人たちの言說そのものは立派に精神的なのではあらうが、之を今日の經濟生活社會組織の實際に適用するときに、その結果から見れば結局、人をして『食』のために『愛』を犧牲に供すること益々甚だしきに至らしめてゐるのだ。いくら德川時代には公然行はれた事だからとて、收賄なぞはまさか辯護も出來まいが、舊弊の國家至上主義、婦人の自由を奪ひ去らうとする家長制の舊道德、その他封建時代の舊思想の說なぞは、それを現代人の經濟生活に適用しようとするとき意外にも、その究極に於ては、『食』のために『愛』中心の自由人道正義平等を奪ひ去るといふ避け難き結果を招くのだ。固より『愛』中心の生活が『食』中心の形式生活物質生活によつて支持せられねばならぬことは、三歲の童子と雖も

知つてゐる。しかし進化した生物である所の人間の人間らしさは――卽ちその生活の貴さと氣高さとは――愛を中心にした精神生活にあることを、私たちは飽くまでも激烈に極度に高唱しなければ承知が出來ないのである。それは義憤の聲だ。

愛に向つて拂はるべき代價は必ずまた愛であらねばならぬ。その外のものであつてはならない。殊に金錢、家名、その他色々のものによつて代表せられる『食』であつてはならないのだ。『食』を以て『愛』を購はうとするとき、或は『愛』を以て『食』の手段とするとき、賣淫と奴隷とは人類生活史の汚辱として現はれざるを得ない。そしてこの不正を糊塗し胡魔化し去らんがために、否な事實上の賣淫や奴隷を是認せんがために、虛僞の形式道德說や舊思想などが重寶がられて居るのである。

話は再び兩性問題に歸る。

或學者が言つた、動物の中には生殖作用を終るとすぐに死ぬものがある。人間に於ても食慾は既に性慾を養ふためのものだ。だから性慾が一番重い、とずゐぶん極端な事をいふ。又蜂のやうに食物を得る勞働蜂と、種の存續を司る生殖蜂と二つが全く別の個體になつてゐるのがあると言ふ。しかし人間が蜂でもなく昆蟲でもない以上は、私は全くこれらの說に同意する事は出來ない。(學者のなかには、生物界の現象を以て、直ちに之を人間社會のことに當て嵌めようとして、大いなる誤謬ある結論に到達する人が多い)。そこで進化した人間生活に於ては前に言つた二つの中心、卽ち生殖のための戀

愛と、食物のための勞働とが、完全に合一し調和する事によつて全生活が統一せられなければならない。『戀をして、そして勞働する』、『食うて、そして愛する、』どちらから言つても同じだが、この二つの間に衝突を生じたり或は一方のために他の方を犧牲にする事によつて、人間としての生活には悲しむべき破綻と分裂を生ずるのである。

二つの中心の間の分裂といふ事を、性的關係に就いて卑近な平易な例によつて言へば、ここに事業成功のためには最愛の女房をも棄てて顧みなかつた男がありとする。また更に、この分裂は自由を奪はれた女性に於て最も多く見る事であるが、婦人に經濟上の獨立なきために、戀愛を無視して或男子の妻となることによつて、生涯その食物に窮しないとする。この兩者は共に勞働や食物のために愛の生活を犧牲に供したのである。

試に賣淫とは何ぞやと問ふ。以上の考へ方からいふならば、それは女が自分の食物を得るために『愛』を犧牲とすることである。一宵これを數十金に代へるか、或は三十年四十年にわたつておのれに『食』を與ふる一人の男に貞操を捧げるか、それは單に五十步百步の差に過ぎない。一方の中心を他の中心のために放棄し、犧牲となしたものである。それが强姦にせよ和姦にせよ、その婦人は既に自由を奪はれ貞操をけがされた奴隷婦人として、生活の根柢を破壞した者ではないか。性交や生殖や家事育兒の事を强制的勞働化する事によつて、一個の賃銀奴隷または娼婦となり、人格的生活のあはれ

むべき破産者となるのである。

嘗て私の戀愛論を惡罵して、この世智辛い時節に戀愛は飯のさいにならないから詰らない、と言つた人があつた。勿論だ。人間の陰陽は電氣の陰陽のやうに、決して之を經濟生活物質生活のために利用し犧牲とすべきものではない。戀愛を飯のさいにすることは、明らかに賣淫であり、また奴隷生活の强要である。今日は實際上、やむを得ずして行ひつつある多くの種類の賣淫や、奴隷の生活を地上から一掃すべく、かの三つの理想標識の一つは高くかかげられた。

また世間には、義理人情のために戀愛を犧牲にするのは人間として正しいと言つて、私の說を攻擊した人があつた。しかし義理人情と云ふ言葉の內容に就いては、少しく考へなければなるまい。そのなかのあるものは單に不合理な因襲や、或は溫情主義の當然の結果として出來たものが甚だ多いが、それらは言ふまでもなく論外である。しかし眞の義理人情を以て目すべきものの根柢には、必ず經濟或は金錢――卽ち『食』の問題が伏在してゐることを否定することは出來ないのである。またかの封建時代の家族制に於ては、頻りに家柄とか血族關係とかを八釜しく言ふ。しかしその根源を深く剖析して見ると、そこには家祿とか財產とかいふことが潜む。その家祿財產の問題が後に色々轉化して、形式となり制度として現はれ、それが『家』となつたのである。その根本的性質はいくたびか轉移し變化して、後には遂に財產の一文もない『家名』といふものになつたにもせよ、根源は食物の

問題が最も重きをなして居たのだ。その『家』に居れば、或はその『家』と結婚さへすれば、飯を喰へるといふことが最大の理由であつた。だから封建時代の婦人は、良人との愛によつて結婚したのではなく、良人の父母によつて代表せられた『家』といふものへ、生殖のために肉慾のために、道具としてはたゞけとして貰はれて行き『かたづいて』行つたのであつた。義理人情といひ家のためといふのも、多くは食物や經濟關係のために、愛を犠牲に供したものに他ならない。個人としての人格尊重なぞは、最初から問題になつて居ないのであつた。

いま世間の婦人にはずるい人が多い。『家』に附屬した財産によつて勞働なしに食物を得ると共に、一方には己れの自由な戀愛生活をも完全にしようといふ、つまり無理な兩天秤をかけたものである。だから或若い女が三十萬圓の家産のために、猫いらずを飲む必要を生じたのは當然の結果ではないか。なぜ家産を棄てて戀愛を全うし、自ら額に汗して働かうとしないのであるか。また最初は黄金といふ『食物』のために、財産結婚、賣買結婚を敢へてしながら、十年の後にはその『食』の方を棄てて、俄に戀愛完成の方へ飛び出して行つたといふのも、これも隨分無理な話であつた。共人は二つの中心點の間に、ふらふらぐらぐらと立迷つた氣の毒な姿であつた。

京の町の夕暮なぞに、わかい男と女とが夫婦で荷車を曳いて街上を行くのを見る。からになつた荷車の上には、ふごみたやうな物に二つか三つの可愛ざかりの子供を入れて載せてある。一日の糧を得

て彼等は今家路を急ぐのであらう。男と女とが時々うしろを振向いて微笑むと、ふごの中の子供も亦嬉々として樂しさうだ。おほかた洛北山村の夏の夜半、盆踊の果てたあとか何かに、かれら二人の美しい戀は成つたのであらう。その子供は戀の神によつて與へられた貴い天使であつた。貧乏であつても、『戀をして働いて』ゐるのは幸福な人だ。自我の分裂なく、食と愛との二つの生活中心の間に何等乖離する所なき地上樂園の生だ。何とか御殿などといふ『美しい牢獄』や『人形の家』に幽閉されて輾轉煩悶する人たちよりも、彼等は遙かに賢く遙かに偉い。わたくしは車を曳くこの親子三人の生活をこそ、本當の家庭生活だとして讃美しつつ瞻仰しつつ、心から彼等のために祝福したいと思ふ。昔ならロバアト・バアンズ、二十世紀の現代ならギブソンの詩筆を借つて禮讃すべきものだ。貧乏をしても構はない、『戀愛と勞働』、それが本當の生活だ。その外の生活はあり得ない。戀すれば手鍋さげてもと言ひ、竹の柱に萱の屋根とも言ふのは極めて正直に語られた眞理であらう。婦人の側から言つて、生涯自分を左團扇で安樂に喰はせて呉れるだけの力の無い男に戀をするのは、無思慮の盲目戀愛だなぞと言ふのは、極めて不純な利害打算を交ふる事によつて、既に食と愛と、物質と精神との間に分裂を生じた考へ方である。さういふ考へ方からは、本當に幸福な充實した人間生活は決して建設されない。

繰返して言ふ、車を曳いて行く親子三人、あれが本當の家庭だ。或人が誣ひたやうに、私の戀愛論は家庭を破壞するものではなくて、寧ろ在來よりも合理的な人間的な戀愛と云ふものの基礎の上に、

之を建設し再建せよといふ生活革新の理想だ。『家』や『家族』は戀愛なくしても存在するだらう。しかし戀愛なくしこ『家庭』ありと言ふものあらば、それは虚僞を人に强ひんとする僞善の徒である。

しかし明確に玆に言つて置きたいことは、婦人に就いて勞働といふとき、私は決して男女共稼ぎの車を曳く勞働をのみ言ふのではない。必ずしも妻が工場に働くことでもなければ、またかの手內職と稱する家庭工業の類に女が從事するを意味するものではない。女には母としての育兒勞働があり、家事勞働がある。女が臺所で食物を調理し、家內に在つて洒掃應對の事に從ふ勞働生活は、市に出て工場で働き、車を曳く勞働と同じ立派な、そして重要な社會的意義を持つてゐる。

ただ忘れてはならない。女の家事勞働が、單に生活の資(卽ち食物)を得んがためにのみなされる强制勞働であつてはならない。自分が心身を捧げて愛する良人のために、また我が子のために、苦しければ苦しいほどそれを喜びながら、自ら進み自ら勇んで從事する勞働であらねばならぬ。强制と壓迫のもとに働くことは賃銀奴隸の生活だ。戀愛のために勞働するとき、そこにはじめて眞の自由があり創造の生活がある。愛なくして單に『食』のためにのみ、家事育兒の勞働に從事する婦人は、要するに下女とか乳母とか雇人とか云ふ家庭內の賃銀奴隸に外ならないことになる。普通の工場勞働に於て、賃銀奴隸の生活を無くする事には多くの困難を伴ふであらうが、女の家事育兒の勞働に於ては、そこに至上の戀愛關係が存在しさへすれば立派に完全に之を行ふ事が出來るのである。否な戀愛關係

なくんば絶對に之を行ふ事を得ないのである。かのベネディクト僧院の人たちが、神の愛のために野に耕し羊を牧したと同じ敬虔な心持で、わが愛する良人と子のために、家の掃除をし食物を調理し衣服を縫ふのは、それは女みづからが自由な内心の要求から出た淨き貴き勞働である。そこに戀愛と勞働との二重の神聖が合一する。人としての生の充實があり、歡喜があるからだ。この至上の戀愛あるに至つて、はじめて結婚生活家庭生活は、昔のやうに結婚の美名のもとに行はれた奴隷賣買でもなく雇傭關係でもなく、人肉賣買（カニバリズム）の娼婦でもない。婦人のパラサイティズム（寄食思想）は、疑もなく人格の冒瀆であり、また人類の汚辱であるが、戀愛を至上の要件として成立した結婚生活は、人格の完成であり向上であり、また人類のみが人を享有し得る偉大なる光榮である。

戀愛は、さきに幾たびか私が言つたやうに、平等な二つの人格の結合であり、灼熱せる二つの魂の抱擁である。だから之を基礎として出來た夫婦關係に於ては、男子の方から言つても亦自分が終日額に汗して得た『食』を最愛の妻に捧げることは、雇主が賃銀奴隷に向つて仕拂ふ勞働の報酬ではない。それは溫情主義の結果でもなければ、また飼主が飼犬に與ふる餌でもないのだ。恰も敬虔な修道の僧が、信じ愛する神の前に獻ぐる供物と同じ淨さ、同じ貴さを持つてゐる。夫婦生活、家庭生活は、かくして戀愛を至高至大の基礎とすることによつて、はじめて經濟關係を正しく解決し、雇傭關係、權利義務の關係から超越し得るのだ。眞の戀愛關係なくしてこの超越あり、この解決ありといふ者あ

らば、私は之を虚僞であり僞善であると言ふ。それは單に無意味な形式道德の主張であつて、僞なき內心の聲ではない。一朝夫婦喧嘩でもしようものなら、亭主は威猛だかになつて、『貴樣は俺が養つてゐるんだぞ』位な事は、平氣で言ひ出し兼ねないのが當然である。既に養つたり飼はれたりしてゐるのではないか、一夫一婦なぞは空疎な、一片の形式的囈語となつて、畜生と國音相通ずる蓄妾もまた當然の事となる。それは雇主飼主の方の權利であるからだ。寄生者(パラサイト)であり弱者である女の方では、不平だけれども文句は言へないといふ結果に終る。一世の風紀はかくの如くにして亂れることを知らないのか。

良人の收入によつて、妻が終生衣食の道を得るのは正しい事だ。また性交家事育兒をするのも正しい事だ。ただ此兩方の間に權利義務關係、雇傭關係、賃銀關係があつてはならないといふのだ。そして之を無からしむる所のものは、二人の魂の結合――眞の同心一體を完成する戀愛の外には斷じて存在し得ないことを、私は飽くまでも切言する。戀愛至上說による結婚によつて、夫婦間の經濟關係の解釋を根本から一新するにあらずんば、婦人を奴隷の狀態から解放する事は永久に不可能である。從つてその地位の向上は永久に望み難い。この場合『愛』と『食』との二大中心を融一する事によつて生活の統一完成を全うし得るものは、唯一つ戀愛あるのみだ。

いづれも聰明な、そして覺りの早い批評家のことだから、good, better, best 位な事は分り切つてるだらう。また one of the best と言つて、ベストが複數のものだ位の事も勿論知つてゐるだら

う。私が『戀愛至上主義の結婚』といふとき、至上（ベスト）といふ言葉は卽ち明らかに、他の多くの『よきもの』、『更によきもの』、また『最もよきもの』を豫想してゐる事は言はずして明らかだ。もし戀愛さへあれば外の事は構はぬといふのならば、——卽ち他の要件の存在を最初から認めて居ないのならば至上（ベスト）とか至大（グレイテスト）とかいふ最上級は意味を爲さないではないか。わたくしは此經濟關係の立場から見ただけでも、——卽ち他の點は今かりに論外に置くとしても、——結婚に就いては戀愛を最大最上の條件とせよ、といふのである。そして他の要件をすべて第二次的のものとして考察せよ、と主張するのである。他の要件を無視せよと言ふのでない事は、苟も中學二三年級程度の英文法でも學んだ者にはわかり切つてゐる話ではないか。

昔の遊女は親のため家のため、或は恩人と云ふ者への義理（ふかく探ればすべてそれらの背後には『食』卽ち金錢の問題が潜んでゐた）に迫られ、涙ながらに身を賣つた女である。今日でも公娼の多數はそれだ。これが擯斥すべき惡德であるのは、他の多くの社會的理由による外に、其女から言へば『食』を得んがために、一握の黃金を得んがために、自己の人格と自由とを棄てたからだ。戀愛なき結婚生活に於ては、娼婦が單に男子の肉慾に奉仕するのみであるとは違つて、女が男系の『家』のためにする生殖育兒の任にも當るわけだ。それだけ service も大きいだけに報酬も多く、生涯『奥さま』、『御寮人樣』として衣食の道を得る事が出來る。戀愛あるにあらずんば娼婦も奥樣も、奴隷婦人

である事には變りがないではないか。

たとひ如何なる精神的生活の問題でも、今日のやうな時勢に於ては『食』即ち經濟關係といふ事から全く切り離して考察することは出來ない。そこで戀愛さへあるならば、夫婦間に於ては勞資關係のやうな問題は立派に超越し解決する事の可能なのは上述の通りであるが、更に一層この超越、この解決をして確かならしめ容易ならしむべく、玆に婦人のために最も望ましく願はしい事がある。それは女の經濟上の獨立だ。卽ち今の婦人の生活に於て『愛』と『食』との間に絕對に衝突の恐なからしむるため、換言すれば『愛』の生活が如何なる場合に於ても脅威を受くることなからしむるために、經濟上の獨立は願はしく望ましき事となるのだ。さうだ、願はしく望ましきと私は言ふ、必ずしも必須要件なりとは言はないが。

女の經濟的獨立は、その人格擁護の武器であるが故に、また戀愛擁護の武器でもあるのだ。

文藝批評家としてまた性慾學の權威として知られてゐるハヴロック・エリス氏の夫人（卽ち故エディス・エリス女史）の論集『戀愛と人生に於ける新しき見解』（The New Horizon in Love and Life. By Mrs. H. Ellis. London, 1921）は、近刊の書中、戀愛の問題に就いては稍注目すべきものの一つであるが、その中に著者が米國へ行つて、市俄古（シカゴ）の家庭關係裁判所を傍聽した折の感想を語つた一節の中に言ふ、私がその時聞いた色々な、悲慘な或は馬鹿げた戀愛や離婚などの事件は、もし婦人

に經濟上の獨立があつたならば、一としてこの審判廷に持出されなかつたらうと思はれるものばかりだ。『戀愛』の敵――その內部からも外部からも迫り來る敵は、經濟上の獨立があるならば一擧のもとに驅逐することが出來る。女が經濟上に自由であるならば、やがて精神的にも自由になれようと。實際上、當面の問題としては私も無論この點に異議は無い。

ゴルスワァジイの戲曲『逃亡者（フユウジテイヴ）』の女主人公クレイアは、愛なき夫の家を飛び出して他の男のもとに奔つた。しかし經濟上の壓迫のために、その男との仲も亦斷たれなければならなかつた。そして三箇月の後には、操を賣る女となるの苦痛に堪へかねて、遂に自ら毒を仰いで死んだ。誰もが今日のやうな苦しい經濟生活をして行かねばならぬ時代に於ては、經濟的獨立の無い婦人は、たとひ一たび戀愛なき家庭生活を離れて見ても、落ち行くさきはまた更に種類を異にした一層ひどい賣淫生活に過ぎない。一つの賃銀奴隷から他の賃銀奴隷へと、さながら魚がフライ鍋から跳ね出して火の中へ落ちるやうに、移つて行くだけだ。ショオが所謂『ヲレン夫人の職業』は、かかる女の必然的運命となつて了ふ。それは確かに現代生活に於ける最大悲慘事の一つであらう。

しかもまた一方から言ふならば、今は婦人が全然社會的に解放されてゐなかつた舊時代とは違ふ。どこへ行つても "There's no chance for you" で女が追拂はれた時代とは、少しく趣を異にしてゐる。從つてその經濟的獨立が全然不可能だとは言はれないのである。――もし勞働に服して市場の

賃銀奴隷たる事にさへ甘んずるならば。

しかし私は『近代の戀愛觀』に於ても、また從つて此篇に於ても飽くまで戀愛を論題として語つてゐるので、結婚や婦人解放の事は單に筆の序に言及するに過ぎない。もし結婚とか解放とかを主題として說くのならば、結婚には戀愛以外に考察すべき多くの要素があり、婦人解放にもまた戀愛以外に幾多の論點のあることとは、最初から解り切つた話だ。それが解り切らなかつた者は、私の戀愛論に見當違ひの論難を加へようとした人ぐらゐの者だらう。戀愛以外の重大要素があればこそ、私は此一節に於て『愛』に對して『食』中心の生活との關係をも語つたのであつた。

『愛』と『食』との關係問題に就いて、單に暗示的に玆に一言して置きたいのは嫉妬に就いてである。そしてわたくしは、たしかストリンドベルヒであつたか、婦人の問題といつて何もむつかしい事ではない、それは要するに子宮と胃袋との問題だと言つた言葉を想ひ起す。

普通に男女關係に於ける嫉妬は、戀愛の一變態だとして考へられてゐる。卽ち愛が强ければ强いほど、嫉妬もまた益々烈しいのが常態だ。全く愛が無ければ嫉妬はあり得ないわけである。ただ兩極端は常に相等しいもので、非常に强い、非常に深い聖者の戀愛の如き場合に於ては、自己の愛人を他に奪はれてもそこに毫も嫉妬を感じないやうな現象を見るであらうが、それは普通の人間としては、勿論例外に屬するものだ。オセロがデズデモオナを殺したやうなものを、先づ普通一般の心的徑路だと

見るべきであらう。

然るにここに不思議な現象がある。即ち性的關係に於ては、常に女の方の愛が男のそれよりも強烈だと言はれないにも拘はらず、昔から嫉妬は必ず女の方が烈しいとなつてゐる。これは單に、女性が多く感情的なるが故に、自制心が足らないからだなぞといふ淺薄な解釋では濟まされないと思ふ。また東西の戲曲小說の類で見ても解る事だが、いくらうとの女の嫉妬――例へば藝者などが自分の『情人旦那』の爭奪や、妾たちが主人を奪ひ合ふ場合に於ける嫉妬が普通の婦人の嫉妬に比して遙かに烈しいのも、それが決して愛の強烈なるがためではなく、また必ずしも自制力が無いからだとのみは言はれないのである。それは何故であらうか。また封建時代に於ては家庭婦人の嫉妬は惡德だとして考へられ、殊に現代の婦人に比して嫉妬が少なかつたのは、單に之を自制にのみ歸することは出來ない、別に理由があらねばならぬ。また更に不思議なのは、婦人は往々にして何等の愛を感じて居ない場合に於てすらも、强烈なる嫉妬心を抱く者がある。それは果して何故であらうか。

そこにも亦『愛』と『食』との問題がある、と私は答へる。

『食』を中心とした方の外的な物質生活が、かかる場合には戀愛そのものよりも以上に强い威力を以て、其女の心を支配してゐるからだ。たとひ其女みづからにはそれが無意識であるにもせよ、無意識心理のかげには『食』の問題が最も强き支配力を揮つてゐるからだ。古來全く經濟上の獨立の無かつ

た婦人にとつて、男子の愛を失ふことは『愛』と『食』との二重の脅威であつたからだ。藝者や妾のやうな女の場合に於ても、烈しく二重の危機が迫るからだ。また封建時代の家庭婦人に嫉妬心が制し得られたのは、戀愛が極めて弱いといふ事の外に、『奥方樣』として存在する事によつて、卽ち其女と『家』との關係に動搖を生ぜざる限り、『食』中心の生活の方には脅威を感じなかつたからだ。その證據に、亭主がいくら他の女を愛しようとも金品をさへ多く妻に與へて置けば、最初から自由と戀愛とを放棄してゐる女のことだから、强烈な嫉妬心なぞは起さないのである。殊に全く戀愛なくして而も嫉妬を感ずるが如き、それが病的心理にあらざる限り、そこに『食』の問題が存するからだと見るの外はない。

勿論かかる場合、女の嫉妬には裏切られたるものの憤、虛榮心や名譽心の受けたる傷、おのれが王婦たる地位に對する愛着、そのやうな色々のものが原因してゐるには相違ない。而もそれらのものと雖も深く探れば、背後に潜在せる『食』の問題がまた重大な原因をなしてゐる事は、否定すべからざる事實だと思ふ。

私は此一節を終るに當つて、ただ『愛』と『食』との關係の一例として、嫉妬の事に言及したまでだ。もし嫉妬に就いて論ずるのならば、言ふべき事は他になほ多い。しかし戀愛そのものの諸相を究める事が此篇の目的ではなく、今はただ生活革新の理想として戀愛を說くに過ぎないのだから、私の

筆は次にまた貞操、一夫一婦などの事に移つて行く。

（附言。戀愛は個人生活の問題だ。それが生殖といふ necessity によつて社會化されるとき、やがて婚姻といふ一つの制度となり義務となる。だから戀愛と結婚との關係は、卽ち個人對社會の問題に歸着する。そして個人と社會との調和、卽ちこの二つの利害の背馳なからしめる事が、また人生の一つの理想であるのだ。然し此點に就いては、今日まで東西ともに之を說いた人は甚だ多いから、私は省略した。ただ「個人」のために「社會」を犧牲にすることの不可なると同じく、「社會」のために「個人」を無視しまた虐げることが罪惡であるのは言ふまでもない。個人の生活を充實することがすべて非社會性を有つなどと考へるのも、固より謬見だ。戀愛に於ける個人としての幸福が立派な社會的文化價値を構成し、その標準が高ければ高いほど、社會としての生活文化も亦向上し進轉するのだ。）

六　一夫一婦、戀愛、貞操

『性的衝動は一夫多妻的で、戀愛は一夫一婦的だ。』

――ヒルシュフェルド『戀愛の本質』一一八頁

『愛』は男子にとつては、その生活の一部に過ぎないが、婦人にとつてはその總てであると言つた詩人の言葉には、たとひ藝術的表現としての誇張があるにもせよ、周圍の事情、或は『愛』と『食』と

の關係の如何に拘はらず、そこに永久の眞理がある。若し警句の語法を用ゐて言ふならば、『愛』なくして『女』はない、さうも言へるだらうと思ふ。そこで愛の根原である戀愛の問題は、當然婦人に關するあらゆる考察の核心であらねばならぬ。婦人として最も大切な母性といふ事、婦人が一般文化に與ふる貢獻、婦人の道德生活の重要なる一部としての貞操、また婦人の社會的地位の向上、その人格の自由と解放、これらはすべて戀愛を離れて合理的な論議や批判をなし得べからざる事柄だ。わたくしの『戀愛過重說』の起らざるべからずして起れる所以だ。

平等な男女二つの人格の性的結合（セクシユアル・ユニオン）が戀愛であるが故に、一つの人格が二つ以上の人格と完全に結合するなぞといふことは、非常に特別な場合を除いては斷じて存在し得ないことだ。それは卽ち男女人格の不平等といふことを豫想するに非ずんば不可能であるからだ。だから眞に人格尊重を根柢とせる理想主義の革新思想から言へば、一夫多妻とか一妻多夫とかいふ事は、當然原理として成立たない事である。いかに原始時代の雜婚の制を許さうとも、またマルクシズムの共產思想と野合した自由戀愛なぞで行かうとしても、個性の發達した、自覺ある文化人の生活に於ては、結局一夫一婦の制に落着くより外に道なきものである、さうとしきや考へられないのである。この事は既に『近代の戀愛觀』に於て私は述べて置いた。

單に現代のマルクシズムばかりでない。舊約聖書のアブラハムの頃の一夫多妻とか、マホメツト教

徒のそれ、或は日本從來の蓄妾制、また甚だしいのは支那の喇嘛教の一妻多夫の思想などは、皆すべて『食』の問題、卽ち肉的物質生活の必要のため『愛』の生活を犧牲とする場合に生ずるものに外ならぬ。男子（或は女子）の經濟的能力、或は純粹に生理的であり動物的である生殖とか性慾とかいふもの、そんなものばかりを土臺として考へるから、自由戀愛だの女子國有などといふ迷妄の說さへ出るのだ。人格的結合である戀愛を、一切の性的關係の基礎道德として考へるならば、卽ち飽くまで戀愛至上といふ事を重んずるならば、男女間の風紀――從つて一般社會の綱紀は肅正せられて、一夫一婦の原則は完全に行はれるのだ。性的結合は決して經濟的結合や、性慾的結合や、因襲的結合や或はまた强制的結合であつてはならない。飽くまでも男女人格の自由平等を根柢とした戀愛結合であらねばならぬ、と私が繰返し斷言する所以は此點に存する。

戀愛至上の思想あつてはじめて、一夫一婦の制に的確なる精神的道德的合理的基礎を與ふることが出來るのだ。それ以外の一夫一婦論は、僞善說にあらずんば則ち單なる便宜的因襲的實利的の御都合主義か形式主義のものたるに過ぎない。少くとも人間としては、第二義的の考察として取扱はるべき問題になるとおもふ。

至上至高の性的道德としての戀愛は二つの人格の全的結合なるが故に、そこに一夫一婦の原則が確認せられたとすれば、必然的に之と相卽不離の關係をなして生ずるものは貞操觀念だ。卽ち男女が

お互に貞操を確守し嚴守する事によつてのみ、この一夫一婦が實現せられ得るからだ。貞操は戀愛の神聖なる擁護者であると共に、また眞の戀愛には必ず貞操が伴はざるべからざるものである。『食』の問題に煩はされて居ない純眞な戀愛の場合に於ては、嫉妬は必ずしも惡徳として非難せらるべきではなく、寧ろ双方の人格の純潔を保たうとする貞操觀念の副作用だとも見るべきだ。妬くことさへもしない女が明らかに不貞の女である場合は甚だ多い。

戀愛を至上の道徳だと考へてゐない世間一般の人たちの貞操觀は、極めて危(あぶな)いものである。戀愛を基礎として考ふるとき、貞操は明らかに先づおのれの人格の純潔を保持し、同時にまた對者の人格の純潔をも要求するのである。決して對者のために自己の貞操を守るものではない。若し舊い道學者流の說けるが如く、貞操とは『家』のため或は良人のために守る可きものだとするならば、良人もない純粹の獨身者或は處女などは、貞操を顧みずして可なりといふ結論に達するではないか。或は言ふだらう、恥を知るから獨身者にも貞操があるのだと。然らば恥を知るとは何か。羞恥の念は畢竟たふとき自我を守らんとする心の自然的發露ではないか。

また封建の舊道徳の徒は更に馬鹿げた事を言ふ。家の血統の純正を保つがため貞操は必要だと。若し然らば婦人のみが之を守るべきで、男子には貞操を守る理由なしといふ事になる。彼等はその畜生のやうな飽く事なき性慾を滿足すべく荒淫亂行少しも差支なく、それは男の『かいしよ』といふ事

になるではないか。かくて一夫一婦の人格的平等は忽ちにして破壞せられるのだ（男子が花柳病菌を神聖なるべき家庭內に輸入する事なぞは、今問題外に置く）。また單に血統純正のための貞操なりといふならば、或方法を用ゐて精子と卵巢との間に交渉を絕てる性的關係を結んだ場合、婦人に於ても血統に關係なきが故に姦通自在なりといふ愚劣極まる結論にも達するではないか。

かくの如きはすべて、いつもながら沒分曉な舊思想の徒の愚昧さを示す例證として、一噱に附して可なるべき偏見だ。そんな愚昧な思想で居るから、既婚者も未婚者も世を擧げて貞操の何たるやを知らず、一代の風紀は益々頹廢するのである。自由平等の二つの人格あつてそこに眞の戀愛があり、眞の戀愛あつてはじめて一夫一婦の原則は確立し、合理的なる貞操觀は成立する。單に血統の純正を保つといふが如き理由を以て、婦人にのみ貞操を說く者の如きは、橫暴なる男子が己れの『家』のために、奴隸婦人に向つて獄則を强要するの類である。私は再び言ふ、戀愛なくんば貞操はない。戀愛なくして貞操を强要するのは、一片の形式論に終る。形式論は力なき虛僞の生活を造るもので、生の充實、人格の自由は虛僞と形式とからは斷じて望む事を得ない。

また『愛』と『食』とが一致しないで靈肉分裂の二重生活をなす奴隸婦人の場合に於て、貞操は不思議な奇現象を呈する。卽ちその最も極端な例として賣笑婦を見よ。心ならずも肉だけは多くの男に賣りながら『愛』の精神生活は矢張りその中のある一人にのみ捧げられて、そこに極めて無理な一夫

一婦を實現してゐる。かく靈と肉とが分裂乖離した貞操は、貞操として既に無意味であるばかりでなく、其女自らにとつて明らかに人格生活の破壞である。戀愛なき夫婦關係に於てもまた、妻が心ならずも肉をその良人に捧げつつ心は他の男を戀して居るやうな場合、靈肉分離の戰慄すべき顰蹙すべき、表裏ある不貞現象が無いとは誰が言ひ得るものぞ。眞に内的欲求から發した純眞な鞏固な貞操感が、かかる婦人に於てあり得るとは考へられないではないか。沒人格の無戀愛結婚に於て强ひて貞操を言ひ、一人一婦を强要せんとするとき、そこに女の身の上に多くの悲劇を見るに至るのはこれがためではないか。

難者は言ふ、もし戀愛至上說によつて結婚するならば、浮草やけふは東にあすは西、果して何を以て貞操を嚴守し得べきかと。

わたくしが今この問に答ふべく更にペンを執らうとした時、座右の火鉢に火が絶えた。女中を呼んで火を持つて來るやうにと命じた。やがて十能に『火』を持つて來た女中が火箸の尖に摘んでゐる物を見ると、眞黑な炭だ。僅かにその一端にほんの少しばかり赤い焔を見せてゐる。『そりや炭だよ、火ぢやないさ、』と私は言はずに居られなかつた。女中はそれでも火に相違ないといふ顏をしてゐるが、私は手をかざして見て少しも暖かいとは感じない。かういふ女中は困るな、私は心のうちで獨りさう思つて默して居た。

炭は眞黒な物である。それが赤々と充分に燃燒してゐるため手を翳して暖を取り得るだけのものでなければ、私は『火』として認めないのである。もとの眞黒な炭のやうな性慾が充分に淨化せられ精神化せられて、眞に全人格的結合となるまでに燃燒して赤々と燃えてゐるものでなければ、私は至上の道德としての戀愛だとは言はないのである。まだ大部分炭の儘であるやうな衝動的の戀愛や、或は一時の利己的遊戲の戀を以て、人は結婚の至上至大の要件とはなし得ないのである。女中の持つて來たのは性慾の『炭』であつて、私はそれを戀の『火』ではないと否定する。

まことに戀は火だ。炭が黒かつたり、くすぶつたりするのは、まだ本當の火ではないからである。熱すれば熱するほど、燃ゆれば燃ゆるほど、純化せられ聖化せられ美化せられるものが戀の焔である。

また性慾の精神化とか、理想化とか云ふ語の曖昧を避けるため他の例を取ると、假に私が宗教信仰を至上だと說くとする。そこで迷信とか淫祠邪教の類を持出して來て、これも矢張り一種の宗教だがかくの如きを爾は至上なりといふかと問はれた時、私は否なと答へよう。たとひ其迷信が如何に精神的な神秘的なものでも、それは宗教らしい宗教でないからだ。又封建時代の忠義は確かに立派な精神的な美德だが、けふ一人の君侯のために極めて忠實に働きながら、あすはまた他の君の馬前に斃るゝやうなのを、忠義者だとは言ひ得ないのだ（たとひ其時々の忠義振が如何に精神的であらうとも）でまた

勇氣と一口に言つても、それにも色々のがある。沈勇も剛勇もあるやうに、暴虎馮河の勇もある。わたくしは一概にすべての勇氣を至上なりとは言はないと同じだ。

くだくだしい例なぞはさしおいて、戀愛にもまた種々の相があり階段があることは言ふまでもない。朝三暮四、相手を代へて朝にゆふべをはかられぬやうな戀は蕩兒の戲であつて、人格結合としての眞の戀愛ではない。女が戀のために初夜の操を捧げた時、二人の男女の生涯は永久に決せられてゐる。少くとも斯くありてこそ、結婚の至上の要件たる戀愛なりと言ひ得るのだ。人生至上の道德としての理想戀愛なりとも言ひ得るのだ。さまざまな戀のうちで、カサノヴヤ、業平、バイロンのそれのやうな神話的なのも、外の立場から見た時、それは矢張り人生の最も美しく貴きものの一つには相違ない。しかしそれが永續的ではないがために、すべての人の實際生活の基礎とは、したくても出來ない戀愛である。ダイヤの玉はたふとくても豚の食物にはならないと同じだ。

わたくしは茲に永續的と言つた。戀愛を單に道德的にのみ見てその尊卑優劣を決する標準は、決して戀愛以外に存するのではない。戀愛そのものの永續性純潔性によつて決せられるのである。衝動的肉感的戀愛は永續しないが、全人格的結合である純眞な戀愛に至つては、その人格的であり純眞であることそれ自らによつて、永續性を持ち得るからである。

生活革新の道德的理想として觀ずに、單に心理的事實として客觀的に觀るならば、戀愛には永續的

なのもあれば非永續的なのもある。青春の胸の血の躍るに任せた一時の戀もあれば、また共白髪までも續いて、續けば續くほど深化せられ內在化せられて行く戀愛もある。だからただ sein の問題として見た戀愛には永續性があるとのみは言はれないが、sollen の問題として之を考へるとき、永續性は戀愛の重要なる本質的要素であるのだ。私が嘗て『正しき戀』と云ふ文字を使ひ、また上來いくたびか人格的と言つた時に、いふまでもなく此本質的要素が包含せられてゐる。すべての人格活動は無闇にその對象を移動させたり、變轉させたりするものでないことは言を要しない。

戀愛をただ變じ易きが常なる感情作用だとばかり思つてゐたのは、舊思想だ。そこには知的判斷も伴へば強い意志の作用も働いてゐる。だからこそ全人格的なのである。その戀愛の完成は、やがてまた人格の完成であり、自我の充實であらねばならぬ。それが制度として現はされたのが結婚だ。それ以外のものは結婚ではない。掠奪だ、賣淫だ、駄洒落だ。

至上至高の道德であり藝術であり宗教である戀愛は、永續的のものである。然るに永續的でない一時的な戀愛が、事實上世間に多いのは何故であらうか。答へて言ふ。戀愛至上といふことを考へてゐる人が極めて少いからだ。一時の感情だ、快樂だ、遊戲だなぞと思つて、これを忽諸に附する人が多いからだ。

火は燃えるものだ、否な燃えなければ火ではない。それが燃えないで消えるのは何故だらう。怠つ

て居て新しい薪をくべなかつたり、通風を絕つたりするからではないか。人格的な戀愛の火は、東邦の或神殿に在りといふ永久の聖火のやうに、太初から永劫にわたつて燃えなければならぬ。それが永久に永續的に燃えないのは、戀愛至上といふことを考へないために、之を永久に燃えしめんとするだけの努力をしないからだ。吾々の肉體が絕間なき努力によつて細胞の新陳代謝を行ひつつ生命を維持してゐると同じく、人生の藝術であり生命の宗教である戀愛に、滿身の努力をこめた、日に新な創造創作を續けることによつて、はじめて永續性を保ち得るのである。また同時に、身體に害ある一切の不養生を愼むと同じく、人格的戀愛を破壞し傷けるやうな凡ての害惡を避くべく、心の衛生や養生法を忘れてはならない。殊に男女人格の平等を破るやうな一切の行爲を愼み、或は肉慾に向つて十分の節制を加ふるが如きは、何よりも大切な『愛の衛生法』であらねばならぬ。かくの如き努力を不斷に續けながら、而も戀愛が消滅するならば、それは恰も生來蒲柳の人のやうに、その戀は最初から何等かの脆弱性を持つてゐたか、然らずんばまた人力の如何ともすべからざる事由に基づくと斷ずるの他はあるまい。戀愛は、たとへ神殿の聖火と同じく永續的ならずとも、少くとも個人の生命と同じだけに續き得るものたらしめねばならぬ。長命であり得べき愛が短命であるのは、養生といふ努力が足らないからだ。

結婚によつて戀愛は一段落に達する。達してのち更に新しき時期に入り、壯年期より老境に及び、

最初の花々しい浪漫的戀愛は、その光と色とを失ふと共に深潜的となり內在的となつて、いくたびか姿を變へる。しかも同一の對象に關する同一の戀愛が、生涯を通じて其人の生活中心となる。世には往　にして結婚後の、或は老境に入つての夫婦愛を目して戀愛に非ずとなし、そは友情なり情誼なりと言ふ人もあるが、それは謬見だと思ふ。再び炭火の比喩を用ゐれば、性慾の炭は燃えて戀愛の火となり、其火は更に白い灰となる。しかも其灰は同じ灰白色の他の粉末とは全く本質を異にして、やはりもとの炭や火と同一成分から出來てゐる物だ。日本でいふ共白髮(ともしらが)の夫婦愛、西洋ならバアンズの歌にある『ジョン・アンダソン』や、カアペンタアの詩集にある『金婚式(ゴオルデン・ヱッディング)』などの戀は、黑い炭が化して白い灰になつたのに比すべきであらう。

戀愛結婚によつて成立した夫婦間に於けるかくの如き永續性の戀愛は、單に戲曲小說が吾等に示す所の空想でもなく假構でもない。私は遠い過去や或は外國の事でなしに、眼前日本の家庭に於てさへ現に屢之を見てゐる。私はその適切なる一例として、與謝野夫人が自らしるされた感想の一節をここに摘錄しよう。

『私達は二人の愛情に斷えず新しい生氣を吹込み、壞しては建て直し、且つ鍛へ且つ深め且つ醇化する事に努力しました。今から振返つて見ると、最初の頃の私達の戀愛は熱烈ではあるが、まだ甚だしく苦勞の足りない、鹽氣の乏しいものでした。私達は久しい間に幾千回の破壞と改造とを自分

の戀愛に實行して來たのです。私達の夫婦關係は毎日々々新規蒔直しを試み、毎日々々以前に無い新しい愛の生活を築き上げて居るのです。

私達は昨日の戀愛を其儘に靜止させ、其上に糊塗して『永久不變の愛』と云ふやうなものを賴みにして居るのでありません。常に大いに二人の愛が進化移動して止まない事を祈つて居るのです。

それで無ければ、戀愛は心の化石であり、退屈と苦痛とを感じないでは居られないでせう。』

と言ひ、更にまた、

『愛の創作をしない夫婦は謂ゆる因習的夫婦です。古臭い夫婦です。其仲には新しい愛の生活は無いのです。それは名義上、戸籍上、世間的習慣上の夫婦であつて、常に潑溂とした愛の結合を意味する完全な夫婦の實質を備へて居ないものです。

さういふ夫婦は基礎の無い夫婦であるから、その精神的結合力は脆弱であつて、何かの機會に崩壞すべき危險を内含して居るのです。……（中略）

私は愛の無い夫婦關係は破壞すべきものであると確信して居る一人です。さういふ夫婦關係は如何に物質的に富んで居る階級にあつても、最大不幸だからです。

併し破壞も、改造も、新規蒔直しも、出來るだけ現在の夫婦の間に於て實行すべきものであると思ひます。愛は紙上の抽象問題で無くて、二人の人間に卽した重大な事實です。二人の人格を尊重

し合はねばなりません。愛の對象を二三にすることは、自己の內にある純粹性の苦痛とするところであることを反省したいと思ひます。梅の花が厭になつたから、櫻の花に心を移すと云ふ事は大した問題でもありません。それでも人に由つては同じ梅の花にも新しい美を發見して愛を續けて行きます。人と人との關係は花と人との關係と違つて非常に複雜です。雙方の眞劍な努力に由つて新しい愛の音樂が鳴り出さないとも限りません。』

――『明星』――大正十年十一月號所載『愛の創作』より――

私はこれらの言葉に十分の敬意と賛意とを代表するに躊躇しないと共に、戀愛に永續性なしと斷ずる論者の再考を煩はしたいと思ふ。

七　戀愛と自由

人間といふ者は賢いやうでまた愚かな者だ。天地開闢以來林檎が地に落ちるといふ事は誰しも見て居りながら、ニュウトンが出るまでは萬有引力といふ事にも氣づかず、況んや相對性原理といふ事も知らなかつた。地球が動いてゐると斷言したばかりに、酷い目に遇はされた時代さへあつたのだ。併しまあそれはよしとして、古來幾千年の間、東西ともに、婦人といふ者が人格ある人間だといふ、このわかり切つた事實に氣附かなかつたのは、更に一層驚くべき事であらう。すべての近代思想の淵源

のやうに見なされてゐるルソオですら、さうは見て居なかつたのだから驚いたものだ。ウルストンクラフト女史の『女權擁護論』から數へて見ても、まだ僅かに百年あまりの事に過ぎない。

婦人は奴隷ではなくて自由の人格だ。この解放論が一般に認められる時、その當然の歸結として戀愛の自由といふ事が考へられる。誰しも言ふ通り、戀愛は自由である。自由を奪はれたる精神的奴隷に戀愛はあり得ない。相手を選擇するの自由が戀愛の第一要件であるからだ。他の强制によつて或は何等かの必要に迫られて、したくもない戀をする人間は無いのだから、戀愛と强制とは根本に於て一致し得ない思想だ。自由のない所に戀愛は無い、さうも言はれ得る。

卽ち私が前項に述べた一夫一婦論から言ふと、自由、人格、戀愛、貞操、さういふものの間には引き離すことの出來ない關係が儼として存在する。生活革新の理想としての戀愛が、男女間の性的道德の根本となり基礎となるのも亦、これあるがためだ。

西洋人のいふ自由戀愛（フリイ・ラヴ）といふ言葉は、『馬から落馬』といふのと同じ愚な言葉である。簡單な tautology に過ぎない。自由がなければ戀愛は無いのだから、馬からでなければ落馬しないのと同じだ。唯この自由戀愛と云ふ言葉を、普通の慣用法に從つて放縱不羈の戀愛關係と解するならば、私が前節の所論に述べた通り、それは實は『自由性交』といふ事になるのだ。精神的な人格的な戀愛に絕對の自由を與へるならば、結局は一人格たる男子と一人格たる婦人との一對が出來るので、最後は一夫一

婦の原則に落着く外は無いのである。戀愛そのものの本質が然らしめるのだ。だから自由戀愛と云ふ言葉は、何も道學先生が戰慄したり、新聞記者が目を白黒したりする程の恐ろしい言葉でも何でもなく、實は極めて愚かな詰らない言葉に過ぎないのである。『戀愛の自由』と『自由戀愛』（即ち自由性交）とをごつちやにして考ふる輩の如き、先づ自らの頭腦の魯鈍を恥ぢよ。

奴隷婦人がその久しく失はれた自由を奪還するとき、得る所の最も尊きものは戀愛の自由であらねばならぬ。

事新しく言ふまでもなく、自制のない自由といふものは有り得ない。自由は放埒でもなく我儘でもないからだ。だから若し戀愛の自由の美名を借りて放埒の亂行を敢へてするものあらば、それは社會奉仕の美名を借りて私腹を肥す詐欺泥棒と同一の者である。私は玆に至つて戀愛と自制との關係に就いて、簡單に述べる必要を感じた。

さきに私は『近代の戀愛觀』の文中に、眞の戀愛は人生の最も尊き理想なるが故に『難行苦行だ』とも言ひ、また『修道の高士にも劣るまじき淨い純な心を持つた者でなければ本當の戀は出來ない』といふことを書いて置いた。即ち至高の藝術には、必ず奔放の生命力に加へられた制壓（リストレイント）がある。眞の自由には必ず節制（コンティネンス）があらねばならぬ。人生に於ける最大の創造藝術であると共に、また人格の自由を根本とせる戀愛には、強い節制や制御（コントロール）が必須條件となるといふ意味を言つて置いたのだ。こ

の節制と制御とが無いときに戀愛は遂に破滅するか、然らずんば荒淫となり邪淫となり亂淫となつて人格的生活はその根柢からして破壞し去られるであらう。戀愛を性的道德の基礎として見るとき、この自制といふ事が何よりも先づ重要な問題となる。

最近に英米でこの性的問題に就いて最も廣く讀まれ、世の視聽をそばだてしめてゐる書物は、ストオプス女史の『結婚戀愛』（マリッド・ラヴ）と、及び之に對する世の非難と質問に答ふべく女史が再び筆を執つて著した『賢明なる親の道』（ワイズ・ペアレントフッド）とである。二冊とも何が書いてあるかといへば要するに男女（卽ち夫婦間）の戀愛を完成し永續し改新して行くための産兒制限の必要と方法を論じたのである。肉的にも靈的にも此自制節慾を加へなければ戀愛は破壞せられるといふ事を、その制限の實行方法をまで詳細に論じたのである。世の先覺者は旣にかく戀愛のためには産兒制限の必要をまでも力說してゐるのだ。ストオプス女史は科學者でありながら、曩に櫻井錠二博士と合著の日本の能樂に關する書を著はし、詩や劇の方面の創作も多い人だ。右の二卷の書も旣に日本に早くから輸入せられ、最近また第三卷目の續稿『輝ける母性』（レイディアント・マザフッド）が舶載せられた。

私は産兒制限の問題に就いていま可否を言ふのではない。ただ一對の男女間に自制なき節慾なき生活が、動もすれば産兒過多となり、徒らに質的ならざる量的の、數のみ誇る子寶思想となつて、それが遂には夫婦間の戀愛を冷却せしめ、戀愛の永續性を阻止する一原因たり得ることだけを指摘したい

と思ふ。

動物的な性慾が淨化せられ純化せられて人格的戀愛となるのは、何によつてであるか。靈肉二元の生活の不調和に惱む人間が、性的本能（卽ち性慾）と性的理想（卽ち戀愛）との間に合一點を見出し、兩者の矛盾衝突なきを得しむるのは、何によつてであるか。そこに卽ち節慾自制の必要を生ずる。節慾とはかの昔の宗敎生活に於けるが如く、極度に肉を虐げる事が靈を向上せしむる所以なりと考へた禁慾主義ではない。之を食慾の場合に譬ふれば、節慾は保健のために必要な節食に比すべきである。決して絕對の斷食ではない。斷食は禁慾であつて、生命を保つ道でもなく保健の道でもない。またかの荒淫亂行に至つては、まさに之を過食の害に比すべきであらう。

人間の飽くなき欲望に向つて抑壓が加へられるとき、そこに淨化作用が行はれるのだ、とフロイド一派の學徒はいふ。いかにも人生は、自己の生命力の放恣な無制限な發現であつてはならない。それは生活の破壞に終るからだ。その生命力に加へられたる抑壓作用あるが故に、欲望は淨化せられ純化せられて、藝術となり宗敎となり知識となりまた人間愛ともなるのである。だから人間生活の偉大さと崇高さは、この抑壓作用の結果だと言つても過言ではないのだ。唯この抑壓が自己以外の人や物や法則や因習によつて加へられる場合に、それは壓制となり强制となる。故に抑壓を加ふる者は、また自己の生命力それ自らであらねばならない。すべての道德は自律的であらねばならぬ。卽ち自分が自

分に加ふる抑壓であつて、そこにはじめて眞の自由があり、戀愛がある。これを宗教の場合に譬ふれば、小我を克服しなければ大我には到られない、三昧法悅の心境には達せられないのだ。戀愛と宗教との心境の相似に就いては、嘗て私は『近代の戀愛觀』に於ても之に言及して置いた。

人間には、他の動物に於けるが如く、週期的な交尾期といふものが無い。卽ち性慾の休止する期間が全く無いために、自然に自律的に節慾を必要とするに至つた。性慾を醜惡視する傾向も亦同じくそれから生じた。勢ひ性慾に向つて制限抑壓を加ふるが故に、そこに淨化作用が行はれ、性慾は美しき戀愛心理となつて花さくのだ。これは禽獸に於て殆ど見られない現象である。だからたとひ人間でも、若し荒淫亂行によつて性慾の無制限な充足を得るならば、そこに抑壓作用がないために、戀愛の心境には決して達し得られるものではない。

わたくしは人生觀上に於て、すべての禁慾主義を非なりとする。何となれば、人間の本性を征服し否定しようとする禁慾生活によつて、肉體の純潔だけは保たれ、童貞の淨さは保たれ得るであらう。しかも絕えず肉の誘惑に煩はされ、本然の欲求に惱まされてゐる限り、どうして精神の純潔を望む事が出來よう。そしてその結果は人格の萎縮となり、破壞とならざるを得ないではないか。宗教家のノオスコオトですら、『禁慾生活は人類進化のある道程に於ては確かに價値あるものであつた。然しながらその精神上の效果に至つては、戀愛に及ばざること遠きものであつた』（『基督教と性的問題』八七頁）

と言つてゐる。

然らば如何にしてか至上の道徳、至上の理想としての戀愛を完成すべき。それは童貞でもなく禁慾でもなく、また固より自由性交を意味する自由戀愛でもない。肉體の清淨無垢といふことではなくて、性的行爲に關する精神の無垢といふことである。換言すれば、性的關係に就いて靈肉の合致調和であらねばならぬ。女流作家メイ・シンクレイアの言葉を借りて言へば、戀愛は靈が肉を救ひ肉が靈を救ふための施設である。それが眞の戀愛であつて、それ以外のものは戀愛ではない。かくの如き戀愛を以て私は性的道徳の理想極致なりと言ふのだ。

繰返し言ふ、純潔（チヤステイテイ）といふことは、獨身とか禁慾とかいふ消極的生活態度によつて保たれるのではない。性的生活が戀愛によつて美化せられ聖化せられるとき、そこにはじめて眞の純潔があるのだ。異性との性慾結合によつて吾等の純潔が失はれると同じく、また異性との戀愛結合によつて吾等の純潔に保たれる。異性と沒交渉である事が purity ではない。それはただ血あり肉ある人間をして、強ひて木偶たらしめてゐる不自然な駄洒落に過ぎぬ。童貞である事によつて純潔清淨が保たれると思つたのは、昔の宗教家の迷妄であつた。戀愛によつて purity が保たれるとき、そこに性的生活の眞の自由がある。

三たび戀愛に就いて言ふ

私の言葉は上來いくたびか結婚の問題に觸れたが、結婚を論ずる事が私の趣旨ではない。もとより結婚は戀愛を社會化し制度化したものであらねばならぬ。併し世には社會化せられず制度化せられない戀愛も亦、人生の事實として存在する。戀愛即結婚ではないからだ。制度化せられてそれが結婚と成らうが成るまいが、戀愛は戀愛である。その廣汎な戀愛の一般的な諸相と意義とに就いて、私は『近代の戀愛觀』に於て述べようとした。それを讀んだ人たちは、ただ社會制度とか社會道德とか云ふ目さきの事ばかりを氣にして、色々の質問や批評を試みるのであつた。其質問や批評に答へるために、さきの一篇が草せられたのだから、勢ひ私は殺風景な文字を羅列して之に應へざるを得なかつた。

繰返し言つておくが、戀愛にも結婚以外の戀愛があり、結婚にも戀愛以外の要件があることは言ふまでもない。唯その戀愛以外の要件を、結婚に於ては第二義的重要(セカンダリ・インポオタン)のものなりとせよといふのが、私の持論である。

なほ戀愛といふ問題に就いて、私の言はんと欲する所は甚だ多い。ただ梅雨の頃から初秋の今に及

んで、數箇月にわたつて私は痼疾になやまされて病臥してゐる。病苦と炎熱とのために衰弱し切つた私は、今また三たび長篇に筆を執つて纏まつた一篇を草することが出來ない。病床をおとづれる友と語る折に、また枕頭の書を亂抽しつつ、或は仰臥して天井板を見つめながら、思ひつき思ひ出すままを、斷片の言葉としてここに採錄した。想熟せず文辭到らざる點は、讀者の寛恕を待つの外はない。また一二の重複があらうとも、それは補遺のつもりだとして見のがして戴きたい。

一

『曇つた空の雲の絶間から輝く明星のやうに』と詩人が言つた、美しき羅馬の少女ヴアジニアを街上にみとめた者は、アピアス・クロオディアスであつた。富者であり貴族である彼は、この可憐な處女をおのが有とせんとした。それは戀でもなければ何でもなかつた。クロオディアスは、しもべを遣はして此少女を強ひて拉し去らうとした、門地と黃金との暴力を以て。

少女の父は突如として走り寄つて、衆人の面前に於て劍を閃めかして、おのが最愛の娘の胸を刺した。

黃金と門地とのために處女の純潔を奪はれる辱めを受けんよりは、親の手でいさぎよく殺して貰つたヴアジニアこそは幸福であつた。かくしてまで娘の純潔を擁護してやつた親こそ、本當に娘を愛し

たのであつた。

あの男には金がある、身分がある。だから惚れては居なくてもその男の所へかたづいてゆくのが、娘の生涯の身のためだなぞいふ親は、おのが娘に平氣で賣淫を稼がせる親どもである。娘の命を絶つてまでそれを冒瀆から免れしめたヴアジニアの父こそ、眞に娘を愛した親だとすれば、戀のない男の所に無理に娘を嫁がせ押遣らうとする親は、親でもなければ何でもない。それは娘にとつてかたきだ。『支度金』や財產の暴力によつて娘を掠奪しようとする相手の男と共謀せるかたきでなくて、それが何であらうぞ。

よほど以前に、たしかマコオレイ卿の『古羅馬の歌（レイズ・オブ・エンシエント・ロオム）』のなかで讀んだ、このヴアジニアの話を想ひ起したから書きつけた。

二

籤引のやうな、不見轉のやうな見合ひ結婚でも、後になつて夫婦の愛が出來たら可いではないか。さう言つて戀愛結婚に反對する人は多い。わたくしは此人々に向つて下のごとくに反問するであらう。

たとひ後になつて愛情は出來ても、初夜の誘姦、和姦、凌辱は、たしかに罪惡ではないか。泥棒は

二度や三度は構はぬ、あとで金持になつて返せば可いだらうと言ふのか。二度や三度の誘惑强姦は、人間生涯のうちに免れがたい義務なり、と强辯するのか。

また最初の誘姦和姦强姦の夜に、將來本當の夫婦愛が必ず出來ると誰が保證し得るか。その保證する責任者は誰も居ないではないか。それが居ないとすれば、恐るべき冒險ではないか。殊に事實を見よ、かくして成れる夫婦關係の多くは、終生遂に熱愛に燃ゆる魂の抱擁なしに終るものではないか。殊に女にとつて、それは精神的『監獄部屋』の賣淫生活ではないか。

本當の自由あつてはじめて本當の責任感が生ずる。自分の自由選擇で結婚したのでない夫婦は、自分たちみづからに結婚の責任が無いではないか。責任が無ければ、自ら愛しようとする努力をしないのも亦當然ではないか。無責任結婚は、野合私通よりも更に卑しむべき不道德な性的關係である。ていの好い一種の貞操蹂躪だとは考へないのか。

もし結婚後になつて眞に深い愛が出來るほどに意氣投合し得る二人ならば、何故結婚以前に於てこの二人を接近せしめ交際せしめて、そこに戀愛あるに至つて後はじめて結婚の計らひをしないのか。父兄なぞは何が故に、何の必要あつて、當人をして冒險を敢へてせしむるのか。それ程までにして見合ひ結婚の陋習を保存するのは、何故であるか。個人の自由を奪ふことをそれほどまでに美德なりと信ずる理由を、明らかにせよと私は言ふ。（本卷五四頁參照）

三

當人の意志に任せての結婚ならば正しい、と言ふ人がある。不可だ。意志は必ずしも戀愛ではない。その意志が今の世に於ては、餘りに多く家名や財産や收入や虚榮心などによつて左右せられてゐるからだ。

ある學者は言ふ、最近西洋の賣淫婦の傾向は、他からの誘惑や强制によらずして、自分の意志によつてこの醜業に身を投ずる者の方が多いと。自由意志によるからといつて、賣淫を正しとは言へまい。

四

媒人(なかうど)と云ふ者は出鱈目を言ふ。さりとて當てすつぼうの闇くもで結婚するのも不安だから、貰ふ方も貰はれる方も、お互に『聞合はせ』といふ事をする。それは相手を泥棒の如くに探偵する事である。別に惡事を働いた覺えもない我が身の上を探られる事は、苟も自尊心ある者にとつて不快この上もない。

人として最も大切な結婚生活は、今の日本では普通に、先づこの泥棒扱ひからその第一歩をはじめ

る。そして理解なき夫婦はお互に一生涯、兩方から胸のさぐり合ひをして暮すのである。まるで泥棒の共同生活だ。探偵に始まつて探偵に終る。

之をしも名づけて『我が國固有の淳風美俗』なりと强辯する者あらば、いづくにこれ以上の醜風惡俗ありやと私は反問しよう。

五

熱愛に燃ゆる二つの魂の抱擁ではなしに、ただ冷やかな肉と肉との性的結合に名づくるに、人倫とか家庭とか和合とか夫婦とかの美名を附する。實は和姦であり强姦であり賣淫である。そして人類の生殖作用は營まれてゐるのだ。今日世界人類の過半數、いなその大多數は、かくの如き和姦凌辱賣淫の結果として生れ出でた『人の子』ではないか。苟も人倫を說き道德を口にするものにして、之をしも現在人間生活の汚辱なりとは思はないのか。

六

男女關係に於て戀愛の重んずべきは百も承知してゐる、それをのみ誇張して大聲叱呼する事が惡いといふ非難をも、私は某博士なる者から聞いた。

さういふ難者に向つて私は先づ第一に反問したい。今の一般の日本人は、單に結婚問題だけに就いて言つても、戀愛の如何に重んずべきかを十分に realize してゐるだらうか、承知してゐるだらうか。

貴族富豪の家族ばかりではない、その有産者たると無産者たるとを問はず、今の『見合ひ結婚』の方法といひ、結果といひ、まことに慘憺たるもので、それは實に一種の人道問題だと言つて可い。父兄に强制せられ、家のため財産のために女は嫁ぐ。惚れたとも何とも思はぬ男に肉を捧げたのだ。結婚後二三日を經てから『里がへり』と稱して父母のもとに苦境を訴ふべく泣いて歸るのが習慣だ。戀しと思ふ男のそばならば一日一刻も離れたくないとあつてこそ、眞に人間の人間らしい結婚ではないか。今の日本では都鄙いづれを問はず、此『監獄部屋』式の結婚が十中の七八を占めてゐるといふ明確なる事實の存在を、果して何と考ふべきであらうか。

七

婦人に向つて『女大學』といふ奴隷道德を强要して居た德川時代には、敎養ある階級の女たちから自由は全く奪ひ去られて居た。自由が無かつたから戀は認められなかつた。不義不道德として斥けられた。そこで此時代に於て戀愛の人生に於ける意義を描かうとした詩人近松巢林子の如きは、その材

料、その情趣に狭斜の巷に求むるのほかなかつた。遊里にのみは辛うじて戀愛の自由があつたからだ。しかしそれがまた大なる矛盾で、既に前にも述べたやうにその作品の女主人公(ヒロイン)は娼婦であるが故に、彼等の戀には靈肉分離の缺陷があり、從つて戀愛の當然の歸着たるべき貞操觀に不自然を生じ、一方また『愛』と『食』との間に衝突を生じて、所謂『義理人情』の悲劇となつた。王朝時代の宮廷貴族の女には、自由もあり從つて戀愛生活もあつたが、武家時代に入つてからは、女は極度に虐げられて、道徳としての戀愛觀は滅茶々々に蹂躙された。それは下つて徳川時代にまでも及んだ。だから今日の日本の社會が、その戀愛觀に於てなほ武家時代の偏見を距る事遠からざるものである事は、怪しむに足らない。

八

いかにも家族主義の奴隷道徳は、婦人の人格と自由を否定して居るのだから、それによつて貞操を婦人にのみ強要する事は出來るだらう。しかし如何にして男子に向つてまた同樣の貞操を確守せしめ得るか。如何にして男女相互の完全な一夫一婦を實現し得るのであるか。之を實行し之を確守せしめんがためには、戀愛至上といふ事を性的道徳の第一義として考へるより外に道は無いではないか。一夫一婦の制は決して家族主義や功利思想の所産ではなくして、戀愛に於ける相互人格の平等と、お互

に相手を獨占する事によつて戀愛の純潔性、完全性、永續性を求めんとする自然の內的要求に基づいたものだ。近代の個性自由の思想を根柢とするとき、戀愛至上主義以外に貞操貞節の合理的解釋は不可能であるべきだ。

九

文學博士某なる者、さきに『家庭雜誌』の記者に談話ヶ筆記せしめて、わたくしの戀愛論に批評を加へてゐるのを見た。その批評といふものは固より一顧に値するものではないが、そのなかで頻りに家族主義の講釋をしてゐる所が、如何にも馬鹿々々しくて面白かつた。何でも此人は敎育者や地方人を相手に倫理道德の說敎をしたりする人ださうだが、とにかく今の日本は進んだやうに見えても、まだこんな言說に耳を傾けてゐる者の存する事だけは、注意しておく必要があると思ふ。紙幅をふさぐ事は甚だ遺憾だが、その說の標本にとてわたくしは今數節を玆に引用して、讀者のお笑ひ草に供する。

家庭には、少くともその家としての來歷の古いものには家風があり、家法がある。この家風家法が整頓せられて成文の形を取つたものが卽ち家憲である。これら三者は何れも家庭の人々に向つて、これが服從を要求する。彼等がこれらに服從するところに主觀的には遵法の精神が養はれ、客觀的には一家の統一が成立つたのである。昔、羅

馬の家長は、その統率する人々に對して生殺權を有し、不貞の妻はこれを殺したのである。また子女の結婚には家長の意志のみ働いて、當事者の意志は少しも認められなかつた。拉典語で父をパアテルといふのであるが、これは「力」の義である。彼が妻子眷族に向つて、力を以て絶對服從を要求したからである。けれども、この事實は他所事でない。我が國の德川時代にあつても、ある程度まではこの事實を認めることが出來たのである。この點からいへば、家庭は人の法律的訓練の組織である。

體裁の十分に備はつた家族制度の中軸は祖先尊崇である。この點からいへば、家族は祖先尊崇の信仰に依つて統一せらるる集團である。信仰の深い家庭から信仰の深いものが現はれ、無信仰の父母に無信仰の子女のあるは眼前の事實である。(中略)また、所有若しくは財産は、家庭の構成せられ、維持せられる主なる條件である。羅馬では、家族をフアミリアといつたが、この言葉は「財産」といふ意味を有つてゐる。凡そ家長權は家長に財産所有權があつて、家族を扶養するところに成立つのである。また、一つの世代からこれに次ぐ他の世代に國家の財産を傳達する點からいへば、家庭は國家經濟の重要なる機關たるのである。財産の所持と增殖とは家長なるものの重なる任務の一であるが、この任務の遂行を、國家の側から見れば、一代から他代への財産傳達の手續きに外ならぬのである。家庭各員の所有觀念はかやうな生活の間に養はれて、よく道德の保障となるのである。

『家風』『家法』『家憲』『祖先尊崇』『所有財産』『家長』、なるほどかういふ說教をする色々の人たちから私の戀愛論は攻擊を受けてゐたのである。それは寧ろ當然すぎるほど當然な事かも知れない。呵

呵。

一〇

すべて現在の誤れる因襲や制度を改廢して、もつと自由な、もつとゆとりのあるものにすれば、人間生活は直ちに墮落し、紊亂し果てるもののやうに考へる事が、世俗の根本の謬見だ。この事は經濟生活政治生活の問題に就いても同じだが、性的生活に於ても若し今日の結婚制度に於ける强制的一夫一婦制に、より多くの自由を許すならば、忽ち『自由性交』の亂倫狀態が出現すると思ふなぞは、笑ふべき一片の杞憂に過ぎない。女は皆墮落して、けふ吳客を送り、あす越人を迎へる娼婦の如くなるだらう、貞操も何もめちや〳〵になるであらうから、戀愛の自由は認む可からず、今日の結婚制度は動かすべからずと考ふる如き、實に人間そのものに對する大いなる侮辱である。人間は人間だ、畜生ではない。尊き戀愛の自由を得る事によつて向上進歩こそすれ、決して禽獸の亂婚狀態にまで墮落しようとしても墮落し得られるものではないのである。わたくしが嘗て例に引いた娼婦の生活に於ても、肉はたとひ衆人に切賣しようとも、靈的にはただ一人の男子にのみ心を捧げ、靈肉分離の不完全極まる奇怪至極な形に於てさへも、そこに一夫一婦の貞操が守られてゐるといふ如き現象を見るのが普通ではないか。娼婦の賣淫生活の如き下等な狀態に沈められても、人間はやはり貴き人間である。

そこに戀愛の自由さへあれば一夫一婦の貞操觀は、何等の强制なくしておのづからに確立せられるのだ。いやだと思ふ亭主に無理やりに添はせられて生涯を縛り附けらるればこそ、不貞の妻も生ずるわけである。

舊套を墨守し因襲に囚はれた既成の結婚制を離れて、そこに眞の自由が與へられたるとき、人間ははじめてその自律的なる道德性によつて、眞の一夫一婦制に安定し固着し得るのである。これを一片のパラドクスに過ぎずと見て危險視するものの如きは、いまだ人間性の眞味を解せず、人の惡魔性の一面あるを知つて他の半面に神性あるを知らざる昧者の言である。男がその妻によつて、女がその夫によつて、强制的に束縛せられてゐると感ずるとき、その結合(ユニオン)は甚だしく厭ふべきものだと感ぜらるるが、もしその相互關係が全く自由であると云ふ確信の上に立つとき、却つて彼等はその愛を存續すべく滿身の努力を惜しまずに捧げ得るのである。

近代の文藝に於て、人間性の底深く根ざせるこの動かすべからざる事實も、最もあざやかに最も藝術的に手際よく表現し得たものは、イブセンの大作『海の夫人』だ。はてしなき大海の自由を慕ふ妻エリイダの心は、あやしくも絶えず動搖してゐた。壓迫があり束縛があるからだ。身をも心をも捧げて現在の夫ヴンゲルを愛し得ないのである。殊に强く彼女の心を誘ふものは、外國船の運轉士であつた。最後にこの外國人の船乘が海のかなたから來て彼女を誘ひ去らうとするとき、ヴンゲルは今はと

て思ひ切つてその妻に自由を與へた、女をして自由に行くべき道を選ばしめた。その刹那、女の心は眞の愛にめざめた。誘惑をふり棄てて、彼女はやはり現在の良人と共に留まつた。そこに自由によつて與へられた愛の勝利が、あざやかに描かれてゐる。

今の經濟組織を改造しなければ人に『食』の自由がないと同じく、今の結婚の制度因襲を打破しなければ『愛』の自由はない。『食』と『愛』との自由を奪はれて生きるものは苦しい。

二

芝居の仕組と云つて別にむつかしい事はない、劇的境遇（ドラマティック・シチュエイションズ）の數はわづかに三十六種のみ、と大膽に言ひ放つた男がある。なるほど戀愛悲劇だけを取つて考へて見ても、先づそんな位のものかも知れない。そのなかには男女の性格『食』の生活問題、階級差別と云つたやうな色々の事柄が數へられるだらうが、とにかく最も普通な筋書は、何といつても先づ『永久の三角關係』だ。即ち一對の夫婦關係或は戀愛關係の男女のいづれか一方と、更に他の一人の男とか女とかが戀をする場合は、その最も深刻悲痛なるもので、要するに男ふたりに女ひとりか、女一人に男二人か、それは樣々な筋書と變つても、要するに『三人のやりくり（メナアジュ・ア・トロア）』には相違ない。西洋の近代劇だつて、仲の町の『鞘あて』だつて、葛藤の心理は即ち一だ。事情をこそ異にすれ、古今東西を通じて變らざるものは人の心である。

て、そこに人間苦悶のすがたの萬花鏡が展開せられる。

此三角形の三つの頂點の間には憎悪、嫉妬、恐怖、羨望、復讐、そのほか色々のものが渦卷をなし

特に戀愛至上を性的道德の理想として一夫一婦の制を確立し、又つよい個性の發達した人々の間での事だから、この三角關係はそこに毫もふざけた不眞面目な虚僞や空想などの分子を容れないだけに、葛藤(ストラッゲル)は一きは沈痛深刻の悲劇となつて、直ちに生命の核心を突き崩すだけの强烈な破壞力となつて動く。ハウプトマンの『寂しき人々』、マアテルリンクの『アグラヹイヌとセリセット』、ダンヌンチオの『ジョコンダ』、ショオの『カンディダ』、一々列擧すれば實に際限もないが、近代文藝に於て特にこの三角劇が多いのは、右に述べた理由に基づくのである。

三角關係は戀愛のためにまことに永久の癰腫である。或は人生永久の苦悶の種かも知れない。平等の男女の人格的結合卽ち戀愛は、原則として一夫一婦となるのが當然であり、また自然であるのは言ふまでもないが、その原則が原則どほりに行はれないところに、また人生の情趣があり人間味の複雜性がある。わたくしが曩に述べたやうに、一たび得たる貴き戀愛の擁護のためには、その衛生養生法のために滿身の努力を捧げよと言つたのは、卽ちこの癰腫に罹らないための用心を指したのである（本書一三九——一四〇頁參照）。養生の外に長生の法は無いからだ。

しかし私は言ふ、不幸にして既にこの三角關係の癰腫に罹つた場合に於てすらも、人間として執る

べき最上の道はやはり『自由』の外には有り得ないと思ふ。その自由が與へられたる時に結果は意外にも、多年同棲を續けたるさきの關係はその內在的潛勢力のために猛然として復活し來つて、『海の夫人』のごとき結末を見ることとさへ決して稀ではない。性的選擇の自由は如何なる場合に於ても失はれてはならぬ。全く愛の無いものが互に夫婦關係を持續しつつ、他の異性に想を寄せながら其日々々を胡魔化してゐるが如きは、人間として最も恐るべき罪惡である。これが罪惡でなくして何であらうぞ。自らに對して自らを欺く事は、他人を欺くより以上の大いなる罪惡ではないか。

多年の同棲によつて愛は、その浪漫的色彩を失ふと共に潛在的內在的となるが故に、深く銳く自らを省察して反省しなければ、意外にも力強い夫婦愛が自分にも氣附かない程に深い胸の奥に伏在してゐる場合が多い。さきに私がビェルンソンの作品を例に取つて說いた一節の如きは、三角劇の癌腫に罹つた場合に於て深く考へて見なければならぬ事だ。そこに輕擧妄動はかたく戒められなければならぬ。

輕擧妄動でもなく、また眞の『自由』が得られたその刹那に於て、意外にも現はれ來るところの復歸復活の異象、例へば『海の夫人』の結末のごときは決して狂言綺語が告ぐるところの虛構ではない。そこには玄妙深遠なる『愛』の心理の動きがあるのだ。かくの如きは、かの形式萬能の因襲道德の徒などが未だ曾て夢想だもなし得ざる新道德の勝利であり、『自由』と『愛』との最後の凱旋を語る

ものである。
かういふ愛の勝利を語るべく、わたくしは曩に述べたビュルンソンの『地理學と戀愛』（本書三〇頁參照）とイブセンの『海の夫人』とのほか、またズウデルマンの戯曲『一隅にての幸福』(Das Glück im Winkel. 1896) をも、同じ思想の暗示として讀者の考察を煩はしたいと思ふ。レクニッツ男爵は、今は既に片田舍の小學校長の細君となつてゐるエリイザベトに執念くも附きまとうた。女の心が遂に危くも動搖しようとした時、そして彼女が死を決した時に、完全に校長夫婦の心は解け合つて彼女はまた良人の腕に歸つた。一たび他の男に奔らうとし、不良の妻たらんとした彼女は、何等の强制的因襲的道德の干涉なくして再び永久に、ひしと良人の腕に抱かるべき貞節の妻となり得たのである。愛の自由ある時にはじめて眞の貞節がある。自由が奪はれたときにそこに不貞亂倫の醜狀を見るのだ。
戀愛のほかに道德律があると思ふのが間違ひだ。戀愛そのものが道德律の根柢をなしてゐるのだ。かくの如き道德生活に於てこそ、はじめて自由があり正義がある。
戀愛は自由な人間性そのものの至高至醇の發現だ。共人間性を無理な制度や因襲道德によつて强ひて喰ひとめ、歪め撓めようとすればこそ、虛僞に縛られて吾々は生き苦しい。戀愛は人間性そのものから咲き出た最も美しい花であるものを、人は動もすれば自己の人間性を忘れると共に、この美しい花をも『詩の國』へ置き忘れたり、制度因襲の**がらくた**道具の中へ投込まうとする。そこに根本の誤

謬があるのだ。吾々の道德を此人間味人間性の基礎の上に再建するとき、戀愛はその至上至高の道德的意義を恢復すると共に、人間の生活はより良き自由生活、より高き正義の生活に向つて進轉せざるを得ない。

二

わたくしは本書の卷頭に、英國近代の最も壯快なる思想家カアペンタァの語をかかげて置いた。彼の著『戀愛の成熟期』の最後の一章『自由社會』の結論である。あまりに忠實に原文を逐語譯にしたため或は了解に苦しむ讀者もあらうかと思つて、更にここに繰返しておく。

カアペンタァの文意によれば、人間が一方に性慾の奴隷であり、他方には法律的因襲の束縛を受けてゐる間は、自由社會は出現しない。性慾は必ず法律の束縛を受けなければならないからだ。しかし性慾が眞に進化し淨化せられて戀愛が實在となるとき、戀愛それ自らは既に至高至深の法則であるから、ここに至つてはじめて吾人は自由を享有し、合理的な自由社會を實現し得るのだ。それまでは矢張り法律の制縛を必要とする。だから戀愛が實在となり、性慾を制御してその奉仕者となすに至つて、はじめて理想の社會は建設せられるのだ。

之を私みづからの言葉に引直して言へば、人々が性慾に節制を加へる事によつて戀愛至上といふ事

を最も嚴粛に考へて之を實行するに至るとき、はじめてそこに性的生活の自由があり、また一夫一婦、貞操などの事が因襲法律の干渉なしに、嚴として確立せられ得るに至るのだ。

カアペンタァ翁は更に聲を勵まして言ふ。物の道理のわかつた社會は、必ず以上の如き事を可能だと認める。一方、美と自由とを殺して人間性を鐵のやうに冷たい一つの型に嵌めることもせず、他方には雜婚といふ沼の中に陷り込むやうな危險をも亦全く無くするに至るであらう。さう言つて、彼は最後の結語に遠大の希望を述べた。曰く、おもへば今日吾々は戀愛の事に關して如何に幼稚であるか。數しれぬ百花をつみ切つて、葉をも花びらをも強ひて悲しい一つの型に入れようとしてゐる。不滅なるべきその花やかさ美しさを破壞し去る者の卑俗をおもへ。望むは更に充分に成熟したる未來の社會。そこにはさま〴〵の豐かな愛の可能性は十分に理解せられ、戀の美しい物語が、情のある分別と美的な節制とによつて、いや榮え行く完美の狀態に於て年ひさしく保育せられることであらう。

かくの如き美と自由とは、現代に生きるものの理想であり、信念であり、また新しき宗教であらねばならぬ。

一三

ある裏店(だな)での話だ。もとは深い戀仲で出來あつた夫婦が、朝から晩まで猛烈に喧嘩ばかりしてゐ

る。それを見かねて、近所の交番の巡査が行つて言ふには、
『そんな喧嘩ばかりするなら、いつそ別れたらどうだ。』
夫婦は口を揃へて答へた『別れる位なら、何も喧嘩はしません。』
この言葉が暗示する複雑な人情味を洞觀し得ないものは、私の戀愛至上說に對して全く容喙する資格なき者だ。

一四

バイロンは、その『ドン・ジュアン』の一節に於て、かれ特有の厭生的な悲調を以て下のやうに言つた。

'Tis melancholy, and a fearful sign
Of human frailty, folly, also crime,
That love and marriage rarely can combine,
  Although they both are born in the same clime.
Marriage from love, like vinegar from wine——
  A sad, sour, sober beverage—by time,

Is sharpen'd from its high, celestial flavour,
Down to a very homely household savour.

——Byron, *Don Juan*, Canto iii, 5.

（大意）戀愛と結婚とは、もと同じ所に生れてゐながら、兩方が相伴ふ事の稀なのは人間の弱さ、愚かさを示すものであり、また罪惡である。それは悲しくも、また恐ろしい。ちやうど酢といふ悲しい酸つぱい興ざめた飲み物が酒から出來ると同じく、結婚は戀愛を離れてその高き天上の匂を失ひ、平凡な世帶じみた所まで下落して了ふ。

まことに古今同嘆だ。人間が弱かつたり愚かであつたりするために、結婚と戀愛とは一致し難い。そこで人はしば／＼性的二重生活を營む。心は良人を離れて窃に他し男を想ひながらも身はなほ妻であつたり、亭主は女房に愛想をつかして居ながらも女房は女房、戀の戯だけは之を遊里に求めたり、或は希臘の名士のやうに子は正妻に産ませて置いて、戀の相手は遊女ヘタイライに求める。また日本の娼婦が心を一人の男に捧げながら、肉は之を萬人に切賣りする。獨逸あたりの貞節(?)な妻が、良人を愛して居ながらも其良人の永の不在に、單におのれの肉慾滿足のため平氣でよその男を引張り込む、日本では亭主は妻を愛して居ながらも、それが病身であるため自分の獸慾を制し得ないために、或は單に『家』のための『あと取り』を造らんがため蓄妾する者も多い。以上すべてこれらを總稱し

て、わたくしは靈肉分離の性的二重生活と名づけよう。その二重生活は、和服洋服ちやんぽんの二重生活どころの騷ぎではない、たしかに人類最大の汚辱であり、人格生活の破産だ。右に擧げたうち二三の例を除いて、それは多く結婚と戀愛とがぴつたり一致して居ないからだ。要するにそれは、バイロンが言ふやうに人間の弱さ、おろかさ、醜さの恐るべき表象ではないか。この弱さ、この醜さから逃れようとすることが、即ち私のいふ理想主義の努力ある所以だ。

一五

道德上からのみ考へるとき、結婚なき戀愛は戀愛なき結婚と同じく、共に冒瀆であり、我儘であり、私曲である。これは、何も現代の作家でなく早く旣に前世紀の女性作家ジョオヂ・エリオットによつて、その小說『アダム・ビイド』、『フィイリクス・ホオルト』をはじめ、最後の作『ダニエル・デロンダ』に至るまでの各篇に現はされた思想だ。エリオットは、女にしては珍らしいほど銳い强い智性の持主であつた事も思ひ合はされる。ギクトオリア朝の道德觀は別として。

一六

女が男の戀をすぐにそれと感づかないならば、多くの場合その女には別に戀人がある。現在に或は

また過去に於て。

一七

小說に、詩歌に、また批評に、才人ゆく所として可ならざるなかつた故レミ・ドゥ・グウルモンの、情熱燃ゆるが如き生命讃美の文學は、近代文藝のうちで私の最も多く敬仰し愛讀するもののひとつであるが、その戀愛論（Physique de l'Amour, Essai sur l'instinct sexuel）にだけは私は全く感服しない。また此頃はじめて讀んだ彼の小說『をとめごころ』(Un Cœur virginal)も、戀愛心理の描寫としてさまですぐれた作だとは思はないが、その第十五章のところでふと目について忘れられない言葉、美しいからここに掲げる。

『女は反芻者だ。いく月も、また幾年もの間、過ぎし日の歡樂の思ひ出を味はうて生きることが出來る。ある女たちの一見、有德なりと見ゆる者も實はこれで說明がつく。不滅の匂を有つた一輪の美しい花のやうに、一つの美しい罪は女の一生を祝福するに足るのだ。男が最後の接唇（キス）を忘れたとき、女はなほ最初の接唇（キス）を記憶してゐる。』

ここに云ふ女といふ文字を『女性的な戀をする人』といふ言葉に代へて讀むと面白い。ただ過ぎし日の戀の思出にのみ生きてゐる人は、つつましやかな、よわいたちの男にも女にも多い。わるくいへ

ば『戀』のむくろを抱いて生きてゐるかも知れないが、それは美しく又たふといことである。モォパッサンの小說にある話だが、貧乏な椅子屋の娘が近所の藥屋の息子を子供の時から戀してゐた。しかし思ひ通り連れ添ふことも出來ず、女は遂に一生を獨身で送つて、かげながらこのつれなき戀人にのみ心を捧げてゐた。モォパッサンは之を評して、さすが女だ、女にしてはじめてこれが出來ると言つた。女は反綴者であるからだ。

次から次へと戀の相手を變へて行くドン・ホワアン型と、ひとりの戀人をいつまでも一途に思ひつめてゐるヱヱルテル型と、戀する者にこの二つの型があるといふ考へ方は『男性的な戀をする人』と『女性的な戀をする人』と云ふやうに大別して、それは必ずしも誤れる見かたではないと思ふ。しかし人が若し『戀愛至上』といふ事を嚴肅な道德的の生活理想として考へて居ないならば、ヱヱルテルのやうに死んで了はないかぎり、誰しも多くはドン・ホワアン型となつて、一つの戀から他の戀へと移り行く危險性があることは言ふまでもない。個人として自己の一つの人格を守ると同じく、常にまただ一つの人格的戀愛を力のかぎり大切に守つて、その戀愛をして衰滅せしめざらんとする滿身の努力と用意の大切な所以は、卽ち此點に存する。

しかし個性は發達する。それがまだ發達しなかつた時代に得た戀愛を、後になつては物足らなく、あきたらなく思ふが故に、更にまた新しき戀の相手を求めるといふ事は、あり得べき事だ。だから戀

するふたりはお互に自分たちの個性の發達伸長に就いて、深く心を致さなければならない。それはまた戀愛の永續性を擁護するために缺くべからざる努力の一つである。

男の方は發達するが、女の方は發達しない。最初の若々しさは失はれ、あたまの力も鈍つて行く。そんな所から戀愛結婚が後には破鏡の嘆を見る場合は、實際に於て甚だ多い。男子とちがつて外部の社會に觸れる機會の極めて少い今の日本婦人のごとき、特に『自分』といふ者の發達に就いて行住坐臥深く考へてゐる必要があるだらう。

戀愛のなかから、唯蜜のやうな甘さだけを吸つて過ぎ行かうとするやうな、なまけた、だれ氣味の、上すべりな心で、どうして至上の戀愛が完成せられようぞ、自己の人格が向上せられようぞ。繰返して私が向上精神の努力を唱へ、愛の生活の至妙境に向つて險難の道を歩めと勸める所以である。この至妙境は自我を最大限にまで熱し、高め、深め得た所にのみ見出されるからだ。

一八

戀愛をかれこれ言つたりするのはブルジョアの閑事業だ。けふの糧に困つてゐるプロレテリアンには用のないことだ、とさう言ふ人があるかも知れない。『食』と『愛』との生活に就いては旣に上に述べた。戀愛は人としての問題である。『食』のために、戀愛を中心としてゐるすべての『愛』の生活を

否定するが如きは、人間が畜生道にまで退化し墮落することである。有產無產のいづれを問はず、吾等は先づ人間であらねばならぬ。人間であるが故に戀愛の問題に就いて眞劍に考へるのだ。

フェルディナント・ラッサルは、マルクスと共に近世社會主義の祖である。そしてマルクス以上に熱烈な實際運動家として働いた。そのラッサルは活動の最も盛んな時に、美しきヘレヌ・フォン・ドンニゲスを戀して此女のため遂には決鬪までして、年わづかに四十ならずして命を棄てたではないか。メレディスはその小說『悲喜劇の人々』(トラジック・コミイディアンズ)に於て、忠實に事實を追うてこの悲壯な社會運動家の戀の悲劇を書いた。小說の主人公アルヴンは即ちラッサルその人であり、クロティルデと云ふ女は即ちヘレヌの名を變へたまでだ。無產者勞働者或はまたさういふ實行の活動者は、戀愛のやうな甘つたるい事を言つては居られないぞといふ棊言を吐いて私の文を批評したものは、先づみづからラッサルそのほか多くの活動者の閱歷を見よ。

『愛』と『食』との生活を離して考へたり、戀愛と社會活動とを別にして考へたりするのは、見かたが上すべりだからだ。まだ人間の生活現象の皮相だけを見てゐるからだ。さういふ皮相淺薄な批評者に對して、私は一々應酬してゐる程までに閑人ではない。

私は必ずしも、ギッシングの『ディイモス』や、久米正雄氏の『三浦製絲場主』(その他勞働問題を描ける文藝作品に就いては、本集第三卷『勞働問題を描ける文學』參照)など、戲曲小說の類に就いては茲に繰

返さないだらう。ただ先づ今日實社會の眞事實を見よと言ふ。そして『食』の生活に於ける階級鬪爭が、『愛』の生活に於ける兩性問題と、如何に多く如何にしば〳〵絡み附き、もつれ合つてゐるかを見よと言ふのだ。『食』の自由を奪はれたる者は、同時にまた『愛』の自由をも奪はるるが故にこそ、苦しんでゐるのではないか。苟も人生そのものに對して熱烈な執着を有する人である以上、『食』のために鬪へると共に『愛』のために惱む事は、また當然ではないか。根柢は卽ち一だ。

一九

ちかごろ經濟問題や階級鬪爭の事がやかましくなつてから、變な型の人が出來た。その人は少しは文學書をも讀んでゐながら、社會問題といふやうな事にのみ氣を取られて了つて、愛の生活の詩境に就いては實に氣の毒なほどまでに理解がない。それは頭が散文的だからなぞと言つてるのは、自分の自惚れにあらずんば他人の諛辭に過ぎない。まことは紙屑のやうな頭だ。

先づ、正しく社會問題を考へてゐたラスキンやモリスの如き思想家が、戀愛や結婚に就いて如何に深い透察と理解とをもつて語り或は歌つたかを見るが可い。また近世社會改造論の先驅者の一人であるヰリアム・ゴドヰンの生涯を飾れる、ウルストンクラフト女史との戀愛關係の如何なるものであつたかをも、調べて見たらどうだ。かつて多くの詩人や思想家の名を羅列して、私の所說に非難を加へ

た者に此言を送る。

二〇

婦人の解放とか自覺とかの叫びが、唯男子に對する挑戰であつたり、またかの殺風景な理窟つぽい『女裝の豺狼(イエナ・イン・ペティコオツ)』のやうな第三性(サアド・セクス)の女たちをのみ増加するに過ぎないならば、それは確かに人間社會のために悲しむべき不幸だ。婦人解放の思想は、それが兩性の自由な人格結合を強調せんとする新らしき戀愛觀となつて現はれるに至つてはじめて、より良き人間生活が建設し得られるのだ。即ち男女兩性の奏(かな)でる交響樂が人類の生活を美化し醇化する事によつて、地上樂園への道程に一歩を進ましめるからである。

二一

男でも女でも、自己一人だけでは不完全なものである。異性との人格的結合によつて始めて自己を完成し得るのではないか。その證據には生殖といふ事ですら、一人では成し遂げられない。

先づ自己そのものをすらも完成しようとしないで、何が出來るだらう。自己完成は人としての生活の至大至高の要件である。そして戀愛こそは、異性との結合に依る自己完成のための唯一最大の藝術

であり、道徳であらねばならぬ（本書一九貝參照）

更に之を宗教に結びつけて、極端に神祕的な超絶（トランセンデンタル）的な見かたをした者の随一は、スエエデンボルクだ。その著『結婚愛（コンジユガル・ラヴ）』に於て、彼は戀愛を以て聖智（デイヴイン・ウイズダム）と聖愛（デイヴイン・ラヴ）との結合の象徴なりと見た。男は女によつて始めて神の聖愛を解し、女は男によつて始めて神の聖智に到達すると言ふ。私はこの偉大な神祕宗教家に何等の共鳴もなければ理解も無いが、男性の有する靈智と女性の有する聖愛との結合を以て、人格完成の極致と見る事は首肯し得られると思ふ。靈智に輝くまなこが愛の温光に向つて見開かるるとき、そこに神人の崇高があり完美がある。之を佛教藝術に見るも、大慈大悲の觀世音菩薩は本來男性のものではあるが、その愛のみすがたは女性の麗容によつて現はされた。

三

人格主義を説くリップスの著『倫理學の根本問題』の邦譯が出來た。そのなかで戀愛の要素の一として下の事が説かれてゐる。

男は一個の人格としてそれ自ら獨立のものではあるが、それが男といふすがたに生みつけられてゐるために不具であつて、人間としての本性を完うし得ない。おなじく女もまた獨立の人格ではあるが、女であるが故に人として全きものでない。兩性相合してはじめて自己完成の域に達するのだ。だ

から男も女も各、自分に缺くる所のものを異性に於て見出さうとする要求が『補足の感情』として生ずる。卽ち自分の方に缺けて居る者を異性によつて見出し、熱意を以てそれを自分の方に引き入れようとする補足の享樂を、戀愛なりと見たのである。

わたくしは曩に、强い個性の人が自分の孤獨寂寞から異性によつて救はれようとする要求を戀なりと見たが（本卷一〇五頁參照）、この寂寞、このあこがれは、やがてリップスが謂ふところの『補足の感情』ではなからうか。一つの人格として自分の個性にめざめること强き人ほど、この補足の要求もまた强からざるを得ない。

オットオ・ヴイユンゲルの言ふところも亦、如上の所說と稍趣を同じうする。卽ち如何なる男子も完全に男子ではなく、如何なる女子も亦完全に女子ではない。男子のなかにも女性分子があり、女子のなかにも男性分子がある。如何なる人もみな男女兩性のあひのこだ。だから、たとへば或男子が自分のなかに七分の男性と三分の女性的分子を有するならば、自己を完全に十分の男性たらしむべく、或女の持つてゐる三分の男性によつて之を補足しようとする。その女も亦同樣に、この男子が有する三分の女性的分子によつて自己を補足して、完全な十分の女性とならうとする。かくして男女は共に自己を完成し得ることによつて、戀愛結合は成る。瘠せた男が肥えた女に心を引かれるのも、氣の强い女が柔和な男を好むのも皆この理によるので、各自分に缺けて居るもの反對のものに向つて、强く

熱烈に心を牽かれるのが戀であると。

說きかたや考へ方はたとひ異つても、要するに戀愛は自己完成の要求であり、自我充實のあこがれであることは知られるだらう。ゲエテが百年前その小說に、化學でいふ『選擇親和力』Wahlverwandschaften の語を借りて之を言ひ現はしたのも、謂ふこころは一つの個性が他の獨自の個性を引き附けようとする力を指したのであつた。おなじ言ひかたで、近頃の性學者の或者はまた erotic chemotropism の語を用ゐた。また異性の細胞が互に牽引するものなりと見て、生物學でいふ chemotaxis で說明したのもあれば、また戀愛を純科學的に解釋しようと試みたヒルシュフェルトの如き、相互の性的牽引を以て genotropism に歸してゐる。唯しかし、かうまで生物學的にのみ戀愛を見るやうになると、吾々は科學者の通弊に對して警戒しなければならない。人間の生活現象には、決して形而下的機械的の解釋を許さない多くの事實が儼存するからである。人間生活の物質的事實には、いつもそれと同一步調を以て隨伴せる精神的事實が他の半面にあるからだ。

二三

子を生み子を愛する事だけを知つて『男』を愛する事を知らない女は、女の肉をのみ求めて『女』を愛する事を知らない男と同じ程度のものである。こんなのが野蠻人には多い。

二四

さきごろ女性文化と云ふ事を論じた人が多かつた。それは今までのやうな殺伐な粗硬な男性文明でなく、もつと女性の加はつた新文化を提唱する聲であつた。しかしこの女性文化と云ふ事は、男女の完全な人格的結合を意味する戀愛の社會的文化的價値の如何に偉大なるやを、先づ十分に考へた上での主張であらねばならぬ。兩性相合して同心一體となり、二つの心臟が一つの鼓動を打つに至つてはじめて個人の自己完成が出來ると同じく、また之を社會的に見ても、文化は愛による男女兩性の結合によつてはじめて全きを得るのである。女性を生殖と性慾充足の道具にのみしてゐた男子橫暴の社會は、現に今日のごとき缺陷に滿ちた、生き苦しい殺風景のものとなり了つた事を、心から痛憤し憤慨するものは、何人も先づ戀愛の文化的社會的意義に就いて深く考察すべきであらう。

戀愛は人類社會のために、その肉的方面に於て種族存續の使命を果すと同じく、その精神的方面に於ては人文發達の根源たるべき更に大きい使命を有するものである。

二五

健康とか遺傳とか、さういふ方面に於て若し ceteris paribus ならば、戀愛結婚の方が無戀愛結婚

よりも優良なる子孫を擧げ得る事は、たやすく合理的に考へ得られる。今日の優種學は此點に就いてなほ確固たる斷案を下してはゐないが、人間が簡單なる動物的肉的生活を營む者に非ざる以上、わたくしは靈肉兩全の性的結合の方が、生殖に於ても更に優良な成果を齎し得る事を信ぜざるを得ない。

ショオペンハウエルの戀愛觀が單に生殖慾にのみ重きを置いた點に於て、わたくしは此厭世哲學者の所說に同意するものではない。しかし彼の意志の哲學說に於て、性的牽引を以て種族の意志の顯現だと見たところには半面の眞理があると思ふ。彼は言ふ、戀愛に於て異性が相手を選擇するのは自分個人の選擇だと思つてゐるが、實はそれは種族の生命への選擇に外ならない。その人と一緒になる事が自分の幸福だと思つて强く慕ひ寄るのは、實は種族への感覺である。個人が自分の幸福を求めようとしてゐる時、本能は實は種族のために最も良い事を求めてゐるのだ。道理を斥け生命を賭してまで戀を遂げようとするのは、實は個人の意志ではなく、强大なる種族への意志がその個人を左右してゐるのだ。本能は無意識にしてかくの如き目的に向つて動いてゐるからだと（本卷一九頁參照）

戀愛結婚は卽ちこの種族意志に逆行しない性的結合である。種族意志に逆らつた無戀愛結婚よりも、種族意志に合致し順應した戀愛結婚の方が、より多く、より大に種族のためとなり、優良な種族を未來に保存し得ることは、極めてたやすく考へ得べき道理ではないか。

序にいふ、ショオペンハウエルの戀愛觀の弱點は、その見方があまりに種族への意志をのみ强調

し、個人の自我の要求を無視し輕視した點にあるので、現代人の全く同意し得ざるところである。卽ち個性主張 individuation と個性化 individualization の要求は、文化人の生活に於ては、儼然として種族への意志卽ち生殖の要求と對立し、同樣の重みを持たなければならない。換言すれば、吾々は或種の昆蟲の如く生殖せんがために生きるのではなくして、自ら生きんがためにこそ生殖を營むのである。生殖は手段であつて、生きる事それ自らの方が目的なのである。卽ち生殖のための結婚と、自ら生きんがための戀愛とが二つの間に喰ひ違ひなく一致する事が、吾々の生活理想であらねばならぬ。やむを得ずんば則ち戀愛のために生殖を犧牲とする事も、人間としては正しい事である。子なきが故に愛妻を離別するが如き、或は子を得んがために一夫多妻を求むるが如き、皆種族意志の前に個人を犧牲としたもので、それは明らかに畜生道だ。人間としては個人の要求を先づ土臺に置いて、その上に生殖作用を營まねばならない。換言すれば、生殖それ自らが個性化せられて種族意志に對する盲目的服從でなくなるところに、人としての性的生活の第一義があるのだ。戀愛至上說の上に立つ一夫一婦の道德は、卽ちまた此思想の當然の歸結である。

正しい個性主張の要求（性的生活に於ては戀愛）は、種族への意志（卽ち生殖の欲望）と必ずしも背馳する筈のものではないのである。否な兩者は自由生活に於ては本來完全に一致すべき筈であるものを、今日なほ幼稚な階段にある吾等人類と、その誤れる制度や組織とが、そこに悲しむべき痛まし

き背反背馳を自ら作つてゐるのである。そこに改造の切なる要求が起る。

わかり易く言へば、性的關係の二つの要求、即ち種族存續のための生殖衝動と、個性充實のための戀愛とのうちで、重きを前者にのみ置いたショオペンハウエル一流の見かたは、舊時の舊思想だ。現代の新しい戀愛觀の特色の一つは後者、即ち人格完成、自我充實のための戀愛に重大意義を認めた點にある。今人は、この自我充實のための戀愛がまた同時に社會的にも絕大なる文化的使命を果しつつあることを確認するに至つた。すべてに個性の權威を認め、自我充實といふ事が社會發達のために重大意義あるを知つたことが、あらゆる新思潮の大いなる特色だ。

原始人が有する單なる性慾や種族本能が漸次進化し淨化せられて、精神的意義を有するに至つたといふことは、一方から言へば卽ち戀愛の個性化といふことに他ならない。すべてのものは進むことによつて益々個性化せられ、また個性化せられることによつて益々進みつつあるのだ。

繰返して言つておく、生殖は社會のため種族のための貴き義務には相違ないが、生殖のために戀愛を犧牲とすることは、人文發達を無視したる不道德な野蠻生活だ。男女の合體は生殖によつて新しき生命を創造すると共に、靈的にも亦そこに個性の新しき生活を創造するものであらねばならぬ。

優生學や遺傳學や衛生法を考へてから後に戀を始める者は居ない。しかし戀愛はおのづからに、また本能的にその對者の選擇に於て種族のための利害と一致し、決して之と背馳して居ないと見ゆる現象は事實上甚だ多い。たとへば近親結婚は有害なるが故に、血統の近い者の間に於て戀愛は比較的少く、兄と妹となれば道德律の干渉は無くとも戀愛は全然生じ得ない。その他、狂人癲癇のごとき遺傳性の病者、未成熟者或は年齡の差異甚だしき男女間など、すべて種族の優良性のために害あるものの場合、戀愛は比較的に發生し難いのである。色々の人爲的な干渉や講釋をしなくとも、ショオペンハウエルの所謂『種族の本能』が、無意識にまた神祕的に人を導いてゐるからだ。盲目なりといはれる戀愛は、その自由なる選擇に於てまた意外にも明目なのではないか。人間的な戀愛に於ての自由選擇は、おのづから生理的にも亦自然な雌雄淘汰を行つてゐるのではないか。

單に生理上の問題ばかりではない。人智が進めば進むほど、また個人としての道德性や社會意識が發達すればするほど、戀愛の自然の儘なる自由選擇は、意外にも客觀的な道理や利害の標準と、おのづからに、無意識に合一すべき性質のものであらう。必ずしも理窟屋や道學先生や法律萬能主義者のおせつかいを待たずして。

特にまたこの選擇を、人爲的因襲的な制度に基づく財産とか家系とか云ふ事によつて左右するを、合理的なりと思ふがごときは言語道斷の誤だ。こましやくれた頭で考へて見て"rational selection"な

りと思はれるものは、意外にも "natural selection" に及ばざること遠きものである。

動物に於けると同じく、人間に於てもまた雌雄淘汰、自由選擇の標準は自然に變遷しつつあるので、それが卽ち進化だ。例へば昔は女を生殖のためと欲望滿足の道具としたため、細腰の美人のみが歡迎された。男子は武力を以て勞働を以て食物を得る事によつて妻子を扶養する者であつたが故に、女はたゞ男子の英雄的武breakをのみ喜んだ。かくの如き野蠻時代の簡單なる雌雄淘汰の標準は、今日に於て旣に社會の發達と個人の進化とによつて急激に變化しつつあるではないか。選擇標準の進化は卽ち戀愛そのものの進化である。

固陋にして淺薄なる批評者よ、なんぢらが戀愛を盲目なり危險なりと貶しつつある間に、戀愛そのものが現に極めて聰明に明目的に進化しつつある事實を見よ。

二七

戀愛は戀愛それみづからに至上の意義がある。他の何等の目的のためにも手段とせらるべきものではない。否な、もし戀愛が純正であるならば、それは手段としようとしても手段とは成らないものである。

たとへば敎育や學問はそれ自らに意義がある。之を手段として用ゐ衣食の資を得ようとしたり、强

ひて社會の需要に應ずる教育學藝を選ぶが如きは、根本に於て既に大誤謬だ。戀愛も亦それと同じだ。

それ自らに於て意義ある教育學藝が、おのづから個人のためであると共にまた最も多く社會のためにもなると同じく、それ自らに於て貴い戀愛は、またおのづからにして個人の完成であると共に社會的種族的の使命をも全うする。

二八

『愛から爲されるところのものは、善惡の彼岸に在る』

——ニイチェ『善惡の彼岸』一五三節——

人は戀愛を盲目だといふ。それは區々たる利害の打算や、常識や、淺薄な理窟や法則の立場から見て言ふ事だ。いつもながら算盤勘定や三段論法で人生の神祕がわかると思ふ者どもの妄言に過ぎない。戀愛の心境に於ては理知以上の理知、人間味のどん底に徹する叡智の洞察が、殆ど無意識にそして最も力強くはたらいてゐるのだ。若し片々たる皮相の理窟や算盤玉で計るならば、ひとり戀愛のみではない、人生のすべての現象がみな盲目だ。人間は決してそんな脈つぽい理窟などで動いては居ない。理窟で動いてゐるものならば、今日現在のやうな複雑極まる人間世界は決して出來なかつた筈

だ。わたくしの戀愛論を評して『も少し理性に富んだ議論でなければならない』などと、例の村夫子づらをしてお說教をした某某の如き、すこしく生きた人間そのものを見て考へるが可い。

生きる事それ自らが人銘々の藝術である。そして戀愛は人間が全我的に全人格的に、最も力強く最も美しく生きる事である。戀愛に於て靈は白光に輝き、心は白熱に燃える。それは生命の光であり、生命の熱である。その光と熱との前には區々たる表面的利害の如き論理の如き、太陽に射られた薄氷の一片に過ぎないであらう。

二九

むかしから人はただ心理的事實としてのみ戀愛を觀てゐた。之を倫理的道德的に見て人格的戀愛の問題を考察するに至つた事は、近代思想史上の著しき進步である。ただ衝動や感情作用としてのみ戀愛を見てゐるやうな古いあたまの男が、戀愛問題に差し出口を利くが如きは、今日に於て既に許すべからざる僭越である。

三〇

スタンダアルの戀愛論の卷末、『斷片』のなかの言葉。

『戀愛に於て人は往々にして自分が最も强く信ずるところを疑ふ。しかし他の一切の情愛に於ては、吾等は既に一たび明らかにした事を、もはや疑ふことはしない』XXV.）

『戀愛は、それ自らの入費を拂ふために貨幣を鑄造する唯一の情愛だ』（CXIV.）。

戀愛と他の愛情との差別の點は、之を數へれば非常に多からう。單に肉感の有無といふやうな差だけでないことは勿論だ。かの性的心理の學者などが戀愛を定義して、肉慾と友情との綜合なりと事もなげに言ふのは、まるで成つて居ない說だ。水は酸素と水素との化合物なりといふよりも遙かに拙い言ひかただ。酸素や水素が水と全く異なれると同じく、肉慾や友情はまた戀愛ではない。ただこれら二つの物の化合せられ綜合せられることによつて出來た物は、その成分とは全く異なれる特色を持つ。この化合、この綜合によつて、もとの原素や成分とは全く違つた、更に深い、更に微妙複雜な、そして更に不可思議な新しい生命がそこに生れるからだ。夫婦愛は戀愛にあらず、そは一種の友情のみといふやうな事を言つて、私の所說を評した人があつたから附け加へておく。

三一

性慾が戀愛となり、また廣く人間愛となり、道德となる關係は、動力が電氣や熱に變化するのと似てゐる。本質的に見れば根源は一つだ。

三二

性慾の轉化して行く有様は、ごく外面的な普通の事實に徵しても明らかだ。或學者の言ふ如く、靑年がはじめて戀愛の苦みを味はふとき、性慾がそのために減退する傾向のあるのは先づ第一階段だ。次いで子供が生れると、それは親の子に對する愛となつて再び轉化する。殊に婦人の場合の如き、出産によつて著しく性慾が減退してそれが母性愛となつて輝くことは、すべての性慾學者が指摘してゐる事實だ。

三三

私は曩に性慾の抑壓節制が、戀愛となつて淨化されると言つた。（本卷八九頁）ニイチェの言葉に『肉感は往々にして戀愛の發育をあまりに多く無理する。だからその根が弱つてしまつて、たやすく戀愛は破滅する。』

戀愛は性慾に根ざす。しかし抑壓を加へない不羈無節制の性慾滿足は、戀愛を滅ぼして了ふ。動物を見よ、また動物のごとくに放縱なる或種の人を見よ。彼等は戀愛の何たるやを未だ曾て體驗し得ないではないか。性慾の要求が畜生の如く、昆蟲の如くに、たやすく本能的に滿足せられるとき、そこ

に浄化作用（サブリメイション）の行はれる餘地が存しないからだ。

この點に於て歐洲の思想史は、極めて興味ある事實を提示してゐる。卽ち基督教の禁慾思想が、極度に極端に人間の性慾を否定し抑壓した中世紀は、一方に於てまた最も極端に極度に精神化せられ神秘化せられた romantic love の戀愛觀の時代であつた。極端なる禁慾思想が誤れると同じく、中世紀の宗教的な神聖戀愛觀も亦過去の美しき無意味（ビユウテイフル・ノンセンス）に過ぎないかも知れないが、とにかく性的生活に於ける抑壓と浄化作用との關係は、この極端なる例によつても知られると思ふ。

三四

『死のごとく強し』と人は言ふ。しかも戀は更に強くして死をも蹂躪し突破する。戀する人はしばしば『死』を恐れない。

『死』を恐れないと私が言ふのは、單に情死なぞをのみ指すのではない。ブラウニングの傑作『ゴンドラの舟中に』を見よ。

青春の熱情に燃ゆる志士は、いま人目をしのぶ女との最後の逢瀨をゴンドラの舟中に身を託す。互に語り互に歌ふふたりの歡樂には、死のかげに刹那を惜しむものの悲壯がある。男を刺すべく今三人の敵が待つてゐるのだ。漕ぎ行く水路の兩岸には寺院や宮殿が聳えて、眼前に人生の虛僞空疎のすが

たを見せてゐるが、戀に生きる舟中の人には生の充實がある。やがて男は女を抱いて岸に上らしめると、忽ちにして敵の爲に刺される。彼はなほ一たび最後のキスを女に求めて死す。その臨終の言葉

It was ordained to be so, Sweet!—and best
Comes now, beneath thine eyes, upon thy breast.
Still kiss me! Care not for the cowards! Care
Only to put aside thy beauteous hair
My blood will hurt! The Three, I do not scorn
To death, because they never lived: but I
Have lived indeed, and so—(yet one more kiss)—can die!

——R. Browning, *In a Gondola.*

（大意）かくあるべきは定めなり、戀人よ、——
至上の時は今來れり、君の眼の下に、君が胸の上に。
なほわれにキスを、弱輩を意とせず、
君の美しき髮が、わが血に汚れざるやう心せよ。
三人の者どもさげすむにも足らず。かれらは

生きたるにはあらざりき。しかもわれは生きぬ。
さればこそ死するを得。(さらばいま一たびのキスを)。

戀愛の三昧境に於て人は『死』の恐に煩はされない。Timor mortis non conturbabant. それは眞に生きたからである。生命の完全燃燒を體驗し得たものにして、はじめて死線を突破し得るのだ。さかしらなる俗物は之を目して戀愛は盲目なりと言ふ。どちらが盲目だか。

戀は死よりも强い、それが善いか惡いかは今わたくしの言はんと欲する所ではない。唯それが人生のある嚴肅悲痛な事實であつて、詩的誇張でも何でもない事を指摘すれば足る。

三五

社會的道德的の事實として見るほかに、單に心理的事實として又生命の藝術として見た戀愛を論じて、その享樂的快樂的分子を高唱し讃美し禮讃するのに何の不都合があらうぞ。わたくしは單に營養としてのみの食物を斥ける。滋養灌腸のやうな事は、私が病人にあらざる限り絕對にお斷りだ。ただ辨當飯を詰め込むやうな眞似は、誰しもしたくないのが當然ではないか。食物は人生に於て營養のほかに享樂、翫味、鑑賞といふ重大意義を有つてゐる。自ら稱して理性に富むとやらいふ者どもはいさ知らず、普通の人間ならば毫も營養にならないやうな、否な有害な不消化物にさへ舌鼓を打つのが當

然だ。たとひ支那食に於ける谷崎潤一郎氏の gastronomy や、佛蘭西のプリラ・サヴランの『味の生理』ほどまでには徹底し得ずとも、すべての人間はそれが豊かな人間性のある人間である限り、營養といふ事のほかに味はひ、そのもののために食物を攝取するのに、何の不都合がある、何の不思議がある。わたくしは『食』の生活に於て快樂享樂を讃美すると同じやうに『愛』の生活に就いても亦同じ事が考へられるのを正しと信じてゐる。戀愛に於て、人は最も深くまた強く人生を味はひ得るからだ、その甘さと共に苦さをも。

性的生活が、單に生殖や優種論のために營まれるものならば、人間の種馬をつくり精子(ザアメン)を郵送して人工姙娠法をやつたらどうだ。それと同じく工場の食堂や家の臺所に大きな灌腸器械を一つ備へ附けて、護謨(ゴム)管か何かで一齊に滋養食を各人の口か肛門から注入するのも可からう。これは理性に富んだ議論だらう、またそれで各人の能率とやらも増進するだらう。味はひだの戀愛だのといふ不健全な事をしなくても濟まう。

飢餓を免れるためだけならば年百年中辨當飯で澤山だ。また性慾と生殖とのためならば、奴隷としての異性を『所有』すれば足る。人格的だの、自由だの、戀愛などは贅澤無用の沙汰となるだらう。わざ／＼一家團欒の食卓を圍んだり、晩餐服(ディンナ・ジャケット)に着かへて會食を樂しむのは、『詩』と實際とを混同したものだとなぜ言はないのだ。

三六

人間の人間性、人情味が最も深刻に最も複雜に現はれた現象として、性的生活の諸相が文藝作品の主要な題材である事は、ホオマアの昔から二十世紀の今代に至るまで少しも變りは無い。殊に文藝のうちでも、人間生活の表裏いろ〳〵の斷面を直接に動作や對話によつて眼前に展開し、人情味の底に徹すること最も强きを得る演劇に於ては、性的關係が多く何等かの意味に於て作品の契機となつてゐる。そこでいま歐洲現存の劇作家に就いて——即ち故人ではなく二十世紀現在の歐洲劇壇に活躍してゐる劇作家に就いてのみ考へて見ても、ひろく性的生活を取扱つた優秀な作品は言ふまでもなく枚擧に遑なきほどだ。しかしヱデキント一流の性慾描寫でもなく、また社會道德經濟などの問題に聯關しての戀愛描寫でもなしに、單に純粹戀愛そのものを取扱つた『戀の芝居』Théâtre d'Amour の作者として、偉大な成功をしてゐる天才はさう多くはないと思ふ。私の最も多く親しむ英吉利文學は、今日では此點に於て全く駄目だ、とても大陸の作家と角逐し得るものではない。また獨露の劇作家も、私の知れる限りに於ては、餘りに多く戀愛の肉的方面や社會的意義に煩はされてゐる。そこで歐洲現代劇の作家として、純粹戀愛の藝術的描寫に最も著しく成功した第一人者といへば、誰しも先づ指を墺多利のシュニッツラァに屈するであらう。かれの『アナトオル』、『戀愛三昧』以下の諸篇は、戀

、愛心理の極めて藝術的な描寫として『わかき維納』のために萬丈の氣を吐いた不朽の名作である。併しこれらはいくたびか評論や飜譯によつて我が國の文壇に紹介せられてゐるから省略するとして、さて墺多利の文學が何故にこの方面でシュニツラァの如き巨匠を生んだかと考へて見ると、それは獨逸人の理知的で粗野なのと違ひ、墺多利人は極めて詩的で情趣に富み、纖細な氣分や心持を捉へる事にすぐれてゐるからであらう。しかしさういふ特色から言ふならば、歐洲列國のうち最もすぐれてゐるのは今も昔も、何と言つてもそれは佛蘭西である事は言ふまでもない。劇文學に於ても現代の佛蘭西(フランス)文壇は、やはり英獨なぞにとても見られない優秀な『戀愛劇』の作者を多く有つてゐる。

その第一人者として擧ぐべきは、今では旣に老大家であるが巴里劇壇の人氣を湧かせたポルト・リイシュ Georges de Porto-Riche（一八四九年生）だ。彼はさすがに最初は詩人として文壇に出た人だけに、近代文學に腐るほど多い『問題(プロブレム)』のために煩はされて詩と藝術の境域から踏み外すやうな作家とは全く選を異にしてゐる。かれは戀愛に於て心と心との間の、にがき葛藤を見て、そこに美の悲哀を描いた。そして永劫に花やかなるべき戀愛の勝利を讃美した天才である。

ポルト・リイシュがはじめて劇壇に於て名を成したのは千八百八十八年、自由劇場で上演せられた一幕物『フランソアアズの幸運(ラ・シャアンス)』によつてであつた。女主人公のフランソアアズは一途に思ひつめる戀の熱情に生きる女だが、良人の方は藝術家肌の、心の動搖し易い男であつた。二人の結婚後しば

らくして妻は滿腔の熱情を夫に捧げてゐるが、結婚前すでにある女を愛してゐた良人の方には之に報ゆるだけの熱愛がなかつた。それもその筈、以前のその情婦は男の變心を怒つて、遂に復讐のために男を殺さうとてその家にやつてくるといふ騷ぎ。ところが情婦は、フランソアアズが如何にも忠實に熱烈に、眞心こめてその良人を愛してゐるのを見るに至つて、深くも感動させられると共に復讐の企てをも放棄して了ふといふ愛の最後の勝利が寫されてゐる。

この作に次いで彼は、近代戀愛（モダン・ラヴ）の心理解剖としては最大傑作の名ある『戀の女（アムウルウズ）』に於て更に偉大なる成功を得、千九百〇八年それが國立劇場に上演された時は、巴里滿都の士女を狂奔せしめた。これは或科學者の夫婦生活を描いて、良人の嫉妬心が遂に愛の新生活に入らしめるといふ人情の機微を穿つたものである。ポルト・リイシュの作品には、もとより新浪漫派の傾向が著しい。だから前世紀初期の浪漫的夢幻的傾向とちがつて、鋭く人間の內的生活を洞觀し分析し得た現實的な描寫である。

おなじく佛蘭西劇壇で、ポルト・リイシュよりも更に社會劇風な戀愛劇の作家としては、モリス・ドンネ（Maurice Donnay 一八五九年生）の天才が群を拔いてゐる。社會の因襲から放たれた戀愛生活を描くに當つて、その極めて巧妙な劇的手法、水際だつた抒情詩的な對話は、現代人の胸に强烈な感激を喚び起さずにはやまない。二十世紀の『ロオミオとジュリエット』だと評せられる彼の傑作『情人（アマン）』が巴里の劇壇を熱狂せしめてから以後、相次いで出た『もう一つの危險（ロオトル・ダンゼ）』（一九〇五）より『女偵察（レ・ゼク）

團員（レルウズ）』（一九一三）に至るまでの諸作は、みな最も巧みに戀愛の諸相を剖析した傑作として、今は英米の劇壇にも持て囃されるに至つた。なかには社會劇や問題劇の性質を帶びた作品もあるが、その本質は矢張り『人情劇（ドラム・デュ・キョオル）』である所がドンネの特色だ。わたくしは他日更に筆を改めて『情人（アマン）』と『も一つの危險（ロオトル・ダンゼ）』の二大作を紹介する事によつて、現代劇のこの偉才の特色を明らかにして見たいと思つてゐる。殊に後者の如き、母親と娘とが同じ一人の男を戀する心の葛藤が心理描寫の根本となつてゐて、そこに色々な美しい悲劇的な場面を作り出した所に、作者ドンネの驚くべき手腕が發揮せられてゐる。現代文學といへば階級鬪爭とか、社會問題とか、肉慾描寫とかばかりが主題だと思つてゐる人たちは、シュニツラァやポルト・リイシュやドンネの美しい戀愛劇を見て、太古から今に至るまで變る事なき『戀』といふ人生の詩境が、如何に現代の文藝に於て取扱はれてゐるかを知るが可い。

三七

更にまた哲學の方面に於て、歐洲現代の哲人が戀愛に就いて如何なる見解を持しつつあるかを見て私はそれらが既に前世紀のショオペンハウエル時代のものと千里の差あることを知る。わたくしは畏友米田庄太郎博士の著作論文を通じて、リッケルトの歴史哲學が如何に強く戀愛の文化的意義を高唱しつつあるかを見た。しかし私をして最も多く共鳴せしめるものは、故コオヘンの哲學に於ける戀愛觀

である。

わたくしは哲學者でもなければ心理學者でもない。しかし人間がまだ感覺や理性や功利思想なぞで動いてゐる間は、眞劍に本當に生きてゐるのではない。それが感情の激動昂揚といふ所まで來なければ、生命力の全的燃燒には到らないのだと信じてゐる。この完全燃燒からしてはじめて生命の藝術は生れるのだ。コオヘンはその認識論に於て、一切の實在を以て思惟の結果なりと見、先づ純正認識の論理學に出發し、純正意志の倫理學、そしてまた純正感情の美學といふ體系を組立てた。卽ち一般の藝術に於ては純正感情を以て根本なりと見做したのだ。そしてその批判主義の見地からして、この純正感情の本體は卽ち戀愛——及びその戀愛を中心として開展してゐる一切の人間愛に他ならざる事を論じた。そして天才がこの純正感情を外に表現しようとするとき、そこに創造があり藝術があるといふのが、彼の理想主義の美學の根據だ。嘗て私の所論に對して或批評家は、戀愛肯定を以て舊時代の舊思想なりと言はぬばかりの出鱈目をならべて居たが、現に二十世紀の新哲學を代表せる新カント派の學者は、リッケルトにせよ、コオヘンにせよ、かくの如く明らかに、また强く戀愛を肯定してゐるではないか。また文學に於て、戀愛讃美の如きは前世紀の浪漫主義(ロマンティシズム)への逆戻りだなぞと言つた反對者をも私は見た。その然らざる所以は、さきに旣に『近代の戀愛觀』に於ても詳說して置いたのであつたが、いま更に、抒情詩や小說よりもより多く『問題』に煩はされて『詩』を失ふ事の甚だしい現代

劇の方面に於て、特に私はその著しき反證として佛墺の作家を擧げたのであつた。甘つたるい戀物語なぞは過去のものだと放言した人達よ、爾等は現代の哲學文學の實際を何と見てゐるのであるか。

三八

戀愛や性的生活に關する參考書は東西ともに無數にある。しかし學術的にかかる問題を研究した書物として、そしてまた一家の議論といふよりは寧ろ學說の紹介として、事實の敍述として、一般普通の讀者——そして英語を讀む人たちのために、わたくしは近刊書のうちで先づ左の二三を最良の書として推薦する。二十年も三十年も前からある名著の類を一々列擧したならば際限がない。

性的生活に關しては、斯學の權威ブロッホの英譯を讀むのが最も好い。

The Sexual Life of Our Time in Its Relations to Modern Civilization.
By Iwan Bloch. Translated into English by M. Eden Paul.
(London : Heinemann)

また性的心理、性的道德に就いては、ハアバアトの本が好いと思ふ。

Fundamentals in Sexual Ethics. An Inquiry into Modern Tendencies.
By S. Herbert.

An Introduction to the Physiology and Psychology of Sex. By the same.

(London: A. & C. Black)

ハアバアトの書は二三年前の新刊である。これらの好著は、專門の研究者にあらざる人にも興味があるだらう。今までの學者の多くの浩翰な名著を渉獵して、巧みに綜合集成してゐるから一般の讀者に都合が好い。參考書に就いて訊く人が多かつたから玆に附け加へた。

結婚式を評す

ただ形式だけを全うして置けば、何をしても正しい事のやうに思ふのが世俗の誤だ。それはただ外形をのみ備へて居て、中味に生命を失つた腐れ卵の生活である。法律が規定する條件をさへ滿たせば、詐欺泥棒同然の泡沫會社を組織して手柄顔で居る者の多いと同じやうに、しめ繩を張つてさへ置けば、人殺しをしても强姦をしても可いと心得るのが俗物の常だ。主從だの恩顧だの御贔屓だの、色色の美名のもとに多くの奴隷が使役せられ搾取せられて居ると同じく、櫛笄を飾り立てた太夫の道中のやうな服裝をして、三々九度の盃をかはすことによつて、無自覺なる多くの女性が不見轉賣淫和姦の結婚生活を强要せられてゐる。結婚といふ外的形式だけを一生一代の大事と心得てはゐるが、戀愛を人生の一大事だとは考へて居ないからだ。

性的生活の至高の道德であり中心生命であるべき戀愛さへあるならば、結婚の儀式や形式のごときは決して問題ではないのである。またこれとは反對に、いくら婚姻の形式を完備しようとも、戀愛なき性的結合は要するに恥づべき fornication に過ぎない。

貴族富豪の徒が一宵萬金を擲つて、その子女の結婚式を華美にし壯大にするその心理と動機と來歷

とをおもへ。わたくしは必ずしもそれを野蠻時代の掠奪結婚の遺風なりとは言はない。むかし隣國の女を掠奪し得たる勝利者の祝宴の變形とのみ言ふのではない。また彼等が別莊開、新築祝と稱してその財力を誇示する事によつて、勝利者が征服掠奪の『成功』を祝するの宴とは、或は趣を異にするものかも知れない。それは兎に角として、かの壯大華麗なる結婚式が、肝脣の當事者二人の間に人格的精神的の結合――即ち戀愛といふ中心生命を有せざる場合に於て、それは明らかに腐れ卵と選ぶところなき內容空乏の虛僞形式ではないか。殊にまた甚だしきに至つては、當夜の花嫁たる一人の處女が家のため財產のため、或は周圍の人の無理解のために心にもあらぬ新郞のもとに赴くその合巹の夜こそ、この可憐の一女性が生涯を葬り去つて、今からは『生ける屍』となつて世を終らうとする悲しむべき葬送の儀式ではないか。かくの如き結婚披露の宴に參する當夜の客たるもの、皆まさに左腕に喪章をつけ、喪服を纏うて然るべきであらう。

その夜、無知無自覺なる女性が、みづからの盛裝を照らす爛々たる燭光に眩惑せられつつ、生涯を賣られ囚はれて行く身とも知らず、夢のまに處女の純潔神聖を奪ひ去られるのを見ては、いやしくも自由正義人道をおもふ者にして一掬の淚なきを得るだらうか。この美しき『奴隸』の門出は、胡地に赴く王昭君よりも、親兄弟のため遊女に賣られて行く女よりも、なほ更に一層の悲慘事であると私は言ふ。何となれば其女は、自分自身の不幸をさへも全く氣附かずにゐるからだ。

更にまた思へ、その女性が果敢ない虚榮の夢にあこがれつつ、『美しき牢獄』に向つて嘻々として囚はれて行くさまは、藝者などの服裝を見て羨ましと思ふ無知な田舍娘などが、自ら望みまた喜んで苦界に身を沈めるのと同じ悲劇でない、と誰か言ひ得るものぞ。

人は言ふ、形式が大切だ、それが無ければ結婚は野合だと。如何にも御尤もだ。しかし忘れてはならない、形式儀式が大切なのは、その中味であり精神であるところのものとぴつたり一致してゐる場合に於てのみ大切なのだ。それでなければ虚僞だ、腐れ卵だ。外形と內容とは、吾等の生活に於ても藝術に於ても、常に寸分の隙間なく合致して居なければならない。二つの間に隙間があるとき、そこに僞善があり罪惡があり不正が行はれる。形式は遂に人を欺き己れを欺く假面となる。

熱烈な戀愛といふ中味さへあるならば、形式儀式は如何に簡單に、いかに貧弱であらうとも立派な結婚であつて、それは卑しむべき野合とは言へない。秀吉ではないが筵の上の三々九度でも、それが若し戀愛結婚であるならば、連日連夜盛宴の馬鹿騷ぎよりも遙かに貴ぶべく遙かに芽出度かるべき正當の結婚である。

貴族富豪の輩が何をしようともそれは勝手だ。しかし家計の相當に苦しかるべき無產者までが、結婚の精神であり生命である戀愛を全く問題外にしておきながら、單にその形式儀式だけを人生の一大事であるかのやうに心得、苦しい無理算段をしてまで娘の仕度だの婚禮だのに心を碎くのは、これは

また見るに忍びない悲劇であり、また喜劇である。子女をおもふ親ごころは固より貴く美しい。而もそのたふとく美しい親心が結婚そのものに對する根本的の迷妄謬想と結び附いて、かくの如き悲喜劇を演ぜしめてゐる事を思はねばならぬ。

結婚には、その結果から見れば勿論重大な社會的意義の存する事は言を俟たないが、愛による男女の性的結合それ自らは、飽くまでも自覺ある當事者二人の私事として取扱はれるべきもので、世間や親兄弟が馬鹿騷ぎに騷ぎ立てて儀式形式を八釜しく言ふべき性質のものではないのである。況んや無理算段をしてまで之を披露し廣告して、荷拵へや結納や盛宴に無用の浪費をなすが如きは愚劣の極だ。元來人は羞恥の感を以て生殖器を隱蔽すると同じく、性的關係に就いても、たとひ之を性交そのものの如く祕密裡に行はないまでも、無闇に之を世間に誇示したり吹聽したりすべきものでは無いのだ。好いた同志がこつそり、いつの間にかちやんと納まつてさへ居れば、それに越した事はないではないか。否なその方が、より多く合理的であり、人間として純眞であり道徳的なのではないか。

先づヱスタマアクの『人間結婚史（ヒユウマン・マリヂ）』や、ハワアドの『結婚制度史（マトリモオニアル・インステイテユウションズ）』を繙いて、結婚進化の歷史を顧みよ。最初それは暴力による婦女掠奪であつた。日本でも、山間僻地には今なほ此蠻風を其儘に存してゐる所があると聞く。現に英國のヱイルズの或田舍では、森林に於て馬上に花嫁を迎へ取る事が今でも結婚式として行はれてゐる。これなぞは明らかに昔の婦女掠奪を形式化し儀式化したも

のに他ならない。朝鮮では今日なほ總角(チョンガ)と稱する獨身者を卑しんでゐるが、それなども掠奪の能力なき弱者を侮蔑した古代の遺風ではなからうか。婦人の人格を認めず、ただ之を物品として『所有』した時代に於て、掠奪結婚はまことに當然の事であつた。そしてその結婚の儀式は、同時にまた掠奪の勝利の宴であり、征服者の戰勝祝賀を意味したが故に、壯麗華美を盡くして居たこともたやすく想像し得られる。

時の流と共に掠奪結婚は、毫もその精神を變へずに唯その外形を改め平和の假裝をなす事によつて、次には進化して賣買結婚となつた。それは掠盜が變化して貿易となつた徑路に等しい。男系の家族が婦人を肉慾滿足と家庭勞働と家族繁殖とのための道具として交易して居たのである。次いで女を賣買する事を恥づるに及んで、賣買結婚は更に變形して贈與結婚となつた。西洋では羅馬時代に於て既にこの賣買結婚はすたれ始めた。羅甸語でいふCoemptioといふ結婚法の如き、既に賣買の形式が一轉せんとする時期のものであつた。贈與結婚に於ては、女の買受代金の支拂は變じて『結納』となり嫁資金となり、女といふ賣品が變じて贈物と云ふ形式になつた。かくて掠奪から贈與に至るまでの變遷はあつても、その根本思想に變りは無いのだから、かくのごとき結婚の儀式はまた勢ひ盛大に壯麗に、そしてまた甚だしく手數と費用とを要するものであらねばならない。掠奪の勝利を祝ふ心は一轉して富を誇る心となり、再轉して贈答の品物を飾り立てる心となつた。日本でいま世間普通の結婚

の形式は、なほこれらの階段に低迷してゐるものである。

今日、結納とか仕度金とか稱するもの、實はむかし女の地位や美醜によつて相場をつけて奴隷賣買をした頃の遺風である。かづき、うちかけ、櫛笄の裝飾は女郎の盛裝よりも更に美々しく派手やかであるが、あれはそもそも何だ。『貰はれ』『片づい』て行く『女』といふ物品が、立派な贈物として熨斗水引で飾られてゐるのではないか。それは人格あり自由ある『女』といふ人間が結婚するのではなく、一個の道具として或『家』または『家族』へ賣られ、貰はれて行く門出の裝飾ではないか。俗に、人形にも衣裳と言ふ。況んや可愛い娘であり生きた女である。『家長』と云ふ者が無けなしの財布を絞つてこの可憐なる『賣物』『贈物』を、お菓子か料理の如くに飾り立てるのに不思議は無い。それはたふとき親心であり父母の慈愛である、とまあ左樣いふのか。

試みに事實を見よ、今日普通の收入高の人で三人五人の娘を持ち、それを一々お菓子の如く料理のごとく飾り立てて嫁入の贈物にすることは『家長』の負擔として經濟事情が既に之を許さないのではないか。親たるものが今日そのために四苦八苦してゐるといふ事實を、何と見るのか。社會組織に於てまた經濟組織の變革のために、封建時代の家族主義が極めて急速に崩潰しつつある今日、なほ強ひて舊時の形式を墨守しようとすることは、しばらく思想上の理由は別問題としても、事實に於て既に不可能な事を充分に示して居るではないか。そんな苦しい思をしてまで、婦人の自由と人格とを無視

する必要が何處にあるのか。世は既に夏になつた。いつまでも冬の時代の綿入れを着て、暑い〱と言つて勝手に自ら苦しんでゐる者どもの愚を嗤へ。

談は思はず岐路に入つたが、掠奪、賣買、贈與の結婚は最後に更に進化して戀愛至上主義の結婚とならねばならぬ。それは卽ち互に相愛し理解し合つた男女二人の靈と肉との抱擁であり結合(ユニオン)である。そして十分に自覺あり反省ある二つの個人みづからが、自らの結婚に全責任を負ふのだから、わきの者どもが馬鹿騷ぎに騷ぎ立てる必要などは斷じて有り得ない筈だ。形式や儀式をかれこれ八釜しく言ひ立てることは、この進化した結婚に於てその理由は極めて薄弱とならざるを得ない。

先づ因襲を離れて合理的に、率直に、素直に考へて見ろ。結婚式そのものは、責任ある當事者個人同志の私事としてそれが進化すればするほど、形式や儀式に於て益々單純化(シンプリファイ)されなければならない性質のものだ。その當事者たる個人が進めば進むに從つて、卽ちその批判や自覺に於て發達すればする程、ます〱他人や法律なぞ外部的な干渉から遠ざからねばならないことは、他の色々の人事現象と毫も異なる所はない。これは結婚進化の歷史が明らかに證明する事實である。試にルトゥルノォの『結婚進化論』の所說の如きをも參照せらるれば、事理はおのづから明らかなるを得よう。

東京で私はいつも或ホテルに泊つてゐる。そのホテルには殆ど每夜の如くに結婚披露の式が擧げられ、階段の上の廣間に『何々何々兩家御席』といふやうな札が麗々と揭げられる。おかげでホテルの

止宿者は大食堂から追拂はれて、三階あたりの隅の窮屈な臨時食堂に入らねばならぬ。時には私みづからも披露の宴の席末に列する事があるが、さういふ折に私は色々の事を考へさせられると共に、いつも獨り苦笑を禁じ得ない。しかし近頃東京や大阪で、煩雜な浪費の多い日本料理の披露宴を廢してホテルに持込む者の多いのは、それ自らが既に一種のけちな姑息な單純化（シンプリフイケイション）であるから結構だが、田舍などでは今もなほ連日連夜、それこそ長夜の宴を張つて婚禮祝をするあの愚劣さは何としたものだらう。形式騷ぎで奔命に疲れたりとはいへ、花婿どのの方はなほ可なりだ。花嫁に至つては眞に慘憺たるもの、賣られ貰はれ奪はれて行く可憐の一少女は、衆人環視の的となつて汗だくだくの姿で苦しむ。戀愛なき和姦强姦賣淫的の結婚は、かくまでも盛大に花々しくその形式を飾り立てる事によつて、虛僞と罪惡とを胡魔化す必要があるのだらうか。

わたくしは、昨今の流行語たる「節約厲行」なぞのために、之を言ふのではない。世上保守頑冥の徒が婦人の解放を認めず、性的道德の意義を解せず、從つて戀愛結婚の眞諦を無視するもの多きを慨し、病床に筆を呵して此一篇を作る。

OBITER SCRIPTA

學問とか文筆とかの業に從事してゐる者は、からだは動かさず、言ふ事も呑氣な事ばかりを言つてるから、わきからは暇人のやうに思はれる。雜誌や著述の原稿でも書けば、それは仕事をしたやうにも言はれるが、本を讀むといふことは他人からは全く暇つぶしの閑事業か何かのやうに見えるのだらう。書物と言つても古臭い昔の書物や、さもなくば戲曲小說の類を繙いてゐるのは、これが職務だとも他人は思つて吳れないらしい。

事務やら周旋やらで東奔西走して居る、さも忙しさうな人が義太夫を稽古したり、盆栽をいぢつたり、謠曲をうなつたり、碁や玉突に熱中して居るのを見ると羨ましいと思ふ。あれが卽ち忙中おのづから閑ありとでも言ふのか。そして學徒や文人の業はまことに閑中忙あるものであらう。日曜もなければ土曜もない。晝もなく夜もなく、謠もうならず碁も打たず、毎日々々八時間勞働はおろか、十幾時間の勞働をしてまだ足らない。われに時間と精力とを與へよ、然らずんば死を與へよ。しまひには、そんな事まで言ひたくなる。この忙しい人間をつかまへて、原稿を書けだの、講演に出ろなぞと責め立てるのは、言ふ方が無理である。

忙中の閑か、閑中の忙か、われ之を知らず。要するにかくの如き文字を聯ねるのは、私たちに取つては obiter dicta である。否な obiter scripta と言つた方が當つてゐるだらう。

×

運動の競走なぞに卑怯な人間を見ることがある。到底相手に勝てないと思ふと、自分は走ることを中止して了つて、さきに走つてずん／＼勝つて行く者に向つてけちをつける。かれこれと文句をつけて勝負を胡魔化さうとする。まことに良くないことだ。

非常な急激な速さで時代は進轉する。自分の頭腦が鈍くて、とてもこれでは追附いて行けないと思ふと、今度は自分よりも前に進まうとする者に向つてけちを附けたがる。さういふ者に限つて犬の遠吠えのやうな事を言つて、同じ仲間を呼ばうとする。何事にも同類といふものは出來る。

さういふ人たちに限つて、自分でもつと早く走れる練習をしようとか、もつと深く物を考へようとかいふ努力を決してしない。自分は其儘にして置いて、競技の相手や時代思潮の方が間違つてゐるのだと強辯する。

彼等は他を欺くに先だつてまづ自らを欺く。今の如き時代に於て固陋頑冥の言をなす者には、多かれ少かれ自己欺瞞のあとが見られる。從つてその生活は虛僞に始まり虛僞に終つてゐる。

×

冷然として傍觀者の態度をとることは、人生に於てむつかしいことである。

運動會の競走に、うしろの方から緩挺な走り方をして、ぶつ〳〵言ひながら隨いて行く者がある。超然として圈外に立つことも出來ず、さりとて眞先に走ることも出來ないから、仕方なしにまあ尻から隨いて行く。しかしぶつくさ言ふ事だけはやめない。それをやめれば、實はも少し早く走れる筈なのである。

今の日本人の多數は世界思潮のなかを、ぶつくさ言ひながら尻から隨いて行く方の仲間だ。再びいふ、ぶつくさ言ふ事をやめて高速度を出せ。

×

頑冥無理解な人たちとその反對の人たちとを比較せよ。凡ての場合に於て、どちらに正直な無邪氣な人が多いか、勇氣のある好人物が多いか。又どちらに姦佞巧智の徒が多いか、狸おやぢが多いか、陰險なずるい奴が多いか、利巧ものが多いか。そこを考へて見よ、personal equation の問題として。

×

或人が言ふ、四五日新聞を見なかつたので、世間に後れたやうな氣がすると。新聞を見るから世間に後れるのである。世間よりも進むといふ事は世間を離れる事である。大いに

進んでゐる事は大いに離れてゐる事だ。

四五日世間とつきあはず、新聞も讀まないで、ただぢつと自己の内面を反省し、周圍を凝視せよ。また何か讀まうといふならば、むしろ古人の書を讀め。それは自分が世間よりも遙かに離れ、遙かに進み得る最良の法である。

×

あたまは散髪にしたが、ちよんちよん髷だけは頭蓋骨の下に藏しまつてあるやうな說を吐いて、一生懸命になつてゐる人を見る。私は首をうなだれて其人の言を謹聽する。その說に感心するのではない、その熱誠に動かされるのだ。敬すべしとも思ひ、貴いとも思ふ。其人は腹からさう信じてゐるからだ、半點の虚僞が無いからだ。私は古社寺を訪ねて、國寶を拜する時のやうに難有味を覺える。

×

英語獨逸語佛蘭西語、さてはまた片假名の固有名詞や流行の新熟語などを混ぜて、女大學式の賢母良妻論をしたり、形式道德の說法をしたりするものがある。明らかに虚僞であり詐僞である。

腐れかけた古肴に鹽をふりまき、てんぷらをかけて賣附ける小賣商人の奸譎を學ぶ事だけは止よして貰ひたい。その鹽燒、そのてんぷらにも拘はらず、古肴から發する惡臭は鼻を突くからだ。

全く頭腦の働かない固陋の徒か、或は思索と努力との價を拂ふに吝なる精神的安價生活者は、その

古肴をも値段が安いからと言つて珍重するであらう。ただ識者の笑を如何にかすべき。古酒新嚢に盛るべからざるを知らないとは、世智に長けたる利巧ものにも似合はぬ愚かさではないか。

×

封建時代の賢母良妻論に怪しげなてんぷらをかける者の一二の例を語らう。女の母性を說くのも、エレン・カイのやうな筋の通つた說き方ならば結構だが、新しい假面を使ふ賢母良妻論者は、馬鹿々々しい譬へ話なぞを持出す。西洋の話や片假名をさへならべて置けば、何も知らない者は感心して聽くとでも思つてゐるのだらう。聽衆や讀者を侮辱すること甚だしきものだ。

女は子を生み、子を育てるのが何よりも大切だといふ解り切つた事を說教したさに、或西洋人の言つた言葉を引く。卽ち女が一番美しく見えるのは子供をあやして居る時だと。なるほどさうかも知れない。そして女が臨月になつて大きなお腹をして居る時は女性美の極致だ、と此講演者は何故言はないのだらう。そして舞姿や、媚びるやうな嬌態や、美しい聲で歌ふ時なぞよりも、男の按摩をしてゐる時の方が、ずつと美しく女らしくけだかく見える、となぜ言はないのだらう。

また賢母良妻先生は、頑冥な家長制度で固まつてゐた羅馬時代の有名な女、コルネリアの話を持出

す。客が自分の寶石を誇つて見せ、あなたのはと訊いたとき、賢母コルネリアは自分の子供を引張り出して『私の寶石はこれでございます』と答へた。その二人の子供はティベリウスとカイウスとで、共に羅馬の執政官にまでなつた。グラッカス家の賢母良妻コルネリアの名は、千載のもと青史に傳はつてゐると講釋する。聽く方でも、さすが學者のいふ話だと思つて感服したやうな顏をしてゐる。

自分が所有する寶石を誇ると同じ意味に於て、自分の子供を誇る親はたしかに愚物である。子供は親の所有物でも何でもない。また如何なる品物にせよ、自分の所有物を誇るといふ事からして既に間違つた話だが、同じ間違つてゐるのなら、子供を誇るよりは、まだ寶石を誇つてゐる方が罪がなく無邪氣で、どれだけ好いかわからない。氣障さ加減が少いだけでも好い。殊に母親の私有品であり裝飾品である寶石と、子供とを比較した其根本思想に於て、賢母良妻コルネリアはおのが愛兒に向つて大いなる侮辱を加へた者である。

子供が立派な人間になつて執政官になつた。なるほど結構な事には相違ないが、それはたま〳〵子が偉かつたのである。子には子としての個性もあり人格もあるからだ。必ずしも親が偉いからでもなく、また賢母良妻と稱する者の育兒敎育の力のみによるとは、決して言はれない。馬鹿な母親でも立派な子供を持つてゐる。もし子供が偉いからと言つて母親が誇とすべきものならば、子供が惡事を働いた場合、封建時代のやうに兩親も一緒に罪に服しなければならぬ。子が人殺しをしても親が罰せら

るべきでない以上、子が偉くなつたからとて親が誇とすべき理由は斷じてあり得ない筈だ。(子供の立派になつたのを、情愛の上から親が喜ぶといふやうな事とは全く別問題である。)

親は親である、子は子である。子は親の製造品でもなく、所有物でもない事は解り切つた話だ。コルネリアの話などは、個人々々の人格を認めなかつた家長制度の羅馬時代か、或は封建時代に於てのみ通用したであらうが、二十世紀に於ては斷じてお座に話せる話ではないのである。美談でも何でもない、單に古人の蒙昧を語る一笑柄に過ぎない。昔の『子寶思想』の一例として看過すべきものだ。

ヴイニンゲルの言ひ草ではないが、婦人には母型と娼婦型との二種の型がある。着物の柄の選り好みすら出來ない母型と、美貌や裝飾をのみ誇とする娼婦型と二種の女が出くはせば、此コルネリアのやうな逸話は昔も今もざらにある話だ。わざ〳〵公開講演なぞに持出す程の珍談でも何でもない。

又コルネリアの話は、少しでも西洋の書物を讀んだものの誰でも知つてゐる陳腐極まる話である。同じく陳腐な教訓談でも、虚言を戒めるための、華盛頓が親の木を切つた話や、イソップ譬喩談にある狼と呼んで助を求めた子供の話などは、千古萬古に通用する話だ。賢母良妻コルネリアの話なぞよりは遥かに貴ぶべき訓話である。

あんな陳腐平凡談を語る者も語る者なら、聽く者も聽く者だと思ふ。世間は廣い。

×

話は違ふが、自分の子供を誇るといふ事から思出した。わが子の自慢話を人前で誇り顔に聞かすやうになつたら、既うその人も老い込んだ、末路だと見て可い。

又よく學校の先生なぞにある事たが、以前に教へた生徒が一人前になると、ながながと昔からの來歴を他人に話して聞かす。あれもわしが教へたのだといふやうな事を言ふ。眞の師弟間の情愛あつてこれを言ふのならば美しい。ただ自分が教へた事を誇るのならば、その先生みづからは十中八九まで既う脈の上つた人だ。氣の毒である。

何事にもあれ、過去を語るやうになつたら既う駄目だ。わかくしいまなこは、ただ未來に向つてのみ輝く。

×

教育家といふものは、朝に夕べにあの元氣のよい少年や青年を相手にして居ながら、なぜ早く老いるのだらうと或人が訊く。

教育家は老人の眞似をする事を商賣にする。嘘から出たまことで、やがて自分も老人に出來上るのだ。さうも考へられる。

他の會社員なぞは、老人の重役なぞを相手にしてゐるから、自分の若さを守らうとする自衛の心持が自然と働く。その反對に學校の先生は、少年青年に對して常に自分の偉さを見せ、先輩ぶりを誇

り、常識ぶりと謹嚴ぶりとを見せようとする。相手の逆に行かうとする心情は兩方とも同じだが、結果から見れば、老人を相手の前者は若く、少年を相手の後者は老い込む。

×

あれは好人物だ、正直者だといふ時、それを襃めるのではなくて輕蔑してゐるのだ。あの男は詩人だといふ時、輕蔑するばかりでない、敵視してゐるのだ。羅甸語では Vates といふ言葉が、詩人にもまた豫言者の意味にも用ゐられた。

×

聖書の『豚に眞珠』といふ言葉は、『猫に小判』といふよりも巧みな言ひかただ。ある美しい人が、ダイヤやエメラルドやルビイやオオパルやガアネットや色々の寶石を入れた手函のうちから、眞珠をいくつか地上に撒いてやつた。そこに居た獅子だの虎だの豹だの、また孔雀白鳥などは、喜んでその眞珠を呑み込んで了つた。犬だの猿だの狸だのは、自分に用の無い物だと思つたか見向きもしなかつた。

そこへ五六匹の豚が出て來た。いつもの醜惡な聲を出してぶつくさ言ひながら、前足で眞珠をかいて糞土の中に落さうとした。

美しい人は眉をひそめながら言つた『おゝ可憐の豚よ。』

その眞珠は『詩』であつたかも知れない。題は何と言つたか、讀者は記憶して居られるだらう。

×

話は更にさきの陳腐平凡談に歸る。

常識即ち平々凡々識で充分にわかり切つてゐる事を、長々と書いたり喋舌つたりしてゐる者の氣が知れない。何のためにあんな事をするのだらう、さう思つて見ると、人をして苦笑を禁ぜざらしめるやうな色々の理由がその背後に潜む事を考へさせられる。

陳套で平々凡々で、淺薄な言葉の二三の例をいふと、

「何でも極端な事を言ふのは、よくない。」

「新思想も惡くはない。時勢が變化するのだから已むを得ない。しかも昔からの習慣も一概にわるいとは言へない。」

「戀愛は結構だ。しかし外の事も大切だ。戀のためにはどんな惡い事をしてもよいといふ法はない。」

「も少し理性に富んだ議論でなければならぬ。」

「流行にかぶれるのはよくない。」

「あなた方は聰明な理知に訴へて正當な批判をなし、自らよしと信ずる道に進むがよい。」(以上は或所の女學校聯合大會とかでの講演で某博士といふ人の言である。)

「家庭生活なるものには、學術的に充分なる理由の存するを見るのである。人類あつてこの方幾萬年を經たか知れぬのであるが、その分野はこれを問はず、悉く何等かの家庭生活を營み來つた事を見れば、この種の生活にはたしかに一つの必然的意義が存するに相違ない。家庭は夫婦を以て始まるものである事は、改めて言ふを要せぬのであるが、そこに何時しか親子關係、兄弟關係、姉妹關係等が成立つのである。家庭はこれらの人々を訓練して單に家庭の一人たるばかりでなく、また社會、國家の一人たるばかりでなく、人そのものとして必要なる資格を備へさせるのである。第一、家庭は道德上、缺くべからざる訓練機關たるのである。家庭は之を小規模の社會といふべく、また小規模の國家といふべきである。（此文の終に小さく『文責在記者』の文字があつた。）

「吾々は一夫一婦主義者であり、賢母良妻主義者であり、賢父良夫主義者であり、人類愛護主義者である。」

「衣服を左前にして電車に乘つて行く事が出來たら、私はその人に勇者であると言はう。しかしなかなか出來まい。」

「思潮の動搖し易い、そして物の眞相を明らかに判別する事の出來がたい若い人たちは、よくからした議論などに迷はされる。」

「一時は日よけになる樣な庇髮といふのが流行した。此頃は髷を首筋のずつと後の方で結つて、前髮を眞中で割つたり、七分三分にわけたりするのが流行る。」

あまりに馬鹿々々しいから、引例はこれ位で切り上げるが、どれも皆お說教として一々御尤もだ、誰しも異存はない。こんな平々凡々の『ただごと』を二度も三度も講演なぞで喋舌つて、なほそのう

へに同じ事を同じ文句で色々の雜誌などに寄稿して居る者の氣が知れない。否な氣が知れてゐるから苦笑させられる。

もとより『眞理は平凡である。』だからたとひ平凡であつても、世人が若し誰も氣附いて居ないやうな事ならば千言萬語をつらねても之を說くの要がある。しかし右の例のやうな『ただ言』は、今日中學校や女學校の二年三年の生徒の耳にでも、陳腐常套だとしきや聞えないのだ。彼等と雖も輕侮嘲笑なしには聞くを得ず、讀むを得ない程までに平凡なのである。それも辯舌として巧いといふでもなく、また文章といへば、いつもこんな平板な事を言ふ者どもに限つて、先づ第一行目からもう調子が外れてゐる。乾燥無味、蠟を嚼む位なら辛抱もする。まるで刄の缺けた鰹かきで鰹節を搔いてゐるやうな文章だから堪らない。いつたい、あんな拙惡な文字を聯ねて、自分でそれを恥だとも思はないのだらうか。

かのやうな解り切つた平凡陳套の內容を、かのやうな書きなぐりの出鱈目な文字で綴つて、これを世に公にしても平氣なほどまでに、人は厚顏無恥になれるものだらうか。もし成れるものならば私も、たとひ劇務の餘暇を以てしても原稿や講演を多く引受けるであらう。十中の九までは之を謝絕したり、或は心ならずも違約したりして、他人に迷惑を掛けないで濟むであらう。『自明の理』を事々しくならべ立てる事によつて、お茶を濁す事は決して難事ではないからだ。

×

深き痛ましき人間味、人生味に透徹せず、唯わづかのなまい學問や常識論や實利說だけで、人間の生きた事實を批判しようとする人々が、現代の惡い意味のジャアナリズムと野合するとき、そこに出來るのは西人が謂ふところの platitude（平凡のお談義）である。その手ぢかな例として、さきに戀愛事件が世を騷がした時に出た多くの識者と稱する者の言說を見よ。

×

人がみな利巧になつて、上手になつて、賢くなつて、妥協したり折合つたり理窟を附けたり胡魔化したりする者ばかりの多いとき、そして人間生活を常識的に、散文的に、利害打算的にしようとする者ばかりの殖えるとき『トルイズム』を說くやうな必要は毫も存しない。眞に說く必要のあるものは超常識の說である、反抗の論議である、建設と創造とのためにする破壞說である。それは drastic な『詩』であらねばならぬ。眞に吾等が聽かんと欲するものは凡庸の說法ではなくして、天才の聲だ、豫言者の聲だ。

×

玆に超常識といふ言葉をつかつたから一言して置く。これは私の假の造語（コイネイヂ）だ。常識といふ平々凡々なところから更に超越して、それ以上に出た見識をいふのである。

日本には『常識（コンモンセンス）』といふ言葉を、時々飛んでもない意味につかつて平氣な人がある。たとへば『中學を卒業して常識を得る』なぞと言つてる者がある。想ふに常識の語を『普通の知識』といふやうな意味に誤解してゐるものらしい。滑稽だ。その滑稽が立派な英語の先生によつて爲されてゐるのだから、なほさら可笑しい。昔のアリストテレエスよりハミルトンの哲學を經て今日に到るまで、常識（コンモンセンス）といふ言葉をそんな意味に解釋した例は斷じて無い。日常の用語例から考へても、常識（コンモンセンス）とは、論理や想像によらない普通のふんべつとか判斷力とかいふだけの意味だ。

常識にまですらも達し得ない非常識、沒常識に至つては論外である。しかし常識だけはあつて、それ以上にまた一歩も進めず、動けもしない輩（やから）は平々凡々の徒　共に語るに足らない。われらは超常識を詩人に求め、天才に待つ。その聲を以賽亞に聽き、エレミアに求め、親鸞に聞き、空海に聞くと共に、またシェリイに、イブセンに、北村透谷に、ラスキンに、ホヰットマンに、ブラウニングに、ニイチェにこれを聽くことを得るであらう。

沈默せよ、常識の徒、平々凡々の輩。なんぢらは卑しき logic-chopper にだも及ばざること遠き者なるを知れ。

×

常識の徒が天才を嘲ける慣用語がある、曰く crank（偏癡氣とでも譯すべきか。）

やりかたが下手だといふ。下手でも結構だ。己れを欺き他を欺く事の最も少いやりかたが最もたふといのだ。成功と失敗とのみが問題ではない。

×

たとひ失敗を豫期しつつも、たとひ破滅を覺悟しつつも、ことさらに拙劣に正直に直線的に、横紙を破り横車を押すことは、今日の如き世の中に於て、自己の正義と自由とを全うせんがためには避け難き場合が多い。それが『失敗に於ける成功』success in failure を得るための唯一の道である。

目的のためには手段を選ばない事の不可なのは誰しも知つてゐる。知つて居りながら、目的のためには自己を欺き他を欺くやうな、『上手(じやうず)』な利巧な手段を取つてゐる。そして人生の五十年は過ぎ行く。

人生の最後は死だ、滅亡だ。いくら『上手』な手段を取つても『死』は避けられまい。

そこで此五十年を如何にして送るかが問題である。それは虚僞や胡魔化しのない眞面目な眞劍な努力をするといふ外に道はないのである。努力は苦しみであり悩みである。この苦しみを味はひ、この悩みを享樂するところに、人生の生き甲斐はある、生の喜びもある。ただ最小抵抗(リイスト・レジスタンス)の線を通つて、御都合主義、事なかれ主義、折合ひ主義で胡魔化して行く事ではない。人生の表面を、ただ氷辷りのやうに滑らかに辷つて行く事は『成功に於ける最大失敗』であつて『失敗に於ける成功』ではある

まい。成功とか失敗とかいふ言葉は、これを金錢や事業や名利なぞを標準にしていふべきではなく、純眞な第一義的な人間生活といふ事を土臺として考へねばならぬ。若しそれでなければ、『死』を面前に控へて凡べての人の生活は結局失敗に終るといふ事になる。

×

内から迫る自己の欲求を胡魔化してゐるやうな虚僞の生活には、力がない、充實がない。自己そのものの生活の充實をはからないやうで、どうして眞に社會のため人類のために盡くす事が出來るだらう。それでもなほ盡くして居るといふならば、その言葉からして既に虚僞である、胡魔化しである、僞善者の聲である。少くとも自己欺瞞であらねばならぬ。

唯『仕事を上手にやる』、うまく纏めて行く、そんな事は今の多くの俗物が考へてゐるほどまでに、人間として立派な事ではあるまい。

×

或人は死後の天國を說き淨土を言ふ。しかし現在五十年の生に於てすら、自己を充實せず深化せざる虚僞或は無自覺の徒が、高き天國に到り、彌陀の淨土に達し得るとは、わたくしには信じ得られないのだ。私は從つて總ての禁慾主義（節慾ではない）や消極主義を、宗敎としても排斥すべきものだと思つてゐる。

×

世の中の人事には、決して褒めるべき事でないと共に、また惡く言ふ事も出來ないやうな事件がいくらもある。ちやうど爛熟した果物が枝から地上に落ちるやうに、やむを得ない自然の事なのだ。わきから嚴正批判だの何だのと、したり顏に言ふ者どもこそ間違つてゐるのだらう。枝から落ちるのを默つて見て考へてゐれば可いではないか。そしたらばニュウトンの萬有引力說もわかるだらう。更に二百年を經て相對性原理も考へられるだらう。

×

『靑春の光榮、何の時にか歸らん、
再び歸らず――ああ、遂にまた。』
When will return the glory of your prime?
No more—oh, never more!

歲三十ならずして伊太利の海に溺れて死んだシェリイでさへ、こんな嘆きを繰返した。碌々として四十いくつかの生を貪つて、なほまご〳〵してゐる此身は恥づかしい。革命詩人シェリイはあの若さで世を去つた。而もその遺した抒情の大詩篇は全歐を動かし、彼が激越の調と幻想の詩美とは、英吉利語と共に恐らくは不朽なるべき世界の至寶だ。天才を享けずして空しく生を貪る者の悲しさを、歲

四十にしてしみじみと味ははせられる。いかに我が身に呵責を加へて見ても、強く烈しく自ら鞭韃を加へて見ても、泥細工のやうな、張りぼてのやうな此鈍根、――駄目だ、火の中にくべても更に惜しくないのは此身だ。燒き殺して見たつて、切り刻んで見たつて、肥料にもならないのが此身だ。天才なくして徒らに、うすぼんやりと唯此世に生れ出た我が身を呪ふ外に、何の仕樣もない。

思へばことし(一九二二)はシェリイの百年祭だ。矯激の無神論を叫び、ゴッドヰンに共鳴し、社會改造を夢み、美の幻影を追うては遂に詩神の天國に去つた若き抒情詩人の最後の日は、今から百年前の七月八日であつたのだ。新しき理想主義が赫奕たる光輝を放てる現代に於て、更に百年の昔に溯つて舊時代のロマンティシズムを憶ふとき、電波の如き感動に觸れて胸を躍らすものは、獨り西人のみではなからう。

×

涅槃經の作者は人間に生老病死の四苦を數へた。他の三つはしばらく別として、老は今現に私たちの眼前に迫れる苦しみである。

肉體の秋が來る。鬢髮霜をおき、近視が遠視になり、頭が禿げる位は何でもない。『心』に老境が來て、動脈の硬化のやうに人としての已れが硬化し、反撥性を失ひ感受性を鈍らし、情熱と感激を失ひ、自分で自分が造つた殼の中にをさまり、勇猛の氣衰へては遂に諦めの人となつて、事なかれ主義

の靜居安住を求むるやうになつたら、もう往生だ。私などのやうに四十を越した者には、生きんとするの努力は卽ち老いざらんとするの努力だといふ事を、しみ〲と考へさせられる。

世間には貧乏を恥辱だと心得て居る俗物がある。また無知は罪惡なりと言つた人もゐる。しかし心が老いて行く事は、貧乏よりも無知よりもなほ更に大いなる恥辱であり罪惡である。

とこしへに心の若さを——內なる『靑春』を失はざらんとするの努力、それがなければ老人だ。二十歳三十歳の若い老人さへ世には珍らしくない。

×

稚氣とか幼稚とかは、俗衆や老人が侮蔑する程に惡いものではあるまい。その半面には心の若さといふ貴いものがあるからだ。老熟、老成、老獪、老功、老練、そんなものよりか稚氣滿幅の方がどれだけか貴い。『老』がいけないのだ。

まことに『老』といふものは取り柄のないものである。そこで老いた奴の處置に困つたところから、人間は利巧な一策を案じた。卽ち愚物でも無能者でも低能者でも何でも好いから、老いたるものは先づ尊敬して置けと決めた。これは東西古今に通じて行はれる一種の殘忍なる敬遠策だ、老朽淘汰だ。外に德義を粧ふ平和的な人爲淘汰の便法だ。そして死んだら立派な葬式をして置く。

×

六十七十になつて、肉體が丈夫だ、この通り風一つ引かない、白髮一本ない、今の若い奴が――なぞと言つて誇つてゐる老人がある。みじめだ。肉體は言ふまでもなく人間の動物的な部分である。ほかに誇るべき何物をも持たない老人が肉體といふ物質を誇るのは、無知な富豪が私有財産といふ物質だけを誇にするのと同じ卑しさ醜さである。

運命はいたづら者だ。そんな事を誇にしてゐた男が、かりそめの病氣か何かでころりと逝く。皮肉なところが面白い。あちらを向いて惡魔が會心の笑みを洩らしてゐるだらう。

さきに言つたシェリイで思ひだしたのは、多くの革新思想家が貴族名門の出である事だ。シェリイ、バイロンを筆頭に、後のラッセル、ワイルド、クロポトキン、トルスルイを見、更に日本の貴族の學校から『白樺』が出た事なぞを考へて見る。一見甚だしく矛盾した現象のやうで、而もそこには極めて當然な理由が存するのではなからうか。私は之を讀者の考察に任せる。

×

シェリイの百年祭といへば、ことしは近松の二百年祭(正確に言へば明年か)のほかに、正月がモリエルの誕生三百年に當つてゐる。佛蘭西の梨園は非常に盛んな記念興行をしたさうだが、モリエルの風俗喜劇は唯佛蘭西に於てのみ生れ得べき大藝術である。歐羅巴でも他の國には、とても出さうもないものだ。すぐれた『笑』の文學を持たない日本で、モリエルの喜劇に最も近いものと言へ

ばさて何だらうか。博多にわか、それでは比較にも何にもならない。しかしその外に似たものは無さ
さうに思ふ。
日本政府が、佛蘭西の最大國寶である『モリエエル全集』の邦譯に發賣禁止を命じてから、もう十年餘を過ぎた。月日の經つのは早い。今は浪花節が流行つてゐる。

×

賀川豐彦氏の『死線を越えて』と『太陽を射るもの』を讀む。藝術品といふよりは、むしろ藝術品の matrix であり、素材であるといふ感じがする。眞の藝術品とするには、まだあの上に滿身の力をこめた磨きをかけ、精錬を加へねばならぬ。しかし私はあの書物が數百版を重ねて、多くの人々の心に情熱と感激とを傳へ得た事を深く喜ぶべきだと思ふ。酒を飮んでぶら〳〵して遊惰の日を送つてゐる小說家が、小手先の器用で書きあげた作品よりも、生活そのものを眞劍な藝術としてゐる人の提供した素材やメイトリクスの方が、より多く人の心を動かすのは當然なことだ。唯あの『死線を越えて』に、今一息の磨きを掛け、精錬を加へたならば、そこにドストイエフスキイが出來、イブセンが出來るのである。しかし今日の日本人の內生活は、まださういふものを產み出すところまで行かないかも知れない。或はまた、さういふ物を鑑賞し得るまでに深化されて居ないのかも知れない。それはいづれにせよ、この現在の日本人の生活に一種の感激を傳へ得た『死線を越えて』の作者の勞は充分に報

いられた。たとひその感激は、まだ眞に全生命の昂揚飛躍にまでは到らないセンティメンタリズムであらうとも、そは必ずしも著者の罪ではないと思ふ。

感激と情熱と憧憬と歡喜とを失つた生活は『詩』の無い生活だ。『詩』の無い生活は人間として最も下等な生活だ、墮落した生活だ、生き甲斐のない生活だ。首を縊つて死んで了つても惜しくない生活だ。

『死線を越えて』を讀んだ人は、もう一度それを自分の胸の奥の精錬場で磨き上げねばならぬ。白熱の高度に燃ゆる『生命の藝術』の烈火によつて、あのなかから輝く寶玉を取出すだけの努力を怠つてはならない。藝術としての『死線を越えて』は既成品ではなく、未成品であるからだ。

かの一瞬を

（ブラウニング作『ポオフィリアの戀人』）

その前夜、女を殺した男の獨白である。

×　　×　　×

女の心には名利が絡む。

ただ一途に思ひつめ、すべてを燒き盡くすやうな男の戀も、女が名利をおもふ心に妨げられて、今までは報いられなかつた。とこしへに報いられずに終るのだらうか。

湖畔の茅屋に、風雨ものすごき冬の夜を、男は悄然として獨座しつつ物思に沈む。

獨白『今宵早うから雨は降り出した、

　やがて凄まじい風も出た、

心にくしとばかり楡の梢を吹き折つて、

湖上の波をも騷がせてゐた。

胸張り裂ける思で、私は耳を聳てる。

時に、そつと這入つて來たのが女ポオフィリア、
すぐと寒さも嵐も閉(し)め出して、
女は跪いた。今まで陰氣であつた爐火が、
ぱつと燃え立つ。家の中は急に暖かい。
やがて女は身を起して、
づぶ濡れの上衣も肩掛(ショオル)も脫いだ。
汚れた手袋をわきに置いて、
帽の紐を解き、濡れた髮毛を垂らした。
それからやつと私の側(そば)近く坐つて、
私を呼び掛けたのである。』

男は默して應へなかつた。應へるべき聲も言葉も無かつたからだ。

獨白　『女は私の腕を取つて自分の腰に卷き、
滑かな白い肩も裸(あらは)に、
金髮を、つと押しのけて、

こごみがちに、私の片頬をそこへ置かせた。

金髪がすべてを蔽うた――

自分の肩に男の頬を置かせて、いま女は甘き戀を囁く。いつもは、つれない女が、今宵のみは怪しうときめく胸の思を語るのである。

獨白『私を戀しと女はささやく。――女は
　餘りに弱いのだ。どれほど焦(あせ)つて見ても、
誇や虚榮の絆(きづな)を斷ち得ないのだ。
もつれる情緒を解き放つて、
　とこしへに私に身を任かせ得ないのだ。』

戀に上下の隔てなしと人は言へ、女の胸には家門の誇もあつた、虚榮のあこがれも無いではなかつた。思ひ切つて、貧しい此男に一生を捧げるには、女は餘りに弱かつた。その狹い胸の奥には、虚榮と愛慾とがいつも二つの蛇のやうに嚙み合つてゐたのである。

獨白『しかし時にはまた情熱が勝つ折もある。
　今宵、女ははでやかな饗宴の席に出て居て、ふと
私を想ふの情を禁じ得なかつたのだ。

思ひ焦れ而も甲斐なき戀に窶れるこの私を。
それで風雨を冒して私の所に來たのだ。』

今宵ばかりは、――それはふとした女の caprice からであらう、怪しくも此男を戀しと思ふ情に堪へ得ず、そつと宴席を拔け出して男の所に走つた。いつになく男に身を抱かせて純一無雜の戀を囁いた此瞬間ばかりは、いつものつれなさとは打つて變つたポオフィリアであつた。餘りの意外に、男は驚かざるを得なかつた。

獨白 『私が見上げた女の目元には、確かに
喜びと誇があつた。遂に知つた、其時
女は私を禮讃してゐたのだ。
愕然として私の胸は騷いだ。更に
胸を靜めて、如何にすべきかを自ら問うた。
かの瞬時こそ女は私のものであつた。美妙、
また至純至上のわが有であつた。忽ち
私は如何にすべきかを思附いた。丈（たけ）なす女の髮を、
一條の金色（こんじき）の繩に束ね、

一重、二重、三重に女の細頸に捲いた。
絞殺したのだ。女に苦痛はなかつた。
たしかに苦痛はなかつたと私は信じてゐる。
蜜蜂を抱いて閉ぢてゐる花のやうに、
心して私は女の眼瞼を開いた。再び
曇りなくその碧眼は微笑んだ。』

いつもの雑念を離脱して、奇しくも女の心は此時のみは至醇至高の愛に燃えてゐた。殆ど發作的に發現した熱愛が最高潮に達したその一瞬時、その一刹那、これを逸すればいつかまた女の心は冷めるだらう、またもや雑念に煩はされよう。この瞬時、この刹那を永劫におのが至上の所有として留めんには、男にとつてただ一つの手段あるのみだつた。女の意外の態度と表情とに一たびは愕然として驚かされた男は、忽ちその手段に氣附いたのだ。丈なす金髪を束ねて、それで女を絞殺したのであつた。

かくて死は女に取つてもまた限りなき幸福であり歡喜であつた、と男は確信してゐる。たしかに苦痛はなかつたのだと繰返し男は言つてゐる。絞殺された女の眼瞼をそつと開けば、碧眼は再び莞爾と

して微笑むが如くに男を見た。

獨白　『そして女の頸に卷いた髮の頬を、
　今度は解いた。兩の頬は、
　熱い私の接吻にまた紅潮した。
　前の通りに私は女の首を支へた。
　が、今は肩の上に載せた
　女の首は、唯ぢつと頸垂れてゐる。
　顏かたち微笑むやうな晴れやかさ、
　それは至上の願望を遂げ、
　蔑んだ者の忽ちにして去つた喜びだ、
　代りに戀人の私を得たからだ。』

熱愛　高潮したその瞬間には、さすがに女の心にも名利の煩ひはなかつた。それは大歡喜の、また法悅の心境であつた。おのれの總てを喜んで戀人に捧げ得た者の幸福であつた。この瞬間に、愛する者に抱かれ、愛する者の手によつて與へられた『死』は、女にとつてこの上もなく嬉しいものに相違なかつた。死顏にも喜びの色が現はれ、男が接吻した頬にはさつと血の色が高潮した。どうして『死』

に作ふ苦痛があらうぞ。

力一ぱい咲き誇つた花が、その夜の嵐に散るのは美しいものである。咲いた儘で梢に殘れば、やがて萎みもしよう、色香のあせる慘めさもあらう。女ポオフィリアが至上至醇の愛を男に捧げた高潮白熱の刹那、それは唯この一瞬の發作だけであつた。この一瞬に得がたい『死』を得たことは、男にとつてよりは寧ろ女のために、更に大いなる幸福ではなかつたか。

獨白『ポオフィリアの戀よ、女はその愛しい願ひが、

如何にして男に聽かれるか、それには氣附かなかつたのだ。

かうして相抱いて今朝も、ふたりは坐つてゐた。

夜どほし身じろぎもしなかつたのだ。

而も神樣は何とも仰せられなかつた。』

一篇すべて詩人ブラウニングが得意とする獨白の形を取つてゐる。ゆふべ女を殺した男が、翌朝になつて自己の胸奥を抒ぶる獨白である。女は自分の戀を男に告げるとき、そこに『死』があるとは夢にも思つて居なかつたのだ。そして殺した男と殺された女とは、夜もすがら相抱いた儘で身じろぎもせず朝になつた。この殺害は愛のために二人の幸福を作つたものである。罪惡ではなくして祝福であつた。どうして神のお咎めがあらうぞ。『神樣は何とも仰せられなかつた』と詩人は最後に言ふ。

言ふまでもなく以上の獨白（モノログ）だけがブラウニングの原作で、他は難解を恐れて私が添へた蛇足に過ぎない。最後にわたくしは、此作によつて暗示せられた戀愛心理の一面に就いて更に蛇足を加へたい。

男がその愛する女を自らの手で殺して滿足を得る。この一見奇怪と見ゆる現象をかの變態性慾に歸し、異性の血を見て喜ぶ Sadism, 或は戀人を殺害して快感を得る『性慾殺人』Lustmord, 更に甚だしきは死體を姦することに特殊の快感を貪る Necrophilia の類に過ぎない、とのみ見らるべきだらうか。ふと私の心に思ひ浮ぶのは、オスカァ・ワイルドがその『レディング獄窓の歌』のうちに繰返した下の一節である。

『すべての男はその愛する者を殺す。
皆に聞かせよ、あるものは苦々（にが）しい目つきで、
あるものは諛ひの言葉で殺してゐる。
臆病ものは接吻で之を爲し、
猛きものは劍を以て殺すのである。』

戀人を打つたり、捻つたり、引掻いたり、傷けたりしてゐるのは、まだ罪がなくて好い。黄金を以て、甘言を以て、接吻を以て、抱擁を以て、女を殺してゐる者も世に決して珍らしくはない。ただ猛き者のみが白刃を閃かして女を殺し、その黒髮を頸に捲付けて絞殺を敢へてし得るのではなからう

か。

嘗て或人は戀愛を征服、被征服といふ言葉で現はした。强い者が弱い方の異性を征服し、弱い方は征服せられることによつて、つまりは矢張り相手の異性を征服し所有してゐるので、兩者の方向はちがつても結局は同じだ。わたくしはこの考へ方を面白いと思ふ。さきにいくたびか私が言つた通り、戀愛はその根本に於て、飽くまでも自我の擴大であり、自我の主張である。自己を犧牲とすることによつて自己を主張してゐるのだから（本卷三四頁參照）、それは色々の異なつたすがたに於て展開せられるが、深く本質をさぐれば皆同じものである。愛と憎とが同じものの二つの面である事をも、私は曩に『象牙の塔を出て』のなかで言つたと思ふ。戀愛心理の複雜性――いな人間性そのものの複雜性は、『人』といふものの腹の中に宿る『神』と『惡魔』との二面が、交錯し紛糾して現はれるところに生ずるのである。戀愛結婚者の夫婦喧嘩なども、この機微を透察すればおもひ半ばに過ぐる場合が多いであらう。相手を傷けることが愛そのものの更新を促す若返り法であつたり、それが更に極端に走れば、戀愛の最高潮に於て相手を殺すといふ事にさへもなり得るのである。

最後にわたくしはまた、獨逸のハウプトマンの大作『日出前（ソオオル、ゾンネンアウフガング）』の第四幕に、戀愛の最高潮に達した男女の心理を描いた一節を想ひ起す。やつとのことで戀を遂げたロオトは女へレエネを抱きしめて、二人はいま熱した接吻を交はしながら、ただ無言である。

ロオト 可愛い……

また繰返して接吻を交はし、そしてお互に顔を眺めあふ。

ヘレエネ (ロオトの腕に犇と抱かれて、頭を胸によせて、ぼつとした嬉しさうな目つきで見上げながら夢心地に呼く、)……ああ、——美いこと美いこと。

ロオト ではお前と死なうか。

ヘレエネ (熱烈に、) 生きるのよ、……(男の腕から離れ、)どうして今死なうての、……今……

ロオト 誤解しちや可けない。昔から僕は醉心地になつて……殊に嬉しい時はすつかり醉心地になつて了つて、直ぐにもそんなやうな氣分になる。わかつたかい。

ヘレエネ 死んぢまうやうな。

ロオト (少しもセンテイメンタルなところなく、然う。死ぬと云ふのは、ちつとも恐いもんぢやないよ。寧ろ僕には何處かかう懷かしいやうな氣がするんだね。死神を呼ぶと、すぐにもやつて來るやうに思ふ。死ぬのはつまり一切の物ごとを超絶するんだ、過去をも——そして未來をも。

愛の高潮の瞬時に於て男は『ではお前と死なうか』So mit dir sterben!と言ふ。過去をも永き將來をも、すべてを此瞬時に縮めて怪しくも死を希ふ心は、戀する者の胸に浮ぶのである。ブラウニン

グの此作の場合には、男がこの幸福なる『死』を女に與へたのであつた。憎惡をも疑惑をも名利をも虚榮をも、また時間空間をも、すべて一切を超絶せしむるものは『死』あるのみだ。

戀のいろ〳〵の姿、また更にいろ〳〵の姿で現はれる死、この二つのものは人間生死の大事だ。人間の全的生命の燃燒である『戀』と、その生命の根本的絶滅である『死』とが、人生の大きな謎でなくして何であらうぞ。

（附言）この原詩と辭句の解釋とは、拙著『英詩選釋』（本全集第六卷）を參照せられたい。また文學にあらはれたる變態性慾に就いては、先年わたくしは『小泉先生そのほか』（本全集第四卷）のうちに說いておいた。なほサディズムその他に就いては、前揭のブロッホの著第二十一章にある、極めて簡單にして要を得た、そして趣味ある敍述を參照せられる事を勸める。

宣傳と創作

『人形の家』を書いたイブセンを、ある多數の婦人たちが集まつて招待した。そして女たちはこの偉大な藝術家に向つてから言つた。

『世界の女たちのために萬丈の氣を吐き、婦人の自覺とか解放とかいふ事に就いて、人心に新しい啓示を與へて下すつたのは、あなたの『人形の家』でした。婦人は皆それを深く感謝して居ります。』

イブセンの返答は女たちに取つては意外なものであつた。『わたくしはそんな積りであの作を書いたのではありません。私はただ詩を作つただけなのです。』

一個の讀書生として、全く創作にもまた實際運動にも關係のない自分として考へるとき、このイブセンの返答は心の底から私を喜ばした。それは如何にもイブセンのイブセンらしい、即ち藝術家の藝術家らしい言葉であつたからだ。これが世間なみの俗物か何かならば、多くの女たちからこんな言葉を聞いたとき、ぐつとそり身になつて得意がつただらうし、またもつと俗惡な奴ならば、内心は大に得意でも謙遜なやうな言葉を使つて、人をそらさぬ挨拶でもしたことであらう。謙遜の裏には多くの場合、倨傲があつたり得意があつたり自惚があつたりするから。

しかしイプセンの返答が如何にも藝術家らしいと私が言つたのは、そんな意味からではない。イプセンは、婦人運動の宣傳なぞする積りでその作を書いたのではなかつたといふことを、明らかにしたからだ。

すべて思想家や學者や藝術家がある目的のために宣傳なぞをする者だ、と思ふのは大間違ひである。即ち世間といふものを最初から眼中に置いて、ある目的のために世間へ自分の思想を弘布するのに、學問や藝術品を利用したり道具にしたりする、そんな事も固より結構ではあらうが、それが藝術家や思想家の本來の職能だと思ふならば、根本的に謬見だ。私は結構であらうと言つた。惡い事ではないからである。またそれを自分でも天職か何かのやうに心得てゐる所謂『學者』だの、『藝術家』だのといふ者にも立派な存在の理由があるだらう。即ち廣告屋やペンキや東西屋や、或はお役所の交通宣傳とか、流感豫防宣傳とか、保險勸誘員とか、また說敎屋、道學屋、そんな者にもみな堂々たる、そして旗幟鮮明なそれぞれの存在の理由が儼としてあるからだ。そのあるものは、またある場合に於て、いにしへの野に呼ぶ豫言者のやうに貴い者ではない、とは言へないからだ。

しかし、われは藝術家である、創作はしたが婦人運動の宣傳をした積りはなかつた、と答へたイプセンといふ男はやつぱり偉い。これだけの心がけがあつたればこそ、その自然の成行きに於て立派な宣傳者ともなり、また豫言者ともなつて世界の人心をゆるがしたのであつた。

世界大戰のはじめに於て、獨逸の幾十人かの碩學が連署して開戰の理由を陳辯し、カイゼリズムの御用を勤めた宣言書を公にしたのを見て、私は唾棄す可しと思つた。平生尊敬もし信用もしてゐた獨逸の學徒といふものを、あの時ばかりは、成つて居ない人たちだなと私は思つた。あの宣言書の內容が軍國的な國家至上主義といふ根本的な謬想であるとか無いとか、そんな意味でいふのではない。眞理の探求を唯一最大の目的とすべき學者がプロイセン政府の御用を勤めて、世界への獨逸宣傳の道具になつてゐた、あの態度を侮蔑しないわけには行かなかつた。おなじ學徒のうちでも自由思想家は無論あの連署に名を掲げなかつた人も多いし、またそんな事とは關係なく、アインシュタイン氏なぞも署名を拒絕したと聞くのは、まさしく學者らしい態度であつたと思ふ。

しかし學者なぞは、また理窟のつけやう次第で說教屋、廣告屋が任務だ、とも言へば言へるだらう。ただ獨り文藝家に至つては、苟も宣傳なぞの廣告根性を抱いてゐるやうでは、決して立派な創作も出來ないし、また藝術家そのものの本質をも傷けてゐるわけだ。

ひろく藝術といふうちにも音樂のやうな至高至醇の藝術を、宣傳に用ゐるべきものと思ふやうな人はまさか居もすまい。宣傳ずきの米國あたりで演るやうな自由公債（リバティ・ボンド）の募集用に使ふ進行曲（マアチ）の類を、誰も大音樂だとは思はないだらう。また繪畫を宣傳用に使へばポスタァの繪看板だから、それを大藝術だと誤認する者も恐らく居まい。そこで宣傳かと誤解される虞の一番多いのは、すべての藝術のうち

で最も思想的分子の重くなる文學の場合であることは勿論だ。

文學のうちでも最も純藝術的な抒情詩に、たとへば戀を歌ひ春を讃し世を呪うた詩人があつたからとて、それを宣傳者だと見る馬鹿もあるまい。だから最も多くこの誤解を招き易いのは、近代の散文劇特に問題劇、思想劇、ある小說、エッセイなどの散文の文學である。

いふまでもなく一切の文藝は創造創作であるが故に、自己表現である。詳しく言へば作者が內から迫る要求のために自己を表現したものであつて、自己以外の世人とか、政治運動とか社會運動とかの道具として利用すべく筆を執るべきものではない。廣告用でもなく宣傳用でもない。創造と自己表現それ自らに意義があるのだ。プロパガンダはある實際上の目的に奉仕する廣告屋の仕事だが、クリエイション クリエイションそれ自らが目的だ。表現のための表現であり、創作のための創作だ。決して功利的なものでなくて自己目的（ゼルブスト・ツヱック）のものだ。この意味に於て、イブセンが婦人達に答へたあの言葉は、藝術家としては正しい。昔から文章を經國の大業なりといふ時、これを治國平天下の道具に使用するものだと心得る思想は、獨り東洋ばかりでなく西洋にも多かつた。それはみな謬見だ。文藝は徹頭徹尾あくまで自己のための自己表現であらねばならぬ。それ以外のものは文藝ではない。

ダンテは羅馬教の思想を宣傳なぞしようと思つて『神曲』を書いたのではない。ミルトンは清教徒の宗教信仰を說教したり傳道したりする積りで『失樂園』を書きはしなかつた。否なそんな宣傳や傳

道を目的とせずに書いたればこそ、百代にわたつて人心を動かすあのやうな大作が出來たのであつた。宣傳や廣告のつもりで書かれたものならば、三百年六百年を隔ててなほ人心に感激を傳へるだけの力ある作は、決して出來なかつた筈だ。

沙翁は何等かの思想宣傳のために、あの三十幾篇の戲曲を書いたであらうか。沙翁をデモクラシイの思想家にこぢ附けようとする米國人もあるが、また見かたによつては、沙翁は立派なアリストクラティックな思想家だとも見えるのは、どうしたものだ。七色が完全に調和せられて出來た白光のやうに、沙翁の作品には赤だの青だの思想の色が殆ど無いではないか。宣傳すべき『思想』とか『主義』とかそんなものが最初から出て居ないところがたのもしい。さういふものの無いことその事が、彼をして偉大ならしめてゐる所以ではないか。

『人生のための藝術』といふ言葉は正しい。しかしそれは宣傳だの廣告だのといふ意味ではない。この事は更に他日別の機會に述べる。またある作家が自分の作物を書いた後、これを世間に公にする時だけは、それが天下の人心に如何なる影響を及ぼす可きかは考へて見ねばならぬ。それは然し藝術家としてではなく單に、社會生活をしてゐる一人としてだけの義務であつて、藝術家としての事ではない。その時はただ平凡な一市民としての義務であつて、今わたくしはそんな事を語つてゐるのではない。それとは全く別の問題だ。苟も文藝家が筆を執るに當つては、讀者とか世人とか云ふものを眼中

に置いて居てはならないといふのだ。自分の胸の中にあるものを表現しなければ、張りつめ張り裂けて自分が死にさうになるから、自分のために自分を表現する。その心持でなければ本當の藝術は出來ない。もし然らずんば文藝を廣告ビラか、樂隊屋の喇叭か、乃至は說教屋の講釋だと誤認したものである。

トルストイは晩年になつてから自分の若い時の作物を回顧して、それが純藝術的な自己表現であつたことを後悔し、あんな作物を破棄したいとまで言つたさうだ。私はトルストイの藝術觀にはいつも全然一致する事は出來ない。かれが沙翁を攻擊し或は象徵派の諸詩人を非難したのも、根本はみなかういふ誤れる藝術觀に基づいてゐたのだ、と私は觀てゐる。若し飽くまでも『人生のための藝術』といふ事を功利實利のための文藝と解釋し、實際當面の社會人心のための宣傳式文藝なりといふが如き淺薄卑近の見解を許すとするならば、問題劇、社會劇の本家本元であるイブセンが婦人に向つて答へたあの言葉の如きは何と解すべきだらうか。私は繰返し言ふ、イブセンは眞に詩人であり藝術家であつて、眼中に宣傳だの廣告だのといふことがなかつたために、あの偉大な作品を世界文化に寄與する事が出來たのだ。トルストイだつて、彼の名をして百代に重からしむるものは恐らくその晚期の作品ではなく、初期から中年に及ぶ頃の小說類で、それは却つて彼自らが後に自分で破棄したいとまで言つた作物の偉大さにあるのだらう、と私は信じてゐる。

私はかかる意味に於て最初から十字街頭に立つて道路講釋をやる積りで戲曲を作つたバアナアド・ショオの作品の如きを、藝術品としては劣等なりと見てゐる。そしてショオと同じく、また同じ思想傾向で社會問題を觀照しながらも、宣傳臭味の無いゴルスワアジイの作品を、イブセンと同じく貴い偉大な藝術だと私は信じてゐる。

問題劇、傾向小說（テンデンツ・ノヴェレン）などはまだ好い。これがエッセイとなるとこの點がなほさら紛らはしい。エッセイとはいふまでもなく散文の抒情詩だ、自己表現だ。社會運動や婦人問題のための提燈持でもなく、廣告屋の喇叭でもない。否な提燈や喇叭であつてはならないのだ。創作といふ貴い仕事であらねばならないのだ。

むかしヂョナサン・スヰフトが愛蘭の慘狀を見て、赤兒を鹽漬にしたならば食料にも供せられ、一方には人口制限にもなつて一擧兩得だらうといふ天下の名文を書いた時、これを字面通りに解釋した馬鹿々々しい讀者があつたさうだ。現代のチェスタトンは倫敦が大洪水になつた美觀を敘して、平常にない壯觀だと褒めちぎつてゐる。誰が赤兒の鹽漬を宣傳したり、倫敦全市を大洪水に苦しきせる宣傳や說教をする狂人があるだらうか。創作は宣傳の道具ではない。

しかし創作家には、それぞれ皆その時代に齎す使命（メッセイヂ）がある事はいふまでもない。しかしその使命なるものは、創作に際しての目的でもなく、また或は意識的にこの使命のためにするのでもない。自然

の結果、第三者から見てそこに或思想の啓示があつたり暗示があつたりするばかりだ。『神曲』も『失樂園』も『人形の家』も、出來あがつた結果から見れば、世間へ皆それぞれの思想の偉大な影響を與へては居る。しかしそんな事を目標としてはダンテやミルトンやイブセンは、あの作品を創造することは出來なかつたであらう。ただ詩を歌つた、その歌つた事それ自らに作家の使命が在る。

教育家は月給を貰ふ。しかし最初から月給のために教育に從事するやうな教育家に立派な教育は出來はしない。またよい教育家は高い月給を貰ふ結果になるかも知れない。しかしそれが目的であつてはならない。作家の創作は宣傳となるかも知れない。否な作品が偉大なれば偉大なるほど、より多く宣傳となる事は月給の多いのも同じだらう。しかしそれが作家の目的であつてはならないことは、教育者が月給のために仕事をしてはならないのと同樣だ。たとひ思想の宣傳ではなくとも、藝術家には別に藝術家としてのたふとい使命もあれば任務もある事を考へねばならぬ。否な宣傳にならない作品を出す文藝家は、月給を貰はず無報酬で獻身的に働く教育家のやうに貴いものかも知れない。さういふ人は『地の鹽』であり、貴ぶべきエゴイストである。

たとひ世間が顧みなくても、また誰も認めて呉れなくても、眞理を探求し作品を書かずには居られないから、するのだといふ人ならば、それで本當の思想家であり藝術家である。若し宣傳といふ事を最初から重んずるならば、誰も相手にせず讀んでも呉れない研究や創作はやめようといふことになる

だらう。これは惡性のエゴイストだ。

宣傳は必ずしも創作の如くに個性の表現を第一要件とはしない。單に實利實用のために動かされ、或は流行を追ふ受賣である場合さへ尠くない。人間としては確かに第二義的生活に屬する事だ。苟も文筆の事に從ふもの若し讀者の顏色をうかがひ、おのれの筆に成る物が如何なる影響を世人に與ふべきかを顧慮しつつあるならば、そは創造に終始すべき文藝の大業を以て、惡しき意味のジャアナリズムに墮せしむるものである。

『近代の戀愛觀』終

黎明期の第一聲

黎明期の第一聲

――ゴッドキン夫人ウルストンクラフトを憶ふ――

時として私は考へた、社會改造への唯一の道と手段とは、先づ婦人の新生、向上、擴大、强壯に俟つべきだと。

――ヲルト・ホヰットマン――

女もまた人類の一部として、自らを改造する事によつて、世界を改造すべく努力すべき時が來た。

――ゴッドキン夫人――

一

人間は賢さうに見えても意外に馬鹿な者である。しば〳〵自分たちが人間であることを忘れて、道具になつたり、畜生になつたり、奴隷になつたりして平氣でゐる。文藝復興期(ルネッサンス)は人間發見の時代だと人は言ふが、古來三千年の文化發達史は要するに人間が、自分たちの人間であることを忘れたり、思

出したりして來た歷史を語るに過ぎない。もし近世史を人間解放の歷史なりと言ひ得べくんば、さらに遠く溯つて三千年四千年の歷史を回顧せよ。誰しもそれが束縛幽囚と自由解放との交錯であることを見るとともに、同時にまた此歷史が人間忘却と人間發見といふ奇怪至極な事實の交互錯列であることを知るであらう。

今しばらく他の點は措く。婦人と子供とが立派な人間であると云ふ明確な事實を發見して以來、まだ百年あまりにしきやならないとは、考へて見ると驚くべきことだ。すべての近代思想の源泉だと目ざされるルソオですら、女はやはり男の道具であるとしきや考へてゐなかつた。盛んに人類の自由平等を說きながら、婦人もまた人であることに氣づかなかつたルソオは、今日普通選擧を叫びながら、婦人參政を問題外におく者と先づ同じ程度のあたまであつたことは、一寸面白い。

『女こども』、『女子と小人』、さう言はれて恰も人間以外のもののやうに扱はれながら、愛犬の如くに可愛がられ甘やかされつつ侮蔑せられ無視せられてゐた婦人と小兒とが、貴き人間であると云ふ大發見をするに至つたのは、西洋では十八世紀後半ロマンティシズム勃興時代以後の事だ。日本では、……さあ何と書いて可からうか、まあ三年か五年か、それとも、も少し前からか。否な今日でも、『まだ』と答へて可いのかも知れない。

から云ふ大發見をなし得たものは、勿論文藝上の偉大なる天才であつた。それは小兒の無邪氣さに

偉大なる神性をみとめた神祕詩人キリアム・ブレイクであり、『小兒は大人の父なり』と歌つた自然詩人ワアズワスであつた。生れてから日なほ淺く、天國に近く生きつつある小兒は、やがて年を經て大人となる。天堂に近く生きてゐた子供時代のたふとき自由性と美しき人間性とは、人の世の穢れに採まれ絆に縛られて、日ごとに年ごとに失はれて行く。さかしらな俗悪な大人に於て見られなくなつた自然愛慕のこころ、生活享樂のよろこびは、無邪氣な小兒時代に於てこそ見られ得べきだ。ちかごろ日本でも、急に思ひ出したやうに兒童の自由畫や童謠に深い意味を見出すやうになつたのも、つまりは十八世紀以後ロマンティシズムの文藝思潮の末流を掬むものに他ならない。

人は幾千年前から雷鳴を聞き雷光を見ながら、それが陰陽の電氣であることを知らなかつたやうに、『女こども』が人間であることにも氣附かなかつたのだ。婦人と子供とが人間だと云ふことを知るに至つた此發見は、前世紀以來の思想文化の上に現はれた多くの價値轉換の一つではあるが、發見としては確かにラディウムや電氣や電子運動の發見よりも、更に驚くべく偉大なるものであつた。

二

婦人もまた男子と同じく人間であるからには、解放せられなければならない。この事を最初に考へた者は、哲學の方面に於て佛蘭西のコンドルセエのやうな自由思想家であつた。しかしながら實際の

婦人運動のうへに最初の動機を與へ、一卷の著書によつて忽ちにして電波のごとき感激を一代の人心に傳へたその最初の第一人者は女であつた。十八世紀の終に近く、すべての自由解放思想の黎明期とも云ふべきロマンティシズム勃興時代に、その時代の思潮が生んだ一人の女性であつた。婦人解放絶叫の第一聲が先づ婦人から出たといふ此事實は、女が先づ女の力によつて解放せられなければならないといふ一個の眞理を語るものとして興味あるのみならず、また動もすれば挫け易からんとする後代の弱き女性を警め勵ますに足るものであらう。

その一人の女性とは、メアリ・ウルストンクラフト(Mary Wollstonecraft 1759—1797)即ち後のゴッドヰン夫人であつた。彼女の一卷の著書『女權擁護論』"A Vindication of the Rights of Woman"(一七九二年)は婦人參政、女子敎育、婦人勞働、結婚、母性などのすべての問題にわたつて、後の婦人運動のために最初の暗示と啓發とを與へた點に於て、近世の思想史上最も注目すべき述作の一つである。日本でも最近に起らんとしつつある婦人運動が若し上すべりの空騷ぎでないならば、先づこの運動の源流に溯つてその史的意義を明確にしてかかる必要があるだらう。すべての溯源的研究を學徒の閑事業に過ぎずと見るが如き、淺薄輕佻の態度を以てして果して何が出來るだらう。

しかし文藝の研究者たる私をして、いま此メアリ・ウルストンクラフトに就いて語るに至らしめたのには、また別の由來がある。

ことし千九百二十二年七月八日は、世界最大の抒情詩人であり、革命思想の巨人であつたシェリイが、伊太利の海に溺れて死んだ百年祭に當る。このシェリイの細君メアリは即ちウルストンクラフトと、その良人たる社會改造論の先驅者ゴッドヰンとの間に生れた娘であつた。今日私たちがシェリイの詩篇を少し詳しく讀まうとするとき、その夫人の筆に成つた註疏(ノオツ)がこの上もなき研究資料である事は、英文學を學んだ人の誰しも知るところである。また彼女が年わづかに十七歳のとき、ゼネヴの湖畔でバイロンやシェリイと懸賞で競爭して作つた小說『フランケンスタイン』は、鬼氣人を襲ふ妖怪談として今日なほ忘れられて居ない作品である。私がここに語らうとするウルストンクラフト女史は、卽ちこの才藻ゆたかなシェリイ夫人を生んだ母であつたのだ。そして娘を生むお產のために女史は早く死んだのであつた。

次にウルストンクラフトの良人であり、またシェリイ夫人の父であるヰリアム・ゴッドヰンに就いては、社會問題に關する研究の盛んな今日、わたくしが玆に說くまでもなからう。ゴッドヰンの著『政治的正義(ポリティカル・ジャスティス)』は、當時に於て一代の民心を聳動した雄篇であつた。殊にまた彼が遺した一篇の小說『ケイレブ・ヰリアムズ』は、その藝術的價値は兎に角として、殺人事件の背後に潛む複雜な正義觀念の描寫として、また此種の心理小說の先驅として、文學史上の意義を失つてゐない。殊にゴッドヰンの自由正義論は、他の多くの殺風景な社會改造說を唱へた思想家のそれとはちがつた、ただ理窟

ばかりを列べたやうなものではなかつた。ゴッドヰンの說には常に『愛』が改造論の基調をなして居た。愛を根本とした自由な新社會を彼は理想としたが故に、ゴッドヰンの所說には必ず『詩』があつた。此點が詩人シェリイに向つて最も偉大な感化を與へた所以だ。シェリイの妻メアリは、かくの如き父を有し、ウルストンクラフトの如き母を有し、そしてまた世界最大の革命詩人をその良人としたのであつた。先天的にはその血統に於て、後天的にはその周圍を繞る人々の感化によつて、シェリイ夫妻はかれらの生命の藝術を大成し得たのだ。

三

荊棘を切り開いて新しい道を行かうとする先驅者の生涯は、いつも苦悶苦鬪の一生だ。思想と愛慾と物質との間に惱みつつ悶へつつ、かれらの實生活それ自らが既にいつも血と涙で書き上げられた悲慘な藝術品である。殊に全然無理解な世間を相手にして、弱き一人の女性が自分の新しい道を進まうとするとき、運命と社會との恐るべき迫害は免る可からざるものであつた。前世紀以後の婦人解放運動のため、先づその最初の道を拓いたウルストンクラフト女史の閱歷は、即ちかくの如き悲慘を極めたものの一つであつた。

婦人覺醒のために最初の第一聲を放つたやうな女は、おほかた例の殺風景な理窟ぱつた「第三性（サアド・セックス）」の

婦人であつたらうなぞと思ふ讀者があるならば、それは大間違ひで、ウルストンクラフトの生涯は愛の一生であつた。その『愛』のためにこそ、彼女は最も多く苦しみ悶へたのであつた。

ウルストンクラフトは、一七五九年の春に英京倫敦の町はづれホックストンに生れた。彼女の父は大酒飲みで近所の評判も惡く、その三男三女ある子供の教育に留意しなかつたことは勿論、養育の義務すら完全には果さなかつた。こんなわけでウルストンクラフト女史は、十九の歳から家庭教師やら學校教員やらを勤めて、辛くも生計の道を講じなければならなかつた。文筆を以て世に立つことは彼女のかねがねの志望であつたが、年三十に達するや、いよいよ飜譯と著述のかたはら、ある雜誌の校正係をして見すぼらしい生活を營むことになつた。前に言つた『女權擁護論』の世に出たのは一七九二年、卽ち彼女が三十三歳のことであつた。

この年の終に彼女は巴里へ赴いた。目的とする所は、佛蘭西大革命の視察と佛蘭西語の學習とであつた。おもへば當時の歐羅巴は一つの大きな轉換期（クライマクテリック）に臨んで居たのだ。世界は米國獨立戰爭と佛蘭西革命と、この二つの大動亂によつてつぶさに人生の痛苦を味はつて居た。米國獨立戰爭が勃發するや、若き血に燃えた佛蘭西の新思想家たちは身を挺してその救援に赴いた。そして米國の獨立が愈確保せられるや、彼等が眼前に目睹し來つた大西洋彼岸の美しい新理想國を、大西洋のこなた——彼等が祖國の佛蘭西に於ても建設したいとの希望から、あの血腥い佛蘭西革命が起つたのである。今度

の世界大戰に於て、佛蘭西が獨逸軍國主義の脅威を蒙るや、米國が敢然としてその救援に赴いたのは、その建國當時に於ける佛蘭西の好意に報いたのだとも言はれてゐる。

話が少しく横道に這入つたが、佛蘭西革命當時に於ける米國人に對する佛人の熱狂さは、今日ではとても想像もつかぬほど烈しいものであつた。このやうな雰圍氣の中に住んで居たウルストンクラフトは、ギルバアト・イムレイといふ米國の退職軍人といつしか熱烈な戀に落ちた。イムレイは利巧な抜目のない男で、當時の動亂を當て込んで一攫千金の利を夢みながら佛蘭西へ渡つて來た男であつた。熱い接吻がいつしか二人の共棲となり、やがてファンニィと云ふ兒をさへ擧げた。しかし二人の樂しい夢はいつまでも續かなかつた。イムレイは早くも彼女に秋風がさすと共に、一再ならず仇し女をこしらへた。

ウルストンクラフト女史は、愛兒ファンニイのためには夫の無情をもぢつと辛抱して來たが、夫の不行跡がいよ〳〵動かすべからざる事實であることが確かめられたとき、彼女は遂に自ら死を決した。

それは木枯し吹きすさぶ十一月のある夜であつた。最愛の夫に振り捨てられて今は生き甲斐もない彼女は、テムズ河畔のバタアシィの橋のたもとに立つて、人なき折を窺つて居た。いつまで待つても絶間のない行人の足音に、彼女は遂に意を決して端艇を借り入れ、パットニイまで漕ぎ出した。身に

沁むやうな雨交りの秋風に吹き曝されて彼女は橋上を幾度となくさまよつた。これは降りしきる雨で衣服を濡れ重らせてから水底深く身を沈めんがためであつた。かくまで思ひつめて決行した覺悟の自殺ではあつたが、彼女は遂に道行く人に救ひ上げられて、復もや死にまさる苦惱に滿ちた實生活の行路に呼び戻されたのであつた。この事あつて後、數週にして彼女はイムレイに對する思慕の情を斷つて、永久に彼と袂を別つこととなつた。

いま乳呑子を一人かかへてさびしい人生の行路に行き暮れた彼女は、またもや文筆によつて糊口の資を得るほかはなかつた。幸にして當時の文壇はこのあはれにも叉うつくしき、獨創の才ゆたかな彼女を迎へるに吝なるものではなかつた。卽ち彼女の第二の良人ヰリアム・ゴッドヰンに會つて、そこに「愛」の新しい生活が開かれるに至つたのは此時からであつた。さきの夫のやうた輕薄才子とちがつて、ゴッドキンは卽ち上に述べたやうな一代の思想家であつた。

二人は幸福に滿ちた結婚生活を倫敦のかたほとりサマアズに營んだ。しかしゴッドキンは飽くまでもその自由と個人主義の主張を以て立てる人、世人のするやうな因襲結婚の形式はとらなかつた。婚禮などといふ儀式は固より排斥した。ゴッドキンがその『政治的正義』のうちに說ける結婚論からいへば、結婚は個人の自由を奪ひ、女を一つの財產として所有する事だ。結婚制度の廢止は何等の惡結果を齎す處は無いと言つてゐる。それを彼は自ら勇敢に實行して、世の因襲に向つて激烈に挑戰し

た。彼は随分極端に考へたもので、夫妻同棲するからこそ鼻につけば、また夫婦お互に餘計な干渉をして双方の個性を傷けるのだと言つて、最初は女史と別にその近所の或家に部屋借をして居た。晝のうちは互に手紙をとりかはし、また各自分たちの文筆の業に從事し、おそく晩餐の食卓だけを共にするのであつた。だから今日傳へられてゐる二人のあひだの遣り取りの手紙は實に類ひなきばかり奇妙な物で、夫婦の間でありながら『あなたの御本を拜借いたしたいのです』だの、『今夜はお遊びにいらつしやい』だのと、それが夫婦關係の生活とはとても思はれないやうな言葉に滿ちて居る。中でも特に奇拔なのは、ウルストンクラフトからゴッドヰンに與へた次の一文である。

『わが友ゴッドヰン樣。昨夜はお芝居でお目にかかつたわね。わたしの方を向いてお笑ひになつたやうでしたが、でも振り向きもなさらずにお出ましだつたわ。けふは四時半にきつといらつしやい。お待ち申して居ります。』

しかしこんな生活も長くは續かなかつた。一七九七年三月二十九日彼等は教會で正式の結婚式を擧ぐるの已むなきに至つた。といふわけは、彼等の愛の結晶が産れるためにそれを『私生兒』となすに忍びなかつたからである。彼等は遂にその所信の一部を枉ぐるに至つた次第をこまぐ\と述べて、友人達に結婚の披露をしたのであつた。

一七九七年八月三十日ウルストンクラフト女史は第二の兒を擧げた。その名はメアリ、これが即ち

前述のシェリイ夫人となつた婦人である。しかしウルストンクラフトはこの産褥から再び起つことが出來なかつた。夫の手篤い介抱も、知りあひの醫師の親切な看護も、遂に施すすべがなかつた。出産後十日にしてゴッドキン夫人は溘焉として世を去つた。歳わづかに三十八歳。夫ゴッドキンの遣る瀬なき悲痛の思は、彼が友人に送つた當時の手紙に今もなほ後人の袖を絞らせる。

彼女の遺骸はオオルド・セント・パンクラス寺院の境内に葬られた。後年彼女の忘れ形身のメアリと、詩聖シェリイとが甘い戀を囁き合つたのは、その母なる才女の墓畔に暗い影を落す枝垂柳の蔭であつたと傳へられて居る。

四

私は上にウルストンクラフトの一生を略述したが、これだけではごく上つつらから見た彼女の外的閲歴を語つたに過ぎない。痛ましい慘めな、然しながらまた輝かしい彼女の內生活には、まだ說き及ぼさなかつた。いま私は更に史乘に残された彼女の經歷を辿り、その裏面に潛める內面生活を探ることによつて、更に新しい光の下に彼女の悲痛苦惱の生涯を眺めたいと思ふ。

先づ第一に私は言ふ、彼女の生涯を貫いたものは『愛』の一字であつた。波瀾曲折に富めるその一生を通じて、常に博大宏遠なる人間の愛が思索に於ても實行に於てもその基調をなして居た。しかし

女として最も偉なりとすべきところは、彼女が徒らに空疏な大風呂敷を擴げて、遂に人間愛の何たるかを知らない凡常な人道主義者流に墮ちなかつたことである。彼女は謂ふ所の博大な人間愛が、先づ個人愛から出發しなければならないことを信じて、之を强調して居た。先づ彼女の言ふ所を聞くと、

『人間愛といひ博愛といふも、常に個人愛に基礎を置かなければならない。でなければ、それは闇夜の空に尾を曳く流星のやうに果敢ないもので、眺め讃へる隙もなう消え失せる。私は信じてゐる、自分の父母、自分の兄弟姉妹、自分の家畜をも愛しないやうな人から、どうして人類愛を期待することが出來ようぞ。』

これは彼女の著書『女權擁護』第十二章にある言葉であるが、彼女はその實生活の上に於てもこれを文字通りに實行し敢行した女であつた。

曩に私は、彼女の父が大酒家で子女の敎育すら碌々出來ず、その養育にも事を缺いたことを說いたが、この亂暴な父と不幸な一家族との間に立つて、陰になり日向になつて幼い弟や妹を保護した者こそ、後年婦人解放の最初の絶叫者たるべき彼女であつた。又泥醉の父が母を打擲せんとしたとき、身を以て母を庇ひ、その鐵拳を引き受けたのも彼女であつた。父の暴行はその愛娘をも容赦しなかつたので、彼女は度々起る家庭波瀾の仲裁者たるべく、夢まどかならぬ幾夜を寢室の戸口に佇んだことであつたらう。

弟妹が漸く長じて、しかも糊口の道に窮するや、常に縋り附いたものは姉なる彼女の恩惠であつ

た。彼女の深き愛の心は、親友ファンニイ・ブラッドが葡萄牙リスボンに病を得たとき、敢然彼地に赴いて友の臨終の床を看護するに至らしめた。彼女が家庭教師として一時身を寄せてゐたキングズバラ家の令嬢が、後年マウントキャシェル夫人となつてピイサに遊び、偶かの女の遺子であるシェリイ夫人即ちメァリと邂逅するや、往年の恩師の面影を偲び出で涙に暮れたといふ話も、ウルストンクラフト女史の愛がどれほどまでその周圍に深く、また遠く及んで居たかを明確に證するものだと思ふ。

イムレイに對する、報いられなかつた愛の痛ましい物語は茲に再び繰返す必要はないが、前述した通りその不幸な戀愛の形見であるファンニイに對する深き母性愛のためには、イムレイの無情をも堪へ忍び、又第二女メアリに對する愛のためには、平素の主義主張をも枉げて結婚の形式をさへ履んだのであつた。

しかし彼女の愛の一生に、最も輝かしい光彩を放つものは何といつてもゴッドヰンとの戀愛關係である。はじめ彼女がゴッドヰンに出會つたのは三十七歳の時、そしてゴッドヰンの方は四十歳であつた。ふたりともに齢すでに不惑に近く、ゴッドヰンは社會改造論の急先鋒として、極端な個人主義の熱心な提唱者として、又その忠實な遵奉者として、負けじ魂と不羈獨立の精神とを以て一世を動かした人。ウルストンクラフトもまた、ホレス・ヲルポオルをして『女装の山犬（ハイエナ・イン・ペチコオツ）』と罵らしめた程に自尊心の高い婦人であつた。之を思ふとき、二人の戀愛史は、うはついた青年男女の戀でなかつただ

けに　それが吾等に教ふるところも亦多いのである。

『われら二人の間に萌さした愛の芽は、同じ速度を以て二人の心の中に生長して行つた。いかに鋭い觀察者にとつても、二人のうちいづれが先にいづれが後に愛したか、それを斷言する事は困難であつたらう。……かくして漸く熟し、互の胸のうちを明かし合ふ段になつても、ある意味に於ては、ふたり共に明かし合ふべき事柄は何も無かつたと言つてよい。』

此言葉はゴッドキンが當時の追懷であるが、二人の間に成立つた愛が如何に自然な徑路をとり、又どんなに個人の自由の上に基礎を置いた至醇なものであつたかが、之によつて十分に知られると思ふ。

かく理想的な事情の下に成立したふたりの結婚生活は、それがまた理想的なもので、妻は夫に渾身の愛を捧げ、夫は又妻を敬愛し尊重し、自分の誇ともして居たのであつた。後年ゴッドキンは、當時の結婚生活を次の如くに言ひ現はした。

『われらは人類に許される限りの幸福を味はつた。しかし記憶せよ、われらが幸福であつたのは、私が彼女の智力と、高尙で寛大な彼女の氣質を尊敬して居たからこその話であつた。われらが味はつた幸福と云ふものは、とても世間並みの愛情ばかりで達成されるやうなたちのものではなかつた。』

私は、ふと沙翁の悲劇『リヤ王』の一節を思ひ出す。頑迷な老王リヤの怒を買つた美しいコオデイ

イリアに對して、彼女を引取らうと申し出でたフランス王が、尊敬こそは愛の基礎であると說く所があるが、尊敬とは言ひ換へれば相手の人格を認めるといふことである。かかるとき兩性關係は夫唱婦隨などといふ不平等關係から離脫して、人格あり個性ある『人』と『人』との對等關係に移るのである。この自由と平等との光輝に祝福された結婚生活にこそは、私の常に說く人格を基礎とした全我的戀愛の賜であつたのだ。

ウルストンクラフト女史の『愛の一生』は、特に兩性間の相愛を以て人間性の根本的事實となし、又『人間生活に於ける至高の悅び』(ゴッドヰンの言葉)となしたことによつて、いよ〳〵光彩を加へたのである。

ウルストンクラフト女史の戀愛生活には、彼女がイムレイと別れて後、そしてまだゴッドヰンとの戀に落ちない前に、もう一つ畫家フューゼリに想を寄せた痛ましい失戀の挿話が傳へられてゐる。そのころ出版所のジョンソンの家には、多くの文士や美術家が出入してゐた。彼女がゴッドヰンと初めて相識つたのも此處であつたが、その前にフューゼリに切なる思を寄せたのであつた。しかしそれは遂に此畫家によつて報いられなかつた悲しい失戀の物語として終つてゐる。約一世紀を隔てて後、大詩人ロバト・ブラウニングが、この挿話を材料として女史のこの失戀の心持を書いた一篇がある。それは必ずしも嚴密なる史實に據つたものではないが、あの激しい婦人解放の絶叫者が、その半面に於ていかに

も『愛』に生きる女らしい悲戀の心境を示すものとして、わたくしは今その一節を引用する。

Oh but is it not hard, Dear?
  Mine are the nerves to quake at a mouse:
If a spider drops I shrink with fear:
  I should die outright in a haunted house;
While for you did the danger dared bring help—
From a lion's den I could steal his whelp,
With ae s.rpent round me, stand stock-still,
Go sleep in a churchyard,—so would will
Give me the power to dare and do
Valiantly—just for you!——R. Browning, *Mary Wollstonecraft and Fuseli*,

（大意）ああ、されど君、そは難きにあらずや。鼠を見てすら震ふはわが心。蜘蛛の落ちるを見てさへ恐れ、幽靈屋敷にも入らば忽ちに死なんわれなり。しかし、君がためとあらば、——危險を冒すことが甲斐あるわざならば、虎穴に入つても虎兒を得ん。蛇を身に卷いてもずつと立つを得べく、墓地にて眠ることをも得るなるべし。かく無理にも押して爲し得る力をわれは得べけん、雄々しくも。そはただ君がため。

絶間なく胸奥に燃えてゐた愛の靈光は、彼女が遭遇した千波の浮世の荒浪も之を消すことが出來なかつた。その最後に至るまでも保持した溫い深い愛の心は、容智に輝く此女の麗容に著しく現はれた。詩人サウジイは彼女の明眸を讃へ、夫ゴッドヰンはその轉するが如き慈愛の微笑（ほゝゑみ）を讃嘆した。いま英國國民肖像畫堂の壁上を飾れる彼女の溫容は、當時の畫壇の異才ジョン・オピイの筆に成れるものだ。また寫眞といふもののなかつた時代に、彼女の生き〳〵した姿が此偉大な肖像畫家の筆に描かれて不朽に傳へられてゐる事は、獨り婦人解放史を語るものの喜びのみではない。

五

ウルストンクラフト女史の述作は、『娘の教育に就いての考察』と題した小冊子（パンフレット）をはじめとして幾種かあるが、眞に近世婦人運動の源泉となつたものは、言ふまでもなく前掲の『女權擁護論』である。いま此名著の內容を紹介するに先だつて、わたくしは茲に二三の興味ある事實に讀者の注意を促したい。

『女權擁護論』は一七九二年の刊行だから、彼女がまだゴッドヰンと結婚する前に書かれた物である。從つてその大たる立派な思想家の感化と助言とを得て出來たものでない事は遺憾に思はれる點ではあるが、それだけまた強く彼女の個性と獨創性とが此書に現はれてゐるわけである。おもへば近世

の思想史上に大波瀾を捲き起した婦人運動——しかもその第一頁を飾れる此論著が、毫も男子の力を借らないで、しかもまた日本ならば『女大學』時代に相當すべき十八世紀の英國に於て、純然たる一人の女性の力によつて書き上げられたと云ふ壯快なる事實には、甚大の意義があると思ふ。殊にまた彼女の閱歷を想うて此一卷の論著に對するとき、思想と實行とを並行せしめることに極めて雄々しい勇敢な生活態度を執つた女史その人を憶うて、讀者は誰しも肅然として襟を正さざるを得ないだらう。まことに此書は、あれ程までに慘憺たる實生活の苦しみを嘗め盡くしたウルストンクラフトが、みづからの體驗と思索とを血と涙とを以て書いた生命の記錄だ。そこに空理空論は見られない。（たやすく此名著の原書を得たいと思ふ人に、私は「The Scott Library」第七十卷目にある廉價版をお薦めする。）

婦人解放といへば、誰しも先づイブセンの『人形の家』を想ひおこすであらう。そしてあのノラがヘルマアに向つて言ふ言葉、『自分が自分に對する義務です』の一語が想ひ當るであらう。そして此言葉を以てウルストンクラフトの名著の次の一節と對比せられよ。

「女性全般に就いて言へば、かれらの第一の義務は、合理的な生物として彼等自身に對する義務である。……この義務を遂行せずに濟ますやうな種類の生活は、必然的に女性を墮落せしめて單なる人形となすものである。」

（『女性擁護論』第九章）

囚はれた女を『人形』と呼び『自分が自分に對する義務』といふが如き言葉は、今日に於てこそ極

めて陳腐平凡であるが、右の一節によつてこれらの語の出典がいづくにあるやを知るとき、そこにはじめて此思想の源流をも突きとめることが出來る。英語の書に精通する事ふかき批評家ブランデスを通して、イブセンはミルの『女性の屈從』を見、更に溯つてウルストンクラフトの著にも接したのであらう。

この『人形』といふやうな言葉が今日すでに少しも珍らしくないと同じやうに、ウルストンクラフトの名著も亦、今日にして之を見れば、誰でも考へてゐるやうな、何の奇も無いわかり切つた內容の物に過ぎない。これが當時に於て矯激の論議と見なされたことの方が寧ろ不可思議だと見ゆるまでに、常套の語に滿ちてゐる。しかしながらまた他の一面から言へばルソオの如き大思想家ですら、婦人の解放の事に氣づかなかつた十八世紀末の西歐は、日本の維新以前と多く異なる所なき奴隷婦人の時代であつた。さういふ時代に生き、さういふ周圍の中に身を置きながら、よくもこれだけの事を考へたものだと思ふとき、また特にその說くところを自分の實生活の上にも敢行し得た一個の先覺者だとして見るとき、誰しもウルストンクラフトの氣魄と天才とに多大の敬意を拂はざるを得ないのであらう。

ゴッドキンの傳ふるところに據れば、女史の『女權擁護論』は僅かに六週間にして書き上げられたといふ。文體の如きも直截な所もあれば、また十八世紀特有の美辭麗句を聯ねた所もあり、內容の排

列の如き甚だしく不整頓であり、また精疎一ならずして、屢本題以外に走り全體に統一均整を缺くところ、如何にも急いで書き上げられた一氣呵成の作だといふ感じがある。ただその文字の背後に閃く暗示と啓發とに至つては、一世紀をへだててオリヴ・シュライナァ女史の婦人勞働論となり、ギルマン夫人の女子經濟論となり、エレン・カイの結婚論となり、パンカアストの參政運動となつて強く現代の女性を動かしてゐるのである。ハヴロック・エリスが此名著を評して『近代の女權擴張論と雖も、これ以上何等補正すべき必要を見ないだらう』と言ひ、婦人參政論者として名高いフォセット夫人も亦、この一卷の名著が婦人運動に與へた貢獻はアダム・スミスの『富國論』に比すべきものなりとまで激賞したのは、必ずしも溢美の言ではないと思ふ。

おもふに女史がその夫、その子、その姉妹兄弟に注いだ個人愛が、更に大きく更に廣く『人間愛に向つて波打つた』ところに此一卷が成つた事を想ふとき、たとひその内容が今日から見て何等の警策新意を藏しないに拘はらず、私どもは婦人解放の黎明期を告げた此第一聲に、たとへやうもなき熱意と底力のこもれることを認めざるを得ない。まことに此一卷こそは、十九世紀以後の新世界を建設した大きい礎石の一つであつた。そしてその礎石は誰の力をも借らないで、ただ一人のかよわい女の手一つで据ゑられたのであつた。

六

わたくしは必ずしも原本の次序を逐はずに、出來るだけ簡單にウルストンクラフトの名著の撮要を試みる、

過去の女性を顧みると、女が一人前の人間であると認められなかつたことは、西洋も日本も全く同樣であつた。佛教が女人の罪障を說くと同じく、西洋の昔の禁慾思想もまた婦人を以て永久に呪はれたる者と觀じ、羅甸語の Femina（女）は『信仰なきもの』の意味にさへも用ゐられた。ウルストンクラフトが生きた十八世紀とても、法則因襲萬能の古典主義の時代のこととて、女性の奴隷狀態は依然として舊態を脫して居なかつた。女が生を此世に受くるは、ただ男性のためにその虐使に甘んずる道具に過ぎずと見られてゐた。女が生きることは、それ自らが『目的』ではなくして他の何等かの『手段』たるに過ぎずと考へられた。女史は先づ此風潮を憤慨して、

『今や女性の風習に一大革命(レヴォリユウション)を起すべき時は來た。女性の失はれたる尊威を再興すべき時が來たのだ。そして女も亦人類の一部として自らを改造することによつて世界を改造すべく努力せしむべき時が來たのだ。』（第三章）

と叫んだ。

十八世紀風に言へば、女性は男性を向上せしめる道具に過ぎないのだから、勢ひ女性の職能は結婚によつて始めて發揮される譯である。だから未婚女子の唯一最大の目的は『婿探し（ハズバンドキャッチング）』といふことである。彼等はこの目的のためには、本當の戀愛が芽ぐむまで待つといふやうな廻はりくどい方法は執つてゐられない。遮二無二その美貌と嬌態（コケットリイ）とによつて、男性の肉情をそそるといふ手つ取り早い方法を執る。

ウルストンクラフトの透徹せる直觀の力は、先づかかる思想より生ずる病弊に注がれた。病弊の第一は、女性に結婚以外の生活様式を拒否するの結果、結婚は女にとつて男性の就職と同様に、衣食の道だと考へられるに至つたことだ。生れながらの理想主義者であり、又正しい意味に於ける戀愛の高唱者であつたウルストンクラフトは、かかる『何人も之を實行し、法律も之を認むる賣婬制度』(第九章)を否定し、『その肉體を、夫が妻を扶養する努力に對する適正の報酬』(第四章)と思惟することの迷妄に極力反對したのである。

病弊の第二として女性が徒らに外貌の美を誇り、人間としての修養を忘れるといふことが指摘された。女史の言に俟つまでもなく、婦人の容貌の美は『傾く日影であつて、……眞夏の盛り過ぎて後は、夫の心をつなぐに足らないもの』である。その果敢ない美貌の續く限り、女性は女王の如く男性を支配する。そして一朝權花の粧ひ色あせては、奴隷の虐使に甘んじなければならぬ。何れの場合に

於ても兩性の平等關係は望めないこととなる。女史が望むところは夫唱婦隨でもなければ、況んや婦唱夫隨でもない。それは實に人間と人間との對等平等の關係でなければならぬと喝破したのである。

第三の病弊として擧げられたのは容姿の端麗のために、身體の健康が犧牲に供せられるといふことである。日本人が肺病やみの撫で肩を讃美し、支那人が不自然な纏足を喜び、歐米人が柳腰を賞めたりするなどは、何れも男子横暴の結果、婦人の弱きを喜んだ實例である。女史は言ふ、『その生涯の大部分が病氣の治療と苦痛に費されるやうな人間が、どうしてよき妻であり、よき母であり得ようぞ。』しかして女史が最も痛嘆したのは、身體の虛弱が女性隷屬の素因となつて居る點である。古臭い語だが、健全な精神は健全な身體に宿る。虛弱な肉體は必然的に因循な魂を宿す。

人或は言ふだらう。天才は屢病弱の人に見られる。その傑出した精神力は決して健全な身體に支持されては居なかつたと。女史は此點をも反駁して言つた。なるほど天才は往々にして虛弱であつた。しかしあの異常な精神力は決して不健全な肉體から生れたものではない。われわれは寧ろ科學の探究や詩の創作に沒頭して生命の焔を消盡しながらも、あれだけの大事業を成就したその旺盛なる體力を驚嘆すべきものではないかと。言稍奇矯に失するの嫌ひはあるが、これもまた半面の眞理を道破し得たものだ。

最後にこの點に關する彼女の眞意を誤なく傳へんがために、煩を厭はず玆に全文を引用したいと思ふ。

『もしも女性が男性の肉慾滿足のために造られたものでないならば、また若し彼女が男性のために衣食の具を供すべき高等下女たるべく造られたものでないならば、その必然の結果として、眞に女子の教育に留意する父母の第一の義務は、よし身體を强健ならしめずとするも、少くとも美と、女らしい長所といふ謬想によつて彼女の體格を破壞しないことであるべきだ。』(第三章)

またこの『女權擁護論』のなかには、殆ど他の問題との均衡を失するまでに力を込めて女子教育論が說かれてゐる。しかし私は彼女の脫線に倣つて玆にまた數千言を費して、本題に餘り關係のない國民教育論などを紹介する愚を學びたくない。否な極端に言へば私の最も感心しない箇所は、十八世紀思想の露骨に現はれたこの教育論だと言つて差支ない。しかし筆端一たび女子教育論に及ぶや、彼女の文藻は燗々たる光輝を放つて、今なほ吾々を首肯せしめざれば已まないといふ趣がある。

彼女の達見の第一は、佛蘭西のエルヹシィユスに端を發した教育感化力の過信に對する修正であつた。彼女は、女性の地位を向上せしめるためには教育の偉力を借らなければならぬことを主摘したが、それに先だつて社會改造が行はれるに非ずんば、その效果が甚だ稀薄であることを指摘して居る。又彼女は、世人が往々にして教育を以て生計を得るための手段となす偏見を駁し、それが『漸次

完全の狀態に進み行く一個の人間を形成すべき最初の階段』だと說くところなど、之を現代の教育論として見ても卓見たるを失はない。

既に『神と人とをつなぐ糸』である理性の教養を拒否された女性に、殘された唯一の力は本能の鈍き光である。その本能さへもなまじか人間の仲間入りをしただけに、動物の本能のやうな銳敏さを失つて了つたといふに至つては、女史の言ふ如く女性は『あらゆる動物中で最も悲慘なものである』にちがひない。かくて女性は最早その唯一の職能たる、妻たり母たるにさへ適しないやうになつてしまつた。小學兒童教育の目的は、母の膝下にある時に習得した惡癖の矯正にあると云つたやうな奇觀を呈するに至つた。

女史は、事のここに至つた原因を一に男性の暴戾に歸した。

『女性の眼界を廣め、その理性を磨かしめよ。しからば女性は盲目的服從より蹶起するに違ひない。權力は常に盲目的の服從を要求する。故に暴君や色狂(きちがい)が、女性を無知の境遇に置かうと努めたのも無理はない。蓋し前者は奴隸のみを欲し、後者はただ玩具を欲したのである。』(第二章)

男性は女性を壓迫して、自分の思ふ通りの美しい奴隸を造り上げた。しかしそれは女性の不幸ばかりでなく人類の不幸であつた。ただ賢母良妻たらんがためにのみ仕立てられた女性は遂に一個の『人』たるの資格を失つて、結局は妻たり母たるの能力をも完全に有せざるに至つた。

かくて女史は、男女兩性が同樣に敎育されなければならぬことを主張した。

『もしも結婚が眞に社會の結合物であるといふならば、男性も女性も同じ標準の下に敎育されなければならぬ。然らざれば兩性關係は決して眞の伴侶と稱することが出來ないし、又女性は女性特有の義務を遂行することも出來ないであらう。これらの事は女性が立派に公民たる敎育を受けた時……始めてこれを望むことが出來るのである』(第十二章)

かくて女史の論は百尺竿頭更に一歩を進めて、男女共學すらも力說してゐる、今を距る事百三十年前に於て。

七

次にまた女史が兩性の道德に就いて言ふところを聞かう。

善惡の標準とか良心の本質とかは女性には關係は無い。女にはただ表面の禮儀作法を敎へて、その行爲のみを取締つておけば可い。また女子には世間の評判が大切だ、人間としての獨立の道德的批判なぞは無用だ。まづかういふのが十八世紀の女性道德觀であつた。女史は之に對しても手ひどく反對の氣焰を擧げた。性の相異によつて道德律に甲乙の差あるべきではない。殊に婦人にのみ適用する道德律といふが如きは、表面の行爲のみを修めて世間に迎合することを敎へる功利的のものだ。それは

妻として又母として男性に滿足を與へるためには、かくかくの行爲をすればよいといふことを示すに過ぎない。此場合、問題は行爲の善惡から行爲の利害といふことに移つてしまふ。卽ち或女性が一つの行爲をした場合、その行爲の善惡は一に、その行爲が男性に致した貢献の多寡によつてのみ判斷された。すると猫は鼠を捕るから善だといふことになり、鼠は魚を盜むから惡だといふことになる。動物ばかりではない、植物にも鑛物にも器械にも、善人やら惡人やらが存在することになる。

女史はこのやうな、女性獨立の存在を無視した道德に反對した。女性特有の道德に反對した。女性特有の道德と云ふものがあらう筈はない。それは男性の場合と等しく『人間として』の義務道德でなければならないと主張した。

然らば人間としての義務とはどんなものか。永遠の原理に基礎を置いた絕對的の道德とはどんなものであるか。女史は此問に答へて、一言にして言へば、それは意識的な義務觀念でなければならぬ。卽ち自己內心の理性が命じて善となすものに從はねばならぬ。決して世間の言ふ所によつて左右されてはならない。

舊式な女性道德觀の最も極端な例は、處女の純潔に對する世人の考へ方だ。處女の純潔よりも前に、肉體の純潔を要求せられて居る。だから彼女が一朝不慮の災難によつて肉體の純潔を汚されたとき、彼女はその精神の純潔をも失つたことになるのだ。その時の彼女には、絕對的の道德から判斷す

れば毫も責任はないのだが、しかし彼女は、いかなる手段を講じても終生拭ふことの出來ない汚辱を蒙つてしまふのだ。しかし本當の意味から言へば、無垢な魂の象徴としてのみ無垢な肉體に價値があるのである。

ウルストンクラフトは純然たる理想主義の立場から、只管行爲の動機に重きを置いて、内心の清淨を要求した。

『心をして清からしめよ……しからば行爲は自ら正しかるべし。』（第五章第三節）

私が本節に述べた所の女史道德觀は、今日から觀れば毫も耳新しいものでないかも知れないが、それを確信し實行する人は今日でも鮮いのが事實だ。

しかし以上說く所のすべては、女史の婦人解放論から見て寧ろ前提たるに過ぎない。卽ち今日まで女子の道德性の劣れるは、全く婦人虐使の結果であることを女史は指摘した。曰く

『女性無知の大部分は男性の專制から生ずるのである。又現在巧詐が女性性格の一半となつて居ることは私も承認せざるを得ないが、それも暴虐から生れたものである。』（第十三章第五節）

女性の社會的地位を向上せしめずして、その理性德性を開發せんと努むるが如きは、全然本末の顚倒である。先づ女性を解放せよと彼女は言ふ。

『解放（イマンシペイト）されたとき、女性は始めて完全なものとなる。』（同前）

『女性を解放せよ。しからば彼等は卽座に理性あり德性あるものとなるであらう。又男性は更に理性あり德性あるものとなるであらう。女性の改善は同時に男性の改善である。現在の如く全人類の半數を桎梏の下に置く不正義は、必ずやその壓制者にも報復を加へ、男性の德性はその蹂躙しつつある女性によつて蠧毒さるるに至るであらう。』（第十二章）

女史の所說に於て多とすべき點は、その眼が常に人類の全野に注がれて居たことである。彼女はいつも女性の幸福といふことより前に、ひろく人類全體の幸福といふ見地から問題を觀察してゐた。單に女性といふ立場のみから出發した偏狹な婦人解放論は、結局かの『男女の戰』とやらを激發するに過ぎない無用な論議だ。女史が早くも婦人問題の黎明期に於て示した女性解放の人道的論據は、ながく後人を啓發し指導すべき目標を與へたものである。

しからば女史にかくの如く廣き眼界を與へ、女性通有の缺陷たる狹量偏執から彼女を救うたものは果して何であつたのかといふと、それは彼女の不羈獨立の精神と、熱烈な『自由の愛』とであつた。彼女はその序文の中に言ふ。

『久しい間、私は獨立が人生の偉大なる至福であり、あらゆる德行の基礎であることを信じて來た。私は食べる物を食べないでも、たとへ不毛の荒野に眠らうとも、獨立を欲して已まないであらう。』

又第二章にはかう言つて居る。

『自由こそは德性の母である。もしも女性が體質的に奴隷であつて、自由の爽快な大氣を呼吸することが許されないならば、彼等は常に土離れした花の如くに凋み、自然界に於ける美しき瑕ものと見なされざるを得ないであらう。』

女性解放問題の核心は實に此『自由』の二字に存する。自由のないところに人格はない。人格のないところに道義なく戀愛なく理性がない。自由を與へると云ふことは、つまり女性も一個の人間だと認めると云ふことに歸著する。解り切つた話のやうで、その頃までは人が餘り考へなかつた道理である。

自由が女性に與へられたとき、兩性關係は面目を一新する。それは暴君と奴隷との關係を離れて、人間と人間との平等關係に移る。妻は最早『美しき人形』ではなくて、夫の友人であり伴侶である。かくの如き自由と平等とによつて祝福された兩性關係を、女史は『友誼』の名によつて呼んだ。女史は此語によつて、眞の戀愛によつて結ばれた男女の對等關係を現はし、また『獸慾としての愛』、『愛なき性的征服慾』と區別せんと試みたのである。また兩性關係が主從關係を離れて平等關係に移る當然の結果として、一夫一婦の制は避く可からざるものとなり、男性の性的純潔が女性のそれと同樣に要求されるに至るのである。此點は固より女史が屢本書のうちに繰返し力說したところであつた。

八

ウルストンクラフト女史が此一卷のうちに說くところは、多くの事柄が雜然として極めて多岐にわたつてゐる。これは如何なる問題にでも最初に先づ手を着けた人の論議に免れない缺點ではあるが、その代りまた婦人問題に關する總ての方面に就いて何等かの最初の暗示と示唆とを與へた功は、ながく沒すべからざるものである。たとへば以上のほか女子參政權に關しても、全篇中ただ次の一節に就いて此問題に觸れてゐる。しかも當時いまだ一般世人がかかる點には夢想だも及ばなかつた頃の事とて、女史の口吻は極めて、つつましやかなものである。

『いつかは實行して見たい、とかねぐ思つて居ることを申上げたなら、或は皆さんのお笑を招くかも知れないが、私は女性にも代議士がなければならぬ、現在のやうに出鱈目な政治のもとにある代りに、女子も亦直接國政に參與しなければならぬと思ひます。』(第九章)

この婦人參政權問題は、後にミルの『女性の屈從』を待つて始めて論理的根據を與へられて、それが遂に二十世紀現在の婦人參政權運動まで成熟したものである。

女史はまた婦人の職業問題にも言及した。經濟的獨立と精神的獨立とは、謂はば兩翼双輪の關係をなすが故に、女子職業の自由が認められざる限り、婦人の自由は空名に過ぎないと女史は考へた。然

るに當時十八世紀ごろまでの女性に向つて解放された職業といへば、賣笑の外にはなかつた。そしてこの貞操賣買の職業が、過去の女性を束縛して奴隷の境遇におき、戰慄すべき汚辱と慘狀を人類の歴史に殘したことは言を俟たない。女史が經濟的獨立を力說したのは、即ち婦人の屈辱たる此賣笑制度を絕滅せしめんがためであつた。

かくて女史は、婦人に最も適した職業として醫業を擧げた。英國で女醫が許されるやうになつたのは、實に本書刊行の後五十年を經てからであつたことを思ふとき、ここにもまたウルストンクラフトの先見の明が知られる。

『女權擁護論』は十八世紀の後半、すべての解放の思想の黎明期に於て、幾千年の長夜の眠から、はじめて世界の女をめざました曉鐘第一聲であつた。のち更に此書の所說に哲學的基礎を與へて、組織ある纏まつた議論としたのが、即ち後のジョン・ステュアアト・ミルの『女性の屈從(サブゼクション・オヴ・ウイメン)』である。花々しかつた浪漫主義(ロマンティシズム)の初期に一人の女性の筆によつて現はされた主張は、のち半世紀を過ぎて同じく英國のミルによつて遂に思想の問題となるまでに大成せられた。それが更に前世紀の後半から今の新世紀に及んで、實際上の婦人運動となつたのである。

飜譯

（『狂犬』中の飜譯も含む）

『狂犬』卷頭に

かりに狂犬のこころもちになつて世の人を見たならば、かくもあらうかと思つて、書いて見たのが最初の一篇である。本來、一學究である私が、かういふ突飛なものに筆をつけたのであるから、若しこれが江戸時代の文人ならば、『戯著』とでも言つておくかも知れない。折角書いたものだからといふ薄弱なる理由のほかに、また、多少世道人心を益するものであるといふ確信あるが爲めに、敢てこれを世に公にする事にした。實を言へば私はスタアンの『トリストラム・シャンディー』か、さもなくば風來山人の『風流志道軒傳』のやうな類のものを、いつかは書いて見たいといふ宿志は有つてゐたが、まだ其機を得ずにゐて、たま〳〵筆を執れば、こんな『狂犬』のやうな、似ても似つかぬ妙な物が出來て了つた。若し一讀の後に、白村が馬鹿なものを書いたと言つて笑つて下さる人があるならば、望外の幸である。

短篇七章の最後の二篇、『夢なりしか』と『寂滅』と、前者は佛のモオパッサンの、後者は米のポオの、共に短篇の傑作としては世に知られたるもの。私がはじめて之を譯して或雜誌にかかげたのは今からもう十四五年も昔で、まだ東京の文科大學にゐた頃の學生時代であつた。その文體が、今日行は

れて居る飜譯小說のそれと、全く趣を異にしてゐるなども、自分にとつては却つて懷かしい往年のおもひでを語るものである。

大正四年十二月

厨川白村

編者附記。如上の文章に見えたる『狂犬』は著者晩年の意志に副ひ全然省略した。

內容

短篇

散文詩

詩

新モンロオ主義……四〇一

老婆

（佛、モオパッサン作）

一

十五年といふもの、自分は絶えてギルロオニュの方へは歸らずにゐたが、秋になつて久々でそこへ獵に出かけた、そして友人の家に客となつた。普佛戰爭で獨逸人のために打ち壞された邸宅を、友は改築して了つた。

自分はあの邊一帶の地が非常に好きだ。目に受ける感じから言つて、あんな好い處は滅多にない。全くあの景色には肉感的に惚れ込むのである。人といふものはよく土地に心をひかれて、見なれた泉とか森とか池とか山とかいふものには、何だか嬉しい事でもあつたやうに、いつまでも懷かしい思出が附纏ふ。時としては愉快な日に唯の一度しか行つた事のない林のかげ、流のほとり、或は花盛りの果樹園にも、忘れがたい思出が殘る。ちやうど或春の朝、ふと街で見た薄衣を着た美しい女の姿が、身にも心にも、何だか名殘惜しい忘れ切れない樂しみの思を遂げなかつたといつたやうな心もちを、胸にのこすと同じである。

全く其邊一帶が好きなのだ。あちこちに小さい森があつて、土を養ふ脈管のやうに小川が流れてゐる。河で鱒や鰻や蟹などを取るのも面白い、また水に這入つて浴する事も出來た。岸に茂つてゐる背の高い草のなかには、山鷸を見つける事もあつた。

草をわけて行く二匹の犬の後を追うて、自分も山羊のやうに氣輕に歩いて行つた。右手の方に友は百米突も離れて、苜蓿の草原を蹈んで行く。ソオドルの森の端のところを曲ると、そこにつぶれた一軒の小屋があつた。

ふと自分は想ひ出した。戰爭の前の年、この小屋を見た時には、小ざつぱりした葡萄蔓の絡んだ家で、戸口には鷄が遊んでゐた。骨ばかりになつてからも荒れ果てて了つた破れ家より、みじめな物が世にまたとあらうか。

また想ひ出した。一人の女が、酷く疲れた日に私に葡萄酒を一杯呉れた。そして友はこの家の者の事を私に話して聞かせた事がある。老爺の方は密獵者で、これは何でも憲兵に殺された。息子の方は、自分も一度會つた事があるが、武骨な大男で、獵にかけては孰れ劣らぬ豪の者であつた。村の人たちはこの一家の者を『野良』と言つてゐたが、それは本名なのか綽名なのか。

自分は友を呼んだ。のそ〱大股に歩いて此方へ來た。

『あの家の者は如何なりました。』

から訊いたので、友は次のやうな話を私にして聞かせた。

二

『いよ〳〵戰爭が始まつたとき、三十三といふ男盛りの息子は、母を一人家に殘して、召集されました。人からはさう氣の毒がられなかつた、といふのは婆さんが相當に金を持つてゐる事を皆が知つてゐたからです。

人里離れた森の端くれの一軒家に、婆さんは一人ぽつちでゐました。が、平氣です。何を言つてもこの一家の男と同じく、丈夫な背の高い瘦せぎすの老婆で、滅多に笑ひもせず、人もまた戲談一つ言ひかける者はゐませんでした。總體に田舍の女といふものは笑顏を見せないもので、笑ふのは男のする事になつてゐます。鬱陶しい、少しも晴やかな所のない生活をしてゐるので、氣も心も滅入るやうな女ばかりです。そりや男の方は時には居酒屋へでも行つて騷ぎもしませうが、女房さんと來ては年が年中、苦虫かみつぶしたやうな顰め面をしてゐまさあ。つまり顏の筋肉が笑ひで動くといふ事を知らないんですね。

婆さんはいつもと變らぬ暮らしをしてゐましたが、小屋は間もなく雪に包まれました。一週間に一度、村へ麵麭と肉を買ひ出しに行つてまた家へ歸つて來ました。途中狼が出るといふ噂があるので、

息子の錆び鐵砲を肩にして、手には古ぼけた杖を持つて、この背の高い女が少し前屈みに、雪の中をのそ〳〵とやつて行く風は實に珍妙でした。白髪頭を誰にも見せないやうにすつぽりと被つた頭巾の上へ鐵砲の筒だけが出てゐるんですな。

或日、普魯西兵がやつて來ました。家ごとに皆資力に應じて宿舎を割當てる事になつたので、少しは貯へのあるといふこの老婆の處へは四人の兵が來ました。

四人ともに究竟な立派な男です、肉附のいい髯の奇麗な碧眼の若者、連日の疲勞を物ともせず元氣で、占領地に來て居ながら、ごく溫良しい者でした。みんな此婆さん一人をいたはつて、親切に、なるだけ勞をかけないやうに、費用の少いやうにと心掛けてやりました。雪の降る寒い朝などに、この四人の男が井戸端で腕まくりをして手水を使ふ。北人に常な美しい桃色の皮膚をぢやぶ〳〵水に浸してゐると、その間に婆さんが奔走して御飯拵へをするのです。それから四人の荒くれ男が今度は臺所を掃いたり、床を拭いたり、木をきる、芋をむく、衣物の洗濯をする、何から何まで家事萬端をやる所は、どう見ても息子四人で母親に仕へてゐるといふ格でした。

しかし婆さんは、いつも自分の息子の事ばかり思つてゐたのです。あの背の高い瘦せた、鼻の曲つた、目の褐色がかつた、上唇に黑い毛の蒲團を附けたやうな堅い髭のある、息子の身の上ばかりを考へてゐました。そして今自分の家に來てゐる四人の敵兵に、わが子の事を毎日訊くのでした。

『歩兵二十三聯隊──佛蘭西のあの聯隊はいま何處へ出てゐるのか分りませんか、悴がその隊にゐるんです。』

『そりや全くわかりませんね』と四人は言ふんです。

四人とも皆銘々故國には母親のある身ですから、この婆さんの氣苦勞のほどもよく思ひ遣つて、色色と親切にしてやりました。それでまた婆さんの方でも、敵とは云ひながら此四人を憎からず思つたのです。元來がこの百姓どもには敵愾心といふやうな事は解らないんで、それはまあ少し上等な人の言ふことです。貧乏だから負擔は重し、何かと言へば取り立てられ、頭數が多いために自然、大砲の御馳走にもなりがちで、大勢一緒に殺られる。まあさう言ふ譯から、國と國とが一生懸命に戰ふといふ意味も此人たちには能く呑み込めないんですね。

『四人とも旨いとこへ泊り込みやがつた』、婆さんの家にゐる獨逸兵のことを皆が左樣言つてゐました。或朝の事です、婆さんが獨りで家にゐると、遙かあちらから一人の男がやつて來る、それが郵便配達だといふ事も直ぐにわかりました。一封の手紙を置いて行つたので、婆さんは例の針仕事の時の眼鏡を出して讀んだのです。

「前略、ここに悲しむべき報知を差上げ候。御子息どのには昨日砲彈のため、身は二つに割かれて戰死なされ候。戰友として相並びて戰ひ居たる小生は眞近に居り候。若し當日萬一の事あらば故國

へ報知の事を、豫て小生へ依頼致されしに候。衣嚢に在りたる時計は小生お預り致し置き、戰後に御地へ持參可致候。

匆々。

歩兵第二十三聯隊にて　リ　ヺ　オ』

手紙の日附は三週間前になつてゐました。

婆さんは泣きもせず、身動きもしませんでした。殆ど苦痛をすら感じない程に、全く茫然としてゐたのです。『あゝ悴は死んだのだ』、唯これだけ考へました。

それから少しづつ涙が目に浮んで、果ては悲嘆にくれました。苦しい思がそれからそれへと胸へ込み上げます。可愛いあの息子を二度と抱かうと思つても、もう出來ないんです。父親は憲兵に殺され、息子の方も普魯西兵に殺られて了ふ。砲彈で身首處を異にした、身の毛もよだつ其光景を婆さんはいま目の前に見るやうな氣持がしました。首は落ち目は開いた儘、そして常も怒つた時にするやうに、太い口髭の端を嚙ひしばつたその有樣が……。

それにしても死骸は如何して了つたでせう。亭主の折には、額に彈丸の這入つた儘で戻つて來ましたが、今度の息子の方も、せめては死體だけでも送り還して呉れるものならと、親心には思つたのでせう。

そのうち人聲がしました。四人の普魯西兵が村の方から歸つて來たのです。婆さんは早速手紙を衣囊に入れて、そ知らぬ振りで兵隊を迎へ、涙も拭き取るだけの時間はあつたのですから、平生と變らぬ顏附をしてゐました。

四人とも面白さうに笑つてゐました。無論盜んだのでせうが、立派な兎を一匹持つて歸つて來たのです。そしてこれから御馳走をするんだといふ事を、婆さんに目くばせしました。

婆さんは早速御飯の支度に掛かりました。が、兎を殺す段になつて、これには弱りました、無論初めてぢやないんですがね。で、兵隊の一人が兎の耳の後の處を打つて殺してやつたのです。

兎が殺されると、婆さんは皮と赤い身とを離しました。しかし手は血みどろになり、生溫かい血が段々冷えて固まつての來るを見ると、婆さんは總身が慄へたのです。まだ皷動をしてゐるこの兎のやうに、自分の息子も二つに割かれ、血がぼとぼと垂れるのがぢつと見えるのです。

四人の兵隊と一緒に、婆さんも食卓に就きはしましたが、一口も食べられませんでした。四人はその方にはお構ひなく兎をぱくついてゐたのです。婆さんは默つて傍で見てゐましたが、腹には一つ思はくが有つたのです。勿論平然たる顏をしてゐるんですから、彼等に氣の附かうやうはありません。

『もう一月も一緒に居ながら、まだ皆さんの名も知らないんですよ』、婆さんは出し拔けにかう言ひました。皆もその意を悟つて早速名乘りをしましたが、それでは足らずに、婆さんは一々名前と所書き

を紙片に書かせました。そして眼鏡を大きな鼻の上に掛けて、ぢつと、このわけの解らぬ書附の字を見てからそれを疊んで、例の息子の訃音の手紙と一緒に衣囊に藏つたのです。

三

『皆に好い事をしてお上げしよう』、食事が濟んだ時婆さんはかう言つて、四人が寢る屋根裏の部屋に芻秣を運び始めたのです。

　四人もこれには一寸驚きましたが、寢るのに餘程暖かだといふ說明を聞いて、成程といふので自分たちも一緒に手傳つたのです。屋根まで芻秣の束を積み上げて、四壁こと〴〵くこんもりと包んだ、暖かい匂の大きい部屋を一つ拵へ上げて、そこで心地よく寢る事になりました。

　食事の時婆さんが一口も食べないのを氣にして、尋ねた者がありましたが、唯痙攣だとばかり言つてゐました。それから婆さんは火を焚いてよく暖まり、四人の獨逸兵は毎晩使ふ梯子をのぼつて寢に行きました。

　落戸を閉めると、直ぐに婆さんは梯子を取り除け、そつと表の戸を開けて、藁をどつさり待つて歸つて、臺所一杯に積み上げたのですね。跣足で雪の降る戸外へ出て行きましたが、こそとも音をさせませんから、だれも知らないんです。婆さんは時々四人の男の大きな鼾聲に耳を澄まして、さてこれ

で用意も十分だと思つた時、火の中へ藁を一束くべました。いよ〳〵よく燃えついた時に、それをまた外の藁束の上へ置いて、今度はまた戸外へ出てぢつと眺めてゐました。

数秒にして、火は忽ち見ごとにぱつと燃え上りました。家の中一面の火です。見る〳〵うちに全體が一つの炎々たる竈になつて、凄じい焔をあげる。その光が狭い窓を拔けて、眩ゆい程に外の雪を照らすといふ有様。

屋根裏の方からは大きな叫喚が聞えました。苦痛と恐怖を訴へる、胸をつん裂くやうな悲鳴です。まもなく落戸は內側に落ち込んで、渦卷く焔は忽ち屋根裏へ通つて、藁葺の屋根を貫いて了ひ、高く空中に炬火のやうに燃え上りました。家全體が火になつたのです。

焔のぱち〳〵燃える音、壁のくづれる響、梁の落ちる音、さういふものの外はもう何も聞えなくなりました。屋根は急に落ち込んで、煙の雲、火の海のなかを、家の燃えさしは盛んに空中に吹き上げられてゐました。

曠々たる野原は、この火光に照らされて、赤で色どつた銀色の布のやうに煌きました。

遠くで鐘が鳴りました。婆さんは焼けた家の前に直立して、若しあの兵隊の一人でも逃がしてはと思つて、息子の鐵砲を持つて控へてゐたのです。

いよ〳〵事終つたのを見すまして、婆さんは鐵砲を火の中に投り込みました。爆聲が聞えました。

大勢やつて來ました、村の者も、普魯西兵も。

婆さんは木の株に腰を卸して泰然として澄ましてゐます。佛蘭西人と同じほど佛蘭西語の話せる一人の獨逸の士官が、『兵士はどうしたか』と訊きました。

今はもう消えかかつてゐる赤い焰の塊の方へ、婆さんはその痩せこけた腕を延ばして、强い聲で答へました。

『あの中に居ます。』

皆の者は婆さんの周圍に寄つて來て、『如何してまた火を出したのか』と訊くのです。

『私が火を放けたんです』と婆さんの答。

こりや婆さん不意の災難で氣が少し狂つたなと思つて、誰もこの言葉を眞に受ける者は居ませんでした。それから段々皆が集まつて來ては色々尋ねますと、婆さんは事の一部始終を話して聞かせました。最初先づ手紙の來た事から、家もろとも四人の燒け死ぬところまで、すつかり話したのです。婆さんは自分の心に思つた事、自分のしたこと、唯一つでも忘れずに事こまかに話しました。

話し終つて衣嚢から二枚の紙を取り出し、消えかかつてゐる最後の火の光に照らしてそれを見わけるため、婆さんはまた眼鏡をかけました。そして一枚の方を見せて『これは悴の死んだ方です』と言ひ、他の一枚を出してまたから言つたのです。

『四人の名前はここに書き附けてあります、誰かこの事を故國へ知らせて遣つたらいいでせう。』

婆さんは白い紙片を士官に渡しました。士官は彼女の肩の處をつかまへました。

『どうしたのかと云ふ次第を、手紙に書いて遣つて下さい。そしてその四人の者の親類へ、それをやつつけたのは全くこの私、「野良」婆だといふ事を忘れないやうに知らせて下さい』と、更に述べ立てるのです。

士官が早速獨逸語で何か部下に命令を傳へますと、兵士は彼女を捕へて、まだ熱してゐる壁の所に突立たせました。十二人の兵士は、婆さんに面して二十米突の距離の所に一列にならびました。婆さんは身動きもせず、ちやんと覺悟はしてゐたのです、唯待つてゐました。

命令が下ると共に、長い鐵砲の音が續いて響きました。一發だけ外のより後れて發射したのがあつたのです。

婆さんは倒れずに、たゞ足だけ薙き取られた者のやうに、ぐにやぐにやりとなりました。

獨逸士官が近寄つて見ますと、婆さんの體は殆ど眞二つになつてゐました。皺だらけの手には、血でべとべとになつた手紙を放さずに居たさうです。

× × × ×

友人は此話をして更に言葉を足して言つた。

『その地に在つた私の邸宅を打ち壞したのも、獨逸人が全く報復のためにやつた事です。』
私はこゝで燒き殺された憫むべき四人の事を思ひ、また壁にもたれて銃殺された婆さんの兇暴をも思つた。
自分は小石を一つ拾つた。それは火で燒けて黑くなつてゐた。

女囚

（佛、トウリエ作）

十一月の或ゆふべ、――聖カトリン祭の前夜であつた――オウブリイヴの中央監獄の鐵門が開いて、一人の女が出た。年ごろは三十ぐらゐ、色の褪せた毛の上衣を纏うて、蒼ざめたその顔には、木綿の粗末な帽子が甚だしく不似合のやうに見える。懶げな腫れた蠟のやうな顔色は、獄裏の生活を送つた者の常だ。

この女はいま放免されたばかりの囚人で、獄中では仲間のものが皆その生れ故郷の名をそのままに、『ブルトンの女』と呼んでゐた者だ。嬰兒絞殺といふ重罪に問はれて、監獄馬車に載せられ、ここへ送られてから今でちやうど六年になる。

自分の衣服を返して貰ひ、また獄中で儲けた僅かばかりの貯金を書記局から受取つて、いま出獄の身となつた。ラングル行といふ裏書づきの通行券も貰つてある。

ラングル行の乘合馬車はもう出て了つた。女は不恰好な風によろめきながら、びく／＼もので、此地では先づ重立つた旅籠屋へと辿りついた。どうか一夜の宿を、と如何にも自信の無いといふ口調で頼んでは見たが、宿屋は既に滿員、それにまた主人はこんな客はあまり泊めたくも無いのだから、更

に村はづれの旅籠屋へと指圖してやつた。

前よりも一層びくついて行つたが、女はやつと其宿屋を尋ね當てて戸を叩いた。もとより宿屋とは言ふものの、嚴格に言へば舟夫のよく來る酒店ぐらゐの所である。女主人が出て來て、さも不審さうな眼付で、じろ〱と今這入つた女の頭から足の爪先まで見るのである。これは何でも監獄から出たばかりの女だなと確かな所を嗅ぎつけて、遂に拒絶つて了つた。矢張り寢室が無いと云ふのを口實に。

女の方では强ひてとも言へず、這々の體で首をうな垂れて出て行つた。自分を疎外するこの世間を憎しと思ふ念は胸の底に湧きもするが、さて仕方もない。ラングルまではずつと徒歩で行かなければならぬ。

日の短い十一月の暮だ、森を貫く薄黑い一條の道路、まもなく益々暗くなるその闇を女は辿る。吹きすさぶ北風に散る木の葉は、地上にうづだかく、空にも舞ふ。

ああ幽囚坐業の六年、いまは歩むすべをだに知らぬ。膝の關節は硬く、木履に慣れた足は新しい靴に締め付けられたやう。まだ二三里とは行かないうちに肉刺が痛み出す。女は既う疲れ切つたのである。今は力も盡きて慄へながら、石の積んである上に腰を卸して、さて自ら問うた。自分は飢寒に迫られてここに死ぬのであらうか、この夜の闇のうちに、この骨に徹する朔風にさらされて。

女が淋しい路傍に坐つた時、風のまに〳〵忽然として聞くともなく聞えたのは歌の聲。歌ふといふよりは寧ろ口ずさむが如きかすかなる低い調である。ぢつと耳を澄ますと、それは兒守歌の單調な聲であることが分つた。

『ブルトンの女』は立ち上つて、聲する方へと歩んだ。徑の曲り角のところに木の間をあかく照らす一點の火光をみとめたが、五分間ばかりで女は泥壁の或賤が家の前に來た。屋根は芝土で葺いて後方は巖角で支へたものだ。光はその一方口の窓から洩れてゐる。

臆しながらも勇を鼓して、遂に戸を叩いた。歌ははたと止んで百姓女が戸のところに出て來る。年輩は『ブルトンの女』と同じくらゐであるが、苦勞の所爲か既うやつれて、且は老けても見える。短い上衣の裂目からは日に燒けたどんよりした皮膚が見えて、あかい髮の毛は見すぼらしい毛皮の帽の下に亂れた儘である。常ならぬ顏附の客人を驚異なといふ風に、冴えぬ眼でぢつと見つめてゐたが、

『今晩は。……何か御用で？』と、手に持つた粗末な洋燈をかざして百姓女は尋ねた。

『もうすつかり疲れて了つて、それに町までは道程も餘程あるのですから、どうか若し今晩だけお泊め下さいますなら、まことに有難い仕合せで……。實は懷中に持合せもありますから、相當のお拂は致しませう』と言ふ『ブルトンの女』。その聲にはかすかな啜泣の音さへ洩れた。

しばらく躊躇つてはゐたが、遂に

『お這入りなさい』
と答へた。更に言葉を繼いで、
『まあ何故オウブリイヴに泊らなかつたのです？』
と訊くのは、疑惑といふよりは寧ろ好奇心からであつた。
『はい、誰も泊めては呉れませんので』と、女の碧い眼は伏目がちになる。『と云ふのも、お見かけ通り、監獄から今出たばかりの者で、信用して下さる人もありませんので』、と良心は鋭くも胸を刺すのである。
『はい、まあ宜しいからお這入りなさい。私も長の歳月、苦ばかり見て來た者ですから、何とも思や致しません。まあこんな寒い晩に他人を戸外に棄つて置くなんて……。さあ、藁の臥床でも拵へてお上げしませう。』
百姓女は物置へ行つて枯れた藁を持ち出し、圍爐裏に近い隅の方に敷いた。
『お獨身ですか？』
と『ブルトンの女』は臆しながら尋ねる。
『はい、ことし七つになる娘と二人きりで……。わたしは森で仕事をして、それでまあやつと生計を立ててゐるやうな始末で……。』

『ご亭主はお亡くなりでしたの？』

『はあ』と女の答は簡單である。『娘は可愛想にもう父親が居りませんのです。人銘々みな苦勞は絶えませんのね。……さあお床が出來ました。夕飯の時に殘つたお薯が二つ三つあるだけで、何をお上げしたいにも他にありませんから。』

この室との間を板で隔障つた、むかうの暗いところから子供の泣聲が聞えたので、言葉はここで途切れる。

『では、おやすみなさい。こどもが慴えますから、わたしは彼方に參ります。どうぞごゆるりと。』

洋燈を持つて女はむかうの室に立ち去つた。あとは眞暗である。

『ブルトンの女』は薯を食べてから藁の床に身を横たへたが、目を閉ぢようとしても更に眠られない。彼方で母親が子供に囁いてゐる低い聲が隔障越しに聞える。客の來たのに目を醒ましたきり再び眠らうとしないのを、抱き上げては搖かし接吻して頻りにあやして居る。あどけない子供の話聲は、奇しくも『ブルトンの女』の心を動かすのである。

嘗て産んで間もない嬰兒を殺して獄裏の人となつた女の胸に、奥深う潜んだる親ごころは、恩愛のこのさまを見て、今さすがに湧然として起り來らざるを得ない。嗚呼もし惡事を爲なかつたならば、自分の産み落したあの子供も、今はちやうどここの女の兒と同じ歳ごろだらう、と獨り思に沈むので

ある。これを思ふにつけても隔障越しに聞える幼い聲は、女の腹の底までも震慄させる。恩愛慈悲の情、いまは殘忍の心に湧いて、彼女は泣かんとするのである。
『さ、はやくね。ちやつとお眠みよ。いい兒になると母ちやんが明日、カトリン樣のお祭に連れて行つてあげるよ。』
『さうよ。』
『カトリン樣つて小いちやい女の兒のお祭ぢやなくつて？　え、母ちやん。』
『カトリン樣は、ちいちやい者に玩具を下さるんだつて。それはほんと？』
『さうよ……時々はね。』
『何故我家へは下さらないでせう？』
『あまり遠いのと、そして貧乏だから。』
『ぢや、お金持にだけ下さるの？　何故でせう、母ちやん。わたしだつて何か玩具が欲しいわ。』
『はあ、いつかまた下さるよ。いい兒になつておとなしくお眠み、そしたらね……。』
『さう？　ぢや寢ませう。寢たら明日は何か下さるのね。』
しいんとして聲もなく、すやすやと眠る息の音のみ高い。母子共に今は眠に入つたのである。眠られぬは獨り『ブルトンの女』。刺すやうな、またやさしい情愛が胸も裂けよと苦しめる。過ぎし日に絞殺

した自分の幼兒を、かくまでも强く深く思ひ入つたことは未だ曾てない。遂に夜明までそのまま女は悶へ續けた。

夜が明けはなれても母子はまだ熟睡してゐる。『ブルトンの女』は此時そつと家を拔け出して、急足でもとのオウブリイヴへと行つたが、町はづれに來るまで少しも步調を緩めなかつた。さて一つの街を今度は徐々と步きながら、店の戶ごとに出てゐる看板を細かく見ながら進む。遂にその注意は或一軒の店に向つたらしい。あわただしう雨戶を叩くと、內から人が出て戶を開けた。

これは小さな吳服店で、ほかに少しばかり玩具も賣つてゐるのだ、何れも皆古つぽけた代物。羊小舍、ノアの方舟、それに紙人形、先づさう云つた物ばかりである。『ブルトンの女』はそれを悉く殘らず買ひ取つた。代價を拂つて出て行くあとを、店の者は驚いて見てゐる。

も一度あの賤が家へと、もと來た道を引返へす時、人あり、むずと女の肩を捉へる。振りむく途端面と面とを合はせて女は慄然とした。それは巡査である。放免されたる四人は中央監獄の附近に留まるべからずと云ふ禁令を、あはれや彼女は全く忘れてゐたのである。

『この邊でぐづつく事はならん、早くラングルへ行くべき筈ぢや。さあ早く。』

と嚴重に巡査は追ひ立てる。

辯解を試みても何の甲斐もなかつた。忽ちにして巡査は馬車を傭ひ、女を縛してそれに乘せた。手

綱を取るや、馬にひとあて。

凍つた道を轢つて馬車は走る。あはれや車上に坐つた女が失望の色は面に溢れてゐても、痺れた指にはまだ翫具の包みを離さぬ。或角を曲るとき、森を貫くさきのあの道路を見ては、さすがに心は飛び立つおもひ、實はこの向方に住む女のために用達しに行つたわけ、どうぞ暫くここに車を止めて下さい、と女は哀願する。固より腹の底は氣だてのやさしい此巡査は、女のあまりに熱心な願望を否とは言ひかねて、馬をとある木につなぐや、二人は徑をかなたへと行つた。

賤が家の前であの母親は薪を伐つてゐたに。巡査に連れられた昨夜の客人を見ると、ぱつたり手を止めて愕然として立つてゐる。その腕はぶらりと垂らした儘だ。

『や、孃ちやんはまだお寐つて？』

はあ、だけれど……。』

『この翫具を持つて行つて、そつとお臥床のそばに置いといて下さい。カトリン様が下すつたんだからつて。實は之を買ひにオウブリイヴに引返へしたんですが、さうは出來ないんださうで。今ちやうどラングルへ引致られて行くところです。』

『あらツまあ！。』

かれらは家に入つて小兒の臥床に近寄つた。『ブルトンの女』はその護送者の直ぐ後に隨いて行つ

て、蒲團のまはりにノアの方舟、紙人形、羊小舍などを撒き散らして置いた。身をかがめて、眠つてゐる小兒の素肌の腕に接吻した後、さて眼を拭いてゐる巡査を顧みて言つた。

『ぢや、參りませう。』

猩々物語

（英、キプリング作）

猩々は、羊小屋にしばり付けた大きな鐵檻のなかで文句を言ひ出した。其夜は息もつけぬ暑さで、ハンス・ブライトマンと自分とが、夜具を船首の方へと引つぱつてその前を通ると、奴は目をさまして無暗にしやべつた。元來これは馬來群島のどこかで捕られて今から英國へと渡り、一人前一志といふ見世物に出されるのだ。もう四日間といふものは藻掻くやら、叫くやら、檻の重い鐵棒を扭るやら、まるで休みなしで、或ラスカア人の水夫などは、うつかりその毛だらけな大きい足の達く邊まで近寄つて、あはや一命を失はうとしたことすらあつた。

『おい、貴様のやうな奴は、ちつたあ船にでも醉へばいいのによ。そんな小つぽけな世界で我儘が過ぎらあね』、とハンス・ブライトマンは檻のそばに立ちどまつて、猩々にかう言つた。

猩々は何心なく腕を鐵棒の間から外へ滑らした。忽ちにしてそれを蛇のやうに、この獨逸人の胸へ向けて突き出すとは誰も思はなかつたらう。寢衣の薄い絹は裂かれた。が、ハンスは別段氣にも掛けず後しさりして、船の眞近くにぶら下つてゐるばななの實を一房ちぎり取つた。

「わが儘が過ぎらあ、」かう言つてハンスはばななの皮をむいて、檻のなかで絹をずた〳〵に引裂いて

ゐる畜生にくれてやつた。

　自分等は船の進行と共に吹いて來る風に當らうとて、船首のかた、ラスカア人の寢てゐるなかへ臥床を設けた。海は一面に煙立つ油のやう。唯前方に當つては、それが燃え立つて陰暗たる焰をなし、暗中に沒するのである。數哩のかなたは全くの暴模樣、雷光のきらめくのも望まれた。船中の牛は暑さと、檻の中の猿の惡臭になやまされて、折々ものうげにうなつてゐる。船橋からの、時間ごとの指令に應ずる船首の見張番の聲が、またこれとちやうど同じ調子に聞える。機關の蹈みつけるやうな音は恰も手に取る如く、灰搔きが海水に當るごとにその音は靜かな響を遮るのである。ハンスはわが傍に身を横たへ、寢がけの一ぷく、先づ煙草に火を點じた、これが抑も話のはじまりである。此男、聲は波しづかな海のやうに物柔かで、話の種の無盡藏なこと、これまた海の如しと言ひたい位だ。それもその筈、職業といへば一生世界中をあちこちと流浪して、蘭だの猛獸だの又人類學の標本などを採集して、獨逸や亞米利加の商人に賣り附けるのだ。自分は此男の話聲の上り下りと共に、暗中に輝いてはまた消える煙草の尖の火を見つめてゐたが、いつの間にかうと〳〵眠らうとした。猩々は森林の自由な天地の夢におそはれて、さながら地獄へ落ちた精靈のやうに叫び、檻の鐵棒を狂氣のやうに拙り初めた。

『彼奴がいま檻を飛び出さうもんなら、それこさあ、とても私らの命は助かりませんね。頻りに號い

てゐますが、一つ奴を號き止ますところをお目に懸けませうか』、とハンスが靜かに言ふ。

猩々の號き聲が少時途絶えた折、蛇のしゆうッといふ聲をハンスは眞似たが、如何にも餘り眞に逼つてゐるので自分などは殆ど飛び立たうとした位だ。ながながと續いたその凄慘たる聲が甲板に鳴り渡ると、例の鐵格子をねぢる音ははたと止んで、猩々はただ恐れに恐れて、がた〳〵慄ひの有樣であつた。

『これで號き止んだでせう。このやり方は、私が伯林の人たちに賣るため小猿を獵り集めてゐた頃、はじめてモグウン・タンジョンで覺えたんで、一體この世界で猿を恐れない者は蛇ばかりです。だから私が彼奴に向つて蛇の眞似をすると、直ぐに靜和しくなるんですな。彼奴はあの小つぽけな處であんまり我儘が過ぎるんでさあね。が、これが一體猿の持前ですからね。あなたお眠みですか。もしお聞きなさるんなら、とても眞と思へないやうな話を一つお聞かせしませうか。』

『どんな話だつて、廣い世間にわたしの信じないといふなあ、まあ在りませんよ』と自分は言ふ。

『お信じなさるなら、それだけ物事も解るといふもんですがね。それぢやまあ試しにお話ししませう。以前千八百七十九年か八十年頃でした、私が小猿を獵り集めてゐたのは、あの群島のなかの或島で――ちやうど彼處の暗い所あたりで。』と言ひながらハンスは南のかたニユウ・ギニアの方を指さした。『それはもう小猿を捕るよりか赤鬼を集める方がよい位なもんです。人間の拇指を喰ひ切らんで

ゐると、いつも懷郷病で死にかけるといふ代物ですからな。元來奴等は精神の發達を中途で停められたものですから、どうしても不完全なんですね――そしてわが儘が過ぎるんです。それから私は一年ばかりもそこに居ましたうち、ベルトランといふ男と知己になつたんです。これは佛蘭西人で極の好人物、まあ心底からの博物學者ですね。何でも世間の話では、逃亡した犯罪人だつていふ事ですが、そりや如何でもよしとして、兎に角まあ博物學者でした。此男が森のなかから獸を呼ぶと皆やつて來るんですね。それで私が、君はどうも新植民地に出たアシシの聖フランシス樣だねと言ひますと、その男は笑つて、まだ魚類にお說教をした覺えだけは無いよ、なんて言つてました。そして捕つたのは皆あの海參と交換に賣るんですな。

『まあ獸飼ひの王とでも言ふべき此男の家に一匹大猿を飼つてゐましたが、ちやうど今あの檻のなかに居るやうな奴で、こいつ自分ぢや全く人間だと思つてゐたんです。まだ子共の時分に捕つたんで、ベルトランのためには全く息子にも兄弟にもなるんで、滑稽芝居の役もするといふ風でした。檻の中なぞには居ないで、ちやんと家の内に一部屋構へて、臥床もあればしいつもある。その上で臥て、朝になると起きて煙草を吹かす。食事もベルトランと一緒にするんで、それからまた見てもぞつとするのは、互に手をとつて散歩するんです。何んとまあどうです。畜生ちやんと椅子にもたれやがつて、ベルトランが私にからかつてると奴笑つてるんですね。こりや既う獸ぢやなくて立派な人間で

さあ。奴がベルトランに話をすると、あの男の方でも猿の話がちやんと解る。こりや實際私が見たんです。奴いつも私には丁寧にするんですが、ベルトランとばかり長く話をして、奴に一言も口をきかないでゐると御機嫌を損ねる。大きな前足でまるで小兒でも遇ふやうに私を引きのけるんです。實際あれでは獸ぢやなくつて全くの人間ですね。こりや私があの男を知つてからまだ三月と經たないうちに見たんで、ベルトランもそれは見てゐたんです。このビミといふ猩々は大犬のやうな齒や、青い齶に煙草をくはへながら二人の話を聞いてゐて、それが立派に解るんでしたよ。

『私はおほかた一年もここにゐて又ほかの島へも行き、時には猿を獵つたり、蝶類や蘭などの採集もやつてゐました。或時のこと、ベルトランが申しますに、自分は大變よい娘を見付けたから、結婚しようと思ふんだが、如何だらうといふ話です。固より私が結婚するといふ譯ではなし、別に何とも言はずに置いたんですが、それからベルトランは出て行つて直ぐ求婚しました。その娘といふのは佛蘭西人の雜種で、大變な美人でしてね。おや、あなた煙草の火をお持ちですか。で、そりやまあ大變な美人でしたよ。それで私は唯これだけ言つたんです。「ビミの事は君考へたんかい？ 僕が君に話してゐると奴僕を引きのける位だもの、細君にはどんな眞似をしでかすか知れやしない。隨分搔き裂いて殺し兼ねまいよ。僕が君なら先づビミを剝製にして妻にやつて、結婚の祝ひ物にするがね。」一體、猿の事に就いては私はいくらか此時までに聞いてゐたんです。で「殺すのか」つてベルトランが尋ね

ますから「あれは君のものだ。僕のものなら今銃殺して了ふがね」って答へました。
『言つてゐると、私の頸の後の方にビミの指先が觸るのを感じたです。どうでせう！ 奴は思つてる事をこんな擧動で示すんですもの。先づ視話法といふ鹽梅に全く無言でその意を語るんですね。毛だらけの腕を私の頸にまはして、この腮をぐつと突き上げて私の顏をのぞき込むんです。今の銃殺の話が奴に解つたと同じく、この擧動の意味がお前にも解るかいと言はぬばかり……。
『それにベルトランはこんな事を言つてゐるんです。何うだい君、そんなに懷いてくる奴を殺す氣になるのかね。獨逸人てえ者は無情な者だ。
『私はもうビミとは仇がたきだと思つて居ました。奴が指を私の頸の後に觸れたのは、暗に殺すぞといふ意をほのめかしたんです。次の日にビミに會つたとき、私は帶に短銃を挿んでゐたものですから、奴ちよつとそれに觸つて見るんですね。で、銃後を開けて丸の込めてあるのを見せてやつたです。ところが奴、森のなかで小猿の殺される處をかねて見てゐるもんですから、直ぐ了解つたんですね。
『で、ベルトランは遂に結婚して、ビミの事なんざあ悉皆忘れたんですか、彼奴は獨り濱邊を飛んだりはねたりして、腹の中にはなかば人間の根性を持つてゐたです。見ますと跳びまはるやら、大きな木の枝を取つて砂地を打つやら、終には墓のやうな大穴を造り出すといふ騷ぎ。で、私はベルトラン

に言ふんです。「何は兎もあれ、先づビミを殺しちまひ給へ、嫉妬ですつかり氣が狂つてゐるんだもの」。

『するとベルトランのいふには「なに少しも狂ふちやゐないよ、妻に懷いて能く言ふ事を聞くんだもの。命令ると上靴を取つて呉れるといふ位なんだ」なぞと澄まし込んで、あちらの間に居る細君を見てゐるんです。そりや如何にも美人でしたね。

『「君は一體猿の性質を知つてるんか。君が話をしてやらないからビミがあんなに砂の上で狂ひ廻はつてゐるのは、能く解つてゐる積りかね？ 家の方へやつて來るとき一思ひに銃殺し給へよ。どうもあのぎらついた目つきは確かに殺氣を帶びてる」つて言ふと、ビミは恰度の〱家の方へやつて來たんですが、目つきは穩やかで全くそんな光も見せない。そりやなか〱狡猾い奴、細君の上靴まで取つてやるといふ風ですもの。ベルトランは振返つて私に言ふんです、「僕はもう十二年間も彼奴を知つてゐるが、君は僅か九箇月位でその僕よりも能く彼奴を知り拔いてゐると云ふのか？ 子を殺す親があるものか。まあ考へても見たまへ、彼奴は僕が育てたんで、もう自分の兒も同然だよ。もう君そんなくだらない事は妻にも僕にも言ふなあ止して呉れ給へ。」』

『翌日ベルトランは私の宅へやつて來て、標本入れの本箱を造る加勢をして呉れました。その間しばらく細君をビミと一緒に庭において來たといふ話でした。箱も早く出來あがつたもんですから、「どう

だ、君の宅へ行つて一盃飲まうぢやないか」と私が言ふと、先生笑つて「ぢや來たまへ」と言つたんです。

『細君は庭に居ませんでした。ベルトランが呼んでも、ビミも來ず細君も出て來ませんでした。そこで寢室の戸を敲いて見るとぴつしやり閉めたつきり錠が卸してある。ベルトランは私の方を向いて顏は眞青になつてゐるんです。それから私が肩で戸を打ち破つて、見ますと屋根を葺いた藁は裂けて大穴が開いて、そこから日光が床の上へ這入つてるといふ始末です。まあ屑籠のなかの紙やら卓の上に骨牌の散らばつたやうなもの。全く細君のすがたは見えず、それはもう實際室內には婦人らしい者も居ないんですね。床の上には屑がある、たつたそれつきり。私は非常に心配したんですが、ベルトランは暫らく床や壁の上にあるもの、屋根の大穴なぞを見てから、にや／＼笑ひ出すんですね。やあ、こいつあ先生氣が狂つたなと知りました。聲も擧げなければ祈禱もせず、唯無言で戸口に立つて獨り笑つてゐる。しまひに言ふには「妻がこの部屋へ入つて錠を卸した。すると畜生、屋根を破つたものだね。ちえつ、さうだ、それにきまつてらあ。まあ屋根でも修繕して、ビミの來るのを待つて見るさ。彼奴きつと來るに違ひ無いんだ」。

「それから部屋もちやんと修繕をして、十日間其家で待つて居たんですが、その間に一度か二度ビミが森の方から少許やつて來かけたのを見ましたが、何がさて自分に惡事を働いた覺えがあるもんです

から恐れてるんですね。ちやうど十日目です、ベルトランが呼ぶとやつて來ました。濱邊を跳びながら手には長い黑髮を持つて、音をさせて來るんですね。ベルトランはそれを見て、卓の上でコツプでも破つたやうに「チエッ」と笑つて居るんです。ビミが近寄つて來ると、聲を極やさしく只獨りで笑つて居るんです。ビミは手も觸れさせないもんですから、三日の間といふものベルトランは頻りにお追従をしてゐたですが、やつとの事、しまひにビミも私共と同じ卓で飯を食ふやうになつたのです。手に持つて居る髮の毛は黑々として、而もその手の上に乾いた血がついてゐるんです。ベルトランは頻りに、葡萄酒に水を割つた奴をビミに飲ませて、たうとう猩々を醉ひつぶしちまつたのですが、それから――』

ハンスは、煙草を吹いかすのを止めた。

『それから？』と自分も言つた

『それからベルトランはビミを手打ちにするんだといふので、私だけは濱邊へ散歩に出かけました、殺すのはベルトラン自分の仕事ですからね。家へ歸つて見ると猿は死んでるし、ベルトランはその上になつてこれも死んで居る。しかも矢張りにたと笑つて、さも滿足の體でした。一體猩々の普通の力量は、御承知の通り人間七人以上ですのに、ベルトランは見事、刄物も持たずに手で殺したんです。それがどうも奇體で……。』

檻のながでは例のまたひどい叫びが始まつた。
『えい！　また奴め、あの天地で我儘を張りをる。こらっ静かにしろい！』
ハンスが、しゆうッと長く氣味わるい聲を出すと、檻のなかであの大きな獸の震へて居るのが聞えた。
『然し何故またあなたは、ベルトランが殺されッちまふのを構ひもせず加勢も爲なかつたのです？』
と自分は訊いた。
ハンスは眠らうとして泰然を身を横たへながら言ふ。『そりや、あの通り屋根に穴のあいた室を見てから生きてゐるなあ、私にだつてあまりぞつとはしませんよ。況やベルトランは亭主ですものね。さあ、おやすみなさい。』

母親

（英、キイダ作）

若しや寢すごして時を外してはといふ懸念で、母親は遂に臥床に入らうともせぬ。勿論生れてから毎朝一番鷄と共に起き出でるが習ひの身ではありながら、今夜に限つて寢過すといふ事が、どうも氣がかりでならない。

『あなたもお行でなさらんか』。

と亭主に向つて言つたのはもうこれで百遍目である。その返事には、

『いや、おれは止さう。なるほど悴も可愛い奴ぢやあるがの、今時まあ山越え十里の道をすたこら出掛けるにも當らない。收穫は未だ濟まないし、それに暦で見ると間もなう嵐も來るんだから』、と飽くまで動かうといふ氣色さへない。元來彼は物靜かな好人物、唯もうせつせと働くばかり。金も使はず泣言も言はぬ男だが、物の感じが鈍くて、情は半ば眠つて居るといふ風。これも貧乏と過勞の致す所であらう。自分の息子のダニエロが雲と立つ埃のなかを通つて行く、それに會ひたさにわざ〳〵仕事を一日休んで遠いところまで出かけるなぞは、抑も何のためだか此男には解し難いのである。一體女といふものはさういふ狂じみた事をやるもんだなどと、男はえらい者だと言はぬばかり、心地よげな

憫笑をさへ湛へてゐた。

『お前、わざ〳〵出掛るなあ馬鹿々々しいや』と言つても、女房の方は矢張り行く氣で居る。兵隊はヺルテラ郡の、二十五里ばかりも離れた所に陣取つて居て、往返の行軍にはベルヷアといふ峠を通るだらうが、女でも其處までなら行かれる。そしてみな正午には此處へ停止つて午餐を喫ふだらう、と實際は分らないが少くともまあ斯ういふ噂であつた。だから母親は、それなら是非そこまで行つて見て來たいものだ、と一心に思ひつめたのである。

といふのも自分の息子――しかも長男がその隊のなかに居るからだ。髮のあかい、靑眼がちの柔和な美少年ダニエロが、一年半前にその生れ故鄕の城下を出て、他の新兵と共に入營してからまだ一目も會はぬ。唯穢げな紙片に蚯蚓の匍うたやうな手紙が一度か二度は郵便で來た。それを母親は坊さんの所へ持つて行つて讀んで貰ふと、私は達者ですがお母様もどうか御無事で、といふ文句を聞かせられた事がある。一年半の間にわが兒の消息といつては唯これのみである。それで、いま山越えの路をはるか軍隊のとどまる所まで行つて一目會ひたい、と云ふのが亭主には不審なのである。

『親爺さんといふ者はつまらん者での』と輕蔑して言つて居た。

この夫婦はほんの水吞百姓で、少しばかりの田地すら不毛た石だらけである。そのうへ地主といふのが酷な男だから、取り立てる事も苛いんだが、元氣よくこれに堪へて行く。からだは丈夫、力も強

い、それにまた子供等は從順でよく働いていつも達者だ。食ひものは固より粗末な麵麭に油と豆とを少し混ぜた位のもの。小川の水の外は何も飲まぬが、唯山間の淸い空氣は、山兎や野鳩を養ふ如くに、また彼等を養ふのである。

その家は沼地の片端にある石づくりの小屋で、北側は二三本の松の木蔭になつて、少しばかりの畠は南方に傾斜して居る。周圍はすべて戰爭で荒らされた蕭條たる樹もなき一帶の火山地方。住民は皆低く埋められたやうな風に、ところ〴〵凹くなつた谷間に在る小さな町は、さながら巨人の掌上に子供の玩具を載せたやうである。

彼等の生活は苦しくて飢餓に瀕するばかり、凶年なぞには命を繼ぐだけが中々の骨折である。が、みな情が厚くて生來快活な方だ。殊に母親と來たら一家中で一番の元氣もの、唯『お上の御用に息子が引つぱり出される事さへ無ければよいに』、とこればかりを獨り苦にして居る。息子どもが家に居て吳れる事、これだけが神樣に對し國家に對して、此女の唯一の祈願であつた。

いつも巡回つて來る旅商人の話には、軍隊はここから直徑わづか七里ほどの近い所を通るといふ事だ。それで母親は自分の息子の居る聯隊もこれと一緒であらうとは思つて居たが、父親の方は『その大勢な騷ぎのなかで悴がどれだか見分けが付くものか』と言つて居る。妻は笑つてゐた。なに五百人居らうが、五千人居らうが、否な、たとひ五百萬人居ようとも、自分の息子が目につかぬ筈があらう

か。
　教育や學問の力を借りて遠い距離の間をも橋渡しして考へ得る人には、一寸合點のゆかぬ事だらうが、實際あはれな無智の人たちにとつては、不在といふ事は卽ちこれ眞の無であり、また暗黑であるのだ。全く死んだも同然、音沙汰もなければ一道の光明がこの闇を貫くでも無い。息子は家を去つた。また直に歸るのだと他のものが何程言つて聞かせても、母親には、何時歸る事だか、何故であるのか、どうしたものやら一切解しかねる。國家といふものが彼を兵隊に取つた。國家！　何だか薩張りわけの分らないもの、これ以上を彼女は知らぬ。
　年に二度づつ、縫針だとかピンだとか紐など、種々の品物を賣りに廻はる旅商人のルッフォが來ての話に、『兵隊は皆彼處に居まさあ。騎兵に歩兵にそれから砲兵と、隨分立派でがす。貴家の息子さんにも會ひやしたがね。明日の正午頃あの聯隊はベルヴァを通つて、多分そこで暫らく休息する事にならうから、家へ左樣言つて吳れつていふ事でした、どうかお母樣に來なさるやうにつて。だから私も言つて置きやしたがね、道程もなか〳〵遠い、まあざつと十里、それにお母樣も昔のやうにお若くはなし、御存知の通り今は收穫時分だからつて言ひやした。それでも息子さんは、矢張りお母樣に來なさるやうにつて傳言でがす。だから賴まれただけ申しておきやすが、わたしや知りやせんよ。』母親の瘦せた打ち沈んだ面には熱心の色が現はれる。が、その仕事の手は矢張り止めずに頻りに豆を積み

込んで居た。

『お行きなせいと、そらあ私が言ふんぢやありやせんよ。多分どうもベルヴァを通る事は無ささうに思はれやすがね。士官てものはよくその間際になつて氣の變るものですから。が唯息子さんの傳言を頼まれたんです、ベルヴァを通るからお母様に來なさるやうにツて。』

『悴はどんな風ですか？　見たところは』と母親が訊く。

『ちつたあお痩せなすつたやうだ。が、元氣ですよ。別に弱つて居なさると云ふんぢやありやせん。』

母親は半白の眉毛の下から、ちらと鋭く商人を見る。

『あの兒はあまり丈夫な方ぢやなかつたが』といふ聲もかすかに、『どうも子供等はお腹が十分でないと、丈夫な男にやなりませんわい。』

『わかい者は食はしておきや幾何でも食ふものでさあ。が、息子さんは泣言なぞ私に一言も言つてぢや無かつた。』

『彼兒は泣言を言ふなんて男ぢやありません』と母親が言ふ。

ふと寢過しでもしたらといふ懸念のため、遂に臥床にも這入らず、麥藁を編みながらあちこちと歩いて居る。子供等と亭主とは既う眠に就いた。

七月の半ばだ、夜は短い。殊に滿月の折などは、全く夜の無いも同然、唯もう美しい明るい晝ばか

りである。

朝の四時が打つと、母親は戸の鎖(かきがね)を外(はづ)して出て行く。あとには皆の者が何時でも朝飯を食へるやうに、薄い冷かい珈琲と麺麭が置いてある。姉娘が粗末な錫の器で珈琲を溫める。みな一二杯づつ吸つて、それでかち〳〵になつた麺麭を濕すのである。

夜は明け離れた。家の周圍(まはり)の此處彼處に在る禿山に柔かい光線が射(さ)して、冷やかな安らかなといふ深い感じは、さながら寂然たるこの光景の上に祝福を祈るものの如く、平生は嵯峨たる石の坂も、この時刻には物柔かな奥ゆかしい美觀を呈して居る。雲は凹い處に漂うて、山と山の頂の間には白霧が内海の如くに棚引いた。

母親は背の高い瘦せた女で歳は未(ま)だ三十八、それが倍にも老(ふ)けて見える。髮は多いが既に霜を戴いて、赭(あか)ばんだ顏色に寄る年波のあとさへ著しい。輪廓は古代彫刻のすらりとした線で、その昔妙齡の美人であつたおもかげが、いま殘つてゐるのは唯これのみだ。熾くが如き夏、凍るが如き冬、春の嵐にも、秋の山かぜにも弄ばるる朽葉の如くに、吹きまくられし果ては打落されて、女らしき姿も失せた。草刈もすれば薪水の勞もとる。險しい石だらけの田を行きつ戻りつ犢(こうし)の後(しりへ)に耕す。かうして年中一日のやすみもなく働くのである。

あたりの靜かさ、淋しさにはよく慣れて居るから、恐ろしとは思はぬ。石だらけの丘の間、花崗(みかげ)石

や輕石の混り合つた小山の起伏する此邊に、生れて以來住んで居たのだ。西方に海があり、東方にタスカンの沃野が連なるは知つてゐる。が、親しく自分の眼では、未だ曾て故郷の山以外を見たことはない、この地方に僅かばかりの産物たる食用品のほかは、全く何ものをも知らぬ。この山間に住む人人の永久孤立の生活以外に、彼女の知るところは一も無いのであつた。

衣嚢には一片の麵麭を入れたが、岩のはざまにここかしこ泉のあるを知つて居たからだ。脇に鎌をぶらつかせて、見當り次第に草を刈り、歸路には肩に一束持つてかへる積りである。この女の癖として、一分一秒たりとも機あらばこれを逸せざらんとするのだ。けふ着たのはよい方の着物、上衣は鳶色の毛織で胸は黄である。その上に大きな粗い木綿の前掛を着けてゐるが、青い色は褪めて居た。

頭には何も戴かず、袖は肘のところまでまくり上げた。靴を手に持つのは遠路に損ふまいとの用心。併し愈ベルヴァの峠にさしかかる時は穿く積りで居る、悴の面目に拘はるからだ。靴といへば十年に一足買ふので、皮は丈夫だし底は木である。これも滅多には穿かない。大きな衣嚢に乾酪と小麥の麵麭を一片入れて、悴に與る積りだ。出來る事ならその外に葡萄酒も持て來たであらうが、山里の悲しさ、そんな物は見たくともありはしない。唯あの岩かげの松の間にある小さな教會で、儀式の折に使ふばかりた。

母親は平かな歩調で歩いた。これは一樣な早足で歩くのに慣れた人の常である。空氣は冷やかで、

海からはそよ〳〵と風が吹く。太陽の心地よい光は既う曉の暗い影を逐ひ拂つた。心に思ふのは唯息子の身のうへ。彼の今までの短い無事な生涯を思ひ浮べては、甞て自分の胸に抱いて居た昔を思出す。ちやうど圓い蒲團包みのやうな中から、小さい赭い手と熱心さうな濡れた赤い唇だけ出して居た事を思つて見る。

次には息子が滿十箇月ぐらゐの頃を思ひ浮べる。母親の腕を離れて、歩み初めの足も危げに、家の前の石つころの上をよろめく。また或時は梅の樹から落ちて脚踝を挫き、自分の膝に抱かれて啜泣しながら、ちぢれ毛の頭を母の腕にすりつけた事もあつた。

また初めてのお寺参の日を憶ふ。息子は小柄で、目のぱツちりした、姿のよい男だが肉づきは惡い。それも人數が多いのに食物が不足がちだから、子供等は常々飢ゑて居るせゐだ。その當日母親は一枚しか無い自分の木綿着物を切つて、襯衣と袴下を造つてやつた。ちやうどそれは夏の眞中、息子が教會の敷石の上を歩いて居ると、日はそのあかい髮の毛をがん〳〵照らす。教會は晝なほ暗い、唯小さい窓の間からは強い光線が射し込んで居た。

かれは始終善良な息子だ、從順で活潑で潔白な男。兄弟にもやさしければ親にも孝心だ、而して能くおのれの分に安んじて居る。然るに一たび國家が彼を母親の手より奪つて後は、消息は一切わからぬ。母子二人の間には劃然たる墻が設けられた。母親は唯腰掛の上に跪いて、聖母の畫像の前に息子

のため祈禱を捧げる外はなかつたのである。

實に二十一年の間、息子は母親のもの、彼のために親は苦勞もし、不自由も忍び、身をも犧牲とした。然るに一朝忽然として彼は無き者となつた。國家が彼を奪つたのである。人は何と言はうが實に殘酷だ、非道だ、言語道斷といふべきだ。母親のものであつた彼を奪ひ去つて、母子二人の間には暗黑の空隙を造つたのだもの。

しかし遂には息子に會へるだらう。彼は母親の來て吳れるやうにと旅商人に傳言した位だから、勿論忘れてはゐない。たとひ息子が行軍で炎天に汗水垂らして行くのを見るだけでも、母親にとつては、それだけで既に十分生き甲斐があるのだ。世界の端までも行く價値があるのだ。そして若し人が噂するやうに、行進を停めるか夜營をする事でもあつたらば、兩腕に彼を抱くだらう、彼の聲をも聞くであらう、まるで小兒のやうに顏の埃をも拂つてやるだらう『お母樣に來なさるやうに』とさう彼は言つたのだ。ああ可愛い者だ！ 彼も母を忘れてゐないのである。故鄕の家のあたり、岩間の徑をもなほ忘れて居ないのである。

日光は益々明るく照り渡つて、遂に白晝となつた。

段々と暑さは增す、曉方の色あざやかな光と朧の影は失せて、あたりは露骨に殺風景になつた。昔から此あたりで銅を採掘するのに岩を切り碎いた斷片が、今なほ堆く積まれて居る。自然のすがた

はこのためにいたくも傷けられたので、鑛山は餘程以前から不用になつてゐるが、荒らした跡だけは今に猶殘つて居る。

母親が行く道は常も同じやうな所ばかり、峨々たる岩や砂地の上に生えた草を分けて、見えるか見えぬ程の一條の道を辿るのである。此處彼處に山羊の群や、松の並木、寺の塔、それから驛の空屋などが見える。が、固よりこれらは遠きに離れてゐるから、此邊一帶の山里は實に蕭條として荒廢のすがたである。

その行く道は南と西の方へと連なる。もとより眞の道路ではない、人馬の通つた跡のかすかに殘れるに過ぎぬ。ラティン、エトラスカン、ゴオル人などの遠い昔から幾百年の間、このあたりの峠を越して、炭、石炭などを運んだ馬の行列が踏みならした蹤跡である。

幾哩行けども行けども人には遇はぬ。人家は稀に、道は依然としてかすかなる蹤跡を辿るばかりだ。遂に初めて人に遇つた。驢馬に乘つて前と後に嚢をつけてゐる老人だ。母親は直ぐ立ち止つて、自慢の事が言ひたさに數語を交へる。『これから悴に會ひに行くんです。隊と一緒にベルヴァを通りますから、私を呼びによこしました。』

老人がいふ、『やあ、そいつはお樂しみぢや。乃公もずつと前——若い時分には兵隊もやつたがの。まあ、おかみさん、機嫌ようして行きなさい。』

驢馬の跡が岩だらけの道を辿る、かすかなる音は遠きに消えた。斯くて母親は再びまた蕭條たる山里に唯の一人となる。此邊に住むものとては、唯蝦蟆か毒蜘蛛ぐらゐのもの。

暑さは益々加はる。跣足で踏む岩はさながら熱した銅のやう。蠅はぶん／＼飛ぶし、蛇は日なたぼつこをやつて居る。見渡したところ青いものは殆ど無い、唯あちこちに枯れかかつた松や、短矮た護謨の木が一二本もの淋しく立つてゐる。母親は既う路の惡いのと暑さとに疲れ切つたが、行けば行くほど胸は却つて浮き立つ思ひ、『ああ直ぐに悴に會へる。もう直ぐだ』と獨り口のうちで繰返した。

赫々たる日は頭上を照らして、巖の上は勿論、その間の平坦なぼこ／＼した土の上にさへ陰ひとつ無い。蚊は雲のやうに群がる、蠅も無數に居る。が、たとひ足は痛み體は疲れても心は樂しい。さうだ、先刻老人の言つた言は尤もである。悴の達者な顏を見に行くのは母親にとつて實に樂しみだ、と獨り肯く。

崖の間から小さい泉が湧いて、それが苔蒸した巖穴へと流れ込む或場所へ來た。母親は水を呑み固い麵麭を食つて暫く憩うた。

珍らしく一軒の家の傍を通つた。門口に止つて其家の者と語るに、得意の色は面に溢れる。

『悴の居る聯隊が今日ベルヴァを通りますので、私に見に來いつて言ふんです。多分彼處で止るんでせう。』

自分の息子が聯隊の列に入つて行軍するといふ此一事、母親にとつては女王の冠よりも尙更に貴く、また道に殉ずる聖者の苦しみよりも尙更に悲慘に感ぜられるのであつた。

ずつと遙かの彼方に黑いものが列んで見える。これが卽ちベルヴァの峠の頂に在る並木で、このあたりに在る唯一の木立だ。母親は遙かにそれを望み見て步を早めた。日は旣に中天にある。ああ軍隊が若しも其處に停らずして、峠を素通りしたらば如何であらうか。

あの旅商人も、停らないのかも知れぬといふ事を、旣に言つて居たのである。

これをおもへば脚は屈して戰慄くを覺えた。が、氣丈な此母親は恐怖の念に撓むことなく、其道を續けた。二時間餘りでやつと木立の端の處に達く。そこには小さな家が五六軒も固まつて、山羊の群やら、栗、樫などの木蔭にある草原、海岸の松の高い並木などが見える。ベルヴァの峠はその下にあるのだ。

今は物靜かな正午である。心地よげな松の木蔭へ下りて行くと、そこには山苺が咲いて居るし、ぜんしやん草も茂つて居る。母親はそれを物珍らしさうにながめた、勿論自分の住む家のあたりには花一つ咲かないからだ。

羊飼が一人苔のうへで假寢をして居たのが、今足音で目をさました。

『兵隊は峠へ來ましたか』、と尋ねる女が胸の動悸は肋骨に響く。

男は寢惚け聲で『先刻喇叭の音がして居たつけ。皆あすこで休んでるんだ。』

『悴もその中に居るんですよ』と例によつて自慢顏で、さつさとそれらを通り越して行く。自分の息子が兵士であるのは斯程までもえらい事なのだ。栗や樫の茂つて居るなかを半時間ばかりも降りて行くと、漸く峠の見渡せる所まで來た。

さうだ、如何にも兵隊は居る。白い麻の帽子、馬、大砲などが能く見分けられる。人間の團塊があちこちと動いて、劍なぞのピカ／＼するのや、天幕の黄味がかつた色まで手に取るやうだ。さうだ、如何にも兵隊が居るんだ。女は十字を切つてしばらく松葉の上に跪坐いて神に感謝したが、やがて立ち上つてまた下の方へと急いで行つた。

下り坂はまがりまがつて隨分ながい。谷の底は木で隱れて見えないが、そこまで行つて見ると聯隊はなほ休息して飯を食つて居る。早速目についた若い兵隊の一群が居るところへ行つて尋ねる、『私は彼の母でございます——あのダニエロの。どうか、悴の居る所まで連れて行つて下さいませんか。實は私を迎ひによこしましたので。』

情が迫つて聲は嗄れた。その指は前掛をつまんで居る。見ず知らずの人たちが大勢がや／＼居る前で女は慄へてゐるのである。ああ如何して息子を見つける事だらう？

今は力も盡きさうになる。あちこち色々の人に尋ねて見る。が、若い連中は皆顏を見て嘲笑つた

り、或は背をそ向けて取り合はない。笑ふのもあれば串談を言つたり冷かしたりするのも居る。彼からこれへと投り遣られて、遂には陣營を一周させられた。地上に轉がる兵糧嚢に躓いては、ぼんやり周圍を見つめて居る。

砲車を放した大きな野砲、馬具を着けずに繋いである馬。また食器だの、口の開いた背嚢、汚れた上衣などが紛然雜然たる有樣だ。皆が襯衣一枚になつて面白さうに騷いで居る模樣、いまはもう軍紀も何もあつたものぢやない。

隨分亂暴で騷がしいものだ。母親は近寄つて來ると、喧噪しいのとどさくさとで、目まひがして耳が鳴る。數かぎりもない大勢の人々、どれもこれも同じやうな五分刈あたまに脚袢がけ、そして皆揃つて小柄な體だ。ああ如何してこのばたばたして居る群集のなかで、自分の息子が目につくことだらう。

が、女は毫も屈しない。

遂に、外の者よりは辛抱のよい、寧ろ憫みの深い一人が言つて聞かせた。ここに居るのは砲兵三個中隊と騎兵が一聯隊。息子さんの名だけは聞いて居るが、それは後方の歩兵隊に居られる。此谷を下りて十町ばかりも行つた所に停つて居るとの話。母親は厚く禮を述べて、彼がために祝福を祈つて立ち去つた。既う四肢は硬くなるし、血管は張りつめて居るのだから、歩行は容易の事ではない。

しかし息子が確かに居るんだと聞いては、豫想するだけでも喜悦の色は面に溢れる。かれは通る人ごとに嬉しさうに話しかけた。今は足の痛みも身體の疲勞も一切感ぜず氣輕になつた。『ああ、悴は居るんだ、實際居てさへ呉れやそれで結構だ。』

女の衣嚢が膨れて居るのを見て邏卒が怪しむと、『家から麵麭と乾酪を持つて來て悴にやるんです』といふ。邏卒も笑へば自分も笑ふ。そして通して貰ふのだ。

一々聞いて見たり、じろじろ見あるくのには閉口しながらも、矢張り屈する色なく搜して行く。『私はダニエロの母ですが、彼兒が會ひたいつて言ふものですから、朝から歩いて參りました。何處に居ますでせう？』

或突き出た巖のかげ、峠を下りて少し行つに所に聯隊は居つた。白の服を着けた兵士が彼方此方に奔走して居るのが見える。少し隔たつた岩の間から湧き出る泉の水を運んで、兵隊は群がつてゐるが、さきの砲兵騎兵の隊のやうに賑やかではなく、物靜かな活氣のない有様。士官は皆一緒に一本松の蔭に立つて居る。皆の聲は低く打ち沈んだ調子で、憂の色さへ見えてゐた。女は臆しながらここまで來たが、疲れて熱した顔には猶希望の色が輝いた。此人か彼人かと見まはしては待ち焦がれながら、絶望憂慮のすがたである。しかし息子は見當らない。

遂に若い人たちが一團になつて居る處へ來た。皆寂然として唯、的もなく徘徊ながら、地上にあ

る何ものかを見てゐる。見れば此人達と同じやうな三人の壯者が、栗の大木の蔭で仰向きに横たはつて居るのだ。女は戰々〳〵これに近づいて見たが、何となくいふに言はれぬ胸さわぎがする。

『あの人たちは如何したんでせう、病氣なのですか』と女は尋ねる。

周圍に立つてゐる兵隊は低い調子の聲で、『いや、死んだんですよ、お主婦さん。行軍中に仆れつちまつてね、……まあ此暑さに十五里あるくんですもの。』

そばに近寄つて、地上に横たはる死體のうへに女は身を屈め、さて順々に顔の蔽物を取つて見た。かうして母親は今ふたゝびわが兒に會つたのである。

復讐（露、チェエホフ作）

可なり財産もあつて何不足のない、そして細君の若くて美しい、禿頭(はげあたま)のT――は頻りに骨牌戯(かるた)をやつてゐる。ある友人の家で、誕生日の祝を賑はす舞踏や骨牌會の折だ。

方外によい牌(ふだ)が手に入るので、よほど氣乘りのしてゐる模様であつたが、ふと思出したのは大分長いあひだ酒を飲まなかつた事である。彼は卓(テイブル)を離れて拔足差足(ぬきあしさしあし)、室を出て行つた。用心して卓の間を通りぬけ、まだ町の若い連中が舞踏に餘念もない一室をも通り過ぎた。

小さい戸(ドア)をぬけると、そこからは食堂へ出る。圓い卓の上にいろんな酒を入れた罎が列んでゐる。傍(そば)に山海の珍味うづだかく、青々した新鮮な芹を、さも美味(うま)さうに取り合はせたのがある。なかに燻(いぶ)した一片の魚肉を載せた一皿があつた。

T――は自分でヲッカを小盃になみ／＼と注ぐ。何だか演說でもやりさうな身振で手を動かして、一息にそれを飲み干した。ちよと額をしかめる。肉叉(フオオク)を取つて一片の魚肉に手を着けようとしたが、――恰もこの瞬時、隣室(となり)から聞える聲がふと耳に入つた。

『私の方ぢや構やしませんわ。が、何時(いつ)にしたものでせうね？』女の聲である。

『妻だな。誰と話してゐるんだらう?』T――は聲の主を認めてから言つた。

『何時なりと貴女の御都合で、』と壁の彼側から深い豊かな調子が聞える。

『しかし勿論今日はいけません。それに明日も私は終日忙しいんですがね。』

T――は自分の友の低調聲を直ぐそれと覺つた。

「Dだな! 彼奴もか! どうして吾妻め、あの男を取り込んだらう?』

『さう明日は忙しいんです。』また聲が續いて聞える。

『それぢや、どうかお手紙を戴きたいものですがね。しかし文通はよほど大丈夫な方法を取らないといけません。どうも郵便ぢや危いですよ、私から貴女へ上げるのは、いつかには彼の老痴漢の手に這入りませうし、また貴女から下さるのも私の不在中にでも屆かうもんなら、吾妻が必定開封しますからね。』

『さうね、ぢや何うしたらいいでせう?』

『何かこれは新案を發明しなけりや駄目です。貴女の奉公人はとても賴みになりませんよ。間抜老爺め、女中や下男は旣うちやんと懷柔けてゐるに違ひないですから、うつかりすると欺される。どうです、骨牌戲の方は旨く行つてるんですか?』

『旨くつて? なあに、いつだつて負けばかりよ。駄目ね、あの馬鹿は。』

『骨牌には負けても戀には勝つか』。言つてD——は笑つた。『が、そりやまあよしとして、旨い策があるです。明日ちやうど午後の六時ですね。役所からの歸途に私が公園を通るんです、そこの監督官に約束があるんで。だから此時刻より少し前にお手紙をね、あの葡萄棚の左に大理石の甕がありませう、あれに投り込んでおいて戴きたいんです。』

『ああ彼處なら能く知つてますよ。』

『どうも新案で詩的でせう。それにあなたの方の痴漢さんや、吾家の妻なぞにも氣取られなくつて。どうでせう、いいですか？』

T——は更に一杯飲み干して、またもとの骨牌戲の席へ歸つた。かういふ祕密を發見したからつて、さまで驚きもせず、怒つてもゐない。妻の不貞の新しい證據を握つては、怒つたり騷いだりして罵詈や威嚇をやつたのも、今はもう昔の話である。今ぢやそんな事は思ひ切つた。しかし矢張り不愉快には相違ない。殊に『老痴漢』だの『間拔老爺』だのつていふ形容詞は、尠からず彼の癪に障つた。

骨牌の點數を記き入れながら、彼はこんなことを考へた。

『一體あのD——の奴め、怪しからん野郎だ。街などで遇ふと、さも親友らしい面をしやがつて、笑顏をつくつたり、近頃は如何ですなどと御機嫌を伺つたり、ちよと肩を敲くなんて眞似までしやが

る。そのくせ陰へまはるとあの通りだ、老痴漢だの間抜だのつて。』勝の方に一生懸命になると、益益さきの暴言が氣にかかる。

『臆病なのだ！』

鉛筆を折つて、腹立たしく彼は考へた。

『馬鹿な！畢竟初から、あんな野郎を相手にする氣がないからだ。左様でなきあ、目にもの見せてやるんだが。』

食卓に就いてからも、T――はD――の顔をぢつと見る氣がしない。其男はまた故意にでもするやうに、頻りに種々の問を發して、しばらくも彼を休ませておかぬ。お勝ちなすつたかだの、沈んでいらつしやるが何うなすつたなぞと聞く。殊に失敬極まるのは、親友といふ權利を濫用して、T――の細君に向つて、もつと旦那様を大切になさいよなぞと責める。すると細君も可愛げな目付をして亭主の方を見る。無邪氣な、わざとらしくない笑顔をしたり、洒落を言つたりする。誰が目にも此細君が夫を愛してゐないとは、夢にも思へぬやうにして見せる。家へ歸つても、T――は腹立たしくつて氣がいら〳〵する。結句これが獨りなら、恐らく自分を制してこんな感じを鎭壓める事も出來たらう。併し細君がお饒舌をしたり、笑顔を見せるたんびに、『間抜老爺』だの『老痴漢』だのつていふ結構な名稱が胸に浮ぶ。怒は鎭まるどころか、却つて益々昂ずるばかりだ。

『彼奴め、横面ひとつお見舞してやるところだが。畜生め！　衆人の前で辱しめて呉れるといいんだ』

と彼は思ふ。

また種々なことを考へて見る。彼奴を散々打負かして、それから外へ呼び出して飛ぶ鳥を射るやうに遣付けようか知ら。さもなくば今の地位を失はせるか。何か穢いもの――まあ鼠の死んだのでも甕のなかに入れて置いてやらうか。なあに、それよりも良いのは、妻の手紙を取り出して、代りに出鱈目の歌を書いて、可笑な署名でもして入れておくのさ。夜おそくまでT――は寝室をあちらこちら歩行いて、復讐の樂しさを夢想しながら僅かに氣を晴らした。すると不意に彼は歩を止め、はたと手を額に打つた。

『さうだ、さうだ。妙、妙！』かう言つて喜びの色は面に溢れた。

『これこそ素的だ。實に名案！』

細君が寝に就いてから彼は直ぐに机の處に座つて、大分長く考へた後、次の文句を書いた。わざわざ自分の筆蹟を見せないやうにして、文字の誤までもしてある。

『ドリノフ商店主人へ。

拜啓、本日（九月十二日）午後六時、貴下は市公園内葡萄棚の左にある甕中に金貳百留を御投入

可有之候。然らずば貴下は殺害せられ、貴下の寶石商店はダイナマイトを以て破壞せらるべく候』。

再び讀み返して、彼は嬉しさに夢中である。

『こいつは名案だ、』と嬉しさうに囁(ささや)く。

『第一等だ。惡魔にだつてこれ以上の復讐策は出まい。先づ商人が必定驚愕(びつくり)仰天する。早速警察に屆ける。すると巡査が木蔭に潜んで待つてゐると、――そらあ、一二の三と、奴さんお出でなすつた。手紙を取らうと思つて甕の中へ手を入れるが早いか、むずと捕(つか)まる。旨く申し開きをして仕舞ふまでが面白いところさ』。

彼は手紙に切手を貼つて自分で郵便箱へ持つて行つた。

面に心地よげな微笑を浮べて、彼は眠に就いた。こんな安眠を得たのは實際久し振である。

翌日目をさましてから前夜に爲たことを考へ出しては、また獨り嬉しさうにくす〱笑つてゐる。出勤の途中にも役所で執務の間も、微笑は瞬時も彼の面を去らない。D――が全く乃公の陷穽にかかつたことを知つて、恐れる處を想像し、胸中に描いて見ると嬉しくて堪(たま)らぬ。

時計の針が六時に十分前といふ處を指すと、彼はもう居ても立つても堪(たま)らなくなつた。早速公園へ飛び出した。目指す敵の周章狼狽を、前に見て樂しまうといふのだ。

『ああ!』と巡査に遇つて彼は獨語つた。

丁度六時を打つと、D——は例の甕の方へ來る道に現はれた。實に意氣軒昂たるものである、煙草を吹かし口笛を吹いて。

『そおら、老痴漢（いぼれ）の間抜（まぬけ）が何うして呉れるか見ろ！』T——は窃かに毒々しく囁いた、『そおら、見ろ』。

D——は甕に近寄つて、ぢつとその中へ手をさし入れた。T——は前方に身を屈めて、熱心にその一擧一動を注視する。

D——は甕のなかから、小さな包裝（つつみ）を引つぱり出したが、仔細にそれを見て肩を聳やかした。今度は躊躇（ためら）ひながらも開けて見て再びまた肩を聳やかす、そして非常に驚いたと云ふ顔附で在中物（なかのもの）を見つめた、——正に百留（ルウブル）の手形が二枚！

D——は稍暫らく手形を見つめてゐたが、遂にまたもや肩を聳やかして、衣嚢（ぽけつと）に手形をねぢ込んだ。そして口のうちで、『ありがたいツ！』

この一語T——の耳に入るや、彼は忽ちにして歩を寶石商の店に向けた。力もなき怒に看板めがけて拳を振つた、そして呟いた。

『臆病者め！ くだらねえ！ この腰抜けめが！』

夢なりしか（佛、モオパッサン作）

もの狂ほしきまで、われはかの君を戀ひたり。

そもいかなれば人は戀ふるにや。戀ふるは何の故ぞ。げにも奇しきかな。この世にして見るもの唯ひとつ、こころに思ふも唯そのひとつ。胸のなかなる願ひ、さては口にのぼす名さへ、またこの一つの外はあらず。あはれその名、絶ゆる間もなく心に浮び、靈の底より湧きくる水のやうにのぼりきて、口にかたり、繰りかへしてはまた繰り返し、祈禱のやうに、いづくにもささやきて、やむことを知らず。

ここに語らん物がたり一つ、戀にはいつも同じき唯ひとつあるを。かの君に會ひてわれは纏ひぬ、ただこれのみ。さても或一とせがほどは、われかの君のなさけに、その愛に、双の腕に、また纏へるきぬに、その言の葉にこそは生をたもちけれ。かの君より來れるもの、何くれとなくわが身をつつみて、からみ鎖しつ。時は日か夜か、この身いま生か死か、人の世にありやなしやの、そのけぢめ分かぬまで。

やがてかの君は逝けり。如何にしてぞ、われ知らず、竟に知るところなし。さはいへど或ゆふべ、

雨ふりしきるに、濡れ衣まとひて歸りこしその翌日に、しはぶきしげく、七日ばかりも打ち續きて、さて病の床にふしぬ。何事なりしとも今記憶なし。ただくすし來り、もの書きて去りき。藥もて來て婢ども飲ませぬ。かの君の手は熱し、かしら燃ゆるがごとく、まなこ輝きて憂愁あり。われもの言へば、いらへありたれど、われらが語りしこと今はおぼえず。すべてを忘じ果てぬ、何事をも知らず。遂にみまかりぬ。わが耳に殘れるは、臨終のまぎは、かすかに脣もれし弱きその吐息。看護のをんなは獨り、『われ知れり、ああわれ知れり』とぞ言ひける。

わが知るところはこれのみ。僧にあへば彼いふ、君がつまにやと。此ことば、さながらわれをさげすむと聞えぬ。かの君みまかりて、いま何人かこれを知るの權あらん。遂にかれを逐ひやり、なさけ深きほかの僧きたり、かのきみの事かたらへば、わが涙せきもあへず。

人はとむらひの事われに詢りたれど、その言へりしことわれに記憶なし。いた唯想ひ起すはそのひつぎ、釘うち込む槌の響。ああ神よ、大神。

かの君葬られぬ。うづめられけり、かの君、そのおくつきに。人々來れり――女の友どちなりき。われはそと逃れて走り去りぬ。走りて町を過ぎ、家にかへりつ。旅だちしは次の日なりき。

* * * * * * * * * *

旅より巴里にかへりしは、きのふ。

ふたたびおのが室――われらが部室。ふしど、家具など、逝きにし人のあとに遺しおく物かず〱を見しとき、新しき悲愁この身を襲へり。窓うち開き、身を街頭に投げんとする如くおぼえぬ。

かかる物のうち、かの君をかこひし四壁のあひだ。目にこそ見えね、その罅隙に、逝きしかの君が現し身の、數かぎりなき微分を宿すところに、いかで、もはや此身を置くべき、逃れんとわが帽とりあげぬ。戸口に行きしとき、わが過りし大鏡。おもへばかの君日ごとに出で行くとき、すがたをうつし、かむりより靴まで、よそほひ整ひて美しきやを見んとて、ここに置きたるもの。

わがはたと止まりしは、かの君がいくたびか姿うつしし鏡のまへ。いくたびもいくたびもうつししその姿、この鏡にぞ宿りたらまし。われそこに立ちて打ち顫ひ、まなこを凝らしぬ。そのかがみ平かに、幽にして虛空、かの君をそこに宿しけん、おもひみだるるわれの眼と同じく。

鏡をわれ戀ふるがやうに思ひぬ。手もて觸るればひややか。ああ回顧、かくもわれらをなやます悲しき燃ゆる恐ろしの鏡よ。

胸に在りしこと、おもひ浮びし事ども、またそのなさけ、その愛に映りたるもの、すべてをみな忘じ果つる人こそげにも幸なれ。ああわれのなやみよ、いかに。

みづから知らず、また、しかせんとも思はずして、われ家を出でて行きたるは、おくつきどころさ

してなり。孤墳あり。白き大理石の十字架にして、ゑりつけたることば、

『戀ひつ戀はれつ、遂に逝きぬ』。

と。

かの君ここに在り、朽ちて、このしもに。恐ろしきかな。地上にぬかづきてすすり泣きす。ここにとどまる事しばし。

日暮れなんとす。失戀に伴ふあやしう物狂ほしき願望われをとらふ。夜をここに明かさんと思ふなり。最後の一夜を夜もすがら墓上に泣かんわが願ひぞ。さりながら人や見ん、われを逐ふべし、いかにすべき。

われもさるもの、身を起して亡者どもの住まへるこの市をさまよひ始めつ、歩み行きぬ。われらが住まへる市に比しては、その小さきこといかにぞや。亡者は、さはいへど、生あるものよりも數はるかに多かるを。時を同じうして日を仰ぎ、泉を汲み、葡萄に酒を得、野に麵麭を求むる兒孫四代のものにこそ、大厦高樓の用はあれ。

亡き人の代々、くだりてわれらにおよぶ人類のかけはし、すべて殘すところ一物なし。地これを奪ひかへし、『忘却』これを消す。さらばよ。

墓どころのはて、ふと見ればわれはその最も古きところに在り。このあたり死して久しきものは、

既に穢土と混じ了んぬ。十字架さへ朽ち果てて、明日は新しく來りし者のここにや葬られん。薔薇は生ふるに任せ、老檜のかげをぐらく、愁色ある麗しの園生は、人の肉にぞ養はるる。

われは孤獨——まつたく獨りなりき。綠樹のうちに匐ひ、身ををぐらき枝かげにかくして待ちぬ。幹にしがみつくさま、破船のふなびと、板にすがりたるをさながらなり。

日くれ果てしとき、ここを出でぬ。亡き人々のみのつどへる此地をしのびしのびて、おもむろに歩みそむ。しばしが程さまよひたれど、かの君ふたたび見えず。腕ひろげて進み行き、手足もて、膝をもて、また胸にて、遂にはかしらをもて塚をたたけど、かの君見えず。手もて觸るるそのさま、めしひの道をさぐるにも似たりや。いしぶみ、十字架、鐵柵、さては金づくりの花環、しぼめる花たば、すべて觸れざるなし。刻みたる名を讀むに指もて文字を撫づるなり。ああ如何なる夜ぞ、いかなる夜ぞ。われ再びかのきみを見ず。

月かげなし。いかなる夜ぞ。墳墓二列、そのあはひなる小道のおそろしさよ。おくつき、ああおくつき、唯おくつきあるのみ。右に、左に、前に、まはりに、いづくも唯おくつきぞ。膝よわり果てて歩みかなはぬに、われ遂に墓上に坐しぬ。おのが胸のひびきのほか、なほ何ものをか聞く。なにぞ、いひ知らぬ混亂の音。ひびくはわが腦裡か、闇夜の界か、はた神祕の地下——ひとの屍に滿てる大地の底か。あたりを見まはしぬ。いつまでかわれ其處には在りし、みづから知らず。おののきて此身し

ぴれ、恐怖に酔ひて、あはや、われ叫びて死なんとぞしける。

忽ちにして、わが坐したる大理石片うごくと見えぬ。げにも動けるなり、さながら持ち上げたらんやうに。一躍、身はそば近き墓上にとびつ、今しもわが身を離れし石碑、直立したるがあり〳〵と見られぬ。亡き人あらはれき。骸骨なり。かがみたる背もて石おしやりたる、闇の夜なれども明らかに見られき。十字架上のことば、

『じやつく・おりばんの墓。享年五十一。かれ妻子を愛し、ねんごろにして心けだかかりけるひと。遂に大神のめぐみのうちにぞ逝きける』。

とありき。

亡きひと共いしぶみを読みて、道のべに、さき尖りたる小石ひろひ上げ、心こめてその文字を削らんとす。のこりなく、おもむろにそを刪り去りて、眼窩みひらき、そのあとをながめぬ。さきには食指なりし骨のさきもて、明光ある文字かきつく。さながらこどもらが燐のまつちをもて壁上に引きたる線のごとくに、

『じやつく・おりばんの墓。享年五十一。かれ無情、父の死をいそげり、遺産を得んことを願ひてなり。妻を苦しめ、子をなやまし、隣人をあざむき、鹵掠飽くを知らず。遂にみじめなる最後を遂ぐ』。

と。

かく書き終りしとき、亡き人つと立ちあがりて、ゆるぐ事なし。われかへりみすれば、おくつきは皆ひらきて、かばね其處を出で、うからやからが石ぶみにゑりつけたる虛言を刪り去りて、代りに眞實をそれに書き入れたり。見れば皆これそのとなりびとを惱ましもの、惡意、不信、僞善、猜忌、虛言、讒謗、無賴の徒なり。いはゆる惠みあつき父、まめやかなる妻、孝子、節婦、さては心正しき商人といふもの、皆あるは欺き、あるは盜み、卑しく忌まはしの行なき者はあらず。しかも人は無垢と言ひしなり。とこしへなる住居のかど、時を同じうして今書きつけたるは眞實なり。――げにも恐ろしき聖きまこと、これぞ人の生あるあひだ、知ることなく、また知らず顏よそほひたるものなり。

われはおもへり、かの君はた何をか書きつけたる。

なかば開きたるひつぎ、またむくろ髑髏の間を、臆することも無くて進みつ。かの君を見んことを知りて、そのかたへと行く。おもては死出のころもに包ませたれば見えわかねど、かの君をみとむ。さきに大理石の十字架上に、

『戀ひつ戀はれつ、遂に逝きぬ』。

と讀まれしは、かき消されつ。今は

『ある日、戀人あざむかんとて出で行き、雨中に感冒のやまひを得て逝きぬ』。

とぞありける。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

黎明われは心もそらに、おくつきのうへにふしたるを、人や見たりけん。

寂滅

（米、ポオ作）

『赤死』の病に國中ながくうらさびれたり。疫病の數はあれど、かくも猛けく恐ろしきはあらず。おぞましきくれなゐの血痕は此病のしるしにして、はじめ鋭き痛みを覺えて俄にまなこくらみ、やがて夥しき血汐、皮孔を流れ出でて遂に息絶ゆるなり。深紅の血痕は五體をけがして殊に面に著しく、これやがて日頃親しきものの同情をさへ失はしめ、助なきに至らしむる呪咀に他（ほか）ならず。發病より經過をかぞへて、死に至るまでその間わづかに半時。

されどプロスペロは、世のうき事知らぬ心强くさかしき君にておはしき。領内の民なかばは斃れしころ、宮づかへのさむらひ、女どものうちより、すくやかにして氣輕なるものあまたを召しつどへ、そを隨へて城がまへの精舍、奥ふかく立退かせたまひぬ。

廣くはでやかなるこの精舍は、世の常ならぬ、しかも莊嚴なる、君が趣味（このみ）にまかせて建てしもの。堅固なる高き城壁をめぐらして、これに鐵門を設けたり。宮人（みやびと）どもの入りてのちは、鎔爐と鐵槌とをはこび來りて門をかたく鑄合はせたれば、たとへ絶望狂亂の餘、俄に思ひ立ちて出入りせんとするも、すべなからしめたるなり。精舍のうちは糧（かて）もゆたかに、そなへ整ひたれば、ここは恐ろしき疫病

も物かは、城外のことまた關するところに非ず。この時あたら悲しみてうき物思ひに沈まんこそ、げに烏滸のわざなれ。

プロスペロは遊樂の用意何くれとなうまうけ給ひ、道化者、歌よみ、舞踏師、伶人、さてはまた美人あり、酒もそなはりぬ。城中はかく宴樂のそなへ足りて病の恐ろしきを知らざれど、あさましや『赤死』の荒るるに任せたる城外のさま。

この精舍にこもらせ給ひてより歳のなかばを經たらん或月の末つかた、城外の疫病その猛威の限を逞うしたるころ、プロスペロここに世の常ならぬ花やかなる假面舞のうたげを催し、その友あまたをもてなし給ひぬ。

この催しこそ歡樂のかぎりを盡くしたれ。いで先づその場の樣より物語らん。室の數すべて七つ、こは王者の常のやうなるひとつらなり。さりながら宮居にはすべて、此一つらの室ながき直線をなして、開きの戸を左右の壁に折り返し、眼を遮るものなく直ちに全景を眺め得べきが多かり。さるを奇を好みたまふプロスペロ、もとよりかくは爲し給はで、室の配置ゆがみにゆがみたれば、一ながめ僅かに一室を見るのみ。尺二三十を隔つるごとにかどあり。角ごとに趣を異にす。左右には壁の中程にせまきゴシックがたの高き窓を開きて、室の曲れるままにつづきたる廻廊に臨む。窓の玻璃は各室のかざりに用ゐたる色彩に從ひて、おの〳〵その色を異にせり。例へば東のはてなるは、内みな青の色

なれば玻璃も亦あざやかなる靑を用ゐ、次の間は壁絨かざりなんど皆紫なるにならひて同じき色を選び、第三のはすべて綠なれば窓もまた同じく、第四は光線も調度もみな黄にして、第五は白く、第六は菫の色なり。さて終なる第七の室には黑き天鵞絨の壁かけこと〳〵く天井四壁を包みて、裾は長く襞をなしてまた同じく黑なる絨氈の上に垂れたり。さりながら、ここのみは窓の玻璃、室の飾と色を異にして、血汐の色のくれなゐいとも深きをぞ選びたる。

はでやかに飾を置きならべ、又は上より吊るしたる七つの室のうち、いづくにも一點の燭光をみとめず、されどこれらの室に沿ひし廻廊には窓ひとつごとに皆重き香爐を置き、うちに燃ゆる燦たる火光まどの色玻璃にうつり、まばゆきばかり室の內を照らして、ここに常ならぬあてやかなる光景を現はしぬ。さても西のはてなる黑き一室には、血汐の色に染めなしたる玻璃の板を貫く爛々たる光芒、うちなる暗黑の壁絨に映じて、ここはまた物すごさ言はんかたなく、鬼氣ひとに迫る。殊にその火光この室に入る者の顏に映じて恐ろしきこと限りなく、われこそはここに踏み入らんと勇む者ひとりもあらず。

大なる黑檀の時辰儀が西なる壁に向ひて立ちたる、これぞ物凄き此一間にてありける。右左にふれる振子は、にぶく重々しき單調のひびきをなし、分を示す針、時計のおもてをめぐりて、ひと時を報ずるや、鳴り出づるそのおとさわやかに、調子よくも整ひて、楚々ひとを動かすしらべに、常ならぬ

一きはの力を帶びたり。さればひと時ごと、樂人はしばしが程、彈奏の手を心にもあらずとどめて此ひびきに耳を傾け、舞蹈もまた從ひてやむ。笑ひさざめきし一坐しばしは興さめて、この響のきこゆる間は心なきやからさへそのおもて色を失ひ、年老いて心やや落着きたる者は、手を額にして深きものおもひに惱めるさまなり。やがて反響のやむ時、一坐の面々忽ち微笑をたたへ、樂人ども互に顔見あはせつ。今更こころ弱かりし嗚呼のわざよとうち笑むさまに見ゆ。かたみにささやきて、次の時こそは時計のひびきも物かは、なでふ再び心動かさるべしやと誓ふ。さりながらまた六十分……過ぎゆく『時』の、秒を數ふれば三千六百。さらに鏘々の響きこゆれば、戰慄、沈思またもやさきと同じきけはひ。

　さはいへど此うたげは快樂の極みをつくしぬ。プロスペロが好みは世の常ならで、また色彩の鑑賞にまなこ高く、常に今やうの式を顧みずして、大膽にして燃ゆるがやうなる意匠を選びたまふ。思想さながら、烈火の勢にまかせて爛々たる光芒を放つにも似たり。さる人々が此公を見て物狂ほしと言ふはあやまれり。げにけらいの者などしかくは思はず。親しく近づきてその聲咳に接せば、公の狂ひたまへるに非ざるはあきらかなり。

　此うたげの折、七つの室のよそほひ、おほかたは公が好みのままにしつらひたれば、假面舞に一きは奇しき異彩を帶びて、後の『エルナニ』に見ゆらんやうなる、燦爛たる奇峭峻刻の趣をそなへた

り。手足裝束のふさはしからぬ亞刺比亞がたのほりものなんど、皆狂人の作とや見るべき。美あり、妖艶あり、險奇あり、またおぞましき色を帶びて人の厭惡をまねくもの尠しとせず。

まぼろしの一むれ、まことやこの七室のうちを身をねぢりてゆきかふ。室の色彩を身にうつして、伶樂はそのさまよふ歩みの響と聞ゆ。時辰儀時ごとに鳴り出でて、あたりしばしは闃として唯鏘々のおとを耳にす。まぼろしは歩みを止めてゆるぐ事なし。さりながら響やむ時……忍びしは僅かに一瞬……かろく、おさへたらんやうなるさざめきの聲踵いで起り、伶樂もとのやうに、まぼろしまた動きそめて、香爐の光にかがやく玻璃の色をうつし、もとよりは心ゆくさまなり。

人影なき西のはてなる例の一室には、夜の更けゆくままに血汐の色の玻璃を貫く光いよ〳〵くれなゐに、烏羽玉の黒き壁絨の色ものすごし。足この黒の絨氈を蹈むものは、近く時計の沈音を耳にす。隔りたるよその間にありて、宴樂のなかばに聞かんよりも、おごそかに、强さいやまされる響なり。

ほかの室にては、さりながら人つどひにつどひて、物狂ほしう騷ぎあへり。興酣にして、やがて時辰、中夜を報ずれば、樂聲のやむ事まへのやうに、宴舞の聲をさまりて不安の色、一坐を蔽ふ。鏘々のひびき此たびは十二、その間の時長ければ、心なやます人のおもひの數々もまた多かりけり。

最後の一音反響やまんとす、しばしのいとまあり。さきには知る人なかりし假面をかむれる一人、このとき衆のこころを惹きぬ。目なれざる此怪しのものの噂、たちまち口より口へと傳はりて、遂に

嫉忌驚愕のことば、やがてはまた恐怖戰慄、厭惡のささやき一坐より起りぬ。
狂歌亂舞のただなか、かくまで人を動かしし物の怪の、世の常のさまならぬは知るに難からず。安舞まことや放肆のかぎりを盡くしたれど、くだんの物の怪が常規を逸せるさまはこれにも增して、プロスペロが不羈奔放をさへも超えたり。すべて情の力ならでは動かしがたき琴線は、放逸なるやからの胸のうちにも潛みて、生死の大事をさへ笑ひて過す心なききはさへ、笑のうちにはえ過さざる事ども世には多かり。げにや一坐は今この怪物の裝ひ、振舞いとどみだらなるに、いたくも心うごきて見えぬ。
怪、たけ高くして瘠せさらぼひたり。總身を死出のころもに包ませて、かむれる假面のかたち、こまかに見るとも硬きむくろがおもてに見まがふべくもあらず。されど、これのみならば、忌まはしくとも一坐はなほ忍び得つらん。さりながら甚だしきはこの假裝者が『赤死』のかたを裝へることなり。見れば血汐のしづく衣をひたして、廣き額のみかは、おもては悉くおぞましきくれなゐを點じゐたり。
ゆるやかに、またおごそかに、坐中をかなたこなたへと忍びあるく怪物は、さながら一きは心こめておのが役割をつとむるに似たり。プロスペロその怪しき姿を見やりしとき、恐怖の震慄か、はた厭惡のそれか、強くも身をふるはせて、やがて忿怒の色はおもてに燃えぬ。

『何人ぞ。たれか此いやしき戯をなしてわれらを辱しむ。召し捕りてかれが假面を剝げ、その何人なるかを知らす。翌早朝、城壁に梟さんものを。』かたへに立ちしさむらひを顧みて、聲荒々しうプロスペロ叫ぶ。

公のかくの給ひし折は、東のはてなる青の室におはしき。されど身すくやかに、たくましき公なれば、朗々の聲は七つの室に轟き渡り、手もて相圖したまへば、伶樂のおともはたとやみぬ。

青の室にありて公に侍り、色を失へる一むれのさむらひ共、怪物の方へと俄にどよめきつ。怪物このとき亦手近きところにありけるが、しづ〳〵とその歩み確かにプロスペロめざして近よりぬ。さはれ、この假裝者の物狂ほしき粧ひに、ものとはなくて一きはの恐に打たれしやから、そを手捕りにせんこといかでかなふべき。妨ぐる者なきにまかせて怪物は進み寄りつ。きみを去ること今わづかに咫尺。滿座一齊に室の眞中を離れて、壁のかたへとよろめくひまを怪物は、初よりきはだちたるそのあゆみ今もおごそかに、青なる間より紫に、紫なるを過ぎて綠の間へ、轉じて黄よりまた更に白の間へ、遂には菫の色のそれにさへも進み行きぬ。召し捕らんとての立ち騷ぎこの時にはじまれり。

公はおのがしばし心臆せしを耻ぢて怒にくるひ、あはただしう六室を貫きて進みたまひぬ。されど人皆はおののきてこれに隨はず。プロスペロは鞘を拂ひし劍高くかざして、退く怪をめざして獅子奮迅の勢すさまじう、四五歩のところに近づき給ふ。菫の間のはてに至りし怪物、いまふりかへりて追

手にうち向ひぬ。

この時、叫び唯ひと聲、きらめく劍くろき絨氈の上に落ちて、プロスペロまたたくひまに斃れたまひぬ。

絶望の勇を奮ひて黑の室にとび入りし一むれ、黑檀の時計のかげに身動きもせで、すつくと立てるたけ高き怪物を捕へぬ。死出のころもと、むくろのやうなる假面を荒々しう取り拂へば、あやしや手に觸るる形あるものそのうちに在らず。此時いひ知らぬ恐ろしさに人みな吐息（といき）を洩らしぬ。

城内いまは『赤死』の病あること疑ふべくもあらず。みそかぬすびとのやうに夜のまに入りたるなり。一人また一人、血汐に汚れし樂堂のうちに斃れつ、絶望のさまあはれに息は絶えぬ。

時辰儀のひびきは宴樂と共にとだえつ、香爐に燃えし焰も消えはてぬ。『暗黑』、『寂滅』、『赤死』、ただ世を蔽へり。

夕晴の空

（瑞典、ヒアルマア・ゼエデルベルヒ作）

雨あがりの夕暮、晴れ渡つた青空を眺めて僕は窓のところに坐つてゐた。茫然と別に何を考へるでも無い。ただ或悲しい事を思つてはゐたが、それも考へたからつて別によくなる程の事でも無かつたのだ。其時輕く戸を敲く音がした。友は室に這入つて來た。

『お邪魔ぢやないかね？』

『いや、よく來て吳れた、相變らず君は元氣だらう。』

友は大きい籐椅子に身を落着けた僕の机から目を轉じて窓の方を見て、ぢつと青空を眺めてる。

『けふの空模樣こそは、どう見ても眞個の四月だね。朝のうち先づ天氣が好くつて、それから雨が降る、雪が降る。お終がこの通り晴れ渡つて、いかにも春めいた夕景色になる。』と友が言ふ。

『さうだ、眞個の春の夕だ。どうだ君シガアを取らないか。』

友はまた更に語り出した。『ね君、ここから見えるだけでは全くの青空だ。すつかり澄み渡つて眞に一碧洗ふが如しだ。小さい雲一つあるぢやなし、嵐が吹き殘した一抹の霧すら見えない。ところがだね、君、此夕景色には何だか雨あがりの空だといふ處が明らかに見えてゐるよ。確かに全體の

調子(トオン)にさういふ處がある。かういふ感じは一體如何(どう)して起るんだらう？ 朝のうち雨が降つたといふだけのことで、青空がかうどこか異(ちが)つて見える。これは單に僕の方の氣の所爲(せゐ)か知らん。自分の胸にまだ新しい過去の思出といふやうなものがあつて、その所爲(せゐ)で目に見る景色がかう變つて見えるのだらうか？ 君はさう思はないか？』

『さうらしいね』と僕は氣の無い返事をした。

『實際どうも不思議だ。』

二人は暫らく無言でゐる。熟(と)く視ると友の顔はいかにも健康(すこやか)で若々しい。其日は田舍で暮らして來たと見えて、顔の色からして既に日に焼けてゐる。胸にヴイオレツトを一對挿してゐたから

『君、それは誰に貰つた？』と僕が訊いた。

友は白い齒を見せて笑つてゐたが、直ぐにまた眞面目に返つた。

『ゲルダから』と友は言ふ。そして僕の方からなほ一歩進んで訊かないうち、また言葉を繼いで、

『ゲルダといふ女の事で以前よく君に話した事があるが、もう君には覺えが無いかね？』

僕は首を振つて、『それは餘程以前(まへ)の話か』と尋ねる。友は暫らく考へ込んだ。

『待ち給へ、僕等はいま幾歳(いくつ)だ。さう、三十六だらう。すると、これはどうしても十五六年以前(まへ)の事になるよ、其頃僕がまだ廿歳(はたち)位で。』

そこで僕はいろんな事を考へて見た。今から十五六年前と、――おもへば、歳月がずん〳〵頭の上を通つて行く間に、隨分澤山の思想が衰へて、そして地上から消えて了つたんだ。かと思へばまた一方では他の新しい思想が起つて來て盛んに勢を逞しうするといふ風である。それは先づ別の事として、ゲルダの話は全く僕には思出せなかつた。

記憶は吾人の生存といふ一つの構造を繼ぎ合はす漆喰のやうなものである。毎日の生活は樣々の色をなした珠のやうに、此記憶の糸に貫かれてゐる傳へ來りの洗禮の證書と同じて、記憶あつて始めて昨日のわれと今日のわれとが同じものだといふ事が毎朝確かめ得られるのだ。どうも自分の記憶はここでは少し怪しいぞと思ふと、無理からでも其記憶に依賴したくなる。かういふ事は誰しもある事だ。だから僕はきつぱりかう答へた。

『ゲルダといふ名前は、まだ一度だつて君の口から聞きやしないよ。』

『さう、では君がもう全然忘れ了つたんだ。が、それも別に不思議は無い。もともとゲルダといふのは女の本名ぢや無いんだ。以前君に話して聞かせるとき、其女が誰といふ事を嗅ぎつけられまいと思つて僕が命けた變名だ。のみならずさ、どうも其本名が言ひ惡くかつたんだからね。が、それは兎に角、先づ今日の始末から話さう。

友は大きな椅子からつと立ち上つて、あちこちと歩き出した。これは何か心に激した事があると此

男のいつもやる癖だ。そして例の大股に歩かれると、僕の室が何だか小さ過ぎるやうな、狹いやうな氣がする。

『君も知つてる通り、春になると僕は頭が常もそは〳〵して一向落着かない。終日何處でもいいから戸外を彷徨かないと氣が濟まないんだ。さういふ氣分になつて來ると、機濱行や新嘉坡行の切符を買ふのも、またひよつこり電車に飛び乘つて何處か田舍へ出かけるのも、自分によつては少しも違ひはないんだ。そこで僕は今日この後の方を選んだわけさ。今朝の天氣といへば、君も知つてるあの通りだらう。風がざわついて音が耳の中で鳴るやうだ。壁も街もみな一樣に物狂ほしい眩ゆい光線を浴びて、辻々には到る處盲目乞食が居る。小路といへば何處にでも風船賣の伊太利亞人が出てゐて、風琴の音がぶう〳〵、――まあどう見ても春景色だ。先づストゥウレ街から電車に乘つてクングスホルメンまで出かけた。そして病院前で下りた。此處は子供の時分から僕にはお馴染の處だ。壁にはベスコウさんの畫像が掛かつてゐる僧房の小さい床几に坐つて、僕は常も曾祖母さんの糸繰りの手助をさせられたものだ。

『話が横道に這入つたがね、そこから僕はドロティングスホルムの通をずん〳〵前方へ行つたんだ。するともう全く舞臺が變つてる、春らしくも何ともありやしない。一體田舍の春位、當てにならんものは無いよ、これまでだつて幾度僕はさう思つた事があるか知れない。薄黃色くなつた雪があちこち

に殘つてゐて、道路といへばまるで泥田だ。田舍での春といふものは、まあ何の事は無い、冬といふ奴がそろ〳〵老い込んで來て、穢い襤褸の古着を引つかぶるんだね。それは實に酷いよ。煤箒のやうな黑雲の大きい奴が出る。ところ〴〵少しばかり青空が顏を出して此方を見つめてゐる、それも血の氣の失せた、氷のやうに冷い死人の色さ。先づ嵐にならうといふ前、空が曇りかける時の模様だね。

『僕は襟を立ててそれから急に引返したんだ。ちやうど町端れまで來た時降り出したのだから、お蔭で或長屋の門口で雨宿りだけは出來た。先づ最初が吹雪だ。何でも僕の横着面を一つ驚かして呉れようと言はぬばかり、酷く顏に吹きつけるんだね。いやまた實際その戸口が無かつたら、僕と雖も全く降參したかも知れない。何だかかうひどい貧乏長屋のやうな所でね、入口には鼻垂小僧がうぢや〳〵してゐて、石段の上にも遊んでた奴が居るし、そこいらの壁といへば落書だらけ、人名だの惡口だの、それからまだ符牒のやうな書まで書き散らしてある。外の方では嵐がお定りの濕つぽい雪に變つて、それから雪がまた雨になる。全體がひどく退屈で堪らなくなつた。壁に書いてある拙い文字を讀んでゐるうち、ふと目についた張札が一つ、

「貸間あり。三室、外に臺所付。四階うへ」

から書いてある。固より室を借る必要は僕には無いんだが、ただ何が無しにまあ上り込んで一つ様子

を見てやらう、家の人と天氣の噂か世間話でもしてゐるうち、雨も晴れるだらう位な考で居たんだ。僕は梯段を上つてベルを鳴らした。表札の名前は何でも平凡な名だつたから、別に氣にも止めなかつた。取次に出たのは小綺麗な女中で、どうも其女の風から見ても、此一家が近所の者より幾許か上品に相違ないとは直ぐに氣が附く。眞黑な衣物を着た子供が一人、女中の後から尾いて出て來た。が、元來子供に黑い衣服を着せるのは喪の時に限るんだらう。だからこれは何でも凶事の家へ僕が飛び込んだんだ、事によると主人が死んでからまだ二三日といふところかも知れないと思つた。

『飛んだ處へ押し掛けて來たものだと思つて、酷くきまりが惡かつた。どうも僕の物腰といひ、言葉遣ひといひ、何だか弔慰に來た男といふ風を思はず知らずして居たと、さう自分でも思つた位だ。室代を幾許と訊くのにさへ、僕の聲が自然と物柔かで、そして先方に同情するやうな調子になつたのをわれながら氣附いた。女中は室料の事を言つてから、勝手の間へ行く戸を開けて呉れた。先づ最初が食堂、これは隨分汚穢しかつた。が、座敷の方は全くその正反對。僕は驚いて入口のところに突つ立つた儘、實際歩を還すに躊躇つた位だ。座敷のなかの物は悉く美しくつて、上品で華麗である。別に高價な品は無いんだが、さりとて沒趣味な物や、汚穢い物は一つとして見られない。立派な時計の兩側に靑銅の燭臺を一對つけた机が忽ち目に付く。靑石の上に陶器の人形が二つ、硝子の花立には菫の花束を挿して、框に嵌めた小さな寫眞が一枚置いてある。何だか僕は姿繪でも描かせる時のやうに身

動きもせずに立つて、其寫眞を見てゐたんだ。ちやうどその時、太陽が雲を出た。窓から這入る銀色の青白い光線が長く曳いて、机にも青石にも燭臺にも寫眞にもすべての上に射した。ところがさ、其寫眞がだよ！　少し近寄つて見たとき、全く僕は一時自分の頭がぐら〳〵するんだと思つたよ。それが僕自身の寫眞なんだもの！　まだ學生時代の白い帽子を冠つてゐる古い奴だ。どうしてまたそれがこんなところに在るんだらう。誰が置いたのだらう？』

『ゲルダが！』と僕は定めて了つた。

『さうだ、全くさうだ。が、待ち給へ。僕はそこに立つて眩惑でもしさうな心持で居るとね、戸が開いて這入つて來たのが、そのゲルダさ。一目見ただけでは一寸分らなかつたがね――。』

『いや君』と僕が遮つた。『そのゲルダといふのは一體何だ？　君の初めての女か？』

『否、さうでも無いがね、或一夏といふものは殆ど毎日二人が顏を合はせて睦まじかつたものだ。一緒に森のなかを歩いたり、船遊をした月夜の景色、それから殊にまだあけいしやの樹蔭が、中でも一番忘れ難い。ずつと以前、君にそれを皆すつかり話した事がある、君は自分の事でもあるやうに面白がつて聞いてゐた。それが今ぢや全然もう君の記憶に無いんだ。』

そろ〳〵漠然と僕の頭にも浮び出して來た。

『あけいしやの樹蔭といへば、成程そんな事もあつたね。さうだ、ゲルダの事も思出せる。色白の

痩形の女だ。色澤がよくつて暗い眼の女だつて君が話してたよ。さういふ目の女だつたらう？ それともまた外の女の事だつたか知ら？』

『もとは左樣だつたよ。』

『そして今ぢや……？』

友は暫らく默したが、再び語を繼いだ時に聲がかすかに震へてゐた。

『さうだ、もう老けて了つたよ。あの頃は僕と同じ年輩だつたが、今では婆さんだ。病氣の所爲か、面窶れがして苦勞皺が寄つてゐる。併しまだ君に話したい肝腎な事があるんだ。二人とも驚きあつて困亂いてゐるとね、やがて僕の寫眞を指ざして女が言ふんだ、「あなたのお寫眞は常も此處に立ててはなかつたんです。今日まではありませんでしたの。それを今日はふと貴方の事を思ふやうになつて取り出したんです。そこへちやうどまた偶然貴方が……。」』

此言葉を聞いて僕は獨り呟きながら窓の閾で拍子を取つた。實際僕はさう爲ずには居られなかつたのだ。

『おい君、まあそんな述懷をやるんなら、そこへ腰を落着けてゐても爲れようぢやないか。』

友は別に怒つたといふ風も見えなかつた。そして言つた。

『うん、話はそれ切りだ。それでお終なんだよ。』

日は暮れかかる。友はそこに腰を卸して無言で居た。僕も默したままである。机から窓の方へと視線を移して、友は凝然(ぢつと)と青空を見つめてゐたが、空の色が益々濃くなつて、今は薄暗い菫色に光つて居る。

友は遂にかう言つた。『僕のいふ雨あがりの心地と、夕暮の空との關係が始めて自分にも解つた。見給へ、あすこの石板(スレイト)色をした屋根は新しく塗り更へたばかり、まだ濕つてきらきら空色を反射してゐる。全體の調子(トオン)が目立つのは彼物(あれ)があるからだよ。』

『全くさうらしいね』と僕は答へた。

靜寂　（米、ポオ作）

北米文學の史上に極めて著しき異彩を放ち、また遠く海をへだてて西歐大陸の詩文にも影響ありし稀世の詩才ポオは、惡しき傳記者の曲筆にあやまられて、世は長く彼を重んぜざりしが、今や、かなたの文壇とみにその述作をよろこぶの氣風を生じ、不羈奔放なる彼が性行と詩文とを說くもの極めて多きに至れり。こよひまでにとて純文社より稿を需めらるるまま、曾て譯したる『散文詩』中の一篇の舊稿を寄す。

ディイモンその手をわが頭上におきていふ。

聞け。わが物語らんとするは、おそろしきリビアの地、ザイアの流のほとり、絶えて靜寂なきところ。

流るる水、黄なる病しき色を帶び、うみに朝せずして白日赫奕のもと、とこしへに激湍をなして躍れり。泥ふかき河床の兩側幾里にわたりて、大きさなみならぬ睡蓮（ひつじぐさ）、その色蒼白く、落寞のうちかたみに歎を洩らし、空にむかひて延びたるうなじ長うして、此世のものともおぼえず。かなたこなたにやむ事なくそのかうべをゆれり。このうちに聞ゆるかすかなる淙々のおと、地下なる水のながれをさながらにして、睡蓮は皆かたみに愁聲を洩らしつ。

　ひつじ草の打ちつづくきはみ、こは高く恐ろしき暗黒の森なり。森の下草は絶えずヘプリディイズ島かげの荒波のやうにさわげど、大空には風そよがず。太古のままなる喬木、いつもひしめくやうなる烈しき音をなしてかなたこなたにゆれたり。とこしへなる露のしづく高き梢よりしたたりて、根もとにはあやしき有毒の花ねむたげなるさまにてねぢれたり。頭上颯々のおと高く、暗澹たる雲とこしへに西にむかひて走る。その極まるところ懸河をなして地平線上に落ちたり。されど大空には風そよがず。ザイアのながれのほとり絶えて靜寂あるなし。

　夜なりき、雨ふりぬ。さなり、降れるうちは雨なれど、ふりたればそは血汐なりき。たけ高き睡蓮生ひたる沼澤のただなかに立てる、わが頭上にふりかかりぬ。肅たる荒凉のうち、ひつじぐさかたみに數を洩らしぬ。

　たちまちにして幽暗の薄霧を破りて月はのぼりぬ。深紅のいろを帶びたり。岸のほとりにそばだちて月光を浴びたる巨巖、この時わがまなこにとまりぬ。巖うすぐろく物凄うして高かりき――さなり、薄黑き色なりき。前のかた石に刻られたる文字あり。われ睡蓮生ひたる淺沼をあゆみ過ぎて河邊に近寄りぬ。巖上の文字をよまんとてなり。されど解し得ず、ふたたび淺沼のうちへと引き返せるとき、月皎々と照りわたりければ、かへりみして巖上をながむれば文字よまれぬ。いはく『荒凉』。

　仰ぎ見れば巖上に人たてり。われは睡蓮のうちに身をかくして、この者が動作を見あらはさんとお

もひぬ。かれたけ高くしてから〳〵しく、總身にいにしへ羅馬のトガをまとひたり。輪廓はおぼろなれど姿は大神のそれと見られぬ。おもてのみは、夜のころも、狭霧のおほひ、明月白露をはらひて、あらはれたればなり。秀でたる眉のあたり思想をやどして、まなこは心づかひ輝き、頬のあたりの皺、悲哀、困憊、厭世のおもひ、さてはまた煢獨を得ん願をかたれり。

かれ巖上に坐し、手を額にして荒凉の景をながめつ。さわげる叢を見おろしては、また、かみ太古のままなる喬木を見、なほそのかみ、大空に深紅の色なせる明月を仰ぎぬ。われは水くさのかげに身をよこたへて、かれが動靜を覯き。そのひと煢獨のうちに身をふるはせぬ——されど夜は更け行きて、かれ猶巖上に坐したり。

その人まなこを大空より轉じて、恐ろしきザイアのながれ、もの凄き黄ばみたる水をながめ、蒼白う打ちつづける睡蓮を見わたしつ、水草のなげき、叉、そのうちより起る淙々のおとに耳かたむけぬ。われは水草のかげに身を横たへて、かれが動靜を見き。そのひと煢獨のうちに身を顫はせぬ——されど夜は更けゆきて、かれ猶巖上に坐したり。

これよりわれ沼地のふかみへとくだり行きつ。水草のしけみの間を遠くたどりて、しめりがちなる此あたりに奥ふかく住まへる河馬をよびぬ。彼等わが呼ぶを聞きて、そのやからと共に大岩のもとへ來りつ、おそろしの聲たから月下に嘯きぬ。われは水草のかげに身を横たへて巨人が動靜を見き。そ

のひと煢獨のうちに身をふるはせぬ——されど夜は更けゆきて、かれ猶巖上に坐したり。

このときわれ『騷擾』の呪もて四天をのろへば、風そよとも吹かざりし天つ大空に、おそろしき嵐吹き起りて、そのすさまじきに空は薄墨のやうなりき。雨、巨人の頭上にふりかかり、みなぎるザイアの水ながれ落ちて、河はさかまき泡だつ。睡蓮そのしげみのうちに號びつ。森は嵐にくづると見えて、雷霆電撃、岩が根もゆるぎぬ。われは水草のかげに身を横たへて、巨人の動靜を見き。その人煢獨のうちに身をふるはせぬ——されど夜は更けゆきて、かれ猶巖上に坐したり。

この時いかりてわれまた、流といはず水草といはず、嵐をも森をも、さては天つ空、いかづち、草間の愁聲、すべてを『靜寂』の呪もてのろひぬ。のろはれしもの皆しづまりぬ。空にのぼる月とどまり、いかづち止みて電光きらめかず。雲動く事なくして、水たひらかに、木々ゆるがず。愁聲はた聞ゆるなし。淙々のおとも今はうち絶えて、果てもなき荒野微音なし。このとき巖上の字をみれば、さきとかはりて『靜寂』とぞありける。

わがまなこ巨人が面にとまりぬ。そのおもて恐怖の色につつまれたり。かれはあわただしう手よりかうべをもたげつ、巖上に立ちて耳かたむけぬ。されど果てもなき荒野が原ただ闃として、巖上の文字は『靜寂』とぞ讀まれける。その人をのゝきて面をそむけ、いそぎ遠くのがれてまた隻影を見ず。

* * * * *

いにしへ波斯のひじりが巻――ものうげなる鐵裝の巻のうちに、たへなる物語あり。あめつちとわたつみとの、また海、くが、天つ大空をしらせし神仙の貴き物語なり。また豫言者が述べしことばのうちにも言ふところ多く、ドトナをめぐりてそよぐ木の葉かげより、むかし聞えしいとも聖なるものがたりもあれど、ディイモンがわれとならびて、おくつきの蔭に坐りし折に語れるかの物語こそ、げにやこれらにもまして奇しきものなれ。ディイモン語り終れるとき、身おくつきの深きに落ちかへりて、うち笑ひぬ。われは、さはいへど彼と共に笑はんやうもなし。笑はざりければ、かれ此身を呪ひぬ。おくつきのなか、とこしへにここに住まふりんくす出できたりて、ディイモンが足もとに横たはり、屹然としてかれを見つめぬ。

ヘレンのきみに　（米、ポオ作）

うるはしきヘレンのきみは、
似たるかな、いにしへのニケの小舟に。
静けくも、うましかをりの波路を、はるか、
つかれやつれてたび人のせて、
ふるさとの濱邊にむかふ。

世の荒波に幾歳（いくとせ）をわれもゆられつ、
緑なす君が黒髮、いにしへの神のおもかげ、
水神（みづがみ）のみすがたにこそ、しのばるれ。
ありしむかしのギリシャのほまれ、
ありしむかしのロオマのさかえ。
かなた、光明の窓にゐよりて、

たたせる君ぞ、神の御像（みすがた）。
御手に瑪瑙の 燭（ともしび） もたせる
サイキの女神よ、うたびとの
聖なる國よりぞ來（こ）し。

F——に　（米、ポオ作）

ああ、うらさびぬ、
わが世のみちは、はしき君。
うきなやみ、つどひつどひて、
薔薇花（さうびくわ）の色香も知らず。
なぐさめの唯ひとつこそ、
君が夢、ここやすらひの神の園生。

君にささぐるわが思、
たとふれば沖つしまやま。
荒ぶる海のただなかに、
吹きしきる嵐をよそに、
けやけくも日はかがやきて、

うららかの大空あふぐ沖つしまやま。

ささやき（英、ラヴア作）

みどり子ねむりて、母は涙にくれ居たり。
荒ぶる海に遠く夫(つま)ゆきて、海人(あま)のとまやに風あるころ。
『おお、なつかしきダアモット、はや歸りませ』と母さけぶ。

妻は祈禱(いのり)の念珠つまぐりぬ。みどり子はなほも眠のなかに。
女ひざまづけば面(おもて)にうかぶほほゑみ。『ああわが子、いましの眠をかざる警告(いましめ)に幸(さち)あれや。天使(みつかひ)の汝(いまし)にささやくをわれ知ればなり。

天使(みつかひ)いましの眠を守らせるこの時、わが子よ、ともに祈らん、いざ、おもむろに。告げよ、いましの父をこそ守らせたまへ、これぞ願ひと。天使いましにささやくをわれ知ればなり』。
あかつき、ダアモットは歸り來つ。みどり子が父を、妻は見て歡喜の涙にくれぬ。祝禱(ほぎごと)もて、ひしとその子を抱き、妻はいふ、『天使(みつかひ)いましにささやきしをわれ知りたりき』。

晩秋　（英、桂冠詩人オオスティン作）

そら暗く、木の葉さへちりもはてぬに、
いかなれば白雪のまだきふりくる。
きのふまでほこらしの園ににほひし
菊もまださかりを刈りしはあらず。
嵐ふく梢みなさびしきもあれど、
葉と雪を重ねたる枝こそたわわ。
玉の緒のまだ絶えぬ秋の埋葬に、
つくりしか冬ははや死出のころもを。

こころあり、さはいへど『自然』のさまに。
見ずやこれうつり行くわが世の相か。
『死』はたとひ招けども、すみなれし世を

さりがたき執着（しふちやく）のおもひなきかは。
かすかなる笑まひこそ面（おもて）に見ゆれ、
かなしみのひとしづく胸にありとも。

わがなやみ（英、シモンズ作）

いたむわが心やすかれ。
胸なるなげきしづめんに、
あゝこゝにすべはあらずや、
なぐさめも甲斐なきわざか。

『わが病めるこのなやみ、
やはらげんすべこそなけれ。
青春のわづらひ去らば、
賢からんを老いらくに。』

戀　歌

（佛、トゥリエ作）

卯月はここにかへれども、
日はまた同じ日にあらず、
春もむかしの春ならず、
愛しぎみが去にしより。

わが行く森のしたみちに、
みどりの樹蔭、過ぎし日の
おもひでの花ぞ亂れ咲く、
見ればいや增すなやみかな。

ゆらぐ鈴蘭の花にいふ、
『わが戀君を見ざりしや。』

またくくと鳴く鳩に問ふ、
『いましは人を見ざりしや』。

されど山鳩ものいはず、
若草花(わかくさばな)もいらへなし。
これより常に尋ね行く、
つれなき人の行きし蹤跡(あと)。

人のよろこぶ戀のみち、
さもこそ似たれ高き峰。
のぼるに人は歌へども、
なきて下(お)りゆくくだり坂。

夜の歌

（佛、ゴオティエ及びユゴオ作）

日は落ちて、暗黒のつばさ既に地を蔽へり。仰いで天空に星斗の爛々たるを望めば、人誰かここに幽なる天籟の妙音を聽き、また所謂「コズミック・イモオション」の油然として胸奥に湧き來るを覺えざらんや。吾人が最も明らかに人間の小を自覺して天地自然の無窮を觀ずる、まさに此時に外ならず。おもひを遠く天涯に馳せて、宇宙の神秘に觸れ神の靈異を感ずるは豈獨り哲人のことのみならんや。げに西歐古今の詩人が『夜』を歌ひたる抒情詩、亦常に此種の感想を含めるもの最も多きも宜なるかな。かの "Nox nocti indicat scientiam" のこころ、こは必ずしも十七世紀の英國一詩人の名作を俟ちて知るべきにはあらざるなり。

ここにかかぐる短篇二章は、近代佛國ろまんてぃっくの詩人ユゴオとゴオティエとの作なり。共にゆふべをながめ夜を觀じて、自然の聲に神意の洩るるを聽くの意は一なり。いはく

日は落ちぬ。うすずみ色の浮雲は、
暮れて行くあまつみそらの高きより、
しづかなる動くともなき川淀に、
白ぎぬの裳裾ひたしぬ、さりげなく。

しめやかに打ち沈みたる『夜（よる）』は來て、
はらからの『晝』のうれひを伴ひつ。
星は皆こがねのころも身にまとひ、
女王（にょわう）います雲井の宮にあらはれぬ。

きこゆるは音をのみぞなく綠鳩（みどりばと）、
また聞ゆ、ねやに夢むるちごの聲。
げにもこは目に見ぬ鳥のはばたきや、
虛空（こくう）なる翼（つばさ）のおとに似たるかな。

天（てん）は地（ち）に低き聲もて語らひぬ、
いにしへの希伯來（ヘブライ）ことばそのままに、
今もまた異靈（くしび）のわざをなすが如（ごと）。
ここにわが悟りしことば、『こは神ぞ』。

——Théophile Gautier, Tombée du jour

『またわれ大なる聲を聞きぬ』……默示錄第一章十節

○

星あかき夜を獨りわれ濱邊に立ちぬ。
空に雲なく、海のうへ帆影もあらず、
現世界のあなた目も遙に遠きをながむ。
山も林もわかちなく、森羅萬象
みなことごとくさざめきて言とふらしも、
　海のなみ空の光にむかひて。

千萬無量のこがねなす天つ星かげ、
たかきや低きももちぢの諧調は妙に、
光明の冠うつぶしてみな答ふらく、
また、何者も壓へんに力かなはぬ

蒼海(あをうみ)の波、泡たてるかしらも低う
答ふらく、『われら神をたたふ』と。
——Victor Hugo, Extase

月下 （佛、ヴェルレエヌ作）

しろがねの
月てるや、森かげ、
枝ごとに聲あり、
　青葉のうへに。

はしけやし。

まそかがみ
照る池に、やなぎの
宿せるは、くろきかげ、
　吹く風なげく。
おもへいま、

おほらかの『安慰』、
星てらすみ空ゆ、
　降り來るらしも。

　うましこの時。

暮春悲歌

（獨、レエナウ作）

そよかぜの
いかなれば憂をささやく。
かなしみの聲みつ森や。
濁れる浪のなげきはながし、
『春』の神いまはの折に。

雲ふかき
おほぞらはをぐらき胸に、
なやみをぞ深く祕めたる。
みどりの床に『春』の愛兒の
フイロメエレ泣きくづほれぬ。

『春』の日の
たのしきに痛むわが心、
とく知りぬ樂土(らくど)のはてを。
燃ゆる日の矢は『春』をつらぬく、
警告(いましめ)のこゑたかければ。

いなづまや
なるかみの空ふきはらひ、
森をゆく嵐にほほゑみ、
いま逝く『春』が胸の血汐の
ながれゆく花さうびかな。

精舍（獨、シルレル作）

丈夫やかた戀せんとなげけども、
しこの丈夫なほ戀ひにけり　（萬葉集）

こはシルレの作、Ritter Toggenburg のうた（バラアデ）なり。

われ妹の愛を捧ぐれども、君を戀ふるを得ず。しづかに袂を分たせたまへ、と女いへば、萬斛の愁思を最後の抱擁にのこしつ、もののふは去つて征途にのぼりぬ。驍勇よく敵をやぶれども、胸のなやみをいかにせん。ひととせを經て遂に故山に歸り見れば、女は既に僧院に入りて、尼の身のせんすべもなく、彼は遂に庵をむすびて隱棲の人となりぬ。ひねもす精舍の窓をながむるに、女はまたこなたを見おろす朝た夕なをせめてもの心やり、幾とせかはる事なかりき。男は遂にみまかりたれど、むくろは猶ほ靜坐、精舍のかたを見つめしといふあはれの物語。

なだかきロオラントセックの說話（レゲンデ）に基づきて、シルレルが潤色を加へしもの、うつし世の戀と、歐洲十字軍時代の宗教信念との衝突苦悶をうつし出でたるなり。英詩にありては、トマス・カメルの "The Brave Roland" おなじ材をとりて名だかし。（五月九日、この詩聖が百年祭の日に）

一

『君にささげし妹ごころ。
もとめますなよ、わが胸に、
あだしおもひはわづらひぞ。
君や去りませ、やすらかに、
來まさん折もまたしづか。
聲なき君がそのなみだ、
しるよしもなきわれなれば。』

二

かたるを聞けば、くるしき胸の
おもひあまりていへばえに、
抱きよせたるもろ腕(うで)や。
駒にまたがり、いざわかれ。

シュワイツのともびと呼びて、
聖き(きよき)御墓(みはか)をさしてゆく。
むねにかけたる十字(クロイツ)や。

三

仇びとの雲なすなかに、
かぶとの羽ぶさ、ひらめきて、
ますらをがたてしいさをし。
トッゲンブルクのたかき名は、
回々教徒(ムウゼルマン)のおののきぞ。
さはいへ、胸のなやみこそ、
とはにいやさんよしもなく。

四

むねにひめたるひととせの

おもひに堪へぬますらをが、
こころ靜けきひまもなや。
手勢(てぜい)をすててひとり去る。
ヨッペのはまにかぜ孕む
帆ぶねよ、行くはこひしきひとの
息(いき)かをるかのうまし國。

五

城門おとなふ旅のひと、
とびら開きていかづちの
ことばぞ聞ゆ、『たづねます
その女(め)のきみは、いますでに
かづきたまへる法衣(のりごろも)、
神に仕ふる聖(きよ)き神女(みこ)。
ちかひまつりのありしはきのふ。』

六

祖先の城をあとにして、
愛馬武器(あいばうちもの)みな捨てぬ。
トッゲンブルグの城樓を、
ひとり下(お)りゆくもののふが、
おもひをつつむ布ごろも、
たふとき身にこそまとひたれ、
人はそれとも知らなくに。

七

菩提樹のくらきもりかげ、
精舍(しやうじや)の窓をみるところ、
くさのいほりのわびずまひ。
朝まだきよりゆふべまで、

ながめくらしつ、あこがるる
おもひはながし、おもわには
しづけき希望(のぞみ)の色こそみゆれ。

八

はしき君おはす精舎を
ながめ居れば、やがてきく、
窓のとびらのひらく音、
ひらくと見ればうまし女(め)の
あえかのすがたあらはれぬ。
たをやかのあまつをとめが、
俯して見おろす山かげや。

九

このなぐさめにやすらけく、

さても甘睡に入りてまた、
翌日のあさ日をこころまち。
いく日をかくも坐りゐつ、
いくとせかくもながめける。
窓あくおとをまちわびて、
なやみもあらず、なげきなく。

十

ひらくと見ればうまし女の
あえかのすがたあらはれぬ。
たをやかのあまつをとめが、
俯して見おろす山かげや。
いほりのひとのある朝、
坐りしはむくろとなりて、
まなざすかたは猗も精舎よ。

編纂者いふ。右の他、本全集中に收めた諸述作中に一たび見えたものは、再び之を錄しない。又以上の譯詩は、譯者が獨立した譯詩として嘗て發表したもののみを採り、註釋の際『大意』として添へたものなどは凡て之を收めないから、希望者は本全集第六卷の『英詩選釋』二卷に就いて見られたい。

新モンロオ主義

原著者序文

余は全米主義（パン・アメリカニズム）と其大なる將來に就いては信をおく者である、今日まで如何なる國の盡した外交政策と雖も、之ほどまでに愛他的であり、また同時に實際的なものは他にないからである。それは『何よりも先づ安全（セイフテ・ファアスト）』と『何よりも先づ亞米利加（アメリカ・ファアスト）』といふ一見調和しがたき此二つの警語を、みごとに調和してゐるからである。それはまた吾等が安泰を求むる願と愛國の至情とを二つながら滿足させるからである。他國民の見解を研究し之を尊重し、かくてまた自國民の精神をも教養するといふのが此政策の根帶だ。先づ一國民の精神的方面を進めたならば、物質方面の事はおのづから出來て行くものである。最も實際的な人物と極端なる理想家とが、何等の矛盾なくして相合し得る一定の外交策は、即ち之から生ずるのである。二十一の共和國が共最良の特性を集め、よつて以て共同の利益のために協力して之を用ゐ、しばらく共短所を度外視しようとするのである。かういふ風に鑑賞と寛容とを相交へる事の有效なのは、個人が集つた多くの集團に於けるると同じく、諸國民の集合の場合にも矢張り同じである。皆が一朝この心掛けをさへすれば、之に關係の諸共和國が如何に人種的特性を異にして居ようが、それは殆ど問題にならないのである。全米主義は愛國心の一層廣濶なる、また深遠なるもの

である。單に己の祖國を愛する狹量な利己心に加ふるに更に他國民の見解を重んずるの精神を以てし、而もなほ自國の利益は之を擁護せんとするものであるからだ。之は實に米國史に於ける千七百七十六年の精神の直系を傳へたもので、かの武器を執つて起つた米國人が晩霞丘(パンカ・ヒル)の防戰に赴くに先だつて、黎明(た)劍橋(ケンブリッヂ)の野(グリーン)に跪いて祈禱(いのり)を捧げたとき、此精神の貴き淵源は認められたのであつた。

政策によつては之を完全に遂行してこそはじめて有益なものもあるが、全米主義に到つては然らず、未だ完成の域に達しなくても有益なので、若し完成すれば、共福利まことに測る可からざるものがあるのだ。國際的平和のため今までのところ工夫せられた最も實際的な方法である。亞米利加の多くの共和國が相結んで仲裁をしたために、既に墨哥西と合衆國との衝突が防がれた。また此效績を基礎にして、更に進むでここに完全な三角形を作りたいのである。即ち東方には將來歐洲との間に葛藤なからしめ、西方には太平洋に於ける平和を確立して、ここに吾人は平和のため全米三角形を得るに至るのである。全米主義に對する責任は大陸全體にある。モンロオ主義に對する責任は、勿論他國が之に加はるにしても、常にそは先づ我が米國の雙肩にかかるのでわる。兩方ともに、大西洋及び太平洋に於ける優勢なる海軍力と、またかの平和を愛する瑞西人のやうに訓練された市民軍を控へた充分な陸軍力とによつて、保證せらる可きものである。

米國紐育市に於て　　チャアルズ・エチ・シェリル識

コロンビア大學總長バトラア氏序文

今や米國人當面の問題であり、また最も興味ある緊要なる問題の或ものに就いて、著者シェリル氏は本書のうちに極めて壯快にして痛切なる論議を公にしてゐる。多くの論點に觸れ、且また斬新な、隨分急激な提議をすらも、試みてゐる。之を論ずるに當つて、氏は讀者を刺戟し、否な強ひてでも、國際政策の問題に關して各自に考へさせようとして居るが、之は實に今日の米國民にとつて焦眉の急を要するものである。

人力の如何ともすべからざる事情のために、また吾人が之に變更を加へようにも方法のない狀態のもとに、合衆國の對外關係といふものは、ちやうど今代の人の生時の間にすつかり變化して了つた。多かれ少かれ諸外國との貿易は絕えずあり、移民の流は幾十年間滔々として我國をさして這入り込んでくる。國境の別なく國語の制限なき科學に至つては、いつも國際間の鑑賞と理解とのために盡す一勢力であり、美術もさうであつた。ただ文學に至つては少しく後れてゐた。いつのまにか世界は萬國共同のものと化した。千九百十四年八月一日、突如として大戰亂の破裂したときには、國際交通と國際相關の、暗默の間に而も有力なる組織が、働いてゐたのであつた。それを一も二もなく戰爭が粉碎

して了つて、高價な犧牲を拂つたのだ。米人は從來自國外の事を、遠い別世界のやうにしか思つてゐなかつた。それが今では、未だ曾て會つたこともなければ、共國語を聞いた事もない異國の男女が自分たちとも矢張り連絡があり、また世界戰爭あるに至つて始めて斷たれた目にも見えない繋索で、互に相結ばれてゐた事をも、切に之を感ぜざるを得ない次第となつた。あらゆる國際海運、國際貿易、國際的財政、國際交通、みな悉く一瞬にして共高き安固の地位を失うて、非常なる危險と損害とに陷るに至つたのだ。國際關係とは抑も如何なる意味のものかと云ふ事を示すために、歐洲戰爭は、米國は勿論のこと、全世界が普く受けたる最も力強き嚴肅なる教訓であつた。

本書の表題が直ちに示してゐる通り、シェリル氏は主として米大陸の問題を論じ、更に之から生ずる他の國際問題に及ぼしてゐる。亞米利加三部の共和國は今や等しく皆戰亂の巷を離れてゐるが故に、之を糾合するには今日こそまさに心理上重要の時機である。共政體に於ては皆同じく共和政であり、また新鮮なる土壤、無盡藏の富源を有する新國民にとつての當面の問題にも、等しくみな接觸してゐるのである。しかしながら亞米利加の各共和國が互に糾合したからと云つて、それが歐洲や亞細亞の舊國民と對立するとか、或ひは如何かして反對の位置に立つと云ふやうに思ふならば、そは大なる誤である。否な亞米利加三部の共和國結合は、全世界が今後いつかは到達すべき一層偉大なる結合の寧ろ象徴とこそなる可きものである。各人皆自由と正義の確保を得て四海同胞の大理想に向つて人類の精

神が進まんとするとき、戰爭は一時これを延引させる事はあつても、全然それを阻止する事は出來ない。亞米利加と非亞米利加と云ふやうな二つの世界があるのではない、ただ一つの世界があるのだ。そして此一つの世界に於て亞米利加各國が如何なる任務を盡すべきかは、かれ等が己の理想に忠實なるやの如何により、また相互間の友情と、亞米利加以外の舊國の同胞に對する交誼の如何に在るのである。

米國人にして若し本書を讀んで、自國の東と西と南とにある大洋の彼岸をも見、また彼等が何の防禦もなき一條の長き想像線を境界としてゐる北方の隣人に對すると同じく、海のあなたの隣人に對しても、よく調和と安泰とを得て生存するの可能なるべきを知るに至らば、こは實に著者シェリル氏の本懷とする所であらう。氏が多年の外交官としての服務も、また米國の商業と其要求を精細に研究した事も、心けだかき一米國市民の任を果すべく孜々として努力した事も、皆ここに至つてはじめて徒爾でない事になるであらう。

人みな世界問題を見るに、單に自國民の立場よりのみせずして、他國民の立場からも見る事を知るに至つて、ここに世界の平和もまた幸福も增進せられるのである。シェリル氏の著は實に米人をして世界問題を見るに當つて他國民の之を見ると同じやうに見せしめようとするものであらう。

千九百十六年二月一日

コロムビア大學に於て

ニコラス・マレイ・バトラア識

譯者序文

旣に著者みづからと、コロムビア大學のバトラア總長の序文に全米主義の本質を說いて、この書の性質を明らかにしてある以上、私がここに加ふる數語は寧ろ蛇足の感があらう。唯本書を日本の讀書界に紹介するに當つて、私は少しく著者その人に就いて述べ、また本書に對する自分の所感の一節をしるしておく事は、譯者としての義務だと信ずる。

ことし三月の末頃であつた、紐育滯在中の或日、總領事の依賴によつて、はじめて私は著者シェリル氏と銀行倶樂部（バンカアス・クラブ）に會した。午餐を共にして後、談話室で色々の話をしてゐる時、私は遂に本書の日本譯を諾する事になつたのである。著者が其時傍の窓硝子を指して、米國各州の紋所（コオト・オブ・アアムス）をゑがいた美しいステインド・グラスの話をした事を今も記憶してゐる。外交官であり、法律家であり、運動選手である本書の著者は、また美術の鑑賞家として英吉利伊太利佛蘭西のステインド・グラスを研究した三卷の著を公にしてゐる。學界における人物を外にしては、著者は私が米國に於て見た最も品格ある紳士の一人であると云ふのが私の第一印象であつた。

シェリル氏は千八百六十七年四月華盛頓に生れた。エイル大學の出身で、今は共和黨の名士であ

り、また最も有名な南米通である。亞爾然丁の公使をしてゐたのは千九百〇九年から千九百十一年までで、殊に前大統領タフト氏のときには日本駐劄の大使となつて東京に赴任する筈であつたが、殘念なことに當時十六ケ月にわたれる過勞の爲に全然健康を害して、病のため其任に就くことを得なかつた。外交官を辭してからは實業界に政治的興味を鼓吹することに努め、今現に合衆國商業會議所の對外委員長の任にある。また近頃紐育市の美術委員（アアト・コンミッション）の一人となつた。この間紐育市では非常の大仕掛で國防行列（プリペアドネス・パレイト）といふことをやつたが、氏はその時これが元帥（グランド・マアシャル）の任に當つた。此行列は銀行家、製造家、宗教家、醫者、商人等あらゆる職業の代表者無慮十四萬人の大行列で、之が總指揮者たり編成者たる任に當つて大成功を收め得たことは、氏が統率の手腕の凡ならざるを證するものであつた。

文筆の人として著者の文は極めて簡潔明晰である。また氏が政論家の常なる大言壯語を敢へてせず、精緻なる學者的態度を持する事に至つては、本章第七章モンロオ主義の起源に關する犀利なる一篇の史論がよく之を示して餘りある。本書はモンロオ主義そのものに就いての外、また南米問題に興味を促さうとするもので、殊に第十三章太平洋問題を論じたる一章のごとき、世界政策を論じたる用意周到なる一篇の論策として、わが日本の讀者の最も注意すべき所であらう。

コラムビア大學總長バトラア博士が本書序文の終りに『世界問題を單に自國の立場からのみ見ずに他國民の立場からも見るに至つて、はじめて世界の幸福と平和とは增進せられる。シェリル氏の著は

確かに此點を米人に教ゆるものである』と言つたのは、日本人としてもまた傾聴すべき言であらう。

人間は極めて皮肉(シニカル)な動物で、動もすれば逸早く他の短所や暗黒面をのみ見て取つて、其長所にはなかなか氣附かないものである。本書の著者は、他國民を愛するには先づ深くそれを知らねばならぬといふ意味を再三說いてゐるが、現に正直に云へば私なぞも在來米國を誤解してゐた一人であつた。合衆國民の物質的生活の一面をのみ見て、商賣本位(コンマアシヤリズム)の民とのみ思つてゐたのは、今親しく此國に留つて國民の內部生活を見、精神的智力的方面の現狀を見るに及んで、少からず自らの誤を覺つた。シェリル氏が南米に對する態度は此點に於て私共の深く學ぶ可きところである。國際間の惡感情の如き、多くは互に理解の足りないのに起因する事を思ふと、私はかの『すべてを理解するは、すべてを宥恕する所以』の語の眞意を、今更のやうに痛切に感ぜざるを得ない。

シェリル氏は足いまだ日本の地を踏まないが、他國民に對して之だけの同情と理解とを有する氏にして、若し親しくわが日本に來つて、全く人種と歷史を異にしたわが絕東帝國の文明を觀察し、氏が隣國の南米を理解したる如くに、太平洋彼岸の姉妹國たるわが日本をも理解したならば、それはただに日米兩國民の幸福のみではなからうと思ふ。

譯者は今遠く海外に在つて、本書の校正その他に關しては、友人一宮榮氏及び竹友藻風氏の勞を煩はした。二氏に對してここに厚く感謝の意を表する。

大正五年七月

米國紐育市に於て

厨川白村識

『新モンロオ主義』目次

第一章　南米とは如何なるものか

歐羅巴の事は其都市、國民、生活文明等に就いて隨分精細な知識を以て論じ得る人が米國人に決して尠くはないが、さて南米の『羅甸亞米利加』の事情となると、之に通じてゐる人は實になさけない程少數だ。しかも其少數の人たちは、大抵が僅に冬期西印度とか、巴奈馬運河とか、南米北部の諸港へ旅行して得た位の零碎な知識を有するに過ぎない。その結果國民全體からいふと、米人はすぐお隣りの南米といふものを全く理解してゐないか、さもなくば熱帶の暑苦しい日蔭に煙草を卷きつつ、時々頓狂な聲で Mañana! と叫ぶ南米人を椰子の木の葉蔭に想像してゐる。そして折々革命がこの氣倦い光景に僅に生氣を添える位に思つてゐる。しかし之は確かに事實の眞相を誤つたもので、先づ何も知らない畫家が描いた繪畫と同じ程度のものだ。（西班牙『マニアナー』は明日の意、怠惰者がいつも今日の事を翌日にと云つて延ばすを云ふ――譯者）

革命といふ事に就いては私は恐らく誤られた見かたをする一人だ。何故かといふと私の南米滯在の二年間には、一度も革命を見た事はなかつたが、歸途リスボンに上陸した時には革命の眞最中であつ

た。革命を一つ見るためには、プレエト河から歐羅巴までずつと出掛けて行かなければならぬ事を考へて見られよ。亞爾然丁やウルガイのやうな國に革命を見る機會のない事は、紐育のブルクリンに革命のないのと同じだ。南米人に對する月並な想像の誤謬は單にこの革命の一事に止らない。米人は南米人を餘り遠く離れて望遠鏡で見てゐるのだが、然も其近い方のれんずが熱帶の葉蔭で暗くされてゐる。また南米人は酷熱の氣候のために精力が衰へてゐると思ふのも誤謬だ。その國土の大部分は溫帶にあるか、さもなくば海面以上非常な高さにあるから溫帶の氣候になつてゐる事を忘れたのか、或ひは知らないのだ。エクアドアの大部分は赤道直下に在るが、その代り海拔一千尺の高さにあるため全く酷熱を免れて居る。他の南米の中央部並に北部の方も、やはり海拔、右と同じ位の高さにあるため斷じて熱帶の氣候ではない。いかにもカリベアン海に瀕する一帶の地の如きは高溫度ではあるが、南米の大部分は、地圖上の位置はさうでないにしても、合衆國と等しく溫帶の緯度に伴ふ極めて爽快な氣候を享けてゐる。

しかし『南米とは如何なるものぞ』といふ廣い問題を此一章のうちに詳論する事はいふまでもなく不可能だ。ただ共國土や人民に對する一般の見解が如何に正鵠を誤つてゐるかを示すだけの事は云へるだらうと思ふ。だから玆に論ずる所は、說明叙述といふよりは寧ろ一般の謬見に對する辯駁（明細書をつけた）である。或種の人々を覺醒し或ひは尠くとも自分の目で眞相を見るやうに促がせば足る

のである。不幸にして著者は未だ南米共和國の全部に足跡あまねき者ではないから、唯自分の觀察しただけを語り得るに過ぎない。しかし千九百十年にブエノス・アイレスに居た者は、その時、此都に集つた南米全體の主な政治家や思想家が四度までも一堂に相會するのを見る好機を得たわけだ。それは亞爾然丁獨立紀念祭、第四回全米會議（ゼ・フォオス・アメリカ・コングレス）、全米科學會議、亞米利加學生大會の四たびであつた。著者は時恰も此首都に在つて凡ての代表者と會見し、また其多數の人達と交を結ぶの快を得た。著者が心から南米人を好むに至つた所以は卽ちここに在る――私は南米人を知つてゐるからだ！

しかし私は順序を逐ふて研究の第一歩から始めて行かう。そして之から私どもが贔屓にしようとする南米人の國へ行く道中に就いて先づ述べたい。私と一緒に來られるならば讀者は必ず南米を好まれるに相違ないからだ。第一にそこへ着くまでの旅行の愉快なことと云つたら、いよ〳〵近寄つて實際を見る興味と變らない位のものである。しかしいくらエデンの樂園だつて、途中沙漠のなかを徒歩で行かなければならないやうでは行き甲斐もないが、ブエノス・アイレスへは、行く途中の旅行からして其愉快なことは一寸他に類のない位のものだ。先づ米國の港を出てから南米大陸へ行くには西印度を通る極めて愉快な航海がある。英國其他歐洲の港から出掛ける人は先づ途中晝間八日は陸に寄港する。途中には西班牙北部のギゴオや、其の驚くべき港灣などを見物し、奇妙なリスボンの古都を訪ひ、また世界の愛嬌黑子（ほくろ）の一つであるマデイラ群島中のファンカルも見物が出來る。それから大西洋

を横切るのに先づ六日間、この間は甲板遊戯に寸暇もない位だ。それが濟めば『ブラジルのヹニス』とも云ふべきペルナンブコで、合衆國からと歐洲からとの二つの航路は此處で合して一つになつて了ふ。そして海岸に沿うて船はバハイア（ブラジル金剛石の出る此國の海港）に留まる。次はリオ・デ・ジャネイロへ着く。そこの美さといへば實際行つて見た人でなければ本當の事は分らない。寫眞や說明の到底盡くすべからざるもので、熱帶植物の廣々と生繁つたなかに、砂糖の塊のやうな圓錐形の丘陵がそれを點綴してゐる。大都に屬する色々な繁榮の徵候を見るさへ頗る景氣がよい。

リオ・デ・ジャネイロからはサントスへ下る。その奥まつた、河に近い港から世界の珈琲の六割が出るのだ。そこからまた海岸に沿うて海路五日でモンテギデオに着く。之は廣大なリオ・デ・ラ・プラタの河口に位して人口三十萬に及ぶ代表的な西班牙=亞米利加風の都會だ。この河を溯ること百二十五哩にして、亞爾然丁の首府ブエノス・アイレスがある。人口約二百萬、羅甸人種の都市の第二位にあつて世界大首府の一つに數へられる。海を距ること百二十五哩の上流、ブエノス・アイレスの邊へ行つても、河幅はなほ且三十哩ある。そこへ着くまでは目に觸れるものすべて皆西班牙=亞米利加の風であるが、ブエノス・アイレスの都に至つては全然歐羅巴風である。維納やブラッセルスを知つてゐる人には親しみのある地だ。

南米諸國が物質的に如何に重要の地位にあるかを、一目瞭然に數字で示すことは難事ではない。歐

洲戰爭の突發の前年亞爾然丁の外國貿易は約十億弗に上り、ブラジルは約五億弗、智利は約二億弗、ウルガイは約一億弗の巨額に達して、他の南米諸國は一億弗以下であつた。いま物質的重要さの點から見て南米諸國が各々如何なる等級に立つかは一見この數字で明瞭であるが、更に亞爾然丁が其首位にある事は下の事實によつて一層强められる。即ちブラジルの人口二千一百萬人に對して亞爾然丁は九百萬人であるのに、外國貿易の上から見ると、後者は實に前者の二倍に達してゐるのである。

亞爾然丁の此物質上の地位が、その大なる首府に現はれてゐる事は怪むに足らない。此國はそこへ行く途中に是非通過しなければならぬ多くの熱帶國のやうな風景絶佳の國では決してない。先づ合衆國のミシシッピイ河以東より稍大きい位の廣漠たる大平原だと想像すればよい。それに米國のよりはもつと廣軌の鐵道が、歐洲式に行屆いた設備に出來てゐる。米國では妙な譯（わけ）で今もつて不衛生な中世風とも言ひたい寢臺臥床（バアス）を使つてゐるが、此國の汽車は皆寢臺風（スリイピング・コムパアトメント）に出來てゐる。アンデス山の方へ行く急行列車に乘つてブエノス・アイレスを出發すると、先づ山麓の小丘に達するまで十八時間で行ける。此距離の間は樹木の一本もない坦々たる平野を走るので、見渡すかぎり家畜の大群に滿ちてゐる。車中から見ただけでも此國の富裕が知られる。小麥その他穀物の莫大な收穫と所謂畜産工業（キャトル・インダストリ）と稱する農業の副産物は、實にこの廣大なる沖積層平原の賜物である。そしてこれ等の産物がブエノス・アイレスに食品を供給し、更にそれからまた外部へと送り出されるのだ。

米國に較べると亞爾然丁の方が富の分配はずつと平等に行はれてゐる。生活費も非常に高い。紐育市の倶樂部では入會金三百弗を超えるのは無いが、ブエノス・アイレスの主要な倶樂部の入會金は金貨千五百弗であつて、其倶樂部が實に會員二千人に達してゐる。私の滯在二年間には、街上で醉漢や乞食を見た事がない。最下等の貧民でも靴は上等のを穿いてゐる。人口約二百萬の大都にして、貧民窟といふものが一つもないとは驚かざるを得ない。

千九百十年、亞爾然丁獨立百年の紀念祭が行はれた。この重要な催には世界の五大强國から代表の特使と艦隊とを派遣し、多くの他の强國も、稍控へ目に此例に倣つた。百年祭の三週間内に、ブエノス・アイレス市は街上點燈のためばかりに三百萬弗を費した。此國が公共の饗宴を如何に大仕掛に贅澤にやるかは、之を見ても一斑が知られる。

南半球の四季は北半球の正反對であるといふ事を、學校を出てから大抵の人は忘れて了つてゐる。米國で夏の間は、あちらは春だ。我々が暑がつて汗を流してゐる時に、あちらは涼しい。此事は色々の點に於て南米人に都合がよいので、たとへばブエノス・アイレスでは、佛蘭西の巴里から市の建築師を賴んで來る慣例になつてゐる。巴里で冬の仕事が濟むと建築師は赤道を越えて行つて、更に此他郷の冬に會する。亞爾然丁の人が其立派な首府にすべての改造を施すのは、此建築師を顧問にしてゐるのだ。

此四季の相違が彼等にとつて都合のよい事は更に他にもある。歐米第一流の歌劇家（オペラ・シンガア）はこちらで任期を果してから、半年間は南方へ出掛けて行くから、冬期の間南米人は其美音に醉ふ事が出來るのだ。どうかすると米國の方での承諾を待たずに、先づお先きに彼方（あちら）へ招ぶ事さへある。現にカルウソの如きも紐育で演るより二年も前にブエノス・アイレスで歌つたし、ティタ・ルッフオ其他の名手も矢張りさうであつた。此大都の歌劇劇場（オペラハウス）は紐育のよりも確かに立派で、趣味に於ても勝つてゐる。米國式の桟敷の『蹄鐵がた』に加ふるに、巴里オペラの立派で空氣の流通のよい階段（ステイアウエイ）式と遊歩場（フオアイエ）式を折衷してゐる。自働車に乘るにも紐育でのやうに、半時間或ひはそれ以上も入口で待たされるやうな事はなく、劇場の下に通つてゐるいくつかの車道があつて、それへ各々皆一時に澤山の自働車を引込み得るため、少しも外氣に當らず、其儘すぐ乘り出して行く事が出來る。

お國自慢で北米ばかりを好いと思つて獨り得意でゐる外人を驚かすに足るものが、ブエノス・アイレスには隨分色々あるなかに、かのでぱあとめんと・すとあの思ひ附きなども亞爾然丁人はなか〱發達したものだ。ガス・エンド・チェーヴス商會などは大商店一軒では滿足せず、いくつもの店を持つてゐる。それが市中の各部にあつて皆商品も別々だから、一つは衣類專門、一つは日用品ばかりといふ風に出來てゐる。旅館なども新式で、其或者は隨分贅澤なものだ。プラザ・ホテルの如き、米國のいづれの旅館にも劣らぬ最新式で、紐育倫敦巴里にある他のリッツ旅館に比しても遜色なき營業振

だ。また此市の地下電車は紐育市のよりも優れてゐる。

南米の熱帶國には勿論雨期と乾燥期とがある。しかしブエノス・アイレスでの天候は、佛蘭西のリギエラ地方にありと廣告されてゐて而もそこでは滅多に見られないやうな好い天氣である。日あたりは實によい。冬は寒いが、氷點に達する事は先づない。夏も寒暖計が九十度に達する事は稀だ。

此國の人は主として北部西班牙と北伊太利から來た雜甸人種の有用な寄集りである。亞爾然丁は半ば西班牙なかば伊太利人の移民約二十五萬人を年々受け入れる。政府は之等の移民を好遇し上陸させて家屋食料まで支給し、國中所々に無料で配分してやる。千九百十年の一年間に移民は一千十一ケ所に別々に配分されて、首府に分離してゐる事を許されなかつた。

亞爾然丁人は色よりは形に趣味を持つてゐる。その國旗は淺黄と白で、これが國土とその趣味とを代表してゐるやうに見える。到る處に灰色とか薄褐色とかまたは他の鈍い色調が諸君の目につくであらう。伊太利の移民共は最初來たとき派手やかな頸卷をして來るが、すぐにそれを棄てて了つて、矢張り新しい周圍にもつと適合したものに代へる。亞爾然丁の女は非常に贅澤な身なりをするが、彼等と雖も派手なものに對しては矢張り國民的反感を持つてゐる。有名なブエノス・アイレス競馬場にある馬術俱樂部の構内に於ける位、立派でしかも地味な服裝をした集會は一寸外では見られないだらう。馬見所はみな混凝（コンクリイト）土で出來て、俱樂部の特別馬見所の頂上には二百人を容るるに足る食堂があ

る。四面を硝子で張りつめ、食事をしながら競馬を見る事の出來るやうにしたのだ。また農業協會の競技場に至つては、此種のもので世界第一の構造で、經費實に四百萬弗を要したものだ。

亞爾然丁で最も通俗な遊戯はアッソシエション式の蹴球（フットボール）で、英吉利人の所謂"soccer"と稱するものだ。米國では春夏の候になると空地は皆野球をやる少年で一杯になるが、それと同じく亞爾然丁では青少年は皆"soccer"の決勝點で蹴球をやつてゐる。大學の運動競技はまだよく發達しないが、倶樂部間の競技（マッチ）は隨分熱心でもあれば、また好いティイムも出る。英國の專門の選手たちがブエノス・アイレスへ行つた時も、勝つのには手一杯であつた位で、亞爾然丁の最上のティイムに對して得點は三に對する四に過ぎなかつた。英吉利のテムス河のヘンレイあたりを思はせるやうなプレート河の心地よい入江タイガアまで出掛けると、澤山の漕艇倶樂部があつて、漕手八人の乘組は實に立派な訓練を經たる堂々たる者である。

南米各國の憲法は大抵わが米國のに倣つたもので、多くの場合それに改善を施してある。たとへば亞爾然丁では大統領の任期は六年で、大統領は直ちに再選せられる事は出來ない。それは行政官をして自己の再選を得るために、聯邦の『公聯機關』を利用するを許すは不都合だと信ぜられてゐるからだ。亞爾然丁では選擧は義務的で、選擧投票をしない者は罪人名簿に記載されて米貨四弗四十仙に相當する罰金を課せられる。

しかしながら選擧に關して亞爾然丁が取れる此進んだ地位が、凡べての姉妹共和國に於ける自由解放に關する現狀を代表してゐるのだと云ふことは出來ない。これ等の國の或者の無教育な奴僕に選擧投票が許されてゐないと云ふ事實に對して、吾人は今まで隨分不當な酷評を下したものだ。併し之は吾々の爲す可き事ではない、殊にまた墨西哥の新聞が下のやうな事を繰返して書き立てた以上、どうして他國の批評などが出來ようぞ。『合衆國に於ける黑人投票者の奇怪なる狀況。——多くの場所で有福なる白人は有色の同胞に對して投票を許さない。最近の配分によれば、各選擧區は千九百十四年に、二一一、八七七の市民を有してゐた。しかし北部及西部では、各選擧區で多數の投票が投ぜられたに拘らず（第三オハイオ區では六四、七七五。第七インディアナ區では六二、九八七。第七イリノイ區では五六、九〇七、等）、南部諸州では投票數から黑人の投票者を除去するため、一區につき五千票以上が投ぜられる事は稀である。——ジョオジア、アアカンサス兩方共に五千票以下を投ずる數區あり、またフロリダに至つては五千票以上を投ずるものただ一區あるのみ。第四ルイジアナ區は僅に三四五四票を、第五ルイジアナ區は三〇一四票を投じた。云々』。外國人のするかかる批評、かかる干渉を私共はどうして快しとしようぞ。一代議士を選擧するのに、二一一、八七七人のうちから僅に三千人だけに投票を許してゐるやうな窮屈な選擧區にゐる人間が、羅甸亞米利加共和國の選擧上の慣習を彼之云つたりするのは止めた方が可いのである。殊に他の國家の政治組織なぞは、私共の容喙すべき

問題ではないのだ。

思ひ附の好い法律は、之が運用上に時としては制定者自らの豫期しなかつたやうな或利益を齎らす事がある。其一例は亞爾然丁の法律に、年々一萬二千の壯丁を軍務に服させる規定があつて、射的家の資格あるものだけは此徵集を免れ得る事になつてゐる。其結果亞爾然丁の靑年はつとめて銃器を取扱ふに堪能ならん事を心掛ける、政府が特に設けた多くの射的場で、彼等は屢々其技を練つてゐる。だから射的の出來る亞爾然丁の男子の割合と米國のそれとを較べると、米國の方はなさけない程に後れてゐる。思ひ附きの好い法律が、其副產物として射的上手の國民を生ずるに至つたのである。

亞爾然丁は米國と同じく聯合政府と各州政府とを有し、聯邦裁判所、州立裁判所なども之に附屬してゐる。その政府の廉潔を語る一證左としては、下のやうな事實を想ひ出すのも面白からう。卽ち亞爾然丁の二千三百萬弗の巨額に達する製艦契約の競爭(この競爭に加はつた者は七ケ國民を代表する會社數實に三十七に及んだ。)が、いよ〳〵千九百十年に契約成立した時、合衆國の入札者に此契約を許した點に就いて行政上一點の非難すべきものをさへ、反對黨の新聞紙と雖も指摘する事が出來なかつた。恰かも合衆國共和政府か或ひは第一流の歐洲國民の政府によつて行はれたると同じく、潔白にすべてが處理せられたのであつた。

南米の自由解放に盡した最大偉人は亞爾然丁の將軍ホオセ・ドウサン・マルタンで、南米の自由の

ために爲した功業はまさに北米の華盛頓のそれに比すべきであらう。先づ千八百十六年に自國を解放し、アンデス山を横切り、順次、智利、祕露、エクアドル等を自由ならしめた。之に對して熱烈な感謝を捧げた國民が將軍を總統(ディクテイタ)にしようとした時、彼は何と答へたか。その立派な言葉は、ながく後世に傳ふべきものであつた。曰く『自分が戰つた國々に對する約束は既に果された。卽ち彼等を獨立せしめ、政府の建設を彼等に任せれば足るのだ。』アングロ・サクソンの共和論者にして嘗て選擧の自由に對するこれ以上の自信を明言した人があつたであらうか。サン・マルタン將軍はあらゆる名譽を辭退し、金錢の贈與を斥け、佛蘭西に退隱して、晩年には世に聞えず、淸貧のうちに餘生を送つた。

　南米にとつて仕合せなのは、家族が多人數なのを美なりとする風習だ。亞爾然丁の內閣の或大臣に小供を十七人持つてゐた人があつた。他人(ひと)がお目出度うございますと云ふと、一寸妙な目附きをして、いや之はまだほんの手始め位な事に思つてゐると答へるのが常であつた。金持ほど澤山子供を持つ傾きがあるが、之はわが米國では不幸にしてさうは行かない。新世界の雜匈人種間で土着住民の增加の率は、我等アングロ・サクソンのそれにも勝つてゐる。そして此事實は今後二代もさきへ行くと、確かに重要な結果を齎らすであらう。

　また南米人が外國人を遇するの懇切叮嚀なのは有名な話で今更こゝに喋々するを要しない。之は單に國民の胸の中にばかりでなく、明らかに法令書にも規定があるのだ。たとへば如何なる外國人と雖

も、亞爾然丁へ來て、土着市民と全く同一の立場にあつて、銀行業その他如何なる業務をでも營む事が出來る。米國では外國人にこんな取扱を與へてはゐない。此一般通則に對して唯一の除外例とも目すべきものは、商業上の旅行者が課税される位な事だらう。また亞爾然丁に對する私の個人的關係からいふと、私はかう云ひたい、此國人の間に住まつた如何なる外人と雖も、私が抱く程までも好感情を以て故國に歸つた人は今まであるまいと思ふ。

米國人が全體として、眞に南米は如何なるものぞと云ふ事をよく知らないのは遺憾である。しかし此問題に就いて毫も知る所なき人と雖も、大に役には立つてゐる。近頃は隨分全米主義（パンアメリカニズム）を惡しざまに云ふ論者がある――序に云ふが、此人たちは概して先づ南米人の間に住まつた事もないくせに、色々と勝手な事を書く人たちだ。――併しかういふ反對論者と雖も、此問題に對する世の注意を喚起して吳れるといふ點から云へば、大に私共の援助になつてゐるわけだ。全米主義（パンアメリカニズム）を害するのでなくて、之を助けて吳れる人たちだ。何となれば先づそれを研究する事が何より肝腎なので、知られさへすれば、それ自らが最も有力なる主張者になるからだ。

全米未來の平和を保護する策を建てようと試みるに先だつて、先づ其準備として『羅甸亞米利加』の著しき商業上の進歩に就いて一考したい。何となれば新世界全體を通じて一層よき理解を得んがために、わが商業組織が如何に國家に盡す所あるかを、之によつて示す事を得るからだ。其次に私はモ

ンロオ主義を諸方面から論じよう。そして此主義が何故に外國で誤解せられてゐるかを明らかにして置いて、その上で、此主義をして最近の事情に適せしめ、目前の問題を解決する時の旗幟にするだけの修正增補の案が立てられるわけだ。さてこれ等豫備的研究を終つての上で、第九章に入つてから全米主義を我米國の將來に適用し、依つて以て有事の日に備ふる外交策の完全なるものを得んとする點まで、論及しようとするのである。

第二章　南米の市場、世界的平和仲介者としての商業

商業には先づ取引をする相手の國人を知る必要がある。そして國際間の誤解の主なる原因の一つは、一國民が他國民の眞の特性を翫味する事が缺けてゐるからだ。卽ち互に相知る事が足りないのだ。商業は一層よき理解を生ずるが故に平和の仲介者である。南米に關して、今は數年前程に一般的でないにしても、今日と雖も猶如何に米人が無知であるかといふ事を考へて見ると、わが南米貿易の遠く英獨に及ばざる理由が直ぐわかる。或る新英蘭土(ニウイングランド)の大都で商業會議所の會長が私を聽衆に紹介するとき『人口十萬人以上あるブエノス・アイレスから』來られたと云つた。如何にも御尤で、あすこの人口は約二百萬人に及んでゐる。またデムバアの板硝子商が私の公使館へ、ブエノス・アイレスの商店

では窓に硝子を使ふかと云つて問合せて來た。

米國都市の或ものは、今日なほ未だ十分に外國貿易の眞價を知らないのがある。しかし他の都市は既によく輸出業が製造業者に與ふる利益を周知したのがあるが、この覺醒の原因に至つては都市によつて色々と異なつてゐる。一例を云ふと、シンシンナティでは外國貿易に對する興味と知識とが下のやうな具合で出來たのだ。千九百〇七年の秋不景氣の時にフェイ・エガン商會は獨り時間一杯に營業してゐたが、他の製造所では大抵そんな事は無かつた。といふのはそれより少し以前に此會社では『外國部』があるといふ事が製品の文房具にも利する所があらうと云ふ見込をつけて、とにかく小規模の外國部を開始した。それが千九〇七年の秋には十分の大きさに達してゐたため、工場の全力を注いでやるだけの仕事を得られるやうになつてゐたのだ。時恰も內地商業の不振、市場の萎縮のためにシンシンナティの他の商會では注文が全く途絶えてゐた。此一大教訓が此市の活動家の心を動かしたと見え、其結果、此地の製造家は爾來外國部を設立して、よし他に目的はないにしても、これを內地不景氣の際に吹き流されない用心の碇とするに至つたのだ。

外國貿易の問題に關して、私が處々の商業會議所でやつた前後約二百回の講演の間に、如何すれば一番うまく取引が得られるだらうと云ふ質問を屢々受けた。之に對する最良の返答としては、昔話にある市の小供が始めて田舍へ行つて、百姓に『牛が乳を吳れるのか?』と訊いた話を思ひ出すがよ

い。百姓は之に答へて「お前、そりゃ自分で行つて牛から乳を取らなけりゃ駄目だよ」と云つた。恐らく此話は下の事實を見ると一層剴切に感じられるだらう。即ち世界の一大市場たるブエノス・アイレス市に四萬の英吉利人、三萬五千の獨逸人、三萬の佛蘭西人が居るのに、米人はといへば、僅々約四百人しか居ないのだ。牛の處へ行つて乳を取つて來なけりゃ駄目だといふことを、どの國民がよく實地に知つてゐるか、又どの國民が今日なほ未だ此重要の事實に氣附いてゐないかと云ふ事が、容易く之によつて解るだらう。

ここに少しく世界の市場に就いて論じ、特にまた新しく外國貿易に興味を感じたる製造業者が、最も手近に利益を豫期し得べき市場に就いて研究して見たいと思ふ。先づ重要なる市場と目すべきものを大體三つに分類して、第一に歐羅巴、第二に極東。第三に南米『羅甸亞米利加』とする。さらば此三者の相異は如何。今日までその米國の輸出業者は其注意をもつぱら歐洲の市場にのみ注いでゐた。かれ等はここに最良の代理人を送り、また極めて好成績をも得た。しかし歐洲の市場で歐洲人を相手に競爭をする段になると、關稅、言語、品質に於て、また地方の要求を知る事に於て、どうしても歐洲人の方に勝味があるのはいふまでもない。われ等米人は、歐洲人の本國へ出掛けて行つて彼等と競爭する『外來者』である。

更に歐洲より目を轉じて極東を見ると、ここでも亦我等は歐洲人と競爭の位置に立たねばならぬ。

ここでは船賃の點では彼等の間に相違はないが、其代りまた此地方の取引には特に必要な市場の要求に對する特殊の精細な知識を、わが輸出業者は缺いてゐるといふ不利益がある。支那人日本人及び印度人は從來既に見慣れた品物を買ひたがる。また慣用の遣方で出來た荷造を好み又屢特殊な商標のついた物を强ひて求める風がある。だから米國の輸出業者がこれ等特殊の要求を十分に呑み込んで、歐洲の熟練な商人と極東で對等の競爭をなし得るまでには隨分長日月を要し、また費用もかかるのだ。

さて以上の二大市場から轉じて南米の方を見ると、大に事情を異にしたものがある。何となれば他の處ではわが米人に邪魔になつた不利な點が南米では無いからである。實際南米人は非常に『珍らし物好き』であるため、この點で頗る有利な位置にあるのは米人だといふ事がわかる。世界中どの國民と雖も、米人位に新奇な物を造りいだす用意のあるものは他に無い。これは特許局の記錄を見れば一見してわかる。南米人は新奇の物を好み、そのためには高價を拂ふに躊躇しない。從つて米國の製造業者を待つ利益が如何に敏速であるかは驚くべきものがある。わが新しき輸出業者が此南米の市場では歐洲の競爭者よりも優越の地位を占め、かの歐洲や極東に於けるごとくひどい不利益のもとに競爭するのとは全然趣を異にする事を觀取し得るのは、實に以上述ぶるが如き理由あるがためである。苟も外國貿易に着手しようとする製造業者に向つて、先づ其注意を南米に向けよと、確信を以て勸め得るのである。

この南米との取引は、單にわが米人を利するのみではない。片方にだけしか取柄のない所謂『水差』の柄のやうな取引』とは違ふ。これは普通の商業上の理由で双方の利益になるといふばかりでなく、南米人にとつては特別なおまけの價値があるのだ。と云ふのは、米國も今では非常な投資國民になつてゐるが、南米は其偉大な富源を開拓するために資本が要るのだ。特にまた、歐洲の大戰亂が、嘗て外國に投資を求めてゐた其巨萬の貯蓄を蕩盡しつゝある際、尙更この必要がある。わが南米貿易の增加に伴うて益々米國の銀行家は、ここに安全にして有利なる投資の機會を知るに至るだらう。換言すればわが國の過剩の富をこの方面に轉じて、南米人と共にわが米國人をも、双方を富ましめる事になる。また私は敢へてここに豫言するが、この投資の可能な事の價値が實地に知られるやうになれば、南米各國の政府も、勢ひ外資を保護する事に一層骨を折るだらうと思ふ。さすれば政府では益々かかる投資の增加を急速ならしめる事になるからだ。

南米諸國の物質的重要の地位に就いては、前章に於て既に之を二三の數字で示した。即ち亞爾然丁が十億弗、ブラジルが五億弗、智利が二億弗、ウルガイが一億弗。外國貿易の年額が之だけの額に達すると云ふ事は、南米の購買力の大なるを示し、この方面の販路が吾人の研究に値するを證するのみならず、また其購買力が如何に分布されてゐるかをも示すものである。しかも今日までわが米人が南米の市場で相當の成功を收めてゐないのは、ここに種々の理由があるのだ。

一つの理由は先づ銀行の足りないと云ふ事、この點は今現に十分な改良が施されつつある際だが、私のいふ意味は、送金その他の普通の便宜が缺けてゐるといふのではない、事實そんな事はないからである。が在來屡かういふ例があつた。卽ち米人が南米で手がたい事業を引受けるのにも手を引くといふ場合がある。それは何によるかと言ふと、英獨佛の銀行が其事業に關して出す報告に過られるのであつた。現にかういふ話がある、米國の西方中部から來た或契約者が、亞爾然丁の或大鐵道で守る仕事に受負の入札を見合せた事がある。之は全くブエノス・アイレスにある英吉利の或銀行が、此鐵道に就いて彼に與へた餘り面白くない報告を基(もと)として考へたからである。しかも此英吉利の銀行の重役のなかには、當時この鐵道の業務に携はつてゐる人が二三あつたので、從つてまた此鐵道の財政狀態が非常に好いといふ事も特に熟(よ)く知り拔いてゐるのであつた。卽ち此鐵道は使用人五千人を超え、受負契約に對しても十分な支拂をする力を持つてゐるのに、全くかの銀行の報告にあやまられた計りでこの米人は入札を見合せて了つたのだ。かういふ例は擧げればいくらもあるが、此一例だけでも我が不利な點はよくわかると思ふ。但し今では『ナショナル・シティ・バンク』其他米國の大銀行が之に手を着けたために、此點はよくなりつつある。

銀行の事を云つた話の序に一言したいのは、亞爾然丁は以前から長く『中央銀行(セントラル・バンク)』卽ち國立銀行をうまく運用してゐる事だ。亞爾然丁紙幣の價値の保證になる其『兌換金庫』には、世界で第四位にあ

る多額の豫備金貨、約二億六千萬弗の備があり、之に優る金貨準備のあるものは露西亞と佛蘭西と合衆國の三ヶ國のみだ。その結果として、勿論、亞爾然丁ペソ紙幣（一ペソは邦貨約七十三錢位）の價値の動搖せざる事は、米國紙幣と毫も變りはない。ウルガイ紙幣もまた同様確固たるものであるが、唯ブラジルや智利の方は、未だ不幸にしてそこまでは行つて居ない所がある。

米國には更に今までも一つの弱點があつた。即ち歐羅巴や極東の方へは第一流の代理者を遣る習慣になつてゐるが、南米へ出掛ける商業代理者になると、熟練の積んだ販賣人の中から選ばれた者は比較的少數に過ぎない。ここに一つの適例を云ふと、嘗てブエノス・アイレスの私の公使館へ一日或男が訪ねて來て、封じた紹介狀を持つて來た。その封じてあつた理由は讀んではじめて解つた。之は紐育の或大會社の副社長からの紹介狀で、ざつと下のやうな事が書いてあつた。

拜啓、曩に國務省を經て當方共へ宛て御報告被下候義を、取急ぎ實行仕度と存じ、此紹介狀持參の一代理業者を貴地へ御送申候。當人は荊妻の弟に有之、紐育に於てはこれまで種々の事業に携はり失敗仕候得共、貴地に於ては事業を開始致候事甚だ好都合と存じ、當人も御地に於て將來の成功を希望罷在候。云々。

南米へ送られる人物にはかういふ風の者が甚だ多いが、此一大販路を目して恰も商業界の屑籠のやうに遇するのは非常な誤である。勿論その男は西班牙語も話せなかつた。苟も外國へ派遣される代理

業者たる者は、これから仕事をしようといふ其國の言葉の話せる者を要する位な事は、今更說く必要もない筈だと思ふ。誠に今或亞爾然丁人が紐育へ來て仕事をしようと云ふのに、英語が全く話せない者であつたら、人は之を何と思ふだらう。幸にして私共には、西班牙語は他の如何なる外國語よりも覺え易いのである。

製造家が之から外國貿易に手を着けようと思ふが、代理者を送る費用を單獨で負擔する事が出來ないとか、或ひは欲しないとかいふ場合に、どうかすると他の二三の製造家と聯合で一人の代理者を立ててすべてを代表させる事がある。之は果してやり甲斐のある事だらうか、――それは勿論その代理者が一人で代表する製造品の種類如何による事である。嘗てブエノス・アイレスでかういふ代理者の一人が、私にどうも旨く行きませぬと云ふ話をしたが、聞いて見ると此男は木綿製造家と農具製造所と汽鑵車會社の三つを掛持で代理してゐるのだといふので、失敗の理由も成程と思はれた事がある。

私の目に附いた今一つの例で、之は非常にうまく行つたのがある。それは立派な文房具の製造者と、骨牌屋と廉物の銀細工屋と、此三つを一人で代表した場合である。かういふ組合せで實際に仕事をすると如何なつたかといふと、先づその代理者は或る大きい『でぱあとめんと、すとあ』へ行つて此三種の製品を提出した。買手の方では文房具をいくらか買つて、他の二種の提供品は拒絕して了つた。ところが此文房具の注文に應ずるといふ事に關聯して、勢ひ同じ『すとあ』へ幾度も出入する必

要があつたが、その結果、これが縁になつて、其地を去るまでには、此男の代理して居た他の凡べての製品の注文も取れる事になつた。若し單に銀細工だけを代表してゐたならば、恐らく最初の時に拒絕られて了つたきりになつて、銀細工の注文は得られない事になつたのだらう。それが他の種類の商ひで出入してゐるうちに得られたのである。だから其人の代表する凡べての製品が同一の買手に提供される場合には、聯合の代表者も大に有效に仕事が出來ると云ふ敎訓が此話に現れてゐる。

南米人が長期間の貸賣を求めるのは事實だ。しかし之は一方から云ふと、支拂が手がたいといふ信用の證據として、歐洲の製造家が南米人にかういふ便宜を提供したために、さうなつたと云ふのも事實だ。ブエノス・アイレスでアル・ジイ・グン商會の行つてゐる優秀な商業興信所の支配人が公にした所によると、平均して此市の商人の信用は、紐育に於ける商人の信用と同じ程度に良好だといふ。また合衆國商業會議所の名譽副總裁ファカア氏の說では、多年南米との取引をやつたが、氏は貸倒れの爲に一弗と雖も損をした事は無いさうである。

亞爾然丁を旅行すると、國土の非常に平坦な事に氣が附く。ブエノス・アイレス市は海洋を距ること實に百二十五哩であるのに、オオ・デ・ラ・プラタ河は此市で三十哩の廣さがある。之で見ても水力を供給するやうな水の落下のない事がわかる。それから此國は石炭も不足だ。この二つの事實あるが爲に製造業は實に多額の費用を要する。從つて米國の製造家にして若し此國に販路を確立するなら

ば、該地方の工場の爲に後になつて商賣を奪はれるやうな傾向は、支那に於けるよりも少いといふ事が、之でわかるだらう。支那では近頃に出來た工場が、旣に米國の鐵軌や木綿製品の製造家よりも安價に賣り出してゐるのである。だから一朝販路を確立さへすれば、其取引の鞏固な事は此事實で明かである。

おもへば南米との一大貿易の戸口を塞いでゐるものは、ただ一つの『惰性の龍』あるのみだ。しかしわが米國の有名な企業力がかかる奇怪な神話的動物に妨げられて、其戸口の彼方にある立派な機會を長く逸し去らうとは思はれないのである。

第三章　商業會議所、國際的並に國民的にそが盡すべき愛國的任務の機會

本章に於て論じようとするのは、此大なる南米方面に活動するに當つて、米國には今直ぐ手近に、どのやうな團體的設備があるか、又その設備が商業上並に國家のために、如何なる任務を盡し得るかといふ事に就いて、少しく考察したいと思ふ。今若し米國人が、政府によつて代表されたる者として

ではなく、民衆として、全米主義（パン・アメリカニズム）の進歩が如何に重要だかと云ふ事に氣が附くならば、わが國民史上に、嘗て國家の進歩を妨げた奴隷制を排したる先代の人々と等しく功勞あるものとして、現代の人も亦後世に傳はるであらう。

ここに『民衆』と云ふ意味は、昔の市會（タウン・ミイテイングス）が體現したる政治機關と同一の意だ。即ち地方的利害關係の事柄に就いて市民が自由討議をする會合であつて、國政に於けるが如く之を政治的劃一主義で決するのではなく、如何にすれば共同體の爲最良策なりやの問題に關して黨派を離れての意見の一致で定めるのである。かういふ會合によつて以前に如何に立派に有力な民主的組織を發達させてゐたかを、今では吾々は忘れて了つてゐる。そして政治界に關係ある一切の事柄は、當然大政黨によつて取扱はる可きものだとのみ思ひ込むやうになつた。吾々はなるほど一國民としては黨派によつて政府に委托され、恐らく將來も長くさうであらう。しかしそれだからといつて政治的調整の一方式として其範圍內でこの昔の市會のやうな結構な方法のあるのを、全然放棄し或ひは忘れて了つてゐるのは、實は申譯の立たない話である。現に私なぞはかう信じてゐる、即ち此立派な舊制度は棄てられもせず忘られても居ず、却つて更に健全な狀態で近年復興されたと思ふ、それは即ちわが米國の大小都市で近頃著しく注意を惹いた商業會議所運動に現はれてゐる。

近頃は著しく此團體の數が殖えたのみならず、既に在來あつた多くのものも更に改造されて一層の

活氣を呈するに至つた。千八百〇一年には商業會議所は單に四ケ所で、ボストン、ニユウ・ヘヴン、紐育、及びチャアルストンに在つた。千八百五十八年には唯の三十ケ所、そのうち十ケ所は商業會議所で、二十ケ所は商務局であつた。それが現今では約四千に達して、殆どいづれも皆一昔前の、お手本になつた以前の會議所に較べると、遙かに活氣があり從つて有效な働をしてゐる。數に於ても性質に於ても一般に此長足の進歩をしたと云ふ事は、或一致運動の結果ではなく、また一つの中心から指導されたものでもない。吾々の間に起つた能率に對する要求が增加し確固となつた自然且有用な結果の一つとして出來たものである。

最近二十年間米國は政治上のみならず、實業に於ても根本的の大掃除をやつた。之は米西戰爭によつて吾々に與へられた新しい國民的精神の結果だ。此戰爭は部分的の傷害を治療し、更に强烈な國民的愛國心を鼓吹したものであつた。或制度は、單にそれが在來存在してゐたからといふだけの理由では、もはや立てなくなつた。それが存在するだけの立派な理由が若し示されなければ、勢ひ公德や實利の新標準に合體するか、さもなければ經濟的の掃溜へ棄てられるより他(ほか)、致方が無い事になつた。かういふ效用如何の新試驗にかけられたものは單に商業會議所ばかりではない。此傾向は米國の國民生活のすべてにわたり、純正食料品法、純正藥品法などの新規則にあらはれ、またわが政治組織の一般にわたつて修補を加へる事にもなつたのだ。この一般的運動のお蔭でこそ多くの商業會議所は更に

活氣を呈し新生命を得、一層有用のものとなつたばかりでなく、また市俄古、ボストンの如き大都會の或ものに於ては、商業團體の聯合が行はれるに至つた。かういふ都會では多少たりとも活氣に乏しい小團體は、更に有力なる團體に併合されて了つたのだ。

絶對に黨派心を離れて現存の實業團體を合同させて了ふ事が、どれ位まで市の利益となるかといふ事實の證明として、市俄古の商業協會及びボストンの商業會議所の適例を示し得る事は、まさに私共の誇とすべき所である。また費府（フイラデルフイア）に於ても之と等しく、同市の有力家の盡力で、其地に或小さい商業團體を一大中心團體に合同させる事が遠からず立派な成功を收める事は期して待つべきである。

米國の西方中部では一般に認められてゐるかういふ事實がある、即ちピッツバアグ、バファロ、クリイヴランド、シンシンナティ、及びデトロイトの商業會議所が、最近二十年間の時々（ときどき）に於ける共有效の程度を比較して見ると、この期間に於ける之等各都市の發達が違ふ原因がよく分る。即ち人口の上から見てのこれ等の都市の等級の變化は、その各商業團體の活動の程度の差と、驚くべきほどよく一致してゐる。今日の商業會議所が、たまにしか開かれなかつた舊式の落莫たる會合とは如何ばかり趣を異にしてゐるか、また多數の副委員が單に昔風の地方的利害の問題を論駁するのみならずして、更に進んで將來其社會の利益たるべき新活動に手を擴げるのに如何に熱心であるか、これ等の點は米國の多くの商業會議所を歷訪する機會を有した人のみな驚嘆するところである。しかし之は、先祖がや

つてゐた有名な市會(タウン・ミイティングス)によつて喚起された地方的利害の念を、更に復活させるといふ事によつてのほか、如何(どう)してかういふ仕事が出來ようぞ。

しかしかういふ商 團體も、時には誤つた勘違ひの方面に力瘤を入れてゐる事は認めねばならぬ。かういふ事は固より度々あるのではない。しかし嘗て私は或州の首都の商業倶樂部で講演した事があるが、其市(まち)では市の住宅地を變じて商業(あきない)の中心にしようと當時專ら苦心をしてゐた。しかし考へて見ると、市中で既に營業してゐる商店の位置を單に變更したりするよりも、外(そと)から何か新しい利益を求める工夫をするために皆が一致協力した方が、どれだけ益になるか知れないだらう。そこへ行くと市俄古の商業協會なぞは全く面目を異にしたもので、市俄古の製産品を廣告販賣する爲に南米のブエノス・アイレスに新しい建築物を造つて、大膽に新方面を切り開いた。之はチャタヌウガの市内で、其地の製造家協會がやつた遣り口と同巧異曲だが、ただ市俄古の方は、坐して買手の來るのを待たずに、出品物をどし〳〵豐富な市場に送り出して、こちらから遠くまで乘り出して行つたといふ點が違ふのだ。

商業團體がかういふ風に活氣を盛り返して來たと共に、ここに一つ新しい職業が出來た。之は今も隨分値打のあるもので、將來は更に益々立派な職業になるだらうが、それは各商業會議所の要する有給の幹事である。此任に堪へ得るためには、かういふ訓練の出來た人物が、常に其所屬の團體に卒先

して行くだけの人でなければならぬ。此事實は之から益々發達して行く新方面に、立派な訓練ある專門家の職業をつくり、また今現にこの人たちは共素養と技倆とで立派に任務を果しつつある。この幹事の人たちが集つて今では全國商業團體幹事協會といふものを組織して、國家のためには將來最も有望な有力なる團結をつくつて居る。この幹事は皆共所屬の商業會議所で實に『武器を持つ働き手』であり、またいつも本部に詰めてゐて、絶えず一切の事件を纏め、事情精査の任に當るのである。之は人々が協力してやる仕事には非常に必要な事で、殊に船頭が多くて船が山にのぼる危險のありがちな、有志家の商業團體には何よりも必要なものである。どうも此幹事がまづくては商業會議所が如何して共社會のために十分の仕事を爲し得るかは疑問だが、またこの反對で、好い幹事の居る所では必ず立派な商業會議所が見られるのは確かだ。今や此新しい職業が固定して來た事が、大學や專門學校の方でも認められて、青年を此方面に向ける課程が授けられるやうにもなつたのだ。比較的新しい職業ではあるが、之に從事する人たちは既に世間からも認められ相當の尊敬を受けて、此職業の將來は實に前途洋々たる希望に輝いてゐる。

急速に進步改良の實を擧げたこれ等の商業會議所が、一切の地方問題に關して非常にためになつた事は固より疑を容れない。單に最初から公言された方面の仕事で市を益したばかりでなく、また共同に働く市民の間の交情を著しく親密ならしめ、殊に近隣のよしみを增して、明らかに一般社會の調子

を高めたのである。かくて吾々が昔市會(タウンミイティングス)から得てゐた凡ての難有味を、今や此商業會議所によつて再び得たわけである。

これ等の團體は地方の事柄に非常に有益であり、また其事實は一般に認められもしたが、さてそれ等が皆一致協力して一つの國民的團體となるとき、國民として吾々にどれだけ有難いものになるだらうかといふ點に氣が附いたのは、極く最近の事に過ぎない。嘗て地方的の事柄に處して立派な成功を收めたと同じ方法(やりかた)で、今度は國民的重要の問題に對して、最良の實業家が團結して事をするのだといふ事を試に考へて見られよ。かの必然的に政權を求めてやまない政黨といふものが、動(や)もすれば一問題に關する議論を偏見に陷らしめる怨恨などはここには微塵も見られないのである。この廣く國民全體にわたつた團結は、合衆國商業會議所といふ國民的團體の形を取るに至つた。之は創立以來僅に三年ではあるが、既に七百以上の商業會議所、商務局、商業倶樂部、全國商業協會を糾合し、其上なほ個人の會員約三千人を集めてゐる。之は一に最初二代の總裁、卽ち市俄古のハリイ・エ・ホヰイラ氏と、ボストンのジョン・エチ・フェヒイ氏との手腕に負ふ所あるのである。

わが米國の實業家が一致協力して、かの勞働組合が勞働者を益したと同じく、極めて有効なるべき一つの集注的勢力を、思ふ儘に用ゐ得るに至つたのは、米國史あつて以來初めての事だ。どの市でも他(ほか)の市では同樣の問題を如何に處して行つてゐるかと云ふ事を確かめるのに、今では易々(やすく)と出來る方

法が議せられた。どこでも機敏な委員や幹事の案出した新思想新方法を一ヶ所に集めて了ふ一つの手形交換所が出來たわけだ。以前にはよく、或一つの市は近所の他の市で工夫した新式の有效な方法のあるのに全く氣附かず、いつまでも緩慢な舊式の法を執つてゐるやうな事も隨分あつたらう。草木は風の媒介で種子を廣く散布するが、市政の新方法を、それが無くて困つてゐる他の市へ傳へる便法が、以前は絶無であつたのだ。今日では、如何なる商業會議所でも、米國一流の人物が市の改良のために思ひ附いた事を耳にして、更に之を實地に精練して見るだけの機會が無いといふのは申譯の立たない事になつて來た。さういふ新知識を得たい時には、華盛頓の全國商業會議所の本部へ申込みさへすればすぐ出來るのである。

この中心團體が今日實行してゐる最も結構な事は私選投票の法だ。之は國民的の利害關係ある問題になると、時々やる事だ。元來民主政治にとつて一つの難關は、或問題に對して或地方の市民から愼重な意見を徴する事の困難である、地方新聞紙は皆政治的偏見を抱いてゐる、此政治臭味が加はると、投票場にせよ、新聞雜誌にせよ、集會にせよ、或ひは他の小會合にせよ、偏見の無い公平な意見といふものは得られなくなつて了ふ。さてかういふ公平な議論をするのに一番好い舞臺といへば、商業會議所から出た代表者の會議だといふ事が一見して考へられるが、實はそこででも矢張り重要案件に對して愼重審議をする事は出來ないので、第一そんな審議をするだけの時間がないのである。しか

しこれ等の實業家の團體は嚴然として黨派心を離れて行つてゐるだけに、頗る有望な點のあるのは明らかだ。だから代表者が會合の席で十分に議論を戰はせて、何等かの決議を得るだけの時間が無い爲に、下のやうな方法が出來た。卽ち先づ論題をこれ等代表者所屬の團體へ交附して置いて、そこで一番都合のいい時に、また都合の好い方法で、其問題を愼重に審議させるのだ。そして何等かの決議が得られたならば更に之を本部へ還附し、他の同樣の決議と合せて、公布出版するといふ事になる。此方法によつてこそ始めて吾々は全國の何等偏見の無い愼重な實業上の意見を集成する事が出來、また單に全國の輿論の大勢を見得るのみならず、各地方ごとに意見を異にする點までもよく知り得るのである。一般公衆が其代表者によつて決議さるべき問題に就いて、どういふ考を有つてゐるか、それが此方法でわかるのだが、國會にしろ或ひは各州の議會にしろ、苟も眞面目な立法者にとつて、之を知る事の必要なのは、ちよと言葉に盡せない位だ。たとへば通貨改正とか海運とかの問題に就いても、全國商業會議所の私選投票（レフレエンダム）によつて如何によく經濟上の事情がわかるか、之は合成投票の公刊された報告書を一讀した人の皆驚くところだらう。

全國商業會議所は、華盛頓にある設備の極めてよく行屆いた本部、及び各市にある其支部を通じて、何時でも外國貿易に關する問題に答へるのである。既に外國貿易に從事してゐる製造家にしても、或ひはまた景氣の好い時の過剩の製品や、一時的な內地不景氣の折のいつも通りの製產高を、ラ

まく引續いて外國の市場へ出さうといふ考で之から新しく貿易を始めようといふ人でも、みな此本部へ問合せさへすれば早速回答が得られるのだ。のみならず此本部へは外國の商業團體でも、或は外國に居る個人の商人でも皆問合せをする事が出來る。だからこの西半球の南北兩大陸の國民間相互の理解を増進する爲にいま活動してゐるあらゆる機關のうちで、この商業會議所は最も前途有望なものの一つだと見られるのである。そして實業家のかういふ國民的集合體が國際間に於ても可能である事がまた之から思ひ附かれる。

歐洲戰亂の始まる直ぐ前、即ち千九百十四年六月に私は巴里で開かれた商業會議所の國際會議に出席した。之は此種の會合で嘗て見られた最も感銘深きものであつた。全世界から集つた代表者の數無慮二千人、それより二年前に同樣にボストンで開かれた時集つた六百人を遙かに超えてゐるのみならず、之より以前にあつた同種の如何なる會合よりも重要な結果を齎らしたのである。それは異なつた各國代表者の、數に於てもまた勢力に於ても遙かに前に增してゐたからだ。その時の討議には半點の政治的意味を交へず、國際的重要の實業問題を、皆が腹藏なく明晰に力を入れて討究したものだ。之が政府の仕事として行られたならば、充實した實業的感情といふ後楯がないために、同樣の事情では、とてもかうはうまく行かなかつたらうと思はれる。多數者の意志を少數者に無理に押し附けるといふやうな風は斷じてなく、かういふ實業家の討究が進むに從つて、必然的に全體の輿論が益々敎練

せられ、遂には其敎練されたる輿論の力が、多數決なぞでやつたのよりも、遙かに有效なものとなつたのである。そして此會議によつて、如何なる國民の代表者よりも多く學ぶ所あつた者はわが米國の代表者だ。以前から外國では商業會議所といふものを如何に重く見てゐたか、唯それだけを知つただけで他に得る所はなかつたとしても、骨折甲斐は十分あつたわけだ。米國の代表者は、今まで氣附かなかつたわが全國商業會議所の可能力を、之によつて始めて知り得るに至つたからである。

若し今後各國の實業團が、いま政府の手にある宣戰或ひは平和維持の力を其掌中に握るの日があるならば、慘憺たる戰爭が今までのやうに突如として國民の頭上に落ち來るやうな事は二度となからう。之はあの商業會議所會議に每回出席した人の誰しも皆氣の附く事であつた。戰爭といふものを欲しない商業團體の勢力が、急速に增大して行く事は、未來の戰爭を避けるためには、何よりも前途有望な事だ。戰爭は實に詰らない、實業家には全く有難くない事である。

元來實業といふものは、其地方的たると國家的たるとを問はず、すべて賣手と買手との間の一層よき理解親密によつて助成せられるのだ。全米主義（パン・アメリカニズム）の期する所も要するに此點にあるので、西半球の國民間に一層理解親密の度を增さうといふに他ならない。從つて全米主義の味方となる人たちが皆、實業團の勢力の日に大なるを見て衷心の滿足を表す可き所以も之によつて明らかである。またこれ等實業團體が、西半球到る處に國家の爲に盡すべき機會を、充分實際に働かせる時があるならば、亞米利

加全部にわたる平和黄金時代の方へ既に一歩近づいたのだと信ずる理由も、亦ここにある。

第四章　外國貿易從事者の要する立法上の援助

米國の實業家は、今や眞面目に外國貿易の問題に身を入れてゐる。そして此問題の解決のために、有名な機敏と適應性とを發揮しようとしてゐる。ところが困つた事に、其成功の道に當つて三つの大なる障碍がある。これは是非とも何とかしなければならぬ障碍で、それを取除ける事は、商人個人として、或ひは商人の聯合體の有つてゐる力では、如何ともすべからざるものだ。之は實に重大な問題で、立法權を以てする治療を加へてはじめて出來る仕事だ。今では全國到る所に、かういふ聲が聞える、『我國の鐵道や、瀕死の狀にある我が商船に、新しき自由を與へよ。それは外國貿易の十字軍を援助するためである。米國勞働者雇主として、外國で聯合する事を許せ。これは遙かに賃銀の廉い外國の團體に對して、うまく競爭して行ける爲である。』

米國到る處にこの消息は聞えてゐる。だから若し其音波の尠くとも或者だけでもまだ耳に這入らないといふ立法者がありとすれば、その人たちの政治的無線電信の器械がどこか損じてゐるのか、或ひは古い文句を借りて云へば『地べたによく耳をつけて聞かなかつたからだ』。この消息は、是非取除

けたいと云ふ或種の難物に近頃漸く氣の附いた覺醒したる國民の聲である。リップ・ヴァン・ウィンクルが內國取引といふキャッツキルの山中にながく眠つてゐたあとで、目をさましてうんと背延びをして見ようとすると、さて手足に絡み付く蔓草（つるくさ）の邪魔になる事がわかつた。此蔓草は何としても取り去りたいが、今の立法家の智慧が若し之を一刀兩斷するだけに鋭くないとあらば、他の人の智慧を借りて來なければならない。

この消息の傳へられる國はもはや、農夫は己の畑の柵の彼方を見ず、銀行家は地方の顧客の外思はず、又商人は內地の販路以外を顧みないと言つた風の、あの昔日の國ではない。農夫も商人も銀行家も、みな擧つて外國貿易の學生となつたのみならず、しかも立派な上級學生になつた。かれ等は自己の要するものを知り、妨げとなる不利な點を知つてこれを除去しようとしてゐる。かれ等の發する此の消息は全國の約二百ケ所の商業會議所から著者に傳へられた。

マンハッタン島の局部主義（ロオカリズム）を離れて更に一歩外へ踏み出して、我米國の商業團體によつて今鋭意實行せられつつある、公益增進のための驚くべき戰場へ來て見ると、そこには實に吾人の學ぶべき事が非常に多いのである。私の彼等に對する使命は南米に關するもので、その友誼、その取引の機會に就いてであつたが、彼等の私に齎らした使命は更に之よりも廣い重要な意味のもので、之には吾々すべてが注意すべきであるのみならず、特にまた法律の制定と政府の行動を委託されてゐる人たちの注意

を促すに足るものであつた。
わが製造業擴張の舞臺として、或ひは內國市場の一時的收縮をうまく相殺して行く爲の釣合として、外國市場の必要を論ずるといふやうな古めかしい議論よりも、ずつと彼方にわが商業會議所は旣に步を進めてゐる。商業會議所では、汽軍賃割戾の弊害と其匡正策を硏究した結果、これ等內國の割戾の如きは、之をかの海運業の方で外國の商船聯合が外國人に與へてゐる割戾に較べて見ると、殆ど云ふにも足らぬ少額だ、と云ふ事を知るに至つた。後者は運賃、保險などのために實に六億弗の巨額を年々わが米人の財布から外國人へ渡してゐるわけで、之は單に財政上の損失であるばかりでない、いつまでも外國人に商船を所有させて置いて、米國との競爭に對して外國の製造會社を保護させる事になるのである。
かのヰリアム・アアル・ハアストが、わが米國商船のためを計り、自分の所有する多くの新聞を利用して愛國的の熱心な活動をしてゐるのは感心だ。海上の運賃や旅客船賃の率を支配してゐる英獨汽船會社から取れる廣告契約を、そのため全く棒に振つて了ふ事をさへ、頓着せずにやつてゐる。今日若しすべての新聞の持主が此點でハアスト位に愛國的であつたならば、米國が以前に有した公海上の盛運を米國々旗のもとに恢復する事も、立法權で遠くの昔に出來てゐたらうと思ふ。
鐵道の割戾しといふ事も、或地方の船舶業者にのみ幸ひして他の地方の同業者の不利を生ずると云

ふ差別をつける意味から見て、その弊害は大きかつたに相違ないが、しかし之は精々わるく行つたところで、外國汽船會社が米國の製造家に對して爲すところに較べると、先づ戯談ぐらゐな事に過ぎない。シンシンナティの人で、其地の或大きな製造會社の役員をしてゐる人が、紐育市からブエノス・アイレスまでの機械の運賃率を問合はせた事がある。ところが獨逸の汽船會社は其問合せに答へた後で、さて進んで下のやうな事を申出た、卽ち若し獨逸で機械を購入せられるならば、漢堡(ハンブルグ)からブエノス・アイレスまでを遙かそれ以下の賃率で引受け、おまけにまだ海上保險の項目も其中に込めようと云つた。またかういふ話もある、ブエノス・アイレスで混凝土(コンクリイト)の大きな請負をした人が、私の勸告で合衆國へ來て、米國製造家協會の手を經て、或米國混凝土(コンクリイト)會社から供給を受ける事とし多額の金高の支拂をする約定まで成立つた。そこで紐育市にある一英國汽船會社の事務所へ運賃の事を其人が問合はすと其返事をした上で、下のやうな事を申出でた、若し英國の方で混凝土をお買入れになるならば、サウザムプトンからブエノス・アイレスまでの運賃率は、紐育からブエノス・アイレスまでのよりもずつと少額で行けるやうにしようと云つた。また華盛頓の或法律家が私にかういふ話をした、リオ・デ・ジャネイロから紐育へ歸るとき其人は歐羅巴經由で來た。リオから歐羅巴までの切符に對して三十九磅拂つた。しかし聞いて見ると、若し歐羅巴から紐育までを聯合汽船で行くならば、リオから歐羅巴へ行つて更に紐育までの切符は四十磅で濟む、換言すれば歐羅巴から紐育までが僅に米貨五弗で

行ける事になる。

これが若し十年も前で西部の穀物栽培者か或ひは南部諸州の綿花耕作者に上のやうな事を云つて聞かしたらば、必ずから答へたらう、『なに構やしませんよ、外國船は廉いのですから。手前の方では製品を廉く運んで貰ひたいのです。』併し今日ではずつとよくものが解つて來た。即ち外國人への内證の割戻と其所謂『競爭船』のある結果として、外國の商船聯合が獨立の船舶を海上から驅逐して了つた爲に、穀物と綿花との運賃率は、千九百十年には各々、.03 及び、.12 であつたのが、千九百十三年までには之が『整理され』て、各々、.10 及び .35 の割合になつた。今では人々も氣附いてゐるが、栽培業者が其收益の中から外國船に拂ふ貢物が三年間に三倍になつてゐたとは、實にひどいではないか。栽培者の方でも、もう此上そんな取り立てをされないやうに、米國の商船が保護して呉れる事の出來るのを主張するに至つたのは、全く之あるがためである。

各方面の有力者で商業會議所を組織してゐる人たちは、單に米國の狀況ばかりを調査するに止まらずして、更に目を海外に放つて、他國の政府が自國民の外國貿易發展のために果して如何なる方法を講じてゐるかを調べて見た。そして如何なる事を發見したかといふと、外國では政府が被治者のためにしてゐる多くの有用な事柄が、米國では法律で禁止されてゐる事に直ぐ氣附いた。即ち進取的な海外輸出業者のために、よその政府の與へてゐる援助のなかで主なものは、輸出品の爲には特に海岸ま

での鐵道割引をしてやり、また内國市場で互に競争者になる諸會社は、成るべく外國貿易の方面に向つて團結するやうに奬勵してゐる事だ。內國で競争をすると內國の相場が下がつて了ふが、一たび國境を出ると、唯外國人ばかりを相手に、一致聯合して商戰をやる事になるからである。

ところが米國の方で見ると、輸出品のために優先權を與へて鐵道運賃を低率にする事は、各州間の商業條例で禁ぜられてゐるし、外國貿易の爲に聯合する事もシャマン條例が邪魔をしてゐる。以上は大きい商業團體を組織してゐる實業家連にはよく解つてゐるので、之を何とかしようと思つて隨分・と手を盡したものだ。そして結局かういふ事が知れた、米國の商船をして現在の妨害を離れて自由ならしめ、鐵道が輸出業者を援助するのを妨げるやうな面倒な規則を取去り、また製造業者をして海外で思ふ儘な團結をする自由を與へるには、是非とも政府の力が必要だと云ふ事がわかつて來た。米國の海外貿易のために此新しい自由を與へよ、さすれば、今まで長らく外國の勞働と資本とに流れて行つたものを、わが米國の勞働と資本とに贏ち得るやうになるのは、米人の腦力と精力とを以てして直ぐに出來る事だらう。

團結をなしてゐる實業家が今や一般に廣く且熱心に希望してゐる以上三つの大きい、手近な救濟策のうちで、後の二つのものは比較的容易に得られる。早速法律を制定して、一つは各州間の商業條例に改訂を加へ、輸出品には海岸までの鐵道運賃の優先的低率を許可するやうにし、今一つの法律には

かのシャアマン條例を改めて、國境外では商業のため聯合をするのを適法と認めるやうに改めるのである。ところで第三の商船の援助と云ふ一段になると、今まで隨分色々と議論も出たことで、結局之は難問題になつてゐるが、果して難問題だらうか、此點を考へて見たい。

今度の歐洲戰爭で多數の船主は驚いて自分の船舶を米國々旗のもとに登錄するやうになつたが、戰爭開始の時に米人は海外貿易の僅に百分の八だけを米國船で運送してゐたので、それ以外の物には悉く外國船舶聯合が定めた如何なる運賃率をでも甘んじて拂はなければならなかつた。そこで吾々は遠く昔に溯つて、千七百八十九年、華盛頓、マディスン、ジファスンによつて法令書に規定されたあのやうな法律に立ちかへる必要がある。當時米國の船舶は其輸出入品の僅に百分の二十三を運送してゐたに過ぎない。ところが其法律は千八百年末までには旣う百分の八十九といふ割合までの增加を生ぜしめ、千八百十年には百分の九十一半に及び、同時に千八百十二年の戰爭にわれに勝利を得せしめた一商船をも我國に與へてゐる。

千八百二十八年自國貿易品の百分の八十九を米國船で運送してゐた頃、農業地たる南部及び西部が聯合して新英蘭土(ニユイングランド)の船舶業者に當り、千八百二十八年の相互條例(レシプロシテイ・アクト)といふものを定めて了つた。わが貿易が外國との競爭の端緒はここに開かれた。忽にして一大損失を生じ、金額は縮少して、現今の百分の八といふお恥かしい少額になつて了つたのだ。南部の民主黨首領ポオクは、當時新設の船舶業に

英國が補助金を與ふる事の頗る好結果であるのを見て、直に其例に倣ひ、間もなく汽船における我國の成功は、以前まだ快走船仕立の船でやつてゐた頃の盛況にも匹敵する位になつた。ところがまた千八百五十六年の南北間の大破裂といふ大騷ぎがあつて、國會でジェファスン、デギスの率ゐてゐる南方組は、遂に郵船補助金を撤廢して北部諸州の造船業者に打撃を加へる事となつた。それは思ひ通りに行つた。ただ有難い仕合せには、かういふ喧嘩もまた其原因も、今では既う皆跡を絶つて了つたのである。

今日では綿花栽培者の南方諸州も、穀物耕作者の西部諸州も、共に東北の海岸と同じく、米國商船をして、其發達を妨げる網の目を脫れしめる必要を、痛切に感ずるに至つた。

米國商船に補助を與へるの必要は何人も知つてゐるので、千八百十二年の選擧の折にはすべての黨派がそれを約したのだ。ところが選擧後にはどうなつたかと云ふと、民主黨は國會と行政部との兩派を抑へて、千九百十三年十月三日の關稅法を制定し、その中に、米國船で運送する貨物には百分の五の關稅割引をすると云ふ一項を加へた。すると早速方々の外國政府から國務省へ抗議が提出された。實は以前にわが共和國で非常にうまく行つてゐた法律規定に立ち歸らせないやうにと、これ等の外國政府では長い間策をめぐらしてゐたのである。某々大臣が自分の省の歷史や政務に通じるよりは、條約面に自分達の名を不朽に傳へようとする方に熱心であつた其お蔭さまで、これ等の外國人は見ごと

條約の網を拵へ上げたのだ。米國檢事總長（千九百十三年十月三十一日に大藏大臣になつたる）の說では、此條約こそは、米國の商船を補助しようとする一切の規定を反古にして了ふ性質のものであつた。それでは旣う之で事は終つたかと云ふに、決してさうではない、單に一段落を告げたまでだ。何となれば國務省が外國と如何なる契約をするかといふ事に、國民は絕えず監視を怠つてはならぬものだと、今こそ始めて米國人は氣附いたからだ。果して吾々のためになる好い約定をして吳れてゐるのか、その邊を是非とも知つておく必要があるのだと思ふ。現に今まで隨分ひどく米國の外交家が出し拔かれて馬鹿を見た驗はあるので、此條約などもその證據になる。千七百八十九年に華盛頓、マディスン、及びジェフノスンが折角やつて置いた事を、吾々が行ふ事の出來ないやうにして了つたのは、此厄介な條約のお蔭である。

しかし吾々は果して旣う手も足も出ないだらうか。全く馬鹿を見たのであらうか。そこは一つ之等の條約を一覽して、前述の檢事總長の說以上に何等か附加へる餘地がないかどうか、一考して見たい。よく調べて見ると、この條約には皆殆ど除外例なく、先づ概して一ケ年前に特定の通牒をさへすれば、雙方いづれも隨意に其規定を解除して差支ないと云ふ一項が加へられてゐる、だから檢事總長の意見の中に述べられた條約を解除するには、何も條約や契約の違反をする必要は毫も無いのである。

之には我國の方で必要だとする事項を通牒さへすれば十分なのだ。何となればこちらの方のさういふ要求は正當なものであるから、どの國民でも條約を修正して我國の意見に投合する事を承諾するのである。かつて千九百十四年十二月二十九日に亞米利加科學協會（アメリカン・アソシエイション・フオア・ゼ・アドヴアンスメント・オヴ・サイエンス）の席上で、私が此意見を出すと、若し左樣な一般的通牒を發したらば外國政府から恐るべき結果を我國に招くだらうといふ豫言も出た。しかも其後數ケ月を經てから、ラ・フォレット船舶法の條項のもとに、ちやうど其通りの通牒が當該條約に關係の各國政府に向つて實際提出されたのである、ところが其時の害といふのは少しも對外的のものではなくて、唯內國的のものであつた。卽ち以前聯合代表者を出して此船舶法の通過を促した米國海員の賣口（うれぐち）や商船の側に損害があつただけである。

千七百八十九年の自由を取戻すために若しこれ等の條約の修正をしないならば、こちらではそれを廢止する條項を利用する積だと、かういふ一般的通牒を發したならば、外國の爲政者は大に吾々を尊敬したのであらう。今日では外國の方では米國の商船をうまく條約の網の中へ捕へてやつたと云つて笑つてゐるではないか。若しかういふ修正を拒絕する國がありとすれば、果して何（いづ）れの政府が拒絕するのか、それを知つて置く事は興味もあり、また大に有益でもある。

民主黨は好んでジェファスンの說を引用し、何れの黨派も皆好んで華盛頓の言を引く――結構な事だ。若し現今（いま）の狀態から免れさへすれば、願はくは吾々すべてが協力して、昔の此二大政治家が米國

の法典に載せた法律を、再び制定する事にしたい。幸にしてこの點では、我國は巴奈馬運河條約に於けるほど困つた問題に遭遇(ぶつかつ)てゐるのではない。この運河條約には廢止の規定が無いために、英國が大に優勢の地位を占めてゐる共約定の通りに、わが米國はいくら苦しくても、之に背かないやうにやつて行くわけである。英國もいつかはこの條約に修正を加へるのを便なりとする日があるだらう。英國にして若し此次何かわが米國に好意を求めて來た時には、それを承諾する報酬として、かのヘイ・パウンスフォート條約に修正を加へ、吾々が自分の頭腦と巨資とを投じて拵へた運河だから、吾々の思ひ通りにしようと云ふ要求を持出すのは、實に我政府の義務ではなからうか、此點は後段に至つて更に論じよう。

以上の說は決して靑二才どもの討論會から出た聲でもなく、また遠慮がちに『どうか(プリイズ)』なぞと云ふ前置きを附けたものでもない、體(からだ)も頭も立派に一人前になつた幾千人の堂々たる人々の聲である。自己の權利を保護し、正當に得べきものを得んとする爲に團結したる實業家の言ふところである。彼等はそこに障碍ある事を知るに至つて、もと〳〵自分たちが選擧して出來た政府だからそれを除去して呉れるだらうと豫期してゐるのは、當然の事である。殊にその求むる所は前人未發の治療法といふ譯でもない、――うち二つは獨逸政府が行つて見てうまく成功したものであり、第三のものは我米國で華盛頓とジェファスンとの指導のもとに既に一度は立派に試みられたものである。この使命、之をわ

が政府は何とするであらうか？

第五章　南米の見地、是果して考察の價値ありや。

西半球に於て、二十世紀はこれ南方人の世紀なりとして知られるの日が早晩必ず來るであらう。さういふ確固たる强き傾向が既う明らかに證據になつこ現はれてゐる。此傾向は何か歴史上驚天動地の大變動でも起らない以上は、吾々が既に踏み込んだる二十世紀の上に必ずや此表題を附けるに足るものである。苟も天下の大勢を議する者にして南方人の見地を度外視する者あらば、そは政治家たるの價値なく、同胞の信任を得るに足らざる者である。之は單に西半球に於て然るのみならず、また歐羅巴に於ても同樣で、かの歐洲に於ける羅甸民族の覺醒に氣附かぬ人が誰かあらうか。佛蘭西に於ける立派な新國民的精神の發現は、即ち此運動の有力なる證跡ではなかつたか。また南北兩米の鐵道や收穫期に孜々として働く經濟的な伊太利の勞働者が、絕えず本國に送つてゐる金高は如何であらう？これら勞働者は大概は其故國に歸つてから、單に國富を益するのみならず、また立派な公民としても大に貢獻する所あるのである。また更に亞爾然丁やブラジルの外國貿易が既に著しき發達をなし、年年驚くべき增加を示してゐるに至つては、更に驚嘆すべきものがある。

米國南部の諸州に於ては商業界の最も不可思議な物語が着々と實際的方面に實現せられてゐるのを見るではないか。誠にバアミンガムかアトランタか或ひはチャタヌウガか、其他無數にある南方の近世化された都會へ行つて見るならば、以上の事實が歴然として驚くべく完全に立證せられるのである。嘗て私が全國到る處の商業團體に講演をしに行つてゐた頃、色々の經驗をした中で、私にとつて最も有益であつた事は、概して市の團結的の努力では、其考から言つても、實行の上から見ても、また結果に於ても、南部諸州ほど、うまく行つてる處は他に無いのである。今日は合衆國全體が、新しい南方諸州の眞價を認めて之を誇とし、わが國力の上に有する其意義を大なりとしてゐる、しかも獨り南米諸國に對しては、同じほど其價値を認むるを欲しないのは、果して何が故であらう。

南米諸國に對する米國人の意向が常に著しき愛他主義の特色を帶びてゐて、之がまた米國人の内心にあるモンロオ主義の力だといふ事は、恐らく何人も認める所であらう。吾々は飽くまでも正義を以て、わが南米の隣人の利益のためだと信じた方法で、いつも行動してゐたのである。しかしながら吾吾は南米人の見地を殆ど考の中に入れず、わが米人の行動が果して南米人の氣に入るか、或ひは我國の忠言が果して南米人の見解と一致すべき方式に出來てゐるか、その邊の事に至つては未だ嘗て考へなかつたのである。之を譬へて言ふと、既う腹一杯食事をしてから料理店を出て行かうとする人を、或友人が引き捉へて、も一度あと戻りをして食事をし給へと勸めるやうなものだ。その友人の厚意は

如何にも結構であららが、肝腎、自分が喜ばしたいとおもふ客人の見地を度外視してゐるものである。此點から言ふと、全米主義は今や既に一新時期に入つたもので、美事な發達の根柢には、他人の見地を決して度外視しないと云ふ事が基礎になつてゐる。

わが西半球の南半分が羅甸民族であり、北半分がアングロ・サクソン民族である事は將來の爲に結構な事である。何となれば此二つの人種は各々他の足らざるを補ふ性質のものだ。一方は他の方を學んで大に得る所があるのでかくすれば、孰れか一方のみが單獨で達し得たよりも遙かに完全に近い結果が雙方共に得られるからだ。然しながら西半球の羅甸人種もアングロ・サクソンも兩方とも、東半球の本元の方とは、よほど趣を異にしてゐる。私にはどうもから思はれる、米人は南方の我同胞と同じく多くの點に於て羅甸風である。殊に頭の機敏なこと、氣分の快活なこと、また所謂"Simpatia"（英語には精密な譯語のない言葉だ、強ひて譯せば英語のシムパシ『同情』に當らう—譯者）の特質などに於て左樣だ。此人種的氣分の相異は妨げにならずして却つて明らかに有利な點がある。合衆國に於ける人種の混合は、いづれの國民も其子孫が國中に居るため、戰端を開かせない制動機になつてゐるのは事實ではないか。是によつて之を觀れば、『人種混合の亞米利加思想』と云ふ雲でさへ美しい銀色の裏地がついてゐるのである。何故かと云へば、米國に於ける英吉利人種はいつも英米國の戰爭に反對し、同じく獨逸種の米人は獨逸との戰爭を避けたがるのである。此結論から考へても下の事は明らかだ。卽ち米人の民族性

と羅甸亞米利加人のそれとの相違は、亞米利加全體が他のあらゆる世界の國々と平和を保たうと努める點に於て、實に全米主義（パン・アメリカニズム）のために大いに資する所あるわけである。

われ等西半球の諸國民は今まで自由の空氣の中に、十分な機會を有して、自然の儘に發達する事を得た。これが歐羅巴ならば古來の文明の羈絆があつて、とても出來ない。或ひは出來ても非常に困難なのだが、とにかくかうした結構な周圍の事情のうちに發達して來た。此亞米利加各國の自由といふ事が、ここへ移住して來た歐洲民族に不思議なほどの人種的變化を生じ、其影響によつて米國化して了ふやうになつたのである。羅甸人種を米國化したと同じく、アングロ・サクソン人種をも米國化して了つた。北米のアングロ・サクソン人種の心智を敏活にし、羅甸人種の英氣と精力を强大ならしめ、依つて以て、兩者をして不知不識の間に結合し、歐羅巴に於ける羅甸人種とアングロ・サクソン人種とよりも遙かに多く接近したるものたらしめたのである。この作用は南北兩米に於て同時に進行して、遂に殆ど全米一致の均衡を得るの點まで到達し得たのである。

若し此點を疑ふ人あらば、自ら問ふて見るがよい、わが米人は政治上に於て英佛人よりも性急であり輕浮であるかと。英國または佛國に於ては、政權を司れる政黨は不信任の決議を受くれば何時でも官職を罷めねばならぬ。若し合衆國でこのやうな事があるならば、華盛頓政府の政權は急速に一つの黨派から他へと轉々として行つて、政府の不安定を來す事であらう。

更にまた南米人は、或種の論者が私共をして信じさせようとするやうに、激昂し易い、從つて信用の出來ない國民では決してない。南米人は一人ごとに吾々と同じだけ常識に富んでゐる。ここに面白い事は或愛蘭人が愛蘭から紐育へ轉任して來て受ける變化、及び西班牙移民が故國を出る前と、周圍に非常に米國化する力のあるブエノス・アイレスへ着いて後との變化、この兩者を較べて見ると、その間には興味ある人種的類似が見出される。ところが此變化を生ずるものは卽ちこれ新しき周圍でなくて何であらうぞ、――また新世界の兩極端、その間相距る六千哩の兩地點に於て同一の影響結果が與へられるとすれば、この結果こそまさに全米(パンアメリカン)的なりと稱せらるべきものでは無からうか。米國化されたるアングロ・サクソンの見地を重んずると同じく、米國化されたる羅甸人種の見地をも重んずるのは極めて當然ではないか。後者もまた吾々と同じく自由と好機の間に生れたるもの、十分に考察の價値があるのだ。

アングロ・サクソン人種は確固として自制に富み、己れの意見を尊重すと人は云ふが、しかし私はブエノス・アイレスにゐた時、西班牙及び伊太利血統の人間に對して此米國的感化力の確固する影響効果を見るの機會を得た。それは大きい歌劇劇場(オペラハウス)で或無政府黨員が、米國化されたる羅甸人種のまんなかで爆彈を投じた折だ。其場の光景はどうであつたか。第一、讀者先づ自ら問へ、紐育の首都歌劇場(メトロポリタン・オペラハウス)でアングロ・サクソン人種の中で、爆彈が破裂したらば、どう成つたらうか。『それは恐らく不幸

な結果となつたら』と云ふ事に、正直な人ならば不性不承、一致するだらう。然るにブエノス・アイレスでは如何であつたかと云ふと、實に見ごとなもので、亞爾然丁市民の光榮とも云ふべきである。何等の混雜なく無闇な騷動もなかつた。負傷者を運搬してゐる間、樂手は國歌を奏し、やがて演技中止の旨を舞臺から知らせると、觀客は靜かに退場して行つた。讀者にして若し其場に居られたならば、私と同じくこの人々を誇とせられただらう。其落ちつき、其度胸を偉なりとし、且はまた西半球の盛運を最も熱心に信ずる人の考へ通りに、南米人の見地の貴ぶ可きをも感じたであらう。當夜の驚くべき光景を見たとき獨りで私はかう思つた。古來米人は何が故に南米羅甸人種の姉妹共和國の意見をいつも無視して、之と相諮る事をしなかつたのかと。彼等は確かにわが米人の十分なる信任を得るに足る者である。

ブエノス・アイレス滯在中に私はそこの立派な大學と親密な關係を有し、且は亞米利加が十箇國の大學學生國際會議にも仲間入りをした。將來公民の責任を雙肩に荷うて立たうとして修業中の南米の青年は、米國の青年と毫も異なる所なく素養を積み、愛國の精神にも富んでゐる事を自分は斷言する資格ありと感じたのは、全く當時の經驗に基づくのである。のみならず、南米の青年は理想と責任の念を有し、此點に於てはどうかすると米國普通の大學生以上であるかとも思はれるのだ。

南米で高等教育の重んぜられることは殆ど言語に絕する。この諸國では政治に參與する者は他の如

何なる階級よりも先づ知識階級であるからだ。國家が有爲の青年をして最高の官職を得しめる習慣になつてゐるので、此事實は大學生の上に明らかに反響を示してゐる。米國では大學生の集會で講演をすると、聽衆たる青年は現在の學校生活に關係するより以外、何等他の定つた目的を有したい人たちだといふ事にすぐ氣が附く。ところが南米では之と全く異なつた事情が存在してゐる。卽ちここでは學生には呑氣な學生生活の學校臭味がない。其代り將來國家の實務に携はる事を得しめる學業の終るを熱心に待ちながら、今は孜々として學事を勵んで、他日學校外の實生活に入るの日に備へようとする青年が、卽ち南米諸大學の學生である。

ブエノス・アイレスの大學は七千人の學生を有し、法科でも醫科でも之より以上に設備の行屆いた所は他に無いのである。これ等諸大學の長所を知り、また公生涯に入るべき人物養成の爲に其盡す所如何に大なるやを度外視しては、到底南米の觀察は不完全なるを免れない。これ等の養成所を卒業して來る人たちは、能く國家といふ船を運轉するの任に堪へ、政府の將來は彼等の力によつて安固なるを得るのである。

今まで南米共和國に對する米國の處置は殆ど常時（いつも）正當ならん事を努めてゐたのみならず、また南米の爲良かれかしと吾々が考へた事を試みたのである。之は私も信じ且斷言するを憚らない點である。しかし吾々は今まで何故さう頑固に、物知らずに、思ひ違ひをして、肝腎の南米人の見地（みかた）を無視した

のであらうか。不注意にも之を研究する事を怠つたのであらうか。

勿論皆が皆ながらに左様だとは言はない。この不注意といふ事にはまた立派な例外があつた。その一つは即ちヘンリ・クレイだ。偉大な政治家であり雄辯家であつた此人は、米國をして南米に於ける西班牙諸州の獨立を承認せしめる運動の卒先者であつた。南米人に代つて彼が揮うた雄辯は實に見事なものであつた。併し此の雄辯すら、彼が南米人の同情的考察に値するものなるを味得した其透徹なる眼識に比すれば、更に光を失ふの感がある。彼が此點を味はひ得た事は南米文明を仔細に研究したのに基づくので、之は千八百十七年十二月三日と千八百二十年五月十八日との間に、米國下院に於て述べた共立派な演說によつて明らかに證明されてゐる。此演說こそかの奮闘せる南米の姉妹共和國を歡迎して主權國民の仲間入りをさせよと辯じた演說である。彼がこの南米問題を研究するのに如何に骨を折つたかと云ふ一番好い證據は、當時南米にあつた進んだ社會狀態や思想を、あれ程までによく解るやうに說明したのは、今日いづくにも、如何なる國語にも見られない事である。

ヘンリ・クレイの指摘した所によると、ブエノス・アイレス市だけにでも、公衆の思想敎育の大機關たる新聞紙が、西班牙葡萄牙の兩方を加へたのよりも澤山にあり、また質もすぐれてゐたと云ふ。クレイの言つた通り、新聞紙の標準の高い事は、今日に於ても依然として少しも變りはない。百年以前に彼が高尙な文明の此驚くべき證據を觀察し得たこの同じブエノス・アイレス市に於けるほど立派

な新聞紙、或ひは公事を忌憚なく論ずるに適した新聞紙は、今日わが米國の如何なる都會にも無いと云ふ事は、確信を以て玆に明言し得るのである。南米到る處に新聞紙は世界の他處(よそ)では見られない大なる政治的勢力を有つてゐるので、此事實は如何にも尤だと肯かれる。ブエノス・アイレス市の『プレンサ』（印刷物の義——譯者）といふ新聞は平時ですら電報通信が二頁より少い事は決して無いので、わが米國には此半分だけもある新聞は一つも無い。此新聞社は大きな施藥院や無料の音樂學校や無線電信局などを經營してゐる外に、三百種以上の他の諸新聞社に電報を供給してゐる。此大新聞の絶大なる勢力は之を見ても解るではないか。之はもとホオセ・シ・パヅ博士の創立した新聞で、今は其子息のエゼキイルが、嚴然として父祖傳來の方針を守つて經營してゐる。ブエノス・アイレス市の立派な新聞はこれ一つでは無い、他にも澤山あつて『國民(ナチオン)』といふのは其偉大な主筆ミトレの名に背かぬ立派なもの、また活氣縱横の、極めて近代的な『亞爾然丁』があり、不覊獨立の『道理(ラゾン)』、慧敏なる『毎日新聞(デアリオ)』其他澤山ある。公衆思想の二大指導者たる大學と新聞紙とに就いては、後段更に政治問題を論ずる時に詳しく述べたいと思ふ。

　南米人の見地を無視するといふ一般的通則に、も一つ立派な例外となるものはエリウ・ルウトの事である。氏が單に公人の資格を以て南米へ行つたばかりでなく、また特に個人としても、國際問題に關する南米人の見地に就いて深い興味と細心の研究を積み、南米到る處に深い感銘を生じた事は之を

證するさへ實に國家の爲喜びに堪へない次第である。其誠意は、氏がわざ〳〵出掛けて調べに行つた南米人の信用を博し、從つて一人の共目的を誤解する者なく、また最も崇高なる動機に出でた者に外ならずとせられてゐる事は、まことに我が同胞の凡てにとつて賀すべき事である。ルウトが南米人を研究してゐる間に、南米人も亦氏を知らうとした。氏の如き人によつて北米の人物が代表されたため、わが南方大陸の所有者たる、極めて感じの銳い理解の早い國民の上に深い感動を與へた事は固より當然の事であつた。恐らくは彼の言つた事で下の言葉ぐらゐ熱心に歡迎されたものはあるまい『來つて私は諸君に告げる、願はくば互に相識る事一層深からしめよ、文明進步の大業のために共に協力して、今まで富と繁盛とを致したやうに、智力上にもまた精神上にも將來互に相扶けて發達したいものだ』と氏は言つた。

氏の言は果して何を意味したか。さきにヘンリ・クレイが盡した聰明なる愛他的友情は、合衆國々務卿としてのエリウ・ルウトの行動によつて、更にそれが公に政府行動の最高範疇に高められたに他ならぬのである。換言すれば一個の國家が、相互尊重の念を公にまた嚴肅に裏書きしたことになるので、是卽ち此二大政治家が其生涯と行動とのうちにいみじくも明示したる思想であつた。惜むらくは之は米國人の南米に對する思想態度の一般狀態から見れば寧ろ例外となるものであるが、若し左樣でなくて、此二大政治家が眞に我國の對外態度の常習を代表し體現するものであつたならば、外國に於

けるる米國々民の評判こそ實に素晴しきものであるだらう。

第六章　南米に於て誤解されたる米國の見地、全米會議は誤解を匡正す。

米人は實に南米人の見地に對して全く不注意であつた。從つて吾々の彼等に對する態度について、彼方でも誤解に陷つたのは、無理からぬ次第である。しかしそれでもまだ、南米人の吾々に對する誤解は、こちらで彼方を誤解してゐる程には烈しくないのである。由來、對外問題に興味を缺いてゐる米人の多數が、よその國のことを知らないのは當然の話であるが、我國の主要なる新聞雜誌の如き、他の方面の事にはよく精通してゐる者が、外國の事となると同じく事情に暗いのは、驚くべくまた嘆ずべき次第だ。ここに一二の例を擧げると、つい數ケ月前に、或西部の大學教授が眞面目に支那及び日本の移民が亞爾然丁に及ぼす危險を論じた一文が、米國三大月刊雜誌の一つに掲載された。若し此大學教授か、或ひは雜誌發行者かが、亞爾然丁の憲法と移民法とを讀んで知つてゐたならば、何等此種の危險の無い事は解つてゐたらうと思ふ。また昨年の十月、さる紐育發行の昔から重きをなして

ゐる週刊雜誌の主筆が、墨西哥の事實上の大統領であるウェルタ承認を米國で拒絶すべしと主張したる、氣の利いた社說を書いた。ところがその理由の一つとして、他の强國はウェルタを承認しなかつたといふ一條を擧げてゐる。然るに實際は如何かと云へば、あらゆる列强ことごとく皆ウェルタを承認し、而もそれを早速承認してゐたのである。之は同じやうな話が他にも澤山ある中から單に二つの例を引いたまでであるが、論ずるは易くして調べる事はむづかしいと云ふ好い例だと思ふ。かういふ人たちの論じたものばかり讀んでゐる讀者が、我國土を離れて世界の事情に疎いのも毫も怪むには足らぬではないか。

南米人がわが米國を誤解し、吾々の心理を誤認した原因は、溯つて考へると源は大抵米國が惡いのだ。惡いからとて何も面を背けるには當らないので、事實は事實として正面から見るが好い。第一、最も良くない事は、吾々は一見愼重なやうであつて、實は南米人の誤解をわざ〳〵招いてゐるやうな次第だが、それが如何してさうなるのか、本當のところ呑み込めてゐないんだ。之は旣に前章でも述べた事だが、米國の實業社會の代表者として南米の方へは隨分都合の惡い人物が派遣されてゐる。どこか他處で失敗したから、今度は南米の『寶の山』へ遣つて役に立つかどうか今一度やらせて見ようといふやうな式の人間がよく行く。かういふ事は實に好くない。殊に利口な南米人はこんな人物を、我が競爭者たる英獨から南米に行つてゐる立派な素養訓練ある代理者と比較して見るのだから堪らな

い。之では米人が尊敬されないのは當然な話で、寧ろ馬鹿にされなければ不思議な位のものである。また此點では米國政府も矢張り實業家と同じやうな遣り口で、國務省が南米へ派遣する外交官の多くは、世界の他の方面へ行つた外交家程に能く其職責任務に堪へてゐないのである。

また吾々は一國民としては時々大統領の言つた事や或ひは爲た事の爲に迷惑を受けた場合もある。といふのは、南米諸國では我行政部から出る事柄には非常に重きを置いてゐるので、つまり大統領は心を用ゐて一般の輿論を代表してゐる者だと彼等は信じてゐる。此點は忘れてはならない。今までわが大統領にして南米諸國の行政主權を嚴格に認めてゐながら、而も大言壯語の餘、痛くもない肚を探られた人もあれば、或ひはまた文句はちやんと穩當な言葉であつても、南米諸國の政治行動に干渉がましい事をした大統領もあつた。過去に於てこの兩者のいづれが敏感な南米人をしてわが米國を悪く思はせるのに力あつたか、そこは一寸言ひにくい。が兎に角、この兩方とも等しく面白くなかつたので、これは共に同一の原因に基づいてゐる。即ちこれ等公の言動によつて動かさるべき外國人の見地を、叮嚀に考慮尊重するを欲しなかつたと云ふ一事に歸するのである。

之までわが米人及び米人の意向の誤解された場合は多いが、之は能動的にもせよ、受動的にもせよ、皆吾々がわるいので、今その一例をここに擧げよう。さきにも述べた通り南米大陸の主な日刊新聞は實に見ごとに電報で海外通信を得てゐて、概して云へば米國の同程度の新聞よりも立ち優つてゐ

る位だ。そして其海外通信は主として歐羅巴の事件が多く、合衆國の時事に至つては不幸にして少し計りしか出てゐない。そして其少し計りと云ふのも、不愉快な事柄が多いので、私刑だの、また我々が時々思ひ出したやうに『大掃除』をやる際出て來る氣味の惡い事件や、實業界の委托金費消や、政界の醜聞といつたやうな事柄ばかりだ。之に反して西班牙、伊太利、葡萄牙、佛蘭西の政治問題には新聞讀者が大に興味を有つてゐるのは、其國語並に生國の關係上極めて當然の事である。また商賣上の關係あるがために英國や獨逸の商業通信には重きを置くのだ。從つて米國の爲す事は經濟上、政治上、商業上、すべて皆之に耳を傾けようとしない。かういふ事態を匡正するために今までの何等の法を講じなかつたのも米國の落度であつた。

ブエノス・アイレスで私はかういふ事に氣附いた。其大新聞に到着する正確な報道の重んずべきは、海外特に日本及び獨逸で認められた。何となればこれ等二國の國民の利害關係に好都合な報道は每週きまつて南米大陸全體にわたつて配布されてゐた。此通信事務が如何いふ風にして行はれてゐるのか其邊は少しも明示されてゐない。若し此報道が開放的に或商業團體の手で行はれてゐたならば、效果は更に多からうと思はれた。ところがこの考はやがて一定の具體的な形を取るやうになつた。即ち千九百十五年一月八日以來は、米國商業會議所の對外委員の手で、三百種以上の南米新聞紙に週報を發送する事になつた。華盛頓にある設備の立派な商業會議所本部は、米國工業界の進歩、立法上の

重要事件、公衆慈善の活動、或ひはまた白耳義、波蘭、セルギア等の救恤に米人の盡した事など、時事通信を蒐集するのである。そしてこれ等の報道の掲載される新聞紙の要求に適ふやうに週報の形を按排して行く取計ひをするのは委員長の特權となつてゐる。この通信事務が現在に於ても將來に於ても、南米人の眼前に米國の眞相を示すために與つて力ある事は期して待つべきである。殊に南米諸國の新聞記者が、異人種間に好感情を起さうとする此努力に喜んで協力しつつある事は、實に衷心愉快に堪へない次第である。が之は恐らく當然の話で、かういふ事柄には南米の記者は米國の同業者よりも見解が廣くて、精神に於ても地方的な偏狹な所が少いからである。

ここに一言したいのは、特に羅甸人種と交る場合、行儀作法の問題である。かの十四世紀の偉人ウヰカムのウヰリアムが創立した牛津(オックスフォド)の『ニユウ・カレッヂ』と、ハムプシアのお寺の町にあるヰンチェスタ學校には、この立派な校舍で人には膾炙したる金言がある。それは『行儀作法は人を作る』といふ言葉だ。すぐれた建築家であり政治家であり聖僧であり、二度までも英國の大尙書になつた此偉人の驚くべき榮達の祕訣を語るこの言葉は、苟も外人に接する人々のみな心すべき所である。米人は特に此語に思を致さねばならぬ。米人は國民として考へると、巧慧であり變通自在である點に於てすぐれて居ると共に、行儀とか氣の利くとか云ふ側では大いに足らない所があるからだ。南米人は實に行儀がよい、從つて其接するさきの人も矢張り行儀のよい者だと定めて掛かる。かのヰンチェスタ

や『ニユウ・カレツヂ』の學生にお馴染の『行儀作法は人を作る』といふ言葉を、過去に於て米人がもつと能く心に銘してゐたならば、南米と吾國との關係は遙かに好都合であつたらうと思はれる。

兩者の間が圓滑に行かない原因で、もう一つ餘り人の氣附かない事は、米國の教授や學生で、人選を誤つた人物が大勢で矢鱈に南米へ出掛ける事である。かういふ『案内者附』の連中は、先づ多くは遊び半分だ位の事は、吾々の知つてゐる通り、彼方(むかう)の人たちも十分に承知はしてゐる。然しそれでも矢張り外國人がぞろ〳〵とやつて來て、留針(ピン)で刺した甲蟲を蟲眼鏡で見るやうに視察されるのは、聊か癪に障るものである。社會學研究會の標本か何かのやうに思はれるのは誰しも好まない事である。此事に關しては、彼地の大新聞の社説にも强硬に論じられた事があつた。殊に手きびしかつたのは『國民(ナチオン)』の紙上で、教育のためのこんな無禮は止めて貰ひたいと云ふのであつた。昔話を引合に出すのではないが、子供には面白からうが、蛙には迷惑なわけである。最初のうちはかういふ學問上の旅行も大いに有益であつたらうが、餘りやり過ぎたので、先方(さき)の氣を惡くしたのだ。またかういふ團體の人物は、同じやうな性質(たち)の旅行をする商業會議所の連中程に氣が利かないのである。序の話だか、さう云ふ商業的の旅行にさへ、まだ改めたい點はいくらもある。單に一個人が米國から商用で出掛けて行く場合は、先づ自分が豫定通りの結果の得られるやうに仕向けて行く事は差支なく出來るが、多人數が一團となつて出掛ける場合、即ち吾國の商業會議所にせよ他の團體にせよ其代表者として行くとき

には、是非とも下の點を念頭に置くべきである、卽ち代表者としては飽くまで代表者たるの資格に心掛け、其行動によつて我國文明の最良の方面を代表して行く事は、國家のため望ましき次第である。此點をさへ心掛けて置けば、必ず吾國人全體の利益となるに相違ない好印象を與へる事が出來る。

私の確信では、米國の大使公使は皆各々、任命派遣されてゐる其國との通商貿易を增進するのに十分力を注ぐべきだと思ふ。かく信ずる所以は、市場の事に精通しようとすれば勢ひ職務上多數の市民中の頭株連と知り合ひになつて肝膽相照すに至らざるを得なくなるからだ。しかもかういふ頭株連とは外の事では滅多に顔を合はす折の無いものである。兩國間の物貨の交易を益々增大して雙方の利益を計らうといふ其目的をかうして外國人によく理解させるのは、大公使たるの地位を高め從つてまた其能率をも大ならしめるに相違ないと思ふ。大抵の人はかういふ事は領事だけが爲る事だと信じてゐる。しかしそれは領事が外務省と直接接觸しないで、大使公使を通じて外務省と掛合ひをするものだと云ふ事實を知らないに基づくのである。だから大使公使は政府要路の人たちと面談する機會はいくらもあるが、領事にはそれが全くない。すべての米國の外交代表者が商業上に於て國家の爲に盡し、それと同時にその地位に居て交際を廣くすると云ふこの二重の機會に氣附かず、之を逸してゐるのは何故であるか甚だ了解に苦しむ次第だ。回顧すれば私が亞爾然丁に居た極めて興味ある二ケ年間に、其國で得た私の友人の大多數は、兩國間の通商關係を增大しようと私が絕えず骨折つたる間に得られ

た知合ひであつた。この二ケ年間に於ける亞爾然丁との貿易の增加が年額四七・〇〇〇・〇〇〇弗よ
り八〇・〇〇〇・〇〇〇弗に上つた事よりも、之等の友情こそ私にとつてもつと貴いものであつた。
勿論この友情が出來たといふのも貿易增加を計らうと骨折つたがために得られたのには相違ない。殊
にまた約二六・〇〇〇・〇〇〇弗に達する亞爾然丁政府との契約を米國の製造所のために得るには、
米國公使館は出來るだけ骨を折つたのであるが、之は亞爾然丁をして我國の製造力を知らしめ、また
一方には米國をして亞爾然丁の世界的勢力としての進步を知らしめるには非常にためになつたのであ
る。商業上の事柄に關して私が會談した多數の亞爾然丁の人々は二國民を一層親近せしめようとする
極めて實際的な此十字軍を衷心から賛成したのである。そして兩國間に隨分古くから蟠まつてゐた多
くの誤解をさへ、之によつて排除する事を得たのは、多くの事實が證明する所である。

ここに、も一つ魔除で追ひ拂ひたい邪魔物がある。敵の力を分割さして置いて之に勝たうと云ふの
は兵法の常だからと云ふので、米國人はわが姉妹共和國の間の鞏固な聯合に反對し、且成るべく諸國
を小さく分けて置いて、小口から呑噬して行くのに容易い樣にして置かうと思つてゐると、そんな事
を隨分物の分つた南米人までが信じてゐる事だ。之はまた途方もない馬鹿々々しい邪魔が這入つたも
ので、之に就いては後章に於て現存共和國の聯合に就いての意見を述べて、十分魔除をしたいと思つ
てゐる。この聯合は確かに全體としての羅甸亞米利加の勢力を增大するものであるのだ。米國の方で

はお隣の南米が弱國であつた事を望むなどとは以てのほか、それが強からん事をこそ願ふので、之は局外者がモンロオ主義をどこまでも敬重する事を確實ならしめるものである。

更にまた如上の謬見を除かんがために、西班牙語を用ゐる南米人のしてゐる仕事を思ふと、さながら窓を開いて一陣の清風を入れるが如き感がある。西半球の南北兩大陸間に一層の好感情あらしむるため力を致した人で、何人も亞爾然丁の大統領サルミエントオの右に出づる人は無いだらう。彼は米國の教育制度を熱心に研究し、わがリンカアンの友人であり、また其傳記をも書いた人だ。『學校教師の大統領サルミエントオ』、—後世に傳へて之を口にし之を思ふのに、何といふ意味深長な、氣持のよい、強い名前であらう。政治家らしい彼の扮裝には、米國に對する愛他的の友情と共に、米國文明を自分で細心に研究すると云ふ事が加はつてゐた。現にミシガン州の中等學校制度を彼國の政府で採用したなどは、米國に對して立派な敬意を表した次第である。彼は實際かう思つた、一國民の組織的教育は確固たる、また國民的の意味の發達にも必要なものだ。殊に我が米國と同じく彼國も左様だが、一國民の發達といふ事には是非とも先づ外來の移民をはやく同化して了ふ必要のある國柄に於て、特に之を大切な事だと彼は思つた。元來が友愛の精神と、外國民の長所ばかりを知らうとする熱心とによつて、かれはわが米國の公民教育が、同じく此移住民問題を中心にして發達したものだと云ふ事を觀取した。そして彼が我國を訪問したのは批評家としてでなく、友人として來たのであつた。サルミエ

ントオはかう思つた。人種を異にする兩國民間の誤解を去り且之を不可能ならしむる最良の道は、よく互に相識る事である。殊に各々他國民の有する長所を一層よく知る事である。この長所を知らないがために、何かと批評がましい事が云ひたくなつたり、また外人の特性の快くない側ばかりをあげて、詳論するやうな事にもなるのだ。彼の死後に幸あれよ。獨り我國のためのみならず彼の國のためにも良友であつたこの偉人の記念として、ボストンに建てられた立派な立像こそ、洵にふさはしきものであつた。願くは彼の如き崇高き心の人の一人でも此世に多かれよと祈りたい。さすれば『外國人』といふ言葉はやがて其意味を變じて『良友』といふ意味に近くなる日があるであらう。

これら誤解といふ魔ものを拂ふのに有效であつた主なものは全米會議の集會であつた。之はゼエムス・ジイ・ブレインが國務卿をしてゐた時に、思ひ付いて實行したことだ。我國の如何なる政治家と雖も、此方面に於て彼が爲した程に透徹の識見を示した人は他に無かつた。その創意に出でた政策の成功に、かれが先見の明を證する好個の記念であつた。この會議は多數共和國の第一流の人物を網羅し、各人皆其國民的並びに個人的の特色を異にしながらも、ここに集つた目的に於ては皆心を一にしてゐる人たちであつた。人類共同の利益のために諸國民が一層親密なる同胞となつたのである。私がブエノス・アイレス在職中一度この會議が開かれたが、その評議の模樣といひ目的といひ、實にこの上もなく立派なものであつた事を證し得るのは、云ふべからざる愉快である。こんな會議は先づ花火

見物式の演説會だらう位に思つてゐた人たちも、實際を見ては案外であつたらう。會の趣向と云ひ、また其結果と云ひ、兩方ともすぐれて實際的なものであつたからだ。かういふ會議の實效に就いて疑を抱く人は、要するに米大陸の諸共和國を向上進歩させてゐる眞精神を理解せず、また吾々の抱く高遠の理想は、その實現のために實行方法を求むる切なる希求と相並立する事をも熟知しないからである。獨立は決して口先の藝や空騒ぎで得られるものでない事は、世界の如何なる他の國民よりも吾々がよく知つてゐる。米國は實に世界の歴史に於ける一新現象であつた。南北兩米の解放的な新領土で獨立を得ようとする共同の努力は、吾々を促して、祖先が自由を得んがために血を灑いでやつたと劣らないほど實際的でまた進歩的な實行方法を求むるに至らしめたので、此點は如何かすると舊世界の人たちには能く理解が出來ないのである。全米會議はその擧げた實績の外に、またよく國民間の軋轢をも減殺するのに功があつたので、各國人の間に相識ることが淺ければ兎角圓滑を缺くのが常である。各國の主な政治家が此會合で結んだ友誼こそ、實に各共和國間一般の理解と調和との基礎を作るに與つて力あつたものである。

互に相信じないのは畢竟互に相識らないからで、此弊を一掃するのに、も一つ有力な働きをしたものは全米聯合(パンアメリカン・ユニオン)であつた。之は華盛頓駐剳の羅甸亞米利加各國の大使公使から成る一つの事務局の監督のもとにあつて、米國々務卿がその議長になつてゐる。最初は極めて微々たるものであつたが、

歴代の指導者の熱心な盡力のお蔭で、今では其代表せんとする主張のために甚だ有力なものになつた。主としてアンドルウ・カアネギイの先見の明ある好意によつて、之はいま華盛頓に、大理石造の立派な建築物を有し、また今までの幹事のうちで最も敏腕な精力家のジョン・バレットの力で、益々廣く一般から認められるやうになり、從つて在來よりも更に實效ある有力なものになつてゐる。何時問合せをしても、早速正確な回答が得られるに極つてゐる。かういふ恒久的な中心があるといふ事は、其偉大なる國際的理想のため、眞に此上もなく大切な事である。たとひ全米主義の理想は如何に結構なものであつても、永久的性質を帶びた十分な設備がなくては到底實績を擧げる事は出來ない。それは恰も中心となる交換局なしに電話をやらうとするのも同然である。

たび〳〵全米會議の集會を催し、全米聯合の效力をして益々大ならしめ、米國が南米人の見地を深く尊重するに至り、南米もまた更にモンロオ主義の利益と責任とを周知するに至るならば、雙方間誤解の時代は全く過去の夢として消えるであらう。のみならず、更に進んで未來の誤解をも妨ぐべき不變の保障を確立し、米大陸各共和國悉く皆最も熱心なる愛國者をして奮起せしめるに足る程の保障が得られる事は、私共の固く信じて疑はない所である。

第七章　モンロオ主義とキァニング說話

『私は舊世界の均衡を得んが爲に、新世界を生かした』この言葉は、英國の首相ジョオヂ・キァニングが千八百二十六年十二月十二日下院に於て傲然として述べた所である。英國の議院制度が嘗て產したる最も偉大なる人物の一人が吐いたこの目ざましい一言は、それ以來廣く一般の信用を博して、米國の論者までがモンロオ主義の文句にも宣傳にも、此キァニングの暗示が與つて力あつたのだと認めてゐる。南米では、其自由の獲得にも擁護にもキァニングの抑制に負ふ所大なりと信じられて、いくつもの記念碑が彼の爲に建てられた。ところがキァニングは自由の愛の爲に行つたのでは無く、歐洲に於ける自己の外交政策を維持するのに新しい何ものかを要したがために爲した事であると、自ら其傲語の眞相を打ち明けてゐる。しかも之が爲に彼の記念碑なぞが少しも影響せられないでゐるところは、溫情に富む南米人の名譽となるのである。

新世界を生かした功績はキァニングのものではない。之はかの幾多の奮戰苦鬪によつて西班牙人を追拂ひ、プレイト河畔に英軍をさへも敗北させたる殖民の壯烈なる愛國心に歸すべきである。獨力を以て能く政治的獨立の大なる恩惠を贏ち得たる名譽こそ彼等のものである。サン・マルタン、ボリヴ

ア、シュカア以下、その名譽ある勝利者たる戰友の爲にこそ萬歳を唱ふべきだ。かの亞弗利加を化して遂に歐洲屬國の集合地として了つた歐洲人の土地慾に反抗して、敢然として其奮闘の餘に得たる獨立を確保したる功績も、これ亦キアニングに歸すべきものではないのである。其功は合衆國々民にある。卽ち大統領モンロオの敎書こそ實に全米主義の曉鐘とも謂ふべきもの、彼は世界に向つてから叫んだ『手を觸るべからず、ここは自分の天地、われ等が姉妹共和國なり』と。

今まで長く忘れられ或ひは近頃になつて始めて公にされた文書に徴して見て、私は玆に下の事を示したい、キアニングの傲語は單に一場の空言に過ぎなかつた、そして彼自らもそれは知つてゐた。ラッシュ（當時倫敦駐剳の米國公使）に言つた彼の言葉はモンロオ主義を構成するのに殆ど何の關係もなかつた。ラッシュこそ、全く非公式にキアニングに向つて英米の協力を勸め（それより五年前カッスルレイに向つても同樣の意見を洩したと同じく）た人であつた。キアニングは實にモンロオ主義の箇條を見て驚いたのであつた。それが西班牙に對して南米の自由を保證する事にも反對し、また歐洲が米大陸に植民地をつくる事をモンロオ主義が禁じてゐるのにも反對したのである。

概して米國の方でキアニングを信じて有難がるに至つた主な理由は、モンロオ主義にはキアニングの言が大に責任があつたとラッシュが其所信を明言したからである。ラッシュだからいふ事を信ずるに至つたのは極めて當然な事で、かれの姉妹が二人英國で結婚してゐた。從つてとかく英人の見地に

親しむ、それを有難がるやうにもなり、果ては英國と自國との協力を餘り多く買ひかぶるやうな事にもなつたのだ。のみならずラッシュはまたキァニングの言つた言葉を自國政府に傳へる仲介者としてながく歴史に殘るのであるから、自然その言葉に重きを置き過ぎるのもこれまた人情の然らしむる所である。ラッシュは、大統領モンロオが公にした政策が歐羅巴に與へた深い感銘をみとめて之を報告した。しかし果して如何なる程度までキァニング一個の考がラッシュの所信と一致してゐたか、此點を少しく論じて見よう。

ラッシュの言ふところによれば、千八百二十三年八月下旬（モンロオ主義は其年の十二月二日になつて始めて宣言されたのだ。）ラッシュがキァニングに向つて、英國がわが國の首唱に同意して在米西班牙植民地の獨立を承認するといふ問題を持ち出した後の事である。キァニングは更にラッシュの意向を探つた、即ち『如何なる歐洲の强國と雖も、西班牙の爲に、或ひはそれに代つて、植民地（西班牙の）を征服しようとか、或ひはまた併呑略取によつて植民地の一部をでも自分の物にしようと云ふ無理な計畫をする者があるならば、英米兩國は共に聯合して之に反對する事を示すべき』何事かの公式の宣言が出來るだらうかといふ點に就いて、キァニングはラッシュの腹を探つたのだ。千八百二十三年十月九日には、キァニングはまた同じやうな事を佛蘭西に對しても提議してゐる。英國の議會で『西班牙王がその在米殖民地を取返さうとする事は我國の方で許諾されるだらうか』と云ふ質問が出

た事がある。其時キァニングは下のやうな事を言つて澄ましてゐた、即ち『母國たるものは自己の植民地を取返さうとする權利を有つてゐる。しかし外國が其國に代つてそんな事に手を出す權利は無い』と唯さう言つただけだ。かういふ事實が、如何に速かに世間から忘れられて了つたか、直ぐ其のあとからキァニング自身も忘れて、あの有名な大言壯語をやつたのを見ても分るではないか。當時一生懸命になつてゐた植民地の方では彼の大言壯語にのみ氣を取られて了つて、折角その手を離れて獨立を贏ち得た西班牙の國へ、キァニングが植民地を戻さうと思つてゐた事には、氣が附かずに居た。また西班牙植民地の爲には王政こそ最良の政體であるといふ所信を、キァニングが千八百二十三年十一月二十四日に公言した、それをラッシュがちやんと報告してゐる、と云ふ事實も、一般世間からは看過されてゐる。いかにもキァニングこそは、一生懸命になつてゐた南米共和國のために、飛んだ良友であつたわけだ。

西班牙植民地の永遠の自由といふやうな、わが西半球に於ける極めて壯烈なる自由の勝利が、國際道德の流れを溯つてよく源を尋ねて見ると、何の事はない、一政治家が己れの歐洲政策のため、一種の抵當として使ふために、南米の自由を得せしめたのだと自分で公言してゐるに至つては、世の多くの論者も默つてはゐられまい。否な或不安を感ぜずにはゐられないだらう。モンロオ主義も源を尋ねれば、歐羅巴の策略の渦卷の中から發生したので、漸く後になつてから、かの『獨立宣言』に源を發

したる自由の大河と合流するに至つたのだと、こんな事を私共は認めなければならないだらうか。國際的愛他思想とは斯くまでも懸け離れたる原因からして、かくまでも立派な結果が生じたとは、何としても餘りに不釣合な話だと多くの人は思つた。しかし英國の方の史料を尋ねてもキァニングの言を反證する材料はちよと見附からないやうに思はれた。が、大統領モンロオは單に廣く一般の米人が抱いてゐた政策を公言したまでで、自分の思ひ附きを發表したのでもなく、また一人の歐米の政治家が大統領に入智慧をした說を公にした譯でもないと云ふ事は、明らかに之を示す證跡がいくらも在るのだ。そして凡てのこれ等の證跡は、キァニングがラッシュに意見を洩らしたよりも以前の事實である。當時の國務卿ジョン・クヰンシ・アダムスの『日記』によると、(千八百十八年五月十三日)大統領モンロオは內閣會議の席で下のやうな問題を提出した、卽ち『西班牙と南米人との間に仲裁を入れる如何なる計畫でも、それが植民地の完全な獨立を助長するものでない以上は、合衆國は之に參加しないと云ふ事を、歐洲駐剳の合衆國公使に訓令すべきか。また、これ果して英國政府の政策なりやを確かめ、若し然らば、此政策を確立せんが爲に英國と協力すべき手段を講ず可きか』を閣議に附したのである。さてそれからいよ〳〵ラッシュが此事を持出した結果として、西班牙と植民地との間の仲裁に關して英米兩國が協力する事に就いて、カッスルレイはラッシュの意向を訊いた(千八百十八年七月三十一日)、此時既うラッシュは公式の回答をするやうに成つてゐたので、本國政府は愼重なる審

議の結果から決した、即ち植民地の獨立を根本とするのでなければ』お仲間入りはしないと答へた。注意すべきは、この『愼重なる審議の結果』なる言葉である。また之は、キァニング並びに其崇拜者が非常に重きを置いてゐるキァニングよりの例の提議を、ラッシュが耳にするよりも滿五年も前の話ではないか。ジェファスンがキリアム・ショオトに寄せた手紙（千八百二十年八月四日）には、「東西兩半球を分てる大洋を以て仕切(しきり)の子午線となし、海のこなたでは決して歐羅巴の砲聲を聞く事のないやうに、米國が正式に要求するを得るの日は、必ずしも遠きに非るべし』とある。兩半球を以て自由の鄕なりと主張するわが國民の政策は一般人士の是認する所である。此の事實には、少くとも海のこなたでは、誤解を抱く者は無かつた筈である。またモンロオは單に一定の國是を闡明したまでで、決して新說を發表したものでも何でも無い事は、亦人の知る所であつたらう。それは華盛頓が面倒な外國の同盟に對して發した、かの有名な宣言から、當然發生し發表したるものに他(ほか)ならぬのであつた。

キァニングがモンロオ主義の發案者でない事は、米國史の研究者から見れば之を證するに極めて容易な事であつたにも拘らず、ごく近頃までは何等の新しい證跡が現れず、キァニングのあの大言壯語は、自分でもそれは法螺だと云ふ事を承知の上であつたと云ふ事實を、斷乎として立證する事は出來なかつたのである。この新事實の發見は歷史上の『掘出しもの』の物語に更に一章を加へるもので、その發掘は大事件の由來を探らうとする學者にとつて非常に興味のある事である。私共は更に歷史家

を伴うて書庫の學究的雰圍氣の中に入つて、塵に埋もれた浩瀚の書冊や、未だ世に公にされざる書翰集が泰然としてその卓見を藏し、また筆者の祕密を封じてゐるのを見ようではないか。かのファンク・ブレンタノが『バスティユ文庫(アルキイヴ)』を探つて、デュマがそれを基に面白い小説を編んだる鐵假面を着けた不思議の人物（日本には黒岩涙香氏の翻譯『鐵假面』がある――譯者）の本尊を突き止めたのも、矢張りかうした古文書を骨折つて穿鑿したからである。ジョン・フィスクの著『米國革命』を見ると、やはり同じやうな穿鑿をして、英國ソマセット州のサットンコオトに在るストレエチ家の書庫内に古書を獵(あさ)つて、將軍チァアルズ・リイの書翰を發見した。之は將軍が革命戰爭中、英國の牢獄にゐた間に書いた物で、其事のあつて後約八十年も經つてから、將軍が謀反人であつた事が之で分つた。おもへばモンマスの戰にあはや米軍の敗北を致さうとしたあの當時合點の行かなかつた將軍の行動あつて後、華盛頓が彼の職を免じたのは如何にも尤だと思はれる。長く誤解され、あやまり傳へられた事件の歴史を正すべくかくも峻嚴の態度を以つて古文書の中から立ち現はれて來る幽靈の列こそ、まことに堂々として犯すべからざるものである。

　キァニングはモンロオ主義には全く責任が無く、在米西班牙領地の自由をも保證しようとはしなかつた。此事實を一言もつけぬ程的確に示す證據は、それでは誰の書いた遺文を見れば一番よからうか。彼が露西亞駐剳英國公使バゴットに與へた書翰集が最近にバゴット家の人の手で世に公にされた

が、これ以上に明確な史料が又とあらうか。一政治家が己の政策を擁護するために、ここぞと云ふ所で吐いた芝居氣のある文句を、私共はいよ〳〵打棄てて、當時彼が親友に内證で云つて遣つたその儘の事實を知る事が出來るのだ。

モンロオの名高い教書の報知を得た直ぐ後、即ち千八百二十四年一月九日外務省の日附のある或公文書の中に、キァニングはバゴットに向つてから云つてゐる。

『大統領の言のうち、在米西班牙領地に關する部分は、果して如何なる程度まで此事に關する英國政府の意向を知つて云つたものか、其邊は何とも言ふ事が出來ない。』

英國政府の意向と大統領の言との相違に就いて、彼は更に進んで下のやうに云つてゐる。

『第一最も根本的な相違點は、合衆國政府は西班牙植民地の獨立を事實上に認めてゐるが、英國政府の方では今もなほ獨立承認を差控えてゐる。……若し大統領の教書が、西班牙の領土恢復に反對するものだとして考へらる可き性質のものならば、大統領の見地と英國政府のそれとの間には、また此上もない重要な相違があるわけだ』

後になつてキァニングが自分でこしらへたやうに云つた所謂『新世界』なるものは、『舊世界の均衡を得る』ために、若し彼ひとりにそれを利用する事を許して置いたらば、再び西班牙配下のものとなつて了つただらう。彼は更にから云つてゐる。

『またこれは言ふまでもない話であるが、（中略）、米大陸には將來他國の植民を禁ずる方針（もし之が方針と云へるなら）が大統領の言說の中に示されてゐるが、之は佛蘭西にも初耳なれば英國にも初耳だ。』

キアニングはわが姉妹共和國が西班牙に對して自由を失ふのに異存なく、また將來歐洲植民地が設けられないやうにする事もキアニングは望まなかつた。以上の文句は有體に之を打明けて書いてゐる。天下これよりモンロオ主義と似もつかぬものがあらうか。共和國一時の自由は全く彼の政策に適合させる爲で、キアニングの思はくでは、また西班牙の配下に逆戾りをさせて、ちやうど印度、埃及、アルジイル、トリポリのやうな植民地にして了ふ事も出來たわけだ。たうとう終には化の皮は現はれるのである。

キアニングとラッシユの二人が（前者が發起者として後者が取次人として）有名なモンロオ主義の爲には偉大な貢獻をしたなぞと言ふ說は、昔から信じられてゐたが、之に就いては同じキアニングの手紙から拔萃した下の一節を讀めばわかる。

『私は時を移さずラッシユ氏に向つて友誼的に、大統領の言說の其部分に就いて說明を求めた。ところがラッシユ氏は其事件に關しては全く何等の訓令を受けてゐないと公言し、且かう言つた。氏は本國政府から議會開會以來未だ何等の消息に接せず、また正式には大統領の言說の寫しすらも受

取つてゐない。』

之は千八百二十四年一月に書いた私書の文句である。そして千八百二十六年十二月になると、キァニングは英國下院で厚顔(あつかま)しくも『私は舊世界の均衡を得んが爲に新世界を生かした』なぞと公言したのである。彼はたしかにジャック・ホルナアの上手(うはて)を行(い)つて、『乃公は偉い者だぞ』と云つたばかりでなく、梅の實を取り出したのも、菓子を燒いたのも兩方とも乃公の手柄だと云つたのである。（之は英國で昔からあるお伽歌のジャック・ホルナアの事を云つたので、歌の文句は『ジャック・ホルナアは隅つこに坐つて、くりすますのお菓子をたべる。親指を突込み、梅を實を取つた。そして「乃公はいい子だよ」と云つた』とある。此有名な歌は、何でも顯理八世の執事で、ずるい男の話から出たものだと云ふ。――譯者）南米に在るキァニングの記念像の臺石には、『彼は西班牙統治の復歸を讃し、南米では共和國よりも王政の國を好しとした』と何故彫り附けないのであるか。

南米人が再び西班牙の配下に歸しようとまた他の歐洲强國が南米に植民地を置かうと、いづれにしても南米永遠の自由には、キァニングは興味を缺いてゐた。從つて此新興共和國に派遣された最初の公使ホンソンビイ卿が、千八百二十六年に故國へ出した手紙に、下のやうな事を書く心構(こゝろがま)へでゐたのは毫も怪むに足りない次第である。卽ち『このブエノス・アイレスの如き嫌(いや)な國はまだ嘗て見た事はない、それは全く言語に絶したものでお話にならない』と云ひ、同年十月十七日には『キァニング氏が自分の行動を承諾してゐる』事を書いた手紙の中に、ブラジル人を目して一層ひどく惡しざまに云つてゐる。

南米人に對するかういふ見解から更に目を轉じて下の如き言を見るのは、大に人意を强うするに足るものがある。『そこには千八百萬の民が、羈絆を脱し、自由の身となるべく、營々として努力せる壯烈の光景を觀る』と云つたのは、わがヘンリ・クレイである。植民地獨立の承認のためには、『プッディング』を燒くことにも梅の實を取り出すことにも、かの傲然たるキアニングなぞよりも、クレイの方が遙かに多く盡す所あつた人である。千八百十六年以後、ヘンリ・クレイは米國議會の中に於ても外に於ても、絶えず此方面に力を盡した。キアニングからラッシュに意見を洩らすよりもずつと以前、千八百二十一年の冬に、クレイは早くも下の如き決議が華盛頓の議會を通過する事を得しめた。「自由と獨立とを得んが爲に奮鬪せる南米の西班牙領土に對して合衆國民の抱ける深き興味には、下院も亦之に與かる可き事。また合衆國大統領が、上述の諸州の主權と獨立とを承認する事を機宜の處置なりと考へ得る場合には、何時でも大統領に協贊を與ふる』の議を通過せしめた。千八百二十二年、大統領モンロオが正式の承認を發したのは、是れ卽ちクレイの長い間の努力の成果であつた。

　近代の南米人はヘンリ・クレイが不屈不撓の聰明なる努力を以てした友情を忘れる程までに、繰返し〳〵人の言ふキアニングの『説話（ミス）』に胡魔化されて了つたのである。南米人の祖先は實際ひどくクレイを愛慕したもので、クレイが獨立承認を奬說して千八百十六年から同二十年までに米國議會でやつた演説の幾部分を、かれ等は革命軍の頭上に、聲高らかに再三讀み上げたものであつた。自由を得

ようとて戰ふ南米人の爲に、又これに代つてクレイが愛他的精神を以て努力を惜まなかつた事は、かのラァフィエットが同じやうな事情のもとにわが合衆國の爲に盡した厚誼と互に相呼應するに足るものがある。健氣な一國民の奮鬪努力に對する感嘆、獨立國民の仲間入りをした點に於て一日の長たる國が南米獨立の永久的な承認を與へる事を熱心に希求するの精神、これ卽ちヘンリ・クレイを動かした動機に他ならなかつたのである。クレイには、政治上の駈引の抵當に使ふために南米の自由を願ふやうな氣は毛頭なかつた、また南米を西班牙の手に戻さうとか、また後になつて歐洲の殖民を認容して、折角南米人が骨折つて得たる主權を其手から奪はうなどの考は更になかつたのだ。

南米諸國の得た自由の賜物が長へに歐洲諸國の餘計な世話を免れ得たのは、歸するところ歐洲諸國間の策略のお蔭だといふやうな謬見は、今や古書堆裡の書翰集が旣に祕密を暴露してくれた以上、全く一掃せられ得るものである。一個の利巧な政治家の傲語が、かの公けの言のみを聞いて內密の書翰を知らず無闇に人を信ずる國民の信用を博してゐる事も之からは旣う出來なくなつた。自由共和政の堂々たる進路とはお門違の處へモンロオ主義を置くにいたつた長い間世の信用を得たあの『說話』も全く之きりだ。モンロオ主義は一本の枝であつて決してわきから接木として出來たものでは無いと知つて、ここに始めて亞米利加の自由の木のすがたも一層整つて見えるわけだ。かの萬世不朽の文書たる米國獨立宣言のお蔭で、西半球に於て政治上の自由の爲に得られた利益の當然の結果こそ、モンロ

オ教書に示された政策の本來の位置であらしめたい。かの獨立宣言には、自由を以て單に道具に使ひ、用がなくなつたら弊履の如くに棄てるやうな政治家とは比較にならないほど崇高な『神慮（パワア）』が共思想の源となつてゐる事が特に明言してあるのだ。

かの支那人が祖先に對する尊敬こそ、實にすべての國民性のうちで最も愛國的なるものの一つである。吾々の中にも亦支那人に倣つて、かの以賽亞（イザア）の語を借りていふと、『昔の事をわれらに示す』人々が常に居て欲しいものだ。これ卽ち吾々の祖先が、國民の爲に壯大なる自由の殿堂を建設し、ながく世界のあらゆる國民の倣ふべき典型を示して呉れたる光榮を、祖先のため心を用ゐて擁護せんが爲である。

第八章　モンロオ主義とその海外に於ける誤解

『自己保全は自然の原則』、モンロオ主義はただその卑近な格言を亞米利加流に表白したものにすぎない。

この主義の基礎となつてゐる思想はモンロオによつて創められたものではない、コンコオドに『戰陣を敷いてゐた農夫』が『世界の耳目を聳動した射擊』の火蓋を切つた時よりこのかた、わが國是根

本の事實となつてゐた。かの著名な國際法律家で全亞米利加に認められ、從つてその信認を博してゐるジョン・バセット・ムウアはかう言つてゐる。『千八百二十三年の教書が書かれなかつたものとしても是非案出せられなければならぬ主義――西半球に於ける歐羅巴の勢力影響を制限する主義――を事實に現出するものを便宜上、稱してモンロオ主義といふのだ』。

華盛頓はその訣別の辭の中で『歐羅巴がわれ等にはまるで利害關係のない、あつても極めて遠い關係にある第一義的利害關係の幾つか』を有つてゐることを指摘し、海洋を隔つる諸國とは盟約を結ばないやうに勸告してゐる。かつ又、豫言して『交戰諸國がわれらからは何物をも獲得する事の不可能を知つて、容易に挑戰を試みなくなる……さういふ時代が遠からずして來る』と言つてゐた。

千八百〇八年大統領ジェファスンは玖馬と墨西哥の事を語つて『われらは兩國の利害關係がわれらのそれに同じものだと思ふ。そして、兩國の目的はこの半球から歐羅巴の勢力を驅逐する事でなければならぬ』と言つた。後大統領モンロオの諮問を受けた時にも、ジェファスンは『わが第一の基礎たるべき金科玉條は如何なることありとも歐洲爭鬪の渦中に投じないといふこと、第二は歐洲をして六西洋のこなたの事件に容喙せしめない事であらねばならぬ』と言つてゐる。千八百六十五年十一月六日國務卿シイソアドは、佛蘭西の墨西哥に求めた權力要求に抗議を唱へた。その譯は『該權力が當方政府の政策及び其基づく處の方針に背馳する』といふのである。しかも、この抗議を有効ならしめる

ために、墨西哥國境に態々一隊の精兵が派遣せられた。今此自衛鎖國の思想が國事に着眼したる人々の學つて想ひ到つた所である事を示すには、實に我國初代政治家の語を引いて數卷を埋めなければなるまい。

モンロオ主義とは何である。多くの議論では、論題の性質を定める爲に往々議論の後半が費されて了ふ事は珍しくない。われらはかういふ過に陷らないやうにしたい。――其處で先づ眼を文書の上に轉じて見よう。千八百二十三年年十二月二日大統領モンロオが國會に送つた教書には、この『主義』を構成する二つの長文がある。これら長文中、二つの部分がやがて全文の意義を傳へてゐる。『この際合衆國の權利、利害を包含せる主義として下の事を主張することは正當であると思はれる。即ち亞米利加兩大陸は、その領有し保持し來つた、自由にして且獨立せる狀態により、向後如何なる歐洲強國によつてでも、將來その植民政策の配隷たるべきものと考へられてはならない。』二章の中更に意味深長なる他の部分にはかうある『かかるが故に我々は合衆國とこれら(歐洲)列强國との間に存在せる公正の爲、又親密な關係の爲に、この半球の如何なる部分にたりとも、彼等にして苟も自己系統の伸張を謀るやうな事があれば、それはわが平靜安寧を危ふからしめるものだと公言したい。何れの歐洲列强にもせよ、彼等が現在持つてゐる屬國植民地に對し我等が干渉した事もなければこの後干渉する事もあるまい。併しながら既に獨立を宣言し、維持し、又われらが公正の主義に基づいて審議熟考

した上、その獨立を認定した政府に就いては、歐洲列强より彼等に壓迫の意向を以てする如何なる容喙、又方法は如何ともあれ、彼等の運命を掣肘しようとするものは、どう考へて見ても、やがて合衆國に對する不和不親の傾向を示すものとより外見ることが出來ない……われらの平和幸福を危ふくせずして聯合强國が如何なる部分にもせよ、南北兩大陸に彼等の政治系統を伸張する事は出來ない。かつ又、南方の同胞が、若しその儘に放任して置くならばよく自ら進んでこれを採るだらうなどはどうしても考へられない。故に、孰れにせよ、われらがかくの如き容喙を、その如何なる形でせらるるにもせよ、冷眼視することは不可能である。』

この第二の方の引用は教書の中特に歐洲列强の神聖同盟に依つて加へられようとする目前の危害に關係する部分から引いたのであるが、第一の引例は北亞米利加の沿岸を距る北緯五十一度よりベエリング海峽に至るまでの海上に於て、一切の商業權及漁業權より外國人を驅逐しようとする露西亞皇帝の要求に就いて述べた章句から採つたのである。この要求は、露西亞皇帝が該地方に植民地を持つてゐないといふ理由により、かつまた『われらは此大陸に於ける露西亞の如何なる領土建設に就いても其權利を爭はねばならぬ。又亞米利加兩大陸は最早如何なる新しい歐洲の植民的施設に對してもその配下ではない事を明白に主義とする』といふ此二つの論據で拒否するのであつた。この要求は千八百二十四年の條約で話が纏つたのである。露西亞との談判がモンロオの公言を促す一原因となつたとい

ふ事は、今や露西亞が國家としての抱負と將來の發展に於て、平和のうちに進められて行く全米主義の進歩と、毫も背馳する所なき世界に於ける唯一の强國だから殊に興味が深いのである。かつ又、商業上にも領土擴張の上にも、露西亞の志望は、現在はもとより將來に於ても、新世界の安寧を危からしめるやうな事は決してないのだ。實際若し入念に將來の事を考へるならば露西亞と一切の全米人との間の一層親密な交情を求めるべきあらゆる理由のある事は、愈々益々分明になるやうに思はれる。これこそ實にわが外交政策次回の大發展であらねばならぬ。

話はかのモンロオの公言に戻るが、わが歴史を通じて大統領國務卿及び其他の政治家がこれに多大の承認を與へてゐることを發見する。が併しこの『主義』を發展させたといふ記錄は極めて少い。その中主なものは大統領グランドが、千八百七十年五月二十八日の、サント・ドミンゴに關する教書である。「大統領モンロオの發布した主義はすべての政治的團體に依つて守られてゐるが、予は等しく重要な主義として下の事を主張することが當然であると考へる。卽ち向後この大陸の如何なる土地と雖も、これを歐洲强國に交付さるべきものと看做されてはならぬ』と。かくこの主義を發展させた事には中々意味がある。といふのはこの理窟でゆけば、何れの亞米利加共和國が何れの地面を歐洲强國に賣却しようとしても、かかる賣買はわれ等に關係があるといふことになるからである。故にこれら共和國の債主たる歐洲强國がかの如き土地割讓を迫らうとするに際しては、われらはこれを妨げること

が義務であると感ずる。千九百〇五年八月、大統領ロウズヱルトは公言して『どのやうな狀態の下にあらうとも合衆國が他國の領土蠶食の隱れ蓑としてモンロオ主義を用ゐることは無い』と言つた。大統領タフトが千九百十三年十月二十七日モビイルで言つた言葉は更に一步を進めてゐる。『予はこの機會を幸として言ひたいことがある。合衆國は今後また征服に依つてする尺寸の領土をも加へない積である。』

更にこの『主義』の他の一方の發展は所謂『ロッヂ氏修正案』に現はれた元老院の決議である。是は外國商會が自國政府に有利な土地を買收する事、言を換へて云へば、若しその會社が屬する政府によつて經營せられるならばモンロオ主義の本意に背くやうな外國會社の取引には反對するものである。なほ『ロッヂ氏修正案』に就いては後段太平洋問題に關する一章に於て更に充分論及する積である。（第十二章參照）

ある少數の論者はこの大『主義』が、かつて一度もわれらの、主要な立法機關である議會の承認を經なかつた事を論ずるが、然しながら多くの挿話の中から、僅に二つの例を引きさへすれば、これ等論者の誤は確かに立證する事が出來る。千八百十一年一月三日大統領マディスンのほのめかす處により、議會は英吉利が或ひは西班牙から今のフロリダ西部の地を購入することがあるかも知れないと知つて直ちに合同の決議案を通過させた。それにはかうある『合衆國は現在危機の特別な事情の下に在

つて、前記土地の如何なる部分が如何なる外國の手に渡るとしても、これを重大な危惧の念なくして看過することは出來ない。又正當に自己の安寧を重んぜんとすれば、偶然の事故に備へんが爲、一時前記の地を領有するの止むなきに至る』と。この內容をひきくるめて今日地理上の事實に移して云へば、若し丁抹が丁抹領西印度島を獨逸に割讓するとすれば國會はこれに反對すべき歷史上の先例があるといふ事になる。序ながら千九百〇二年十月、丁抹上院が僅一票の差で、これら群島を合衆國に賣却する協定を通過させなかつたのは獨逸の影響があつたからだといふ話だ。スティヴン・ボンサルがカリビヤ海の事を書いた著書の中には、漢堡・亞米利加航路がこれらの群島中に所有する大造船所は、今やキュラソア島にある主要港の實權を獨逸人に掌握させてゐると報告してゐる。

國會がモンロオ主義を確認したも一つの例として、再びジョン・バセット・ムウアの言に立ち歸つて見よう。曰く『然しヹネヅエラ事件（千八百九十五年）の政治上最も重大な結果は、土地問題の決定ではなくして、モンロオ主義が合衆國國會によつて公に採用せられ、又歐洲の主なる海上國が明白に之を承認したといふ點である事は、一步退いて之を認めなければならぬ。

これに關して再び同じ人の言葉を引く『大不列顛及び獨逸が明白に之を認容したことに加へて、更に下の宣言を附加することが出來よう。これは海牙（ヘイグ）會議の覺書に滿場一致を以て擴布せられ、又國際的爭論を平和の中に協定するに際し米國派遣の代表者には其署名と共に附記することを許された宣言

である。即ちこの中に包含せられてゐる何物と雖も、合衆國に向つて『外國の政治問題或ひは內地行政に容喙、干渉、關係しない傳來の政策を離れること、』或ひは『純粹に亞米利加に關する問題に對する其傳來の態度』を放棄することを要求するものと解釋せられてはならない。

モンロオ主義に對する獨逸の態度を示すものとして、華盛頓駐在獨逸公使伯爵ヨハン・ハインリッヒ・フォン・ベルンストルフが千九百〇九年十二月六日費府（フィラデルフィヤ）で演說した中に言つた事は興味がある。曰く、『クウリッヂ氏思へらく、獨逸と合衆國との間に橫はる障碍の主なる原因は、モンロオ主義にある。そしてこの主義に關して亞米利加は如何なる論議をも妥協をも容さず、且如何なる價を拂つてもその地位を維持すべく備へてゐる。吾等獨逸の方ではこれ等の事實を熟知してゐるがこちらから西半球に陸上の立脚地を得ようとする如き意向は毛頭持つて居らぬ。』數週後十二月十一日、獨逸外相フォン・シェエン氏が伯林でこの演說のことを話した時に『南米に於ける獨逸殖民帝國といふ妖怪の退治を謀つた伯爵フォン・ベルンストルフに、予も亦公然と贊同を表しなければならぬ』と述べてゐる。費府の演說がカイザアの御意に協つたことを示すものとして、伯爵フォン・ベルンストルフが間もなく高貴なる勳章、赤鷲第二等章を贈られたことは意味が深い。これらの引例は、啻にモンロオ主義の眞相に關する私のこの簡單な說明の終結たるのみならず、これが『歐洲の主なる海上國』で容認せられたといふことは以前から此主義が海外で誤解せられてゐた事を明らさまに吾等の面前に示すも

のだ。

ヹネヅエラと英領ギアナとの間で論爭のあつた境界問題に關して千八百九十五年大統領クリイヴランドと英吉利との折衝の初に當り、ソオルズベリ卿がきつぱりと言つた言葉に、『合衆國政府は、共行動に就いては該政府が何等の責任をも持つてゐない多數の獨立州に關し、唯彼等が西半球に地を占めてゐるといふだけの理由の下に、これら獨立州の上に起つたことが何でも合衆國の利害に影響するといふやうなことを、一般的提議として主張する權利はないわけだ。』之はソオルズベリ卿の誤だ。何となればモンロオ主義を誤解してゐるからである。そしてこの交渉が終る以前に、卿の政府がモンロオ主義の正しい解釋を受けたことは、大にヹネヅエラの利益にもなり、また合衆國の國民としての威信にもなつた。大統領クリイヴランドがソオルズベリに寄せた答書（米國國會への教書中にも載つてゐる）には、『われらが一國民としての平靜安寧に必要であつて、かつわれらの自由なる政治機關に缺くべからざるこの「主義」は……わが國民生活のあらゆる時期に適應するやうに考へられたものであつて、わが共和國の存續する限り廢滅することはない』とある。一切の榮譽、大統領クリイヴランドとその敏腕の國務卿リチャアド・オオネェとの上にあれ。

歐羅巴に於けるモンロオ主義の誤解は止んだけれども、南米に於ては、全く異なつたさまざまの理由の下に、猶長く引續いた。ここに二人の著名な英人、クロオマア卿と子爵ブライスとが、この問題

に就いて言つたことを考へて見よう。最近千九百十五年十一月クロオマア卿は倫敦の『スペクテイタア』誌上にその南米観を發表して曰く『彼等にはモンロオ主義を快しとしない傾向がある。彼等はこの主義に多少恩に被せがましい所があると思つてゐる。充分に自衛の出來るやうになつた今日、獨立を維持する爲には、この主義は別に政治上、必要が無いと考へてゐるのだ』と。

その著『南米』の中に、子爵ブライスは記してゐる、『西班牙殖民地がその獨立を成就して後多年の間、これらの殖民地と合衆國との政治上の結緣は、亞米利加の如何なる國にもせよ歐洲强國がその共和政府を轉覆し、或ひは領土併合をしようとする如何なる計畫に對しても合衆國が斷乎として之に抵抗しようとする意向のあるのを見ても明らかである。歐羅巴の方から斯の如き行動に出る觀念のあつた間は、かく約束せられた保護は歡迎せられ、合衆國の方でもまた被保護國に對する相應の興味を感じてゐた。然しながら境遇は事態を變化させる。今日では、既う舊式の理解は消滅した。南米諸國の或ものが既に自ら己れの强きを感じて來た時、聞くならく、彼等は異なつた見解を以て現狀を見るに至つた。『最早東には雨雲の氣合がしないといふのに、いくら御好意にもせよ、猶雨傘をさしかけてやらうと言つて聽かない譯があらうか。若し必要があればこちらに充分その備へもあるのに。』更に子爵は又記して言ふ、『合衆國に關して、南米は愛慕と疑惑との中間にゐる。南米人は合衆國との好誼を續けることを望み、その最も聰明な政治家は、これまで猶燃えさしのやうに殘つてゐた敵意が、ともす

れば炎と燃え出さうとする彼等共和國間の平和保持のため、合衆國の外交行爲の價値を感じてゐる。この價値は近年一再ならず驗された。之に反してまた他の一方では、既に述べた如く、自らその威嚴を保つことに汲々として、全然恩を被る考がない。かつ何事にもせよ、威嚇に類することを快しとせざる餘り、彼等はその自國に加へられたると、他共和國に加へられたるとを問はないのである。

國民として我米國の手腕の足りない事で非難すべき點は主として、羅甸亞米利加に長らくあるモンロオ主義に對する誤解にあると言はなければならぬ。併し時にはわが米國の眞意を誤るこれらの見解が必ずしも吾々の責だとは言はれない事もある。——その誤解は單に思ひ違ひであるか、さもなくば商業上の敵手か、或ひは國際間の惡感情はやがて各人の氣を惡くする事を知らない善意の而も狹量な人士によつてもと〳〵捏造せられたものであることが後には分るだらう。茲に一例として如何にこれらの誤解が發生し展開して行くかを見よう。之によつてまた誤謬矯正の爲にする忌憚なき言論が、如何に有效であるかもわかるだらう。

數年前、亞爾然丁の名士で、後にはその國の大統領に擧げらるべき人であつた博士ロック・サエンツ・ペニア（併し噫、今や此人亡し）はかの秀句『人類の爲の亞米利加』を公言した。モンロオ主義が南米大陸にとつて何か忌はしい意味を持つてゐる、——『亞米利加の爲の亞米利加』はその實『北亞米利加の爲の亞米利加』の意である——と誤信する羅甸亞米利加人は、この崇高なる公言『人類の爲

の亞米利加』の語を捉へてモンロオ主義に對する挑戰の聲とした。ここにこの事實を引用した所以は利他的なモンロオ主義を樣々に誤解した者の中に之が最も代表的だからだ。合衆國が南米の尺寸の地をでも取るといふやうな事は、此主義として、今までそんな積りもなければ、またある可からざる次第だ。これは同じやうな多くの誤解の中ただ一例たるに過ぎない。これらの誤解の亡靈は久しくあちこちと彷徨してゐたが幸にして此亡靈は難なく取り鎭めらるべきものである事が分つた。『人類の爲の亞米利加』のこんな風な解釋は、全米主義を誹謗する人たちにはブウメラング（註。濠洲土人の使用する投槍の一種で、投者の方へ跳ね返つて來る性質がある。）であることが分つた。此人たちを困らせるには唯聰明なる一瞥を以て足れりとするからだ。それはいふまでもなく、實際には、下の事を全世界に示すに他ならぬのであつた。全米主義は言語の相違、汽船航路の缺乏、相互一般の無理解等の爲に互に疎隔されて亞米利加諸共和國間に一層親密な交情を希求するものであるが、さりとてわれらと舊世界諸國民との間にある歷代の交情尊敬を弛緩せしめようとするものでは斷じてない。

　モンロオ主義の敵は、かの一句こそは此主義の主張たる『亞米利加の爲の亞米利加』に對し、その狹隘を難じたものだとして喜んだ。サエンツ・ペニアの『人類の爲の亞米利加』の一句を解して米大陸は亞米利加各共和國の爲に保存さるべきものではない、一般人類の間に分割さるべきものだと云ふ意味だと吾々が信ずるとこの徒は思ふのだらうか。或ひは又、ペニアが全亞米利加共和國に結ばれん

とする親密な交情に反對したのだと思ふ事が出來るか。かの如き說は苟も事理を辨ずる人々を動かすべく餘りに不合理である。

ここに私は喜んで記載したいことがある、わが著名なる友サェンツ・ペニア博士は、第四全米會議の代表者に對して私が博士の秀句を前述の如く解釋したる演說を讀んだ後、これに懇篤なる贊同の意を表し、更に言葉を進めて、博士のかの言葉に附纏ふ誤解には彼自らも了解に苦しむのだと言つたことがある。

これに就いて言ひたいことは、故國を去つてブエノス・アイレスに行く前、多くの友人は忠告して曰く、南亞米利加でモンロオ主義のことを言ふのは危險な話題だ、彼地では信ぜられてゐない主義で、弱國はこれを恐れ、强國はその干涉がましく且不必要なる保護を快しとしないから、之に就いて語ることだけは用心して避けなければならぬといふ事であつた。私はかういふ事情あるが故にこそ、沈默は決してこれを矯正すべき所以でないと考へた。モンロオ主義がかの地で恐れられたり怨まれたりする理由は露ほどもないのであるから、沈默にあらずして友誼ある言論こそかくの如き誤つた印象を癒すべき唯一の妙藥だと思つたのである。サエンツ・ペニア博士が、其人道に基づく廣汎な公言を私が辯護したのに贊同して、モンロオ主義に對する間接の攻擊といふが如き狹量な主義にそれが解せられたことを憾みとしたのは、偶々以てかかる誤謬が通用する事の許されない一證と見ることが出來る。

南方の同胞が、わが外交政策の根本義に關して往々迷路に入つたことは事實である。かういふ誤つた心意の狀態には、矯正か或ひは說明を加へるべきではなからうか。

若しそれわが國民の中、國外の輿論に冷淡なものがあつて、モンロオ主義はおのづから明白である。今のままにして置いて、完全なものだといふ人があるならば、その人にはかう答へるべきではなからうか『南方の一大共和國へ行つて、彼等の見解を學び得るまでそこに生活せよ。かくしてわが愛する祖國が、モンロオ主義巡査、大棍棒を持つた無態な世話燒として誤解されてゐるのをみすみす見つつ、しかもわれらは實はこれと全く異なつた考を持ち、又この誤解を矯正することの然かく容易であることをも知りながら、果してこの儘にして置いてよいものか、われに告げよ』と。

わが國今代の人たちの手腕は、過去に於て手腕が無かつた爲に蒙つた缺陷を補はなければならぬ。さらば如何にしてこれに取掛るべきであらうか。

第九章　平和の爲にする全米三角同盟（一）

其底邊西半球に於ける戰爭を防ぐ爲にする全米聯合調停策

西半球の現在及び將來に備ふる至上の方針として、モンロオ主義を新しく適用するの方途如何。こ

の興味ある問題を攻究すべくわれらは上來用意し來つて今や其時機に入つたのである。既に讀者と共に南米を旅行し、その國人に接し、市場を研究し、かつその見解の重んずべきをも知つた。われらは自國の狀況を顧み、目下何時たりとも國際十字軍に着手する事が出來るやうになつてゐる商業會議所其他の設備をも點檢した。また外交史に鑑み、わが外交政策の當初に於ける明徹の見解を得、その基たるモンロオ主義を論じて愛國の念を新にするを得た。われらはモンロオ主義の擴張と共新しい適用の必要をも認めた。かくして將來その過去になされたやうな誤解を防ぐのみならず、亞米利加全州が全外國に對する平和確證として、モンロオ主義の效果を增大せんが爲である。われらは今や更に將來を望み、また以上見聞した事を活用することに依つて、將來に備ふるの方途如何を凝議し得る所まで論じて來たのである。

ここに將來を望み見る時、私の眼前に今髣髴として現はれるものは堂々たる一個の幾何學的の圖形である。アヅテック土民の三角塔の如く頑丈に、かつ巍莪たる『平和三角同盟』、全米主義よりその各邊の勢力を攝取し、打つて一丸として自國防衛に備へようとする『三角同盟』である。この平和三角同盟の權衡がしかく勢力あることは、一方その底邊が西半球全體を通じて共和國相互間の調和に及ぶと共に、東方の一邊は、歐洲との軋轢誤解に對する城砦となり、又西方の一邊は太平洋上永久の平和を明證するものであるに依つても知られる。この大規模の三角同盟は空論より生じたる茫漠たる輪廓

でもなければ、曖昧な幾何圖式を表はすものでもない。實に建築家の細心な設計圖の如く精確に作られ、又、これと同じやうに、愈三角同盟の着手されるに先だつて極めて緻密な審議を受くべきものだ。これは認容されて完成する處まで徹底的にやるか、さもなくば卽座に棄却さるべき明確な一つの外交政策である。われらは忍んで待つことは厭はない。よしや待つことは目的もなく流に從ふことを意味し、目的もなく流に從ふことは誰も尊重しないことであるにしても、われらはそれを厭はない。若しまた設計全體に一致することが出來なければ、初めから全く手を着けないことにしたい。何となれば苟も國民が一たび口にしたる言葉がそのまま移し變へて恒に繼續し、徹頭徹尾完成さるべき行爲となるやうでなければ最初から之を口にしない方が好い。臨機應變は政策ではあるが、眞の經世家の業ではない。平和三角同盟は喜ばれないかも知れないが、決して曖昧なものだと評せらる可からざるものだ。

第一にこの三角同盟の底邊を考へ、果してこれが共和國相互間の調和を完成し、之によつて皆が協力して他の東西の兩邊をも形成するに足るものであるかどうかを先づ調べて見よう。

この底邊を備へる爲には、モンロオ主義の意義が羅甸亞米利加で誤解せられてゐた一般狀態と之に對するわれらの意向とを先づ一考して置く必要がある。時の長短を問はずこれらの諸國に滯在してゐた人はこの事態に對して是非とも腹藏なく言はんと欲する所を言ひ、且モンロオ主義を是等の國人に

對して明瞭にし、且新しく適用するやうにしなければならぬ事を知つた。かくの如き進歩的手段が過去、將來に於ける誤解を一掃することはモンロオ主義を放擲するよりも――たとひそのやうな選擇が可能であるとしても――遙かに有力である。若しモンロオの言を撤回する事となれば、論理上當然吾人は亞米利加諸州の或部分をして埃及、トリポリ、アルジェリヤはたモロッコの如くならしめるに同意してゐるのだといふ結論に歸著して了ふわけだ。これらの誤解に對するに、大統領クリイヴランドがヹネヅエラの難問に用ゐ、また大統領マッキンレイが玖馬事件に用ゐたと同じやうな堂々たる直截な態度を以てすることが出來ない理由(わけ)はないのである。何となればモンロオ主義或ひは米國の意向に對する誤解は、何れにしても存在の理由なきものであるからだ。

わが友、わが愛する亡友は、玖馬の丘のほとり、そよぐ草葉の蔭に眠つてゐる。これらの友が全米主義至高の理想の爲に身を殉じた人であるかないかといふことは、誤解の餘地さへないのである。『人その友の爲に生命(いのち)を棄つるは之より大なる愛なし』。われらは、かの二回の交渉の後に、玖馬から撤退したことは、實にわが最も光輝ある戰勝よりも更に大に誇とす可きものである。かつこの撤退が、わが米國共和國史上の如何なる功業にも優つて、大なる信任をわが國旗の上に齎らしたことは、南米全體の感じてゐる所である、之は私の熟知する所だ。

モンロオ主義とわが意向とに關する疑惑の暗雲を一掃する方法は、これに對する南米の見解を尊重

して米化羅甸族と米化アングロ・サクソン族との間に介在する論理の徹らない障壁を打破することであつた。之には次のやうな方法を取れば最もよからうと思はれる。――何時に限らず西半球に難問の起つた時、合衆國は常に姉妹共和國の一つ或ひは數ケ國の協力を求め、かくてその問題に關し、われらアングロ・サクソン族が未だ曾て爲なかつた或物を羅甸人の見解から得るやうにする事だ。然しながら何時、また如何にして、かくの如き計畫をうまく機に應じて活用することが出來ようか。

突如として起つたのはわが國と墨西哥との間の紛議である。わが國民の多くは武力を以て干渉せよと叫んだ。ここに南米問題は精明の形によつて現はれた――如何にこれと應對すべきか。かくの如く重大なる危機を變じて、わが羅甸亞米利加に對する關係を今までよりも圓滑にする機會となす事が、果して出來るものであらうか。この緊張した國際關係に際して、私は愛國心の爲に、墨西哥問題に就いては當時唱導せられた武力干渉の範圍外に一歩も踏み出さないやうに自ら抑制すべきを感じた。固より私とても、如何なる方法を以てするにせよ、國家の主權に武力を以て外國が干渉する事を不穩當だと思ふのは、わが南米の友人と意見を同じくしてゐる。われらは歐洲列强のした如く、ウエルタを以て事實上の大統領と認定すべきであつた。わが贊同を經なければ如何なる個人に對しても承認を拒むなぞといふ事は、わがまさに行ふべからざる選擇の形式を行ふので、かくの如き、殊に米大陸共和國の場合には最も爲すべからざる事である。無論如何なる國家と雖も、その國民の他國に於ける生命財

產を擁護する義務はある。然しこの事たるや必ずその國に現存せる政府を顚覆せずして行はれなければならぬ。

合衆國は墨西哥に干渉すべき筈ではなかつたのだ。わが南北戰爭の際、若し歐洲列强の或ものが武力干渉を企てたとすれば、われらは何と思つたであらうか。論者或ひは言はむ、墨西哥の革命は然く長引いたからだ、從つてわれらの干渉は止むを得なくなつたのである、と。わが南北戰爭は四年の長日月に亙つた。而も一時（ひととき）としてわれらが干渉を恕し得た時は無かつたのである。墨西哥をしてその鄕ふ所に從はしむること、わが前日の如くせしめてはならぬといふ理由が何處にあるか。この問に答へる者は、或ひは比較が妥當でないと云ふかも知れない。何故（なぜ）かと云ふと、墨西哥の場合、若しわれらが干渉しなければ歐洲列强の或ものが手を出さないとも限らぬ。然らばこれ實にわが外交政策の最も肝要にしてまた公明なる金科玉條たるモンロオ主義に反するものではないか、とから云ふだらう。遮莫、冀くば吾等をして干渉の習性になづむ事なからしめよ、その容易に習性となるものであることは歷史がこれを示してゐる。われらは今日既に充分の領土を有してゐる。わが大共和國一切の愛國の士はむしろ進んで南隣の全き信任を得るといふ重大の問題に全力を盡す可く、またわれらはまさにこの信任を得べき筈の者だと云ふことを、私は信じて疑はないのである。

私はわが外國貿易の熱心な擴張論者であるが、また一種の對外發展論者（ジンゴ）であつて、わが姉妹共和國

の信任を得ることこそ、商業上又人道上、その何れの領土を得るよりも遙かに重大なる事だと信じてゐる。そこで、これら光彩ある諸國民の全き信任を博することは、即ちこの諸國の大貿易に與かる最捷徑である事を斷言するのである。

われ等は南米人の見地が充分斟酌すべきものであることを結論した。以前モンロオ主義に關する誤解があつた爲に、之に對する彼等の見地は殊更にわれらの注意に値したのだ。然らば羅何亞米利加人のモンロオ主義に對する見地は果して實際如何なるものであるか、また腹藏なくこの見地と應對することに依つて、モンロオ主義が片務的な警戒的なもののやうに南米人に思はれず、飽くまで全米的なる事を主眼とするものだと云ふ事を知らしめる方法は如何に。之が當面の問題であつた。ところが恰度この時、平和の爲の三角同盟に底邊をなすこの考を、いよ〳〵實現すべき恰好の時機が到來したやうに思はれたのだ。

今より三年前、千九百十三年一月九日、亞爾然丁公使の手から私は亞爾然丁國民によつて贈られた特別金牌を受けて深く心を動かした。その日、私は米化羅何同胞に對する自分の知識と愛慕とに促されて一片の勸告を敢へてしたのであつた。これは前後二年間私は南米に滯留し、その便宜に依つて國民の日常に於てのみならず、また各種國際會議に參集したる、多數共和國の政治及び知識階級の頭株の意見をも私が知り得た其結果である。この勸告は私は感謝するが、三つの有力な代表者（一々亞爾

然丁の、他は紐育の）の手を經て三百の羅甸亞米利加の新聞紙へ電達せられた。それは次の通りであつた。

『この墨西哥干渉の議論こそ恐らくは、全羅甸亞米利加の眼中に映じたるモンロオ主義の問題に就いて吾々の考を正す可き機會ではなからうか、此點を先づ一考し、また同時に干渉そのものに對する問題の出來得る限りの解決法をも講じて見たい。さて私の新しい勸告といふのははかうだ、假に墨西哥或ひは他の姉妹共和國の事態容易ならず、爲に歐洲列強の或ものが自由市民を保護する爲、先んじて武力干渉を行ふか、或ひはわが西半球の或市民の爲に同樣の世話をするか、何れにもせよ、終に必然の勢としてモンロオ主義の條項の下に、合衆國が起つて干渉するの必要を生ずると想像せよ、その時、私の意見として、われらは亞爾然丁及びブラジルか、或ひは他の亞米利加の一國若くは數國を誘つて、共に協同してこれを行ひたいと考へる。これは國務卿ノックスが祕露エクワドル間の紛議に用ゐた策と同樣であるが、當時は有名なこの主義も武力干渉も問題にはならなかつた。かかる誘引の結果は如何なるであらうか。それは二つの顯著なる傾向となつて、共に大に歡迎すべきものであらう。先づ第一、この事はわが南米隣邦の人たちの頭から、わが米國の目的が領土獲得にあるなどの誤解を一掃するだらうと思ふ。何となればおのれ獨り利を占めようとする者が隣人を二人も誘ひ出す事は無いからである。第二には、私は之も等しく、大切な事だと思ふが、已の懐を肥す爲にわが單獨交渉を望

み、わが米國が他の列强と共同で交渉することを喜ばない個人や團體のしつこい請求をわが政府は之によつて免れることになる。更にまた是は羅甸亞米利加をしてわれらと共にモンロオ主義の責任を頒ち、その發展に參與せしめる誘引の最上の策であつて、かつ最も得心の出來る形式である。この大主義は直ちに大陸的のものとなり、今日その一大缺點である片務的の性質を脫する事になる。合衆國の義務は羅甸亞米利加の取締（ポリイス）をすることではない。ひとり南米に於てのみならず又北米に於ても、此思想の傳播が早ければ早いほど益々わが國際的名聲を博する事になるであらう。何時に限らず、モンロオ主義條項の下に、西半球に於て武力干涉の必要が起つた時にはその如何なる場合たるを問はず、他の亞米利加が諸國を誘つて共に責任を頒ちたい。亞米利加諸國はすべて皆等しく此主義の恩惠と責任とに與かるべきものである。』

以上は私が三年前に聲明したところ、爾來事態は當時公言した私の意見を愈々益々强めるものとなつた。亞米利加共和國の共同交涉の爲に形成したこの計畫の主なる價値はこれが電達を受けた三百の新聞紙一つとして不同意を唱へたものはなく、殆ど皆すべてを擧げてこれを是認したといふ目醒ましい事實を見て明らかである。この羅甸亞米利加諸新聞の異常な一致は、われらが長く等閑視してゐた或もの卽ち南米人の見解と全き調和を得た基調の彈ぜられた事を示すものである。合衆國の新聞が敵意を以て私の所說を評し、方案の槪略を見て實行し難しといふのを主たる論據としたのは殊に面白い

と思ふ。

十五ヶ月の後、千九百十四年四月二十五日、墨西哥の難局に關して恰も先きに述べたやうな好意の仲裁が、華盛頓駐剳の外交代表者を通じ、亞爾然丁、ブラジル、智利三國によつて、次の通り徹頭徹尾數賞すべき提議となつて合衆國政府に向つて提出された。

『わが大陸に於ける平和、文明の利を謀らんとする目的、爾後流血の慘を防がんとする熱望により、亞米利加諸國の國民と政府とを常に圍繞せる友誼協同の臆斷を主として、吾儕、ブラジル、亞爾然丁、智利三國の正式の全權使節は、米墨間爭鬪の和順なる解決を見んが爲、わが好意の斡旋を閣下の政府に致すべき光榮を有す。

この提案は吾等が勸告案として、該問題に關し曩に國務卿の机下に呈出する機會を有せしものを更に正式ならしめたるなり。玆に國務卿に對し、いま又新たにわが最高にして特別なる推重の意を確言す。

デ イ、 ダ ガ マ

ア ル、 エ ス、 ナ オ ン

エドウワルドオ、シェアレツ、ムジカ』

この仲裁が米墨間の戰を防ぐのほか他意なかつたこと、又その目的とするところ毫も墨西哥の內亂に容喙するの考の無かつたことは、細心に注意すべきである。此點は該案が如何なる程度まで成功したかを考へる時、是非とも念頭に置かなければならぬ。

此提案は直ちに米國政府の容認する所となつた。次に掲げるのは當時の國務卿ブライアン氏に依つて送られた容認書である。

『合衆國政府と今日わが姉妹共和國墨西哥を代表せんと要望する者との間に横たはれる現下の難局に關し、能ふべくば解決を遂げん爲、貴政府の好意ある斡旋を致されんとする貴官等の連名書を受領するや、合衆國政府はこれに示されたる友誼、好情、及び亞米利加の平和安寧に關する寬厚の配慮に對し、深く感動に堪へざるものなり。旣に提案の作成せられたる目的の存する所を知れるが故に、わが合衆國政府は猥りに之を謝絕するを憚るものなり。わが政府の主眼とする所は、亞米利加の平和にあり、またその諸共和國と國民との親交にあり、共同の目的に基ける忌憚なき相互の理解と友誼によつてのみ生ずべき幸福と繁榮とにあるなり。この故に貴政府の寬厚なる提出案は容認せられたり。墨西哥國民の各異分子を代表して、滿足なる從つてまた永久的なる解決の條項を議するに足るものを貴官等が發見せられんこと、實にこれ我が政府の熱望に堪へざる所なり。若し貴官等にして彼等にその意あることを發見せられなば、わが政府は喜んで共議に與かり、如何なる要求にあれ主權によつて形成

せられたる提案に關しては最も腹藏なく且妥協的なる精神を以て之を議し、彼等が亞米利加に於ける相互の協力と信頼との新時代の可能を示し、其將來を察するの明あらん事を望まんとす。わが政府をして忌憚なく言はしむれば、現下米墨間の外交關係は一時斷絶せるが故に、貴官等の提議せられたる仲裁計畫を行はんとするも必ずしも障害なきを保せず。また墨西哥國内の兵勢を管理せる人々が進攻の擧に出づる以上、勢ひ合衆國は直接平和の希望を擲たざるべからざることも、これ亦論を俟たざるなり。然れどもかくの如きは吾等をして貴官等の寬厚なる意見を容るるに躊躇せしむべき理由たるものにはあらず。無謀なる示威行動がわが平和の希望を失はしめ、談判を中止せしむるの憂なきやう、短時日内に最良の結果を得んことを希望す。』

五年前――と言へば實に短時日の事であるが、――五年前までは、南米でよく言はれた事は、どうして北の兄分たる合衆國が、國際問題の解決などに就いて、南の弟共の援助や忠告を容れるものかといふのであつた。今やこの誤解の亡靈は影と消えた。現に此場合恰もその援助がわが合衆國によつて本式に容れられ、かつ歡迎せられたのである。各國の歷史を通じて、西半球の南北國民が各共和國相互の平和の爲に協力の實を示したこの好例ぐらゐ著しく健實を證するものはないのである。これ實に世界的事件として重大な事ではあるが、亞米利加の事件としては更に最大重要の事柄である。提供された仲裁を吾々が容認した事は、單に墨西哥國民に對する調停を得しむるに與つて力あつたのみなら

ず、引いては、今日歐羅巴を荒廢しつつある軍力主義の西半球に蔓延するを防ぐ機關としてモンロオ主義の價値を、南米全體に痛切に會得せしめたのである。

この容認に引續き、加奈陀のナイアガラ(バファロ附近の)で、五月二十日に始まり七月に入るまで續いたる全米會合が開かれた。之に列席した者は此提議に調印したる三國大使と、合衆國の代表者及び墨西哥の代理者であつた。この會合の審議は絶えず一般公衆の深大なる興味を惹いた。會期の終を告げたとき、仲裁三國の外交官の故參たるブラジル公使は、之を新聞紙上に公表するに當つて下の如き語を用ゐた。『衝突の國際關係の方面を議する事は、確かに吾々のぷろぐらむの要點の一つであつたが、之だけは先づ解決がついたと言ひ得るのは、私にとつて何よりの滿足である。だからといつて、吾々が事既に成れりとして歸國するといふ意味は此中に含まれては居ない。唯先づ此點までは戰爭を避け得たと吾々は感ずるのである。また最も直接に利害關係ある國々の合意の上で、且はまた合衆國政府の感情とも十分よく調和して、ここに吾々が決定した一事がある。卽ち吾々の國民的問題には常に公明の審查を遂げて、海外の干涉なしに問題を解決する事を亞米利加の根本方針とする事である。以上の如き結果が得られさへすれば、吾々は確かに亞米利加國際政策の上に一層都合のよい新空氣を作り出したのだと信ずるのだ。』

今この章を終るに當つて、一言しておくべきは、かかる仲裁が或限度以上には有效な目的を達す

る事が出來ないといふ點である。このA・B・C仲裁は、國の大小を問はず各國民の完全なる獨立主權といふ思想に、一大刺戟を與へたには相違ない、(之は今日まで羅甸亞米利加の人たちが、モンロオ主義によつて威嚇されると勘違ひしてゐたものである。)しかしまた國際關係の發達の今のやうな程度では、かかる仲裁の提議には或制限を置くべきだと云ふ事も、亦同じく眞である。或種の問題は現に一國民の獨立主權の中に深くも織り込まれ、其安寧幸福には非常に大切な密接の關係あるものだと信ぜられてゐる。從つて中立强國からの仲裁案が、其國の獨立主權の爲に眞に危險となる事もあるのだ。たとへばかのプレェト河管轄問題の如き、之に沿へる兩國民には非常に大切な事柄で、また同時に外部からの干涉は却つて無謀であり實際的でないと云ふ程までに際どい問題であつた。大西洋のこなたに於て、吾々は國際平和の爲、眞に信賴すべき防護の法を得るには旣に長足の進步をしたのである。わが南米の友邦が示したあれ程までにはまたよく國際關係の事に素養を積んでゐない他の方面からして、若し實際に疎い勸告が出て、これ以上の進步を危きに陷らしめるやうなことでもあれば、それこそ實に殘念だと思はれる程の極めて實際的なる一大進步を遂げたのである。

以上私は平和三角同盟の底邊が如何にして出來上るに至つたかを明らかにした。そこで次には此努力が果して功を奏したかを一考して見よう。何となれば底邊が確固して居ない位ならば、三角形を完成する他の二邊は、一層初めから畫策しない方が好いからである。

第十章　A・B・C（A亞爾然丁、Bブラジル、C智利）

仲裁は果して成功せしか

從來稍人をして失望せしめた感ある國際平和運動の爲に、何等かの實際的畫策を講ずる事は、われらが經來れる如き世界史上の危機に際して、焦眉の必要に迫つた。此運動は、明らかに、また人をして如何にもと思はせるだけに、實際的なものでなければならぬ。平和協會は極めて實際に疎いといふのが殆ど定評のやうになつてゐるからである。それと云ふのも實際に疎い或人たちが、徒らに口さきばかりを材料（たね）にして、動ともすれば其動機には自分の名が新聞雜誌に出るのを樂しみにすると云ふ臭味があるからだらう。のみならず彼等の努力あるにも拘らず、戰爭は無くなるどころか、寧ろ益々頻繁の度を加へたのである。

舊世界の方では大陸全體が戰亂の渦中に投じて、恢復までには幾年もかからうといふ騷ぎの間に、大西洋のこなたでは前述のやうな實際的な平和策が唱へられて、それが物になり、うまく戰爭を避ける事にも成功したのである。この畫策は實に世に所謂A・B・C仲裁として實現せられた。しかし其

大なる眞價に至つては未だ十分に認められては居ない。或大きな國際の變局の時に生きてゐる人は、先づ概してその重要な點に氣付かないもので、ちやうど餘り近く木のそばに立つてゐる爲に森が目につかないやうなものである。然らば此畫策が効を奏したと信ずるには果して如何なる理由があるか。

墨西哥問題に際して此仲裁から出來た二つの著しき結果は、第一、輿論の最高審判所が西半球に出來た事と、第二には、モンロオ主義が忽然として大陸的のものとなつて、羅甸亞米利加の方の人たちから見ても、最早片務的な警戒的なものでは無いことになつた。大きい奴が大きい棒を持つてゐるのだと思つてゐるのは、眞に心の迷ひであつた事が分つた。新世界の政治史上こゝにはじめて輿論の最高審判所が現はれて、羅甸亞米利加の人にもまたアングロ・サクソン種の人にも同樣に重んじられ、其決議には南北兩米ともに之を尊重して承認すると云ふまでになつた。如何なる國と雖も此承認を無視する事は、海牙(ヘーグ)審判所の正式の判決を無視するよりも更に困難の事となつた。種々の方面から見て、之こそかの海牙で連續して開かれた會合で考察された立派な國際平和機關の結果として、最も實際的なるものに他ならぬのである。

之を『輿論の最高審判所』と名づけるが、かく呼んではならない理由があるだらうか。この名に對して誰か異存があるだらうか。正式に、根氣よく、また禮節を重んじて或難問を諸方面から考究し、

その努力の結果こそ戰爭を未前に防ぐ事ではなかつたか。この戰爭たるや不必要な戰爭ではあるが、しかし若し此仲裁が無かつたならば、危くも目前に迫つてゐたもので、實に國威に關する侮辱としていかなる國民と雖も忍ぶ能はざる程のものがあつたからだ。

苟も審判廷にして勢力あらしむるには先づ之を尊重しなければならぬが、之は國際間の審判廷に於て然りである。それは裁判權が自國民間に限られてゐる普通審判廷の享有する警察力と云ふものを有つてゐないからである。法廷にして眞に有效ならしめんには先づ輿論の裏書を得なければならぬが、今ここに論じてゐる法廷こそは實に此裏書を有つた裁判所で、これ實に輿論そのものの產物であるといふ立派な理由があるからだ。亞爾然丁、ブラジル、智利の輿論にして若し此仲裁提議を諾するだけに進んでゐなかつたならば、かういふ提議をする事は決して無かつただらう。しかし之を諾したる以上、も一つの羅何亞米列加の國たる墨西哥が仲裁者の決議を大丈夫承認するだけの堂々たる聲望をそれが伴つてゐたのである。アングロ・サクソン種の一國がやり出した位の事では、此承認とても得られなかつたのである。

かういふ裁判所がやがて西半球の方で國際間の利益のために如何に有力な機關になるだらうかといふ事を、合衆國人が本當に理解するには、なほ多少の時間を要するだらう。何故かといふとわが米國人は全體から見て、輿論が米國に於けるよりも南米に於て遙かに有力である事をまだ知らないからで

ある。南米で之が有力なのには色々の理由がある。その一つは、――殊に其最も重大な理由の一つは、ヘンリ・クレイが之を知つてゐて、前にも述べた如く、しきりに藻掻き立ててゐる西班牙植民地の獨立承認のために米國上院で論爭のあつた時、クレイは植民地新聞紙の驚くべきばかり優秀なる事を指摘したのである。昔からかの國では立派な新聞傳統があつたが、今もそれを見事に維持して行つてゐる。殊に南米のやうに新聞閲讀に熱中する國民の輿論の上には、新聞紙が如何に大勢力を有するか、殆ど測り知る可からざるものがある。かの地の大新聞が讀者の注意を國際問題の方に向けようとすること、米國に於けるよりも如何に大なるかは特にここに力說して置く必要がある。わが國人は殆ど以上の點に氣附いてゐないからだ。ブエノス・アイレスの『新聞（ラ・プレンサ）』の如きも有力なるものの一つだが、二頁全部を日々電報に費して、如何なる米國新聞紙と雖もまだ〳〵達し得ない標準を示してゐる。澤山の外國通信は日々南米人の目に觸れて國際問題に就いて考量せしめ、日に日にかういふ問題を考へ續けさせてゐる。之を見ると、普通の南米人が米國に於ける同型の人たちに比して、外國問題を考へるのに遙かに多く熱中するのも、蓋し怪しむに足りない次第である。

南米の隣人が概して國際問題の事に明らかで、このA・B・C仲裁の如き二國民に重大の關係ある難問に對して極めて聰明な實際的なる解決を下すを得るに至つたのは單に新聞購讀によつてのみではない。南米第一流の大學では米國諸大學に於けるよりも國際法に重きを置いて、有力な法律家が多く

此方面に力を注いでゐる。米國でならば先づ國内の大事件の方に意見を發表しさうな型の人たちが、皆國際法に關係してゐる。試みにブエノス・アイレスの大學を見ると、此一大學の法科だけで養成された有名な國際法學者の數の如何に多いかを見て、他國人は先づ一驚を喫するのである。その中でもカルヴォ及びドラゴ二氏の如きは國際法の二大學説にその名をとどめてゐる。その他メラヤ、ゼバルロス、モンテス・デ・オカ、ピニエロ等の斯學の名家は甚だ多い。

南米の諸大學が學問としての國際法を通俗化したが爲に、かの國の教育ある人士は、國際間の法律問題を論ずるのに、米國人より遙かにすぐれてゐる。之は毫も驚くに足らないので、此種の問題が多年かの國の先覺者の注意を惹いてゐた事は、合衆國に於けるよりも多かつたからである。

南米人が國際問題を論ずる立派な素養を有つてゐる事は、一般米國人士の知つてゐる以上であるのみならず、また其素質が元來氣力に富んでゐるので、此點に就いてはわが米國人はまだよく知らないやうである。普通には南米人を目してただ熱帶の氣候で困らされてゐる熱帶人種だとのみ思つてゐるが、之は確かに誤解である。かれ等の能力に就いては私は澤山の例を知つてゐるが、其一つを言ふと、ブエノス・アイレスにはかういふ人物がある。其人は代議士として有力であると共に、一大法律事務所を經營し、法科大學の職員として活動し、また國の内外に賣行の廣い或法律雜誌をも編輯してゐる。かういふ極めて廣い活動の範圍は、かの國では毫も珍らしくない事である。

南米人を好む人、又大學や新聞紙から南米人が多年受けて來た國際的知識の教育のほどを知つてゐる人にはA・B・C仲裁のごとき實際的な方策は實に彼等によつて發展せられた事だらうといふ點を理解するのは蓋し難事ではなからう。また之に從つて起るべき結論として、かくしてたてられたる審判廷に對しては南米こぞつて十分之を尊重するだらうといふ點も、尤だと容易く理解されるのである。

このA・B・C仲裁の第二の大なる結果を語る一つの前置きとして、また上に述べたやうに有力なる南米新聞紙の讀者として、ここに甚だ愉快な重大な意義ある一事がある。それには米國が此仲裁の提案を承諾し、ヹラ、クルツを軍事的に占領した費用の賠償を一切放棄した米國の行動を見てこた等の諸新聞紙が一般に賞讃したといふ事實を見る事である。此賞讃が愉快であるのは、南米人の吾々に對する態度の一變した事を示すからである。またそれが重大な意義を有するのは、米國國民性の根柢に潜む愛他的精神を理解しようとする友情の傾向をも示すからである。米國が喜んで此仲裁を容れたのはわれわれに領土併呑の野心なき事を南米人に知らしむる上には、干渉あつて後に玖馬から順次手を引いたのよりは以上に效果があつたのである。近年わが米國の誠意を證したる實例、卽ち千八百九十五年に米國がヹネヅエラの領土を保護し、また支那に對して拳匪の亂の償金の大部を返還したる唯一の國民であつたといふ行動、これ等二つよりも以上に、今では南米人はわが米國の誠意を納得するに至

つたのである。

さてA・B・C仲裁のこの第二の大なる結果に就いて見るに、是は即ち南米が進んでモンロオ主義の責任と發展とに干與しようとするものに他ならぬのである。他に別に効果を齎らさなくとも、之だけで既に優に此仲裁の成功たるを示すに足るものであらう。此點から言ふと、千八百二十三年十二月二日大統領モンロオが其有名な教書を米國議會に交附して以來、この仲裁ほど重要な發展の場合は確かに他に無かつたのである。千九百十四年五月六日全米聯合(パンアメリカン・ユニオン)の總務局に集合したる外交代表者の滿場一致の決議によつて、三國仲裁の行動に對して他の十六ヶ國もまた之に贊同の意を表したのである。その決議は『亞米利加が大陸の平和保全の爲に亞爾然丁、ブラジル、智利の政府が、其代表者を仲介として提議したる仲裁を賞讃し且之を援助す』と云ふのであつた。

米國外交政策の核心たるこの點に關して、南米も亦遂に吾人の見地たる愛他主義を實現したのである。そして西半球に於ける諸國民の安寧幸福に重大の關係ある問題に關して、南米の輿論が如何に大なる實際的價値を有するかをも米人は遂に理解するに至つたのである。この兩方面を具へたる立派な實現がかくも手早く出來上るためには、仲裁によるより以外の方法で如何して之が出來ようぞ。

時々血に渇したる哲學者が打寛(うちくつろ)いだる姿で安閑と爐邊に坐して兇暴の語を吐くのを聞く。曰く、戰爭に熄む時がない、遠からず吾等の番も廻つて來よう、そして南米と戰ふの日があらうと。しかしそ

は果して何が故であるか。殊に今や既に其效力を證明せられたる『聯合仲裁』といふ機關が運轉してゐるのに、それはまた何故であるか。試に思へ、羅甸亞米利加の國民が合衆國に對して宣戰したところで、政治上經濟上或ひは領土の上に果して如何なる利得を望む事が出來るか。或ひはまた同じく合衆國が羅甸亞米利加の國民に宣戰して果して何の得る所があるだらうか、苟も正氣のある人間にして此利得を勘定して見るならば將來そんな戰爭の起りさうもない事は十分合點が行くだらうと思ふ。全米恒久の平和から得られる商業上の利益といふやうなごく堅固な論點から之を考へて見ても平和が續くだらうといふ事の確實なのは證明される。合衆國にして若し南米の領土を獲得しようとするならば、それは實にすべての南米人の好意を失つて了つて今や增大しつつあるわが南米貿易を危地に陥れるものだ、折角結構な林檎の積んである車を蹴り返すやうなものだ、合衆國人はこれ位の事の解らない程に沒常識な國民ではないのである。

全米の難問を解決するに當つて全米諸國が一致の行動に出る必要が、はじめてブエノズ・アイレスで論じられてから、今で約五ケ年になる。此說はかの地で歡迎せられ、特に其敏腕な新聞記者、わけてもかの『新聞（ラプレンサ）』の主筆たる才人ダギラ博士の如き屈指の人物によつて歡迎されたのである。しばらくでも此人と談話を交換してゐると、此思想の爲に十字軍を起さうといふ精神を鼓吹されるのだ。そして後日私はさういふ聯合行動を全國到る處に奬說する機を得たのである。固より之は理想としては

確かに人を感奮せしめるものであつたが『かくも心こめて願はるべき』大願成就の所へ行き着くまでには、前途なほ遼遠で且幾多の苦闘ありと思はれたのである。しかもそれは速かに立派な事實となつて實現せられるに至つた。後の者の倣ふべき先例となり、また將來人をして勇往邁進せざるを得ざらしむる程の旗章（はたじるし）ともなつて現はれた。千九百十三年一月、私が聯合仲裁の案を立ててから一兩日にして、或友人はかう言つた、そんな架空の案を立ててそれが實際社會の人達の賛同を得るまでには、果して如何ばかりの長日月を要する事と思ふかと。此問に答へて、私は恐らくそれは多年の努力を要するではあらうが、當時五歳になる私の男子をして是非とも此運動の爲に一生を捧げしめるやうに育て上げたい希望だとかう答へたのである。しかもそれはこの幼兒が乳母の手を離れる前に既に立派な事實となつて出來上つた。二年半ならずして此方案は今や既に西半球に於ける國際問題解決の法として衆の認むるところとなつたのである。

モンロオ主義が米國の領土獲得を意味するものではないといふ事を南米人に納得させるか、或ひは南米の好意的協力が國際事件に當つて如何に實際的價値あるやをわが米人に納得せしめるか、この兩者いづれが多く困難なりやは一寸言ひ難い點である。而も此一見不可能なりと思はれたる結果は兩方共にみごとに成就せられた。實際的な國際仲裁裁判の精神を以て提議せられ、之を受ける方でもまた等しく國民的誠意の精神を以て承諾するに至つたる南米仲裁といふ此一行動によつて、それは成就せら

るるに至つた。華盛頓駐剳の亞爾然丁、ブラジル、智利の外交代表者――ナオン博士、ダ・ガマ博士、及びスアレッ博士三氏――が此仲裁の爲に致したる偉功に至つては、殆ど讃賞に辭なきばかりである。各方面に於て最高の好評を博し、米國議會をして、まさに之に相應したる行動に出づるに至らしめ、米國諸大學の贊同をも得るに至つたなどは、それは實に感嘆に値するものであつたのだ。完全なる平和時代の倘ほ未だ到らない、唯國際の誤解と調停或ひは仲裁すべく飽くまで實際的なる手段方法を講ずるといふだけで、今のところ吾々は滿足するの外はないのである。願はくば實際的でありたい。南米人が共A・B・C仲裁によつて示したほどに實際的なものでありたいと思ふ。

大西洋のこなたに於てA・B・C仲裁といふ事の結果は實に見ごとに成功したものであつた、從つてまた之と同じ思想を歐羅巴の方で之に倣うて行ふ事の出來なかつたのは實に不幸だと思はれる。例へば假に歐羅巴の方にも字母(アルファベット)の順を追うてE・F・G卽ちE英蘭士、F佛蘭西、G日耳曼三國の間に之に倣つた協約が若しあつたと想像するならば、歐洲戰爭の慘劇の如きは蓋し起らなかつたであらう。倘更に進んで考へると、歐洲の方でも紛爭解決のために何等か此種の方法を速かに講ずるに非ずんば、大戰以後の平和と雖も長くは續かない事は明らかである。

この墨西哥事件に關するA・B・C仲裁運動成功のお蔭で、吾々新世界の人間は今日吾々の考へ得るよりも以上に政見發表の共同形式を發達させた。これ常に北は大湖水地方より南は南氷洋に及べる

政見發表の共同形式をなすもので、われら凡てに向つて重大の意義ある危機の發生するとき全米協議の如何に有効なるかを實際の上に示したるものに他ならぬのである。

A・B・C仲裁の提議を何故に墨西哥は承諾したかと云ふと、之は全く墨西哥と國語を同じうし、共見地を共にし、また考へかたに於てもそれと全く同様である事の知られてゐる姉妹共和國の口から出たからである。此亞爾然丁、ブラジル、智利三國が墨西哥に對してなしたると同一の提案にして、若し之がわれら米人の方から出たものならば、墨西哥は確かに之を拒絶したと見て差支ない。何となればかういふ國際間の誤解に對して、羅甸人種とアングロ・サクソン人種との間には到底調停の道なき意見の相異があると墨西哥が信じてゐるのは極めて當然の事であるからだ。

米化アングロ・サクソン人種と米化羅甸人種との聰明なる協力によつて、此仲裁成功の結果として國際間の一大危機を回避するを得たる事實は、今や南北兩米の認むるところである。そこでまた將來に於ても、かういふ危機を何が故に同様の方法で回避すべからざるかとは何人も問はんと欲するところである。是れ實にかの舊弊な『唯一國民』の思想以上に踏み出したる長足の進歩として、眞に一新時代を劃するに足るものである。西半球の諸國民が悉く皆一致して、殆ど如何なる國際問題に際しても共同の安寧の爲に盡す事の十分可能だといふ事が、今では半點の疑を容れない事となつたのである。

全米主義は幾十年の間多くは熱氣に過ぎなかつたと、米國の新聞紙なぞで唱へてゐた批評家も、今

日では其熱氣が既に蒸氣力になつた事を認めなければなるまい。此主義の味方たる吾々は、此蒸氣力の利用すべきを忘れてはならない。之を閉塞すれば危險を生じ、之を開放すれば蒸氣となつて發散するからである。

この重要事件から生じた新しい用意、また政見發表の此共同形式が、西半球の外部から來る危險に對し吾々の平和を保障する爲に、如何に利用さるべきかの點に就いては、次の數章に於て之を論じよう。大洋の彼岸から來る危險に對して、かういふ共同一致の行動が果して出來るか出來ないかさへも、A・B・C仲裁の成功以前には殆ど問題にならなかつたのである。しかし今では既に吾々の間で共同の仲裁方法が出來上つた以上、ここにはじめて海外から生ずる他の問題に對しても共同一致の力を盡し、之に對する自衞の爲に協力する事が出來るに至つたのである。この新しい方面で羅甸亞米利加の吾が同胞は、千九百十四年十二月吾々とに對して爲したかの共同勸告によつて、全米人は一致して歐洲交戰國に向つて飽くまでも西半球近海の中立を維持して行かうといふ道を開いたのである。A・B・C仲裁の成功以前は、殆ど考も及ばなかつた事である。相互の信頼もなく、羅甸人種もアングロ・サクソン人種もお互に他の見地を理解する事が出來なかつたからである。しかし此方面で更に一歩を進めて行るべき事があるではないか、——すべての全米諸國の共同の安寧の爲に別に最も有力なる策があるではないか。そして今こそ實に之を實行すべき絶好の機會ではないか。

平和三角同盟の底邊は既に立派に出來上つた。そこで更にこれを基礎にして東方の一邊を建て、歐洲との紛議誤解に對する保障たらしめようとする點に就いては、以下之を述べようと思ふ。

第十一章　平和の爲めにする全米三角同盟（二）

其東方の一邊、歐洲との葛藤を防ぐべきモンロオ主義の完成

個人の生涯に於ける如く一國民の生涯のうちにも、非常に有用な機會の到來する事がある。そしてそれを利用する事が緊急の義務だと目されるまでに明らかに有用な好機である場合がある。私の信ずる所によれば米國は今や實に此種の好機に際會してゐるので、それは即ち歐洲が我國から巨額の負債を求めてゐる事だ。大統領モンロオが其有名なる警告を歐洲に向つて發して以來、今日に到るまで到底出來さうもなかつたし、將來も亦再び出來さうにもない程の貢献を、今や吾々には全米主義の爲に致す事を得るので、之は實に史上未曾有とも言ふべき國際間の現狀の然らしむる所だと私は信じてゐる、そこで今未來を論ずる前に先づ過去を回顧して見よう。即ち全米主義の現在に於ける狀態と、ここまで進んで來た徑路とに就いて一考して見よう。最も北に位する共和國たるわが米國にとつて、全

米主義は常にモンロオ主義と相卽不離の關係を有してゐたが、このモンロオ主義は單に重要なる國際的の一事實たるに止まらずして、實に一大根本方針の上に基礎を置いてゐるものである。若しさうでなければ、到底わが國人の人氣を得て、それが遂に米國外交政策の一目標とまでなる事は出來なかつたのである。自國の利益の爲に盡しながら、同時にまたかくまでも理想的に愛他的である政策は、如何なる國民の歴史にも其例を見ないのである。モンロオ主義は西半球にあるわが同胞共和國のいづれからも領土を我に獲得させようとするものではない。唯かかる領土が歐洲强國の手に歸するには反對し、由て以て吾等をして歐洲政爭の渦中に陷るの憂なからしめんとするものである。

　モンロオの教書は、かの華盛頓との言して屢引用せられる、外國同盟の中に捲き込まれるなと言つた說から當然出る論理的系論(コロラリ)に過ぎない、こは吾々の忘る可からざる點である。なぜ系論(コロラリ)になるかといふと、たとひ吾々はさうい云ふ同盟に直接加はらないにしても、歐洲殖民地が西半球に出來れば、勢ひ間接に其渦中に卷き込まれないとは限らぬからである。モンロオが避けようとしたのは卽ち此危險であつたのだ。『吾々は海を越えて諸君の事に手出しはしない。諸君も亦海を越えて西半球の事に手を出してはならない』と、から吾々は言ふのだ。然らばこの防衛隔離の政策は如何(どう)して出來上りまた發達したか。モンロオ主義が海のかなたで一般に承認せられて後、當然これに次いで起るべき問題は、モンロオ主義が大陸全體のものである可き事に、わが同胞たる亞米利加共和國の意見が皆一

致しなければならぬといふ事であつた。即ち此大陸政策の責任には諸國皆之に與り、從つてモンロオ主義はもはや片務的たる可きものではなく、また共運用（防衛或ひは其他にも）に於ても、單に之を合衆國にのみ委ぬべきではないと云ふ點であつた。勿論他の諸國が贊同しようがしまいが、もと〳〵わが米國から出て、また我國には最も大切なる此モンロオ主義は、米國が之を維持し主張して行かなければならぬ。然るに諸國は旣に先んじて此處置に出でかのA・B・C仲裁がうまく米墨間の戰を未前に防いだ事は實に感謝すべきである。近頃更に範圍を廣めて亞米利加七共和國が共同して墨西哥の徒黨に向つて好意の申出をしたのも、希くば之がうまく成功して內亂を鎭める事が出來、恰もかのA・B・C仲裁が國際間の衝突を未然に防いだと同じやうに成功する事を望むのである。此第二回の行動が果してうまく行くか行かないかは別問題として、たしかにそれが第一回の行動を改善したのであるのは、小國民をも大國民と同樣に重要の位置に置いた點に於て、眞の民主的平等の精神を現はしてゐるからである。兎にも角にも、歐洲の方では今や共同一致の努力が戰爭に向つてゐる此時に當つて、大西洋のこなたでは、平和の爲にかういふ共同一致の行動を取つたと云ふ事は、實に立派な著しき事實に他ならない。

しかし平和を確保するために全米主義の發展の上に、更に一步を進めて行る可き事があるではないか。そして一步を進めるには今や實に機到れる時ではなからうか。全米主義は旣に此西半球で國際平

和を保つ實際的方法を作り出したが更に一步を進めて、歐洲と西半球の平和を確保するに足る實際的な方法を案出する事は出來ないだらうか。私の信ずる所によればかういふ手段は確かに在る。そして今の時こそ實に之を實行すべき絕好の機會だと思ふ。千九百十四年十二月、わが南米の友邦は相聯合して、全米一切の海上を局外者間の武力上の衝突から全く離脫させようとする努力をした。そしてこの秀拔なる提案は實際的なる條件として現はれた。わが米人が國際問題に興味を持つやうになつたのは、ほんの近頃の事であるが、さすがは多年この方面の研究に素養を積んだる南米諸國民としては、いかにもやりさうだと思はれる程の立派なものであつた。これら南米の人たちは實に一個の華盛頓たりモンロオたるの明察を以て將來を達觀した。そして歐洲戰亂の渦中に陷らざらんが爲には、是非とも亞米利加海陸を武力上の衝突或ひは其危險から脫せしむるの必要ありと感じて、この離脫の爲遂に聯合一致の要求を發したのであつた。

試みに南米の此正當なる要求の如何なるものなりやを檢して見よう。そして華盛頓とモンロオとが力說したる、米國をして全く外國紛爭の圈外に立たしめようと云ふ方針を、徹底的に完成する爲に目下必要なる第二の手段の如何なるものなりやを此要求が果して示してゐるか否かをも一考しようと思ふのである。先づ考ふべき第一の點は、全米の海上を中立させようといふかかる要求を、わが歐洲の友邦は果して如何に感ずるか、これに對して歐洲の友邦は如何なる囘答を與へるが正當であらうか、

の問題である。おもふに正當なる回答とは次の如きものでは無からうか、卽ち、西半球には、大陸の方にも或ひは其近海の島々にも、歐洲列强は多年その領土を保有してゐたのだから、從つてまた之等領地を軍事根據地として用ゐ、其海上に軍事行動を執るの權利を有すと。若し果してかかる回答が公明正大なものであるとならば、一切の亞米利加諸國が歐洲列强の主權を離れて了ふまで、全米の平和は完全に之を確保する事は到底出來ない。此點を十分明らかにする事は、實にこれ西半球に於ける一切の共和國の義務ではないか、モンロオもここまでは步を進める事が出來なかつたのだ、――渠は唯將來の植民に異議を唱へたに過ぎなかつた。千歲一遇とも云ふべき今の時に當つて、此根本的事實の實現を奬說するには、別に大なる理由の存するものがある。

合衆國が歐羅巴から好意を求めるのに今よりも都合のよい位置に立つ事が、又再びあるだらうか疑問である。そして同じく全米の平和を求めるにしても、武力によるよりは、好意として之を得た方が遙かによい。然らば現在の位置とは如何なるものであるか。歐洲諸國への外國公債が殆ど前例なき程に今は米國で募集されてゐる際だ。そして金に困つてゐる諸國民が皆米國の方へ心を向けてゐる時で、こんな事は將來恐らくは二度とあるまいと思ふ。かういふ事情は實に吾々に向つて一種特別の機會を與へたもので、かかる機會を逸しない事は殆ど吾々の義務だと言つても可い位だ。總ての亞米利加姉妹共和國に對し、また華盛頓やモンロオの壯大なる遺志に對しても、之は合衆國の負へる義務で

ある。この二大政治家をして世に在らしめば、必ずや此好機を利用せざるを得なかつたに違ない。

かかるが故に吾々は歐洲の友邦に向つて次の如く言ふべきではないか『思ふに吾々が諸君に對して爲し或ひは將來爲さんとする一切の行動の好意的承認、——亞米利加諸國全體が皆感謝を以て迎ふべき寛宏の承認は、今諸君が西半球に於て領有せる一切の植民地を該國人それ自らの主權に委して之を解放する事である。加奈陀は若し自分さへ望めば其獨立を得る事が出來るのだが、唯だ自ら好んで英國との關係を繼續してゐるのである。ギアナ二洲、英領ホンヂユラス、及び其他の歐洲植民地とも之と同一の機會を提供せよ。わが南米の同胞は『全米』の海上に砲火を交へたるフォクランド島の海戰に異議を申立てたが、若し之等の島嶼にして、それと相近く且起原を同じうせる亞爾然丁國に還附されたならば、此諸島は決して歐洲强國が海軍根據地として利用するやうな事はなく、また海戰もどこか他の場所で戰はれた事であらう』と。

米國から歐洲に對して爲す如上の要求はモンロオ主義のみならず全米主義の根蔕ともなつてゐる眞の愛他的精神の充實したるものである。これ蓋し合衆國自らの爲には領土は勿論のこと何一つと雖も求めてゐるのではない。西半球の自由と平和の確保の爲にあらゆるものを求めるのだ。のみならず此要求を出すものは極めて潔白なる一國民である。さきに一度ならず二度までも玖馬を解放して、之を其自由の儘にまかせて置いた國民である。既にかく吾々米人が自ら行つた通りに他人にも爲せよと求め

る事は、吾々にとつて決して不當の事ではないのである。

歐洲列強にして若しかかる解放の爲に財政上の代償を求める事があるならば、わが米國の豊富なる財源を以て西半球の自由の爲に之を費す方法としては此代償を支拂ふよりも以上の良法はないのである。そして此支拂に亞米利加の他の姉妹共和國が參加する事は、これ亦大に歡迎せらるべきは言を俟たない。亞米利加全土を自由ならしめる爲には、今や實に機熟せる秋である。そして最もよく之を知れるものこそ卽ち歐洲の諸政府に他ならないのだ。それは何故かと言ふに、歐洲諸國の公債の多くを今やわが米國の取引所で引受ける事を米國は需められてゐるが、こは實に各外國政府の保持する特權であつて、之を讓る爲には外國政府は常も代償を要求するのである。若し此言を疑ふ人あらば、かの亞爾然丁の公債が數年前何故に巴里の株式取引所で其相場を失つたか、また如何にして其相場を恢復したかを調べ、或ひは外國で之に類似した多くの話のあつたのを調査して見れば明らかであらう。

すべて之等の外國公債に對して米國取引所を開放する事は、これ卽ち歐洲に對しわが米國の懷を開放するわけであるが、之に對する代償として、今日各國が亞米利加各地に保有してゐる一切の領地を自由解放する事をわが歐洲の友邦に向つて求め、華盛頓とモンロオが提言した遺志を貫徹し、外國同盟に捲込まれる事を全然免れるやうに十分な取計をする事は、實に吾々の義務である。わが同胞たる亞米利加の諸共和國に對し、また吾々の子孫に對しても、彼等が其繼承したる自由を平和のうちに

享樂し得るやうに、之を完成して置く事は實に吾々の義務だ。千八百二十三年にはモンロオは唯將來の歐洲植民に對して抗議したに止まつた。しかし今日では、全米一切の國土を現在の歐洲植民地から解放する事を求め、之が代償を拂ふの位置に吾々は今在るのである。

亞米利加諸國の自由は吾々今代の者の生時には、それが十分に事實となつて現はれるには到らないかも知らぬ。しかし確かに之は早晩實現せられるのである。恐らくは吾々の期待してゐるよりも早く出來るだらう。何となれば、全米一切の誤解紛議には全米諸國聯合の行動を希求するといふ希望は、ひろく南米諸新聞の賛同を得たものであるが、私が此希望を千九百十三年一月九日に公にした時には、之が早くも今日既に立派な事實となつて遂行完成せられ、西半球に國際平和を確立する公認の法が出來ようとは殆ど誰も考へなかつたからだ。從つてまた全米主義成功の花も早咲きになつて、西半球が海外の制御や干渉を免れるの日が早く來るかも知れないといふ希望を吾々は抱く事を得るのである。

上述の說は千九百十五年十月二十日バッファロ大學で講演せられたものであつた。そして此全米主義の思想發表のためには、合衆國中バッファロ市よりも以上に適した場所は他に無いのである。何となれば先づ全米博覧會を開催して、一切の亞米利加諸國の共同一致を堂々と全世界に向つて示すといふ先見の明を有つたのは、實はバッファロ市民の達觀であつたからだ。且また墨西哥の難局に際し亞爾

然て、ブラジル、智利の外交官たる仲裁者が、ナイアガラ市の會議を開いたのも、此バッファロ市の門戶の地であつたからだ。此仲裁こそ實に吾々が確固たる永遠の平和に進む爲に大切な一里塚であつた。

此講演が日刊新聞に發表された時、忽ち世上の注意を惹いて、一百以上の新聞社說が出た事は非常な價値がある。それは贊成側の新聞の所說（固より之は滿足すべきものではあつたが）の爲ではなく、却つて之等以外の他の諸新聞が論じた攻擊論が、凡べての反對論者の說を明らかにし、吾々にして速かに是非の論點を決するを得しめたからである。

今これらの攻擊論を精査するに先だつて一言したいのは、加奈陀の境遇と、西半球に於ける他の外國領地の境遇との間に私が區別を立てた點に就いて、世間には隨分誤解があつたらしいと思ふ事である。此兩者の別は極めて著しい差異で、私の所說は何等の說明を加へる必要が無い筈なのだ。しかし世間の或種の論者の說を見ると、此差異に就いてここに一言して置く必要があるらしい。加奈陀は英帝國の一部たる自治國で、其母國語を用ゐてゐる。然るに他の一切の在米歐洲植民地に至つては單に列國の所領たるに過ぎず、其住民の大多數は植民地所有國の國語以外の言葉を話してゐるのだ。また加奈陀は何時でも自分の望み次第で獨立を要求し獲得するに足るだけの鞏固な自恃の地位にあることと久しきにわたつてゐるが、新世界に於ける他の歐洲植民地はまだ一つとしてかかる機會を得べき地位

に達しもせず、またよし渠等が求めたところで之を得られるものは一つも無いのである。

さて凡べての反對説は結局下の六種の説に歸著した。卽ち（一）歐洲の一時的危難を見て、其機に乘ずるのは不當だ。（二）歐洲列强は如何なる事情のもとにも植民地を賣却する事は諾しない。（三）米國は之が購入に要する巨萬の財を支拂ふだけの資力が無い。（四）各殖民地は自由解放を得てからよりも、現狀の儘の方が繁榮する。（五）羅甸亞米利加の建てた共和國は既にサン・ドミンゴとハイティとで其失敗を示した。從つて諸植民地も自由を得るならば、恐らくは同樣の轍を踏むことであらう。最後に、（六）將來植民地を造るものに反對する事によつて、既にモンロオ主義は十分やつたのだ。何となれば現存の植民地を歐洲が領有してゐたとて、別に吾々には何等の危險を生じないのである。以上六種の反對論は國中所々で、烱眼なる社說記者が論じたものであつた。これらは皆毫も此新思想に對して道樂半分の政治論をしようとする者ではなく、唯正當に此問題を世上に示して公平の論議を試みたものであつた。こはまさにさもあるべき事で、如何なる新提出の國民政策と雖も、かくも明晰公平に發表せられ、以上六種の反對說に解答の與へられた時、かくまで一切の誤解の一掃せられるものはなからうと思ふ。

今順次之等の反對說に就いて考察するに當つて、先づ最初に擧ぐべきは西半球に於ける歐洲の植民地所有國に向つて、今の際に當つて之を賣れよと求めるのは不當の嫌ありとするの論である。——卽

ち歐洲列强が今次の戰亂の如き恐るべき災厄と出費とに苦しめる際に當つて、吾々は果してかかる提議を發すべき筈のものであるか、といふ論だ。しかし何が故に此提議を發す可からざる理由があるか。試に思へ、列强が正貨を要する事今日の如く急なるは史上殆ど例を見ざる所で、歐洲國民は今や戰爭と動員との爲に嘗て前例なき種の重稅を課せられてゐる。此際に當つて巨額の正貨支拂を列强に提供する事が、如何して不人情な行爲だと解釋されようか、此植民地購入の提案を出すに當つて私の心中には歐洲の關係諸國何れに對しても敵意といふやうなものは寸毫だも無いのである。私の提案を目して歐洲に對する敵意あるもののやうに考へた人の見解は尠からず私を驚かしたものであるが、現に重稅に苦しめられてゐる歐洲の納稅者は私よりも尙ほ一層呆れ返る事だらうと思ふ。卽ち列强が今必要に迫られてゐる正貨をかくも親切に提供する事が、最も喜ぶべき救濟であると思はれないと は、眞に渠等の意外とする所であらう。渠等が今日領有せる植民地は到底收支相償はずして、之が維持に金がかゝる爲に課稅の源となつてゐるのである。だから今之を賣拂へば最も好時機に金が得られるばかりでなく、また現在の所有主たる各國は植民地の缺損を埋め合はす爲の年々の流用金をも免れる事になるのだ。だから植民地買受の此米國からの申出でが、吾々をして之を爲すに至らしめたる友誼の精神以外の心を以て受けられるといふ危險は斷じて無いわけである。

次に第二の反對說は、この提案は架空の說だと云ふので、其理由は歐洲の四大國政府(丁抹、和蘭、

佛蘭西及び英吉利）はいづれも、如何なる事情ありとも該領土を手放さうとは思はないからだといふのだ。しかし此論難に對する返答は直に得られた。それは新聞紙がバッファロの演說を報道したる後二週間にして、丁抹はカリベアン海に於ける其領地を米國に賣渡す談判を開始しようとしてゐる事實を、同じ新聞紙が報道した事である。またたとひかかる談判の報道が特に此異論に答ふるに足るものでなかつたにしても、之等歐洲政府のいづれも、米國の方から話を出さない以上は、植民地を賣渡す事は諾しないだらうと云ふ事が如何して云はれるか。これ等四つの國民の歷史のうちに、如何なる事情のものにも此諸國が植民地を賣拂ふなどとは思ひも寄らぬといふ事を示す證據が果してどこにあらう。世界最大の植民地所有者たる英吉利はヘリゴランドを獨逸に交附したではないか。また近頃もサイプラス島を希臘に提供し其一考をに求めたではないか。しかし如何にも論據薄弱と見える右の反對論は、次に私が檢察しようとする諸說の或ものほどには重要視せられなかつたのである。

第三の反對論は甚だ儉約い論で、これら一切植民領地を米國化するに巨萬の費用を吾々は到底拂ひ得ないと云ふのである。先づ第一、此費用を尤らしい數字に見積つて見る必要はないので、植民地は到底引合はないものであるし、また其所有者に何等感情上の價値を示すわけのものでもない。いづれさう云ふ國外の領地に住まふ本國人と云へば數は甚だ少いからである。そこで恐らくはかういふ論が出るのだらう、卽ち之等の植民地は其所有者にとつて海軍根據地として非常な軍略上の價

値あるが故に、これらの政府は之を提供するに當つて高い價を吹き掛けるだらうといふのだ。しかし此論を駁する爲には『どの國に對して備へる海軍根據地ぞ』といふ一問を發すれば足るのである。何となれば之等の根據地は其現在の所有者が合衆國に對して敵意を挿む場合にはじめて軍略上の價値を有するのであるからだ。ところが幸にして之は實に滑稽な想像説に過ぎないので、何國の政府もこんな理由の爲に高い價を吹き掛ける事は全く不可能であるからだ。

之と聯關して更に想像をして見る、假に今度の歐洲戰亂に英國が海上權を掌握しなかつたとする、そこで英領ギヤナ或ひは英領西印度島の一部、或ひは巴奈馬運河に近いホンデュラスに向つて獨逸が英國に陸上攻撃を加へたとする。若しさうなつたならばモンロオ主義の下にある米國にとつて、之はかのフォクランド島沖の海戰などよりも如何に多く焦眉の問題であつたかは一見して明らかではないか。わが米國も或ひはために戰亂の渦中に捲き込まれはしなかつたらうか。既にかういふ事が分つて米國は既に其機會を與へられてゐる以上、かかる萬一の場合を除去して置くべきでなからうか。

そこで先づ價格は相當の額であると想像して見ると、合衆國は之によつて自國永久の平和と隣國の平和とを確保する爲に、其總價格を支拂ひ或ひは總額の幾倍をでも支拂ふに堪へないとは、如何して言へようぞ。如何にもかういふ事をするのは愛他主義の行動ではあるが、之こそわが米國人が國民として常に最も興味を抱いてゐる種類の愛他主義に他ならないのである。かの玖馬を解放する爲に米國

は喜んで幾百萬金を投じはしなかつたか。米國は支那が拂つた拳匪の亂の償金二千萬弗を擧げて、之を返して了つたではないか。序ながら言ふが、あの拳匪の償金に與つた諸國民のうちで、其の一部をでも支那に返して了つたのは米國唯一國だけである。また世界の多方面の窮民に對して、わが米國は赤十字社の手を通して巨萬の財を送つたではないか。米國が白耳義、波蘭の窮民に送つた巨萬の財に、誰か異議を唱へた者があつたか。米國は其負擔に堪へないとか、或ひは苦しめる人類を助くる資力がないと誰か感じた者があるだらうか。新世界のあらゆる國人の爲に自由と共和政の祝福を全うせんとするの費用を彼之と非難する者こそ、實に米國人の眞精神に反するものとして排すべきである。過去に於て愛他主義の爲に盡したる歷史を有する國民はかくの如き立派な獻身的行動の費用を惜んで屈するものではない。此卑しい反對說を論ずるほどまでに卑しい所まで身を屈して見ても、尙且全米國人をして歐洲との直接葛藤の危險を免れしむるに要する費用は之を支辨するに値し、且保險や國防費と差引する事の出來ると云ふ一事に至つては、容易く之を證する事が出來るのである。なほ此費用に關する反對論に就いて、更に別紙の答辯は、後段第十三章に於て、購入にあらざるも交換の策を論じて之を明らかにしよう。

また反對說のうちで、若しそれが根據のある說だとするならば、一番注目に値するのはかういふ說だ、卽ち植民は自由解放されるよりも現在の儘でゐる方が、ずつと好い狀態にあると主張する論であ

る。若し實際吾々が骨折つてうまく成功したところで、それが折角庇つてやらうといふ共同胞の利益にならない事ならば、吾々は大きな顏をして博愛人道の味方だといへた義理ではないのである。しかし實際上からいふ反對論は植民地の現狀を誤認して、それを論據としてするのではなからうか。最も信據するに足るべき參考書を一閲してだけでも、歐洲の植民制度に感服してゐる人たちには隨分案外だと思はれる事がいくらもある。英領ギアナは其境域を擴張しようとして千八百九十五年に英米間に重大な誤解を生じ、僅に大統領クリイヴランドの手際で見ごとな解決の出來た事は今なほ一般の記憶に新なるところである。此記憶は確かに隣接の地に歐洲植民地のあるのに贊成を促がすものではあるまい。また佛領ギアナは主としてその徽役植民地で有名になつてゐるので、かのドレフィユスが多年恐ろしい月日を送つたのは卽ち此地であつた。佛蘭西人は此植民地へ多數の暹羅人や支那人を送つたのは、ちやうど和蘭人が蘭領ギアナへ多數の爪哇人を持込んだのと同樣である。かく東洋人を混入する事がこれら植民地の氣風を向上せしめるとは恐らく何人も言はないだらう。また之は明らかに合衆國及び亞爾然丁の人種政策に一致しないものである。暹羅人、支那人、爪哇人をかく植入させる事は、果して之等植民地の文明を進步させようとする希望を示すものか、或ひは單に最低廉の勞働を以て之が所有者たる歐洲人の爲に植民地開拓をさせようと云ふ目的であるか、此點に就いて問を發するは事極めて當然ではないか。

千九百十一年の英領ギアナの人口調査が示す結果を見るならば、何人と雖も歐洲の支配の繼續に贊成する事は出來ない筈だ。卽ち人口總數二九六・〇四一人のうち白人は僅に一〇・〇八四人に過ぎずして、しかも支那人は二六二二人あり、黑人は一一五・四八六人、そして東印度人の人夫が一二六・五一七人である。之は皆英人が其地を拓く爲に持込んだものである。最初東印度人七人をここへ送つたのは、かの英國大宰相の父に當るジョン・グラッドストンが千八百三十八年にやつた事である。ジエムス、ロドウェイが共著『英領蘭領及び佛領ギアナ』（一九一二年）の中に、英領を以て三つの中の最上のものとし、且それに就いて下の如く云つてゐる。『國人は殆ど法律を守る者だとは云へない。……一世紀も前なら財產も出來たらうし、四十年も前なら立派な收入もあつたらう。しかし今では植民者は營々として働いて、しかも得る處の利益は僅少である。以前はさほどでもなかつた困難が今では全く收支償はない狀態になつて了つた。』更にまた佛領ギアナに就いてはかう云つてゐる『カイエンヌは今ではギアナの汚辱であり、また他の植民地へは危險となつたものである。以前はかうでもなかつた。佛領植民地は嘗て共隣地と比較するに足る程のものであつた。いつも少しは後れてはゐたが、今日ほどひどい有樣ではなかつた。以前は立派に耕地のあつた所にも、今では僅に共廢滅の遺跡を見るばかりである。』

更に問ふべきは鐵道の問題である。卽ち廣さ十七萬一千平方哩以上にわたり、人口約四十三萬人に

及べるギアナ三州、――全體に於てアラバマ、ジョオジア、及びフロリダのそれに等しく、また殆どオハイオ、インディアナ、イリノイ、及びアイオワを合したるものに等しき此大領土を改善し發展せしめんが爲に、これ等の外國の支配者が果して幾百哩の鐵道を敷設したかが問題である。英領ギアナには九十四哩の鐵道あり、佛領ギアナには皆無、蘭領ギアナには僅に百四哩。三植民地を合して總計百九十八哩に過ぎない。之をヹネヅエラの五百八十八哩、コラムビアの六百十四哩に比してなほ遜かに遜色ある有様だ。更に目を轉じて英領ホンデュラスを見、その鐵道の發達僅に二十五哩に及べるを、隣國の諸州と比較せば如何に。卽ちホンデュラスは百七十五哩を有し、コスタ・リカは六百十四哩、グァテマラは三百五十哩、ニカラグアは百九十一哩、及びサルヴァドアは百六十哩に達してゐるではないか。歐洲植民地を以て他の自治の同様なる地方と比すれば、此點に於ても亦前者は劣つてゐるのである。また外國の所有者がギアナ三州に設立したる學校制度を見ると、他の全米諸國の平均以下にあるか、或ひは此制度の皆無な處すらもある。然るに其隣國のヹネヅエラは學校の數約千七百校に及び、兩隣のコラムビアに至つては、其數實に五千校以上に達し、且此兩國ともに昔からの舊い大學を有してゐるのである。

顧みてカリベアン海の植民地を見、歐洲の統治が果して之等諸島の利益を增進したかを一考して見よう。蘭領西印度島の人口著しく減じて、千八百三十五年に四三・〇〇〇人以上であつたのが千九百

十一年には三一・〇〇〇人以下に減じた。蘭領諸島で商業は少しも増加しては居ない、そして千九百十年には九二二・五八六ぎるたあの不足額は之を本國の和蘭政府からの流用金で埋合せをしなければならなかつた。また佛領諸島の商業統計を見ても、之またかの在米領地は共和自治制に任すよりも外國支配權のもとに置く方が榮えると主張する人たちを喜ばせる性質のものでは無いのである。マルティニイクの佛蘭西植民局の統計は、千八百八十二年から千九百〇七年に至る長期間を通じて、輸入年額は二八・三七六・六六〇法から一五・九四〇・〇三九法に至る減少を示し、輸出年額は三八・九九二・七四一法から一八・九九七・二二一法に減じてゐる。そして年々該島の外國貿易全額は、千八百八十二年に六七・三六六・四〇一法から、千九百〇七年に於ける三四・九三七・二六〇法に減じてゐる。グワダルウプの統計公報に至つては、マルティニイクよりも更に惡い狀態を示してゐる。同じく千八百八十二年より千九百〇七年に至る期間に、輸入は二六・六六七・二〇一法より一三・六二五・八五五法に減じ、輸出に至つては、四一・八一一・六四二法から一六・二六九・一五六法に減じ、全體の海外貿易年額は六八・四七八・八四三法から、二九・八五六・〇〇一法に減じてゐる。これら諸島いづれも年々の不足額は、之を佛蘭西が埋合せをするといふ有樣だ。即ち千九百〇八年にはマルティニイク島の不足は一四〇・〇〇〇法で、グワダルウプの方は四〇〇・〇〇〇法に及んでゐる。是等植民地を歐洲諸國が領有しての此結果と、ポルト・リコを米國が管理してからの驚くべき進歩とを比

較して見よ。以上の事實と之に似た多くの事實は容易く立證する事が出來るのだが、併しまだ是等は在米歐洲植民地の自由解放に對する反對論者を說服するに足りないかも知れない。しかし說服するには至らぬにしても、少くとも之等反對者の說の眞相を示すには足るわけである。

多數反對論者の唱へる異論はかういふのだ、サント・ドミンゴとハイティとは近ごろ自治を試みて失敗に終つたからして、之等植民地はいづれも自治を實地にやつて見る事は可(よ)くない。後になつて米國が干渉をしなければならぬ恐れがあると、かう言ふのだ。しかしさういふ議論をする人たちは下の事實を知らないのか、さもなくば忘れて了つたのである、即ち此二つの島國は一つの點、特に此點に於て、一切他の亞米利加共和國とは異なつてゐるのだ、――此二國は黑人の共和國で、教育ありまた自立の能ある米國の黑人に比して、自治の能力遙かに劣れる黑人の國である。吾等が全米主義の運動は、羅甸人種とアングロ・サクソン人種との間に增して行く相互の理解承認を基礎にしたものである。そして一切の亞米利加共和國は皆羅甸、アングロ・サクソン或ひは土着の印度人の民族性を有してゐるが、サント・ドミンゴとハイティだけは除外(とりのけ)であつて、此二國は亞弗利加の民族を具へてゐるのだ。これ即ちこの二國が一切の他の共和國と全く趣を異にしてゐる所以であり、また、これ等黑人の二州に於ける失敗を見て、亞弗利加人或ひは其子孫の國でもない他の諸國にも自治は決して成功しないと斷言するの不可なる所以である。いま此論點を終るに當つて下の問を發する事は蓋し宜しきを

得たものであらう。即ちサント・ドミンゴとハイディの困難を見て悲観し、之が歐洲の植民地であつたらば、もつとうまく行くだらうと信じてゐる人たちに、若し之等諸島が日本か獨逸の植民地であり、從つて其海軍根據地であるならば、また何とか別の感じがするだらうか、それを訊いて見たい。國民性の發展のために自治の如何に貴いものかといふ事を知らない人たちには、其價値を回想せしめる最良の法がある。即ち彼等の態度を二十世紀の文明をして十九世紀初期のそれに後戻りをさせるものだといふ事を斷言し、且此斷言を證するには、千八百二十二年十一月二十二日普魯西、墺太利、露西亞、及び佛蘭西が、ヴェロナで調印したる神聖同盟條約のはじめ二ヶ條の文句を彼等に示すに若くはない。

第一條、ここに盟約せる諸國は、代議制が王政の主義と兩立せざる事、恰も人民主權の語が帝王神權說と兩立せざるに等しきを信じ、相互に儼乎として一切の手段を用ゐて、歐洲中既に代議制の現存せる國に於ては之を絕滅し、未だ存せざる國々には代議制の輸入を防遏せん事を努む。

第二條、自ら民權の擁護者と稱する者が、王侯の權を害して用ゆるところの最も有力なる手段は、言論の自由に他ならざるが故に、ここに盟約せる諸國は、單に自國に於てのみならず歐洲の他の部分に於ても、之が自由を抑壓せんとする一切の手段を執るべき事を互に約す。

六つの反對說の最後のもの、即ちモンロオ主義は將來米國への植民に反對するには十分既にやるだ

けはやつたのである、この上まだ現存の植民地を自由解放してまで其完成を期する必要は無いといふ説は、容易く之を駁する事が出來る。若し既にモンロオの公言に鞏固な論據ありとすれば、それは卽ち米國が歐洲政治の渦中に捲き込まれる憂を除きたいと思ひ、植民地の所有者たる國々と葛藤を生ずるが故に米國は將來一切の植民に反對して之を逃れんとしたのである。このモンロオの公言は實に米國外交政策の柱石たるものであるが、しかも米國が此主義の擁護に努めてゐた多年の間で、本來モンロオが避けようとした衝突に最も近づいた折は、實にかの千八百九十五年、ヱネヅエラと英領ギアナ植民地との國境問題で英國との間に紛議のあつた時である。ところが此英領ギアナはモンロオの時代に既にあつた植民地で、彼が反對した所謂將來の植民地といふ中には這入らないものである。若し當時モンロオにして米國には將來歐洲植民の出來ないやうに保護すると共に、既存の植民地をも自由解放する事が出來たならば、ヱネヅエラの難問題の如きは起らなかつたであらう。殊にあんな國際間の窮地に陷つて能く干戈に訴へず、手早く、しかも體面を損せずに、難關を切拔けるだけの大統領は滅多に無いであらう。かういふ危機に臨んでいつもかもクリイヴランドと同じ程の人物が大統領の職にあると定まつた譯ではないのである。だからかかる萬一の場合に備へる最善の策は、先づ進んで豫め其原因となる可きものを除去して置くに限るのだ。

モンロオ主義を完成し、一切の亞米利加領土から現在將來共に歐洲主權の暗雲を一掃するならば、

華盛頓とモンロオと兩者の目的は達せられ、千八百九十五年のやうな事は又と起らないであらう。殊に都合のよい事は、既に葛藤の原因となりさうなものが一掃せられたる以上、わが歐洲の友邦との關係も更に親善の度を加へるであらう。平和三角同盟の東方の一邊はかくの如くにして成立し、大西洋の側から起り得べき一切の危險を吾等は免れる事になるのだ。

第十二章　巴奈馬運河

全米主義との關係

全米主義は平和の爲に利するもので、其平和謳歌の時に當つては、巴奈馬運河は西半球各部の連絡を容易ならしめ、之によつて此主義の利益の有力なる一要素となり、また大動脈ともなるのである。しかしまた一朝有事の日に當つて、この全米主義が、外國からの襲撃に對して其防禦力を示す必要に迫られる事も起るであらう。巴奈馬運河あるが爲に米國は敏速に其艦隊を一方の大洋から他の方へ移す事が出來、從つて著しく米國海軍力を倍する事が出來るといふ希望も生じたのである。海軍縮小論者は言ふ、これ兩大洋の各々に大海軍を要しない證據で、かの米西戰爭の時にオレゴン艦がマゼラン海峽を通つたあのやうな長途の航海は最早不必要であるからだと。また言ふ、大西洋と太平洋の兩岸

を同時に攻擊される事はないのだから、どちらか一方敵を受けた方の海岸へ全艦隊を移せば足るのであると。或紐育の日刊新聞の定り文句を借りて云ふと、之は如何にも『本當ならば有力な』說である。然らば運河が果して實際上國防の上にそれだけの重大任務を果すものとして依賴せられるか如何かを一考して見よう。

一朝外國との戰爭が始まる場合に、敵が加へる最初の攻擊、或ひは攻擊の一つは、先づ運河を目ざすであらう。水上飛行機を敵艦の甲板から卸すのに、なるべく巴奈馬地峽に近い地點を選むで、飛行家の空中旅行の距離を短かくするやうにし、運河工事を目がけて爆彈を投下する事になる。かうして落した爆彈幾百のうち唯一つでも運河の水門に命中する事となれば、此亞米利加生命の大動脈の爲に、米國が費した無慮四億弗の軍事的價値は一朝にして煙となつて了ふのである。倫敦が獨逸空中飛行船の襲擊を防禦するのに困難した事が分つて見れば、從つて此運河地帶も戰時にはそれ以上の安全を期待するわけには行かないのである。運河を利用して一方の大洋から他の方へ艦艇を移す事によつて米國海軍力を增すと云ふあてをするよりは、運河附近への敵の襲來を防ぎ、運河をして十分の作用をさせるために一層多くの軍艦を要するわけである。

この水道のはたらきを危ふくするものは、單に空中からの襲擊ばかりではない。尙更にもつと恐ろしいものがある。米國の軍器製造所が平時でさへ放火され爆破される事のないやう豫防が出來ないと

すれば、一朝事あるの日に、運河地帯にかかる憂なからしある事がどうして期待出來ようか。

全米主義は十分に防禦するに足るものである。從つて之を防禦するにも、大西洋と太平洋との西方に強大なる海軍を要するのである。一個の艦隊をして兩方の役目をさせると云ふ事は、運河があつた處であてにはならないからである。

一體全米主義は、かのヘイ・パンスフォオト條約が吾々の手を縛つて了つてさへゐなければ、運河から實に有力なる援助を享け得たであらうが、今はそれを全く奪はれてゐる。我米國にして若し自由に運河の取扱をする事を許されるならば、先づ凡ての姉妹共和國に通航料の優先權を與へる事が出來る。此事たるや實に全米主義の政治的結合の爲には、今まで說かれもし行はれもした如何なる事柄よりも有効なものである。然らば米國をして此友誼的な方法を採らしめないやうにするものは果して何であるか。

海洋間の運河開鑿には千八百五十年のクレイトン・ブルワア條約があつて邪魔をしてゐる、英國でさへ此點に氣附いて其改訂に同意した位である。かのジョン・ダブリウ・フォスタ將軍は老練な名高い外交家であり、また嘗て國務卿であり、今の米國國務卿の岳父に當る人であるが、此人が書いた文中に、「此條約は米國外交史中の最大失策である。また千八百二十三年モンロオ主義の宣言あつて以來、此主義を暗默の中に否認し或ひは顧みなかつた唯一の實例である。即ち亞米利加の一大事業の保

護と管理とに、英國が等しく之に參與する事を認めてゐるからである』とある。

ジョン・ヘイ氏は其國務卿時代に何とかして此不都合な點を匡正しようと全力を盡した。氏は實に米國が曾て有したる最大外交家の一人であり、また米國四大國務卿の一人であつたが、此人の手腕を以てしてもクレイトン・ブルワア條約全部を廢止する事は出來なかつた。氏の盡力の結果は第一次のヘイ・パンスフォオト條約となつて現はれたが、之は合衆國上院の協贊を得る事が出來なかつた。上院が條約を承認し或ひは拒絶するの權能を有する事は米國憲法の規定であるが、右の條約に協贊を與へなかつた事は、上院としては確かに此規定の正當なるを示したものであつた。ヘイ氏はそこで再び骨を折り、其結果として第二のヘイ・パンスフォオト條約が出來たのである。之は其當時に於て望まれ得る限りの最上のものとして上院の贊同を得たので、大統領は遂に之を公布する事となつた。今日までわが米國はこの條項に背かないやうに用心して來た、將來もまた、遂に英國が自分の方からの發議か或ひは代償のために、此條項の改刪或ひは全廢に同意するまでは、米國は忠實に之に背かないやうにして行くのである。

ヘイ・パンスフォオト條約は、米國の國威の上からいへばクレイトン・ブルワア條約ほどに屈辱的なものではないが、フォスタ將軍の痛說したる不都合な點は確かにある。我國の運河の管理に今もなほ外部からの拘束を受けてゐるからである。考へて見ると此二つの條約共に是英國外交が米國外交に

偃つてゐた記念物に他ならないので、また同時に國民をとしては國辱でもあり、また西半球の領土保全に對する侮辱でもある。約百年以上もわが米國はモンロオ主義を主張し、獨力で誰の援助も借らずに運河を開鑿すると、その運用に就いては英國のお指圖を受ける！　米國の對外關係の歴史は、わが米國の代表者が概してひどく詰らない取引者であることを示してゐるが、わけても此クレイトン・ブルワア條約ぐらゐ（後にヘイ・パンスフォオト條約で修正を加へられてからも）馬鹿な目を見たことは他に無いのである。

ヘイ・パンスフォオト條約の示す所によれば、共目的とする所は下の通りである、即ち『合衆國の保護のもとにかかる運河を開鑿する事に對しては、世に云ふクレイトン・ブルワア條約、即ち千八百五十年四月十九日の協約から生ずる故障がある。だから該協約の第八條に規定してある中立の一般方針に抵觸せずして、此故障を除去する』のが共目的である。英國はクレイトン・ブルワア條約で自分が少し行り過ぎたのに氣附いたのである、即ち運河開鑿を制限して了つた爲に、世界第一の海運國たる英國にとつては極めて重要な水路が造られない事になる。そこで該條約に修正を加へて、運河を開鑿させるやうにし、而もまた依然として共管理に與かるの權は棄てないやうにする必要を感じたのである。

試に思へ、佛蘭西人が既に空しく巨萬の財を費したる大規模の計畫に對して、英國は果して金錢上

或ひは技術上にどれだけの貢獻をする事を諾したのであるか。約定には『運河は合衆國政府の保護のもとに開鑿せらるる事を得、其費用は直接に政府が負擔すとも、或ひは個人や團體に金錢を下附貸與し、又は公債株式などを購入し或ひは募集するも不可なし。また本條約の規定により、合衆國政府は運河開鑿に附帶する一切の權利を享有し、また運河の整理取扱を辨ずるの特權をも享有するものなり』とある。之は一見甚だ結構である、しかし成行の上から見ると、合衆國自身、或ひは全米隣國の船舶に優先權のある率を與へる事が出來ないのである。運河は開鑿の爲に英國がどれ丈の貢獻をしたかと云ふと、米國が思ふ儘に自分の金錢を使つても可いといふ許可を與へて吳れたと云ふに止まるのである。これほどに重大な問題でなければ、實に一場の滑稽とも云ふべきものだ。

英國は今日蘇士運河を管理してゐる、之が開鑿には佛蘭西の金錢(かね)も尠からず出てゐるが、而も英國は兎に角大金を之が爲に費消してゐる。しかしながら巴奈馬運河となると、英國は一弗の資本もこれに入れずに、米國をして之を開鑿せしむる法を執つた。既に蘇士運河の場合にも佛蘭西の外交家は英國の外交家に出し拔かれたのであるが、それでまだ米國が巴奈馬運河を此手でやられた程には酷くなかつたのである。

英國は一切の外國商船に代つて、運河通航料を總て同額にする事を主張するのだといふ辯解は面白いが、しかし一向感服しない。何故かといふと、英國は他の如何なる國民よりも廉價に船を建造し航

海させる事が出來もし、また實際してゐるからである。つまり之は各國同一の料金を拂ひながら、英國が一番廉價に運河を通航する事が出來ると云ふ事を意味するのである。米國にして自國及び隣國の船舶を保護する力なき限り、英國はいつまでも晏如として其最上權を失はないわけである。米國が英國に對抗し得べき唯一の道は、自國の造船業者、航海業者に拂ふ賃銀を英國と同じ處まで引下げるほか仕方はないのである。即ち米國の職工や水夫の生活程度を引下げて、心から米國勞働の眞利益を思つてゐる凡ての人たちの厭だと思ふ程度にして了はなければならぬ。

米國がかういふ網にひつかかつた以上、如何なる方法で之を脫する事が出來ようか。米國が約五億弗の大金を使つて之を仕上げ、他國民は一錢も之に使はずして出來上つた運河、――佛蘭西が開鑿を試みてうまく行かなかつたのを、米國が成功して我國人の能力の偉大を示した此運河を、思ふ儘に使用するには、米國は如何したらば行動の自由が得られるか。之が唯一の方法は、英國自身の發議か或ひは代償の報酬として、條約を改訂するか或ひは全廢するかにある。然らばどうしてかういふ處置が出來るであらうか。

他日いつか海のかなたのわが友邦の利益になる何かの事柄に就いて、英國政府からわが米國國務省に申込のある時に、米國當局者は下の點を指摘する事が出來る。即ち巴奈馬運河は米國が全く外國の援助を借らずに開鑿したものであるが故に、またモンロオ主義の主張もする事ゆゑ、ヘイ・パンスフ

オト條約及びそれに代つて出來たクレイトン・ブルワア條約を、兩方とも廢止して了ふ事を米國は滿足に思ふ、そして英國が此好意的行動に出でてはじめて、米國は之を先決條件として、何か他の點に於て英國の希望をかなへるやうな心組みをしようと此點を指摘すべきだ。

この仕事を見ごと爲し遂げる國務卿こそは、實に名を竹帛に垂るる人である。米國の爲に運河行政に於ける行動の自由を得しめ、之によつて全米聯合の爲には嘗て取られたる如何なる手段よりも偉大なる一歩を進める人である。かかる國民的『信念の擁護者』の出現の一日も早からん事こそ、實に望ましい次第である。

モンロオ主義を完成するには、新世界の一切の領土を歐洲の植民地的支配から脫せしめるばかりではない。また歐洲政爭と全く離れたる防衞的態度を執るといふ同じ理由で、わが大運河にも外交支配權の一切の跡を絕つやうにしなければならぬ。

運河地帶に於ける米國の行動の邪魔になる條約を、改訂し或ひは廢止するにはなほ別に一策がある。それは次の章に於て指摘する事にしようと思ふ。

第十三章　平和の爲にする全米三角同盟（三）

西方、太平洋のかなたに於けるモンロオ主義の實行

全米三角同盟の底邊と東方の一邊とは既に以上述べた通りだ。そこで今度は西方の側を論じて、太平洋に於ける恒久の平和策を講じ、此三角形を完全なものにしなければならぬ、ところが若し私の考誤りでない以上、この三角形の西方の一邊こそは三つの中で最も造り易いものである。卽ち極東問題に關する吾等米人の見解を匡正しようといふ心掛一つで出來る事だからだ。その心掛けさへ出來れば早速事態はおのづから暗雲一掃といふ事になるのだ。太平洋の東岸に於て米人が他の强國に向つてかくせよと望んでゐる通りの事を、米人自らは太平洋の西岸でしようと望むのか、望まないのか。モンロオ主義が『自國を出づるな。他に干涉する勿れ』と云ふ以上は、此主義は吾々の理性にも訴へれば愛國心にも訴へるものだ。約一世紀間といふもの、米國は西半球に關して此說を全世界に向つて說いたのである。そこで吾々米人は米大陸の方で說いてゐる此說を、東亞の方にも實行しようとするのだといふ此點を、わが姉妹國民たる日本が十分に納得して吳れるまでは、太平洋に於ける平和は確保し難い事が分つてくる。

大西洋にせよ太平洋にせよ、西半球のいづれか一國の上に外方から及ぼして來る危險は、必ずや凡ての他の諸共和國にも累を及ぼすに相違ない。ところが今日合衆國の內外に、眞面目に物を考へる人で、日米戰爭の危險を信ずる人は決して尠くない。何故に吾々はかういふ事を信ずるのであらうか。之に對する如何なる豫防策がこの全米主義の研究から展開せられ得るだらうか。

衝突は商業上の原因から起るだらう。所謂『商業戰爭』のやうな事になるかも知れないといふ說を樹てるのは、吾々が自ら欺くものである。米人が頻りに『門戶開放』をやかましく言ひ立てて、それが何か吾々の特權ででもあるやうに言つて、支那問題には保證されてゐない一種の地位を持つてゐるやうに信じたり、或ひは日本の支那に對する對度を彼之と言ひ立てたり、殊にまた最も重大なのは、米國が日本の西方發展を阻止しようと望んでゐると、こんな事を信ずれば、日本は米國に對してどんな強い國民的反感をでも起すであらう。何だか米國が極東問題に對して世話燒き顏をしてゐるといふ事に就いて日本側の思ひ違ひを如何したらば一掃する事が出來ようか。また全米主義が飽くまで他國民の見地を重んじて、太平洋に於ける恒久の平和の爲に極めて有望な其目的を達するには如何すれば可いか。

米國の極東政策に種痘をして、モンロオ主義の所謂『他に干涉する勿れ』の痘苗を植ゑ附けるのが何よりも肝要だ。よその人に『良藥』たる物は吾々にも亦利く可き筈だ。

米人はモンロオ主義を主張するが故に、從つて條約中かの所謂『最惠國條款』のもとに各强國に保證されてゐる權利のほかは、何等の權利をも要求するもので無いといふ此一事を歐洲並に極東諸國に對して明らかにしさへすれば、之によつて吾々は之等の諸國民に對し、モンロオ主義に於ける米國の地位を一層鞏固にし、また從つて有力ならしむるに至るのである。

ここに蔽ふべからざる事實は、多くの米人が其所謂日本の支那に對する侵略なるものを見て、當然自ら支那の保護者であり、またある可き筈だと思つてゐる事だ。また之に關聯した事實として、かういふ國際間の暗鬼を拂ひ除けて了ふまでは、太平洋上永久の平和を生むべき日本の十分な信用を米國が得る事は到底出來ないであらう。太平洋のこなたに外國の如何なる國民の侵入をも許さない正當な權利を吾々米人が保留する以上は、條約で保障された米國の權利を侵害されない限り、他國民が太平洋の彼岸に發展膨脹するに對して、吾々がかれこれ言ふ權利は絕對にないわけである。

米國は當然支那の保護者であるといふこんな危險な無意味な事がどこから考へ出されたのか、一つ其源に溯つて考へて見よう。近年其主な原因と目すべきものは、『支那に於ける門戶開放』に關して、また之によつてかのジョン・ヘイの國務卿のとき、米國のために保障されたと信じられてゐる特權に關して、米國一般に行はれた謬見がその源をなしてゐる。

そこで一つ此『門戶開放』といふ迷信の本尊を點檢して見よう。たいした實際上の効果もないのに

矢鱈に感情的に騷ぎ立て、其眞意義もまた廣く一般に誤解されてゐるのだ。日本では之を以て、人は皆米國が亞細亞政策に容喙する權利を厚かましくも主張するものだと信じてゐる。之は誤解だ。しかし之よりももつとひどい誤解は、米國で新聞雜誌或ひはまた多くの個人の言說にも、何等事實に根據を置かずに唯風聞を基にして說をたて、之に對して一種の解釋を下してゐる事である。それからまた支那の方では、日本や米國よりも更にもつとひどい誤解をしてゐる者があるので、米國をまるでお伽噺にある名親のやうに思つて誰に對しても何事に對しても、保護するだけの値打の有る無しに拘らず支那を保護して呉れるものと思つてゐるらしい支那人が隨分多い。そこでかういふ樣々の誤解は一刻も早く匡正すればする程よいので、わが米國の地位を確立するにはモンロオ主義の標準によつて之を識別するのが、一番明確の法でありまた捷徑である。さて此標準に照して考へて見ると、米國が支那に於て何等か特殊の權利義務を要求するのは、明らかに他所の仕事に手出しをするものではなからうか。ちやうど日本人が若し全米主義の事柄に何か同じやうな干涉をするならば、米人から考へて見てそれは全く日本に用のない事であると思ふのと全く同じではないか。一方にあてはまる事は他の方にも同じく適用が出來る。米人は、かのプラット修正案あるにも拘らず日本の新聞雜誌が玖馬の門戶開放に彼之と言ひ立てるのを如何して喜ぶだらうか。

かの『門戶開放』の語がいま米國の內外で誤解されてゐる事は、ちやうど以前モンロオ主義が南米

で誤解されてゐたのと同じだと言つても、それは誇張の言では無からう。後者は既に之を一掃する事を得たとすれば、前者をして罷り横行せしめるのは何故であるか。先づ事實は如何であるか。條約中の『最惠國條款』のもとに各國民に賦與されてゐる支那に於ける商業上其他の權利は、勿論米國は今日まで常に要求もし、また將來も之を要求するであらう。それ以上を米國は決して要求すべきではないので、米國が公明正大に此立場を取ることは早ければ早いほど、太平洋に於ける暗雲は一掃せられる事になるのだ。米國自ら任じて支那の天來の保護者なりと思ふが如きは危險極まる不條理である。しかも今日米國人の多數が、吾々は支那に對して此義務ありと思つてゐる。そして其義務あるがために、或有利な特權を我國に與へる『門戸開放』の約束が出來てゐるのだとも信じてゐる。それならば如何な特權かといへば彼等もそれは知らないので、唯何かなしにそんな特權があるのだと思ひ込んでゐる。

そこで先づかの敏腕の國務卿ジョン・ヘイが、所謂『支那における門戸開放』といふ事情を如何して仕上げたか、其由來を考へて見よう。

此有名な交渉の眞相を解するには、先づ當時の文書を一顧して見るに限る。千八百九十九年九月六日の日附で、當時の國務卿ジョン・ヘイは、巴里、伯林、倫敦、聖彼得堡、羅馬及び東京に於ける米國の外交代表者に訓令を發して、當該各國政府に下の事を通ぜしめた。即ち合衆國は、支那の事に關

して各政府の正式の保證を得るのみならず、また他の列國よりも同樣の保證を得るに協力せられん事を望む。それは各自銘々の勢力範圍内に於て、下の條項（種々異同なる訓令のうち全體に通じて同樣な部分は之れだけである）を促進せんが爲である。

第一、各國が支那に於て有する如何なる『勢力範圍』内、または租借地内に於ても、條約港或ひは投資の利益を妨害すべからざる事。

第二、支那の現行關稅法は陸揚げ船積みの一切の商品に適用し、また何れの國の所屬たるを問はず、該『利益範圍』内にある一切の港（自由港にあらざる以上）に適用さるべき事。またかくして取立てらるべき稅金は支那政府によつて徵收せらるべき事。

第三、各國は該『範圍』内に於ける各港に出入する他國の船舶に對して、自國の船舶に課せらる可きより以上の港灣稅を課せざる事。

また該「範圍」内を運送せらるべき他國臣民所有の商品に對しても、同一距離を運送する自國民所有の商品に課せらる可きより以上の鐵道運賃を、該地域内に敷設し管理し或ひは經營せる線路に於て課せざる事。

各國政府からは滿足な回答が得られたので、ジョン・ヘイは更に倫敦、巴里、伯林、聖彼得堡、羅馬駐劄の米國大使、および東京駐劄の米國公使へ宛てて、下の訓令（各々相應の文字だけを變へて）

發した。

拜啓――國政府は、支那に於ける外國貿易に關し、其條件は曩に訓令第――號に於て貴下へ宛て交附したる、合衆國の提議せる宣言に同意し、また、別紙によつて明らかなる如く、支那帝國に於て租借地或ひは所謂『利益範圍』を所有せる各國みな既に同樣の行動に出でたるが故に、貴官は更に駐剳の各國政府へ下の事を通告せられん事を望む。最初の承諾に附隨せる條件（即ち關係諸國はすべて、等しく合衆國政府の提案に同意する事）に承諾を得たるを以て合衆國政府は、――が之に與へる承認を以て、最後の決定的なるものと認むべし。

貴官は更に外務大臣に同封の別紙を交附し、且その際、今回の交渉が圓滿の終結を告げたるに對し、大統領は衷心の滿足を表するの意を通ぜらるべし。これ實に支那帝國に於ける商工業の自由なる發展に興味を有する諸國を動かせる友愛の精神を證するものにして、且全商業界に莫大の利益の源たるは、大統領の信じて疑はざる所なりとの意をも致されたし。云々

千九百年三月二十日　　　　華盛頓國務省に於て

ジョン・ヘイ

この交渉の歸結は、支那の事件を永久的に滿足に調整し得たものであるといふので、米國の新聞は非常な滿足を表して歡迎したのであつた。然しながら外國の方では、之は各國が有難くもない宣言に

巧く陥れられたのだとか、或ひは、各國はいやでも協同を拒絶りかねるやうな具合に手際よく持ち掛けられた爲に、色よい返事をしたまでのものだとかいふ事が、隨分あちこちで臆面もなく云はれたのであつた。實際うまく出來した此遣口が支那の領土保全を永久に保證するものだといふ事を米人ほどに感じた者は海外には無かつたやうである。勿論この『一紙片』(獨逸が條約を無視して白耳義を蹂躪するとき此語は用ゐられたり—譯者)が、勢益々盛なる六大强國の野心に對して、後代の政治家が出て、更に新問題新事態に面して國政を處理するとき、かの防禦もなき尨大なる領土を保護するに足るものだと、米國がいつまでも信ずるのには、各國と雖も異存はなかつたのであつた。

この門戶が實際上開放せられてゐて、米國は支那に於て、また支那に對して、特殊の權利義務を有すと、吾々が信ずるに至つたのは、實に此時以來の事である。この信仰はしばらく續いたが、いよいよ之を實地に試す時が來た。即ち此門戶をはじめて吾々が實際に用ゐようとした時如何いふ事が生じたか。上述のヘイの提議の第三條は特に支那に於ける鐵道に關するものであつたが、而もあの實際家の政治家國務卿ノックスが滿洲鐵道の國際中立を遂行しようとした時に、此開放された筈の門戶がかたく閉されてゐる事を知つたのである。今も猶特殊の利權のために此門戶が開かれてゐるやうに信じてゐる人は、それは美しい夢を見てゐる人である。さういふ人は先づ事實を見て目ざめるがいい、即ちモンロオ主義は西半球に於ける外國の干渉を禁ずるが故に、吾々はまた太平洋の側の亞細亞の事に

も干渉すべきではないのである。

『支那に於ける門戸開放』といふ此文句が、何故(なぜ)またさう強く米國人の胸に響くのであるか。その根本を尋ぬれば遠い昔に溯つて、新英蘭(ニュ・イングラント)の快走船(はやぶね)が支那貿易に巨利を占めて、極東の富源の噓のやうな、人の慾心を挑發する話を齎らし歸つた其頃に在るのではないか。あの千八百年の互惠主義の條例といふ愚な規定のお蔭で、わが商船は保護を奪はれて了ひ、米國船はかの邊の海上には殆ど姿を見せぬ事になつた。しかもその頃の金儲の記憶と、支那貿易の有望だといふ話だけは、いつまでも忘れられずにあつたのだ。然しながら事實は如何であるか。羅甸亞米利加の外國貿易は支那の外國貿易の十八倍に達してゐる。また亞爾然丁一ケ國だけの外國貿易ですら、支那と日本とのそれと殆ど同額ではないか。そして益々それを增大しつつあるのだ。羅甸亞米利加の市場こそ實に極東のそれよりも今日すでに遙かに重要であり、また人を惹くに足るものである。そして現在よりも更に將來に於て益々然らんとするの有樣である。

全米主義の根本理想は、他國民の見地に對し、友情を以て之を尊重せんと欲するに在る。かの亞爾然丁、ブラジル、智利三國相結んで米墨間の戰爭を制止し得たのは、全く此精神によるのた。この態度を以てまさに太平洋問題に臨み、日本人の見地にも相應の注意を拂ふやうにしたい。全米主義のためにしかく重要なるモンロオ主義を吾人が固定するの權ありとすれば、まさに理窟上から言つて他國

もまた自己の大陸に於て同様の權利と主義とを有し得べしと考ふるは當然である。吾人が支那に干渉するのは、日本が亞米利加の事に干渉しても可いと云ふ事を示すわけだ。日本が東方にも西方にも發展するのを、米國が阻止するもののやうに思はれてはならないのである。吾人は固よりそんな考は無い、しかしそんな國際的干渉の高壓的なやり方に見える事だけでも避けなければならぬ。そのやうな根據なき政策を強行する事は物質上すでに不可能であるのみならず、また、日本が西方に向つて何をしようが、それが『最惠國條款』のもとにある米國の利權に侵害なき以上、米國の彼之いふ可き事ではないのである。

記憶せよ、かの所謂『ロッヂ氏修正案』のわが元老院を通過するや、近頃モンロオ主義は強く日本人の注意を喚起したのである。この修正案の發布以來、モンロオ主義は更に、貿易會社が其政府を助けて西半球に地歩を得しむる事を禁ずるの一項を加へたわけだ。之を見た日本人は、米國は太平洋の東岸に於て日本に對して執れる態度と、西方に於て取れる態度とが全然別物であると思つたではないか。

世に『ロッヂ氏修正案』として知られた米國政府の宣言が、如何にして現はれたかは、其報告書を引用すれば最も明瞭である。即ち千九百十二年七月三十一日マサチュセッツ州の上院議員ヘンリ・キアボット・ロッヂが、上院の外交委員を代表して上院に報告したものである。

『千九百十二年四月三日、上院は下の議決をなせり。曰く、日本政府或ひは日本の或會社のマグダレナ灣に於ける土地買收に關し、政府の有する一切の報告は公益に害なき限り、之を上院に交附すべき事。また千九百十二年四月三十日、大統領は此決議に答へて、質問事項に關する國務卿よりの記述書を交附せり。

『千九百十三年五月十六日、上院は更に下の議決をなせり。曰く、マグダレナ灣に於ける土地利害關係ある「米國シンディケエト」に關する往復文書の寫しを請求す。

『これ等の書類幷に之に附隨せる往復文書は更に外交委員の手に移されたり。外交委員は愼重審議の結果、下の事を報告せり。曰く、委員が得たる往復文書幷に一切の報告書を見るに、如何なる外國政府も、マグダレナ灣及び其邊一帶の土地の所有權を獲得し或ひは獲得せんとしたる者なし。されば更にまた事實に徵するに、マグダレナ灣一帶の土地に權利を有し、或ひは有すと稱せる團體或ひは個人が、一つの「シンディケエト」を組織し、またマグダレナ灣及び之に接續せる土地の有する商業上の價値とは全く離れて、此灣に於ける外國民の爲に或國家的利益の存在を理由として、之等の土地賣却をなさんとしたる者ありたり。かくの如き思想こそ、マグダレナ灣一帶の土地所有者と、外國の市民、臣民、或ひは團體との間の談判の根柢を有したるものなれ。かかる事實あるは、此問題幷に他の類似の問題に關して米國上院の意見を發見すべき好個の機會を與ふるものなりと、

外交委員は思へり。玆に於てか委員は左の決議の採用を薦むるに至れり。

『亞米利加大陸に於ける如何なる港灣其他の地と雖も、軍事上の目的のために之を領有する事が、合衆國の交通或ひは安寧の爲に害あるが如き位置にある場合には、如何なる團體或ひは組合と雖も、米國以外の他國政府に向つて國家的目的のために實地制御權を與ふるが如き關係を有せる者が、かかる港灣其他の地を所有する事を、米國政府は輕々觀過する能はざる也。』

米國の態度及び意向に對する外國の誤解を匡正するよりも更に一層肝要なるは、此極東問題に關して米人自らの見を正すの必要である。米國は決して支那の當然の保護者ではない。さういふ責任を米國は如何なる理由からいつても荷はうと思つてはならない。米國の地位は、かの千九百〇八年十一月三十日、國務卿エリウ・ルウトと、日本大使高平男との間に正式に交換せられたる文面に、見ごとに現はれてゐる通りのあれだけの範圍に嚴として限られる可きものである。曰く、『(第四)兩者はあらゆる平和の手段によつて、支那の獨立保全及び支那帝國に於ける諸國民の商工業上の機會均等主義を維持し、之によつて支那に於ける各强國の共同利益を保たんとするの議を決す』とある。

支那に對する日本の或行動に對し抗議して、支那在留の米國宣教師が大統領へ『近頃送つた』ものだとして、千九百十五年四月十八日の公報中に引用せられた或聯合電報に就いては、世上隨分兎角の

議論が喧しかつた。この電報は五千語以上に亘つて、當時交渉中の支那に對する日本の要求は『結局合衆國に對する威嚇となつて現はる可き侵略行爲』なりと論じたものであつた。また此電報は、當時支那日本兩國の當事者間に進行中の會見に米國の參加を支那へ請求するやうに、大統領へ申請したのであつた。この電報に署名したる眞面目な敬虔な人たちが、日米國に紛擾を起させようと思つたり、或ひは米國が支那に代つて武力に訴へる事を望んだとは、私は信じようと欲しない一人である。何となればかくの如き意向は、全世界にわたつて此點で特に米國宣教師の名譽とせられてゐる慣習と全く相反するからである。米國宣教師が宣傳する宗教はいつも個人の宗教であつて、國民的宗教ではないといふ理由の爲に、吾々は特に之を誇りとしてゐるのであるからだ。此人たちは米國々旗のために領土を得ようとは未だ嘗てしなかつた。唯彼等の力の及ぶ個人へ神の眞理を傳へるだけであつた。獨逸人の言ふところによれば、英國々旗の爲にウガンダを得させたものは英國宣教師であつた。之に對して英人に言はせれば、獨逸の宣教師が二人支那で殺されたので、其報償として獨逸政府は膠州灣の要害幾平方哩の地を要求する事を得たので、之を取つたのは實に千八百九十七年、十一月十四日であつた。かういふ多くの論辯が當れりや否やは姑らく別問題として、とにかく此種の非難が未だ嘗て米國宣教師の上に加へられなかつた事は、吾々國民として大に安んずる所であり、また誇りとして然るべきものである。宣教師は政治上の傳道者ではない、また米國政府をして他國政府と紛議を生ぜしむる

事を欲するものではない。從つてこの北京から來た宣教師の電文なるものは、支那の保護者として米國が日本に對して干渉する爲の論議だとは決して解釋せられる可きものではない。獨逸が白耳義に侵入したからとて、米國は之に向つて何等の抗議を提出しなかつた。白耳義と支那と、どこに異ふところがあるか。

次に吾々は最も面倒な問題に逢着する、それは比律賓島の問題で、之を如何にするかである。極東の事件に對する米國民の態度が、モンロオ主義に於て確立せられた標準通りに行かないのは、單に『門戸開放』に就いての米國の誤解ばかりではない、比律賓領有といふ事も矢張りさうである。米國がこの島嶼を得たのは、戰爭の偶然の結果であつて、東洋に地歩を占めたいとか領土を得ようとか云ふ慾望の爲では決してなかつた。しかし此問題に就いて日本人の見解はどうであらうか。實際に亞細亞の海岸に近く米國が大植民地を所有しながら、こちらの西半球に外國植民地の出來るのに、米國が如何して飽くまで異議を唱へる事が出來るか、それを日本人が不思議に思ふのも無理はないではないか。日本にして若し西印度諸島の或ものを我物にしようとするならば米人は何と思ふだらう。之れ明らかにモンロオ主義に對する凌辱ではないか。日本の國旗が若し南米カリベヤン海に樹つのを見たならば米人は何と感ずるだらう。其通りに日本人はまた米國が東洋の島嶼を占有してゐるに對しても、同じく感ずるに相違ない。然らば吾々は何が故にカリベアン海では全米主義を立派に唱へて置きながら、

吾々自らは東洋で例のモンロオ主義の所謂『自國を出づるな。他に干渉する勿れ』と云ふ主義を實行しないのであるか。

今日この比律賓問題は、如何なる米人にも滿足の出來る方法では解決せられてゐない。能く此難關を變じ却つて今後有利な結果を生ずるやう、忌憚なく此問題に面する事を何故しないのであるか。ちやうど墨西哥の問題が却つて全米的仲裁の機關を生じ、現在すでに共價値は非常なものであるが、將來も益々共發展に伴うて有益なものとなり、禍は變じて幸となる、あのやうな具合に何故やらないのであるか。

米國の比律賓領有はモンロオ主義と共根蔕たる『他に干渉する勿れ』といふ精神に協はないものである。しかしかの丁抹、和蘭、佛蘭西、英國等が此西半球に植民地を有する事も、また巴奈馬運河を支配するヘイ・パンスフォオト條約の存在も、これまた此主義の精神に協はざるものである。然らばかういふ不調和な事實の一方を取つて他の方と何故帳消しにしないのであるか。即ちわが米國の南方にある一切の歐洲の領有地と、之に加ふるにヘイ・パンスフォオト條約の合意の取消によつて巴奈馬運河を自由にする事と、此二つを比律賓と交換するのである。そして其上でギアナ二州英領ホンデュラスを自由共和國となし、フォオクランド島を亞爾然丁に還附し、また巴奈馬運河の防備には非常に重要なる西印度諸島を米國國旗のもとに收むる事を何故しないのであるか。かくすればわが比律賓領

有によつて生ずる日本人の疑惑を一擧にして取去る事が出來ようし、また米國は之によつて比律賓諸島に對する責任を體面を損せずに免れ得るわけである。且歐洲植民地の增加に對するモンロオの抗議によつて開始せられた歐洲の紛爭に對しても保護を充分にする事となり、その上巴奈馬運河附近にある歐洲の陸軍根據地を去り、運河の利用に對する歐洲の管理權をも脫する事となるのである。

人は問ふだらう、然らば如何にして比律賓を之等四大强國に分割すべきやと。しかし之を決するのは吾々の事ではなくして四大强國の任である。唯此分割が下の事實によつて簡單にせられる事だけは明白だ。卽ち放棄せらるべき在米植民地のうちで英國所有の分は、他の三國所有の分よりもずつと大きい、從つて此交易の主要者たるべきものも明らかに亦英國である。此交換に最も利害關係の深い當事者たる英國とわが米國との間の親交、竝びに其干與者たる丁抹、和蘭、佛蘭西三國と英國との間の親交は兩方相結んで、此交易を容易ならしめ、且次いで行はるべき獲得者たる四國の比律賓分割をも容易ならしめるであらう。

西半球にある歐洲植民地と比律賓とを交換するといふ此提案は、私が千九百十五年十二月三十日、華盛頓で米國國際法協會、米國經濟學會、國際爭議に對する裁判解決協會及び第二回全米科學會議の第六部のために、カアネギイ平和資金によつて催されたる饗宴の席上に、之を述べたのである。その二ケ月前に、私が米國は附近の歐洲植民地を買收すべしといふ提議をした時新聞社說の殆ど半分は

之に反對であつたに拘らず、比律賓との交換の案に對しては、各新聞殆ど皆筆を揃へて之に賛成の意を表し、多くの社說中僅に二三の反對論を見ただけであつた。之は大に意味のある事だと思ふ。此殆ど擧國一致の賛成こそ、此提案が比律賓の難關を脫する立派な方法だと思はれてゐる證據だと私は考へるのである。

比律賓問題は平時に於て既に難問であるが、若しそれが一朝戰爭となつたならば如何だらう。明渡しをするか防禦をするか、いづれかで、その中間の途と云つては無いわけである。之を明渡すは實に國としての恥辱ではないか。はやく既に國の體面を汚さずまた損もせずに、之をもつと防ぎ易い他の領地と交換して置かなかつた事を、どれ程後悔するだらうか。また之を引渡さずに、どこまでも防禦する途を採ると考へて見ると、之はまた大變な難事である。必要なだけの大援軍を安全に送る保證の出來る艦隊が我國にあるか。之を運ぶだけの運送船があるか、或ひは援軍そのものをすらも米國は有つてゐるか。この三つの問を發しただけで旣うがつかりして答へる勇氣のない事はわかり切つてゐる。比律賓島の防備は米國國防組織の一部分に過ぎない。しかし鎖はその一番弱い環だけの强さしか無いもので、比律賓こそ實に此の弱點たる事を示すものであらう。吾々は進んで此問題に手を下して此遠隔の地をもつと手近かな他の領地と交換する事にしたいものである。

或人はまたかう言ふだらう、比律賓を訓練して立派に自治政體を採る事の出來るまで米國は此島を

領有しなければならぬと。然しそれは果して何時の事だらう、また何が故にさう爲しなければならぬか。この二重の疑問は甚だ解答に苦しむのである。千八百九十八年十二月十日巴里で調印した西班牙との平和條約には、米國が比律賓を手放す事は毫も示してない。唯玖馬に就いては下の通りに、條約第十六條にさういふ事の可能を示してあるまでだ、卽ち『合衆國が玖馬に關して本條約中に引受けたる如何なる義務と雖も、領有の時期に限らるべきものと解せらる。而して領有の期間の終ると共に、玖馬島に建てられたる如何なる政府に對しても、同一の義務を引受くべき事を米國は勸告す』とある。本條約はいかにも米國の比律賓領有が永久的なるの意を明らかに含んでゐる。何となれば其第九條に於て、『本條約によつて西班牙がその主權を放棄し割譲したる領土内に居住せる西班牙臣民』に對して、米國はその一切の『財産權』を保證し、また『該臣民は商工業其他の業務を行ふの權を有すべき』事にも、我國は同意してゐるからである。

米國が比律賓人を訓練し解放するといふ此大責務を何故に引受けなければならぬか。米國が此島を取つたのは確かにそんな目的の爲ではなかつたのである。比律賓島を引繼ぐ時にそんな積りはなかつたのである。唯事の初めに當つて提督デュヱイのやつたのが一つあるだけで、それは西班牙艦隊を捜索して之を擊破する爲であつた。提督の索敵行動は遠くマニラ港に及んで、そこで彼は敵艦隊を擊破するの計を遂行たのであつた。また其艦隊を援護する陸上砲臺をも征服する必要もあつた。之等の行

動が米國をして遂に之等の島に足場を獲せしめる結果となつたので、この足場は戰時の急に應じて廣がり、遂に此諸島の種々雜多の國民を悉く征服する事になつたのである。勿論米國はもと征服當時の狀態を改善するには全力を盡し、米西戰爭以來の短時日間に史上殆ど他に例なきかと思はれる程の、そして他國の如何なる植民地も及ばぬほどの著しい改良を施したのである。さて愈この遠隔の島々を米國が我物にして落ち着くが早いか、忽ち米國民間には、之は資産といふよりは寧ろ國家の臺帳に記入した債務のやうに思ふ感じが生じ始めた。比律賓は餘り遠く離れてゐる、澤山の異人種の寄合である、戰時に之を守るの困難は、平時に於ける其價値によつて到底相殺する事の出來ない程である。これ卽ち、如何にして體面をけがさず此荷厄介な物を免かれる可きかの難問解決に手を着け始めた所以である。

先づ第一に現はれたる唯一の解決法とも謂ふべきものはわが米國史上に常なる如く、例の愛他的のものであつた。卽ち「自治に堪へ得る所まで比律賓を教育して、その上で自由解放せよ。」かういふのであつた。羊をつかまへて自治の出來るまで教育して、さてそれから森林に放せよといふのである。實際家の目には甚だ面白からぬ解決法ではあるが、非實際家には之がひどく氣に入つたのであつた。しかしこれ以外に方法も見附からず、そこで米人の多數は不精無性に此もくろみを是認したわけである。ところが益々此法を進步させて行くに從つて段々結果は面白くなささうに見える。此方法あるが

爲に、それでは何時になつたら其自由が得られるかといふ論が絶えないのである。と同時にまた米人の頭上には、まるで其話のダモクリイズの劍のやうに宙ぶらりになつて、果して何時米國は安心して手を引いて彼等の自由に任せる事が出來るか、其精確な時を決めるといふ、望みもしない無用な心配が退かないのである。之はまるで學校の先生と奴隷解放者の態度とを混同したやうなもの、之が今の難關の唯一の解決法のやうに思はれたので、遠い所の植民地を得たばかりにこんな事になつたのだが、さて誰も此解決法には滿足してゐない。米人も滿足せず、比律賓人も不滿で、いま直ぐに自由を與へよと云つては絶えず騷いでゐる。聰明なる輿論はまだ其時に非ずと見てゐる。いつになつたら其時が來る、——誰が決める、——果して吾々の意見が其點に就いて一致するであらうか。

さて愈時が來たとして、米國が手を引いた後にかれら島民のうちで喧嘩が始まるならば、健全なる政府を建設するために玖馬に對して爲したやうな干渉を、米國はまたもや爲なければならぬ。それは眞平お斷りだ。玖馬は近くもあるし、古い文明を有つてゐる同種國民である。比律賓人は遠く、澤山の島々に分れてゐる種々雜多な國民で、しかも其多くは全く文明を有せず或ひは唯近頃僅に文明の上皮を得たまでだ。玖馬は我國に近いが、比律賓は日本に近い。假に此自由を得た島民のある小さい徒黨が、政權を掌握せんが爲めに日本の或政派と相結んで陰謀を逞しうする事ありと想像して見ると、之から如何やうな國際紛議が生ずるかも知れないのである。

あんなに正反對な人種と、異つた程度の交明とを有する國民を解放して、そこへ立派な永久的の施政を再び行はうといふは、果して一度の干渉で事が足るであらうか。將來續けさまに幾度もそんな干渉を繰返すといふ我國の迷惑が目の前に見えてゐるではないか。

米國が比律賓から手を引いた後に猶其獨立を保證するといふことは、現在かの島々を管理してゐるよりも、米國陸海軍にとつては更に重荷となるであらう。この諸島を領してゐるよりも、もつと多數の人を要し艦隊を要するわけである。しかもまた米國が獨立を保證してやらずに唯獨立を與へる事は、之はつまらない小細工に過ぎないので、米國が現在の責任をのがれる爲のほんの當座しのぎの政策（やりかた）であらう。

米國からいへば比律賓は實に遠いが、壕太利亞、香港、上海、及び海峽植民地の英人や、東京（トンキン）にゐる佛人、またジャヷア、スマトラ、ボルネオの和蘭人には、行政上甚だ都合がよいのである。之等諸國人にとつては比律賓諸島は實に極東に於ける新財產を增した事になるのだ。然るに之は米國にとつては、年々獨立要求の聲が高くなるに從つて益々困難になる目當ての附かない難問題である。英佛人にせよ和蘭人にせよ、南洋の方で既に立派に植民地を經營したのだから、比律賓を治めるにも同じく成功する事は信じ得られるのである。若しまた英國にして、かのカリベアン海の領地と交換に比律賓の一部を手に入れた上で、之に關して日本との或約定を取り定める事にするならば、比律賓人中で日

本臣民たらんとする者の爲には、近年朝鮮人が經驗したのと同じ利益を得る事も、之また吾人が安んじて望み得る所である。かくすれば米國の國民的良心にとつて何等やましき所もないであらう。羊に自治を教へて之を森林と放つといふ極めて非實際的な米國現在のやりかたの極致を盡すよりは、比律賓人には結局この方が得る所大なるものがあるからだ。

また人道博愛を盾にとつて、比律賓人を訓練し解放する事は米國の責務であると云ひ立てる人があるならば、私はかう答へよう、其人々の言ふ慈善は先づ之を手近な所から始めるのが最上だと。世界の他の側にある他國民の事を氣にするよりは、私も其一人だが、自分の息子の代に此新世界の平和を保證してやる方が遙かに重大な問題である。手許をもつと着々とやつて了ふまでは、遠いよその責任は避ける事にしようではないか。思ふ所あつて米國は比律賓諸島を他國の手に渡して放棄するに對して、たとひ不人情だと云ふ如何なる譏を招かうとも、此諸島を米國が領する爲に我國と他國との間に流血の慘を見る事に較べるならば、それは殆ど言ふにも足らぬ事ではないか。東洋の一部を改革する事を引受けるよりは、先づ米國人自らの事を考へるといふのは、理窟から言つても道德上から言つても至當の事である。何としても先づ速かに此危險を避ける事にしたい、特に前述の如く此島々を交換するの法を執れば、かの千八百九十五年にヱネヅエラの境界に就いて英國との間に起つたやうな危險の再發をも、米國は同時に避ける事が出來るのである。交換した雙方共に得る所あつて、二つの危險

を同時に免れて、なほ其上に日米關係もまた一層改善されるとなれば、是實に『心こめてもすべき大願成就』ではないか。

比律賓群島は戰爭に勝つて得た財産である。之を無代で放棄するのは、如何にも世間でいふ『船底に穴をあけて沈めて了ふといふ政策』だ。絶えず紛議の種になる遠國の此財産を手近にあつて西半球の平和的隔離を全うする財産と交換するのは策の得たるものであり、また國際政策としても上乘のものである。『地上の平和、人類への好意』へ向ふ長足の進歩である。

西半球に住む幾百萬の人々のために全米主義が盡し得る三大任務がある。其第一は、亞米利加諸國間の國際衝突を豫防し、第二には、歐洲との葛籐誤解の憂なからしめ、第三には、吾等をして自家に居て自分の事だけをするといふ心掛けをなさしめ、太平洋上永遠の平和を保持するにある。かのA・B・C（亞爾然丁、ブラジル、智利）三國の仲裁がうまく成功して、米墨戰爭を未然に防いだのは、即ち此三大目的の第一を遂行するに見る可き一機關を創立した爲である。第二の點に就いては前章既に述べたる如く、歐洲列强が其すべての在米植民地を放棄すれば、葛籐のもとを其根本まで取り去る事が出來るのである。是實に大統領モンロオが爾後の植民地設立に反對して此葛籐なからしめんと努めた所以だ。日米間に起り得るといふ衝突の亡靈を永久に葬り去つて此三大任務を完成し、かくて本土はもとより東方にも西方にも平和の擁護をする爲には、例の全米主義の愛他的理想を忠實に、先づ

日本人の見地を重んずるやうにしたいと思ふ。それには、米國が『支那の門戸開放』を大袈裟に誤解するよりも日本の友情の方を重しとしてゐる事を早速明言し、且また、日本に近い遠國の餘り有難くない領地を棄てて、われらが年來の宿願である平和的隔離を、全く歐洲の政治を離れ故國の西半球に完成する他の領地と交換して了ふ法を執らなければならぬ。かくして始めて全米の共和國のために全世界と共に、吾々は平和の永久的基礎に到達するのである。ここに至つて平和の三角同盟は、西半球全部を通じての調和を象徵し、また大西洋と太平洋とのかなたに起る紛議を離れた超然たる守勢をも象徵するに至るであらう。

いよ〳〵此三角同盟を作る事が最上の策とわかれば、內には平和を生じ、外には大洋のかなたから來る外憂を防ぐべき外交政策を採つて、吾々新世界の者どもは靜かにこの未開拓の富源を開發すべく進む事が出來るのである。是實に次に來るべき世界の一大進展に他ならないのである。

第十四章　羅甸亞米利加地圖の改造

本書に於て上來述べた所は、南方大陸が吾人に對し、また世界の他の國に對する關係の變化に就いてのみ論じたのではない、旣に全米主義によつて遂げられた進步改善からして、更に將來西半球のた

めに一層大なる利益を得ようといふ希望で、二三の新しい提案をも試みたのである。西半球は全米人(パン・アメリカン)の爲には郷國である、之には愉快もあればまた責任も伴ふ郷國である。合衆國はわが同胞共和國のいづれからにもせよ、領土を奪ひ取る事を永遠に爲ないといふのは、わが一定の國是である事は言ふまでもないので、其やうな變化が前途にあるわけなく、また到底あり得べからざる話である。しかしながら地圖の上で羅甸亞米利加に屬する部分に或變化が起る。其變化は侵略から生ずるのではない、現在の諸政府が聯合する事によつて、實際其力を強くする爲の變化が起る事は、果して無いであらうか。其むかふには未來といふものの潜んでゐる幕を、何故わが國は引かうとしてはならぬのか。國民的愛他主義の或行動により、わが隣人、わが友人の爲にかかる聯合を一層强大なる勢力たらしめるやうな聯合方針を先づ進んで行(や)るものは、恐らくはわが米國自身であるかも知れない。試みに思へ、金錢で購入するか或ひは交換的にフィリッピン群島を提供するかして、歐洲の勢力を南米に在る一切の植民地から除去して了ひ、またわが米國の巴奈馬運河の管理に歐洲が容喙しないやうにするならば、植民地や運河の爲にさう云ふ自由を得たる結果、單に眞の全米主義(パン・アメリカニズム)に實質上の大なる貢献をするのみならず、また確かに將來に於ける永遠の平和のためにも非常に都合よくなるわけでは無いか。之によつてまたかの面倒なフィリッピン問題も、立派な正當な解決がつくわけではなからうか。

しかし之等の植民地を歐洲の手から放す事とすると、忽ちそこには之をどう處理すれば可いかと云

ふ頗る興味ある問題が起る。――即ち之等を獨立の共和國とするか、或ひはまた近隣の或共和國に合併して了ふか。若し全く獨立のものとする方の策が勢力を得るとなると、吾々は目を蔽うて下の事實を見ずに居られるだらうか。即ちこれ等の或者は獨立するには實際餘り小さい。また今まで歐洲の支配者は、政治上からも物質上の發展からも、之等諸國をして他日如何なる形の自治制をでも取らせるやうに、少しも素養を與へてゐないではないか。若しまたすべてのかういふ自由國が、地續きの或共和國へ引渡されるとなると、こんな領土の贈物が目の前に在ると云ふ事が、忽ち問題になつて、歴史上或ひは地理上の理由から何れの國が之を取る權利を餘計に持つてゐるかに就いて面白くない議論（議論で濟めばいいが！）が起るではないか。否な然らず、以上二つの出來得べき按排の法いづれかを若し一擧にやつて了ひさへすれば、無用な面倒などは起らないのである。或安全な中庸の途があつて、之に沿うてさへ進めば、地理的境界線の變更に何の故障もなく、行つてゆけるではないか、其點を少しく考究して見よう、この變更は單に自由を獲た植民地を利するのみでなく、また同時に南米及び中央亞米利加の凡ての現在の政府にも勢力を增さしむるものである。

之は元來羅甸亞米利加の問題であるが故に、吾々は先づ最初こちらから南米人の見地に合はして行くか、或ひは少くとも出來るだけはさうする積りでなければならぬ。若しさう爲なければ、折角やつてゆく計畫も米國には都合が好いが、肝腎一番關係の深い南米人その者の同意を得る事が殆ど出來

なくなるだらう。そこで先づ南米人の見地に始終重きを置くといふ決心をした上で、自由を得た土地の大部分卽ちギアナ（英領、蘭領、佛領）三州にとつて、吾々アングロ・サクソン人が工夫し得る最良の策は、彼等をしてボリヴア將軍の取つた政治家風の畫策をどこまでも進めて行くことでは無からうか。將軍は實に南米大陸の北部をして西班牙の覊絆から脫せしめた偉人であつた。わが米國がギアナ三州を與へる事によつて、ここにヱネヅエラ、コロンビア、エクアドアとギアナとの一大聯邦を造り、かつて將軍が夢想したる『大コロンビア』或ひは新グラナダ國を再建する有力な補助をなす可きではなからうか。それ等三つの共和國の國旗は非常によく似てゐて過去に於ける歷史的關係の著しき證據たるに足り、また更に此有力な新共和國の國旗を選ぶ上にも非常な便宜を與へるであらう。その各部が別々の州としてあるよりも、一共和國として協同するに當つて更に有力なるものとなるのだ。

鐵道の聯絡が無いといふ事も、この各部を全體一つに纏める策の反對論にはならないのである。何故かといふと此聯邦は全部連續してカリベアン海に面してゐるといふ便宜があり、更に巴奈馬運河を通じて太平洋にも及んでゐる。之だけの延長ある海岸線あるが爲に、ちやうど智利國が之よりも一層長い太平洋に臨む海岸線のおかげで、帆船汽船の連絡交通の便を得てゐるのと同じ趣きを持つてゐる。また海岸を離れて背後の方には今もなほ昔の西班牙の車道（カレテラス）といふのがあつて、これで內地との連絡が出來てゐる。今でも印度人が物貨を運搬するにクイトオ邊の高地からコロンビアを經て、ずつと

ヱネヅエラの內地まで遠い道程(みちのり)を行くに、矢張り盛に此舊道を利用してゐるのは驚く可きものだ。讀者試みに新しい地圖を取つて見られよ。ヱネヅエラ國の大動脈とも云ふべきオリノコ河に注ぐ幾多の大河が、洋々として遙かに西のかたコロンビアとエクアドアとに流れ込み、かくして此地方の間に更にまた別種の廉價な交通路となつてゐる事を知られるであらう。

さて聯邦が出來た上で政府はどこに置くか、現在の各共和國の首府の間に、若し聯邦政府所在地の名譽を得る爲爭が起れば、その解決にはそれらの國々の諸政治家が書いた物を調べて見ればよい。それらの文書の中には或內國の中心地點が指摘してある。その位置はちやうど何處からも直ぐに行けるやうな、皆に都合のよささうな具合になつてゐて、內地交通線の交叉點に當るやうな處である。たとへば西部ヱネヅエラでサン・フェルナンド・デ・アタバポなどもかういふ地點になるだらう。かのフンボルトが下のやうに書いてゐるのは卽ち此町のことを言つたのだ（千八百〇八年から千八百十四年まで彼のなした旅行の報告中に）、

『サン・フェルナンド・デ・アタバポの位置は、三大河（オリノコ河、ガギアレ河、アタバポ河）の合流點に近く、恰もミズウリ河とオハオイ河とのミシシッピイ河の交叉點にあるセント・ルイズ市に酷似した位置にある。……之等大河のために商業の殷盛に赴くに伴ふて、その合流點に位する諸市は文明の中心地となるであらう。』

フンボルト氏がよくセント・ルイズ市の將來を正確に豫言し得たところを見ると、サン・フェルナンド・デ・アタバポに就いても、此大なる地理學者の言は的中するかも知れない。しかしながらかういふ首府の位置なぞの小問題は、かのボリヴァ將軍が夢想した新グラナダ國の實現といふ事に較べると實は言ふに足らぬ話である。千五百萬の人口を有し、太平洋の一角に位し、カリベアン海に雄視する堂々たる一共和國となり、今日各々分立したボリヴァ家の各州が有するよりも國際上更に有力の位置に立つべき一大國民となるわけである。なほ序に言ふが、同一國旗の下に集合した之等北部の諸國民は、米國がギアナ三州の爲に其の自由を購ひ、この集合を成立させるに當つて、愛他主義を以てしたと云ふ事を認めざるを得ないのだ、此點は注意して置く必要がある。たとひまた米國がこれに依つてコロンビアの好意を取り返す外には、何等他に得る處が無いとしても、尙且十分遣り甲斐のある話なのだ。

更にも一つの合同策は、ギアナ三州のうち最も東に位する佛領ギアナをブラジルに割當てる事である。かうすれば北の方でブラジルの東海岸線が完全になると共に、蘭領及び英領のギアナは、西のかた隣國の北岸共和國を全きものにする事になるだらう。

さてブラジル國境の事を言ふに當つて、玆にまさに一言して置くべき事がある。卽ち南米の地圖を考察するに當つては、是非ともかの敏腕なブラジルの外相リオ・ブランコ男爵の事を言はなければな

らぬ。隨分長い其在職中に、外相は絶えずブラジルと隣國との間の國境爭ひを纏めるのに盡瘁した。何となれば智利と、また事によるとエクアドア（此國とコロンビア及び祕露との國境爭ひがエクアドアの不利に落着すると、ブラジルとは國境が續かない事になる）とを除いては、あらゆる他の南米諸國とブラジルは境を接してゐるからである。男爵が骨折つて幾多の此難問題を落着させようとした事は、確かに長い間の不和の種を取拂ひ、平和を保證する爲には、實に偉大な貢献をしたのである。

私の記憶するところでは、千九百十年ブエノス・アイレス市に開催せられた第四回全米會議のとき、中央亞米利加各國から出た代表者は、之を一括して一つの代表者として考へると、本大陸のもつと大きい諸共和國から送られた代表者（その或者は確かに有力者であつたが）に比して、あらゆる點に於て毫も遜色がなかつたと云ふのが一般の評であつた。『一致結合には强味がある』そして若し中央亞米利加人が今日の如く澤山の小國に分れずに一大國を代表したならば、さういふ會合の席では以前よりも一層優勢となつた事であらう。

かういふ聯邦組織が本大陸北部諸國の政治的經濟的地位を强固ならしめる如くに、また同じやうな中央亞米利加諸共和國の聯合も大に彼等を利して、其合同をして重きを爲さしむるだらう。この事は西班牙語を用ゐる諸國の將來を思ふ人の何人も異議なき所である。諸共和國のかかる集合が強くなればなるに從つて、わが米國を恐れたり疑つたりする傾向は漸次少くなつて行く。この傾向の少くなる

事は、關係者にとつては非常に結構な事だ。なほ更に一歩を進めて言ふと、かういふ集合が強くなるほど益々、局外者をして西半球の領土を尊重せしめる爲に、彼等は一層有力な働をする事が出來るわけだ。

然らばかういふ中央亞米利加聯合を成立せしめるのに、わが米國が之を助ける最良の道は何であらうか。之には先づ外國所有の植民地を解放する策が成功するならば、その曉に、英領ホンデュラスの地を此聯合國に併合するやうに提供すると言ふ、明らかに愛他的な意見より、策として有効なものがあらうか。勿論かういふ提言は此新領土の受領者たる聯邦に加入するに就いて、他の共和國の同意を得るといふ條件で出來るわけだ。さて此問題に關聯して一言して置く可き事は、之等諸國のうちのニカラガ國は既に所謂プラット氏修正案の主意を（米國元老院では尙批准を經てゐない調印濟の條約で）諾した。此修正案は玖馬の對外關係に關して、米國に或種の權利を與へるやうになつてゐるものだ。かういふ次第だから、私は今義務として該文書の箇條を腹藏なくここに示さねばならぬ。本書の性質上之を入れなくては完全なものにならないからである。此修正案はエリウ・ルウトが國務卿在職中に起草したものである事は人の皆知る所であるが、表向きはコネティカット選出の元老院議員プラットの名になつてゐる。それは元老院に提出したのがプラットであつたからだ。玖馬の對外關係に關する部分は下の通りである。

第一條、玖馬政府は如何なる外國とも、其獨立を危ふくし或ひは危ふくせんとする傾ある條約若くは他の契約を締結すべからず。又如何なる法によりても外國に權利或ひは許可を與へて、植民により、又は軍事上の目的の爲、其他にも、該島の一部に宿營若くは管理の權を得しむべからず。

第二條、公債の利子を支拂ひ、また之が償却の爲に相當なる償還資金を得んが爲には、玖馬島の通常歳入が政府の經常費を支出したる後に不足を生ずる如き公債を、玖馬政府は引受け或ひは契約すべからず。

第三條、玖馬獨立保護の爲に干渉し、また生命財產および個人の自由を保護するに足り、さきに巴里條約によつて合衆國の上に課せられ、今は玖馬政府の擔當たるべき義務を履行するに足るべき政府を支持するが爲に、合衆國が干渉の權利を行使する事に、玖馬政府は同意す。

このプラット氏修正案に示された主意を、ニカラガ國は旣に承認したのであるから、若し此國が中央亞米利加聯邦に加入するとなると、勢ひ此修正案に關して新聯合國と協議する必要を生じて來る。また英領ホンデュラスも此修正案に保護せられて米國が提供する事になるだらうから、かういふ新しい事情のもとに、また米國が英領ホンデュラスを自由國にする點から考へて見ても、他の諸國卽ちホンデュラス、パナマ、ガテマラ、コスタ・リカ、又びサルヴァドア等は、この新しく出來た一層大きい共和國が此點で米國の協力を承諾して吳れる事を望むかも知れない。之は固より後になつて協議す

べき事柄ではあるが、とにかく此問題にぶつ附からなければならぬ事だけは、今ここに觀過する事は出來ない。

今日歐洲國民の所屬になつて居る西印度諸島は、若し之を米國が購入するとなると、同じく外國の所有主の手から米國が解放してやつた他の植民領土とはよほど趣を異にした事情になる。上にも論じたやうに、本大陸にある土地は現在の地續きの共和國に合併して、さて三重の目的を達する事が出來る。卽ち之等の共和國を強くし、自治制を施行して其改善進步をはかり、また米國の之に對する愛他主義の證據を更に加へる事になるから全米國の主張を進ませて行く、此三つの目的に適ふわけだ。處が西印度諸島を購入すると、直接地續きになる自由國と云ふものが無い、且また此島々は有力な防禦地點として是非共掌握しなければならぬ。何となれば苟も巴奈馬運河の自由行使を吾等全體の爲に防衞し得るものは、何者をも輕視しないのが、西半球全體に對する吾々の義務であるからだ。唯此理由あるが爲に、外に別に理窟は無いとしても、わが米國はその購入によつて獲得し得る限りの島々を、わが國旗の下に保持すべきである。唯二三の島々の、ヹネヅエラ海岸に面し、從つて其國の所屬となるべきものだけは別問題だ。しかしフォオクランド諸島を英國の手から放すに當つては、何等かかる地理上の理由もなければ、防禦の義務も無いのであるから、從つて之は當然亞爾然丁共和國の手に復歸すべきものである。

新しく自由を得た領土をわが米國が寄附して、それによつて捗取らせ得るだけの地圖變更は、以上述べただけで全部を盡してゐる。更に今度は全く事情を異にした、はるか南の方へと目を轉じよう。即ち此地は大陸の一端にあつて、遙か彼方温帶の緯度に位し、氣候がよい爲に種々の發展に都合よく、また移民も尠からず重要なる地方である。

然るに是等前途ある諸國民の現在の事情はいま果して如何だらうか。對外問題に關しては、個々の小國を結合して一つの完體を造る事の價値、——その世界的意義に至つては既に明らかに認められた。この世界的傾向の實現は、すでに亞爾然丁、ブラジル、智利三國が加入して造つた或政治的契約で立派に具體的になつてゐる。即ち世に普く『A・B・C同盟』として知られたものが其結果として顯はれてゐる近頃調印濟みの諸條約で、之が出來たのだ。之等の條約は締盟國民の間に一層よき理解を得るがために非常に有效なものである事は疑なき事實である。しかしそれにも拘らず、將來いつかは共邊の國々で、更にまた變化した統一、即ち共通の國語や氣候や民族性などに基づいたもつと自由な聯合が、それ等の條約あるが爲に起らないといふ事は言ひ得ないのである。

亞爾然丁、智利、ボリギア、パラガイ及びウルガイの如き同一の言語制度を有する諸國の間に、鐵道連絡や河川交通の便が益々開けて行くと、勢ひ之等の國は一つの聯邦となつて了ふやうに思はれる。かういふ聯邦が米大陸のその部分で成立するまでには、果して長い歳月がかゝるであらうか。昔

から智利と亞爾然丁とを隔離してゐたアンデス山も、今日では既に一條の鐵路で貫かれ、間もなくまた他の線路も出來る事であらう。その曉には此大山脈も、もはや政治上二國民間の障壁とならない事は、ちやうど高いシエラ・ネヴダの山系が、カリフォルニア州を合衆國の他の部分と隔離しないのと同樣であらう。今でもかう信じてゐる人は尠くない、若し智利と亞爾然丁との間に政治的合同が成立するならば、其時こそ、前者はちやうど合衆國に於けるカリフォルニア州のやうな位置にはなるが、寧ろそは聯合國中のオハイオ州に當るであらうと。之はつまり今日の亞爾然丁の政治家が、新聯邦に於ける政治的桂冠を目がけて、之を智利人に奪はれないやうにしなければならぬといふ意味に外ならない。

　またボリギアに就いて言ふと、今此國と智利とを連絡してゐる二條の鐵路と、其首都ラ・バズと亞爾然丁との間の新線路のある事は、ボリギアと共通の政治的要素を具へた聯邦にボリギアが加入すべき有力なる論據となるわけである。

　ボリギアが三條の鐵道大動脈によつて、智利、亞爾然丁の合同と連絡されると同じく、パラガイも亦、その首府アスウンシオンが既に全南米の大首都ブエノス・アイレス市と船車兩方の便で連絡されてゐる。かの商業の大動脈になるプレエト河はわが米國の如何なる河川よりも大きい。從つて、その河口にあるウルガイの首府モンテギデオから、溯つてアスウンシオンに到り、更にむかふに達する商

業上の大通路をなすものは、實に此プレェト河であつて、之がまたパラガイ、ウルガイ、及び亞爾然丁の聯合の爲地理上から見ての一大論據になるといふ事が、米人には一寸呑み込めない位である。人若し此大河兩岸のいづれかに一二ケ月も暮すならば、ブエノス・アイレスとモンテギデオ二市の間にも、また之を首府とせる二國民間にも、非常な親密な關係があり、また單に商業や人種の上の關係ばかりでなく、兩方の雜婚の珍らしくない事にも氣附くであらう。

人若しこの地方の民情を知る事深きに至るならば、西班牙語を用ゐる共和國のかくの如き何等かの聯合が結果として現はれるといふ結論に達せずに居られないのだ。亞爾然丁、智利、ボリギア、パラガイ、及びウルガイの間の同盟は極めて自然的なもので、無慮千八百萬人の一大合同國民となるのである。そしてちやうどそれが熱帶に於ける葡萄牙語を話す大共和國――卽ち人口二千一百萬を有するブラジル國と相對して、溫帶の緯度に於ける一つの釣合となるのである。

さてまた祕露が、北方の新グラナダ聯合國に合するか、或ひはまた南方の此五國民聯邦に（兩方共に祕露と同じ國語を用ゐてゐる）合するかは、事情如何によるが、鐵道交通なども、その大切な一つだらう。祕露は以前には西班牙植民地全部を管理する副王政府の所在地であつた。そして祕露人が何となう傲慢な人種であるのも尤な次第である。だから南北いづれの聯合が祕露の加入を得るにしても、それが爲に聯合國が勢力威望を加へる事は、唯人口四百五十萬を加へる事以外に、色々の點で得

る所があるだらう。

以上は單に夢想家の夢想を描いたのに過ぎないかも知れぬ、しかしそれは少くともわが南方大陸同胞の、世界に於ける政治的勢力を增進させようとするものに外ならぬのである。

歐洲大戰亂といふ一大熔爐のなかからは、既にいくらかの祝福が現はれたが今後も猶現はれる事であらう。佛蘭西の如き露西亞の如き、共に體の隅々までも立憲的に改造せられた。また過去數ヶ月間に於ける程、英國人の愛國心が燃え上つた事は今代人の記憶中には、ちよと例のない事であつた。また平和克復に先だつて、個人の權利を軍國主義の支配から脫せしめる事によつて、かの立派な獨逸人ほど得る所多きものはなからう。然らばわが米國はどうであらう。此恐るべき世界的危機からして、單に物質的利益をのみ得て滿足すべきであらうか。わが『國民の精神』と云ふ事も亦考へて見るべきでは無からうか。そして吾々の祖先から傳へられた此邦土を子孫が享樂するやうにするにはわが國運の將來を如何すれば よいか、擧つて皆此問題を吾々は一考して見る可きではなからうか。

リンコオンが奮鬪努力の時に、或友人に向つてから言つたといふ話がある。若い時分には神を自分の味方にしようと自分はいつも骨折つたが、後年になつては危機に臨んで、自分が神の味方に立つ事の何よりも大切なのを知るに至つたと。進步的な全米主義といふ此大運動に參加する人たちも亦、其

主義が他國民の見地を尊重する事によつて、リンコオンが働き盛りの時代にしようと努めた如くに、自己を修めようとするものだと感じないだらうか。そしてこの修めかたが極めて崇高なる性質のものである以上は、この大運動の成功にも、また米人間に於ける千七百七十六年の精神の復活にも、何等の疑はないではないか。

新モンロオ主義　終

序、跋

内容

磯千鳥著『趣味の文がら』序

神は美しき人をして長く地上に在らしめず、そは近く天國に招かんとて急ぎ給へりと。年わかうして世を去つた麗人を哭するとき、人は屡この言葉を繰返した。またマアロオ、キイツ、シェリイのやうな夭逝の天才を惜しむ時、誰しも思ひ浮ぶるはこの嘆の言葉である。俊穎の才を抱いて誇らず、常に謙讓溫雅の人であつた一宮君が、大學の業を卒へて後僅かに數年、キイツと同じ病を得て、しかも淨き童貞の儘にして世を去つた折にも、私はまたこの古い言葉を繰返さざるを得なかつた。

君が學生の頃から、人知れず『磯千鳥』その他世を忍ぶ假の名を用ゐ、巧みに女性の筆使ひを擬して博文館の雜誌『女學世界』に連載してゐた雜筆は、長らく若い婦人讀者の間で呼び物であつた。今もなほ『磯千鳥』の名はあの雜誌の、以前からの讀者の記憶には新なるものであらう。君自らはこれを假面をかぶつてのいたづらとでも思つたのか、親しい友にすら滅多に此事を語つてゐなかつた。昨年歿後ふと、君が遺稿の整理に際してこの十數篇の述作ある事を知つた時、私は熱心にこれが出版の事を希望した。本書收むるところの諸篇、大部分は卽ち此雜筆に屬するものである。

少壯氣銳にして而もまた學殖と才筆とを兼ね備へてゐた一宮君として、これらの諸篇は寧ろその餘

技に過ぎなかつたであらう。しかも君の天稟とも言ふべき鋭き感受性は、遺憾なく此感想録にも現はれてゐる。今の世には、青春の頃にして早くも既に物質と論理とに中毒した、粗硬にしてまた鈍感な人の多きに、それらとは全く選を異にしてゐた故人の面目は、これら文字の外に髣髴たるのみか、如何にも女が女らしく女の生活を描いたと見える纖麗巧緻の筆も亦、確かに他人の及び易からざるものである。輕い皮肉、上品なヒュウモア、柔かなすら〳〵とした筆路、どう見てもこれは中流社會の、學問ある若い才女の筆ずさみとしきや思はれない。

たとへば本書のなかの『新妻物語』『今様枕草子』などを讀んだ人は、恐らくこれを男子の筆だと氣附く人は少からう。英吉利の文人ヰリアム・シャアプは、評論の文を書く時など多くは男性の本名を署し、また如何にもケルト風の天才を想はせる幽婉の筆に成る創作を公にする時は、別にファイオナ・マクラウドと云ふ女名前を用ゐてゐた。世人はこの兩方が同一人たる男性作家の筆であるとは夢にも氣附かず、作者の死後はじめて此事を知つて驚かされたのであつた。一宮君も亦一種の『智的兩性』(インテレクチュアル・ハアマフロダイト)の人として、『磯千鳥』の名にはファイオナ・マクラウドを想はせるに足るものがある。

『エッセイ』とし言へば、こちたき談理を事とする論文の類か、さもなくば參考書と稱する厄介な物を坐右にして出來上つた一種の寫し物のやうに心得るのは大きな誤である。西洋で言へばモンテエニユ以後の英佛に榮え、日本では清少納言や兼好法師の作によつて代表せられる、眞の意味の『エッセ

イ』の風格を具へたものとして、一宮君のこの遺著の如きはたしかにわが文壇の珍とすべきである。うるさき論理を辿らずに鋭き直觀の力と敏感の性を有し、また學殖經驗ゆたかなる才人にして、はじめて此種の文字に筆を下し得るのである。一宮君の作中その佳なるものには、今の英國でエッセイイストとしてすぐれたアリス・メイネル女史の筆を想はせるものさへ尠くない。

故人の歿後既に一周年ならんとして、今この才人の遺著の一部を剞劂に附するに當り、詩歌小說戲曲のほか、かくの如き眞の『エッセイ』の體を得たる文字にも、興味をもつ讀者の我が國に多からん事は、私の切に望むところである。(大正七年八月)

西川百子著『歌集無産者 戀愛篇の跋

『歌集無産者』の前半に於て、内に自己の生活を省み、ほかに社會當面の問題に觸れて、悲壯激越の調を奏した男性的詩人は、更に筆を轉じて『戀愛篇』のうち例へば

君が家に積るとしればかくばかり
　戀しきものか春の夜の雪

白粉の厚き薄きも移り氣の
　君ゆゑにこそ思ひ亂るれ

の如き作に、女詩人ならではと思はるる感性の纖細を示した。さきに『温情主義者へ』『大學の門を潜りて』の數章に、表現と着想と共に藝術の領域を蹈み越えずやと危ぶまれた放膽なる此詩人は、またここに至つて聲を低うし調を柔らげて

相思ひ相會はぬ身に何あらむ
　この黒髪もきりて棄てまし

初春は後朝さへも笑顔して

送るといふが仇めきしかな

と歌うて、舊來の傳統的形式をも無視せざらんとする細心の用意を示してゐる。同時にまた新しき表現の道を求めんとして調いまだ成らず、整はんとして整はざる樂聲の、さながら琴の絃(いと)のためしにも譬ふべき

なにごとにも
おどおどする身、思へば涙ぐまる、
ようも今日まで生きて來りしと　（無産者篇）

の如き作をも見た。全卷を通じて觀照の態度を一にしながら、しかも詩材に於て技巧に於て情調に於て、以上の如く變化に富める事がこの詩集を手にした時のわたくしの第一印象であつた。

わたくしに此 versatility を以て單に著者の天分にのみは歸したくない。今の不安動搖の時代に在つて、生活に於ては人として、藝術に於ては詩人として、騷擾の十字街頭に立てる著者が、自己の進路を見出すべく、また安住の地を確立すべく、嚮ふ所を得んとして焦躁苦悶せるそのおもかげを見たからである。しかも遂に

いつまでも上の句のなき歌詠みて
ありなむものか春は返るに

第一歩既に誤つわれをすら
　振起たしむ新なる日よ

と歌へる詩人に懷疑はなかつた、究極の絶望はなかつた。その態度は否定でもなく破壞でもなく、雄雄しい不斷の勇猛精進である事を知つた。その一步一步は不退轉の努力であつた、建設であつた。この暗い現實主義者は、他の半面に於てまた明るい理想家であつた。

『詩』と『眞』とをゐがき、僞りなき眞實感と自己表現とを基調とした點に於て、この數百首の短歌は、實は連續したる一篇の抒情詩である。かのロゼッティの小曲集（ソネット）『生命の家』（ハウフ・オヴ・ライフ）を評すると同じ意味に於て、著者半生の內生活の自叙傳とも見らるべきだらう。かくして既に過去はゐがかれてゐる。更に大なる未來があらねばならぬ。『戀愛篇』の卷頭に

　われをして戀歌詠ましむそのうちは
　　この日の本の靜かなるかな

の一首を題したる此著者の未來の詩卷は、更にまた新しき社會運動の slogan を傳へるのであらうか、さてはまた艷女が紅恨紫怨に彩られるであらうか。深き興味を以てそれを見ようとするものは、獨り私のみではなからう。（大正八年十一月）

根岸橘三郎著『新島襄』序

冬のはじめ或日の朝、先輩の所から私の宅へ電話があつた。根岸さんと云ふ人が今から行かれるから會つて呉れと云ふ事であつた。やがて訪ねて來られた來客の老紳士を、私は書齋に請じた。その人は、米國ではよく誰でも提げてゐる黑い大きな革鞄の中から、校正刷を出して私に示された。それが卽ちこの新島先生の傳で、客はこれを書いた由來に就いて語られ、精しく共書の內容を話して校正刷の一部を私に渡して行かれた。

初對面の時間は、主客ともに忙しい身の常とて、わづか二三十分に過ぎなかつたが、あとで根岸さんが殘して行かれた校正刷の一部を見ると、そこには私を動かす一つの大きい力があつた。それはあの、しばらくの對談の折に見た根岸さんの誠意と熱情と感激とであつた。その面に、その言葉に、虛僞なき熱誠の貴さを私は見たのであつた。

傳記文學のために何よりも大切なものは、第一に史料の蒐集である事は言を俟たない。新島先生と同鄕の士である根岸さんは、この點に於て多くの便宜を有せるがために、根本史料の蒐集には遺憾なき努力を致されたやうだ。集められた資料に精緻嚴密の考察を加へて、あらゆる data を精査せられ

たのである。昔から宗教の祖師豫言者などの傳記は、遠く時代を隔つるに從つて史料の散逸すると共に、後人の感激尊信はまたやがて偶像崇拜の心と相結んで、はては多くの誤傳を加へ halo を増して、遂に傳記の眞を逸するのが常である。新島先生の場合の如き、今の時に於て資料を精査蒐集するに非ずんば、後代に至つてまた同じ遺憾を繰返すであらう。根岸さんが今日に於てこの資料湮滅を防がれた功績は、永く沒すべからざるものである。

第二には、その人物に對して傳記の著者が捧ぐる熱情と感激とあるに非ずんば、單なる史料蒐集は遂に生命の力なき腐儒の閑事業として了るか、或はまたかの文筆の士を傭うて草せしめた藩侯富豪等の傳記類と同じく、舞文曲筆に成れる內容空乏の惡書と成り了るであらう。根岸さんの新島先生に對する感激と情熱とは、私が初對面の第一印象に於て先づ強く私を動かしたものであつたから、此點に就いては再び繰返すまでもあるまい。

以上の史料と感激との二つの要件を滿たすがゆゑに、ロックハアトの『スコット傳』や、トリヹリアンの『マコオレイ傳』は、ボズヱルの『ジョンソン傳』と共に、不朽の名著として後人の敬重に値するのだ。根岸さんが心血をそそがれた此一卷の新島先生傳も亦、恐らくは傳記としての此二大要件を具備する事によつて、不朽の意義を有するものであらう。

日本の新しき文化の建設のため、一つの大きな礎石であつた豫言者新島先生の傳記が、根岸さんの

手によつて完成された事を喜びつつ、私は此數行の蕪辭を寄せることにした。（大正十一年十二月）

今泉浦治郎譯註『サイラス・マアナ』序

わが王朝宮廷の才女が小説『源氏物語』を書いた時代よりも、はるかおくれて八百年の後、英吉利では女が小説を書く事をまだ世間一般が十分に認めなかつた時代、即ち前世紀の中頃であつた、エヴンズ孃はわざ〳〵『ジョオヂ・エリオット』と云ふ男の雅號（ペン・ネイム）を使つて、男性の作かと見まがふべき理知と情熱とを以て、英文學史上に不朽なるべき數篇の寫實小説を公にして、一代の人心を驚かした。それらは單に英國ばかりでなく、獨逸佛蘭西の文壇にさへも影響を與へた。苟も英語を解する者にして此才女を知らざるなく、又この才女を知る者にしてその傑作の一つである『サイラス・マアナ』を讀んで、田園情景の描寫と心理解剖の精緻とに、驚くべき天才の鬼工を讃嘆しない者は無いのであつた。女流作家として、彼女に先んじたオオステン女史や、また殆ど時代を同じうしたブロンティ姉妹のすぐれた作品よりも、エリオットの此作の方が今も猶より強く、より深く、吾等の心胸に徹するのは、人間性の暗黒面と光明面とを書きわけた詩情と深刻味とヒュウモアとに於て、彼女が斷じて他人の追隨を許さざるべき特色を有したからだ。

自分が友人として深い好意を寄せてゐた或男が、思ひがけなくもこちらの好意を裏切つて、新聞紙

に書を寄せなどして却つてこちらを公衆の面前で罵詈讒謗する。そんな時に、愛してゐた者に裏切られたる痛憤と悲愁とは、私どもが日常の生活に於てしば〳〵體驗する所のものである。話こそちがへ、『サイラス・マアナ』の主人公もまた、はじめ彼が愛し且は信じたる人々の信じ難く賴みがたきを見て、深い絶望の悲しみを味はつた。かくて人間愛の甲斐なきを知つたとき、彼はこれを果敢なき黄金慾でまぎらさうとする守錢奴となつた。而も夜を日についで稼ぎためた其黄金も、また一朝にして盗み去られる。最後に於てこの男は天使（エインゼル）の如き一少女の愛によつて救はれるに至るのだ。多彩なる人間の心理と、變化多き運命との縺れを牧歌（アイディル）の如くに美しいラヹロオ村の田園を背景として描き出した物語が、エリオットの此傑作である。女史の他の多くの大作はしばらく措き、單に此一篇だけを取つても文藝作品として、その結構、その文章、ともに同時代のディッケンズ、サッカレイの如き巨匠に比して毫も遜色なきものである事が知られる。

しかしエリオットの英文は、中學卒業程度では可なり讀むのに骨の折れる難解のものである。さればとて、直ちに原文に就いて精密に味はふのでなければ、異邦の作品は到底その妙味の十一をだに解する事は出來ない。幸にして此書の原文は、さきに研究社から出た英文學叢書第一輯中の一册として、豊田實氏の詳註を附した立派な飜刻本が出來たばかりでなく、英米の廉價な諸種の刊本もまた甚だ多い。わたくしは讀者が、今泉氏のこの片言雙句をもゆるかせにせざる忠實無比の譯本を、必ず原

文と對比する事によつて、外國文學研究の一道程とせられん事を切に希望する。西洋文學に對する眞の理解力を養ふ上に於て、昨今流行のゾラの譯書なぞを讀むよりも、讀者が得られるところは遥かに多かるべきを信じて疑はない。

エリオットは當時に於て珍らしい博識の女であつた。英國のものばかりでなく、獨逸の哲學文學の書に精通し、希臘羅馬の古典、ヒイブルウの古語にさへも通じてゐた。それと同じく、此書の譯者今泉君も亦博洽の學、東西古今に通ぜる當代稀なる篤學の士である。讀者にして若し、かのモオバッサンの英譯や露西亞小說の粗莽蕪雜なる譯書にのみ走るが如き惰氣を一掃し去つて、精嚴なる今泉君の此譯書を師とし、細心精緻の學的良心を以て原文と辭書と首引きするの勞を惜しまれずんば、單に思想と文藝との理解のためのみならず、英語英文の學習に於ても得らるるところ極めて多かるべきを、私はここに斷言し得ると思ふ。(一九一三年三月)

序、跋　終

講演

英文學と民族性

唯今も承りますと、島崎さんが後にお話があるだと思つたら、それは朗讀だから、私に長いことしやべつて居つて呉れろといふことであります。今日は長くお話するだけの用意はして居りませぬ。飴ン棒みたいに伸ばさうと縮めようと、どうでもなりはしますが、さう長談議はしないつもりであります。

或國の特性、或はその一つの民族の性質をば批評する時に、其國の文學を見ないで批評すると云ふことは一番よくないことです。それは必ず間違を生ずる因であると思ふ。何故かと申しますると、文學といふものは其人間が腹のどん底から出した聲である、本當の胸の奥にある心の姿であり聲である。文學といふものをちつとも眼中に置かないで、ただ眼の前にして居る表面的な仕事であるとか、或は商賣軍事だとかいふやうなものだけ見て、どうも英吉利といふ國の人間はかうだ、日本人といふものはあゝだ、といふやうなことを言つて批評すると、時々大變な誤解や間違が出來ると思ふ。で、その間違が、英吉利といふものを批評する時に世界的の誤があるのだと私は思ふ。日本ばかりではない、獨逸でも佛蘭西でも、みんな英吉利の半面だけを見て批評してゐる場合が多い。それは、英吉利

の古今の文學を見ない人の言ふ批評は何時も大抵定つて居るのです。卽ち英人といふものは保守的である。いやに尊大に構へて居る。又のそ〳〵して鈍重な、少しも鋭敏な感性を持つて居ない、感受性の鈍い國民だ。實利一點張りであるといふ。佛蘭西人は英吉利人のことをショップ・キイパアズ――あれはナポレオンが言つた言葉ださうですが――店番の國民だと言つて嘲つて居りました。常識卽ちコンモンセンスといふ言葉は、一番多く英吉利人に重んじられて居る。又藝術的氣分の最も薄い國民であるかの如くに言はれて居るのです。殊に佛蘭西人なんかに言はせると、英吉利人はいやに澄まして、なあに內幕を見れば何處の人間も人間だから同じであるのに、表面はいやにゼントルマンとか何とか言つて品を作つて居る。特にリスペクタビリティといふことを非常な誇として居る。あれを見まして佛蘭西などは僞善の國民、ブリティッシュ・キャントだといつて惡く言ひます。日本でも此批評は屢吾々の聞くところである。今日多數の人が英吉利を觀るときに、あれはゼントルマンの國であるか、僞善者の國であるとか、常識の國であるとかいふやうな風に言つて居ります。これが詰り私に言はせれば世界的大誤解であると思ふのです。これは英吉利の文學――少くともイリザベス朝以後三百年の文學だけを見ても忽ち分ることであります。

私が英吉利の文學だの語學だので二十年近く御飯を喰べて居りますからとて、さう言つて辯護するのではありませぬが、英吉利の文學は他の文學に比べて詰らないといふことは、事實上決してないと

思ひます。歐羅巴での批評はかうなつて居ります。演劇系統の藝術は先づ獨逸が宜い。とすれば小說は何と言つても佛蘭西……露西亞などは全く佛蘭西の影響で出來たのですから。それにまづ露西亞が本當に文學を持つてからは百年位にしかならない……だから先づ佛蘭西が最も小說では優れてゐるとなつてゐる。そこで詩にかけては——詩歌に於ては英吉利である、とかう云ふのが先づ歐羅巴での定評になつて居るやうです。先ほど菊池君はここに立つて英吉利の詩をひどくこきおろして居られたやうですが、さう言つたものでもあるまいと思ひます。それは別として、先づ世界の定評は詩の方面では英吉利が最も優れて居ると言はれて居る。併しさういふ論はどうでも宜しうございますが、兎に角英吉利人は立派な文學を有つて居ると云ふことだけは、これはどうぞ共儘に承認して置いて頂きたい。さうでないと私の今晩の御話は根柢からいかものになりませぬから……。英吉利人が若し常識一點張りの利害打算と、變な君子道德といふやうなものだけで立つて居るものであれば、あの壯麗なる文學が出る譯はない。『夢』を持たない、空想もない、また情熱もない、感激のない國民にあのやうな立派な文學が生れる譯はないのであります。少くとも新しいところだけを考へましても、三百年に亘る立派な文學を有つて居るあの國民には、必ず常識だの實利なぞでない、もつと貴い力を持ち、立派な性質を持つて居るといふことは、容易く考へられる事である。さういふ時に吾々は一種の矛盾を見ます。卽ち今日そこいらに、殊に東洋諸國なぞへ出て居る英吉利の商賣人などを見まして、それだけで

英吉利を判斷するとか、或はまた一寸英吉利を旅行して見たり、色々な人に逢つて見るとかいふ位のことで民族性を批判しようとするから誤るのです。例へば獨逸、露西亞、佛蘭西などは勿論ですが、あすこらの人に比べると英人は、一寸外面から見るとひどく實際的なやうに見えます。詩人だの學者藝術家などでさへ、これを佛露の人たちに比すると何だか商賣人みたやうな……といふ風に感ずる。これは當然なんです。唯上つ面だけを見ると、ゼントルマン式だから、どうしてもさういふやうに見える。併し腹の中には十分なる情熱や空想や感激を有つて居るといふ事を、その人たちの書いた文學によつて吾々は見出した時に、そこにどうしても說明を要する矛盾を見出すのです。又更に他の方面から考へまして、若し英吉利が世人の言ふ如く保守的傾向一點張りであつて、單に常識とか實利とか云ふやうなことのみで働いてゐる民族でありまするならば、今頃は早く既に老衰して居る筈である。老大國と言つて今尙歐羅巴に最大の勢力を有つて居る國であり得ない筈である、疾くに脈が上つて居なければならない。ところが、かの歐洲大戰の前に、日本には隨分獨逸思想を喜ぶ人が居りまして、英吉利既に老いたりなぞと言つてゐた人がありましたが、戰爭が終つて見ますと矢張り一番羽振のいいのは英吉利なんです。亞米利加といふ新しく出來ました——そして英國の兄弟分である米國は姑く別問題と致しまして、英吉利はちつとも老いて居らないやうであります。ロイド・ジョオヂといふ政治家一人だけでも、唯今ゼネヴの會議にも矢張り活躍して、露西亞のチチェリンなどはひどくやつ

附けられて居るやうであります。英吉利と云ふ國は老衰してゐるどころか、今度の戰爭でまた若返り法をやつたやうで、矢張り何處か偉い所を持つてゐる。これは文學を離れて見てもさう云ふことが考へられるのであります。近頃は佛蘭西は、亞米利加の――あの殆ど何等の慣例や傳說を顧みない亞米利加のやり方などに對し、何となく老人振つたやうな感じがしますが、英吉利はちつともそんな風は見えない。今の歐羅巴で、獨逸でも露西亞でも伊太利でも甚だ景氣が惡くなつてゐる時に、英吉利は尙あれである。あの鈍重なのそ〳〵して居る國民に、何處か底力が這入つて居るといふことを吾々は考へて見る必要があるだらう。そこでです、私が申したいのは。英吉利の民族性を目してあれは常識的であるとか、或ひは實利的である保守的であるといふのは、それは單に一面觀に過ぎない。勿論さういふ所も確かにある。が、他の半面に於て全くこれと反對なひどい激烈なる性質を有つて居つて、動いて居ると云ふことをも確かに認め得るのである。そこに眼を著けなければならぬ。

で、此誤解が日本に這入りましたのには抑も原因があるのです。それは英吉利で申しますとギクトオリア朝の中期、卽ちミッド・ギクトオリアンといふ時代、卽ち明治十四五年位までの英國の思想學問を日本は學んだのでした。それから後は獨逸思想によつて日本の學界、思想界は感化を受けたが、英吉利の思想が一番能く日本に這入つた時代はギクトオリア朝の中頃でした。卽ちあの時代の安價な平和、樂天主義、さうした先程申しまするゼントルマン道德であるとか、或はリスペクタビリティとか

いふものが英吉利で最も重んぜられ、かの詩人テニソンなどによつて代表せられて居る思想が一時盛んに日本に傳へられました。卽ち英國では哲學のスペンサア、小說のサッカレイ、批評ではマコオレイといふあたりの思想で、さういふ英國の一時代から主として日本は學んだので、英國とはギクトオリア中期のやうな國だと思ひ込んだらしいのです。また或少數者は劍橋とか牛津とかいふ、あの舊式な固い中世以來の傳說を動かさない大學へ這入つて敎育を受けた、英吉利人の物の考へ方を覺えてそれを故國の日本に傳へた。それですつかり英吉利は誤解されて仕舞つた。詰り紳士道德萬能のギクトオリア朝中頃だけの英吉利を見たのです。そのもう少し前か少し後の時代を見れば、あんな誤解は起らない筈である。今日の英吉利人が踏みにじり打ち壞して居りますあのギクトオリア朝の中期です。日本で言へば明治十四五年です。英吉利の方で申せばもう『代(だい)』は三代も變つて居る。卽ちクキイン・ギクトオリアが亡くなられて、その後がエドワアド七世、それから今のジョオヂ五世陛下と三代も變つて居る。その三代前にあつた或時期だけを目して、これが英吉利だとから思つた。これが大變な誤解の攅まつた一原因なのでありますが、此ギクトオリア朝の、澄まし込んだ、いやにゼントルマン風な態度を執つたあの英吉利を、十九世紀の末年に於て英人はすつかり根柢から潰して仕舞つた。あのロイド・ジョオヂのやうな人が宰相になると云ふことが、既に英吉利のトラディションを壞して居る證據であります。政治上に於ては、あのロイド・ジョオヂの前にアスクィスが率ゐて居つた自由黨內

閣に、その以前長い間ユニオニストの手にあつた政權が移つて了つたといふことが、猛烈に貴族を壓迫し極度にデモクラシイの氣分を造り出して仕舞つた。勞働黨の首領キア・ハアディが國王に謁見するに燕尾服を着ないで背廣を着て行つたと云ふ話がある。こんな一つの逸話でも極めてよく英吉利の變化を證明して居る。國務大臣が國王の前に行くに背廣を着て行つた。政治上に於てもさういふ著しい變動がありました。これは御承知の通り十九世紀の末年文學の時代です。"The naughty nineties" とNの音を用ゐて洒落れて云ふ位で、いたづら好きの惡いことをした世紀末、一八九〇年代を云ふのです。これがヴィクトオリア朝の時代思想が激變して、新しく若返つた最近の一大變轉期でありました。

あの時代ですが、イブセンの感化が英吉利に入りますと、その結果は英吉利の芝居などにも新しい近代劇が出來て來ました。又佛蘭西などからもゾルレエヌの感化が這入つて來た。所謂デカダンスの文學が這入つて來たのもあの時代で、ヴィクトオリア朝の空氣を一新する時代が產んだ一畸形兒とも云ふべきものは、かの日本に一時持囃されたオスカァ・ワイルドです。オスカァ・ワイルドは日本に於ては持てるけれども、英吉利などの舊弊な固い人などは今でもワイルドと云ふ名を聞くと横を向く位嫌がられる。それで十九世紀末年はひつくりかへされて、さうして今日の英吉利が出來た。英吉利の詩歌と云へば隨分固い傳統を有つて居つて動かなかつたものですが、これも今日の英吉利の詩といふも

のは、以前のテニソン時代の形も内容もすつかり壞して一新して仕舞つた。この魁をしたものは、今日ではもう古くなつたが、キプリングとヘンレイとの二人で、それ以後は形式破壞の自由な新詩が盛んに行はれるやうになりました。自由詩（フリイヴアス）さへも英の詩壇に這入りました。英吉利で最もやかましくいふ詩の方だつて形が崩れて、今日はヰクトオリア朝とは似ても似つかぬものとなりました。さうして又歐羅巴で何と言つてもあれ位大膽に無鐵砲なことを喋り散らかしたドラマを書いた男、即ちバアナド・ショオのやうな者が飛び出す。もつと固くなつた所でもゴルスワアジイも居りますが、どつちにしてもこんな作家が飛び出すといふ事は、ヰクトオリア朝時代には考へられないことでした。常識一片の、君子道徳のゼントルマン式の國民には出來ないことであります。その他、今日若年の新しい小説家と云はれる人でも、即ちただいま日の出の新作家と言はれる、ロオレンス、キャナン、或ひはマッケンジイ、ヲルポオル、これらの人達の小説を見ますと、以前の Victorian prudery の時代には迚も出さうもないやうな、えらい事を書いて居ります。詰り脱線的です。私の大變嫌ひな厭な言葉ですけれども、俗な言葉で言へば、脱線的なものになつて仕舞つた。さういふ風に新しい最近五十年位の所を見ましただけでも、英吉利といふものはこれだけ變化して居ります。

そこでです、露西亞のやうに文學といふものを持つて以來、まだ漸く一世紀位なのなら宜しうございますが、英國のやうに長い歴史を有つて居ります國の場合にです、五十年や、甚だしきはヰクトオ

リア中期の一部分だけ位を捉へてその民族性を批判しようといふことは大變無理な事です。先程も申します通り、一國を批評するには先づ文學を見る事が必要である。丁度今日の亞米利加人などが日本を批評する時のやうに、日本の現代作家はどんな人が居るかといふ名前さへも知らず、德川三百年の產出した立派な文學はどんなものであつたかをも見ないで、唯明治の日本は朝鮮をどうした、又滿洲をどうしたとか、山東省をどうしたといふやうなことで、日本を判斷されては全く堪るものでない。それは吾々の生活の、ほんの外側でやつて居ることで、日本人の內生活はそんなことだけで批判は出來ない。吾々は腹の中の奧の方に持つて居るものがある。ちやうどそれと同じやうに民族の藝術や歷史や文學を通覽しないで、戰爭したとか商賣したとかいふやうなことだけでその國を判斷しては大なる誤解を生じます。餘所の國の者がそんな態度を以て日本を評すると、吾々は憤慨するではありませぬか。けれども英國に對して日本人の多くは矢張りさういふ表面的な批評をして、誤解をして居るのです。なにも私は長い話をして以前からの時代を一々擧げようとは思ひませぬが、シェイクスピアの出ましたイリザベスの時代、あの時代程いたづら兒が……青年の不羈奔放な氣分の最も盛んに、露骨に、無節制に現はれた時代は、餘所の國にも餘り澤山はないのであります。あの時代に如何に抒情詩的氣分が英吉利に盛んであつたかと云ふことを見ます時、あの國を常識的だ、道學先生風だなんといふことは決して言はれない。もとよりあの時代にも、ゼントルマン風の元祖とも云ふべきサア・

フィリップ・シドニイのやうな人があつた。それもまた英吉利人の半面であります。けれどもあの時代全體を捉へて見れば、保守的の氣質、鈍重なる國民なりとは決して言はれない。さればこそロオリイやシェイクスピアが生れ、イリザベス朝の抒情詩戯曲なども出來たのです。

もう少し時代を隔てて考へても、クロムヱルのやうな途方もない男はどこの國が産んだかを考へて御覽なさい。保守的な國では出さうもない、思ひ切つたことをやつたクロムヱル、さうして又その時代に活躍したあのミルトンと云ふやうな詩人を産んだ國を、どうして常識的、實利的といふことが言へようか。斷じてさうは言へないだらうと思ひます。ミルトンの話をここにするのではないが、ミルトンが盲になつて立派な詩を書きました一方に於て、言論の自由のために『アリオパヂティカ』のやうな堂々たる立派な散文を書いて殘したあのクロムヱル時代、あれが常識一點張りのリスペクタビリティの民族とは決して考へられない。又十九世紀の初、これはよく皆さんの御承知のバイロン、シェリイのやうな男、あれが常識的な平穩な國から出ようとはどうも考へられない。キイツもさうです。その前の十八世紀にはヰリアム・ブレイクなんといふやうな、極端な神祕思想の詩人が最も早く英國に出たのです。今からつい二三十年程前まではブレイクの價値を認めなかつたのでありますが、あんな世紀末風の神祕象徴風の傾向を有つた詩人が、英吉利にはずつと早く出て居る。隨分前の時代に溯つて歴代の文學を見ますと、英國の民族性は常識的或ひは實利的、非藝術的だとか、或ひは神祕的氣

分がないといふやうなことは言はれない、すつかり反對の狀態をいくらでも見出すことが出來る。これを極端に申しますと、佛蘭西革命などでも、あれの一番魁になつた思想は英吉利の哲學が源であります。ルソオの更に、も一つ根源になつた思想は英國のものではありませぬか。世界の新思想或ひは新運動とか言ふやうなものの急先鋒になつて動きました場合は、英吉利の國民に比較的多いのです。自由解放などといふやうな思想は世界で英吉利が元祖です。で、あのギクトオリア朝は大體から言へば勿論テニソンのやうな溫雅な中庸を得た時代ですけれども、その時代ですら、一方には丁度テニソンと何時でも對比せられるブラウニングの如き、極めて壯烈な大膽な人生觀を有つた詩人が居ります。極端な異教思想、共和主義、肉感美を歌つて攻擊を受けたスヰンバアンも居ります。かういふやうに一面に於てはひどく思ひ切つたことをやる極端な傾向を有つて居るに拘はらず、他の一面に於てはひどく澄し込み、落着き拂ふ國民といふやうなところが見えるのです。最も多く自制を加へ得るものにして、はじめて最も大なる自由を享有し得るのです。英人の自由奔放な態度と、その固くるしい一面とは少しも矛盾なく、當然兩者は相伴ふべきものなのです。

これはどうして出來たかと云ふことを說明しまする時は、私はこの特異な民族性は英吉利人の人種の混合と、歷史との然らしめるところであると言ひたいのです。卽ち英吉利人は色々な人種の寄合ひ世帶である。テニソンがアレキサンドラを迎へました時——ちやうど今日のプリンス・オヴ・エイルズ

を迎へる時に能く當て嵌まりまする詩でありますが、アレキサンドラを歡迎する時の詩――其詩の初に "Saxon and Norman and Dane are we" と言つて居る。私はもう一つ之にケルトを加へると言ひたい。御承知のイェイツや何かを產み出しましたアイアランド人が屬するケルン人種、あの美しい英吉利の言葉を作り、立派な文學を作つて居りますケルト人種、……ケルトと言つてもその中に種類は色々ありますけれども……。之にもつて行つて北方の殺伐なサクソン人、これが獨逸の北の方から這入つて來た。あの夢想的な、さうして詩人肌の、感情に强く、激し易いケルト人、それに北方の陰氣な、深く考へ込むやうな、哲學的な、さうして何でも現實的に實際的に物を見る民族とが混つて居る。かういふ人種の混合の複雜が第一の原因である。さういふ色々なものをごちや／＼混ぜて物をすつかりうまく纏め上げた所に英吉利の特色がある。その性質がまた亞米利加へ行つてあゝいふ melting pot のやうな國のもとが出來たのですが、この人種混合と云ふことの外に、英吉利人の歷史の上に於て最も都合の好い、卽ち日耳曼系統――獨逸系統――の文明と、それから南方のラテン系統の文明とが兩方都合好く歷史上の關係で結びついてゐる。卽ち情熱や空想に富んで藝術的氣分の豐かなラテンの方の氣分と、昔海上に覇を稱した北歐民族の氣風とが、都合よく英吉利と云ふものに於て二つ相合して居る。これはその國語である英語と云ふものを見たらば直ぐ分ります。卽ちチョォサァ以來の英語と云ふものが立派に此事實を證明してゐる。北方サクソンの言葉と、ラテン系の言葉とが、英

語ぐらゐ都合好く混合し融和して居る國語は、他の歐洲語……佛蘭西語にも獨逸語にもない。卽ち元來が英吉利人といふものは非藝術的な、非詩人的なものなんです。ところが、後からそれに加はりまして佛蘭西の方から這入つて來たラテンの文明、これを英吉利に持込んで、あのチョオサァなどが出まして後、いづれの時代に於ても藝術的な、空想的な或ひは情熱的な滋養分をラテン系民族の方から入れて居る。それが具合好く兩方混つた爲に非常に都合の好い民族が出來上つた。だから英吉利で文學が榮えた時代と云ふものは、必ず佛蘭西や伊太利の影響を強く著しく受けて居ります。チョオサァ時代もさう、イリザベス時代――ルネッサンスの後を承けたイリザベス時代もさう、十九世紀の初のロマンティシズムの時代もさう。最近卽ち前世紀末からでも、佛蘭西の影響がどれ位强かつたかといふ事は言ふまでもない。今日でもさうです。いつも絶えずラテン系の國から藝術的、情熱的氣分といふものを滋養分として取り込む、さうして北方の頑固な、鈍重な氣分をうまく緩和して行つた。そこに英吉利人の特色があり、又餘所の國の眞似の出來ない、一つの際立つた個性といふやうなものを有つやうになつたのであります。一體シェイクスピアなんと云ふ詩人、あれは實際英吉利に於てはじめて出さうな天才です。一體シェイクスピア物を讀んで見ても、米の飯のやうなもので、ウンと顫ひつくやうな、また唐辛しのやうな文學ではないと言はれてゐます。併しそれはシェクスピアがユニヴァサルであるから、さうなるのです。あの中には純粹な北方氣分の瞑想的なハムレットのやうなもの

と、一方には快活な共時代を如何にもよく代表して居るフォオルスタアフといふやうな氣分のものとがある。南歐氣分と北歐氣分が混つてあゝいふものが出來た。それがユニヴアサルなものになる。此點に於て如何にもシェイクスピアといふ人は英吉利には出さうなものです。

さういふやうな一々の例證は一切抜きに致しまして、一體私は平生、英吉利人といふものを批評しまする時に、獨逸や佛蘭西の人の言つた事或ひは書いたものなどに、特に注意を拂ひます。何故かといふと、何處の國にもある事ですが、英吉利人は特に國自慢が強い、皆自分のことを偉いやうに思つて居る。故に英吉利人の手に成つたものばかりでは眉唾物だと思つて、外國人たる佛蘭西や獨逸の人が英吉利を評して書いた物を氣を附けて見ます。私は大變近頃感服したのは、佛蘭西の巴里のソルボン大學の英文學の先生にカザミアンといふ人がある、此人が十年程前に『近代の英國』といふ本を書いて居る。それから一昨年……これは一番新しい本ですが……『英文學の心理的進化』と題してイリザベス朝以後三百年を逐うて詩文の發展を心理的に論じてゐる。この本を二つ見まして私は大變感心したのです。それは英吉利人と云ふものは非常な強い適應性を有つて居る。適應性といふことは環境に順應する力といふこと、即ち流動無碍の生命力を以て、自分の生活に最も利するところの方向を執つて絶えず動いて居る、即ち周圍に適應して努力を營んで行くところの驚くべき性質を有つて居る。その適應性は一つは本能的の方面に現はれる。即ちそれは生命そのものが動いて行くのです、理窟や

實理や何かで行くのではない。もう一つは瞑想的……と譯したら宜しいでせうが、これは主として道理を考へて動くのです。卽ちこの二つの適應性を兩方から都合よく働かせて、時代によつてこの二つがリズムを爲し高低を爲して行く、かういふ風にカザミアンは說いて居まりすが、實際英吉利人といふものは此アダプテイシヨンの力に於ては非常なものがある。それはちつともこだはらない、……これが主義だなどと言つて、そんなものを一つ持つて固くなつて行くのは、劍を持つて群衆の中を動き廻はるやうで危くて仕方がない。人が傷つかなくても自分が傷ついて滅びます。英國人はさういふものを持つて固くならない、凝滯しない。大きい自由な生命の流に自分といふものを委ねて、周圍に向つてアダプトして行く力がある、さうして何物をでも消化する。唯時代によつて理性の勝つことと、さうでない時代とが現はれて來る。詰り腹が馬鹿に丈夫な人間のやうなもので、汁粉を食つてるかと思ふと酒を飲む、まるで反對のものを入れてけろりとしてゐる。この驚くべき矛盾を持つて居ります。この驚くべき矛盾の半面だけを見て、英吉利人を判斷してはならないのです。此矛盾といふものを私は非常に面白いと思ひます。個人に就いて見ても、小つぽけな人間の場合を見ますと、それはどうしても簡單に判斷し易いものに出來上つて居ます。が、大きな奴になるといふと、中に持つて居りますす矛盾も亦どうしても大きい。一體矛盾のないやうな人間は、個人としても駄目なものです。ちやんと纏まつて居るといふのは、いづれ小つぽけな奴に定つて居ります。……幾つも持つて居りますと

ところの其矛盾を立派に統一して行く力、これが其人の生命の力であつて、立派な個性といふものがそこに出來る。ですから、最も强い個性といふものは最も大きい矛盾の中に藏して居る場合が甚だ多いと思ふ。何でも持つて行くと大抵のものは消化してペロリと食べる。今、世界の疑問となつて居るボルシェギズムを、英吉利は今後果してどう消化するか。あんな消化の悪いものを英國はどうするかといふことが今、世界の皆が注目して居るところです。併し英吉利の事だから今に何とか消化するだらうと思ふ。現に佛蘭西革命の如きも最も手際よく英吉利は消化したのである。あのもとは英吉利から出た、ルソオのもとは英吉利にある。佛蘭西革命の思想上の源流はつまり十八世紀の英吉利です。兎に角矛盾を統一する驚くべき底力を有つて居る。その英吉利人の個性を一寸見ますと如何にものそのそして居りますけれども、これは、慥か華嚴經にある言葉ださうですが獅子の歩み、その獅子の歩みである。ライオンはのそ〳〵歩いて居るけれども、强くたしかな足ぶみで、あれが歩いた跡は草一本生えない位、詰り英吉利人といふものはさういふ氣分があるのです。民族の內生活にある非常な底力を以て動いて居る、精力が中側から二六時中、外へ爆發して進んでゐるのです。此英吉利の外にさういふ國がありますか。外側から新しくなつて來て、中は天保錢、丁髷である、上つ面だけで中味はどうかすると三百年前の所に止つて、底力がない國がありますでせう。英吉利のはさうでない。總べての風俗習慣を見ましてもさうです、建物を見ましてもです。古臭いものを大事にかけてやつて居り

ますけれども、中味がスツカリ成熟して來た時には、卽ち要求が內から迫るときに平氣でぶち壞して仕舞ふ。時々は隨分と思ひ切つたこともやりますが、その思ひ切つたことをやる時に決して踏み外さないところが英吉利の他の半面の働くところである。ブレイキをかけてぴたつと止まる。此間英吉利ではひどく勞働運動のために交通機關がすつかり止るやうな狀態になつて、世界の人ははらはらして見て居りました。どうするだらうかと思つて居ると、最後の刹那にぴたつと止つた。卽ちすべきだけの事をしたらば止まる所を知つて居る、あすこが英吉利の偉い所、永久に老いない所です。詰り大飛躍をします、併し大飛躍をしましても、そのために川の中へはまつて死んで仕舞ふやうな失策はしない。節度、オオダァ――秩序といふ事を如何なる場合に於ても忘れない。詰り片方に持つて居る性質がブレイキをかけて、さうさせる。さうして內面には常に情熱の力で動いて居る國です。古臭いやうな而も新しい國である。古いが併し後れぬといふ力を有つて居る。之を要するに、英吉利といふ國は文學に現はれて居りますやうなあゝいふ情熱的の力、感激性もある、又一種の夢幻空想といふ、常識やなんかとすつかり反對の性質を有つて居るから、さういふことをさせる。詰り兩方具合好く調和されて居る。これが原因はどう考へても、人種の關係と、さうして歷史的には北歐文明と南歐文明がうまく調和されて居るといふところに、私は歸したいと思ふ。

で、此誤解は先ほども申します通り日本に於てのみならず、獨逸、佛蘭西でも皆言ふことなんで

す。が、これは皆さんと共に更に考へて見る必要があると思ひます。詰り大飯食ひみたいもので、辛黨かと思へば汁粉を食ふ。汁粉を食つた時代だけを見て、彼奴は甘黨だなと判斷するのはいけない。かういふ私の考を御參考下すつて、さうして英吉利といふ國の文學ばかりでなく、政治上やつて居る事も御覽になつて見れば、確かにさういふ點が見えると思ひます。隨分桁外れをやる、脫線を平氣でやる國民、脫線して居つても何處か踏み外さないやうにやつて居る。だから、滅茶々々に壞れて仕舞つて自ら滅びるといふやうな事をやらない。これは若し學べるものならばですな、確かに學ぶべき點ではないかと思ふ。併しかういふ事は、その國民の有つて居る個性である。丁度これは個人の場合と同じことで、他人の個性を學ぶといふそんな馬鹿なことは出來るものでありませぬが、英吉利の偉い原因は確かにこゝに在ると私は思ひますのです。今晩の御話は唯これだけにして置きます。（大正十一年四月十三日、『新小說』主催講演會に於ける講演筆記）

講演　終

(兩角製本)

昭和四年四月一日印刷
昭和四年四月三日發行



廚川白村全集 第五卷

著者 廚川白村

發行者 山本三生
東京市芝區愛宕下町四丁目六番地

印刷者 杉山愛二
東京市牛込區市谷加賀町一ノ一二

發兌
東京市芝區愛宕下町四丁目六番地
改造社
振替東京八四〇二番
電話芝(45) 一一二一番 一一二二番 一一二三番 一一二四番

株式會社秀英舍印刷